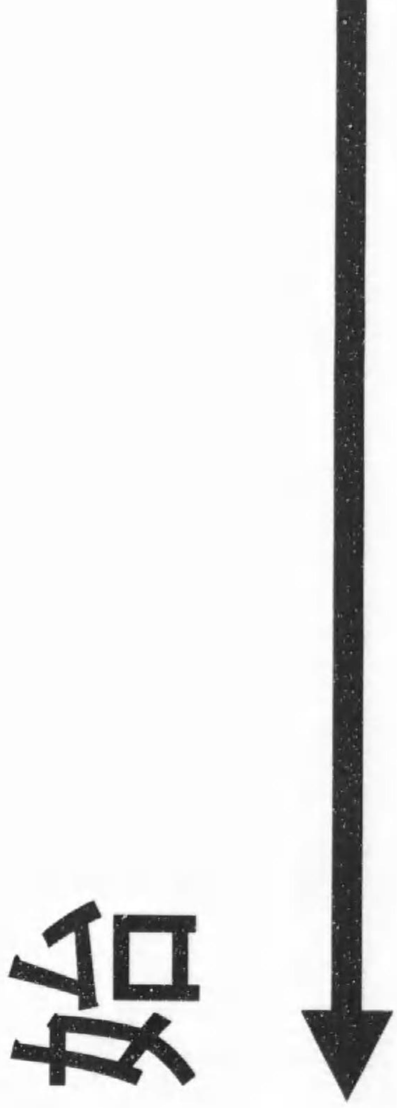
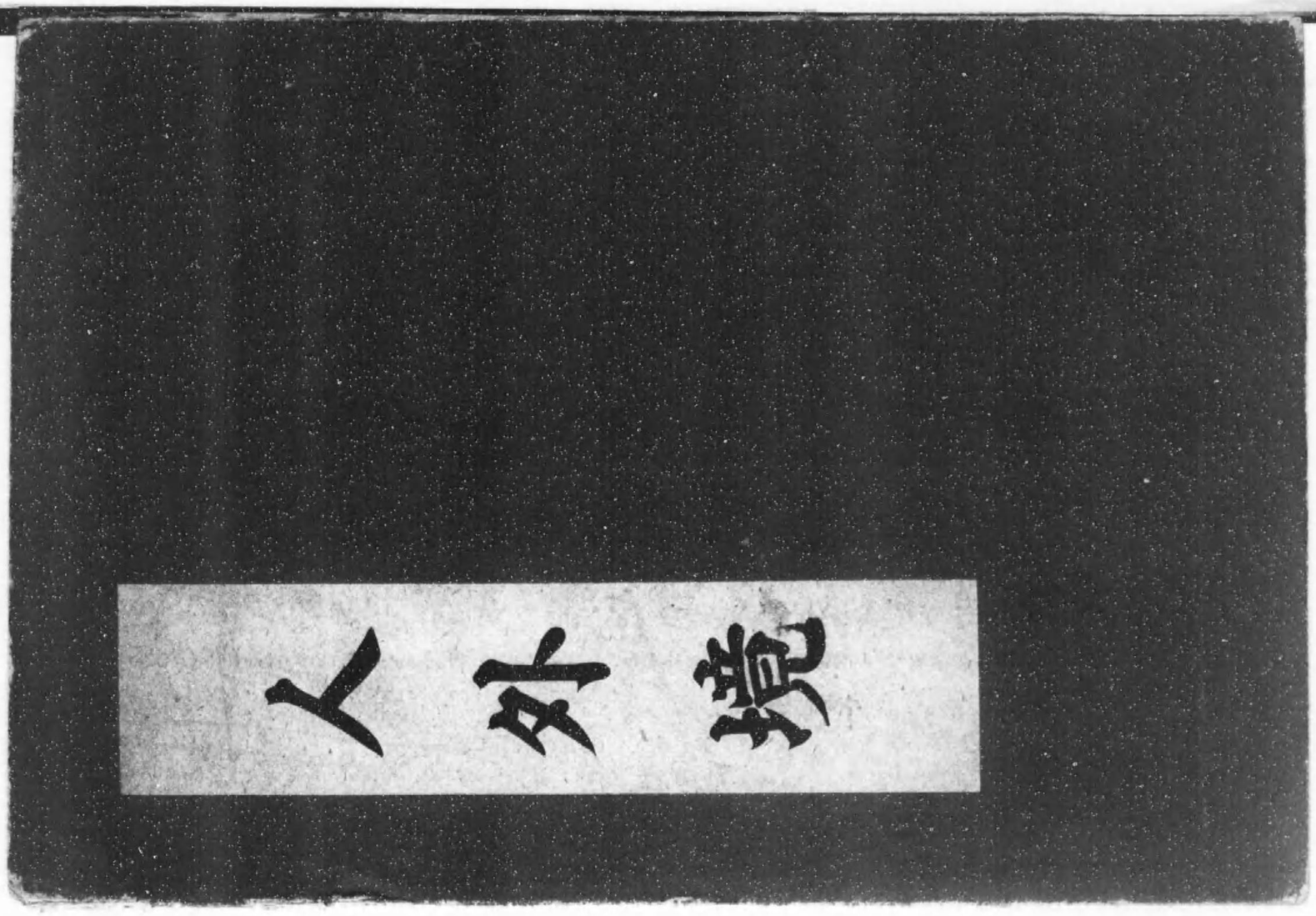




人外境

始

特214
509

人外境

黑岩涙香譯

人外境

黒岩涙香譯

一

佛國の都巴里府にて、マリシエーブと云へる町は、多く豐に暮す人々の住む所なるが、其中にも四圍に樹木の茂りたる最奥ゆかしき一構へは誰の住居なるや知らねど室内の飾附にて察すれば、好みも最と高尚なる美人の居ぞとは知らる。

弦は其の居間なるべし、廣からず狹からぬ一室は三方に窓を開きて充分の光線を取り、坐ながら庭の景色など眺むるに好く、片隅に設けたる机は化粧臺とも見ゆる作りにして、一方には鏡も有り置時計も有り孰れも贅澤の拵へに非ざるは莫し。

去れど少しも合點の行かざるは、書棚より抽き出して中央なる稍廣き卓子の上に取散せし五六の書冊、定めし評判好き新版の小説か左無くば、音樂又は其の他の美術に關はる出版なる可しと思はるゝに、爾は無くて全くは世の美人達の振も見向かぬ種類なり。

今しも讀掛て立去りし如く、披きし儘に遺して有るは、當時全世界を驚動せしめたる大旅行家大探險者、彼の英國の李敏敦翁が道も知れざる亞弗利加洲の眞中より地學協會へ寄せたる報告書類を集めて印刷せし者にして、次に並ぶは右の李敏敦翁を救ひ歸らん爲め特派せられたる米國紐育ヘラルド新聞社員土丹靈の通信を初め、同じ目的にて英國より前後二回まで派出せし人々の報告書を集めたる者等にして尙ほ此外、棚に滿る一切の書籍、總て地圖又は旅行記の類ならぬは莫く、中にも世界中最暗黑の圖として知られたる亞弗利加の內部に關する書類最も多し。

素より當時李敏敦と云ひ土丹靈と云ひ其大膽なる旅行は天下各國に鳴響き、其安否、其消息は何の關係も無き東洋の國々へまで直ちにルートル會社の電報を以て報ぜられたる程の次第なりしかば、縱しや女子にもせよ美人にもせよ求めて其書を讀むは、怪しむに足らずとは云へ、斯まで

探險と旅行との書を集むるは尋常に豈も非じ、或は是れ地學協會の機密室にても有らんか、夫にしては室內の飾り方の美しさよ。

時刻は早や宵の七時半なり、彼の卓子の上に置かれたる燭臺のみ人待顏に讀み掛の書冊を照せど、來りて之を讀まんとする此室の主人は見えず、主人か女主人か、問へど答へは鳴る時計のみ、頓て八時を報じ終ると共に靜かに此室に歩み入る一人、我が室とて居心も好きと見え、徐々と歩み寄りて燭臺の前には坐せり。

其人柄を如何にと見れば何さま一廉の貴夫人なり。年は二十五歲より上なる能はじ、去ればとて廿三歲より下には非ず、丈は中背より心持高き方なれど身體の優かなるは舞臺の上にも多くは見ず、正しく美人として最上の發達を遂げし者なり、顏は愛嬌にも威儀にも富み、親しむ可し狎る可からずとの趣あり、星の如く靑き眼に一種侵し難き決心の光を湛へ、細く締りたる唇は小兒をも懷かしむる愛らしき言葉をも發し、又三軍を叱咤する號令の聲をも發し得るに似たり。

誠に善心と決心とを兼ね、又嬉しさと悲しさとを籠たる如き容貌なり、誰とても唯だ一目、此

夫人の顔を見れば深く浮世の甘味と苦味とを嘗めし身の上たるを知る可く、去ればとて時に打解けて婀娜なく笑み語らふ樣を見ば、猶ほ胸に幾多の青春を蓄へて是より世に出る清淨無垢の少女かと思はるゝ所も有り、察するに多分は一旦婚禮して直に其所天に死分れたる岩き未亡人にても有らんか、最と哀む可く又最と愛す可き有樣は兼備はりて一切の樣子に見ゆ。

此の夫人は直ちに讀掛けし彼の書を取り再び讀初めんとするに、此時入來る、侍女と覺しき女無言の儘にて一枚の新聞紙を其書の傍に置て去れり、是なん今しも配達し來りたる英國の倫敦タイムスなり。

夫人は戀人の手紙でも得し如く熱心に取上げて帶封を解き、展開きて讀む間も無く痛く氣を引く文字でも有しものか、急に又一段の熱心を添へ、知らず〳〵燭臺の下に其新聞紙を差附けたり。

二

燭臺に差附けて此夫人が讀まんとするは、抑も何事の記事なるや、是なん米國新聞の特派員、

士丹靈が彼の大探險家李敏敦翁を亞弗利加の內地に尋ね當て始めて其事を本社に通信したる其顚末の拔書なり。

實に全世界が死せしとのみ思ひて泣悲しみし其人を健康の儘に見出したる報知なれば、夫人が息をも繼ぎ得ぬまで熱心に讀下すも無理ならず、タイムス新聞の其文左の如し。

全世界に大名の赫々として輝ける我英國の大旅行家李敏敦翁が亞弗利加の內地にて其土民に殺されたりとは先に同國幾日波と云ふ所より達したる報道にして我が政府は直に亞弗利加駐在の相當官吏に訓令し其事の實否と、愈々實なれば其殺されたる土地とを確めつゝ有りしに米國の新聞紐育ヘラルド社は我政府の所爲を緩漫なりとし社員顚理、士丹靈氏を特派し親しく蠻地に入込ましめしは既に世人の知る所さし、而して此士丹靈氏は李敏敦翁の殺されし地即ち殘日波より丹鷲湖と云ふ大湖水に到る路上なる事を聞定め爾來幾日幾月も檣風沐雨の勞を嘗め進みて前人の嘗て到らざる宇地々々と云へる地方まで入込しに、其地にて丹鷲湖の湖畔に年六十餘歲なる白色人一人住居る事を聞出し是れ定めし李敏敦翁なる可しと思ひ俄に熱心を百倍し、

疲勞を犯し從者を勵まし、道無き所を踏分て其所まで到りしに果して李翁の生存せるを見得出したり。

尤も士氏と李翁の對面せし事實は既に米國よりの電報にて記せしが、昨夜到着せし同地の新聞には士丹靈氏の通信原文を掲げたり。其文に曰く

「余が翁を尋ね當し時、雙方如何に驚きて如何なる言葉を發したるや、實に驚きの餘り知らず〳〵發したる者なれば余は少しも覺え居ず、如何にして玆に來りし、何事を爲し居たる等の問は雙方より口を突く如くに出たるも余は心の非常に激動せし事なれば玆に其語を繰返す能はず余は實に前代未聞なる此大豪傑偉老人の顏を見詰め、翁の言葉を聞きつゝも殆ど眼を動すこと能はざりき、翁が眉の一毫たりとも又顏の一筋たりとも實に艱難辛苦の痕を現はさゞるは莫し、少しの僞りをも雜へざる翁の言葉は諄々として既往幾年間の探險を物語れり、其物語りは實に一冊の歷史に同じ玆に記し盡す可くも非ず」云々。斯くて李敏敎翁は士丹靈氏に問ひて云ふ樣、「此五六年以來歐洲は如何なる事變起りしやら亞弗利加は唯人と人と食合ひ戰ひ合ふのみなれ

と歐洲の人は追々文明に赴くゆゑ最早や戰爭などの如き野蠻騷ぎは爲さゞるならん」と士丹靈は之に答へ「否、悲しい哉歐洲は、夫ほどの開明には未だ達せず既に獨佛の間に戰爭起り、幾十万の獨逸軍勝に乘じて佛國の都を圍み、之が爲に巴里の市民は一片の食をも得ざるまで困難し唯だ餓死に迫りたる爲め止を得ず和を講じて事平和に歸したるは余が本國を出る少し以前なりき」と云ひしに翁は嘆息をも發せんずる許りに良久しく無言なりしが頓て又「其戰爭は他の國々へは影響せざりしや」と問へり、士氏は答へて「否とよ影響したり、中にも西班牙の如きは人民之を機として內亂を起し女王イサベラ殿下を廢し、プリム將軍を暗殺する等の無慙なる境涯と爲りたれば余は其の內亂以來の有樣を探聞する爲めに通信者として同國に特派せられ居たるも本社より急に亞弗利加行を命ぜられたり、依て本國なる米國へも歸らずに當地に出張したるなり」と云へり翁は又問ひぬ「如何ほど盛に戰爭すればとて戰爭は國家の名譽に非ず眞の名譽は平和の事業に在り、何か平和を以て大に各國の國運を進むる如き大事業は起らざりしや」士氏「然り平和の事業も進みたり、大西洋の海底電線を落成したる如き蘇西の運河を開き、

果せたる如き又は米國の東岸より西岸まで鐵路を布き大平と大西の兩洋を汽車にて連絡し得たる如きは其の重なる者にて總て世界の幸福を一新する力あり」翁は此語を聞て初めて滿足の色を現はしたり。

是より士丹靈氏は其地に留り翁と共に丹鷲湖の沿岸を探險し、其事終りたる後、翁に向ひ、共々に本國へ歸る可きことを切りに說勸めしかど翁は斷乎として之に應ぜず「余は未だ亞弗利加內地探險の事業を終らず、故鄉朋友の間に歸るを望まぬには有らぬも玆まで深入せし余にして猶ほ此上を進まずば、玆まですらも來らざる他人が何とて此先を探り究むるを得ん、余の親友は皆余の歸國するよりも此上を探險するを望めり、余の最愛の娘すらも先に余に手紙を寄せて「父上の御顏を拜し度きは山々なれど父上自ら御心に誓ひ給ひし大事業を捨て唯だ私の望みを叶へる丈の爲に御歸りなされ候ては却つて私に取り心辛く、唯だ父上が私にお情ひ無く思召通りに進退なされ候こそ私の本意に候娘の身として何とて父上の大事業を妨げ申す可き」と云ひ來れり。

余は心に誓ひたる所まで探險せずば何うありても歸る能はず、と翁は斯く云ひて士氏が如何樣に說勸むるも終に歸るを云はず。去れば士氏は翁を遺して歸り來れり。十年蟄地に身を晒して猶ほ歸るを思はざる翁の決心と死せしと見られし翁を尋ね出したる士氏の功とは實に天下の雙絕と云ふ可し。吾人は英國全體を代表して翁の德を頌し、併せて士丹靈氏の功を謝せざるを得ず云々。

夫人は是だけの記事を讀終り、痛く感ずる所ある如く、新聞を下に置き、一語をも發せずして凡そ一時間ほども考へ込みしが漸く、一個の大決心を起したる如く斷然として起上り、片隅の机に行き筆取上げて左の如き文句の手紙をば一字一句も違へずに三通認めたり。

拜啓私と一夕の談話を共にすることをお恐れなさらずば明夜九時前より私宅へ御來臨成下され度候但し外に貴方の友人二名だけ招き候に付き其人々も同席致す儀と御承知被下度候、又常夜は茶菓の外は何品をも供し申さず候芽蘭夫人りう子拜。

斯て夫人は此三通を別々に三名の紳士に宛て夫々送り出したり。是れ抑も如何なる目的ぞや。

三

此の芽蘭夫人が明夜九時より來會せよと云ふ三通の手紙を送りたる、其三紳士は孰れも當時一方の職業を以て世に賣出し、後來大に望み有りと評判せらるゝ人々にして、即ち左の如し。

▲畫學士茂林　▲醫學士鳥尾　▲文學士平洲

此三人三色の紳士を招き集むる夫人の心中は知るに由無し。夫人は一旦所天を持ちし身なれども、其心一つにて如何なる人へなりも直に其所天に死分れ、今は數多の身代ち絶世の綺麗とを遺し、其心一つにて如何なる人へなりと再緣せらるゝ自由の身なれば、年若き巴里の紳士にして殆ど幾分か夫人に望みを屬せぬは無く、夫人は實に引手數多の有樣にて、當世の名高き紳士と大抵は知り合なるに何故特に此三紳士を選びたるや、夫も知る由無けれども、此三人は此ほど既に夫人に向ひ緣談を申込たりとの事なり。

茂林畫學士は我親戚なる何某夫人を使として、平洲文學士は細々の手紙を以て鳥尾醫學士は直接に夫人に逢ひ熱心なる我言葉を以て、各切に我妻たらんことを請ひしと云へば明夜の招きは、

或は三人を集め置きて夫人自ら明かに返答せん爲にても有らんか。

夫は扨置き、翌夜は九時を合圖に三學士とも一刻も後れずに夫人の家に集ひたり。

夫人は此日、朝の程より唯深く何事をか考へ入るのみなりしが、三學士の來りし頃は最早や充分に決心せし如く、顏に一點の物思ひをも留めず、三學士を靜かなる奥の一室に請じ笑顏を以て影日向なく待遇すより、三人ともに夫人の底意を計り兼一座白け掛て見えんとせしが、夫人は茶菓の一順終るを待ち靜かに立上りて、「今夜お出を願ひましたは、實に私の生涯に拘る大切のお話が有る爲です。」と云ひ、益々訝かる三學士を等分に眺めて「實はお三人共に此度私へ緣談をお申込になりました、誠に私の身に過ぎた幸で、私はお三人を眞の親友と思ひお三人には如何なる事を相談しても差支は無い事と存じます」此の前置だけを聞き三人は早既に「無論です」と叫ばんずる氣合を示すに、夫人は目配せにて之せ制し「然るにお三人とも未だ私の素性を御存じ無いのです、（ノーの聲起らんとするを又も夫人は目にて制し）イ、エ成る程私が誰にでも緣附れる自由の身分で、今まで何の醜聞にも關係した事の無いと云ふ丈けは、御存でせうが眞の身

の上は御存が有りません、依て大事の御相談を初めます前に身の上を申し上て置きます」とて一入眞面目になり。

私は一頃は英國で大探險家の一人に數へられた、ランダーと云ふ者の一女です、御存で有ませうが父は取年の爲め旅行や探險を止めましたけれど、父の家は名高い探險家の相談場所と云ふ有様で、私が子供の頃は有名なスピーク紙オバウェグ氏や今の李敏敦など云ふ人達を初め、探險を試むる人は常に父の許へ參り、熱心に遠征の目論見を相談する其議論や其話を、私は毎も父の膝許で聞いて居ました。夫れが爲か物心を覺えるに從ひ、唯だ旅行や探險と云ふ事に心が傾き、徒に讀む書物も成る丈け其方に緣の有るのを選む有様と爲り、ア、此身が男に生れたならと此樣に思つた事も度々ありました。其うち人食人種の住むと聞く蠻地の果までも入込むのに、と

に十九の年を爲り、當佛國の探險家男爵芽蘭の妻と爲りました、男爵芽蘭も廿歳以下の頃から、亞弗利加の內地詮鑿に種々の手柄を現はした人で、殊に李敏敦翁には最も愛せられ、私の父なども芽蘭ばかりは後來何れ程地學の爲に手柄を現はすかも知らぬなど褒て居ました、併し父は

私を芽蘭の妻にすることは好ます、探險家と云ふ者は生涯探險の味を忘るゝ事が出來ず、縱し

や妻子が有つたとて、一旦其思ひ立が心に浮べば自分で自分を制する事が出來ず妻子を捨て危險極まる地へ踏込む事になる故、所夫に持てば生涯心配をせねば成らぬと云ひました、夫れでも私は思ひ止まらず所夫が探險に出れば女ながらも矢張り附添ふて共に探險に行き、死ぬるも殺されるも總て共々にすると云ふ了見で終に芽蘭と夫婦になり此國へ移りました。其の後二年の間は芽蘭も遠征の事を忘れた樣で有ましたが三年目の初め頃に、亞弗利加內地の探險は迚も李敏敦翁のみに任せては置かれぬ、翁の外に翁ほど熱心の人が無ければ、何時成功するかも知れぬからと云ひ、再び探險の心を起しました、素より私は一緒に行く積で其決心を告げましたが、所夫は私の同行を危ひと云ひ、夫切り自分も思ひ止まつた樣に見えました。其後私は父の病氣で一月ほど英國へ行きました處、所夫芽蘭は其留守の間に、誰にも告げず亞弗利加へ出發しました、私へは唯だ一通の置手紙を殘し、幾等夫婦とは云へ男すら十中八九は生て還られぬと極つて居る危い場所へ妻を連て行くは餘り妻に對して邪慳に當り、且は婚姻の前に後々を誡めた和女の父

にも濟まぬ故、和女の留守を幸ひに獨りで出發する、其代り永くは掛らず數ケ月の中に歸り來るゆゑ、心配せずに留守をせよと、此樣な意味を認めて有ました。私は英國から歸り、此手紙を見て直にも所夫の後を追度いと迄に思ひましたが、唯だ亞弗利加と許りで指て行く地も分らず詮方無しに斷念めて、今日歸るか、明日戻るかと待暮すうち一年を經て、埃及海路府に在る此國の領事館から所夫芽蘭が名も知れぬ蠻地で死去したと云ふ事を知らせて來ました、其時から私は今日同樣の寡婦暮しです、」と最と異樣なる履歷を語るは如何なる深意の有りてにや圖り難きも、兎に角此の美しき夫人が、彼の亞弗利加のナイル河と名を等しくするニガーの水上を穿究して、雷名を一世に攫かせしリチヤード、ランダーの一女にして而も博學社會に最痛く惜まれたる、遠征家芽蘭男爵の妻たりしかと思へば三人は今更の如く尊敬の念を深くし、夫人の返事唯だ吾れにのみ色好かれと三人一樣に祈るなるべし。

四

芽蘭夫人は斯く其身の素性を說終り。再び三人の前に手づから茶を注ぎ替て供へ置き、語を繼ぎて說出る樣「私は此通りの身の上で再緣するのは自分の隨意で有ますが、去ればとてお三人から一緒に緣談を申込まれて何方を斷り何方を承知致しませう、若し私の心がお三人中の一人に傾いて有れば、無論其方を所夫と定める譯で、何の思案にも及びませんが、悲しや只今の處で私の心はお三人を唯だ一樣に尊敬する許りで少しも影日向が有りません。詳しく申せばお三人を又と得られぬ親友と思ひ親しむ事は致しますが、所夫に持たうと云ふ愛情は心に毛ほども有りません、夫ですからお三人の中で、一番先に私へ愛情を起させた方が私の所夫に成れるので す」と包みも隱さず心を有の儘に打明け置き、更に又語を繼め、「私は自分で如何ほど思案して もお三人の中へ少しも區別を附ける事が出來ません、尤も之は無理でも有りますまい、お三人とも御自分の力を以て社會に賣出し、立派に身をお立成さつた方々で、位置も身分も唯今の名譽も

同じ事、又後々の出世する見込も優劣は附られません。夫は又先年此國と墓國と戰爭の時はお三人とも義勇軍に加はり、一方ならぬ手柄を擧げ、本職の軍人にも感服せられたと承はりました、又容貌とても各々十人並か或は十人並を少し優れたと云ふ所で、思慮ある女が所夫を持つには丁度お三人ぐらゐの處を選びます、若しお三人を一緒に並べれば誰とて分別に迷ひませう、サア斯様な譯で有りますから何方か一人、特別に私に感心せられ、私の心へ愛の情を引起させる丈の事柄を爲さらねば、私の心は何時までも今の儘、唯だお三人を一樣に尊敬すると云ふ丈で愛の情は起りません、愛の情の起らぬのに所夫と爲り妻と爲る事は到底私には出來ません、夫ゆゑ今夜のお願ひは、飽くまで私を妻に仕度いとお思ひ成されば何うか私が惚々する程の働きを實地に私へお見せ下さいと申すのです」と殆ど嚙で哺める如くに說かれて、三人は銘々合點せし樣子にて、唯だ如何にして他の二人に秀で此夫人に感心せらるゝ働きを現はさんかと、夫をのみ考ふるに似たり。

夫人は此の有樣を見て又語を繼ぎ「併し玆で能くお斷り申して置かねば成りませんのは私の

氣質です、先刻申上げます通り、外の婦人達とは異る境涯に育ち上られました身ゆゑ、私は世間の婦人が愛する樣な生優しい事柄は愛しません、男は何所までも男らしく、女には迚も眞似が出來ぬ樣な、極めて大膽な命掛で、事柄ので爾して社會の手本とも爲り世の人の感心する樣な働きで無ければ決して私の愛は動きません、是だけは能く御承知を願ふて置きます」と云ふに熱心なる三人も今此の平和なる世の中にて、如何にして爾る命掛けの手柄が現はさる可きやと、是には少し飽倦みしに似たり、夫人は其樣子を篤と見て、玆ぞと初めて其身の眞の目的を語り出る樣。

「今は素より太平の世の中で、別に手柄の現はし樣が有ますまいが、夫に付き一つの御相談は私が是より所夫を持つ者とすれば其の婚姻の前に是非とも、死んだ所夫芽爾男爵の墓參を致し度いと思います、墓參りと申した所で、亞弗利加の靈地で倒れました事ゆゑ、素より墓とても無く、唯だ其の倒れた場所を見屆け、死骸を埋めた土の上へ心ばかりの石碑を建て、一片の香花を上げ、爾して此の身が再び所夫を持つ餘所ながらの言譯も仕て置き度いと、ハイ衆て私は斯う

思つて居ります幾箏亞弗利加の內地が遠いにもせよ、尋ね行いて石碑を建る丈の事さへせずに、二度の所夫を持つと云ふ事は到底私には出來ませぬ。

明かに言切る中にも何とやら打萎れて眼の底に涙の光さへ見ゆるかと疑はるゝは、流石夫人の眞情なる可く三人は寧ろ感愼するのみ、夫人は暫し胸の騷ぎを推鎭めて「私が實は今までお三人に御懇意を結んだのも此目的が有ればこそです、男さへ無事には行かれぬ亞弗利加の內地へ何うして女一人で行かれませう、去ればとて迂濶に供人を雇入れるも安心ならず、誰か然る可き人はと心の中で探すうち丁度お三人と懇意になり、貴方がたが獨佛の戰爭中に、人に優れて命掛けに働いた其勇氣の程も聞及び、此樣な力々ならばと思ふに連れ懇意は自と深くなり、今日の場合に及びました、素より亞弗利加へ行きますのは死ぬる覺悟も同樣の旅行ゆゑ、達て一緒にお出で下さいと願ふ譯には行きませんが、唯だお三人から私と生涯の苦樂を共に仕度いとのお申し込みゆゑ、云はゞ圖に乘つて申上げるのです、孰れにしても私丈は亡き所夫の墓參ゆゑ、お三人が否だと仰有れば外に然る可き同行者を雇ひ入れてゞも行かねば成りません。若しお三人が御同行

五

下されば何よりも幸ひです、殊にお三人とも斯樣な旅行には無くて叶はぬ性質の職業柄で、先づ平洲さんは文學士なれば途中で見聞する事を記錄し、茂林さんは畵の專門ゆゑ一切の景色風俗など寫せば、歸つて後に一方ならず學術社會の利益にも成りませう、亡き所夫芽蘭が兼て亞弗利加內地に付き大著述を目論見、過半は既に出來上つて居りますが、唯だ其終りの部分に至り私と婚禮して其事を拋ちましたゆゑ、最後の旅行は實に其著述を書終る材料を集める積で出立したのです斯樣な譯ですから平洲さんと茂林さんが御同行下されば歸國の後に其著述も大成し男爵芽蘭の亡き魂を慰める事も出來ます、爾して鳥尾さんは醫學士ゆゑ、氣候の惡い蠻國へ入込むには一同の爲にも無くて叶はず、殊に人を養ふ蠻族でも傷を直し病を治する人を見ては神樣の使ひだなど〳〵尊ふとやら聞ますゆゑ、お三人とも私の此旅行には孰れ劣らぬ必要です、如何がでせう御同行下されませうか」と事細かに說明して問掛たり。

亡き良人の墓に詣んと爲め深く亞弗利加の內地にまで入込まんとする芽蘭夫人の決心は感ず可き至りなれど、之に同行して幾千万里の旅を企つるは一通りの熱心にては出來難き事どもなり。夫も夫人の二度目の所夫と事極り、唯だ一人從ひ行くなら未だしも樂しき所あれど、戀の敵とも云ふ可き他の兩人と共々に從ひ行くは、有難き事に非ず、其旅行中に夫人の心必ず愛の情を發すると限りたるにも有らず、若し發せずば三人が三人とも萬里の旅を濟ましたる後に於て失望の身とならざるを得じ、尤も夫人自ら此墓參をさへ濟しなば二度目の所夫を持つと云ふ了見ゆゑ、旅行を終へて歸る迄に必ず愛の心を發する者と見ても間違ひは無からんが去ればとて眞に其心の發せしとて、夫人に選まるゝ者は唯だ一人ゆゑ、三人の中、二人までは到底失望を免れ得ぬ筈なり或は僥倖にして首尾能く、夫人に眞に愛せられ、失望の二人組には陷らずして唯一人の最も嬉しき人と爲るとも、不幸にして其の身自ら病に罹り死去すれば如何、亞弗利加內地の旅行と云へば或は病の爲め、或は猛獸毒蛇の爲め十人が九人まで、事に由りては十人が十人まで生て歸らぬは今まで幾多の經驗にて明白なり。若し斯る事と爲らば、唯だ其身の不

幸のみには非ず、既に最初の所夫に死分れたる夫人をして、二度目の所夫と定めたる人にまで死分るゝ不幸を受けしむる事と爲る可し。

夫も猶ほ詮方爲しとするも夫人自身が途中にて死去すれば如何、全くの玉無しと成り終りて、三人實に此上無き失望を嘗めし上、滿天下の笑ひ草とも成る可し、猶ほ深く考へ見れば夫人も三人も悉く死絕えて一人の此國に歸る者無きに至らずとも關られず、一行悉く行衞知れずとするが如き例しも今まで既に度々ある所なればなり。

三人は考へも細かにして固より思慮深き紳士なれば、斯る危險を思はぬには非ず、去れど一人の逡巡する氣色を示すは無く、孰れも一種の熱心を面に現はし、落着きて夫人の言葉を聞つゝ有るは、眞に隨行する所存にや、夫人が言葉の終りしと見るや三人は一樣に言葉を發せんとするに、夫人は遽しく推留て「イヽエお三人の身に取り非常に重大な事件ですから私は決して此席でお返事を伺ひ度くは有りません、縱しや否とか應とか既に貴方がたのお返事は胸の中に定つて居ろに仕ても、今卽座に成さる御返事とは認めませんゆゑ、御歸宅の上、

篤とお考へ成さつて相談する方が有るなら相談し、其上にてお返事を願ひます」と最と道理なる猶豫を與へ更に又語を補ひ「私の主意は是だけですが、猶ほ旅行中の心得を申して置きませう、第一途中に於て私の心がお三人中の一人に向ひ眞の愛情を發する樣な事が有るとも私は夫を素振にも言葉にも決して現はさず首尾能く墓參を濟し、歸國して後で無ければ、誰にも知らせません、第二には貴方がたが歸國まで互に毛ほども嫉妬の念を起す樣な事が有つては成りません、嫉妬は我々の一行に於て何よりも禁物です、第三に旅行中は私を男子と見做して下さらねばなりません、若し私を女と思ひ、強て私の機嫌を取るとか、又は求めて私に愛情を起させる樣な運動を仕ては成りません、詰る所男同士の親友四人連の旅と云ふ決心で飽くまで其心を忘れぬ樣に致さねばなりません、サア私の申し上げるは是れだけです、是れで此の旅行の目的も褒美も方法も分りましたから、何うか皆樣今より一週間だけ篤とお熟考なさつて、此の次の週の今日に確たるお返事を願ひます、無事に歸國の上は、お三人中の一人は私の所夫と爲り、殘る二人は私の生涯の親友として、又と無き程の親密な友情と感謝の意とを得るので有ります」。

と云ひ、是にて芽爾夫人の言葉は全く終るに、三人は深く夫人の言葉を呑込み、唯だ、「能く分りました」と一樣に答へしのみ、問返す者も無し。

後は唯だ常の如くに樣々の談話を試みし末、三人同時に切上げて、何の敵意をも、何の素振をも現はさず歸り行くは、早や既に夫人の言葉に服膺し、夫人を全くの男子と見做たるやにも疑はるゝ許りなり。

六

如何に戀慕ふ夫人の爲とは云へ三學士は、果して此の危險極まる亞弗利加內地の旅行に隨行する事を承諾す可きか。頓て返事の期限と云ふ七日目の夕方に至れば六時の鐘の鳴るや鳴らぬに、誰より先に名刺を通ずるは三人中にて最も眞面目として知らるゝ、鳥尾醫學士なり。

夫人は直ちに我室へ通せしが一日にて夫と察し「ア、貴方は大層早くお出に成ました、斯うお早いのは多分お斷りの爲でせうネ鳥尾醫學士は稍ゝ悪げに「イエ實は未だ何方とも決心が附か

ぬのです、夫ゆゑ貴女へ御相談に參りました」夫人は敢て氣色を損せず、却つて幾分か氣の毒げに「ア、貴方はお醫者の職業ゆゑ、引受て居る病人を捨ては行かれぬと仰有るのですネ」馬「イエ私は開業せずとも世を渡る丈の財産が有ますゆゑ、其樣な病人は持ちません、唯だ貧しい病人を救ふ爲め慈善の施療を勤めとして居りますけれど！」とて、猶ほ何事をか言出さんとするに夫人は早くも「でも慈善の病院には數れも澤山の醫師が就て居りませう、貴方お一人亞弗利加へ立つた所で」「イエ慈善の病院では有ません、今でも世間には死んでも貧民と見做されて慈善病院へ入られるのは厭だなど言張り、看す〳〵病の重るのを我慢して居る眞の憐む可き病人が有るのです、私は此樣なのを探し出して夫を救ふて遣るのです」婦人は熱心に「でも憐む可き病人は巴里より外には有ませんか、亞弗利加の內地には醫者も無く、藥も無く、夫が爲に文明の恩に霑ふ事が出來ずして、手輕い病にも療治を受ずに死ぬる人が、何れほど有るかも分りません、此樣な蠻地へ入込み、學術の賜と云はれる、進歩した療治を施して遣るのが眞の仁術とやら云ふ者では有ませんか」と道理を推て說勸むるに、鳥尾醫學士は思ひ切りたる樣子にて「イエ夫人、私

が巴里を立去る事の出來ぬは、貧民への施療を大切に思ふが爲め而已では無く、外に餘儀無い譯が有ります」餘儀無い譯とは何事にやと夫人が眼を見開く間に、鳥尾醫學士は殆ど我身で我身を制し難たる人の如く、突と進みて夫人の手を取り、我と我が心の切無さに咽ぶ聲にて「夫人、私の心を能く汲分て下さいまし、先日貴女の日論見を聞き、一週間を約束して玆から歸つた時は實に是ほど嬉しい事は無いと思ひまして、ハイ亞弗利加の內地まで貴女と共に行き、貴女と艱難を俱にして貴女を保護し貴女を救ふ、其大任を賴まれるとは實に何と云ふ仕合せかと、嬉しさに身も忘れる程に思ひました、イヽエ夫人、貴女は未だ私の愛情が何れ程深いか知らぬのです、何うか云ふ丈け云はして下さい、私は物心覺えてから唯學問に夢中と爲り、一心不亂に其修業にのみ身を委ね、此身の天職は唯だ醫學にばかり在る事と堅く思ひ詰て居りましたが、貴女を一目見た日から世の中には愛と云ふ樂しい世界の在る事を知りました、今まで唯だ勤だと思つて爲た仕事も、急に一種の樂しみが出て、晝間に此勤をさへ濟せば夜に入りて貴女の許へ行かれるかと唯だ夫が張合になり、穢苦しい貧民の住居に入るのを極樂に入る程の思ひが有りました、辛いに

も苦しいにも、絶えず貴女の姿が目の前に現はれて私を勵ましました、ハイ眞に貴女を我物だと思ひました、是ほど切な愛情は決して屆かぬ事は無い、遲かれ早かれ貴女を我物にする事が出來ると思へば全く貴女の姿を、自分の樣に思つて居ました。」

と胸に溢るゝ愛情を留度も無く語出るにぞ。夫人は最初に此言葉を堰留んと思ひしも、何故にや夫れ程の勇氣も出ず、唯だ斯も熱心なる大學者が血氣壯なる年少の人と同じく、斯くまでの愛情を發し得るにやと且怪しみ、且驚きて。眼を垂れて聞くのみなりしが、漸くに醫學士の顏を見上げて、夫れほど私をお思ひ成さるなら何故、私と共に亞弗利加の內地へ入込みません」醫學士は殆ど恨めしげに、夫れがサ、實は一人の老母が有ります、實に貴女の仰有る通り、憐む可き人は巴里に限らず、醫術を知らぬ鬼域に入り、文明の澤に浴せぬ蠻民に施療するのが何よりの仁術では有りますけれど、親へ盡す孝養は其れよりも猶重い務です、母と、私は、母一人子一人の間柄で、私が巴里を去れば母を介抱する者が有りません、尤も兼てより母へ貴女の噂を聞かせては有りますゆゑ、今私が貴女に隨て鬼域へ入ると云へば母は決して異存は云はず、却つて

嬉しげに、其れは早く行くが好からう、と斯う云ふに極つて居ます、ハイ母は唯だ私を歡ばせるのを何よりの樂しみと爲て居ますから、斯うより外は決して申しません、けれども其言葉に從つて私が立てば、後で淋しさや、懷しさに、泣死るは必定です、最う身體とても餘ほど老衰して居ますゆゑ、私が行くのは母を見殺しにするも當然、唯一人の子で有るのに、母の死目を餘所に見て、他國へ行く事が出來ませうか」と、悲しさを推隱して打明る眞心は、眼に籠る淚の光りにも知らるゝにぞ。夫人も眞實氣の毒の念ひに堪へず「成るほど夫れでは行かれません、貴方は同行をお止めなさい」醫學士は泣かぬ許りに「ハイ貴女は爾う仰有るだらうと思ひました、眞に止める一方です、ハイ行く事は止めませう、でも貴女は矢張りお出成さるのですネ、アノ、アノ兩人と共々に」とて、兩人の語に異樣に力を入るゝは、到底此の夫人は彼の平洲文學士か茂林畫學士と、兩人中の一人の妻たる可しと思ひ、心自ら平かなるを得ぬ爲なる可し。夫人も寧ろ打悄れて「ハイ」と云ふに「サツパリ、此遠征を思ひ止まる事は出來ませぬが」「何うして思ひ止まられませう、貴方が母御の死目を餘所に見る事が出來ぬ と仰有いましたのに、私は所夫の死目

を餘所に見ました、ハイ何所で何うして死んだのか夫れさへも見屆けずに居られませうか」「ダツて年も若い女の身で、男さへ十人が九人まで生て還らぬ恐ろしい所へ遠征とは！」「ハイ是も勤めです致し方が有りません、若し野蠻人に喰はれて死ぬなら、所夫と同じ運命に倒れるのですから、殘念とは思ひません」凛乎たる一言に鳥尾醫學士は再び諫めん言葉も無く唯悄然として「では何日お立です」「夫れは今夜の相談で極めるのです」「アノ兩人と相談して」と又も兩人の語に力を入るゝは能く〳〵氣に掛ることゝ見ゆ。

「ハイ、併し孰れにしても直に立つと云ふ譯には行きません、夫々の支度が有りますから」「でもお立の前に又お目に掛られませうか」「ハイ立つまでは何時でもお出下さればお目に掛ります」「お立の後も行く先から何うか安否の手紙だけはお寄越しを願ひます」「ハイ夫れも郵便などの便利の無い土地ですから思ふ樣にも行きますまいが」「でも便りの有る度に、私からも手紙を上げて好いでせうか」「夫れは何より願ふ所です。亞弗利加の內地へ入り、歐洲から手紙を得るのは何よりも嬉しいと云ふ事ですから、知つた人には皆願つて置く積です」と云ふ折しも又も入口に案內

の鈴を推鳴す者あるは、確に平洲と茂林の來りしなり。鳥尾醫學士は夫れと知り「ア、兩人が遣つて來ました、兩人は私より仕合せ者です、眞に羨ましい、貴女に隨行すると云ふ返事の爲に、勇んで來たのに違ひ無い、夫人、私はアノ兩人に逢ふ心も致しません、此方の戶口から歸して頂きませう」「サアお出なさい」と分れの手先を握らしむる夫人の眞中にも淚の光り籠れるかと疑はる。

七

鳥尾醫學士が打悄れて一方の戶口より出去るや、引違へて他方の入口より、彼の平洲文學士と茂林畫學士は入來りぬ。

兩人は實に鳥尾醫學士の推せし通り、承諾の返事をせん爲に來りし者なり、其顏の晴渡りて樣子の都て最も莞爾なるにても知らる、夫人は簡單に「何う決しました」二人は同音に「無論行く事に決しました」茂林畫學士は猶ほ語を足し「ナニも貴女が一週間の猶豫を下さずとも私は

アノ翌朝既に決心が定まつたのです貴女に誘はれゝば世界の果までも行くと云ふ事に」平洲文學士も一歩を譲らず「イヤ私は貴女が説明して居る中に既に決したのです」と云ひ二人同じく打笑ふは、眞に此旅行を戀の道行とでも思へるに似たり、其勇氣は感心なれど、芽蘭夫人は實に死を賭しての覺悟なれば最こ眞面目に「イエ爾まで熱心に至つて下さるは有難い次第ですが、全くの所容易ならぬ旅行ゆゑ、最も眞面目に考へて頂かねば成ません、既に申しました通り飽までも私を男と見做し、男女の間に發する様な、言葉や素振は決して發しては成ません、爾うせねば此旅行は途中で神聖を失ふ恐れが有ります、併し是だけ云へば能くお分りで有りませうから、是より旅行の用意など評議しませう」茂林は浮立し如く「ハイ善は急げです、至急に用意を初め今より二週間以内に出發する事と致しませう」「イヤ一週間以内としませう」夫人は二人の性急なるに笑を催し「斯様な大遠征の用意が何うして一週間や二週間で出來ませう、私は既に六ケ月以前から用意を初めて居りますけれご未だ充分に整ひません」「ダツテ別に六ケしい用意は有りません、第一に知己友人に暇を告げ第二に革包を詰め、第三に旅費の金子を懐中に入れゝば、其れ

で何時でも立てませう夫人は誠むる句謝にて「アヽ貴方は何うしても物見遊山の様に心得てお出でなさる、第一に生て還らぬ覺悟が肝腎ですから暇乞よりも、先づ遺言狀を作り自分が死後の財産の處分を認め、爾して確なる公證人に其遺言狀を托して置かねば成りません、亞弗利加遠征に出る人の暇乞は都て此通りです」ソッと死風の身を襲ふほど氣味悪き言聞けなれど、二人は憶する色も無く「成る程爾だ、夫れまでは氣が附なんだ」と平氣にて述るのみ。「第二に革包とても一つや二つでは足ません、品物を買入る事の出來ぬ土地ですから入用の品は悉く持つて行かねば成ません」「でも夫人、鐵道や馬車の無い土地ゆゑ荷物は成たけ輕便に致しませう」「荷物が輕便にせられる様なら、誰も鬼域遠征も困難とは思ひません、充分一家を持つ丈けの品物を持つて行くのですから、丁度引越しの様な者です、巴里の市中で引越しても荷物の運搬に隨分手數が掛りませう道の無い土地へ何万哩も引越すのですから」「でも其荷物は何うして！」「ハイ馬車や汽車の代りに、人夫や駱駝などを雇ふて運ばせるのです、夫れだから鬼域遠征には少くも百人、多くは五六百人の供を連ねば荷物だけも運び切れず、又其の供人の食物から携へ行かねばなりませ

ん、第三には又金子の事ですが、鬼域の内地では、金貨や紙幣などを知らぬ土人と取引するのですから、南京玉や針線や、反物や、總て土人の欲がる品物を持つて行き、此國で錢を使ふ樣に使ふのです、是のみでも一方ならぬ荷物となります、サア此の通りの譯ですから買物は餘程澤山有るのです」とて重なる品を數へ掛け更に「イヤ是れ等の買物をするには、誰かを會計主任に定めねばなりません」茂林先づ進み「總て其樣な任務は貴女から命令して頂きませう、此遠征は三人とも同じ男の積でも、貴女を大將軍と立てゝ置きます、何事も大將軍のお目鏡で」夫人は靜かに「では其の大將軍と云ふ役目を引受けませう、夫れなら平洲さん貴方が會計主任として一切の買物を監督して頂きませう」「宜しい」「大抵の品物は成る可く埃及國まで行き同國の海路府で買調へる事にし、唯だ同府に無い者だけ此國で買調へて、我々の出發より先き同府まで送り出だして置く事に」「心得ました」茂林は又進みて「では埃及の方から行くのですか、私はアルゼリヤから行くかと思ひ既に其地理など調て居ましたが」「ハイ、埃及からヌビヤ國へ入込むのです」「ヌビヤとは面白い、ヌビヤ國から何處へ行きます」「其先は分りません」「益々以て面白い、私は

總て行先の前以て分らぬ旅行を好みます」「其代り命の有無も前以て分りませんよ」「夫れは重々有難い、巴里の共同墓地では、葬られた所で頭や足が門へ窮屈で堪るまいと夙から私は心配して居ます、廣々とした野蠻國の內地へ埋められゝば死んでも清々するだらふと思ひます」と手を拍たぬ許りに喜ぶは狂氣の沙汰にも近しと云ふ可し。此間にも平洲は頻りに買物を書附け居たるが「では茂林を葬る棺までも買調へて行きませうか」「其樣な笑談を云ふ場合では有りません、貴方は武器の類を記しましたか」「イヱ未だ」「餘り綺麗な武器は却つて酋長などが目を附け、其武器の欲い爲に持主を虐殺する例が幾等も有ります、成る丈け堅固で目に立たぬのを選ぶ樣に、爾して通例の銃の外に長劍や短銃なども澤山要ります、其の外酋長等へ贈ひ物にする武器も入用です」「夫れでは全るで輜重兵のやうな者です」「勿論です、夫れだから遠征隊と云ふのです、供人を合せて幾百人隊伍を組み武器を以て或場合には戰爭もせねばならず、又或場合には降參して償金同樣の賄賂を振撒て通らねばなりません、其用意でお二人とも出發まで成る可く遠足と遠乘の稽古を成さい、猶ほ亞拉比語も多少お覺え成さる樣に、何でも亞拉比語を覺えて置けば亞弗利

加の何所へ行つても其土地の語を覺えるに早いと云ひますから」と夫人の訓令を綿密に聞取るうち、初めて候補者の一人たる彼の醫學士が見えぬに氣附きて茂林は「鳥尾醫學士は大層遲いが」「イヤ那の方は同行が出來ぬと先刻斷りに來られました」茂林は喜びて「此れは難有い、本統に氣の利いた男だよ」「エ、貴方は一人缺けて殘念とは思ひませんか」茂「何で殘念に思ひませう」平「競爭者が一人減り夫れだけ三分の一の見込が二分の一に增て來た譯ですもの」夫人は笑はじと欲するも得ず「成るほど爾云ふお考へですか、夫れでも醫者を引連ねば此旅行は出來兼ねますす」茂「ナニ醫者などは要りません」平「勿論です吾々は今まで病氣に罹つた事は無いのです」と危險を揭はず言張るは、二分の一が再び三分の一と減り行を恐れての一心なるべし。

八

學士三人の中、鳥尾醫學士が一人行かぬ事となれば、芽蘭夫人の婚たる可きは、茂林醫學士か平洲文學士の中なれば、兩人とも鳥尾醫學士の拔けたるを痛く喜び、競爭者一人減りては、夫れ

だけ勝利の見込多くなりたる譯なればと思ひ、兩人とも決して病氣などには罹らぬ故、醫士を伴ひ行くに及ばずと眞面目になりて言張るにぞ、芽蘭夫人は言返し「貴方方は實に險地の季候を知らぬのです、日頃何れほど健康でも鬼域と云はれる亞弗利加の內地へ踏込み、病氣に罹らぬ人は一人も有りません、併し先づ假に貴方がたの言葉を從ひ、一同病氣には罹らぬ者と見做しませう、夫れにしても私は貴方の外に誰か一緒に行つて呉れる人が無くては成らぬと思ひます」茂「夫れは何故です」「貴方がたは餘り年が若過ぎます、私とても若い身の上、サア若い女と若い男と、外に見張て呉れる人無しに、長い旅行が出來ませうか」「併し鳥尾醫學士とても年は私と同年です、彼れが一緒に行つたからとて、矢張り若い男と若い女の旅行でせう」「イヤ違ひます、アノ方は年よりも心が眞面目で、血氣盛な貴方がたの樣に若氣の過ちは決して無い人です、アノ方が一緒ならば世間でも此旅行を信用します」

平洲は聞棄て恨めしげに「夫は夫人、情け無い仰有り方です、成るほど我々兩人はアノ醫學士と違ひ、長く交際の社會に揉れた丈笑談も云へば巫戲けもする、上部から見れば本統の兒供です

けれども心の底まで浮戯けては居無いのです、口も輕く氣も輕く、如何ほど困難な場合をも笑談の樣に通り抜るのが巴里兒の持前です、此氣質を以て亞弗利加の內地へ入り込ば互に氣も引立て、病氣などにも罹りません、ハイ今までの旅行者が、病氣になるのは餘り陰氣過ぎて鬱ぎ込む柄の事です、私は大沙漠を渡るにも、芝居見物に行く積りで浮立つて渡ります、尤も私一人なら直に鬱ぎ込んで仕舞ふかも知れませんが、茂林君の樣な巴里兒が一緒なら、私が鬱ぎ相になれば茂林君が引き立てますから決して鬱ぎ込む事は無く、貴女までも知らず〳〵に此旅行を終ります、御覽なさい、我々決して病氣などに罹る事なく寧ろ野蠻人の中へ巴里風を吹せて歸りますからと」眞に巴里子の氣前を主儘に、最と氣散じに說立つれど夫人の心は更に動かず「イヤ貴方がその氣の輕いのは何よりも結構ですが、孰れにしても私は今一人ズツと重々しい老成の道連が欲いと思ひます」最早や言爭ふも無益なれば茂「では重々しい老成の人を搜しませう」「爾して其人は醫者で無くては了ませんよ」「餘り年が行き過ぎては吾々と一緒に亞弗利加を旅行する事が出來ず、肝腎の醫者殿が吾々より先に病氣になります」「左

樣サ、年齡は四十位、取つた所で四十五歲を越さぬ程の人ならば」「夫は何よりも難題です、丁度醫者ならば流行る眞盛りの年頃ですから、充分醫術を心得て居る人なら決して吾々と同行せず」「同行をするなら鍛醫者に極つて居ます」平洲は深き溜息を洩し「野蠻人に喰殺されたなら世界中の評判と爲り、新聞にも出れば事に由ては芝居にまで仕組まれますが、醫者の匙加減が間違つて、亞弗利加の內地で鍛醫者の匙に罹つて死んだと有つては、芝居の筋書にも成ません」と愚痴を滴すも、快濶なる巴里人の天眞なる可し。

良ありて茂林書學士は手を打ちて「有ります、有ります、夫人、屈強の醫者が有ります、アノ醫者が若し——」と云ひ掛け忽ち言葉を閉づるにぞ、夫人は怪しみ「若し何うしたらと云ふので す」「イヤ若し賭事が好きでさへ無ければ今頃は立派な流行醫者と爲つて居る所ですが、只最う賭事の勝負が好で、朝から晩まで倶樂部へのみ入り込んで居るのです、醫道には充分熟達して居ますけれど眞の賭事蕩樂と云ふ者で、勝負の爲なら何の樣な大膽な事柄でも試みます、何うでせう夫人、貴女が其の惡い癖を容めさへ成さらずば、其醫者を連て行きますが」「ハイ私は構ひま

せん、唯だ貴方が途中で其人に旅費まで捲上られる様な事が有つては――」「イヤ夫は大丈夫です、不思議にも私は其醫者に必ず勝つ秘傳を知つて居ますから」「では其醫者を鳥尾醫學士の代りに連て行くと致しませう」平洲は傍らより「醫者と云ふ役目は鳥尾の代理でも、候補者と云ふ權利は決して鳥尾の代理では有りますまいネ」「ヱ？」「イヤサ、其醫者を吾々同樣に、貴女の婚ミ云ふ候補者へ加へては成ませんよ」夫人は頰笑み「大丈夫です、私は勝負事は大嫌ひですから」是にて相談は略ぼ終りたれば、明夜又來り會す可きを約し、兩學士は一樣に分れを告げ、共々に夫人の家を立出しが、今まで夫人の前に在りてこそ、亞弗利加旅行を物の數と思はざれど、夫人の許を離れては、此の日論見の眞に命賭の仕事たること、必々と心に膺へ、二人とも首を垂れ、深く何事をか考へつゝ無言にて唯歩むのみ。

素より二人とも愚人に非ず、無學に非ず、笑談をこそ云へ亞弗利加内地の恐る可き事は深く知れるが上、今までの探險者が、誰は何所にて死し、彼は如何なる目に逢ひし等、悉く新聞其他の報道にて讀み知れるにぞ、心に其事どもを思ひ出し、銘に考ふる者なる可し。去れど二人は芽

蘭夫人の愛に醉ひ、夫人の爲とあらば一命を惜からじとまで思ひ詰むる同士なれば、夫等の恐ろしき考へも少しの間にて、頓て茂林は顏を上げ平洲の肩に手を置きて「オイ平洲」平「オ、茂林君、何だ」呼びつ答ふる有樣は、何やらん最ど重大の事柄を言出んとするに似たり。

九

平洲文學士の肩に手を當てし、茂林講學士は何事を言出るやと怪しまれしに、頓て最も眞面目なる口調にて「平洲君、僕は實に君を憎むよ」平洲も眞面目に「爾だらうとも、君と僕とは一緒に旅行するとは云ふ者の、實は戀爭ひの敵同士も同樣だから、僕も實に君を憎む」「イヤ僕は先夜夫人に此日論見を聞いた時、愈夫人と鬼域まで同行する勇氣の有るのは、僕一人だらうと實は心に喜んだのに、君が同行するとは實に意外だよ」「僕とても同行者は僕一人だらうと喜んで居た斯うなつて見れば唯だ君が亞弗利加の内地で熱病に罹り、僕より先に死るのを待つ許りだ、夫だから僕は醫者を連ぬのを贊成したのさ、醫者が有つては折角熱病で死掛た君の命を藥の力で

繋ぎ留る恐れが有るから僕とても醫者さへ無ければ、君が先に熱病で死ぬるだらうと思つたけれど、又思ひ直して見れば若し芽爾夫人が熱病に罹つた場合に如何とも仕方が無いから、夫で止むを得ず醫者を連て行く氣に成つた」「爾だ、夫だけは贊成だ」「何と牛洲君、物は相談だが、君は愈出發の間際に成つて急に病氣が起つたと云ひ此旅行を止して吳れぬか、爾すれば僕は戀の競爭者で無い他の道連を搜し、夫を夫人に勸めて君の代りに連て行くが、ヱ君、其代り君が止してさへ吳れゝば、僕は自分の身代を悉く君に報酬として讓り渡す」「ウム、隨分面白い相談だが、併し身代や金錢の報酬では承知は出來ぬ」何うやら見込の附き相な口振に茂林は力を得て「ヱ報酬が氣に入らぬなら、何の樣な報酬でもする、ヱ、君の條件を聞かせ給へ、僕は最う何の樣な條件にでも從ふから」「ナニ別に六かしい條件では無い、僕は病氣と云つて一ケ月出發を延すから、其間に君は芽爾夫人を後へ遺して出發したまへ、夫人を殘して置きさへすれば僕は病氣とでも又は厭に成たとでも何とでも口實を作つて此地に留まるから」茂林は擔がれしかと驚きて「何だ、夫人を殘して僕に獨りで立てと云ふのか」「爾サ僕の條件は夫だけだ、夫人を後へ殘す事が出來

ぬならば、僕は縱し本統の病氣に成つても同行する」「オヤ〳〵、君は本統の命知らずだ」「君こそ命知らずだよ」「君は其樣な事を云ふけれど、最に亞弗利加遠征の危險な事を知らぬだらう、有名な英國の利査孫でも獨逸の阿伯悅でも、母牙兒でも皆途中で或は死に、或は殺され其他鬼域へ這入つた人で一人でも生存へて歸つた人は無いのだゼ、君も同行するなら十が十まで死ぬる者と覺悟せねば可ないぜ餘り馬鹿々々しいぢや無いか、本統に病と稱して踏止るが得策だらう」と眞實親切らしく說き、相手を瞶病風に襲はれしめんとするに、平洲は全く瞶病風に襲はれしか暫くは無言にて、唯だ步むのみなりしが。頓て聲高く噴笑「眞に可笑い事が有る、君が僕を威す其政略は、僕が君に施さうと思つた政略と同じ事だ、僕も其通り亞弗利加で無慘の最期を遂げた人達の、憐な死樣を君に話して聞せる積で、此五六日幾冊の探險談を讀んだか知れぬ、お互に最う其樣な政略は止め、何うしても雙方ともに思ひ止まらぬ者として、玆で堅く約束を極めて置かう、では無いか」尤もなる言葉に茂林も我を折りて「何うも君の强情にも仕方が無い、では止むを得ず一緒に立つ事と仕やう」「併し夫にしても君と僕との間へ、戰爭條規も入業だが、競爭條規と

云ふ樣な規約を定めて置かねば行けぬ」「夫は爾だ」云ふ折しも但ある茶店の前に來りたれば、二人は其內に歩み入り、他人の洩聞く恐れ無き別室を借切りて、少しの茶菓を命じ堅く其中に閉籠れり。頓て平洲文學士は國際談判でも持出さんとする程の重々しき樣子にて「茂林君、到底二人とも夫人に隨て行くとすれば、途中で夫人の愛を己れ一身に引寄する爲め、暗に競爭するは必定だが、此競爭を敵同士の競爭にしやうか、或は友人同士の競爭に仕やうか、第一に此區別を定めて置かねば」茂林は冷然と落着きて「敵同士の競爭とは」「外でも無い、途中で互に謀事を廻らして一方の命を取るのサ、譬へば僕の行く先へ君が陷穽を掘て僕を其中へ陷らせて殺すとか、又は僕が野蠻人に賄賂を使ひ夫と無く君を殺させるとか、爾して自分一人の天下になるのサ」茂林は徹懼ともせず、相も變らず落着きて「夫は何より近道で有るけれど、餘り野蠻過ぎる」「では文明的の手段を取り、譬へば埃及邊へ着いた時に、二人で何か爭ひを初め、其結果として立派に決鬪するのサ、埃及ならば吾々の友人が居る事ゆゑ、公平に介添人を選む事が出來るし、爾して運を天に任せば、君か僕か一人は死に後は一人で夫人の愛を得る事が出來る、サア此相談を極めて置かう、何うだ贊成か、君」と眞劍に問掛たる之に對して茂林の返事は如何ん。

十

運を天に任せて決鬪し、一人は死し一人は殘り、其殘る一人にて夫人を專有する事にせんとは誠に手早き言分なれど、茂林は容易に返事する氣色も無く默然と考へたる末、徐ろに首を上げ「君の考へは夫だけか、詐りを以て殺し合ふか、將た文明的に公平の決鬪を以て殺し合ふか　此の二つより外には無いのか」と問返せり。「ウム、外には無い、君と僕と戀の敵と爲り、敵同士の積りで競爭する手段は是ばかりだ」「若し敵同士と云ふ積りを捨れば」「ウム、爾すれば親友と云ふ心を以て競爭するのサ」「其の仕方は」「外では無い、兩人とも謹直に夫人の言葉を守り、互に戀の敵と云ふ事を忘れ合い、少しも隱したり詐つたりする了簡無く、眞に紳士と云ふ心掛を以て睦まじく此旅行を終り、爾して夫人が何方を取るか、神妙に夫人の判斷に服するのサ」茂林は何の思案にも及ばず「無論僕は其方を取る、立派に紳士の面目を維持し、互に友人の親切を盡し合

つて、而して夫人の好嫌ひに任せるが此旅行の眼目だらうと思ふ」「では詰り、敵同士の競爭と云ふ手荒い手段は捨て、唯だ親友同士の旅行だネ」「爾だ」と穩かに答ふれども、決して決闘を恐るゝなどの臆病なる根性に在らぬ事は其顔色に明かなり。此返事を聞き平洲も寧ろ滿足の樣子にて何れも何方かと云へば、敵同士の方を捨て親友同士の方を取るが本望だ、依て玆で先づ此兩人は負けても勝つても生涯睦じくすると云ふ約束の爲め、改めて親友の義を結ばう」「至極賛成だ」と双方より一時に手を述べ、堅く握り合ひメ合ひしが、是よりして兩人は眞に兄弟も啻ならぬほど打解し樣子にて、最と笑しげに顔を見合せ、頓て平洲は「親友としても旅行中の事に付き、一應玆で極て置く可き事が有る」「爾とも其筒條は先づ僕から云つて見やう、多分君も同感だらう」「サア言ひ給へ僕が筆記する」と云ひ手帳を取出し、悉く筆記せし上、猶ほ兩人の和熟にて彼れ是れと訂正し愈定まりたるに、左の如き旨意なりき。

▲此度の旅行は、芽蘭夫人の意を承け、兩人中、孰れが最も感賞す可き心と行ひとを現はすやを見較ぶるに在るも同樣なれば唯だ善き行ひと、善き心とをのみ多く現はさんと競爭す可し、

夫人の心も全く玆に在る故、決して競爭を善心善行の外に及ぼす可からざる事。

▲旅行中、若し夫人の心が兩人中の一方に傾く時は、其者即ち勝利を得たる者なるを以て、競爭の目的は終りたる者と心得可き事。

▲兩人中の一方、自ら確に夫人の心を得たりと認むる時は、必ず其次第を對手に向ひ打明く可き事、決して其幸ひを自分の心中に推隱し相手をして何時までも空頼みを抱かしめ、又は無益の競爭に勞せしめざる事。

▲一方、既に夫人の心を得て其旨を相手に打明くれば、相手は念の爲め其の實否を見屆くることを得るとは雖も、眞に其の事實なるを見認めたる上に於て、猶ほ未練、又は嫉妬を起す可からず、男らしく斷念めて綺麗に其場を立去り、獨り本國に歸り、勝利者と夫人とをして邪魔物無しに、愛の旅行を續けしむ可き事。

▲途中にして兩者ともに確に夫人の愛を得しと云ふ手答無き時は、仲能く旅行を終へ、其上にて矢張り未練無く、嫉妬無く、綺麗に夫人の選り取りに服從す可き事。

最と快く是だけの約束を定め終りて、愈二人は分れ歸る事と爲り「では茂林君、烏尾醫學士の代りに引連れ行く醫者殿は、君が引受けて周旋するか」「勿論だ、今日より二日の中に其人を君にも夫人にも、引合せる」斯く云ひて茶亭を出で、氣も輕げに右左へ立ち分れしが、頓て茂林は我家の入り口に到り「ア、意外に夜が更けた、與助も最う寢て仕舞つたらう」と呟き、强く其の戸を打叩くに、宛も待設けたる如く、早速内より戸を開けて迎ふるは、年卅五六歳なる與助と云へる下僕なり。茂林は驚きて「未だ眠りもせずに居たのか」與「ハイ貴方樣のお歸りを、今か〳〵と待て居ました」「何で待つのだ」與助は少しの澱みも無く「何うか私も、亞弗利加へお供をさせて戴き度いと思ひまして」茂林は又驚き「己の亞弗利加へ行く事が何うして分つた」「此の四五日、貴方樣が亞弗利加の地理書や、旅行記を切りにお調べなさる故、何事かと思つて居ますと、昨日今日は最う逢ふ人毎に、お前の主人は何時亞弗利加へ出發するかなど聞かれます、貴方の旅行は世間で皆知つて居ます」「ア、一寸と倶樂部で話したら、早世間へ噂が立つたのか、併し與助、貴樣の樣な臆病者で――」「イヱ、臆病では有りません、先年貴方に雇はれる前、一

度亞弗利加へ旅行して三年も其地に居ましたから、地理も風俗も能く知つて居ます、ハイ私をお連なされば何れほど途中で便利だかも知れません」と熱心に願ふ樣、容易に思ひ止まる可くも見ゑず。

十一

從者、與助が曾て亞弗利加國に旅行せし事ありとは初て聞く所なれど、兎に角其土地の事に經驗ある人を下僕として連行くは、定めし萬事に便利なる可く、殊に與助は何彼に奇用なる男にして主人の髮を理し、髯を剃り、又は衣類の綻びなど縫ふには妙を得たれば、之を從へ行くに於ては、今までの遠征者が途中にて髯逢々と生茂り、頭髮も伸び紊れて、見る影も無く窶れ果ると事替り、我一行だけは何處までも巴里人の意氣な姿を落さゞる事を得んと、流石は夫人と共に行く旅行だけに、少しの見榮にまで心を配り、茂林は直に連て行く氣と爲り「併し貴樣は亞弗利加へ行くとすれば、月給を增して呉れと云ふだらう」「イヤ夫には及びません、ハイ月給は減されて

も好いのです」「夫ほど熱心なら同行者に相談して連て行つても遣らうが！」「何うか爾う願ひます、其代り前以てお願ひが――」と云ひ掛けて少し淀み「ハイお願ひが三ケ條あります」「ドレ云つて見ろ」「私には一人の妹が有りまして、私が旅先で死でもすれば困りますゆゑ、其妹の爲に私に生命保險を附け、二年分の保險料を出發の節に拂ひ込で戴き度う御座ゐます、尤も亞弗利加へ行けば金などは餘り要ませんから、其保險料は月々の給金を以て差引いて頂きます、是が一ケ條です成る程、芽蘭夫人が亞弗利加へ出發するには、先づ遺族の爲めに其身へ保險を附け置く可しと云ひたるが、與助は既に經驗の有る丈に斯る事にまで氣附きしかと、茂林は夙に感心し「シテ其次の願ひと云ふは」「ハイ、彼地へ着き次第、私は水色の寬かな長い外被を買調へますから、外へ出る時、夫を被て行く事を見許して戴き度いのです」最と異樣なる願ひなれど「夫は何より易い事だが、併し先ア何だつて水色の外被などを」「ハイ彼地では多く僧侶が其樣な外被を着るのです、夫を着て居れば土人が尊ひます、私は最う下僕として頭を下げて許り居るのが辛いから、切ては亞弗利加でゞも人に頭を下させて見度いのです」茂林は思はず笑ひを催し、

「好し、夫から第三の願ひとは」「私が名をマホメツトと替ますから是もお許しを願ひ度いのです、マホメツトとは回々教の信徒が非常に尊敬する名前ですから」と云ふ。茂林は少し怪しみ「何だ回々教とは、貴樣は全體亞弗利加の何處を指すのだ」「ハイ主人里地方です、私が先年迄留して居たのが、其の地方ですから」茂林は苦々しく「馬鹿を云ふな主人里は、此國の紳士達が冬になれば避寒に行く土地で、此國も同じ事だ、已遂の行くのは回々教も信徒も無い、人を食ふ野蠻人ばかり居る所だ」「イヱ夫でも構ひません、亞弗利加の內地へ行くには何うせ、回々教徒の澤山居る所を通りますから私は滿足です、象や獅子などの居る土地を、是非一度は見度いのです」「爾か、夫なら三ケ條の願ひを聞屆けて、成る可く同行する樣に計らつて遣る、貴樣は本統に罪の無い男だ」「ハイ象牙の落て居る土地へ行かれるなら、慾も罪も有りません」と云ふは、早や象牙など拾ひ返りて、給金に幾倍する大金を儲んとの心なるにや。茂林は陽と迄も心附かず「イヤ今夜は大層更けた、已は明朝四時に家を出て行かねばならぬ所が有るから、心ず四時より十五分前に起して呉れ」與助は亞弗利加へ行かるゝ其見込の嬉しさに、乘氣と爲り「旦那、私

は其刻限まで寐ずに居ます、ハイ一分も間違へずにお起し申しますから、サア早速お寐み成さい」。

茂林はグツスリ眠り、四時十五分前に與助に起され、直ちに顔を洗ひ着物を更めなどし。頓て戸外へ立出るに最廣き巴里の街に人通り殆ど絶え、冷々と秋風の額を吹く心持、何とも譬へ様の無きほど爽かなれば「アヽ是なら目的を達する事必定だ」と呟き、獨り笑みつゝ歩み行く其先を孰れぞと問ふに、昨夜芽蘭夫人に約せし如く、鳥尾醫學士の代りと爲る可き醫師を説伏せる爲にして、其醫師が日頃賭勝負に熱心なるより、今も猶ほ徹夜して勝負を爭ひ居るならんと見、乃ち其の倶樂部を指せるなり。

間もなく思ふ場所に着き、歩み入りて様子を伺ふに寂然と靜まりたる廣き建物の中に、唯だ歌牌宝のみ雫ゆきまでに燈火の輝けるにぞ、早速其中に入れば當の敵とも稱す可き寺森と云へる醫師、宵よりの失敗に燥り立る有様にて、殆ど血眼と爲りて勝負を爭ひ居れり。茂林は心に謀む所あれば僕をも入れて呉れ給へ」と其車座の仲に入るに、勝負の場所は誠に不思議な者にして、日

頃理學の外は何事をも信ぜずと云ふ立派な學者達までも、「運」と云へる者を信じ、少しの事にまで延喜を附け、新手の來るを喜ぶこと限り無し。負たる人は頭數の變ずるが爲に「運」も我方に向き來る可しなど思ひ、勝たる人は、人の殖ゑしを口實に切上げて歸らんと喜ぶなり。中にも寺森醫師は茂林の顔を見、ホツと息して、賭表の塵に黒く汚れし手の掌にて、前額の肝汗を拭ひ〳〵「サア茂林君、充分に張つて呉れ給へ、僕が先刻から堂親で、此一戰限り身代限りをする所だ、乘ろか反るかの別れ際だ」と最と恐ろしき事を云ふは、殆ど人の命を預かれる醫師ぞとは思はれぬ許りなり。

十二

此夜一同の爭へる勝負は「バツカラー」と云ひ堂親より歌牌を配り九點を得し者を勝とする法にして、素より勝つと負るとは其時の運に在りとは云へ、外の勝則事とは稍異り、運のみに任す可からず。大に巧拙の有るが上に札の順序など記憶するを要し、多く記憶する者は自然と勝利を得

る者なれば、勝負事の中にて此戯のみは一種の技藝と見做され、外の賭勝負は禁じたる、高等の倶樂部と雖も此の戯だけは大目に見るを常とせり。

茂林は家にて一眠りせし後と云ひ、殊には朝風に吹かれて腦髄も爽かなる折からとて、記憶の力も充分なれば自ら勝利を得ること疑ひ無しと思ひ、先づ落着きて故と些細の高を張りつゝ、札の順序に注意し、又一同の樣子に氣を配るに、孰れも宵よりの激戰と、引續く寢不足に、逆上せ返りて少しの記憶も無く、札の順などに頓着無く唯だ運をのみ頼み、思ふ通りに行かざるを悔しがりて、益々燥る有樣とし、中にも目指す寺森醫師は、最も其の甚だしき者なれば茂林は早や目的の達したる如くに思ひ、追々札の順序など分るを待ち二三回引續きて人々の驚くほど多く賭けしに、見込みは違はず直ちに寺森醫師の堂親を潰したり。

依て自ら堂親と爲り、他の人には頓着せず唯だ寺森にのみ對して技を揮ふに、落着たると取逆上たるとの勝負なれば、勝敗の數既に明かにして、爭ふ度に寺森の敗北と爲らぬは莫し。愈夜の明放るゝに及びて寺森の負高は既に五万法と聞えたるが、負る丈け益々深入りするが此道の常

なれば、寺森は愈々夢中と爲り、外の人の追々歸り去るにも構はず、一人腰を据ゑて堂親を引留め、果は茂林と唯二人差向ひと爲り、寺森の負け八万法と云ふ恐ろしき高に至りて、相手無き爲め止むを得ず終りを告げたり。

斯る勝負は、一番毎に現金を遣取するが昔よりの仕來りなれど、現金にては何と無う賤しげに見ゆるが爲め、近來上等の倶樂部にては其會計局より切手を渡し、其切手にて遣取し、勝たる人は其切手を會計局に持行きて正金と引替へ、負けたる人は十二時間に正金を會計に拂込む可く若し其時間に拂込み得ざる時は、其旨を室内に掲示せられ、詐欺取財者よりも猶ほ恥かしき程に見做され、再び世間へ顔向けの出來ぬ不名譽の身と爲りて、除名せらるゝ定めにして、其嚴重なること他人の想像し得ざる程なりとか。

去れば茂林は兩の衣嚢に滿々たる切手を持ち、其席を切上げしも猶ほ會計の出勤せぬ爲め正金と引替る事も出來ず、又實際に引替る氣も有るにあらねば、其切符を持ちし儘、寺森醫師に分れて我宿へは歸りしが、是より數時間を經、午後の二時過る頃に及び、尋ね來りて面會を求むる人

あり、誰ぞと聞けば寺森醫師なり。

茂林は斯く有る可しと、心待に待居たる事なれば早速我が室へ通すに、寺森醫師は既に湯沐を爲し容をも改めし事なれば、今朝ほどまで血眼同樣にて餓鬼の如く爭ひ居し有樣とは異なり、全く紳士の風には見ゆるも、猶ほ微睡みもせで金策に奔走し、而も其事の少しも運ばざる者と見え、氣饑ゑ心疲れて喪家の犬の如く淋げなる樣、何處とも無く現はれて憐げなり。茂林は故と假忘けて、何の用事なるや察し得ざる風を粧ふに、寺森醫師は最と極り惡げに、昨夜失敗に心眩み、自分の身代に堪切ぬ大負を爲せし面目無さより、最早金策の道も塞がりたれば今より數時間の後に倶樂部へ我が名前を揭示さる可く、爾なれば再び勝負を試みる場所も無く、愈々以て此の借金を返濟する道も絶ゆれば、何とぞ昨夜來の負高を借金の證文と爲し、會計局の切符を我れに返して呉れとの旨を說出せり。是れ素より思ふ壺なれど茂林は容易に承諾の色を見せず「成ほど僕に負た丈の金を借金の證文にして差入るゝと云ふは分つて居るが、君は今金策の道も塞がつたと云つたじや無いか、金策の道の無い人から證文を取つたとて、返して貰ふ當は無い、其證文は

詰り反古も同樣だ」と云捨すに、寺森醫師は熱心に「イヤ返す當は充分有るよ」「何うして」「倶樂部へ其切符を返しさへすれば、又借出して勝負を試みる事が出來る、昨夜は逆上せて負たけれど、アノ勝負は外の事と違ひ、昨夜の君の樣に沈着いて遣れば、今夜は屹度僕の方から、君へ貸し込む事に成る」流石は凝固りの勝負師だけに、借金返濟の方法にまで、矢張り勝負事を以て口實と爲さんとせり。「夫は不可ぬ、僕が此の土地に居るなら兎に角、先夜も話した通り近々亞弗利加へ立つのだから、再び君と勝負をする場合が無い」此の一語には寺森も困じ果て、暫し考ふるのみなりしが頓て又「僕も亞弗利加まで從行しても好い、途中で君が時々勝負を仕て呉れゝば、幾月と立たぬ中に此借は必ず返す、エ君、何うか夫を抵當に、借金の證文を取り切符を返して呉れ給へ、爾して呉れねば、僕は再び世に立つ事が出來ぬ」「夫れを抵當にとて何も「夫れ」と指すに可き抵當は無いぢや無いか」「イヤ有る、君が當地に留まるなら昨夜の倶樂部で君と勝負をして返し、君が旅へ出れば僕も同行して時々勝負をするから、其勝を抵當にするのサ」とは隨分異樣なる抵當なれど茂林は「本統に僕と亞弗利加內地まで同行するかネ」と問返せり。

十三

實に寺森醫師が今の身は、唯だ何處までも茂林に從ひ行き、勝負を以て昨夜の負債を返す外に、一寸の逃道も無き者なり。若し茂林が昨夜の切符を返さずと云ひ、倶樂部の會計に行きて正金を受取らば、寺森醫師は全く浮ぶ瀬の無き人と爲り、紳士の仲間より除名せられて終るのみなり。

去れば茂林が「君全く僕と共に亞弗利加の內地まで入り込むか」との問に對し、寺森醫師は一轉瞬の猶豫もせず「君さへ承知なら何處までも入り込むよ。唯だ每日一度づゝ僕と勝負を仕て呉れゝばと云へり。是れ實に怪しき迄に輕佻みの擧動に似たれど、世に巴里の人ほど氣も輕く心も輕く、斯る事柄に果斷なるは莫し。殊に寺森醫師は巴里人中にも奇人の風ある人なれば、前後の始末にも頓着せず、一意に斯る決心を起せしなり。茂林は又兼て寺森醫師の學力を敬ひ、斯る一廉の醫學者をして、勝負事の爲に心を奪はれ本業を顧みぬ迄に耽り溺れしむること、此上無く惜

む可き事に思ふ者なれば、一つは此人の後々の爲を計る親切にて、今此人を遠征に連行かば途中にて自ら氣も鬱り、迷ひの夢覺めて、歸國の後は必ず立派なる國手と爲る可しと見、双方の爲めを思へるなり。去れば茂林は醫師の此の返事を堅く押へ、心の變らぬうちに早く約束を取極めんと、咄嗟の間に話を進め、左の如き最も異樣なる約束を結びたり。

第一條、寺森醫師は歌牌の失敗にて茂林書學士に拂ふ可き九萬法の借金ある事を茲に白認す。

第二條、茂林書學士は其の抵に取りて有る倶樂部會計局の切符を返し、他人に向ひては寺森醫師より右九萬法の辨償を滯り無く受けたる如く風聽すべし。

第三條、寺森醫師は其恩に謝せん爲め、世界の何の地へなりとも今より二年の間、茂林書學士に同行し、自個の醫學上の力を以て及ぶ丈け茂林其他の同行者に親切を盡すべし。

第四條、旅行中は兩人にて（病氣危篤の場合をのみ除く）每日一回必ず賭勝負を行ふべき事。

第五條、一日の勝負に負けたる者が、次の日は隨意に其勝負事の種類を選定する事、但し勝負事は必ずしも歌牌に限らず、如何なる賭事にても自個の必ず勝つと思ふ者を選ぶ可し、相手は

決して故障するを得ず。

第六條、勝敗の金高は決して一日五百法より越す可からず。

第七條、勝負の時間も前日に負けたる人が指定する者にして、一方は假令ひ夜の夜中たりとも目を覺して其の召喚に應ぜざる可からず。

第八條、勝負の場所も矢張り前回に負けたる人が定むる者にして、船中、車中、山の上、沙漠の中は勿論、凡そ如何なる場所たりとも又如何なる天氣の日なりとも一方は決して故障を云ふ可からず。

第九條、巴里を出發の日より滿二ケ年を經、即ち第七百三十一日目に双方の總勘定を爲すべし。其時に猶ほ茂林書學士が勝越しと分らば、寺森醫師は引續き茂林と同行し此の勝負の契約を繼續す可く、若又寺森醫師が勝越しと分らば又勝越の金額だけ、巳里にて受取る可き爲替手形と爲し、茂林書學士より寺森醫師に拂渡し、寺森醫師は其日限り同行を辭し巴里へ立歸ると勝手たるべし。

此奇妙なる契約は即座に兩人の間に批准交換濟とは爲りたれば、此翌日茂林書學士は寺森醫師を引連れて「是れが約束の同行醫なり」とて芽蘭夫人の許に至るに、光來此の醫師は勝負事に溺れし時こそ、前後も忘れ夢中とも爲れ、一たび其心の鎭まる時は、最も溫厚にして萬事に氣も附き人の心を能く察して、人を慰め、又人に親しまるゝ一廉の紳士なれば、芽蘭夫人も思ひしより好き人を得たりと喜び、又一方の平洲文學士も寺森醫師とは兼々知合の間なれば「成るほど君が同行するのか」と喜び是にて全く四人の同行者は定まりたり。

次には供人とする從者を召連ずばとの評議にて、茂林は我が下僕與助の事を持出し彼れの三ケ條の望みをも說明すに、一同ともに、去る無慾の男なれば最も適當なる可しとて連行くに定めたるが、猶ほ一人、芽蘭夫人の侍婢ミして、朝夕夫人の身の廻りを世話する者無くては叶はずと云ふに決したるも、夫人の從者に男の僕を引き連る譯にも行かず、女にして亞弗利加まで隨行する程の勇氣ある者は容易に見出し難からんとて、是には殆ど困じたるも、茲に平洲や茂林の知人にて本目紳士と云へる交際家あり。

此人は曾て倶樂部の長にも選擧せられ、今も猶ほ同じ倶樂部の會員にして、萬事の世話を引受るを樂しみとし、大抵の事、此人に賴めば殆ど辦ぜぬは莫き程なれば、平洲文學士の發議にて兎に角本日紳士に賴みて見んと云ふに決し、早速平洲より言込みたるに、不思議や三日と經ぬうちに、男子も及ばぬほどの女旅行家現はれ來れり。

十四

男子も及ばぬ女旅行家とは誰ぞ。是なん曾て亞弗利加の内地にて野蠻人の手に殺され、世界の人を泣かしめたる、阿蘭陀の女旅行家タイネ嬢の侍婢として嬢と共に鬼域を旅行し、久しく蠻族の酋長に捕はれ居たる英國の帆浦綠女なり。此女は身分も低く敎育とても充分ならず、心は世間一般の下女と同樣なれども唯だ身體の堅固にして、殊に其足の達者なるは男子にも珍しく、身の長六尺に垂々として而も目力は纔百十斤に過ぎずと云へば、女としては此上も無く背高く、此上も無く痩せたる人なる可し。曾てタイネ嬢が數多の賞を懸けて亞弗利加行の侍婢を募りし時、如

何なる蠻地へも入り込んと云ひ出しは、唯此の帆浦女のみにして其後嬢と共に幾萬里を跋涉せしに、籠に乘らず、駱駝に乘らず、馬と共に數十哩を步みて其足疲るゝと云ふことを知らず、嬢より世界第一の健脚家との褒詞を得たりと云ふ。

是だけは誰も知る事實にして、其のち帆浦女は英國に返り、然る可き人に緣附ん積りなりしも孰れも此女の餘り武骨なるに恐れ、我れ所夫たらんと望む人無ければ、無事に苦しみて此頃佛國に來り嫁て亞弗利加出立の以前に多少の世話を受けし、本目紳士の許などへ出入りし居たるとの事なり。茅嶺夫人は此の履歷を聞き左まで適當の侍婢とも思はざれど、外に然る可き女無ければ、先づ目見得の積りにて呼迎へしに成るほど噂に勝る頑丈なる女子にして、色の黑きこと歐羅巴の人とは思はれず、傍らに居合せし平洲と茂林は可笑さを堪へ得ざる如く、立つて次の間に退きしが平洲は書棚の奥より古き新聞紙の綴込を探し出し、良暫く繰返せし上、其の電報欄を茂林に示し「見給へ是が帆浦女とタイネ嬢に關する記事だ」と云ふ、見れば數年前亞國發の電報にして「トウレツグの蠻族タイネ嬢を襲ひ狼籍して嬢を殺せしが、嬢に附添ひし黑奴の女中一名は生

攜られて、酋長の許へ連行かれたり」云々とあり。茂林の讀終るを待ち平洲は「茲に黒奴の女中と記して有るのが、アノ帆浦嬢だぜ後に間違が分つたのだ」「成るほど爾う間違へらるゝも無理は無い」とて二人は抱腹するのみなりしが、其中に目見得も濟みたれば再び元の席に歸り、更めて挨拶などするに帆浦女は此旅行を何よりも愉快と思へる如く、曾て旅行せし經驗を物語るに、宛も其身がタイネ嬢を引連て行きし如くに話し、嬢に雇はれし身なりしを忘れたるに似たり。去れど其經驗は一同の心得ともなるが多く、殊に帆浦女の心掛は至極萬事に行き届き、多少は容子を作る癖あれども胸の底に悪氣なく、氣高きこと貴夫人の如く、猛きこと獅子の如く、愚なること小兒の如くなれば、先づ雇入るゝ事に決したり。

是より一同唯だ出發の用意をのみ急ぎしが、芽蘭夫人は此旅行を新聞紙などに風聽せらるゝを好まず、成る可く人目に立たぬ樣に注意せしも、夫人は父の時代より英國の地學協會に深き關係あれば、其協會だけへは出立の旨を通知せしに、會長ロデリック氏は協會例會の席にて特に芽蘭夫人を送る演說を爲し、夫人の亡夫芽蘭男爵が數年前に亞弗利加内地に入り、死せし場所さへも

定かならずに歸らぬ人と爲りし事より、夫人が英國有名なる地學者の息女なる事、此旅行の無事に終るは英國地學協會の切に祈る所なる旨等を述たれば、佛國の地學雜誌も亦之に應じ、詳しく此旅行の事を述べ、中にマホメツトと云ふ亞國人まで加はれる如くに記したり。後にて糺せばマホメツトの一事だけは、下僕與助が自ら改名の嬉しさに投書せし者なりと分れり。與助の振舞は總て是に類する事のみ多く、或は駱駝と親昵に成らされば不都合なりとて、動物園に行き番人の機嫌を取りて駱駝の柵内に入るを喜び、夜は硝燈を幾個と無く燈して空を開き、羽虫の集まり來るを見て、亞國内地に野宿して虫に襲はるゝ下稽古なりなど云ひ、幾度と無く茂林に叱られたるも其中に追々用意も運び、從つて此旅行の噂は日々に喧しくなり行くより、所々の知人より、送別の宴を開かんなど言込み來るもの多く、大抵は斷りたれど、唯だ帆浦女を紹介したる本目紳士の發起せし送別會は、倶樂部員一同の贊成を得しとの事にて、平洲、茂林、寺森ともに之か斷ること能はず、夫人の許しを得て臨席せしに本目紳士は席上にて非凡なる演說を爲し、其身も兼て旅行を好み、世界の旅行家とは多少の交りを結ばぬは無く、既に帆浦女を紹介せしなども其交

りの結果とし殊に亞國の旅行に至りては、幾年來自ら企てんと思ふ所なれど、唯だ俗事の爲に果し得ず、若し折を得ば遠からず諸君の後を追ひ行かんも圖られねば、諸君忽らず其途中より吾に通信せられよと云ひ、猶ほ必要なる樣々の品物を餞別として贈りたれば、茂林も半洲も必ず便りの有る度に委細の事を通信す可しと約し、深く其厚意を謝して分れを告げたり。是にて愈々一同が芽蘭夫人と共に、歸る期さへ定まらぬ、遠征萬里の旅には上る事となりぬ。

十五

芽蘭夫人の一行が亞國に向け巴里を出發せしは、實に千八百七十二年十月十四日なりと、今も猶ほ樣々の記錄に存せり。

此日一同は馬耳塞行の急行列車には乘りたるが停車場まで見送りたる人、幾百と云ふ數を知らず、中に名殘を惜むこと最も深く見えたるは、此一行に加はらんとして加はり得ざりし、彼の鳥尾醫學士なり。醫學士は一人の老母あるが爲め、幷を殘して他國に出ること能はずと云ひたる、

其老母の手を引き停車場に來り、一同の見送り人は改札所にて踏止りたるも、鳥尾醫學士だけは唯だ夢中の有樣にて老たる母御を引ずり、改札所を過ぎて汽車の窓際まで進みたり。老たる母御は、涙ながらに芽蘭夫人に向ひ「此子もお供をする筈ですが、唯だ貴女樣が母の許に留まるが好からうと云つて下さつた爲に此通り踏止まる事と爲りました、お蔭さまで此母が助かります、此御恩は死んでも忘れません」とて眞に有難きに堪へ得ざる如く夫人の手を取りて泣けり。夫人は殆ど貰ひ泣きに、眼一ぱい涙を湛へたれど返事する力も無く、又此母御と鳥尾醫學士の渦れたる顏を見る勇氣も無く、唯だ色を靑くして、胸に充ち滿つる一切の情緖を推隱さんと、靜かに振放して汽車の中に隱れ入りたり。夫人が汽車に入ると共に、一聲の笛の音、合圖を傳へ汽車は徐ろに輾り初めぬ。鳥尾醫學士は立も得去らぬ有樣にて、唯だ汽車の行く方を打目守るのみなりしが、汽車の形の見えずなる頃漸く母御に促され泥然として立去れば、改札所の垣に添ひ、茲にも猶立殘りて、見えぬ汽車を見送れる一紳士あり。鳥尾醫學士の姿を認めて「オ、鳥尾君か」實に此紳士は一同の爲めに特に送別會まで開き

し彼の本目紳士なり。本目は遠征の羨ましさに堪へ得ぬ如く最と深く嘆息し「本統に殘念だよ、一同と共に亞國内地へ行き得ぬのは」と云ひ忽ち醫學士の心中を察せし如く「ナニ君も心配するには及ばぬよ、一同から時々僕の許へ通信を寄越す筈だから一緒に其通信を見て心を慰めやう」烏尾は熱心に「ア、何うか通信の來る度に僕にも見せて呉れ給へ」と云ひ縷に絶望の一端を醫し得たるが、先に引いたる母の手に、今は引れながら本目紳士と双方に分れて去れり。

是より芽蘭夫人の一行は如何にしたるや、埃及に着き、用意を調へ、愈鬼域へ入込むまでは何の異狀も有る筈無し、一同定めし無事なる可しと。

茲に一行中の異り者、彼の帆浦女が埃及より、英國の親友某女に寄せたる手紙あり。最と管々しき文言なれども一行の樣子より帆浦女の氣質と人柄とをも知るに足れば、其の本文を寫したる上にて記事を續けん。

「一筆申上げ候、此の手紙は埃及の都カイロ府より差出し候へども、カイロ府の事は先年私がタイネ嬢と隨行せし時の手紙に細々申し上げたれば玆に記さず、兎に角亞國の旅はカアツーム府を經て眞の蠻地に入るまで旅行らしく、遠征らしきこと少しも之無く候、此度の旅行は誠に突然にて、充分の暇も告げざりしかど、私の日頃の氣質と御許し被下度く候、世には情に引かさるゝ人も有り、慾に引さるゝ人も有れど、私はタイネ嬢より世界第一の健脚家と云はれし丈け情にも慾にも引されず、唯だ足に引され候、先年旅行を終りて以來、僅百里の路すら歩まれざる爲め、足の不平甚だしく、動ともすれば足だけ身體を捨置きて、何れへか歩み去るかと窃に心配の折から、過日本目紳士より再び亞國旅行の隨行を勸められしに付、篤と思案の定まらぬうち、足だけは早や再び大沙漠を踏むことかと嬉しがり、武者震ひして、此身體を連れ行き候、此度の旅行は先年よりも深入する樣子故、定めて地質學者、本草學者なぞ云ふ、專門家の一行と存候處、隊長は芽蘭夫人とてタイネ嬢にも優る美人にて候、同行者も若き面白き人三人にて、其中の畫學士は私を見るが否や直ちに鉛筆を取出し姿を略畫に寫し取り候、鉛筆の略畫は顏色の愛らしき所を寫し得ぬ故、私は大嫌ひにて、殊に私の姿は形よりも靈に描けぬ所に、他人に勝りて愛らしき所あるは、先年トーレッグ族に捕はれし時も既に其酋長が

爾う申され候、物云ふ時の口許や、笑ふ時の目附などは、尤も私の綺倆を定むる廉なるに、鉛筆畫は其の微妙なる廉を失ひ候故苦情を云ひ候處、畫學士は此旅行の終り次第、顏色まで生寫しの油繪に描き遣ると申され私も漸く安心致し候、次なる文學士は兼て私の高名を聞及ぶこて、私がトーレッグ族の酋長に捕はれたる時の事を第一に聞れ候、素より酋長と私の間に在りし事は大事の秘密にて、貴女より外に話せし事無き位なれば他人に言ふ可き次第ならず、私は貴夫人の如く威儀を正してキツと斷わり申候、今一人醫學者も亞國內地で病氣にでも逢ふ節は、何分宜しく看病を賴むと申され候、總て斯く學者らしからぬ學者にて、前の旅行に同行せし專門家達さは一方ならぬ相違ゆゑ、實は少々失望致し候處、愈意を結ぶに連れ三人とも飛だ面白き道連と分り候、唯だ少し許り氣遣はしきは、此人達が途中にて私へ對し愛の情を起し、互ひに嫉妬の爭ひなど初めねば好いがと、夫のみが心配に候、既に畫學士の私を見る目附などは、私の如き世故に長けたる夫人には直ちに夫と見て取られ候、併し是も穩かならぬ程の熱心と爲り候場合には、私必ず貴夫人同樣の威儀を以て嬌なめ候積り

に付き御心配には及ばず候、最初私は三學士ともに深く芽蘭夫人に心ある者かと思ひしに、夫人と三學士の交りは全く男子同士も同樣にて三人の目指す所、其の實私に在ること分り候、兎に角夫人は私の雇ひ主ゆゑ若し夫人と私とにて、此の三學士を競爭する樣に思はれては甚だ心苦しからんと、心配せしも夫人と三學士の間男女らしからぬには安心致し候、此の手紙を認める間も三學士が私の姿見えぬとて、宛も喪心せし樣に茫やりとし、帆浦女は何處へ行つたなど云ふ聲の聞え候は、誠に憐む可き人々と氣の毒に存候」

十六

帆浦女の手紙の續き。

「三學士が一樣に私を戀慕ひ候は滿更ら憎くも之無く候へども、私は唯だ孰れにも嫉妬の念を起させぬ樣にと、今の處にては公平に遇らひ居り候、夫は扨置き、一行が巴里を立しは十四日の夕汽車にして、間も無く夜に入り、一同汽車の中にて眠る用意を致し、私も成べく寐

姿を美しくせんと工風致し候へごも、家の中と違ひ両の脚が邪魔と爲り、借切少人数の室とは云へ、横へ出せば横に居る人に門へ、前へ延せば前に居る芽爾夫人の床下へ突張る有様故、身を優やかに引延すと出來難く、已を得ず折縮めて辛くも仕末致し候、唯だ早く廣々せし海に出で、甲板の上を自由自在に歩まれる時が來ればこ夫のみを待兼候、斯る窮屈なる思ひなれば充分に眠りも得ず、輾る車輪の音など數へ候うち、室内に異様の物音聞えしゆえ、眠りし振にて氣を附しに、私と反對の最も遠き隅に寢たる醫學者「寺森」と申すが、私と同じく猶ほ眠り得で徐々と起來る様子に御座候、他の人々は皆鼻息の聲のみ高ければ此人定めし、何人も知らぬと思ひ私の傍に來り、窃に寢顔の美しさを眺めん爲なる可しと私は稍や腹立しく、其様な事をすれば思ひ知らせて臭れんと息を凝して控居候處、果して私の前には來りしも、寢顔を見ずに伸上りて、棚の上なる小革鞄を取卸し候、扨は悟られしこ氣が附きて極り悪さに、斯くは紛らすにやと私は推量せしに、爾は無くて其の小革鞄を持ちしまゝ元の席に還り其身と並びて熟く睡れる、讀學士茂林と申すを邪慳に揺り起し候、益々異様なる振舞ゆえ、

私は愈々氣を附て伺ふに、揺起されし茂林は痛く憤り「何だつて人の眠りを妨げる」こ答むれば「ナニ巴里で結んだ契約の第四條に由り勝負をするのだ、病氣危篤の場合を除き、毎日必ず一回こ定めて有る、同じ第五條に由り前回の失敗者が一方を召喚するのだ君は僕の召喚を拒む權利は無い」「ダツて夜の夜中だが」「ダカラ第七條に夜の夜中たりとも目を覺して、召喚に應ず可しと定めて有る」「でも此様な汽車の中で何だつて先ア」「イヤ第八條に船中、車中、山の上、沙漠の中は勿論とある」と云ひ猶ほ無理無體に讀學士を揺ぶりて目を覺させ候、讀學士は恨めしげに「君は本氣で其様な事を云ふのか」「勿論サ、是が爲に此旅行を同行するのだ、僕は最う先日から早く一勝負試み度いと夫ばかりを待つて居た」「でも勝負の道具が無い」「イヤ其積りで用意は此通りだ」とて、醫師は前の小革鞄より歌牌を取出し、目の前へ差附しに、讀學士も我を折て勝負を初め候、私は何の事か合點行かず、其中に漸く眠りたれば翌朝に至り、讀學士に尋ね候處、醫師は兼て斯る勝負事が大好にて且は讀學士に負越こ爲りて居る爲め、旅行中毎日一回づゝ勝負する約束を定めて旅に上りしとの事に候、之を聞き私は少々醫師殿を見

下げ候、私や芽爾夫人の傍に居れば、時間の立つを忘れ勝負事などは遠慮す可きに、其の遠慮さへ無きは少々失禮に當たると存ぜられ候」以下略す。

斯て一同は翌日の午前十一時過ぎに馬耳塞に着き、其翌日埃及行の汽車にとは乘込みしが、其中にて彼の與助は全く己れの名を捨てマホメツト、ガデルと云ふ札を附けたり。ガデルとは埃及邊にて最も普通の名前なりとぞ。又帆浦女は廣き海上に出たるを何よりも喜ばしと思ふ如く、暇も無く甲板の上を前後に歩み、他の上等船客より、頭の上にて爾う足音を立られては、苦情を云はるゝも頓着無く、高甲板は船客共有の運動場なりと、言張て足を休めず。之と引替へ三學士は、孰れも度々地中海の船に乘りし身にて其景色にも飽き寧ろ退屈の想ひに堪へねば、三人ともに帆浦女に對し、深く心ある如き素振を示さんと言合せ、平洲は帆浦女に近づく度に及ぶ丈け世辭を云ひ、茂林は異樣なる目附を爲し、寺森は是れ聞けがしに戀人の如き嘆息を發し、三人其技を競ひつゝ、帆浦女が心窃に喜びて自ら益々美人の積りと爲る樣を見、蔭に廻りて互に突衝き合て笑ふのを慰みと爲せしは、罪深き惡戯な

れど、旅の徒然と云ひ、又帆浦女の氣質、動もすれば斯る玩そびと爲る生れ附なれば、詮方なしと云ふ可きか。中にも平洲は、猶ほ是だけに飽足らず、路程計とて路里を測る機械を窃に帆浦女の背後に附け、夜に入りて三人に示せしに、彼の女が一日に甲板の上を歩みしこと、四十哩を示したれば、流石は世界一の健脚家なりとて、三人は膽を潰して笑ひ合ひたり。

十七

船は佛國馬耳塞の港を帆してより、四日目に伊國の寧府灣へ着きたるが、音に聞えし絶景の所なれば、船中の徒然に飽々したる乘客達、孰れも少しの碇泊時間を幸ひ先を爭ひて上陸せんとする。其中にも茂林は畵工だけに景色を寫す道具など用意し、宛も籠の鳥の籠より外に出さるゝ時の如く、喜び勇みて船より立出んとするに、兼て斯く有る可しと待設けたる寺森醫師は、靜かに茂林の肩に手を置き「オツト待給へ茂林君、昨日は僕が負けたから、是から復讐に取掛る、サア來給へ」と引立てれば、茂林は當惑千番の顏附にて「ナニモ君、爾う意地惡く、今で無くても好

いぢや無いか」寺森は少しも動かず「イヤ今に限る、君が自烈たく思ふ機會を先程から待て居たのだ」「でも此樣な場合を見込んで勝たうとは餘り非道い」「イヤ非道いのはお互ひだ、昨日君は何とした、朝起きて僕が顏を洗ふが否や、直に僕を召喚し今日は東洋流の指先の拳を選ぶと云ひ、僕が餘儀なく隨ふて、二三の掛聲で石だとか鋏刀だとか云つて直に僕を負したぢや無いか、其間が唯つた五分間サ、僕は一日に纔か五分間位の戰ひでは到底滿足する事は出來ぬ。夫も朝の間だから一日中の樂しみを五分間に奪はれて、僕は夜に入るまで退屈に堪へなんだ、サア來たまへ、今日は僕が權利者だ」茂林は拜まぬ許りに「では僅に三分間で好いから一寸と上陸させたまへ、直に歸つて來て召喚に應ずるから」と云へど寺森は頑として「イヤ可ぬ、君は契約の第五條、第七條、第八條を忘れたか、忘れたら讀んで聞さうか」最早や云爭ふ道も無く「實に君は意地が惡い」と、悔しがりつゝ從ふに、寺森は甲板中の最も暑き、大煙突の傍へ茂林を連行きて、照輝く眞晝の天日に身體を晒しながら、選ぶ勝負を何ぞと見れば、勝負事の中にて最も長く掛ると知らるゝ「ビージック」と云へる仕方にて、而も其賭け高を僅に一回一法と定めたれば、五百法まで勝

負の附のは何時間續くか計られず。茂林も意地になり、最初は強て自ら落着き悠々として構へたるも一時間を經ては早や其根氣盡き、全身に汗を浴び、目も眩みて札の色さへ見分け得ず、今日は到底勝つ見込み無しとて、幾重も詫びて降參し、漸く病人と爲る事を免れしが、此又復讐は如何なる可きやと氣遣はれしに、此夜寺森が月に乘じて詩など吟じながら快よげに、高甲板を散歩せる所へ茂林は出來り「サア寺森君召喚だ」と呼掛くるにぞ寺森は怪しみて「何だ今日は既に先刻のビージックで君が降參した癖に」イヤ既に夜の十二時を一分過ぎたからアレは昨日の事と爲つた」「何だ、夜の十二時一分に勝負を初め明日の愈みを又奪つて仕舞ふ積りか」「何でも好い僕が權利者だ、サア今度はビージックの樣な長い勝負では無い、唯だ賭け事だ」「何の賭だ」「君が今より三分間の間に、此甲板から海の中へ飛込だなら僕が負けだ」と云ひ得ぬと云ふ賭だ、若し飛込だなら僕が勝とするのだネ」「爾とも」「宜しい五百法掛けやう」と答へしまゝ寺森は悠々と早や時計を出して眺め初めたり。寺森は此の巧なる召喚に怪とせしも故と落着き面白い、僕が海の中へ飛込ば僕の勝となるのだネ」「爾とも」「宜しい五百法掛けやう」と答へしまゝ寺森は悠々と時計を出して眺め初めたれば、却つて茂林の方にて不審に堪へず「サア寺森君、今の

賭は何うしたのだ、最う飛込まねば三分の時刻が切れる」寺森は苦笑して「ア、此賭は確に負けたノートへ君の勝利と附けて置き給へ」と温順しく降伏するは、更に輪を掛けて復讐する心有るが爲なる可し。翌日は何の勝負も無く寺森は眞に退屈に堪へ得ざれば、時々恨しげに笑ひて茂林の顏を睨むるのみにて過ごせしが、更に其又翌日となれば双方ともに斯る復讐の餘り穩かならぬを悟り、流石に親友同志だけ媾和折合の相談を爲し、毎日勝負は一時間より短からず二時間より長からぬ事と爲し、其種類も決して健康の害にならぬ者を選ぶと云ふ事に定まり、復た復讐の募り行く患ひも無くして濟むを得たり。

十八

七日目にして船は亞弗利加の北岸なる亞歷山港に着きたるが、此邊は歐洲諸國交涉の土地なれば亞國と云ふは名ばかりにて鐵道も有り、貿易も盛なれば自分の國を旅行するにも均しく、直ちに汽車にて海路府まで入込み得たり。

一行無事に海路府に着きたるは、佛國を出てより七日の後なりしが、玆にて先づ行く先の道を評議するに、遠征の目的は可駐無より先に在り。可駐無までではナイルの大河を溯るも可なれども、夫よりは紅海を船に乘りスアキムに着き、スアキムより上陸してバアバア村に至り、此村より初めてナイルの河に入るが好からんと云ふに決したり。尤も荷物の大なる物は携へ行くこと不便なれば夫等は河船にて直接に可駐無へ送る事とし。相談玆に定まりたれば必要の品々を買調へ、又一方には領事館等に就きて、及ぶ丈け紹介の手紙を請受け、猶ほ又確なる通辯人を雇入れんとするに、幸ひ是まで度々遠征に從ひて、蠻地に深く入込みたる亞拉比人にて、亞利及び阿馬と云へる二人の者あるを見出し得たれば此二人を雇入れたり。

夫や是やにてカイロ府に又も一週間を費せし後。一同は衣類其他の小荷物だけを携へて、蘇西より船に乘らんと其土地まで到りしに、玆に最と氣の毒なるは彼の從者與助なり、彼れはマホメツト、ガデルと改名し、荷物の札にまで其名を記して置きし爲め蘇西の運送會社にて己れの荷物を受取らんとするに、既に眞成マホメツト、ガデルと云ふ、亞拉比人が其荷物を受取りて去りし

との事なり。扨は兼てより物を盗む癖多しと聞く、亞拉比の人に盗まれしかど、與助は痛く立腹して會社の不注意を攻め、辨償せよと迫れども、會社にては佛國人にマホメツトなど云ふ名前ある筈なければ、會社の落度に非ず、僞名せし當人の落度なりと云ひ、一言に跳附けたれば與助は取附く所も無く、此上はカイロ府にて買調へし、僧服一枚にて萬里の旅をせねばならぬかと、涙ぐみて萎れ込むを、一同が慰めてカーツウムまで行けば何とか仕て遣ると云ひ、漸く勵まして斷念めさせたり。

斯て蘇西より埃及汽船會社の船に乘り紅海の上を南に向ひ出帆し一同船の中にて様々の戯れに身を委ぬるが中に、一人芽蘭夫人のみは常に船室に閉籠り、遠征探險に就いて様々の書類を讀み、何事をか考へて深く思ひに沈む體なりしが、或時二人の通辯人と、彼の帆浦女とを傍に呼寄せ「貴方がたは、孰れも蠻地の事には詳しい人達ですが、若し歐羅巴の人が唯だ一人で蠻地に取殘されゝば、長く殺されずに居る事が出來ませうか」と問へり。問の心は察し難きも、亞利は進みて「左様です、澤山の賄賂でも贈つて蠻民の機嫌を取れば兎に角、左も無ければ幾日も經ぬ中

に殺されませう」縦しや實際に殺されずとも、殺された者と見做すでせうネエ」と宛も獨語の如くに言ひ、一同が何とも返事し得ざるを見て又話を繼ぎ「既に李敏敎翁も殺されたと見做された其の後で生て居ると分りました、又獨逸の母牙兒も殺されたと云ふ報告が二度まで届きましたけれど、二度とも間違ひで本統に殺されたのは其後でした、斯様の譯ゆゑ殺されたと云ふ報告も、容易に信ずる譯に行くまいと思はれますが、貴方がたは左様な實例を知りませんか」誰一人充分に返事し得ざれば、夫人は猶ほ何事をか云はんとする様子なりしも、此上言ふも無益と知りし如く、默然として一同を退けたり。此後にて平洲と茂林は通辯亞利より此話を聞き取り、二人とも夫人が何の意にて斯る取留も無き事を問ひしやと怪しみしが、頓て平洲は「アヽ分つた、夫人は事に由ると所夫芽蘭男爵が猶だ生て居るかと思ふのだ」茂林も成るほどゝ思ひて暫し考へ「左様サ、其様に思ふも無理は無いが、氣の毒ながら芽蘭男爵ばかりは生て居る氣遣ひ無しだ、死んだ報告が屆いて三年の餘になるけれど、今以て取消しの報告は無い、母牙兒でも誰でも一年ニ經た ぬ中に取消しの報告が有つたぢや無いか」「爾サ、半年か一年なら兎に角、唯だ一人で三年間も鬼

域で生て居る事が何うして出來る者か』『ア、、夫人は男まさりと云はれても、流石に女だけ其樣な空想も起るだらう」と云ひ、素より氣にも留めずして止みしが、同じ其日の中に船は亞拉比の港、ヂッダーに着きたるにぞ、二人とも景色などに心紛れ、夫人が斯る問を發せしと云ふ事すら全く忘れ盡したり。

十九

船は紅海亞拉比の沿岸ヂッダーには着きたれば、一同は昔より聞及ぶヂッダー市街の有樣を觀んとて上陸せしに、茲に最と悲しむ可き一大事こそ起りたれ。

抑もヂッダーと云へるは、亞拉比にて有名な一都府たる、メッカ府より遠からぬ港場にて、此邊一體宗教の盛なる所なれば古跡も有り靈場も有り、年々此國の諸地方より、巡禮に出るもの必ず茲に立寄る事なれば、市なども殊に盛にして、歐羅巴人の目には珍しく見ゆる事物多しとか や。去れば一同は、市内を一巡見廻りて、早や日の暮に差掛りたれば引上げて、船に歸る事と爲

したるに、唯だ茂林講學士のみは二三の靈場を略圖に寫し取りて歸らんと云ひ、亞拉比風の長上被一枚を着けたる、下僕與助と通辯人、亞利とを引き連れ先づ町外れに行き、人間第一の開祖たる、アダムの妻イブを葬りしと言傳はる拜堂を寫し取り、漸く終りて一方を振向く折しも、町の力より廓外なる沙漠を指して行かんとする旅人なる可し。同勢七人の一群、中六人は駱駝に乘り、猶ほ樣々の荷物を持ち、一人だけ馬に乘り、此方を差して徐々と進み來りしが、能く見れば純粹なる亞拉比の人にも非ず。長き槍を初めとして野蠻時代に行はるゝ樣々の武器の外に猶ほ種形の鐵砲をまで持ちたるは、兼ねて物の本などにて讀みしベドイン族なる可し。ベドイン族は、此國中の最も慓悍、最も獰猛なる蠻族にして、沙漠、或は山の中を住家とし、三々伍々部族を作り天幕馬、駱駝の外には財産無く、或時は西に住むかと思へば、又直ちに東に移りなどする樣、水草を追ふて轉居せし、昔の種族の唯だ僅ばかり進歩せし迄の者にて、其の職業は狩に非ざれば、追剝を事とし、旅人を苦しむること多けれど、政令の屆かざる地方なれば打懲す道も無し。緩に幸ひと云ふ可きは、此蠻族市街に入來りて其暴を働くと云ふ事無く、市街へは單に買物など

に來るのみなりといふ。

茂林は此一群を見とめて又と逢ひ難き材料なれば、是をも略圖に取らんとするに、駱駝に乘りし六人は小休の爲めか、駱駝を降りて古き殿堂の横手に隱れ、馬に乘れる一人だけ蠻族中にて多少の信仰ある者か、茂林の居る拜堂の傍に來り禮拜を初めたれば、茂林は是れ幸ひと筆を取り大方寫し終りし頃、其者も亦殿堂の方を差し立去れり。茂林は猶ほ所々に筆を加へて、其道具など取納めんと爲し居たるに、此時忽ち殿堂の影に當り一聲高く「助けて吳れ！」と呼ぶ者あり。確に下僕與助の聲なれば、茂林は驚きて其方を指し馳行かんとするに、向より通辯亞利が顏色變て走り來るを見るのみ。休み居たる六人のベドイン人も駱駝も與助も影を止めず「何事だ亞利、與助は何うした」と問掛る言葉も急がし。

茲に亞利の返事に由り、與助の如何にせしやを記さんに、彼れはベドイン人一群の休むを見て己れが亞拉比の服を着けし姿を之に示し、猶ほ眞正の亞拉比人と間違へられ度しとの野心を起し、猶又た巴里なる動物園にて駱駝の首などを撫でたる經驗を以て、駱駝の膚を觸りて見んと思ひ、亞

利に其旨を語りし上、殿堂の影まで到りし處、ベドイン人の一群は與助を心にも留めず、己れ等の仲間同士にて何事をか打語らふのみなるにぞ、與助は突々と駱駝に近寄り、其背に手を掛けんミせしが、只見れば其駱駝に積し荷物の一部分は、全く其身が蘇西にて亞拉比人に盜まれたる其荷物にして、而もマホメツト、ガデルと云ふ自筆の附札まで其儘に存して有り。與助は眼を丸くして一群を罵りつ「此盜坊奴、己の荷物を返せ！」など騷ぎ立るに、一群は與助の言葉を解し得る筈も無く、唯だ怪しむ體なれば、亞利が進みて、其言葉を通辯するに一群は初めて夫と知り少しの間、評議したるも「同じ名は幾人も有る、已共の名を騙り、此荷物を盜まんとて其手には乘らず」との意を口々に叫ぶが上に猶ほ相手を一人と見て、若し達てと云はば腕力に訴ふるとの心を示すにぞ亞利より又も其意味を與助に通ずるに、與助は逆樣に盜坊と云はるゝ腹立しさに、火と迸上げ其荷物に手を掛けて駱駝の背より引卸さんミすれば、一群は何か目配せすると見えしが、斯る事には充分慣れたる輩なれば、電光石火よりも早く一同與助に飛掛るミ見る暇に、早くも與助を荷物と共に靜々と駱駝の背に縛り付け、其儘町の廓に設けたる門を潛り駱駝を走らせ、雲を

霞む沙漠の方を指し逃去りたりとなり。

二十

下僕與助が蠻族の駱駝に縛り附けられ、沙漠の方へ運び去られしとの顛末を通辯亞利より聞取るや、茂林書學士は烈火の如くに怒り「何だ與助が引攫はれた、汝が傍に附いて居ながら、夫を妨げる事が出來なんだか」『實に妨げる暇が有ません、彼等の仕事が餘り早くて何の事だか少しも分らず、初めて分つた時は早や彼等が廓の門を潜つた時です」茂林は齒を噛みて「エヽ情無ひ事をした、全體彼等は何所に住で居る蠻族だ」『夫は分りません、時々山や野原の中を、其方此方と引越して居るのですから』「チヤア今まで己が寫し取つて居た、馬に乘つたアノ一人は何者だ、ソレ己の傍に禮拜を仕て居た奴サ、何故彼れ丈けは一緒に去らず玆へ殘つて居るのだか」『アノ一人は組合が違ふのです、玆まで一緒には來たけれど唯だ道連れだと云ふ事です』「では彼奴だけは同類で無いと云ふのか」「ハイ全く同類で有りません、與助の引攫はれたを見て、彼奴も私と同樣

に驚きました」「では彼奴に問糺して見ろ、蠻族等が何方へ與助を攫つて行つたか、凡その見當は分るだらう」亞利は四邊を見廻すに、彼の一人丈けは猶ほ己が乘り來し馬の傍に、某れし如く立つて居るにぞ、亞利は早速招き寄せて問詰るに、此者容易に答へんとはせざりしが、尋常ならぬ茂林の血相に恐れてか、漸々ながら彼等の何れの方に行きしや知る能はずと答ふ。亞利は猶ほ茂林の意を承けて彼れに向ひ「だつてお前は彼等の道連れと爲つて、互ひに話を仕ながら一緒に玆まで來たでは無いか、彼等が何處を指して歸る所で有つたか夫位の事は聞いた筈だ」彼「イエ聞きません」亞「彼等は此所より東北の方に當るメジナ府の方へ行つたか」『多分爾では有ますまい、メジナ近傍に居る者とは風が違ひます』「彼等は此の地方の境を越えて猶ほ先まで行くだらうか」『出來ません、彼等の駱駝は非常に達者です』「でも隨分重荷を背負て居るから爾う早くは驅られぬ筈だが」『夫にしても矢張り駱駝で追掛ねば無益です、所で此邊に其樣な駱駝は有ません』茂林は一々斯る答へを亞利より聞取り、悶かしさに堪へず「此奴の乘つて居たアノ馬に己が乘つて追掛る、此奴に爾云へ

亞利は驚く樣子にて容易に此言葉を遮辯せず「何を其樣にマゴ〳〵するのだ、此奴の乘て來た馬がアレ彼所に、鞍の轡繋いで有るぢや無いか」「夫は分かつて居ますが駄目ですよ、亞拉比人は子よりも馬を大事に仕ます、亞拉比人に向ひ馬を貸せと云ふのは、歐羅巴人に向つて、女房を貸せと云ふも同じことです」「では買取るから直段を聞け」亞利は無益とは知りつゝも、詮方無く其掛合を初むるに、到底金錢には賣らずと云ふ。茂林は斯くと聞き、グツと心を落着けて、寂も大膽軍の軍に臨みたる如き威嚴を示し「コレ亞利、己の言葉を一句も落さず其儘に通辯しろ」と言附け置き、屹と此者の顏を眺めて、「今汝が見た通り、汝の道連れが己の從者を擾つて去つた、己が之を救はずに捨置く事は勿論出來ず、救ふには是非馬が要るのに、汝が其馬を賣らぬと云ふ柄は今は止むを得ぬ、汝の承知と不承知に拘らず、己がアノ馬に乘つて行くから爾思へ、若し己が無事に歸れば必ず相當の報酬を附けて馬を返す、若し今己れのする事を少しでも妨げれば容赦は無い、此場で射殺して仕舞ふぞ、コレ此短銃には悉く彈丸を込めて有るから」と云ひ腰より短銃を取出して差附る樣、眞に否やと云へば射殺さん決心の見えたれば、彼れ爭ひも悶掻きも得せず、

唯だ顏色を青くして震へるのみ。サア亞利、アノ馬を連て來い」と猶も亞拉比人に短銃を差附けしまゝ命ずるに、亞利も長み直に馬を引來れば、茂林は飛乘る間も此者の顏より目を離さず、此者も斯る蠻民の常として、弱き者には理も非も無く邪慳なる代りに、又強き者には、如何なる無理を云はるゝも抵抗し得ぬが癖なれば、最早や屈從する外無しと斷念めたるに似たり。茂林は馬の上より命を傳へ「亞利、己の姿が見えずなる迄、此者を捕へて居ろ、若し此者が己の背から鐵砲でも向け相なら其まゝ組伏せて仕舞へ、汝の方が此者より強相だ、爾して己が見え無くなれば直に船へ歸り平洲や、寺森に今の始末を話し、己が與助を救はん爲め沙漠の暗に乘り入たと知らせて呉れ、一同が己の身の上を氣遣はしいと思へば然る可く援兵の用意を仕て呉れるだらう」と云ひ早や其馬に鞭當ん樣子なり。亞利は驚き「旦那、貴方は殺されるに極つて居ます、夜に入て彼等の樣な追剝を追ひ沙漠の中へ入込むのは冥途へ飛込むも同じ事です」「其樣な道理は聞いて居られぬ、與助とても同胞だ、同胞一人何うして見殺しになるものか」と云ひ茂林は早や暮れ果し夜の世界を事ともせず、彼等の潛りたる門を潛り、漠々たる沙漠の中へ蕊地に馬を馳せて躍り入

り、早や其姿も見えずなりしは、大膽よりも寧ろ亂暴と云ふ可きのみ。

二十一

茂林書學士は沙漠の中へ驀地に馳入りて其姿の見えずなるや通辯亞利は茂林の言附を堅く守り直に此事變を芽蘭夫人初め一同に知らさん爲めと、港の方を指し馳返らんとするに、茂林に馬を取られし彼の一人のベドイン人は、今此の亞利を見失ひては、我馬を返して貰ふ可き便りをまで失する譯なれば、周章て亞利の後を追ひ來り、頻りに茂林の何者なるやを問へり。亞利は又事に由りては後刻茂林を援けん爲め、沙漠の中へ追ひて入るに此者を案内者に立るやも知れずと思へば情無くは遇はず、茂林の人柄を誇りて說き、彼の人は佛國有名の金滿家にして、且は此土地の政廳にも厚く尊ばるゝ身分なれば、無事に沙漠より歸るに於ては馬の一頭や二頭、物の數とも思はず、必ず汝に約束の褒美を取らせるならんと云ふに、ベドイン人は漸く安心せし樣子にて、益々亞利の後に附き來れり。

亞利は波止場に此者を殘し置き、船に到りて一同に、與助及び茂林の一條を言葉短に物語るに、一同は色を失ひて、驚き起ち、幷は早速に追掛て救はねばならずと、異口同音に叫びたるも去ればとて慢々たる沙漠の中を、孰れに行きしとも知れざるに、如何にして救ふ可き、到底見込みの無き話なれば、一同叫びしまゝ唯顏を見合すうち、芽蘭夫人は徐に手提の中を檢めて「アヽ佛國から此土地へ駐在を命ぜられて居る、領事に宛てた一通の紹介狀が此中に入つて居ます、兎に角領事館へ行き領事に相談して見ませう」と云ふ、誰さて異存を唱ふ可きや、外に思案の無き場合なれば早速其言葉に從ひ一同にて又も上陸し領事館に至るに、領事も永く異鄕に有りて故鄕の人を懷しく思ふ丈け、歡びて迎へたれば、一同は挨拶も匆々に、茂林と與助との悲しむ可き境涯に入りしを述べ、之を救はん事を請ふに、領事は痛く驚くと共に、又痛く當惑の色を現はし「夫は領事の力で到底出來ぬ事柄です、若し其人が殺されたと分れば、其次第を本國政府へ報告し、本國政府より損害要償の談判を開く其材料を送る丈は、領事の職掌で有りますけれど、其より外は如何ともする事が出來ません、殊に此領事館は私及び妻の外に書記一人、下僕は孰れも

此國で雇ふた者等で、大事を任せるには足らず、私が何と思ふも到底力に及びません」と明かに斷りつ。

一同が旦恨み、且絶望する色を見て、領事は更に調子を變へ「併し是は領事として申す言葉、私一個人とすればお互ひに同國人ゆゑ、及ぶ丈は力は盡します、と申して此館に兵隊を備へて有るでは無し、何事も貴方がたの奮發に任せる一方ですが、斯樣な場合には御婦人は足手纏ひ、芽蘭夫人と帆浦女とやらは此館にお留り成さい、私が充分保護致します、爾して平洲、寺森の兩君は、早速船へ返り水夫の中で最も信用の出來る、屈強の男を三人雇ふてお出で成さい、幸ひ此邊へ來る水夫は、孰れも馬に乘る事を心得て居るから仕合せです、其三人に通辯二人を合はせ、都合五人を兵士と見做し、平洲、寺森の兩君が之を引き連れ、茂林君の跡を追行く事と成さい、此通辯二人は屢遠征隊に隨つて此土地へも來た事の有る男で、斯る場合に充分安心して使つて好い事は私が保證します、唯だ困るのは沙漠の道案内で彼等が何方へ行つたか夫だけが分らぬけれど、駱駝に荷を着けて居たならば、途中で外の種族に奪はれる恐れが有るから、決して

メツカ府や、メヂナなどの方へは行かず、必ず人通りの最も少い方角を選び、山の方へ向たでせう、一人のベドイン人が殘つて居るなら幸ひですから、其者を案内に立て、一刻も移さず驛馬に乘て追掛ければ事に由ると彼等の先へ廻る事が出來るかも知れません、亞拉比の馬と云ふ中にも殊に此の土地の馬は實に世界一で、飲まず食はずに乘通しても、殆ど疲れると云ふ事を知りません、私の厩にも二頭居ますから、其外は貴方がたが船から水夫を連て來る迄に、私が借集めて置きませう、又貴方がたは聖弗利加探險との事なれば、銃器は充分お持でせうから、同勢七人皆最上の鐵砲を携へて行かねば成ません」と、事落も無く差圖し呉れたれば、初め恨まんとせし一同も、茲に至りて深く其親切を謝し、婦人二人を領事館に留め置き、飛ぶが如くに船に歸り、水夫の中より三人を選び出し、之を引き連れて再び來れば、約束の如く領事の手にて馬の用意も調ひて有るにぞ、一同之に飛乘りつ、彼のベドイン人一人と、通辯亞利とを案内に立て沙漠を指して進みしは、早や日の暮て薄暗を頃なりし。

二十二

道も無き沙漠の中へ、而も夜中に踏入るとは困難極まる次第にして、便りとするは唯だ一人の、敵とも味方とも圖り難き蠻人なれば、此者を充分に懷け置く外は非じと、平洲文學士は、沙漠の入口にて通辯を以て嚴重に彼れに向ひ、汝若し正直に案内して、先刻歐羅巴の人を攫ひ去りたる彼のベドイン人の居る所まで、一同を誘き行き、其上にて猶力の及ぶ丈け一同を助くるに於ては其後にて褒美として最上の馬三頭と、此沙漠の中にて王と爲るに足らほどの、最も精良なる鐵砲とを與ふ可しと言渡すに、良き馬と良き銃とは、實に是等の蠻族が何よりも欲がる品なれば彼れ早や眼を光らせて喜ぶこと一方ならず、必ず及ぶ丈の力を盡す可しと約し、之よりは一同の先に立ち、時々異樣に口笛を吹きて一同の馬を制しながら進み行くは、到底他人には眞似さへ出來ぬ手際なり。此者若し無かりせば、如何に心のみ矢竹に早るとも沙漠の夜路を無事に辿り果せんこと、思ひも寄らぬ所なりきと、一同竊に亞利が此者を懷け置きたる注意を喜び、深く〳〵進

み入るに、夜の更けるに從ひ暗さ益々加はりて、不便云ふ許り無けれど、案内者のみは、斯る夜路に慣れし事とて少しも躊躇する所なし。此旅行、何時間續く可き、果は能く茂林と與助とを見出し得べきか

二人は今如何の境遇に陷入れる、又見出すとも果して蠻族等の手より救ひ取ること出來得るにや、誠に困難の事のみなれど、少しも怯む色の無きは感心と云ふ外無く、中にも平洲文學士は、曾て獨逸との戰爭に、茂林と同じく義勇兵一部の長として、又と無き艱難を嘗め、充分膽力を練りたる人なれば、煙草を取出して燻らせつゝ、氣も輕く寺森醫師に向つて樣々の雜話を爲す樣、眞に曾て芽繭夫人に向ひ、沙漠の中をも芝居見物に行く心にて旅行せんと云ひし、其約束を守れるにも似たり。

幾十哩を歩みしか、曉方の五時頃に至るまで唯だ途中にて一度其の馬に、用意し來りし秣と、水とを與へしのみにて、其の他には一刻の小休みも無く乘り通せしが、夜の曉々と明初むるに當り、案内者は通辯に向ひ「アヽ此道に違ひ有ません、砂に彼等の足跡が殘つて居ます」と云ふ、

平洲、寺森共に通辯より此事を聞きて能く見れば、成るほど砂の表に五六の駱駝の通りたる跡を殘し、猶一匹の馬の足跡も殘れるにぞ　平「ア、有り難い、此の馬の足跡は茂林の乘た馬に違ひ無い茂林が彼の一隊に追ひ附いたのだ」寺「追附いたとて其の後の運命は分らぬ、多勢の所へ唯一人追ひ附けば何の樣な目に逢つたかも知れぬ」如何にも其の通りなれば猶案内者の說を聞かしむるに、馬の足跡、極めて順序能く殘りて有るを見れば、多分は其背に乘りたる人、引き卸されしか縛られしか、孰れにしても蠻族に抵抗する丈の力なくして、温順しく進みし者ならんと云ふ。是には平洲も且感じ、且驚き、是よりは又何の言葉をも發せずに、又三十分ほど進めば、彼方に一體の山ありて其麓に二十餘個の天幕を張りたるを見る、案内者は立留りて「アノ天幕が多分昨夜のベドインでせう」平洲は眼鏡を取出して、暫し眺め「フム、天幕の中の人は猶だ眠つて居るのか極めて靜かだ、玆から三十丁とは無いが最と傍へ寄つて見ねば」と云ひ、相手の眠りを容易に覺しては成らずとの用心にて靜かに進み、僅に一丁と離れざる所まで行きて又留り、天幕の樣子より總體の山形地勢など案ずるは、眞に軍門に臨みたる大將に異ならず、顏にも身體の樣

子にも何と無く威儀現はれて侵し難き氣のせらるゝは自然に備はる勇氣の爲なる可し。去ればとて、天幕の數に由れば相手は三十人以上なる可きに、其中へ唯だ七人にて襲ひ入り、擒二人を取還さんとするは殆ど出來難き仕事なれば、大事に大事を取らずんば有る可らず。頓て平洲は、背後の山に相手の退く道と思はるゝ古き切割の如き所あるを見て、水夫三人中の最も屈強なる一人に向ひ、汝は天幕の背後に廻り彼の切割の影に隱れて番を爲し、何人にても切割より出來るか將た切割に入行かんとする者あれば鐵砲を發して合圖ぜよと言渡すは、相手の眠りを覺す前に此方の手配りを充分にせん爲なる可し。其水夫が命に從ひ彼方の山手に隱れしと見るや、更に何事かの命を發せんとするに、此時平洲の乘れる馬、一聲高く朝風に嘶きたれば「エ、仕樣が無い」と平洲が眉を顰むる間も無く、天幕の中にては此聲を聞きしと見え、二三の女、其の入口に立現はれ、此方の樣子を望み見て、訝かる體にて內に退き、是よりは引き續きて何うやら騷々しき樣も見ゑ、殊には橫手に在る牧場を指して走り出る男子五六人あり、孰れも其の所に繫ぎ有る、馬や駱駝を引出す支度と見ゆるは、彼方も警報に驚きて用意する者なるべし。

二十三

良ありて天幕の外へ、蠻人の頭と思しき四十格好の男一人、馬に乘りて現はれ出で、護衞の心にや屈強の若者八名を馬の兩側に、四人づゝ歩ませて進み來り、孰れも投鎗、山刀などの危險な る武器を拔身の儘に推立て持てるは、仲々に侮り難き備へ方なり。殊に其の背後なる天幕の入口には、廿名ほどの蠻人出で來りて立並び、思ひ〳〵の兜器を振閃かすは、此方の膽を奪はん心なる可し。

平洲文學士は油斷し難き場合と思へば、馬の上より味方一同に令を傳へ、我より號令を發する迄は、一人たりとも氣儘の振舞を爲す可からず、と云ふに、斯る場合には知らず知らず、勇氣の秀たる人に從ふが人間の常なれば諺一人此令に負かんとせず、嚴肅に控へたり。其中に蠻人の首は平洲の眼前僅に一間許りなる所に來りて馬を留め、頑丈なる聲にて「人々は何用ありて我等の天幕近く來りしぞ、喧嘩の爲めか、將た相談の爲めなるか」との意を述ぶ。平洲は通辯の口よ

り此譯を聞き、傲然として、「喧嘩なり、相談なり、汝の望み次第なり」と答ふ。蠻人の頭は此の強き返事を聞き、扨は是だけの最と少き同勢にあらで孰れかより援兵の來るにやと、怪しむ如く此方彼方を見廻せし末「何か我が天幕の內に、欲き品物でも有りてか」と問ふ。「勿論なり、汝の天幕に我等の友人二人、擒と爲りて在る筈なり、尋常に引渡さば我等も亦尋常に受取らん」蠻「イヤ左樣な者決して無し」「無しとは云はさぬ、昨日夕方チツダーの町盡れにて一人は駱駝の背に縛られて汝等の隊に奪ひ去られ、一人は幵を救はん爲め直に汝等を追ひ來れり」「幵は我隊の知る事ならず、定めし外の隊ならん」「否な否な、此隊なり、我等直ちに足跡を追ひ玆まで踪け來りたれば、聊かも相違無し」「廣き沙漠に足跡は數多あり、我隊の足跡に限らんや」「否な限れり、駱駝五六頭に馬一頭、歷々と其足跡を殘せり、斯る同じ足跡が此隊の外に有る筈無し、玆より六七間我れに從ひ來らば其跡を示して遣らん、是れでも猶此隊で無しと云ふか」頭は此時までも猶遠近に目を配り居たるが、遽る者無き廣き沙漠に、絕えて何物も見えざるからは孰れよりも援兵の來る恐れ無しと見て取りしと見え、何と無く敵對の意を其顏に現はせり、大將の斯る有樣を見る手下

の者共も、急に勢を得し如く、長き武器を振廻し〳〵、女子供まで共々に囂々と聲を發するは定めて此方を罵る者なるべし。平洲は容易ならずと見て一同に向ひ「己が手を擧げれば夫を合圖に銃を取上げ、彼の野蠻人總體に向ひて狙ひを附けよ」と命じ置き、更に野蠻の頭に向ひ「喧嘩するにも女子供を傷つくるは氣の毒なれば、彼等を天幕の中へ入れよ」頭は應ずる樣子無し。平洲は茲に於て合圖の手を擧るに、水夫兩人通辯二人之に醫師寺森を合はせ、五人筒口を揃へて彼方を狙ふに、女子供は驚き恐れ、叫び立てつゝ天幕の中に入れり。蠻人の中にも幾人か古形の銃器を持てる者ありとは云へ、此五人の持てるものには及び難しと思ひしか、頭は又少し挫け「虜は一人も無いと云ふのに、夫れを引き渡せとは無理に非ずや」「然らば昨夜の兩人を何とせしや」兩人などゝは知らぬ事なり、但し馬に乘りし一人あり、此隊を襲ひし故、詮方無く殺したり」「馬に乘りし一人とは茂林の事なる可し。此言葉を誠とせば下僕與助は如何にせしか、彼れの捕はれしは全く此隊に非ずして茂林も吾々と同じく此隊と思ひて追來り、夫れが爲獨り此隊に殺されしかなど一同の心に異樣なる危みの念兆したれと、平洲は猶も落着きしまゝ「然らば其死骸を見せ

よ」「死骸は其儘途中に捨たり、人々必ず此傍を通りて來しならん」「否、左樣な死骸を見受ざりし」「汝は、夜の暗かりし爲ならん、今より引返せば、弦より七八哩の處に必ず其死骸あり、此所に長く問答するは無益なり」「汝等人を殺せば其露見を防ぎ深く死骸を推し隱す癖なるに、消傍に捨置く筈無し、汝の言葉は全くの僞りなり」「僞りに非ず」「然らば一々天幕の中を檢め見ん」「夫れは許さず、吾等の天幕は昔より一人だも他人を入れたる事無ければ」「許す許さぬは汝の云ふ事に非ず、檢めずば吾が力にて許さぬなり」と云ひ、更に味方を顧みて「サア何うしても戰ひは避け難い、命懸けの覺悟をせよ」と言ふに、如何にも戰ひて天幕の中を檢むるより外に詮方の無き場合なれば、一同は彼れと我れとの强弱を思ひ比ぶる暇も無く、再び銃の筒口を揃へ「發て」と今一聲の號令を待つのみなるに、此時天幕の横手なる山の彼方に當り、我より先に鐵砲を發つ聲あり。一發遠く木魂に響き凄じき程に聞ゆるは、或は敵の一部が我に先んずる者なるか。否、是れ先刻彼の切割の陰へ廻し置きたる、水夫の一人が命を守りて何事をか合圖する者なるべし。去るにても其の合圖は何事にや。

二十四

彼方の山にて發ちたるは、唯だ一挺の銃なれど谷に響きて凄じき音を爲したれば、蠻族の驚き一方ならず。扨は彼方より援兵の來りしか、夫れとも前以て伏兵を設け置きしかと恐る〻如く、其の大將までも顏色を變へ、思はず知らず天幕の方へ幾間か退きたり。其の暇に平洲文學士は、何でも彼の鐵砲の鳴りし方に行き、何事の合圖なりしやを見屆けねば成らずと、一同に令を傳へ直ちに山の切割を指して進むに、先刻其の所へ廻し置きたる水夫一人は今打し鐵砲を持ちし儘出來り、平洲よりの問に應じ、實は唯今天幕の背後より六七人の蠻人出で、此切割を指して來らんとせし故、命に從ひて合圖の銃を發ちたるに其六七人は驚きて又天幕の中へ引き退きたるが、確に其者等は一人の虜を皐へ居かり、虜の顏は見分難かりしも、白き肉穆だけは見えたれば歐羅巴人なること疑ひ無しと云ふ、平洲は聞終りて痛く喜び、最早や蠻人の頭が如何ほど此群の中に、一人の虜無しと言張るとも聞入る可からず、今まで實は半信半疑に逶ひたるも、確に見屆けし上

は充分嚴しく責詰らん、少しも容赦するに及ばずと、其意を一同に傳ふる折しも、先に退きし彼の大將は、山の切割に何の伏兵も無く唯水夫の一人のみ廻り居たるを知り、何の是しきにさ安心せし如く、一騎にて身を悠で又も此方を指し來らんとす。其背後なる少し離れし所には、相變らず手下大勢囂々と罵りつゝ控ゆるにぞ、平洲は大事を決行すること今茲なり、猶豫する間に手下等が大將の加勢に來りては面倒なりと思ひ、直ちに水夫三人と通辯二人に意を含め、其身と共に六人にて馬を躍らせ出し拔けに大將の許に進みて四圍より取りかこみ、彼れを馬の背に捻ぢ伏せて虜とは爲し得たり。事實に咄嗟の間なれば大將自らも、餘りの意外に充分には抵抗する能はず、縱しや多少の抵抗も屈強なる水夫の力に叶ふ可くも非ず、阿容々々と此方の手の中の物さは成りしが、背後に群居る手下等も初めは何事たるを解し得ず。漸く夫れさ合點して怒り出せしも、早や大將が虜と爲りて後なりければ、平洲は通辯を以て一同に向ひ「吾等決して惡さ心を以て汝等の大將を捕へしに非ず、唯だ吾等の友人、確に汝等の天幕に虜と爲りて有るが故、引替の爲め捕へたるなり、汝等、若し少しにても抵抗の意を示さば吾等直ちに此大將を射殺す可し」と

云はしめ、同時に平洲自ら短銃を大將の胸に充て、イザと云はゞ直に射殺さん用意を爲すに、大將既に人質と爲りては手下等何事をも爲す能はず、口々に評議を初めし樣子なれば其の間に一同は悠々と其の前を通り、再び天幕の前なる元の地に立退るに、蠻族等は斯くと見て一同か、大將を虜にせしまゝ早や立去らんとする如く見誤りしか、痛く周章て天幕の中より、虜一人を引き出し來れり。見れば是れ茂林講學士にして、衣類一切を剝ぎ取られ唯だ胴と足とに下被下穿を着けたる儘にて嚴重に縛られて有り。茂林は一同の顏を見て嬉しさに堪へ得ざる如く、途中より聲を發し「實に君方の厚意と勇氣には感心した、僕は今射殺される許りと爲つて居たが、君方が大將を生擒た爲め僕も此通り助けられた」と云ふ、茂林を取圍める蠻人等は、茂林の口を聞くを見、其言葉を聞かんとて耳を傾けしも素より歐羅巴の語を解し得る筈無ければ其一人は「無言れ」と云ふ如く强く茂林の頭を打たり。平洲は直に水兵に命じ同樣に大將の頭を打たしむるに、蠻族も已等が茂林を扱ふ通りに、已等の大將も亦此一同より遇はるゝとの事を悟りしか、再び茂林を打たんとはせず尋常に一同の傍まで連來り、直ちに大將と引き替んと乞へり。去れど此方は茂林一人

にて滿足す可きに非ず、猶與助をも救はねばならぬこと勿論なれば、今一人の虜をも連來れと命ずるに、彼等は此外に虜無しと言張りて止ます、左樣な筈無し、最初デツダーの町盡れにて駱駝の背に縛り附けたる一人あらんと言返せど、其者は途中にて繩を切り紛失したりと云ふ。何と責めても同樣なれば或は僞りにも非ざるかと、一同半信半疑に迷ふに、茂林又口を開き「僕は今朝三時頃に此一隊に追附いたが、何うも合點の行かぬのは其時に與助の姿が見えなんだ」此時まで も無言なりし蠻族の大將は、茂林が平洲と斯く言葉を交ゆるを見、已等の不爲と見てか手下に「其者の口を塞げ」と命じたり、手下は此命に應じて直ちに茂林に猿轡を食ませんとするにぞ、平洲は亦同じく敵の大將に猿轡を食めんとするに、大將は其身が口を塞がれては手下に何の命を傳ふる事も出來ねば周章しく取消して「イヤ仕方が無い物を言はせて置くべし」と傳へぬ。是れにて双方の虜とも自由に言葉を發し得る事とはなりしも、此方には通辯あり、敵の大將が差圖すること能く分れど、彼方には茂林の言ふ詞、少しも解せず、夫だけは彼方の弱味にして此方の德なり。茂林は語を繼ぎて「僕は三時に追ひ附て何發も鐵砲を射たけれど其甲斐無く、後で見れば敏

等は彼様な事に慣て居て駱駝を楯にし、其陰に隠れて居たので爾して僕の彈丸が盡たと見るや一齊に飛掛つて僕を縛り、天幕の中へ連て來て此通り着物など奪ひ取つた、多勢に無勢で何とする事も出來ず實に非道い目に逢たけれど、其中にも僕は與助が何所に居るかと天幕の中でも氣附け幾度と無く大聲で與助々々と呼立つたけれど返事が無い、何うも天幕の中には與助は居ぬ樣だ、且又僕が途中で此群に捕はれた時も、駱駝の背に氣を附けたけれど、彼れの姿が見えなんだ」と云ふ。元は與助より起りし事なるに彼れの姿を見出さずに此所を引き上る譯にも行かず、平洲も殆と當惑し「では何うした者だらう」「何うも仕方が無い、彼れの見付るまで此まゝ僕を盤族の手に置き、爾して大將を縛つた儘で詮議し給へ、大將を引渡しては決して與助を見出す事は出來ず、其上に大將の復讐が恐ろしい」如何にも其通りには有れご、去ればとて、看す〳〵茂林を縛られしまゝ盤族の手に委ね置き、窮苦の思ひを爲さしむるは縦しや一時間なりとも、豚た五分間たりとも忍び難き所なれば「好し〳〵、大將を虜にしたと同一の手段で不意に君をも奪ひ取る、爾すれば大將を引渡すに及ばぬから、其上で君と共に此大將を利用して與助を捜さう」と云ふ

は、最と大膽なる決心なり。知らず如何なる策を以て此決心を行はんとはする。

二十五

敵の大將を返さずに茂林を奪ひ取り、其上にて茂林共々に大將を利用して彼の與助を尋ねんと平洲文學士は斯く決したれど、是れ容易の事には非ず、敵は唯だ大將と茂林とを引替にせんと言張るのみ。此時茂林は猶縛られし儘にて平洲に向ひ「好い工風が有るよ、僕は捕はれてから此人種の樣子を篤と見るに、其心の幼い事は實に小兒も同樣だ、或學士の說に野蠻人は一種の小兒だと云ふが眞に其通りで、少しの事に怒るかと思へば又少しの事に恐れ、何事にでも心が紛れて眞に夢中の有樣と成つて仕舞ふ、其中にも此のベドイン人は殊に笑ひ樂しむ事を好む風が有るから、弦で此一同を笑ひで以て夢中に仕て遣らふ、其の水夫三人に滑稽踊りを遣らせ給へ、爾すれば一同屹と夢中となるから、其暇に少し君が手を貸して呉れゝば僕は此護衞者を振拂つて君の許に逃て行く」と云ふ、稍や覺束無くも思はるれど外に好い工風の無き場合なれば、平洲は直ちに

敵の脚を通辨二人に守らせ置き、水夫に其事を命ずるに水夫は少しも猶豫せず、最と面白き節にて歌ひ、足拍手を揃へて踊り出せり。ベドイン人は初めて見る事なれば、最初は怪しむ如くなりしも追々に面白がり手振足振の可笑しき度に聲を放つて笑ひ立て、猶ほ調子に乗せられて、一同手拍子などを取るに至りたれば、平洲は茂林の計略當りしを喜び、密々と寺森醫師に意を傳へ、スワと云はば敵の二三を射殺しても構はずと、醫師諸共に短銃を持ち直し、彼方の茂林に對し目配せするに、茂林の繩を持てる蠻人の手も知らず〳〵弛み居たる所なれば、茂林は出抜けに全身の力を以て其の者を突倒し、繩の儘にて平洲と寺森の間へ飛んで返れり。

此早業には野蠻人ア"ッと驚き、如何にして虜が逃去りしか合點し得ぬ程の有樣にて何事をか叫び立つれば、今まで笑ひ動搖めきし一同も夫と氣附きて呆るゝこと一方ならず、將に怒りて此方へ襲ひ掛らん有樣なるにぞ、乘て平洲の命を受けたる通辯二人は急いで敵の大將の胸に小刀を當て、高聲にて、汝等、少しでも騷ぎ立つれば此大將を刺殺すぞ」と云ふに、大將自身も其身の甚だ危きを知り、聲を放ちて「此人達の手際は本統に神樣の樣だ、手向ひするも無益だから靜

かにせよ」と命じたり。手下一同も眞に平洲等の手際を人間業にはあらじと迄に思ひ初めたる際なれば怒りは變じて恐れと爲りたる如く、無言にて此方の人々に見惚るゝのみ。

此間に平洲は茂林の繩を解き、又通辯を以て大將に向ひ、「吾等少しも汝等を害せんとする者に非ず、唯だ汝等に捕はれたる友人を救はんが爲の心なれば尋常に天幕の中を詮索せしめよ」と云ひ大將が力無く承知して其意を手下に傳へ終るを待ち、平洲、寺森、茂林の三人にて大將を護し、殘る一同には敵より不意撃に合はぬ樣、銃を持たせ、油斷無く八方に目を配りつゝ、蠻人の天幕の中に入り一方より順々に檢むるに茂林の上被、及び所持品などは見附りしも、不思議や與助の姿は見えず、與助が此所へ捕はれ來りたりとの證跡さへも見當らず、何樣怪しさに堪ざれば、昨夜茂林を捕へたる一同を順次一人宛呼出して問詰るに、如何にもヂッダーの町盡れにて亞拉比風の長被を着けたる白人を生捕、駱駝の背に縛り附て來りしも後より馬にて追來る人あり、時々此隊を呼留めんとする如く聲を掛け且は鐵砲を放つに依り、此隊は只管に道を急ぎしに今朝三時に至り、其人は益々間近くなり鐵砲も次第に繁くなりたれば、隊は少しく横道に反し、駱駝を寢か

して楯と爲し、其影に潜み居たるに、彈丸の盡きてか鐵砲の音は止み、唯だ叫び聲のみ折々聞ゆる事と爲りたれば、一同駱駝の影より現はれ、寄つて集つて其人を捕へ同じく駱駝に着けて引上げしが此所に歸りて見れば最初に捕へたる一人は一同が駱駝を竊かして、後の一人を捕へに行き し間に自ら繩を解きて逃去りしと見え、纏りし繩の解しを見るのみ、其人の姿は見えず、一同も其時は混雜に紛れ其人の紛失せしに心付かざりしかば、今其人が孰れに居るや尋ね可き當も無しと云ふ。其言葉僞りとは思はれぬが上、何人に問ひても同じ返事を無し、猶ほ茂林の鑑定にても何うも此言葉の通りなる可しと云ふ、左すれば與助は此所までも來らず、途中にて甘く繩より辷り抜けたる者と見ゆ、辷り抜けて孰れに行きし、今猶ほ沙漠中に迷へるか、或は徒歩にてヂツダーの方に歸り行きしか、將た又更に他の蠻族にでも捕はれしか、是れ容易には解し得ぬ一疑問なり。

二十六

與助全く途中にて窃に縛めの繩を解き駱駝の背より離れ得たりとすれば、彼れは夫より何れの處を指して行きしや。

彼れも定めし主人茂林が己れを救はん爲め後より馬にて追來りしを知れる故、大膽の男ならば其身の逃れしを喜ぶよりも、却つて主人の身を氣遣ひ直に此方を指し尋ね來る筈なれど、彼れ素より爾る大膽の男に非ず、多分は己が繩より脱け得たるを幸ひに、元來りたるヂツダーの方を指し夢中と爲りて逃去りしなる可し、主人茂林の身の上なぞは氣遣ふ遑も有らざりしならん。去れど漫々たる沙漠の中を、徒歩にてヂツダーまで歸らる可きに有らねば、或は今頃は途中にて進みも退きも得せず、疲れ果てゝ途方に暮れ居るも知れず、何でも一同は是より直に引返し、道々與助を尋ね乍らヂツダーに歸る外無し。

斯く評議は一決したるも、一同既に昨夜一宵眠らずに爰まで尋ね來し事なれば殆ど疲勞に堪へ難く、左ればとて休息す可き場合に有らねば、推して引返す事としても、若し此蠻族が復讐の爲め後より追ひ來る事も有らば、其時こそ最早や防ぎ戰ふ力は無く一同皆殺にせらるゝ一方なり、

何とか蠻人の復讐を避くる工風をせねばならずと、寺森、平洲、茂林の三人にて相談し、遂に彼の虜とせる蠻人の大將を虜の儘にデッダーの入口まで連て行く事に決し、其の事を手下等に言渡すに手下の不平は一方ならねど、又如何ともせん術無ければ、不勝無性に聽從ひ、然らば大將の護衞とし手下の中の屈強なる者十五人從ひ行かんと言出したり、是れ固より當然の事と云ひ且大將に護衞の附くは、場合に由りて一同の護衞とも成る譯なれば其の事を許し、直に種々の用意をなして此所を出立したり。

双方合せて廿四人の一行なれば、成る丈け廣く手を配りて、若しや砂の中に與助の足跡と見る可き物は無きや、と且尋ね且進み、頓て今朝未明に茂林が捕はれしと云ふ所まで來るに、成るほど此邊り一面に砂を蹂躙りたる跡あり、孰れが孰れとも見分難く、夫より又も幾里をか歩みたる後、一同より一町ほど横手に離れて歩み居たるオマアと云へる通辯、痛く喜ぶ樣子にて聲を揚げ「爰にアノ人の足跡が有りますよ」と叫びたり。茂林第一に其所へ馳せ行きて見るに、成るほど歐羅巴人の靴にて歩みしかと思はるゝ足跡、デ

ッダーの方に向き朧ながらに殘れるにぞ「アヽ有難い是で與助が見付つた」と早や當人の姿を認め得し程に喜び、續いて馳寄る平洲、寺森にも指示せば孰れも其言葉に相違無しと認めたり。

依て大事に其足跡を踪けて行くに、是れが眞に與助ならば彼れ餘ほど疲れ居たる者と見え、足と足との距離極めて不揃にして二尺餘り離れし所もあり、又一尺に足らぬ所も有り、疲れて蹌々跟々に馳せ去りたる樣、目に見る如く明かにて今更ら氣の毒なる想ひもせらる。斯て又少し行けば躓きしか手を杖きたる跡も見え、又撞と膝を据えて暫し息を繼し如き所さへ見ゆ、左こそ辛かりしには相違無きも何樣斯も足跡の明かに殘れるは幸ひなりと綿密に從ひ行くうち、彼れ與助は多少方角を取違へしか自然々々に右の方へ曲り、果はデッダーを指さずして、遙かに違ふ方を指し行きし如く思はるゝにぞ、茂林は誰れよりも心配し「ハテナ、彼れ誤つてメジナの方へ行つたか知らん」と云ひ猶通辯及び蠻人に聞合すに、決してメジナの方まで曲る氣遣ひ無し、其中に夜の明けし頃なれば矢張り海岸の方を指して行きしならんと云ふ。

又も幾哩を進みし後、一箇の綠島（オーシス）には達したり、綠島とは廣き砂地の中に、少し許

り砂ならぬ所ありて、水湧き草樹の生じたる所なり。其有樣は廣き海中に島あるに同じく、大洋を航海する船舶が島に達して風を避け、又呑水などを得るが如く沙漠を旅行する人々は此の綠島に着きて息ひ、爰にて晝寢もし食事をも爲し、天日の暑さを樹蔭に避けて、馬、駱駝をも休むるなり。與助の足跡此の綠島に上陸せしを見れば、彼れが爰に來りしは夜明けて後なること必定なり事に由れば今より僅に數時間の以前なりしやも知れず、夜中ならば沙漠の案內を知らぬ彼れが綠島を見出し得る筈も無し。

斯く語り合ひて一同は稍や見込の着きたるに力を得しも、此の綠島より與助が更に何れに向けて立ちたるや、平洲、茂林の兩人は何分にも疲勞甚だしく爰にも少し息まねば自ら綠島の周圍を檢め見る能はず、詮方無く馬を繫ぎて樹の蔭に身を橫へ、通譯を以て野蠻人に向ひ四方を能く檢めて見よと命じたるが、其間に寺森醫師は額の汗を推拭ひ、喘ぎ〳〵茂林の前に腰を卸し「コレ茂林君、若し爰で眠つては大變だよ、昨夜からの疲れが一時に出て、一步も動けぬ樣になる、眠るなら、デッダーへ着き、樂々と身を延ばして十時間以上眠らねば、サア夫れまで我慢したまへ、僕も疲れては居るけれど我慢するからして「イヤ眠りはせぬから十五分間、此儘に置いて呉れ給へ」『イヤ此儘置けば五分間で眠つて仕舞ふ、サア目を覺して勝負々々、コレサ僕は昨日一日歌牌を手に取らなんだ爲め、身體の肉が四五斤も落た氣がする、遙々君を救ひに行つたのも君を歌牌の相手と思ふ柄だ」ミ云ひ早や衣囊より歌牌一組を取出すに由り、茂林は呆れ果て「何だ君は、歌牌まで持つて來たのか」『爾サ、兵糧も呑水も總て忘れたが歌牌だけは持つて來た、サア起直つて勝負仕やう』『馬鹿な事を言給ふな、此樣な所で歌牌などゝ』此樣な所にて場所には構はぬ、契約書の第七條第八條を讀んで聞さうか」茂林は詮方無く寺森の召喚に應じ、暫し勝負を爭ひしが、其中に與助の足跡を檢めに遣はした

二十七

與助の足跡を尋ねに行きし彼の蠻人が穩かならぬ樣子にて歸り來りしは、氣遣はしき次第なれ

ば茂林は歌牌の手を罷め通辯亞利をして何事ぞと問はしむるに、與助が此緣島より出發せし足跡は有れど、十町と行かぬ中に其足跡全く消え失せて認む可からずとの事なり。纔數時間前に歩みたる足跡が爾う容易に消ゆる筈無しと云ふに、亞利は傍らより其譯を說き、否、此沙漠には時々異樣なる疾風の吹き過ざる事あり、恐ろしき勢ひを以て沙を浪の如くに捲き、或は山の如くに積上げ瞬く暇に人馬を生埋にする事あり、年々此風の爲に沙に埋められて死する者、幾人なるを知らずと云ふ。此言葉には傍らにて聞く平洲も驚き「では與助の行つた所で其樣な疾風が吹いたと云ふのか」「ハイ全く吹いたのです、所々に沙が畝の樣に高くなり、又低くなり、一切の跡が皆消えて居ます」茂林は猶更ら驚き「でも昨夜から左樣の風は吹かなんだが」「イヤ夫は分りません。疾風は沙漠一面に吹く事は稀で、大概は一ケ所を吹捲つて過るのです、遠く離れた所では唯だ微風が吹く位で分らぬ事も度々あります」「では與助も沙の中へ生埋に成つたどらうか」「夫は何うとも分りませんが、兎に角是れで足跡が絕たから最う尋ぬる事も出來ません、ハイ少しの目的も無いのです」

是には流石の寺森醫師まで、勝負半の歌牌を納めて「夫は大變だ、兎に角我々は玆で食事を濟ませ、充分腹を拵へた上、其の足跡の消えて居る所へ行き猶ほ先を尋ねて見やう」平「爾しやう茂「爾しやう」

是にて一同大急ぎに食事を濟ませたるが、與助の沙の中に生ながら埋られしかと思へば、疲れを厭ふ心も無く、早速立ちて又十町ほど行きて見るに野蠻人の知らせに違はず、疾風の吹過ぎし跡ありて足跡は全く消えたり。是れより先は孰れに向ひて尋ね行かん、少しも當度の無き事柄なれば一行空しく顏を合せて評議するに、此時蠻人一同は亦痛く驚く如く口々に何事をか言立るにぞ、平洲は亞利に向ひ「彼等は何を言つて居る」「大變ですよ、ズツと先の方を御覽成さい、又疾風が起つたと見え、沙を捲いて空の色まで變つて居ます」見れば成るほど彼方の空に、煙よりは濃く雲よりは赤く、漠々として立ち登る者あり、疾風の沙を捲けるに相違は無く、如之も其區域の次第に廣がる樣子なり。「アノ風は何うやら此方角へ向て廣がつて來る樣ですから吾々最早や玆には居られません、大急ぎでヂツダーへ逃返る一方です」大膽なる平洲も茂林も天災には敵す

る心無し「ア、運の盡だ」「與助の生死を突留めずに歸らねばならぬのか」寺森は考へつゝ「爾だ與助は到底助からぬ、先刻此邊を吹過たと云ふ疾風を逃れ得たなら丁度今起つたアノ疾風に襲はれて居る時分だ」「全く爾うです。」云う中にも人類より畜類は天然に身の危險を感じ知る力あり、馬も駱駝も益々厩がり來る赤黒き色を眺めて逃げ足と僞り、ガタガタと騷ぎ立つる樣、悲鳴を上ぐるよりも猶ほ物凄く、到底制するにも制し切れぬ程と云ひ、其中に早や常と變れる異樣の風、一同の顔を拂ふに至りたれば、最早や是れまでと斷念てヂツダーの力を指し一散に逃出せしは、誠に是非も無き事と云ふ可し。

逃ぐるに從ひ風足は益々早く一同を追來りたれど、馬も駱駝も必死にて、鞭撻たねども自ら走り、漸く逃脫けて日の暮に及びヂツダーの入口には着きたるが、若し一同にして逃初むること三十分ほど遲かりせば恐らく沙漠の底に沈み、未來永々掘り出さるゝ事の無き身と成しならん。斯てヂツダーの町に入れば一同蘇生の想ひにて、從ひ來りし野蠻人には大將を引渡して猶ほ幾何の品物を與へ、又前夜一同を案內せし一人のベドイン人には、平洲が約束せし如く精良の銃器彈

藥と馬とを與ふるに、此者だけは一同の德に懷き、一つは又猶ほ此上にも褒美に有附く場合は無きかとの慾心にて一同に從ひ來れり。

一同は先づ芽蘭夫人と帆浦女とを預けある領事館に到るに、領事も夫人も帆浦女も無事な顏を見て淚を流さぬ許りに喜びしも、與助の行衞終に分らずなりしを聞きては又心を痛むること一方ならず、去ればさて此上に何とせん術も無ければ唯だ手を拱ぐのみなりき。

二十八

與助が生死定かならずとは云へ、前後の事情より考へ見れば、九分までは死せし者なるべし、彼れが如く食物の用意さへ無く、炎天に沙漠の中を逃走らば如何ほど健康の人とても、渴きて死するか、餓て死するか將た疲れて死するか此三を免れ難し、況んや彼れの通りたる道筋に前後二回まで疾風の起りしからは、半死半生の彼れの身にて、逃脫け得しとは到底思はれぬ所なり、彼れは九分九厘、否十が十まで、此世の人には非ざるならんと、一同は心の底に斯く思へど誰とて

爾と口に出す勇氣無く、唯だ額を鳩めて考ふるのみなりしが、寺森醫師は平洲、茂林兩人に向ひ「イヤ未だ疾風が治まつたか治まらぬか、夫さへも分ろぬから茲で何と考へたとて仕方が無い、兎に角君達は昨夜來のアノ骨折で縱し心は張詰て居るにしても、身體は餘ほど疲れて居るから明朝まで眠り給へ、今眠らねば何の樣な病氣に成らうも知れぬ、僕は醫師の職業を以て忠告する、孰れにしても明朝までは何の工風を施す事も出來ぬから」と云ふに、領事も芽蘭夫人も尤もとし二人に懇々其事を勸むれば、二人も全く其身體の最早や堪得ぬ迄に疲れたるを覺ゆる際ゆえ、勸めに從ひ寢室へは退きたり。

獨り寺森醫師は、數年來歌牌に耽り二夜三夜の夜明しは屢試みたる事なれば他の二人ほどは疲れず後より愁々として退くに、先ほどより一同の話を聞き居たる帆浦女は猶ほ飽き足らぬと見え後を追ひ來りて「寺森さん貴方も定めしお疲れでせう」と言掛るにぞ「ハイ途中では早く歸つて眠り度いと思ひましたが、斯うして貴女のお顏を見れば疲れも眠さも殆ど忘れました」と答ふ、是れ兼てより茂林、平洲、寺森の三人が旅の徒然を紛す爲め帆浦女に戲るゝ口調にして殊更帆浦

女を嬉しがらせ其益々自惚るゝを見て樂しみとするが癖と爲りたれば、今は寺森は故と斯る慢しき言葉を吐きたるなり。場合が場合丈けに帆浦女は毎もより一入嬉しげに、猶ほ此醫師を引留めて、茂林を救ひたる現場の有樣など種々に問ひたるが、何さま深く寺森の言葉に感ぜし者と見え、夜に入りて此女が鄕里の親友に宛て認めたる手紙の一節に「三人とも無事に歸り來りしは嬉しく、今は三人悉く私の奴隷とも云ふ有樣にて唯だ私の機嫌を取らんとのみ勉むる中に寺森醫師は最も優しく私も其情に引かされ今は彼の人の歌牌の癖をまで見許す心と相成候、殊に三人の中此醫師だけ疲れも輕き樣子にて、健脚家と名を取りし私には斯く容易に疲れぬ人が最も艱もしく思はれ候」云々と記して有りしとぞ。亦以て帆浦女が如何なる心の女なるやを知る可く、是れより幾日の間は此女の眼最も多く寺森醫師に注ぎたりと云ふ。

夫は扨置き、翌朝茂林と平洲とは起出て廊下にて顏を合せ、歩むとも無く共に歩みて庭の樹影に行きたるが、茂林は猶ほ與助の身を氣遣ひ少し沈みたる樣子有れど、昨日の疲れ丈は全く忘れしに似たれば、平洲は頰笑みて「茂林君、君が與助の後を追ふて唯一人沙漠の暗へ走入た勇氣に

は感心したよ」「イヤ夫よりも君が沙漠の夜道を冒して僕を救ひに來た其勇氣と親切には猶ほ感心だ」「所が僕の行ひは勇氣でも親切でも何でも無い、本統を云へば何うか君が野蠻人に殺されて仕舞へば好いと斯う祈つて居た、君が死ぬれば僕一人の戰場で芽蘭夫人は競爭者無しに僕の手に落る譯だからサ。實に君を救ひに行くのが否で否で堪らなんだが唯巴里を立つ前に君と紳士らしく、友人らしく正當に競爭すると云ふ約束を結んだから、其約束に對し遺憾ながら救ひに行つたのサ」と云ひて最も快濶に打笑へば、茂林も同じく笑ひ「君が彌う打明ければ、僕とてもナニ勇氣が有つて沙漠へ入た譯では無く、實は芽蘭夫人から善心善行を以て競爭しろと云はれて居るゆへ、一番君を出拔いて勇氣を示し、芽蘭夫人に感心されやうと思つたから、深く前後の思慮も無く危い地へ踏み込んだのサ、何しろ巴里を出て以來、夫人の心が餘り公平で君にも僕にも傾かぬから、ズツト僕の方へ傾ける積で遣つた、夫だから僕は野蠻人に殺され掛けて居る間も、何うかして助かつて歸れば夫人の心が屹と僕の勇氣に傾くだらうと、內々嬉しい氣もせられた、所へ君が救ひに來てアノ通りの大手柄を現はしたから、僕は嬉しくも有り悔しくも有つた、扨は平洲奴

が己より一層上の勇氣を見せ、己よりも感心せられるのかと本統に妙な氣が仕たよ」と云ひて又笑ふは。二人とも流石芽蘭夫人に見立られし丈け、最と快活なる天性にして、又と得難き男の中の男と云ふ可し。

斯る所へ芽蘭夫人は、領事と共に最と心配氣に語らひつゝ現はれ來れば、二人は齊しく其傍へ進み寄るに、領事先づ口を開き「最う下僕與助の行衛は尋ねる丈け無益ですよ」と云ふ。

二十九

與助を尋ね求むるも無益なりと云ふ、領事の言葉を平洲文學士も茂林書學士も痛く怪しみ、中にも茂林は猶豫なく其の仔細を問ふに、領事は昨夜平洲、茂林等が寢たる後にて芽蘭夫人の請に由り、最も信任す可き人數名を雇ひ、沙漠に添ひたる要所々々へ遣はして聞合さしめたるに、其者等今朝早く歸り來り、孰れの土地へも沙漠より與助と思はるゝ旅人の逃げ來りし者無しと復命したり、殊に昨日の疾風はヂツダーより北の方にて、所々に起りたる爲めヂツダーへ向ひたる人

だけは助かりたるも、其北に向ひし人は孰れも沙の中に埋められしならんと云ふが、土地の人の鑑定にて、與助の足跡は即ちヂツダーより北に向ひ居たりとの事なれば、多分彼れも沙漠の底に沈みしならん、左すれば如何ほど尋ぬるとも其の死骸の在る塲所さへ知る由無からんとは、即ち領事の認むる所なり。

一同の心にも此鑑定に相違の有る可しと思はれず、去れば一同、深く悲しみて猶ほ數日の間、此領事館に留り、毎日人を遣はし、或は自ら行きなどして海岸より沙漠の境までに在る出口々々を聞合せたるも、何の消息無く、與助は全く死して沙葬せられたるに相違無し、茂林は與助の如き輕佻みの男を此の遠征に連れ來りたる我が非を悔る、是れが爲に一行の進みを滯らせては氣が濟まねば捨置きて出發せんと云ひ張り、平洲は之を慰めて、否與助を連來りしは一同の評議と承諾とを經たる者なれば、其責任は一同に在り、君の心配す可きに非ずと云ひ、夫人は又沙漠の孰れにて與助が死したるか、大凡そ其の場所の鑑定附く迄は出發し難しと云ひ、何時此所を立たるゝや知り難き有樣とは成りしが、茲に一同を驚かしたる一大事と云ふは、平洲等がベドイン人

を襲ひ其の頭を擒にして非常の功を奏したりとの噂が何時しか土地の政廳に達し、政廳にて我が領内を無斷にて蹂躙せられたりとの怒りを發したる事どもなり。總て土耳古政府を初め其下に在る政廳は、領内に向ひて少しも政治の行屆かざるに似ず、若し一私人が政府の爲し得ざる程の事を行へば、之を嫉みて其人を恨むこと一方ならず、最初若し平洲より政廳に向ひ我が一行の者蠻族に捕はれたれば政廳にて早速救ひ出だされんことを請ふと願ひ出でしならば、政廳は「左樣な事は政廳の知る所に非ず」と劫くるか、或は又萬が一、聞き屆くるとも決して救ひ得る事に非ず、二年も三年も捨て置きて果ては全く忘れ盡す事必定にて、其の代り一同に何の罪も無けれど、唯だ斯く政廳に願ひ出でずして私に手柄を立てたる爲め、無法なる政廳の怒りに觸れたるなり、政廳より既に領事館へ向ひ、宛かも罪人を尋ぬる如く、一同の居るや否やを問合せに來りたれば、領事も大に驚き一同に向ひ最早や此土地に長居す可からず、長居すれば如何ほど道理を陳ぶるとも道理の分らぬ政廳なれば、縱し一同を牢に投込み得ざるまでも必ず人民を煽起かして一方ならぬ寇を爲さしむるは必定ゆゑ、至急に出發せらる可く、其代り船にさへ乘込めば政廳は最早

や手の及ばぬ者こして思ひ切るが常なれば少しも恐るゝ所無しと、懇々と說きたるが、素より一同も此邊の政廳が屢不法極まる處置を行ふことを知れば、今は詮方無しと云ひ、輿助の死せし場所を知り得ぬ儘にて出發する事とはなれり。

出發するに臨み夫人は領事に、第一、輿助の死所を充分に詮索すること、第二、其分り次第に一行の行先と本國政府とへ知らせること、第三、若し死體まで分らば改葬して碑を建つること、此三箇條を堅く頼み相當の費用をまで殘し置きてスアキム行の船には乘りしが、後にて聞けば若し一日を猶豫せば全く一同、政廳の手に捕縛せらるゝ處なりしこ云ふ。

茲よりスアキムに到るは是れ紅海の最も廣き所を横ぎるなり、スアキムは一同が亞弗利加の蠻地に入込む第一の關門なれば、眞の遠征は是れより初まる物とも云ふべし。

三十

チツダーを發したる、芽蘭夫人の一行は紅海の最も廣き所を横切りて無事に亞弗利加の東岸なるスアキムには着きたり。是れ實に千八百七十二年十一月六日の事なりき。

スアキムは埃及の東南端に在り、昔は土耳古の領地にして、政治の行屆かざるが爲め文明の何たるを知らざりしも、其後埃及の領に歸し文明國人も多少は入り込むより、文物稍や更まり煉瓦家屋も有り電信も有り、殊に此土地の一大進歩として知られしは水道の布設なり、本來飲水に乏しき地にして昔より女を水汲人足と爲し、燒くが如き炎天に、女の頭上に水桶を戴かしめ遠く沙漠の外より清水を汲み來らしむる、其痛はしき有樣は、世界を通じて女子虐待の一例に數へられしが、歐羅巴の人々見るに見兼ね、埃及政府に干渉して水道を作らしめ、女の苦役を免れしむる事と爲せしに、幸ひ此土地には不正なる鑄鐵會社も無かりしと見え、差障り無く工事も運び間も無く其業を竣へたれば、市民其の澤に霑ふこと一方ならずと云ふ。

夫は扨置き一行の茲に着するや、既に埃及政府より通知の有りし事と見え、地方長官マンタスバと云へる者數多の屬僚を隨へて出迎へ、旅館も用意して有りとて市内最良の宿屋に案内したり總て此地に上陸する探險者は茲にて人足を雇入れ或は駱駝、天幕、其外必要の物を整へなどし

て金錢を落して去ること他の旅客より多ければ、土地の人々も探險隊と聞きて福神の來りし如く喜ぶが常なりとか。去れば一同も思ひしより萬事に好き都合を得、內地に分入る用意悉く調ひたれど、何故か芽蘭夫人は急に出發せんとはせず、一日々々と送る樣、何人をか待合すにやと疑はるゝ許りなれば茂林は悶かしく思ひて仔細を問ふに、ヂッダーより與助の生死を知らせ來るやも知れねば十日間は待たねばならずと云ふ、茂林は愈々迫立て「與助は死んだに極つて居ます何時まで玆に待たとて何の甲斐も有りませんから」と云ふに夫人は最靜かに「イヽエ死んだに極つた者としても其場所が分らねば何時までも疑ひが殘りて氣に成ります、是れより先へ進めばヂッダーの領事から手紙を出しても容易には屆きませぬ故切て十日だけは玆に待つ事と致しませう」と云ひ、聞入るゝ樣子無きは流石に女の優しき天性より出る憐みの心なる可きも、一つは又此夫人、沙漠の中に所夫を失ひ其場所の分らぬ爲め、今も猶胸に一種の疑ひを存し、自ら心を苦しむる塲合も多きゆゑ、其の事につまされて與助の生死も明かに聞糺し度く思ふなるべし。

其中に定めの十日は經ちたれどヂッダーの領事より何の知らせも有らされば、夫人は最早や詮

方無しと、漸く此地を立ちたるが、指して行方はナイル河の東岸に在る漠々村なり、山を越ゑ沙漠を踏みて漠々村まで行き同所より河船に乘り、ナイル河を溯りて可通無府に至り、夫より眞の鬼域に分て入る目的なり。

スアキムより漠々村まで路程如何ほどなるや、此邊一體未だ實際の測量を經ず、地圖も之を記さず地誌も之を云はざれど千八百六十年に此道を通りたる獨逸人「パーマン」氏は一百十三時間の歩程なりと記し。同じ六十四年に旅行せし、佛國人ユーリン氏は急げば一百零八時間に達せらるゝと記し。同じ六十六年に通行せし獨逸人シュウエインハース氏は路程計にて凡そ一百七十五哩と計りたるが、此の路程計は海上にて用ふる者なりしかば其の哩と云ふは海里のことなるべし（一海里な日本の十七町餘と覺ゆ）

寺森、茂林、平洲の三人は馬に乘り、芽蘭夫人は驢馬に乘り其の他の雇人達は荷物と共に駱駝に駄者は槍、又は戟などを持ち警護の如く從ひて出發せしが、獨り帆浦女は今こそ日頃の健脚を試みる時來にけれと徒歩にて一同の先に立ち「此邊の馬や駱駝は私の足から見れば龜の子の歩む

様です」と云ひ、枯枝の如き優しき足を運び初むるに、其の達者なること眞に比類無く、行く手に遊ぶ鳥なども大抵は驚きて飛去る許りなれば寺森と茂林は馬の上にて顔見合せ「折角僕は博物の研究を初めやうと思ふに帆浦女がアノ通り先に立つて鳥などを追逃がしては仕様が無い」「本統に、癖の悪い狩犬を小鳥獵に連れて行く様な者だ、僕も途中の鳥獣を大抵は書留る積だけれど仕方が無い」と互に愚痴を滴すも可笑し。

最初の日は熱さの餘り甚だしき爲め沙漠の入口なるシンゲートと云ふ所に一泊したり。シンゲートは埃及領の盡る所に在る堡塞にして、之を守る長官も一同を能く遇做し、從者の中に下女を加へずば、此先萬事に不便利なりとて、此の土地に來り居る夷尼亞の女三人を雇ひ呉れたり、其の皮膚の黑くして光澤あること殆ど譬へ様の無き程なれば、翌朝又もシンゲートを出發するに及び寺森醫師は醫學上より其の皮膚を研究せんと云ひ一同より後れて其女中に附添ひて馬を進むるに斯と見る帆浦女は此程より專ら心を寺森に屬し居し事なれば、其身が黑奴の婦人に見替られしと思ひてか、痛く打腹立ちし樣子にて、歩むこと益々早く芽蘭夫人が氣遣ひて幾度か人を馳せて

呼留めしめたる爲めに漸く其姿を見失はざるを得たるも、此夜一同ケグラブと稱する綠島に着き天幕を張り野宿を爲し翌日起出て出發せんとする時となり、帆浦女一人戯れに行きしか、全く紛失して更に影だも留めざるに心附きたり。

三十一

扨此一行が路こせるスアキムより漠々村に到る間は、亞國旅行中の最も無事安樂なる所にして驚く可き大沙漠など有るに非ず、山と山との間に在る廣き谷とも稱す可き沙地にして、外に遙ひ去る岐路とても無し、中程に至るまで一歩々々徐々と上る道にして、唯だ少し困難なるは途中に呑水の少き一事なり、人類は魚に非ざるも、水無き所には住む能はず、呑水無ければ從つて人家も無けれど、或は十哩、或は二十哩にして水湧き草木の生ずる綠島あり（綠島の事は前に出づ）去れど綠島とは、唯だ大海の如き廣き限り無き沙原に在り、稱ふる名にして、此邊りは海の如き沙原にあらで谷間の地なれば、綠島とは稱し難く單に「井」（ウエル）と稱ふるとぞ、井の有る所、

即ち人家の在る所にして、一行の泊たるケグラブと云へるも一種の小村なりとは雖も、之をもケグラブの村とは云はずケグラブの井と云ふ、漢々村に到るまで村の名の附く所は一も無く、皆な何々の井と稱せらるゝ小部落なり、唯だ漠々村の少し前に到りて左右の山全く盡き、初て眞の沙原となり、旅行家大に惱めども夫も長き間には非ず、程なくナイル河の岸に達し、漢々村には入り込むなり、去れど其の村に至るまでの事、唯だ梗概を記して止む可し。

扨もケグラブの井に宿りたる翌朝、帆浦女の姿見えざれば芽蘭夫人は驚くこと一方ならず、彼の女の寢たる天幕の番人に聞くも、昨夜來何の變りし事をも認めざりしと云ふのみ、夫人は猶眞の戀地にも入込ますして飽に從者與助を失ひ、一方ならず心配せる折なるに、又も帆浦女を失ひては益々由々しき事柄なればと云ひ、如何にせんかと平洲、茂林等に相談すれど、誠に如何ともせん方なし、長く跡留まりて詮索せんにも、土地狹くして一同の食事に充つる品さへも得るに由無く、用意せる糧食の盡ると共に一同餓死ぬのみなれば、兎に角食物を求め得る漠々村まで行き、其上の評議にせんと云ふ事に決し一同絃を立たるが、平洲と、茂林とは少し氣の附きえる事も有

れば、言合せて馬に鞭あて一同より先に、一散に驅け出したり。

多分は帆浦女が今朝早くに起出でて、誰も知らぬ間に唯一人、出發せしならんと思ふての事なる可し。

斯て兩人は息をも繼かずに一時間走りたれど、帆浦女の姿は見えず、殊に此邊は山と山の間益々狹く、土や石多くして沙少ければ足跡さへ見るに由無し、更に又一時間走らせたるに猶姿を見認る能はず、如何に彼女が健脚なればとて、騎馬にて二時間追掛けて猶ほ見當らぬ筈は無く、二人とも漸く不安心の思ひを增したれど、今と爲りては猶ほ此上に追掛て見る一方なれば、又も二十分ほど馬を走するに、初めて二人の目に留まるは、遙に彼方の谷間に枯木の如く痩せたる人、右にも左にも傾かず、唯だ前へ〳〵と間斷なく進み行く姿なり、二人は馬と共に喘ぎつゝ、笑ひて「アレだ〳〵」と云ひ猶ほ間近く追行て、高く「帆浦女よ、帆浦女よ」と呼立つれど、其聲の耳に入らぬ如く進みて止まず 平「本統に不思議な足だよ、何でも時計の螺旋の樣な仕掛に成つて居て一たび捲締めれば緩急も無く進行すると見える」茂「ア、全く爾だ、呼ぶとも無益だから其の螺旋

を腕力で引留るより外仕方が無いと云ひ、茂林は又一散に走せ行きて「コレ帆浦女よ」と云ひて其左の手を取るに女は猶ほ足を留めず、馬諸共に茂林を引去らん勢ひなりしも、頓て平洲が追附きて同じく右の手を取るに及び、漸く留り、最と腹立しき眼にて貴方は私を捕へて何を成さるる」問ふ聲まで嚴重なり、茂林は腫物に障るほどの用心にて「何をとて吾々一同、何れほど心配したか知れません、貴女の姿が見え無いので」「オヤ私の事を夫ほど心配して下されますか、成程お二人は心配して下さつても、寺森さん丈は平氣でせう」異樣なる言葉を聞くもの哉と怪しみつゝ「何うして、寺森とても皆同じ事ですよ」「では定めて黒奴の女に嫌はれた爲でせう」二人は初て先に見込みし通りなるを知りたり。

昨夜寺森が黒奴婦人の皮膚を研究せんとて其許に至り、帆浦女の傍には來らざりし爲め、先頃以來心に寺森を我人と定め居たる帆浦女は、痛く其の仕向を恨みたるなり「でも何故に貴女は斯う早く歩むのです」「ハイ心の中に辛い事が有ますから、身體の疲れ盡すほど歩めば、心も少しは紛れるかと思ひまして」「貴女は心に、夫れほど辛い事が有ますか」帆浦女は呆れし如き調子にて

「オヤ夫が、貴方がたには分りませんか」宛も上天をも證人に呼降ろさんとする如く天を仰いで言出るにぞ「イヤ何れほど辛い事が有るにしても、私と茂林の仕た事では無く、何も二人が引留るのを猶ほ引摺て歩むには及びますまい、二人は全く貴女の身を氣遣つて尋ねて來たのですから」と此上も無く優しく云ふに、此時まで猶ほ隙も有らば走出さんと悶掻きし其身體を鎭め「アヽ夫は爾です、お二人を振拂はうとしたのは私の過ちでした」「では茲で後から來る一同を暫く待ちませう」と云ふに、猶ほ我が足は步み不足に、此通り不平なりとの意を示さんとする如く、靴の踵にて石の上を踏鳴すにぞ「イヤ今に初めぬ貴女の健脚には感服の外は有りません、最う我々の馬の足が酷く疲れて來ましたから、馬を可愛想と思ふならば何うか暫し此所でお待下さい」と云ふに我足の馬よりも達者なるを證明し得て初めて安心せし如く「だから此邊の馬や、駱駝は駄の子の足よりも活智が無いと私が申したでは有りませんか」と、漸く承知の色を見せ「では後の人を待つ間に私は食事を致しませう」と云ひ胴に卷きたる糧食を取出して喫初むるに、例令心には辛き所ありとも、胃の腑には何の痛みも無く、是れ亦馬ほど達者なることを示したり。

三十二

帆浦女が食事を初めたる間に、平洲文學士は首尾能く此女を見認めたる次第を、芽蘭夫人に知らせて安心せしめんと、馬にて元來し道へ引返したるが、跡に帆浦女と差向ひに殘りたる茂林讀學士は、成る可く此女の心を慰めて遣らんと思ひ、頻りに平洲の事を褒め立て、寺森醫師よりも平洲の方が深く御身に感服し、影に廻れば唯だ御身の事のみを噂せりなど、宛も平洲が全く彼女に心醉せるが如く仄かすに、帆浦女の心は徐々と解け來り、夫なら不實なる寺森を思ふより、黒奴婦人などには心を寄せざる平洲文學士を意中の人に定めんと、斯く思ひ直して自ら心の痛みを癒し得たりと見え、良ありて平洲が芽蘭夫人等の一同を迎へて再び玆に來りし時は、帆浦女の樣子唯だ平洲に向ひてのみ優しく、不實と認めし寺森醫師には見向もせねば、從つて恨を云はんともせず猶ほ是れより進み〳〵て一同晝食の爲めに憩ふ時と爲り、寺森、平洲、茂林は帆浦女と稍や離れたる所に會したれば、茂林は先程帆浦女の心を、巧に平洲へ振向たる次第を明すに、寺森

醫師は喜びて笑ふに引替へ、平洲は最と迷惑氣に「夫は餘り酷いよ」と云ひ、眉を顰めて一種の相談を持出し、食事と共に評議して漸く決したる一條と云ふは、今まで三人とも旅の徒然を紛す爲め、戯れに帆浦女に向ひて銘々宛も深き心の有る如く見せ掛しも、是れ極めて險呑なる戯れにして若し旅行中に、眞に帆浦女の心が此中の一人に定まりては由々しき大事、去ればとて急に一同より餘所々々しく仕向ては、彼女の心柄として如何ほど怒りて、如何なる事を仕出さんも知り難ければ、三人互に彼女の心を他に向んとのみ勉め、宛も茂林が平洲に振向けたる如く、平洲は勉めて彼女の心を元の寺森に振向んとし、寺森は又勉めて茂林に振向けんとせば、彼の女は中に立て孰れとも決する能はず、平洲の言葉を誠と思ひて寺森の元に行けば、我に非ず茂林なりと云はれ、茂林の元に行けば又我に非ず平洲なりと云はれ、果は心を三人へ平均に配り附け、孰れとも決する能はずして止む可しと云ふに在りたり、斯る埒無き事をまで評議するも、亦是れ旅の徒然より出ることとなるべし。

食後又進みて終に「ローアイ」の井と云へる所に達し一泊する事と爲りたるが、井の邊に住む土

人等は、是れまでとても白人種の遠征隊が折々玆を過るに逢ひ、多少は白人の親しむ可きを知る者なれば、一同の張りし天幕を見て、村中擧つて三十人ほどの男女老若集ひ來り、口々に何事をか叫び立つるにぞ、通辯弗利に、彼等は何を云ひつゝあるやと問へば、「醫者は居らぬか藥を吳れ、藥を吳れ」と叫び立つるとの事なり、寺森は不審氣に「此村の奴等は皆病人だらうか」と云へば、平洲は思ひ出し如く「アヽ僕の讀んだ誰かの旅行記に出て居たよ、此井に休んだ時、藥だと云つて砂糖を與へた處、木の實より外に甘い物の有るを知らぬ土人等は、我も〳〵と喜んで同じ藥を貰ひに來たと有つた、矢張り彼等は、白人の醫者なら甘い藥を吳れる者と思ひ、一同で遣つて來たのだ」と云ふ、醫師は頷き「夫れなら好い工風が有る」と云ひ、手提の中より何やらん水藥を取出して、之を又砂糖水に和ぜ、通辯をして「一同舌を出せ」と云はしむるに、三十人一時に口を開き、舌を突出して待つ有樣、實に異樣の見物なれば、此方の一同、餘りの可笑しさに殆ど一日の疲れをも忘れしが、寺森醫師は眞面目に其舌を見比べて「フム病人は一人も無い、是は桂皮舐だから甘くも有り辛くも有り、唯の砂糖とは味が違ふだらう」と呟きつゝ、銘々の舌へ一匙

づゝ注ぎて廻るに、孰れも嬉しげに叫び、小躍りして立去りたり。

後にて亞利に聞けば「此醫者の方が前のより上手だ」と褒め立る言葉なりしとぞ。

翌朝も亦來りたれば又も同じ藥を施し、扨て愈出發せんとするに馬の中一頭、病に罹りたる物あり、一日玆に休まずば其病更に重りて廢物と爲る恐れありとの事なるにぞ、詮方無く一行野宿の儘に逗留する事とはなりしが、此日は朝の中より一天異樣に曇りて、熱きこと蒸すが如く、殆ど天幕の中にのみ居り難き心地せらるれば、平洲文學士の發意にて、右手に當る山の半腹に上り此邊の景色を眺め來らんと云ふに決したり。此所の山は、昔フアロア王の登りしと舊記にも記し有る、ガレット山にして、山骨皆な花崗石より成り、多く他の國には見ざる實なり、半腹の所々に平地あり、一同の野宿せる所より二哩程にて麓まで行かれ、麓より又二哩も行けば其平地に達せらるゝ如く見ゆるにぞ、孰れも賛成するが中に、殊更ら帆浦女は平洲の發議と見て喜ぶこと限り無く「皆樣が若しお厭ならば、私は獨りでも平洲さんのお供をします、一日天幕の中へ此足を眠らせて置く事は迚も私には出來ません」と云へり、去れど一同は此山に如何ほどの危險あ

るやを豫想し得ざりしは又悶む可き事共なり。

三十三

此ガレット山は一同の路に横はる最後の山なり、山の少き亞弗利加の內地なれば、此山を過ぎて後は再び山に登らんとしても容易には得べからず。去れば平洲、茂林、寺森と芽圃夫人及び帆浦女を合せ五人にて、通辯亞利の外に土人の從者一人を引連、之に辨當などを持たせ徒歩にて出發せしが、山は見掛より遠き者にて、麓まで二哩ばかりと思ひしは四哩に餘り、晝少し過る頃に漸く麓に達したり。此山には天然の井、數多あり、中には水の澁たるも多けれど、幸ひ麓より僅ばかり上りし所に岩清水のある泉を見出したれば、茲にて汗を拭ひ食事を濟ませ、土人の從者には歸りの用意に駱駝二頭ほど連來りて茲に待つ可しと命じ置き、四方の景色を眺めつゝ登る中に晝の間より曇り居し空の色は一入暗くなりて、雷さへ鳴き初たれど、通辯亞利は此邊りの天氣、時に由りては忽ち荒れ出だし、海を覆へすほどの大雨など降る事も有と云へば、今より引返すが

宜しからずやとの意を述ぶるに、歐羅巴の人は雨浴を好む癖ありて、殊には幾日來赤道眞近の炎天に焙られたる末なれば、大雨は如何ほどにても恐れずと一人が云へば一人は又、此邊の雨は如何ほど强くとも長く續く事は無く、强ければ强きほど早く止み、一時間と經ぬうちに天氣となるが常なれば、少しも氣遣ふに及ばずと云ひ、平氣にて目指し來りし半腹の平地には着きたるが、弦ならば一方の景色を見晴らし得べしと思ひしに、雲垂れ來りて一同の身を蔽ひ、時々强く光る電光さへ麓の方まで射透さず、唯だ雲に映りて天地一面火焰に塞がれしかと思はるゝ許りとなり電光止む時は纔に人の顏を辨じ得る位なれば、一同も夫とは云はぬど窃に亞利の言葉に從はざりしを悔ゆるのみ。頓て雨の前觸れなる可く一陣の怪風颯と吹き來るに、薄き雲の去る後に濃き雲來り、暗さ益々加ふる許りなるが上、其風の身に接る心持は寒しとも冷やかとも譬ふる語なく、青深き煙霧を過ぎて來るが爲にもや、唯だゾツと惡寒を催し氣味惡きこと限り無し、此上に頭より雨を浴ては到底も健康の繋がるゝ事に非ずと、一同怖氣の立つ間も無く、風に從ひて暴雨、天を傾けて注ぎ來り其の音は瀧の如く滿山に響きて凄じ、一同は知らず〳〵肉蒲ひて一團と

爲り、切ては體と體との間だけも水と寒さの通さぬを計るに、雷神亦益々威を揮ひ、直に一同の頭に來りて鳴るに似たり、一同活たるか死したるか、唯恐ろしさに自ら知らぬ許りなり。

斯る中に通辯亞利は先刻より一同の中を放れ、隱れ場所を探さんとて孰れへか立去り居たるが、歸り來りて一同に向ひ、是より一町ほど上に當り岩の間に斜に降り入る大穴あり、多分は古き井戸にして水の涸たる物なる可く、上に傘の如き巨石あり、裡に入りて雨風を防ぐに好ければ直に其所へ避られよと云ふ、一同は雨の聲、雷の聲に、殆ど聾したる耳にて、縷に其聲を聞分得て、早速亞利に從ひ行き、其の大穴の中に斜に降り入るに、獨り茂林書學士のみは虫の知らすと云ふ者か、何こやら其穴に入る心無く既に斯くまで濡れしからは、此上濡るゝも凍ゆるも厭はずと思ひ、穴より十間ほど離れし所に、立しまゝ殘り居たるが、雨も風も雷も少しの絕間なく、荒れしきるのみにして此方の谷間、彼方の峰に、雷に打たれて樹裂け、崖頽るゝ音、耳を劈く程に聞ゑ、頓て又一際鋭く射る電光と共に、霹靂の響き天地に轟き渡りたれば、扨は我が身邊に落しかと、思ふよりも猶ほ早く目に留るは、芽蘭夫人を初め一同の隱れたる大穴を、傘の如くに蔽

へる花崗石の裂け碎けて穴の中へ落て入るも、斯まで激しく碎く事を得じ、間ふ迄も無く雷神の其巖頭に落たる物なれば、夫人等一同は碎け入たる岩に打たれて唯一打に殺されしこと最早や疑ふ所も無し、茂林書學士は「殘念だ」と一聲、悲鳴を擧げ、轉がる如くに其所へ走せ行きて穴の中を覗くに、今まで岩に堰かれて其上に湛へたる水、一時に穴の中に流れ入りて瀧よりも急なり、穴一面に浪怒りて、捲上げ捲返す樣瀧壺に異ならず。

三十四

芽蘭夫人等の逃込し空井戸に、大石の碎けて降り込みしのみならず、今は水さへ落て入り、浪の捲返す有樣なれば、扨と見る茂林は聲を放て泣き、「ア、夫人も平洲も寺森も此穴の底で大石に打殺されたか、此樣な事と知れば己も穴の中へ這入り皆と一緒に死ぬ者を、エ、唯だ一人生殘つたが恨めし」いと云ひ、又も穴の中を差覗くに、逆捲水に一人の死骸だも浮び出ざるは、全く落入りし石の下に壓死せし爲なる可し、實にも無慘に堪へざれば茂林は兎に角も、此穴の底に

潜り水の中を檢め見んとの心を起したり、今此底に潜り入れば助かりて出來る見込は無く、一同こ悲しき最後を共にするのみなれど、茂林の心にては死して一同の後を追ふが、生存うより遙に増しなりと思へるなり。去れば茂林は既に飛入らん覺悟にて身を穴の方へ突出すに、此の時幾間か背後に當りて「旦那は居ませんか、茂林さんは居ませんか」と呼ぶ聲あり、呼ばる可しとは思ひも寄らぬ折なれば、驚きて耳を澄すに、確に通辯亜利の聲なり、扨は彼一同を案内して此の穴に入りながら、其身一人は僥倖にも何かの故ありて、彼の大石の落る前に此の穴より出たるものこと見ゆ、彼れが如き者一人、我が外に生殘ることも我身に取りて何かせん、夫人死し、平洲死し、寺森死し、帆浦女までも死したる後に、我れ生殘る心無しと、死する決心は少しも動かず、再び身を轉らせて飛込まんとするに、又も遙か下の方に當りて「茂林君、茂林君」と聲を揃へて呼立るは、確に平洲及び寺森の兩人なり、

彼等は茂林に先立て玆に登り、此穴に入る所を茂林の目にて確かに見認し事なれば、此穴にて死せしこと必定なるに、如何にして穴の外に在るや、彼等が此穴に入りてより、大石の落しまで

は實に僅の間にして、其前に脫け出る暇は無かりき、縱しや其暇ありて落雷の前に脫け出しとするも、茂林より山の上の方に在る可く、下の方に居る筈無し、扨は我身は餘りの驚きに發狂し、根も無き妄想心に起り、無き聲までも聞ゆるにや、然り強く心を動かせし場合には爾る例しも有りこ聞けば、定めし自分の妄想より斯る聲を聞く者ならんと、茂林は我心を鎭むるに、平洲、寺森の呼ぶ聲は益々近く來りて、又疑ふ可くも有らねば、初めて背後に向直り「オ、茂林は玆に居るよ、平洲君か、寺森君か」と云ひ、我知らず其聲の聞ゆる方を指して走るに、間も無く兩人の姿を見認め得たり、茂林は心配氣に身を震はせつゝ「芽蘭夫人は死なれたのか」イヤ無事で居られる」寺森も言葉を添へ「誰も死にはせぬ帆浦女までも無難だ」茂林は猶ほ怪しさに堪へざれど、無事と聞く嬉しさに心の重荷を卸し「では何處に居る、何處に居る」と迫込みて問ふも無理ならず「イヤ此少し下まで、先刻の案內者が、此天氣に我々の身を氣遣ひ樣子を見に上つて來たから、夫に夫人と帆浦女を托して有る、夫人も帆浦女も少し皮膚を引擦かれて出血はしたけれど、ナニ傷と云ふ程の事は無い」茂林は心の稍や鎭まるに從ひて平洲、寺森の姿を見るに、此二人も手足

や顔などに引掻し如き傷あり、猶ほ血の出る有様なれば「全體君方や夫人達は何うしたのだ、是ほど合點の行かぬ事は無い、アノ空井戸へ這入つたと見て少し經つと落雷に大きな石が碎けて落込み、引續いて其石に壓れて居た水が瀧の樣に注ぎ込んだから無論石に壓れて死んだ事と思つたのに、此通り生て居る、多分は石の落ぬ前にアノ穴から出たので有らうが、夫にしては多少怪我して居るが益々不思議だ」「ナニ大石の碎けて落入た時に僕等は猶だ穴の中に居た、居たけれどアノ穴は空井戸では無く岩と岩との間の洞穴で、下へ降り附けば穴が横に曲つて平と爲り、初に君が立て居た此下の平地まで抜けて居る、此穴へ流れ込む水は下の平地へ注ぎ出るのだ、我々穴の中へ入り、降込む雨を避ける爲めズツト横の方へ奥深く曲り込んで居たから、石は落ても石より三四間離れて居た、何しろ落雷と落石の物音には驚いたが、直に上より水が來て我々を突倒し押流した、一同起き直つて、又突き倒され、穴の中を這ふやら流されるやらして、奥へ奥へと突き込まれると、意外にも平地へ轉がり出た、眞にアノ穴が横に抜け通つて居たから助かつたが、若し奥の行詰つた穴なら我々は今頃既に穴の底に水葬せられて居る所サ」實に意外なる幸ひなりき

彼の穴眞に他へ拔通らぬ空井戸なりせば、一同の運命全く茂林の思ひ詰し通りと爲る所なりき、茂林は漸く合點行き「其樣な穴で有つたのは一同の運の强い所だ、夫にしても夫人の怪我は全く氣遣ふ程で無いのか」寺森は醫者だけに「夫は僕が保證する、幸ひ旅行に嵩れた帆浦女が毎に繃帶など用意して居る丈に、既に彼女の手が夫々手當を施して居る、繃帶を掛けるなどの業は帆浦女の方が僕よりも馴れて居る」平洲は口を添へ、「所で夫人は自分の怪我を何とも思はず唯だ君の安否をのみ氣遣ひ、若しアノ落雷で君の身に變は無いかと此通り我々に命じ君を尋ぬて寄越したのだ、僕は寧ろ君に成替り夫人に氣遣はれ度い」と云ふは平洲は早や既に夫人の心茂林に傾きしかと思ひ、我知らず口に出る嫉妬の一端にも有らんか、斯る嫉妬は折に觸れて兩人とも心に動く事あれど夫人の爲すこと全く公平なるが爲め孰れも唯だ一時にて消ゆるなり、平洲も斯は云ひし者の、言葉の終ると共に我が心の過ちを悔ねしと見え「容し給へ」と云はぬ許りに茂林の手を握りしめたり、茂林とても素より意には留めず「では早く夫人の許へ行き無事を報じて安心させやう」「サア行かう」と歩み初める折しも寺森醫師の顔に異樣なる笑の現れたれば、茂林は愕として「コ

レ寺森君、君は此不幸に附込汝で勝負を持出す積だネ』『爾だ』『今若し眞に僕を召喚すれば僕は少しの猶豫も無く君を縊殺すよ』寺森は打笑ひ「安心し給へ、昨日の勝負に僕が勝たから、今日は君より召喚せられるので、僕から召喚する權利は無い、僕は今、寧ろ昨日負けて置けば汝で君を召喚して遣る者をと思ひ出し、殘念でツイ涎が流れ相に成つたから笑つたのサ」茂林はヤツと安心し「アヽ夫なら能い僕が今日の權利者か、では僕から召喚して賭をする、サア君、早く夫人の居る所まで驅けて往ツ競だ」寺森は聞くより早く「好し來た」と云ひ一散に走り出せり。茂林は悠々と後に笑ひて平洲に向ひ「斯うして寺森を走らせれば一刻でも早く夫人に僕の無事が分る、僕が息喘切て走る姿を夫人に見られるは感心せぬから、實は勝負に負けた積りで寺森を飛脚に立てたのだ」平洲も「成るほど夫は旨い考へだ」とて打解けて笑ひしは、眞に兄弟より猶睦まじき戀の敵

三十五

實に芽蘭夫人等一同が穴の中にて死せざるを得しは、奇中の奇とも稱す可き天幸なれば、平洲と茂林は猶も其次第を問ひつ、答へつゝ五に運の盡かりしを祝しつゝ芽蘭夫人の許に至るに、夫人は既に走來りたる寺森醫師より茂林の無事を聞き、大に心配を寛めしとは云へ、猶ほ心の落着き得ぬ折柄とて、青冷し顏色にて此方をのみ眺め居たるが、茂林を見るよりも兩の手を伸べ握らしめて「本統に吾々は、能く逃れましたよ」と云ふ。「實に私は全く貴女方が此世の人では有るまいと思ひ、アノ穴へ飛込んで黄泉へ追掛ける積でした」平洲も傍より言葉を合せ「全くです、私が呼掛けた時、茂林は穴へ身を投げやうとして居ました、若し私の聲が一分間遲かつたなら彼れこそ今頃冥途の人です」夫人は聞き得て一同斯まで危き眞際に臨みしかと思ひては又今更の如く心を動かし、震へる聲にて「アヽ私が此山へ上るのを同意したのが過ちでした、我々は未だ徒に命を危くしては相濟まぬ身の上です」と云ふ、其言葉には我心の過ちより、又と得難き二人の勇士を失はんとせし事を悔ゆる心の充分に明かなれば、二人は却つて嬉しさの胸に充ち、我知らず双方より夫人の左右の手を取りて其甲に接吻したり。斯る情に脆き振舞は夫人の衆て嚴禁せ

し所なれど、此時のみは夫人自らさへも二人の手を振拂ふ勇氣無かりき。是より茂林は更に帆浦女の事を思ひ出し、又一方を振向に鐵張の如き彼女の身體も多少の擦傷を免れ得さりしと見え、今や寺森醫師に繃帶を受くる所にして、醫師は先頃三人互に此女の心を他に振向けんと約束せし其言葉を堅く守り「イヤ最う茂林講學士が貴女が事のみを氣遣ひ、何うか帆浦女に怪我さへ無ければ已は死んでも構はぬなど云つて居ました、茂林は陰では最う貴女の事ばかり言つて居ます」など、噪々茂林の功能を說立る所なりしかば、茂林は平洲と顏見合せて苦笑ひして止たり。

左右する間に雨收まり雲散じて、變り易き亞弗利加の天氣は元の晴天に復したれば、一同は絃を引上げ、日入て後に天幕の所まで歸り着きしが、一夜を明して翌朝は、病に罹りたる馬などもあり、赤道よりする天日を反射して或時は白皚々たる銀世界と爲り、又或時は燦爛として精金を大方健康に返りたれば、再び隊伍を正して此所を出發したり。今までは山と山との間なりしも「オバック」の井と云ふ所を過ぐれば、山も無く林も無く唯だ漫々たる沙原にして、其幅員は有名なる亞國內地の大沙漠に比ぶ可くも有らねど、兎に角、二十里の餘に廣がり、殊に其沙の細なること世界中此土地を以て第一とする程なれば、少しの風にも吹集められて忽ち目の前に沙の山を

築き、又吹散らされて一面の平地と爲るなど變幻殆ど究まり無し、猶ほ又此邊の沙は最も強き光敷しにも似たれば、馴れざる旅人の目を害なふこと一方ならず、一同青色又は黑色の眼鏡を掛て進む程なれば、旅行の困難譬ふるに物なけれど、之よりも更に困難なるは沙の深さにして、淺き所も馬の足一尺以上を埋め、深き所は馬の腹、殆ど地に接する事すらあり、一步を拔けば一步は沒し進まんとすれば退き、一里を進むに平地の十里を行くほどの苦勞ありこぞ。

去れば二十餘里の沙漠なれども、渡り盡すに六日を費し、一週間目に漸く「アボー、タガー」の井と云へる所に達したり、茲は一面にナイル大河の餘澤を受くる草原にして、沙漠より茲に移れば殆ど地獄より極樂に入る想ひあり、一行は幾分の力を恢復し得て、最早や目指せる漢々村も近きことなれば、知らず知らず馬の足を早むるに、「アボー、タガー」の井より二里餘にして、初めて遙にナイル大河の帶の如く流るゝを望み得たり、先に一同が初めてナイルの河を見たるはカイロ府にして、爾來日を經ること幾十日、險夷を跋涉すること幾千里、再び茲にナイルの河を見認

むるは異郷初めて知己に逢ひたる心地あり「ナイル、ナイル」と口々に呼び立てゝ馬の背に伸び上り、殆ど道の遠きをも忘れたり、地圖を案ずるに、カイロ府より是に至るまで、若しナイルの河を溯れば河流一千哩の少し餘なり、一同は迂曲して二度まで紅海を横に渡り、唯だ道の最も變化多き所を選びて來し者なれば、既にカイロより二千哩以上を旅したる者と知らる。

三十六

知らず識らず一同はナイル河の岸邊近く進むに、此邊り一體は布を晒すに名を得たる土地にして、カイロ府其他の布問屋、孰れも品を河船にて此邊に送り、河水の澄たる所にて洗晒さしむるは、一同の兼て聞し所なるが河筋の幾所に其の晒し場あり、色黑き此地の婦人達、老と若きとの差別無く、河原に布を敷廣げ、水に浸しては其上に立ち、足にて踏み洗ふ樣は拍子を揃へて躍れるに異らず、幾日の間多く人の顏さへ見るを得ざりし一同の目には、限り無く興ある事の如くに見えたり。

是より又少し進めば河に臨みて幾町の間低き人家の列なれるあり、是れ卽ち一同の指して來りし漠々村なり、文明國人の目より見れば殆ご犬小屋を列ねしにも等しけれど、野に伏し、山に寢し人々に取ては、天堂に入りたる心地あり、スアキムの長官より得たる紹介狀の力にて、一同は村長とも云ふ可き人の家を宿とせしが、芽歯夫人は玆にても亦先に失ひし與助の事を言出し、願はくば是よりナイル河を溯ぼる其用意を整ふる中に、デツダー府より彼れに關する便りの有れかしと幾度と無く語りたれば、一同は唯だ夫人が天性の慈悲深きに感じ、此夫人の爲なれば死するも厭はじと迄に思ひたり。

ナイルの河を溯ぼるは第一に船を調へずば叶はず、船は兼ねてカーツウム市より買ひ入るゝ事に手を廻はして有れど、其の船未だ到着せざれば、爲すことも無く逗留して待つに、一同は早く內地に入込まんとの心矢よりも急にして殆ど抑へ難き想ひあり。或時平洲文學士は、茂林畵學士に向ひ「僕は實に遠征家としての芽歯夫人の技倆には感服した、流石に多年遠征の事ばかり研究した丈の事が有る」と言出るにぞ、林林は其仔細を問ふに「イヤサ、若し不意に我々を困難な內

地へ引入れて見給へ、初めの中は勇み進んでも、後にも先にも人家の無い所へ行き、幾日も〳〵目的無しに旅をしては一行の者が直に心細く成り、逃て歸り度い事になる』『ナニ僕は決して爾らぬ』『イヤ君と僕とは格別サ、夫人の行く所なら何の樣な所へでも隨て行くが、例へば寺森醫師だとか、帆浦女だとか或は又通辯亞利なぞは爾は行かぬ』『ナニ彼れ等一同も早く朔域と云はれる內地へ、入込み度いと云つて居る』『サア彼等一同に、爾う云はせるが夫人の技倆では無いか、僕が尤も感心するは此度の道筋だ、カイロ府から直に河船に乘れば好い所を爾はせずに、先亞拉比へ寄りスアキムから上陸して玆へ來た、其間には海も有り、山も有り、沙漠も有り、度々目先が變り、爾して其度に多少の艱難も有つたが爲に、我々一同の心が自然と旅に慣れ、益々先へ進み度いと云ふ氣に成つたので、詰る所、最も我々の旅行心を引起す樣な路筋を選んだのだ、若し道の近いをのみ主として、カイロ府から直に河船に乘つて見給へ、此土地へ來る迄が一千餘里だら う、是からカーツウムまでが又數百里だ、每日々々同じ河船で何れほど飽きるかも知れず、爾して旅行の味と云ふ物が我々には少しも分らぬ所で有つた』茂林も初めて感心し『成るほど爾うだ、

吾々は玆へ來る迄に先づ沙漠や廣原の雛形も見、少しばかり危險の味も嘗めたけれど、其の雛形が小さい爲め、驚き恐れる心は出ず、最と大きな沙漠を見度い、最と大きな冒險を試み度いと、益々深入りする氣が出たのだ、如何にも夫人は吾々に深入の心を成せる樣に、最も適當の路筋を選んだと見る』『爾だよ、今まで遠征家は幾人も有るが、斯う旨く道を選んだ人は無い、一つは夫が爲に途中で從者を失ふやら樣々の失敗を嘗たのだ』と互に彼是れ推量して、夫人の德を頌したるが、其中に漸くカーツウム市より一艘の汽船を送り來れり。

此の汽船は八十噸積にして、乘込む人數は夫人以下通辯までを合せて七人とし、外に雇はれたる人夫及び水夫十八人、都合廿五人とはなれり、寶を三個に仕切り其一を夫人と帆浦女の室とし、茂林、寺森及び通辯の室に充て、其三を水夫、人夫の場所となし、別に又馬を置く所を仕切り、何時にても船に飽かば陸に上り、健脚家帆浦女を除く外一同、馬にて旅するの用意にとて多くの乘馬をさへ積載せしは、誠に周到の計らひと云ふべし。

三十七

此頃は亞弗利加の內地にて專ら北風の吹く時節とて、船に帆掛けてナイルの河をカーツウムの方に溯るには屈強の時なれば、漠々村より發したる一同の乘船は、矢の如く流れを溯ぼり僅二時間に七哩を走せ、西岸には帶地と云へる村を望み、東岸には朝原と云へる川のナイルに注ぎて合するを見る。

此邊りはナイル河の最も幅廣き所にして、水の靜かなること鏡の面とも云ふ可く、船は宛も水に映らう己れの姿に見惚れつゝ進むに似たり。

日の暮に及びては東岸は一帶に樹木の茂りたる森を眺め、西岸は點々の村落にして、其背後は廣さ限り無きかと疑はるゝ馬兵田の大沙漠なり、沙漠に落る夕日の影は天に映じて火事の如く、又遙に東岸の樹木に輝きて、木梢悉く紅をもて染し如くに見ゆ、此景色に浮されてか、小は羊山羊より、大は野牛駱駝の類、樹木の蔭より水際に出で首を揃へて水を飮み、又西岸を望む樣、

獸ながらも天然の美を樂しむに似たり。

一同は此所にて西岸へ上陸し、水夫には船を行手の椿臺と云へる村に廻して待つ可しと命じたるが、西岸は卽ち瑪瑙村と云ひ、數千年前は一の靈地に數へられ、僧侶の學校など有りたりとて今も樣々の古跡存し、世界に名高き金字塔などもあり、一同は馬にて古跡を見廻りし末、土人の酋長より、天幕二張を借りて野宿したるが、夜の十時頃に及び孰れよりか異樣なる香ひ、風に送られて來り、暫しがほど止まざるにぞ、通辯亞利を外に出だして其の元を探らしむるに、此地の女は夫の愛を得んが爲め、地に穴を穿ちて香木を焚き、身を薰して寢に就く習ひにして、其の餘烟の靉き來る物ゝ分りたれば、異樣なる風俗かなと一同一笑して眠りに就きたり。

翌朝は帆浦女の外、皆馬に乘り岸に沿ひて椿臺の村まで至るに、茲は昔より奴隷を賣買する市場として廣く知られたる所なれど、此頃其事の最と嚴重に禁じられし爲め、全市寂れて別に見る所も無し。一同の船は昨夜の命令に從ひて此所の岸邊に碇泊せるにぞ、一同再び之に乘り、又幾里をか溯ぼりて、象牙の市場として知らるゝ又馬と云ふ村に着きしが、茲にても亦見物の爲め上

陸するに、素より市場と云ふ可き程に非ず、村と名附るさへ勿體無き程の有樣にて、獸の巢にも等しき家、二三十を認むるのみ、唯だ驚く可きは背後に橫はる馬兵田の大沙漠なり、一望際涯無く、沙遠く天に接する樣、大洋の廣きにも似たれば、切ては其一端をなりとも踏試みんとの議起り、西の方を指し、沙漠の中へ足を入るゝに、暑さは一方ならずとは云へ、ナイル河より起る風徐々と吹送りて馬の脊涼しく覺ゆるにぞ、知らず〳〵に深入りし但ある綠島には着きたるが、一同弦に足を留め暫し小憩みする中に、平洲文學士は双眼鏡を取出し、切りに沙漠の果を望み「アゝ、此沙漠には何うしても果が無い、是より奥へ深入しては歸る道が分らずなる」と云ひ、更に又一方へ向ひしが、忽ち打驚きたる樣子にて、茂林を振向き「君、君、不思議な大動物が現はれ出たぜ」と云ふ、茂林は双眼鏡を受取りて、其指さす方を見「成るほど、不思議だ、此邊を指て徐々と進んで來る樣は、アゝ巨蝎だ、巨蝎だ、少くとも身體の周圍が一丈以上で、長さが二丁位は有る」言葉の冗談とも思はれぬに、一同は驚きて、此邊りの事情に詳しき亞利の顏を見詰るに、亞利は同じ通辯の阿馬と共に肉眼の儘、遠く其方を眺あ「左樣サ、長さが確に二丁位は有ます博

物の通人を以て自ら許す寺森醫師は眉を顰めが」亞「ナニ巨蝎では有ません人類です、何でも二三百人行列して此沙漠を橫切るのが、丁度巨蝎の樣に見えるのです」縱や人類としても二三百人行列するとは、合點の行かぬ次第なれば 平「人とは何者だ」アンハ奴隸商人が、奴隸を引連て居るのです」阿馬も口を添「多分コルドハンで奴隸を買出し、珠數繋ぎに捕縛してヌビヤの方へ行くのですから、今に絃を通りますよ」云ふ中に行列の姿は如何にも巨蝎の蜿轉る如く、一同の肉眼にも見ゆること〻爲りぬ。茂「奴隸嚴禁の今の世に數百人の奴隸を引き連れ行くとは怪からん、同じ人類が、人類を奴隸として虐待し賣々するとは、文明人の許し得ぬ所だ、彼奴等が絃へ來れば、吾々の力で解放して遣らうでは無いか、エ平洲君」平洲が何とも返事せぬ間に、亞利は又口を發き「イヤ夫は甚だ險呑です、奴隸商人は孰れも命知らずの奴等ですから、傍の人が手を出せば必死に成つて防ぎます、夫に又此邊りで奴隸取引の盛な事は非常な者で、縱しや此一隊を解放したとて、何の足にもなりません」「でも埃及へは英國のペイカー將軍が出張して、奴隸の餘風を根絕にすると云ひ、盛に此內地へ役員を派し、奴

隷商人を捕縛して居るぢや無いか、吾々も埃及でペイカー將軍に逢ひ、途中で若し奴隷商人に逢へば何の樣な苛い目にでも遭せて遣れと許しを得て居る、將軍が是ほど嚴重だのに未だ夫ほど奴隷取引が行はれて居るのか」「爾ですとも、夫だから彼等は人の目に觸ぬ樣、此沙漠を橫切るので す、船でナイル河を下るのが樂ですのに、河を下れば將軍の屬僚に捕はれる恐れが有る爲めで す」問答する間に、奴隷の一行は僅に十町ほどの所まで進み來れり。

三十八

早や十町許りの所まで進み來し奴隷の一隊をば、一同は篤と見るに、前に三人馬に乘りて進むは、即ち此奴隷を買入たる商人にして、他人に賣渡す迄の持主なる可し、奴隷の數は容易に算へ難けれど、何樣二百人以上なる可く、孰れも片手を錠付の鐶にて縛られ、其鐶をば長き一條の繩に結びて、繩の端は先に立つ馬上の人が引きて行く故、其有樣は、多勢悉く手を取られて引かるゝに異ならず、一人逃んとするも我手を縛する錠付の鐶を切らざれば叶はず、或は疲れて足立

たずとも、詮方なく其繩に引摺られて行くなり、中には手錠のみにては制し切れぬ爲め、重き首械を嵌られて、振向ことすら出來ぬ樣に縛しめられたるも有り、是等は孰れも屈強の體格を備ふる者なり、猶又奴隷一同の頭の上には多少の荷物を結び付けて有り、個は即ち奴隷商人が己等の携帶品を、馬に積まずに奴隷に積みたる者なり。

息も吐き難き炎天に、溶ける如き沙漠の中を、斯る有樣にて幾里とも無く引かれ行く、其苦しみは如何ほどならん、夫も承知盡ならば未だしもなれど、宛も野獸を捕ふる如く腕力にて押捕へ無理無體に捕縛して連行く者なれば、妻に分れし所夫も有る可く、子を失ひたる母も有る可し、是を思へば世に奴隷ほど傷はしき者は無く、又奴隷商人ほど邪慳なるものは無し。

平洲、茂林、寺森の一同は面り、此無慘なる樣を見て怒氣心頭に溢れ、何とかして商人を打懲し、此奴隷を解きて放つ工夫は無きやと、口には敢て發せざれど銘々同じく心を碎くは、持つて生れし人間の情なる可し。去れど此方は通辯及び從者を合せて男七人、女二人にして彼方は先に立つ三人の外に、猶監督の爲め繩の前後所々を取り、鞭を持ちて疲るゝ奴隷を打懲らしつゝ進む

者十二人あり、合せて十五人の一隊なり、七人に足手纏ひの女二人を連たる者が、素より之と戰ふべくも非ず、唯だ彼方の弱味と思はるゝは十五人の内の一人、途中にて病氣になりしか、馬の脊に力無く俯仆れて、猶ほ轉げ落るを防ぐ爲め繩にて身體を鞍に縛り、荷物同樣の姿と爲りて顏も上げ得ざる有樣なり。此一人だけは働き得ぬこと確かなれど、去ればとて彼等の足手纏ひと云ふには非ず、眞逆の時には彼等此者を捨置きて惑ふならん。此方の人々が婦人二人を保護しつゝ戰ふとは同じからず。

去れば平洲も茂林も、若し芽蘭夫人と帆浦女さへ傍に在らずば、敗るゝまでも戰ふて見るものをと、空しく心の裡にて悔しがる而已。斯る間に一隊は徐々と一同の前に差掛りたるが、近く見れば無慘の有樣は又一入にして、中にも酸鼻に堪へざるは、年廿歳餘りと見ゆる一人の女、身胎と覺しく重き腹を抱へて、歩まんにも歩み得ず、一同の前に來りし頃全く力盡き果ゝ、地上に撞と仆れたるも、片手を繩に縛られて有れば仆れしまゝ引摺られ、息も絶々なる聲にて悲鳴を擧げつゝ轉がり行く有樣なり。三人は最早や我慢をする能はず「實に捨置かれぬ」と呟き、顏と顏とを

見合すに、此時監督者の一人は此女の傍に歩み來りしが、或は此の女を解許すかと思ひの外、太き鞭を上げて「エ、歩まぬか」と罵り、痛々しく叩き伏せたり。茂林は此樣に我を忘れ「己れ」と云ひ樣馬を躍らせて其傍に馳せて行けば、平洲も寺森も後れも取らず、驀地に續き行き其監督者を三人にて砂の上に投倒し、猶ほ起直る胸の邊りに左右より短銃を差附けて「サア此女の手錠を解く鍵を渡せ」と命じたり。

先に立つ奴隷商人の頭領は此有樣を見ざるに有らぬも、何うせ出女の遠からず沙漠の中にて死す可きを知り、此上連れ行くも詮力無しと思ひしなる可く、左まで怒れる樣子も無く、殆ど知らぬ顏にて見過さんとす。其中に平洲は監督者が鍵を出すの遲きを焦かしく思ひ、衣服より鋭き小刀を取出して中央の引き繩を截切るに、之と同時に茂林は鍵を受取り、此女の手錠を脫したり。此女より後に繫がる〻二十人ほどの奴隷は、宛も長き蛇の尾邊を斷らたる如く、總體より切離れて歩みも俄に止まりたれば、斯くと見て平洲も茂林も、事の思ひしより旨く行くに力を得「寧そ此繩を本の方から切て仕舞へ」との聲は兩人の口より一齊に發し、猶ほ寺森まで實にもと思ひし

か、三人齊しく小刀を取出し馬を矢の如くに馳せ、手當次第に中央の引繩を五六ケ所も切りたれば、長蛇の隊は愈々と取纏め難き幾隊の小列に分れたり、茂林は手早く彼の鍵にて、重なる奴隷の手錠を解て遣らんと取掛るに、商人一同は此時まで三人の早業に、何の意なるを解し得ぬ程の有樣なりしが、繩の幾切に切れて奴隷の其所此所に離れしを見るや、烈火の如く怒り、其頭よりし「狼藉者を射殺して仕舞へ、サア一同隊を揃へろ」との命を發つと聞く間に、病者を除き十四人、悉く頭領の許に集まり列を正すは、斯る戰ひに慣れ紀律の充分整ひたる者と知らる。見るうちに頭領は其中の三人に奴隷の取纏めを命ずれば、此三人は通辯なりと見ゑ、野蠻語にて奴隷に向ひ何事をか言渡し、殘る十一人は足並揃へて、平洲、茂林等と、芽蘭夫人等との間の空地へ割て入り、一方には夫人等を虜にする手順を計りて、又一方には平洲等に向き銃の筒口を揃へたり。平洲、茂林、寺森三人、實に一時の血氣に動かされて餘計の事に手を出し、生て再び逃れ難き難場に陷りたる者と云ふ可し。

三十九

銃の筒口を揃へたる奴隷商人は多く葡國の人なるべし、其頭領は同國の訛を帶びたる佛國語にて此方に向ひ「汝等は何の目的にて我等の財産に狼藉を加ふるや」と問へり、同胞人類を捕へ來りて、之を財産なりと云ふは言語同斷の沙汰なれば、此時までも奴隷等の手錠を一々脫しつゝ有りし茂林は、其鍵を奴隷中の最も達者なる者に渡し置き、彼の頭領に向かひて「我々は汝等の財産と認めず、唯同じ人類が强慾なる汝等に財産の如く取扱はるゝを憐れみ、救ひて得させんと欲するのみ、吾等は埃及にてペイカー將軍の許しを得、途中にて奴隷を見次第に解放することを依託せられて來りし者なり」と云返すに、將軍の名を聞きて商人等は稍や驚き、其頭領先づ眼を四方に配りて、孰れかに猶此方の援兵でも隱れ居るにやと、窺ひ探る如くなりしが、頓て何の援兵も無き事を見定め得しと思しく、一入傲慢の樣を加へ「此沙漠は將軍の命令など行はるゝ所に非ず腕力の强き者が弱き者を制する所なり、此上に妨げせば容赦なく射殺す可し」とて早くも一齊に

射撃せん勢ひなり、此方の三人は、弱きを以て強きに向ふ者にして、此上に爭はば唯犬死する一方と云ひ、殊に頭領の目は、猶ほ婦人をも擒にするぞとの意を示し、時々芽蘭夫人の方に向ひて揮けり。三人は板挟の有樣にて、日頃の勇氣も殆ど施すに由無く、空しく悔しさに齒切りするに、此時忽ち横手に當り、異樣なる叫喚の凄じく起るを聞く、三人は勿論の事、敵の頭領まで何事かと振向て見るに、繩を斷たれて鍵をまで得たる奴隷等が、一人一人自由の身體と成りたるを喜び、今まで首に嵌め居たる首械を手に持ちて武器に代へ、隊伍を組みて商人を背後の方より襲はんとする者なり。彼等は三人の恩に感じ、加勢して三人を救はんなど云ふ心ある者に非ず、唯だ復讐の一念強き野蠻人の本性を現はし、今まで己れ等が此商人等に無慘の取扱ひを受けたる爲め、其怨みを返さんとはする者なり。

猶能く見るに奴隷軍は既に監督者三人と、馬の上に臥し居たる病人とを擒にし、其者等を引卸して馬と鍵とを奪ひ、馬には筋骨逞ましき黒奴四人名々に乘りて勢を揃へ、猶監督者の携へ居たる鐵砲をまで持ち、鍵は女の手に配りて順々に手錠首械を解きて廻りつゝ有り。今は自由の身と

爲りたる者繩に五十人ほどなれども、十一人の商人に比べては勝負に成らぬ程の多數なり、況んや鍵を持ち黒奴數人が片端より同類の縛めを解く、其早きこと一方ならず、解かるゝ者は悉く奴隷軍に馳加はり、見る中に六十と爲り七十と爲り、罵る聲、益々高し、今暫くにして二百餘人悉く自由の身と爲らば、商人等は唯だ一壓に壓潰さるべし。

斯と見て商人等は、最早や此方の三人を相手にすること能はず、只管ら驚きて狼狽し初めたれば、其暇に三人は夫人と通辯の立てる所へ馳附け、漸く虎口の危きを逃れたるも、左ればとて、看す〳〵十餘人の商人等を奴隷の爲に殺さしむ可きに非ず、又奴隷の幾人を商人等の銃先に倒れしむ可くも非ず、畢竟一同が奴隷の繩を解たるは商人を窘めん意に非ず、唯だ其の邪慳なる商賣を止めしめんのみの心なれば、何とかして双方を無事ならしめねば成らずと、第一に芽蘭夫人が切りに心配し初むるにぞ、一同も實にもと思ひ、然らば奴隷等を說諭すに如くは無しと決し、先づ茂林より商人に向ひて聲を發し「汝等最早や逃れ難き境涯に立たれば、奴隷と戰ふも無益なり寧ろ吾々に降服して救ひを乞はば、吾々の力にて奴隷を宥め遣はす可し、汝等是限り心を改め邪

慳なる奴隷商賣を止むるや如何に」と云ふに、商人等は實に必死の場合なれば、直に銃を下げ馬より降り、人の懐に入る窮鳥の有樣にて一同の許へ逃げ來れり、茂林は更に奴隷軍の方に向はんとするに、彼等は此時既に百人の上となり、中にも女も二十人ほどあり、女共は男より猶執念深しと見え、口々に何事をか罵りて騷ぎ立つるは、全く男どもを勵まし立て「負けるな、負るな、仇を返せ、怨みを返せ」との事を叫びつゝ有りと、通辯亞利は云へり、成るほど其通りなる可し女の一聲々々に男は勇み、風を切りて音のするほど首械を空中に振廻し振廻し、此方を指して詰寄來る、其樣勿々說諭などに服す可しとも思はれず。

四十

詰寄する奴隷軍を何と云ひて說諭せんか、一通りの言葉にては彼等の燃熾る復讐の念を鎭む可くも非ず。

帆浦女は自ら進み出で、斯る事には此前の旅行にて充分に經驗あれば此說諭方を引受けんと云

ひ、一同の承諾を得て、前面に進み出で、大聲に奴隷に向ひて演說し、傍らより通辯亞利をして飜譯せしめたり、其旨意は基督敎の誡めを布演し、復讐は神の行ふ所にして人間の爲す可きに非ずと云ふに在り、反覆丁寧に殆ど嚙で含める如く云ひたるも、道理を解する力無き黑奴ども何とて斯る無形の條理を解し得べき、初めの程は何事かと、鎭まりて聞き居たるも、次第に又「仇を返せ怨みを返せ」との聲黑女の口より囂々と起り、帆浦女の聲殆ど聞えぬ程と爲り、奴隷一同が此方の救ひし商人等を睨み詰て、押掛る勢ひ益々銳し、玆に至りて茂林は平洲と相談の上、帆浦女を退かせて自ら進み出で、「吾等は此商人を埃及に連行きて、嚴しき刑罰を加へんとする者なり、汝等の復讐は夫にて足るべし、此儘我等に任せ置く可し」と云ふに、此言葉は帆浦女の說諭よりは幾分か彼等の心に分り、多少の効目有りし如くなれど、彼等又聲を揃へて「然らば今此所にて其の刑罰を加へよ、左無くば吾等自ら戰ひて復讐せん」と云出し、仲々思ひ止らんとせず、此時までも無言にて控へ居し、芽蘭夫人は傍に居たる今一人の通辯阿馬に命じ「否とよ我等は此商人等と戰ひて汝等の見る如く擒にしたり、我等故無くして此商人を擒にせず、是より最も値の

好き市場に連行きて此者どもを奴隷に賣らん爲なり、折角我等の捕へ得し獲物を汝等奪ひ返さんと云ふは無理ならずや、汝等の儕にせる其四人の人々をも、我等に與へて賣しむるが當然ならずや」と云はしむるに、是れ尤も彼れ等の耳に入易き事柄にして、彼等自ら儕を賣買する習慣の中に育ちし者なれば、互ひに顔を見合て「尤もだ」と含き合ふ樣子にて忽ち鎭まり返りしが、此時は早や二百餘の奴隷悉く鎖を解き、自由自在の身と爲りたる後なれば、群がり立て四人の儕を中に圍み、此方の人をして其姿をさへ見せしめず、或は四人とも早既に彼等に殺されしかと思はるゝ許りなりしに、頓て其大將と思しき一人、郡集の中を割り其の四人を引出して連れ來れり、四人の中、先刻病氣にて馬の背に臥し居たる一人は、何故か急に達者の身と爲りし如く、大將に引かれ乍らも、躍り騷ぎて一番の先に進み、頓ては大將の持てる繩を振放し轉がりて此方へと走り來れり。一同は何の意なるや合點し得ぬに、其者は茂林書學士の膝の當りに飛掛りて縋り附き、「旦那樣、能う先ア助けて下されました」と、泣伏す顏を茂林は引き起して「オヽ與助か、貴樣が先ア何うして此奴隷商人の群へ這入て居た」此聲を聞くよりも平洲、寺森は云ふに及ばず、物靜

かなる芽蘭夫人まで其傍に馳せ來りて篤と見ると、姿變り髭髯も茂り色も天日に焦げたれど、見違ふ可くも有らぬ下僕與助なり。彼れ數ケ月以前に、亞拉比の沙漠にて、ベドイン人の駱駝の背に縛られて援へ行かれ、逃去る途中、疾風に逢ひたれば、最早や此世に無き人と一同より思はれて、今に至るも一同をして猶寢覺惡き想ひをせしめし事なるに、眞に如何にして此所に在りたるや、與助は嬉しさに泣きも得止まず、唯轉がりて一同を伏し拜み、涙の中より何事をか切々の洩すを聞けば「亞拉比の沙漠で行疲れ、打倒れて居る所を此商人達に救はれました」と云ひ「此商人達は人夫を探して居る所ゆゑ、無給金で私を抱へました」と云ひ「助けられて南へ南へと行き、亞拉比亞の南端から船に乘り此亞弗利加へ密航しました、亞弗利加ならば再び貴方がたに逢ふ事が出來るかと夫ばかりを禱つて居ました」など云ふうち、漸くに泣聲をも止め得たれば、一同は彼れの手首より腰などに殘れる繩を切放ちて遣り、猶ほも茂林は「貴樣は非常な病氣の樣子で馬の背に縛られて居たが氣持は何うだ、少しは好いのか」と問ふに「ハイ左程の病氣では有りませんが、不慣の身體で幾日も〳〵此天日に晒されて、痛く眩暈が初めまして何度ど無く鞍から落まし

たゆゑ、アノ通り縛り附けて貰ひましたが、長い疲れでツイ寐込み、黒奴に馬から引き卸された時、ヤット目が覺めました、覺めて見れば貴方がたが奴隷商人と爭つて居ますから夢かと許り驚きましたが、餘り騒ぎ立て、怪しまれては成らぬとヤツとの事で堪へて居ました」と云ふにぞ茂林は「オヽ爾か、夫位の病氣なら先ア安心だ」とて用意せるブランテー酒なぞ少しばかり飲しめて介抱するに、彼殊の外元氣に復し、元の通りの輿助さはなりたれば、一同最早此土地に長居する川も無しとて、引き上る仕度に掛るに、今まで此方の有樣を見て何か相談しつゝ有たる奴隷軍は、又氣に入らぬ事でも有りしか、再び鯨波の聲を上げ、首械などを振廻してドツと此方に攻め來れり。

四十一

再び鯨波を上げて寄來る奴隷等は何事に怒りたるにや、早速通辯亞利をして其旨意を聞かしむるに、彼等は此一同が救ひ取りたる商人等を、奴隷の如くに取扱はざるを怨む者なり、其言葉は

白人既に商人等を値の好き市場に連行きて奴隷に賣るとならば、何故商人等に手錠首械等を施し、宛も此商人等が吾等を扱ひたると同樣に扱はざるや、吾等は唯だ此商人が追て奴隷に賣らるゝと云を樂しみに、引き渡しを承諾せし者なるに、今商人が通常の旅人と同じく、自由の身體にて歩み去るを見れば、奴隷に賣るとの約束は信じ難し、吾等一同は彼の商人の爲に手錠首械の憂目に逢たるのみかは、重き荷物をまで頭に載せられ幾十里の沙漠を歩み來れり、吾等が受けし丈の苦痛は此商人にも受けしめよと云ひ、此度は何と諭すも聞入れず、此の言葉用ひられずば其商人を此方へ引き取らんときまで言張るにぞ、平洲と茂林は止を得ず相談の上、商人等に手錠首械を施す事としたり、芽蘭夫人は此相談を承諾せぬ樣子なりしも、平洲が言葉を更めて「イヤ此商人とても何時吾々に對して復讐の心を起すやも圖られず、黒奴等の請ふを幸ひ、兎に角手錠などを卸す方が一同の安全なる可し」と云ひしより漸く承知の旨を述べたり。之にて商人一同に悉く奴隷と同樣なる縛めを施すに、奴隷等は猶ほ輿助のみ何の縛しめをも受けぬを見て、此の人をも同樣に取り扱はれよと云ふ、否此のものだけは病人ゆゑ、爾る邪慳な扱ひを加へ難しと答ふれば、

彼れ又否々商人等は吾等の中に病人あるとも少しの容赦をも加へず、唯だ其の病人が一歩も歩み得ぬに至り沙漠の中に捨て去りたり、其病人も若し手錠首械に堪ぬ程なれば、宜しく此沙漠へ捨置かれよ、後にて我等が腹の癒ゆる樣に取扱はんと言張り、其主旨甚だ嚴重なり、素より與助を沙漠の中へ捨置かる可きにあらず、止を得ず同じく首械を掛けんとするに、與助は今までの喜びに引替へ夫ばかりはと又泣出す許りの氣色にて黒奴等の方に向ひ手を合はせて伏拜むに、黒奴等は、何と云ひても其の人には深き恨みあり聞入れ難し其の人は病氣と爲る前、我等の毛髪を引き抜きなどして吾等に餘計の苦しみを與へたりと云ふにぞ、茂林は異な事を聞く者かなと與助に向かひ汝爾る邪慳の振舞を爲せしやと問ふに、與助は此の黒奴等の餘り色黒きを怪しみ、物珍しさに或ひは其の髪の毛や肌の毛などを引き試み或は其の肉を捻りて果して一樣に痛さを感ずるや否やを驗し見たりと白狀せり、爾る不都合の所爲ありては特別に黒奴の恨を受くること當然にして彼等の言葉を退くる譯に行かずとて、平洲と茂林とは氣の毒さと可笑しさとを堪へて終に與助に嚴重なる縛めを施したり。

是にて奴隷軍も全く滿足したれば、商人等の持居たる糧食を悉く彼れ等に給し、各鄉里へ歸る可しと言渡して、一同此所を引き揚るに、黒奴等も幾分か一同の惠みに感ぜしと見え「名殘惜しや」と云ふ意味の語を口々に發して見送る體なりしが、頓て一同が四五丁も去りし頃ろ、彼等は聲高く野蠻歌を謠ひて引取りたり。

一同は再び又馬の町に達し、茲にて商人等の首械手錠を解き、再び奴隷賣買に手を出さゞる事を誓はしめて放ち遣ろに、此商人等は一人として一同の所爲を恨まぬは無く、口には夫と云はざるも「今に見ろ」と云ふ如き氣色を示して立去りたり。唯だ與助のみは首械の痛く重かりしに懲り、又と再び黒奴の毛を引かずと固く茂林に誓ひたりとぞ。

是より又も船に乘りナイルの川を溯るに、川の景色は此邊りより次第に趣を加へ、流れの中に島多くして、島の上には樹木も有り又兩岸は次第に高く山こ爲り、山峙ちて水愈早く、船の進みは遲けれども眺めは今まで見し事も無きほど宜ければ、却つて船行の遲きを喜び、旅の徒然をも忘るゝうち數日にして愈ナイル河に添ふ最終の町、カーツウム市には着けり。眞に人跡

の至らざる亞弗利加の蠻地とは、此市よりして分入なり。

四十二

カーツウム市に入込むや、一同は先づ電信郵便局に行き、本國の友人などへ無事安着の電報又は書信等を出し、次には領事館に至り、本國より、「領事館留置」にて送り來し手紙など受取りしが、其内に一通、平洲、茂林、寺森の三人へ連名に宛てたる者あり、即ち一同が巴里を立つ時熱心に一同を見送り、且出發の準備などに付き樣々の厚意を示せし、本目紳士の出せし者なり、其中の幾項を抜記さんに「三君よ、君等は實に幸福の男なり、余は日として夜として君等の旅行を羨まぬは莫く、又君等に同行せざりしを悔ざるは莫し、唯だ幸ひに君等が、時々詳密なる手紙を送り呉るゝ爲め、余は天の賜物を受るよりも喜び、熱心に亞國の地圖を開き地圖と手紙を引き合せて、悉く地圖に記しを附け、今日は此所まで行きしならん、明夜は孰れの地に野宿するならんなどと推量し、自ら其の景色や其の艱難などを心に描き、君等と共に旅行せる積りにて樣々の

想像を浮べ僅に我心を慰むるのみ、後になりて君等より愈手紙の達する度に、又も其の手紙と前の推量とを引き合すに、合ふも有り違ふも有れど、大體に於ては大差なし、余は最早や君等の道筋を悉く暗記して此後の行手をまで想像するを難しとせず、去れど君等の旅行に、斯まで注意するは余一人に非ず、止むを得ず行に洩れたる鳥尾醫學士も余に劣らぬ熱心なり、鳥尾醫學士は折角芽瘤夫人より同行を勸められながら一人の老母ある爲め、其行に加はり得ざりしこと終生の遺憾なりとて毎日の如く余の許に來り、余と共に地圖を檢し、余と共に君等の手紙を讀むを、切てもの念晴しとせり、既に先日も余は餘り君等の羨ましさに、斷然君等を追掛け行く心を起し、鳥尾醫學士に告たるに、醫學士も幸ひ其母御の健康大に勝れたるを以て、早速同行す可しと云ひ、力を合せて出發の用意を急ぎつゝ有りしに、余の一身上に止むを得ぬ事情起り、余は泣く〳〵出立を延期しえり。鳥尾醫學士は余の延期に拘らず一人にても出發せん程の意氣込なりしに、是も悲しや巴里の市中に天然痘現はれ、非常の勢を以て貧民社會に流行を初めたれば、仁術の業と云はるゝ醫師たる者が、貧民の此難儀を見捨て一身の望みにのみ從ふ可きに非ずとて、

是も詮方無く見合せたり、去れど兩人の熱心は日に〳〵募るのみなれば、今後或は君等と蠻地にて顏合す事と爲るやも知れず、兎に角途中何の所たりとも少しの便利あらば必ず手紙を送られよ、君等の手紙來らずば余は餓死る心地せん、但し君等が筆勞の萬一に酬ゆる爲め、向ふ一年間君等の用を支ふる丈けハヾンナの卷煙草を、カーツウムの領事館まで屆け置きたれば幸ひに受取られよ」云々とあり。平洲、茂林の兩人は後より烏尾醫學士の萬一にも追掛け來るを喜ぶ者には非ざれど、此手紙の全文を、包み隱さず芽蘭夫人にも示し、亦久しく味はひ得ざりし上等の煙草をも領事館より受取りたり。

カーツウムまでの道筋は兼て芽蘭夫人より示されたるも、此先は未定なれば更に夫人の差圖を待ちに、夫人は玆に來りて何事か深く考ふる所ある如く、ナイルの河に添る小高き丘に歐羅巴人の作りたる靜かなる別莊を借りて、帆浦女の外に彼の二人の通辯を連れて之に住ひ、茂林、平洲、寺森等へは別に然る可き宿屋を充行ひたるが、平洲、茂林等も此先は生死不定の旅なれば玆にて暫く身を靜かに勇氣を養ふことを辭せず、夫人と住居を分つを以て當然の事と思ひ、唯だ此先の

地理なぞを聞合すのみなるに、夫人も亦其の心なるか日々其の住居へ旅行家を、招待し充分に饗應等して聞合すに、亞弗利加に旅行する者殆ど此所に立寄らぬは無く、從つて事に慣れたる案內者も多く幾度か探險隊に隨行せし從者なども多く、招きに應じて來る者引きも切らず、聞けば聞く丈け新たなる事柄をも聞出すにぞ、夫人は唯だ其の事にのみ急がはしく、夫が爲にや平洲、茂林等に顏を合すること日々に疎くなり行き、果は何となく餘所餘所しく仕向くるにやと、疑はるゝ迄に至りぬ。

四十三

芽蘭夫人が平洲と茂林とに餘所々々しく成りたるは何の爲ぞ、平洲も茂林も此旅行を初めて以來、日々に新なる境涯に臨むに連れ、芽蘭夫人の優れたる氣質も益々分り、曾て巴里に在りし時は唯だ顏と心の共に美しき婦人なりと思ふ丈なりしも、此地に來りては美しさの外に猶ほ世間の婦人に立優りたる所多きを見認め、危險に臨みては夫人の落着きたる勇氣を知り、艱難に逢ひて

は親切を知り、難儀を經ては其智慧の行屆くを知り、一日は一日より夫人の人柄殖高くなるを覺え、巴里を出る時既に夫人の奴隷の如くなりし哥人今は全く夫人の溺信者と爲り、一日たりとも夫人の顏を見ぬ辛さは世にも人にも見捨られたる想ひなり。

斯も熱心の愛なれば自ら嫉妬の念も加はり、兩人とも夫人が双方へ一樣に餘所々々しきを悟らず、唯だ我にのみ疎しと疑ひ、平洲の心にては夫人の心全く茂林に傾きたる爲と思ひ、茂林は又平洲に傾きたる爲と思ひて、互に限り無く失望し、失望凝て嫉妬の念とは爲りたれど、巴里を出る時の約束は、互に嫉妬がましき振舞を示さゞる誓ひも有り、且は何と我身の振方を定めて好きや思案とても決せざれば、兩人ともに言葉を交ふるさへ好まず、平洲は朝起きるが否や「己の留守には茂林奴が必ず夫人の許へ行くだらう、戀の競爭に負けた以上は未練らしく邪魔するより は、氣を利かして外す方が寧ろ男らしい」と心の中に呟きて、悔しさを推隱して外に出るに、茂林は又斯と見て「平洲の奴は勝たと思つて好い氣になり、夜の明るを待兼てアノ通り夫人の許へ出掛けて行くワ、己も男だナニ未練に彼れの邪魔などする者か」と獨り齒を噛みて我慢しつゝ是も頓て宿を出で、夫人の許を訪はんともせず、去れど夫人よりも何の便り非ざれば兩人の疑ひは益々〳〵募り、二人は別々に、或は山に入り或は野に出などして、只管ら我心を紛らさんと勉むるの み二人とも顏を合せて心の中を明し合ふが忌々しきは、即ち嫉妬の本性にして、朝晩顏を合す度に唯だ默禮して右左に分るゝのみ、此儘に捨置きなば、募り〳〵て取返し難き間違ひを生ぜずば 止まじ。

獨り寺森醫師のみは心に何の曇も無ければ双方の異樣なる樣子を見て取り、何とか之を折合しめん者と私かに其機會を待間も、日々市中の異たる物事を見來りては、平洲に逢へば平洲に向ひ、茂林へ逢へば茂林に向ひ面白げに語り聞かし、且つは其の身と共に見物に行かんことをなど勸むれど、兩人應ずる氣色も無し、去れば或夜の事、寺森唯一人にて市中を徘徊し、ナイル河に近き所まで到るに、四辻の角に當り最と賑しき見世物あり。看板には女の踊る樣など畫きて有るにぞ、是れを見て行かば或は話の種にもならんかと木戸を拂ひて中に入るに、一種の女芝居にして何の筋なるや分らねど、見物人の鎭まりたる樣、面白げに思はるれば、一方の席に座を占め、暫

し見物する中に、僅か四五間離れたる所に、目に留る五人一組の見物人あり、何うやら其顔に見覚えある氣のせらるゝにぞ、何れにて逢ひしにやと、舞臺よりも其方に目を注げば、彼方も頻て寺森の顔に氣附きて、五人互ひに密々と話を初め何やらん目配せなどする樣、善からぬ相談を爲すに似たり、何樣正直なる良民には非じと思へば、忽ち心に浮ぶは先日馬兵田の沙漠にて、喧嘩の後に救ひ遣たる彼の奴隷商人なり、彼れ等は我一行に邪魔せられて、己が財産とせる二百餘の奴隷を失ひたる事なれば、己れ等の曲りたる事は思はず必ず我一行を恨めるならん。

今日に留るは商人の一同には有らで、其中の五人なれども密々相談する樣、何うやら復讐の打合せに似たれば、長居して辛き目に逢ひてはならずと、寺森は半幕をも見ずして靜かに立ちて出去るに、暫くして彼れ等の五人も亦同じく座を立ちて木戸を出たり。寺森は斯くとも知らず、我宿の方を指して二三町引揚るに、忽ち背後より其身に飛掛る人あり、拂ひ退けんとする間も無く、早や寺森を投倒して五人犇々と疊み掛り、忽ち口に猿轡を食せ手足を縛り締る樣、流石奴隷商人を捕ふるに慣し事とて眞に咄嗟の間にして、悶掻く暇さへ有らざりき。寺森は如何とも詮方無

く、運の盡と諦めて其爲す儘に任す中、彼れ等は寺森を舁ぎ上げて最と暗き方に走りつゝも「何うして殺さう」と云ふ聲は其中の一人より聞えたるが「石を附けて、淵へ沈めるが一等だ」との聲は又一人より發し「夫が好い、夫が好い」とは他の者の贊成する聲なりき。

四十四

石に縛りて淵の底に沈められんとする醫師寺森の話は暫く置き、扨も茂林講學士は、芽瀾夫人の何と無く餘所々々しきを見、全く夫人の心平洲に傾きたる事とのみ思ひ詰め、餘の忌はしさに此上夫人より故々我を迎へに寄越すまで、夫人の許へ行じと決心し、一種の意地を構へ居たるに二日が三日經ちても夫人より迎ひを寄越す氣色無く、其身全く夫人に忘れられしかと怪しまるゝ許りなれば果は業を煮やし、且は嫉妬の一念も火の如く燃上り、最早や意地をのみ張り通すこと能はず最初巴里を出るとき夫人は堅く約束し、縱しや途中にて心の一方に傾く事ありとも、決して素振などには現はさず、一樣に二人を扱ひ、無事に旅行を終りし後に、巴里へ歸りて初めて

其心の亂れに傾きしやを披露す可し、去れば途中は飽く迄も其身自ら男子の積りにて、最も男らしく最も公明正大に身を持たんと誓ひたり、此誓に照しても夫人が旅行の半にも達せざる此土地にて、早くも平洲に心を傾け、吾を滿更の他人の如く扱ふは何よりの違約なり、縱んば夫人の心最と切にして旅行を終るまで待つ與はずとするも、其次第を吾に打明け、實は平洲を後々の所夫と定めたれば、御身は此上此旅行を續くるも無益なり、是れまでと斷念て本國へ歸られよと、明かに言渡すが當然なり、平洲とても其通り我と彼れとの間には何事も打明け合ふ堅々の約束あるに、彼れ其身の幸福に醉ひ、其約束を胴忘れせし如くなるは返す〳〵も不都合なり、ア、吾何者ぞ、夫人の愛を競爭者に奪はれしは詮方なきも、今まで夫人の爲には一命も惜からじとまで思ひ詰め、危險を冒し艱難を嘗め、火の中水の底をも潛る事を辭せざりしに、斯くまで疎んぜらるゝ謂れは無し、唯だ偶然一緒になりたる一通りの道連としても、斯まで心を盡さば挨拶位は受け可き筈なり、最早や便々と先の迎ひを待つ可きに非ず、平洲にも夫人にも問ふ丈の事は問詰め、我が決心の有る所をも告げん、平洲と夫人とは我を土芥の如く見做し、我に何事も打明るに及ばず

と思へるや、我も一人前の分別ある男子なり、既に此旅行の目的とする夫人の愛、平洲に於ち、我には何の見込も無しとせば、何が爲に長く夫人に同行して此の上の危險を冒さんや、夫人と平洲が、愛し愛せられて仲好く旅行する其傍に附き、二人を保護して旅行する事は我が忍び難き所なり、然り早速に夫人と平洲とに逢ひ、言ふ丈を言ひ、聞く丈を聞き、其上にて何の未練も無く本國へ立返り、一方には平洲と夫人を、邪魔物無しに旅行することを得せしめ、又一方には巴里の雜踏せる交際場裡に身を投入れて此競爭に打負けたる我が失望を紛らさんと、斯く思ひ定めて宿を出しは、日の暮れて後なりしが、道にて通辯亞利が馬に乘りて此方に來るを認めたれば茂林は呼留めて「コレ亞利、お前は夫人の使と爲り、已を迎へに行く所では無いか」「イヽエ餘り退屈ゆゑ目的も無く馬に乘て出て來ました」此返事に我問の愚なりしを悔ひつゝ「シタがお前は平洲を見受けなんだか」「ハイ、タッタ今、此先で芽蘭夫人の住居の方へ、ア、問ふ丈け無益だッた、ドレ其馬を己に受けました」「何だ、平洲が芽蘭夫人の住居の方へ、歩いて行く所を見貸せ」と云ひ、轉と氣短き茂林は、殆ど狂人の如く、亞利を馬より引卸して其馬に自ら乘り、一

鞭當てゝ一散に夫人の住居を指して急ぐに、丁度門の中にて平洲が女關を指進まんとする所へ追附きたれば、茂林は馬より降り、腹立しさを隠し兼たる最と冷淡なる語調にて「オヤ君は夫人の許を尋ねるのだネ」平洲も全く茂林と同じ思ひにて、夫人の愛餧に茂林に落し事とのみ信じ、同じ目的にて來し者なれば、自と角の有る言葉にて「爾サ僕だつて夫人の許を尋ねるよ、君こそ馬に乘て大急ぎで」「フム馬に乘て急いで來たのが何うした」と嫉妬の突合にて、將に取留難き爭ひにも立到らんとせしが、平洲は氣早き中にも茂林よりは幾分か落着きたる所ある丈け、胸を鎭めて「茂林君、君と僕との間に、談判す可き一事件の有る事は君自ら知らぬでも有るまい」「勿論さ」「所で其談判は夫人の前で仕やうか、夫とも夫人の聞かぬ所で仕やうか」「夫人の前でも但は介添人の前でゞも、唯だ君の望み次第だ」とて早や決闘にも應ず可しとの意を示すに、此時馬の足音を聞きし爲にや、家の横手より庭を傳ひて出で來りしは芽蘭夫人にて、夫人は二人を見るよりも最と懐しげに「オヽお二人とも能くお出下さつた、實は今夜若しお出が無くば、明朝はお二人へ迎ひを出さうと思つて居ました」と云ふ其言葉は、最も打解たる今まで通りの芽蘭夫人

なれば、二人は拍子の抜たる心地に、て互に相手の心を讀まんと其顔を見合す中にも、茂林は「ハイ私は既に幾日の間貴女の許へ伺ひませんけれど、平洲は」と言掛るを夫人は受繼ぎ「ハイ平洲さんにも貴方にも容易にはお話の出來ぬ事柄が起りましたゆゑ、先日來私もお二人を迎へずに居ましたがー」と是まで言ひて二人が樣子の異樣なるを見「オヤお二人とも唯ならぬお顔附に見受けますが、何うか成さつたのですか」と問出しも、流石に女性の察しも早く、大概夫と見て取りしか「イエ茲では話も出來ません、先ア此方へ」と云ひ二人を其の身の居間へと通し行き、一樣に席を與へたり。二人とも此の公平なる仕向にて、扨は夫人が我にのみ疎くせしにはざりしよと、心は既に解初めたるも、夫人が容易に話し難き事の出來しと云ひたるは何の事にやと、半ば其事の氣に掛り無言の儘にて控へるに、夫人は深く心に掛る事ありと見え、重く大事を取る樣子にて徐に口を開き「此旅行に附ましては、是までお二人に一方ならぬ助けを受ましたが、今と爲つては誠に後悔に堪ません、此土地限りでお二人の同行をお斷り申して、私は唯だ一人で蠻地へ分入らねば成らぬ事と爲りました」是實に意外なる言出なれば「とは又何の爲です

か」この問は一樣に兩人の口より矢の如くに突て出たり。夫人は殆ど涙に濕むかと思はるゝほど悲しげなる目許にて「御存の通り此旅行は、亡所夫の墓參りと云ふ目的で、貴方がたへも堅い約束を致しましたが、今は其約束を守る事の出來ぬ身の上と爲りました、此上に貴方がたを危險の地へ臨ませる事は出來ません」二人は猶も合點行かず、殆ど呆るゝ有樣にて無言なるに、夫人は語を繼ぎ「先日來、種々旅行家を問糺した處、私の所夫芽蘭男爵は死んだのでは無く、今も猶ほ、人外境と云はるゝ程の恐ろしい野蠻の地に、虜と爲つて生て居る事が分りました、所夫ある身で何うして貴方がたとの約束を守られませう私の身の勤めは、玆よりして唯一人で所夫の身を救ふ爲め、其人外境へ踏込まねばならぬ事となりました。

四十五

其筋の報告にて死せし人と定まりたる芽蘭男爵が、猶ほ死せずして蠻地に在りさは意外千萬の事なれば、平洲も茂林も何と返事をする能はず、茫然として控へるに、芽蘭夫人は又も語を繼ぎ、

「斯う成つて見れば私は確乎とした所夫の有る身、自分で自分の身が自由にならず、所夫男爵の居る所までは尋ね行かねば成らぬ事勿論ですが、唯だ貴方がたお二人には今更ら申譯が有りません、確に所夫は死んだ者と思ひ、其墓參りの爲と思へばこそ、貴方がたに同行を勸め樣々の約束も致しましたが、今より見れば貴方がたを欺いて、玆まで無駄に見送つて貰つたも同然で、實に貴方がたへ謂れ無しに幾千里の旅をさせ、無益の艱難辛苦をさせた事と爲りました、何とも申譯は有ませんが、全くの間違から出た事ゆゑ、是ばかりは幾重にもお許しを願はねばなりません」と涙ながらの目許に眞實後悔の色見えて、最と語り難く氣に語り出せり。平洲にせよ茂林にせよ、今まで夫人が心を一方に傾けて我を疎んずるに至りし事と思へばこそ、腹も立ち恨みもしたれ、事情全く左に有らで、二人の間に何の甲乙をも附けざること以前の如く、唯だ其夫の猶生存ふると分りし爲に、二人へ一樣に疎くせし者と合點行きては、何で恨み怒る可き、嫉妬の念は忽ち消えて、却つて無量の憐みを生じ、夫人の心中を唯だ氣の毒と思ふのみ、抑も嫉妬こは最と我儘なる心にして、夫人の心我が競爭者に傾きたりと思ひては、火の如く燃熾るも、之に反して

競爭者へ傾きしに有らで、力に及ばぬ深き勤めの生じたる爲め、餘所々々しくなりしと分りては、扨は其の勤だに不意に現れ出ること無かりせば、夫人の心は競爭者の方よりも、我方へ傾き來る所なりしならんと、雙方ともに斬く思ひて自ら慰め、復た人を恨まざるなり。

去れば茂林も平洲も、夫人の言葉を聞き寧ろ今まで互ひに疑ひ、互ひに恨みしが恥しく、忽ち元の通り兄弟も及ばぬ程の親しき仲とは成れり。爾は云へ今は目の前に最と難儀なる大問題の起り來し事なれば、互ひに心を明し合ふ暇も無く猶ほ暫くは無言なりしが、茂林は情に堪へずして震へる聲にて「イヤ夫人、芽蘭男爵が猶生存へて居るとは、我々の身に取り是ほど歡ばしい事は有ません、素より貴女の身には男爵の妻と云ふ勤めが有つて御自分の自由には出來ず、吾々二人に弦限り分れると仰有るのは無理も有ません、其心中は幾重にもお察し申ますが夫にしても、我々が果して是限り同行を止め、歸國するや否やは暫く後の相談とし、差當り伺ひますのは、男爵の生存へて居ると云ふ其噂は確に據所でも有る事ですか」夫人も心を取直し「ハイ、唯今所夫男爵が何うして居るか夫は素より分りませんが、兎に角所夫が死んだと云ふ其筋の報告が全くの過

ちで有ると云ふ事は、確な證據が上りました」と云ひ是より夫人の明かに說明すを聞けば、其筋の報告は芽蘭男爵が千八百七十一年の十月に、ボンゴーと云へる土地にて死し、其土地に埋葬せられたりと云ふに在り、夫人の指して行かんとせしは卽ち其のボンゴーの地方なり、然るに其翌年の一月ボンゴーよりも猶先に當るモンバトと云へる土地まで入込みたる、象牙商人の手代黒奴名澤と云へる者、確かに芽蘭男爵と云へる一人の歐羅巴人が數名の從者を連モンバト地方に來りしを見、親しく其人と二夜ほど同じ天幕の中に寢たりと云ふ、抑々此の黒奴名澤は白人の行き得ざる亞弗利加の內地に生れ、幼き頃他の種族と戰爭の爲め捕虜と爲りて、先より先へ賣渡され終にカーツウムに來り住み、成長するに及びて幾度も遠征隊に、通辯又は從者として雇はれたる者にして、極めて正直なる爲、政廳より土官同樣の地位を授かり、今は非職と爲りて象牙商人を助けつゝ有る者にして此頃に至り、久し振りにモンバト地方より此のカーツウムに歸り來り、芽蘭夫人の名を聞きて故々尋ね來りし者なりと云ふ、芽蘭夫人は此の名澤に付き、其の芽蘭男爵と稱せし遠征家の人物を聞くに我が所夫に相違は無く、猶ほも名澤は芽蘭男爵よりカーツウムにて發

送し呉れとて、夫人に宛たる一通の手紙をも預かり居れり、途中にて雨に逢ひ日に晒されし爲め、鉛筆にて認めたる表封は殆ど讀み難きまでに消て有れども、中は確かに男爵の走り書にて、其文には夫人へ暇も告ずに巴里を出發せし情無さを謝し、全く血氣の盛なる間に亞弗利加の見納めを爲す積にて來りしに、進めば進むほど猶ほ先を見度心起り、其心に迫られて終に歐羅巴人の曾て來りし事も無き、土俗モンバトと云へる土地まで來りたり。

此上纔の辛抱にて南の方、遙青山（ハブリウ、マウンテン）にまで到る可く、遙青山とは今まで亞弗利加を探險する人が、遙か天崖に一髪の青く聳ゆる山有るを望み見て、名けたる者にして、北より行く人も南より行く人も其山まで至りし事無し、山に至るまでの地方に割據する蠻族は、孰れも慓悍にして人の肉を食ふ惡風あれば、到底近づき得ぬ所と見做されて有るも、若し幸ひにして此遙青山を越ゆることを得ば、山の南の麓は必ずビクトリヤ湖と云ふ湖水の北端に接せる事を見出す可く、左すれば湖水に浮び、更に南進して彼の李敏敦が南より目指て進みたる、丹鷺湖畔にも到ること難かるまじ。是だけの所を見窮むれば地理學の上に、空前絶後の大利益を與ふる

者なれば玆まで來りて最早や後へは引返し難し云々との意を認めて有り、此手紙にて見れば芽蘭男爵は死せしと報告せられたる、ボンゴーの地方を無事に通過し、南へ〳〵と進みしは確にして、其後年を經るも未だ南の方殘日坡より何の便りも無きを見れば、今も猶ほ絶域に生存らへて有るならんと云ふに在り、實に是れ聞くも恐ろしき話なり。

芽蘭夫人が斯く語り終るを待、平洲は熱心に「ハイ分りました、併し今現に男爵の居る土地は分らぬのですネ」「ハイ分らずとも黒奴の中を珍しい白人が通れば、黒奴等が必ず記憶して居ますゆえ、夫から夫へと問ふて行けば必ず分りませう」「夫で貴女は何うしても所夫男爵に逢ふまで、絶域へ入込のですか」「ハイ」と答ふる聲は低きも、目し難きほど堅固なる決心は其語調に明かなり。「唯だ一人でお進み成さるのですか」「帆浦女と二人の通辯と、夫に今云ふ黒奴名澤を雇ひ、此人達に然る可從者を集めさせ、此土地で遠征隊を組立てゝ行くのです」「では吾々は何う致します」「貴方がたは到底も行く事は出來ません」茂林は傍より情け無き音調にて「何故に私共に限り、隨行する事は出來ませんか、エ夫人、何故に」と熱心に問掛けたり。

四十六

當事は常に外れ安き者ぞは云へ、平洲と茂林との身に取り之ほど當の外れたる事は非ず、二人は芽蘭夫人を自由の身と思へばこそ命掛けの此旅に上り、少しでも餘計に手柄を現して夫人の愛を得ん者と競爭し、如何なる危險をも冒せしなり、然るに一朝忽ち夫人の所夫牛存ふる事分り、如何ほど手柄を現すとも、最早夫人を我物とする見込み無き事と分りては、何の張合も脫け果て、此上旅行する氣も無きに至る筈なれども、平洲も茂林も少しの暇に彼れ是れと考へ廻して、縱しや男爵生きて有るとも夫人の行所までは、必ず從ひ行かんと一樣に決心したり。茂林先づ熱心に夫人に向ひ「此カーツウムは隨分歐羅巴人の入込む所で、爰まで來たのは何の手柄でも有ませせん。是より先は、即ち歐羅巴人の四五人しか入込だ事の無い蠻地で、我々は其蠻地へ入込むのを目的として來ましたのに何で茲から歸られませう、貴女と云ひ帆浦女と云ひ女の身で入込むのに、我々男子が入込まれぬ筈は有りません」と云へば平洲も亦「ハイ私とても同樣です、是で歐羅

巴へ引返せば眞に交際場裡の物笑ひです、何んだ大業に蠻地旅行などと觸れ散らして、カーツウムまで行つて逃げ歸つたのか、女連が其奥へ進んだのに男子が怯へて歸つたとは、餘まり活智が無さ過ると、斯云ふに極つて居ます、私共の信用は是れ限りで、再び社會へ顏を出す事も出來ませんと最と悔しげに陳立れど、夫人は容易に返事せず、茂林は更に「夫人、貴女は私共をば、褒美が無くては進み得ぬ者とお思ひですか、成るほど此旅行は愛と云ふ褒美に目が眩れて初めた事とは云へ、最初から二人の中一人は、其褒美に漏る事と極つて居ます、不幸にして愛の褒美には漏ても、互に死生を共にした以上は、生涯又と無い親友として交らうと、貴女が自ら言渡したでは有ませんか、今迄は愛の爲に旅行したとしても、是からは單に親友と云ふ心で同行します、巴里から茲まで幾千里、死生を共にする約束で艱難を分ち合て來親友が、貴女の是より危險極る地へ入るのを後に見捨て歸れませうか」と言葉の終るや終らぬに、平洲又直ちに言足「我々は最初芽蘭男爵の墓へ參る積で來ました、墓では無くて男爵御當人が無事に生て居ると分れば何故茲から歸らにや成らぬのですか、外とは違ひ人外境とも云る程の蠻地ゆゑ、多分男爵は捕虜同樣

の身と爲つて、後へも先へも進む事が出來ぬ有樣だらうと思はれます、看々同じ國人の一人が其の樣な悲しい場合に落ち入つて居るのを、救はうともせずに歸られませうか、曾て李敏敦翁が野蠻人の中へ入り、後へも先へも進まれぬ樣に成たとの報が、歐羅巴へ達するや、全世界の義人は翁を救ひ出す爲に、遠征隊を送らねば成ぬと主張し、遂に英國の地學協會から救助隊を出したでは有ませんか、今芽蘭男爵の有樣は、必ず當時の李敏敦翁より辛からうとも安樂な筈は有ません。

其報を聞ながら我々是より引返しては、世界の義人に合す顏が有ません、貴女が同行を許さぬと仰有れば、詮方無く私は茂林と兩人で茲から別に遠征隊を組立て、義人の心を代表して同胞の一人を救ひに行ます、死だ人の墓を見屆けるより、生た其人を救ふのが一入重い同胞の勤めです」さて、飽まで堅き決心を顏と言葉に示したれば、夫人も此の上に拒む事能はず、兩所が眞に此身を所夫ある人と敬ひ、同胞を助ける目的にて進むなれば、今まで通に同行せんと言出し、深さ限無兩人の親切と義俠の心とに、痛く感心せし樣子なれば、二人も初て安心し、後は此後の旅行の

準備より道筋などの相談に移り、猶ほ委細は明日又評議せんと云ふ事に決し、兩人は芽蘭夫人に分れを告げ此家を立出しは夜の十一時過なりしが、二人は是よりナイルの土堤を市の方へ歩み去るに、纔か數時間以前は互ひに決鬪も仕兼ねざるまでに恨み合ひしと事替り、此上も無く打解けた友達にて、一人が「僕は全く夫人の心が君に傾いたと思ひ、死物狂に爲て居たよ」と白狀すれば「僕も其通りサ」と答へ、次第に心の秘を語り合ふに連れ「併し君は今の事を何う思ふ、僕の考へでは芽蘭男爵が今以て生て居ると云ふ證據は、少しも無い樣だが」「爾サ、成程七十一年に死だと云ふ其の筋の報告の過まちは能く分り、其の翌年まで男爵が生て居たことは確かだけれど、其の後死だのか生て居るのか夫は少しも分らぬ、加之ならず、夫限りで何の便りも無い所を見れば先づ死だと見做すが確だらう」「僕も無論其說だけれど、唯芽蘭夫人は男爵が七十一年に死なざりしと云ふ證據に驚いて、直ちに今も猶ほ生て居るだらうと思ひ詰て居るから、僕は敢て其點を爭はなんだ」「果て男爵が其後に死だとすれば、吾々と夫人との關係は今までと別に變た事は無い」「爾サ夫人は依然として、未亡人で卽ち誰と婚禮しやうと自由の身だから、吾々は孰に

しても引續いて夫人と一緒に此旅をせねばならぬ」「爾だ、僕も其樣な氣がしたから、旁々以て此先の同行を主張したのだ」と云ふ折しも二人は土堤と河原の四辻まで來るに、茂林は「オヤ」と云ひ、地上に落散れる一物を拾ひ上げ「是は變だ此邊に落て居る可笑では無いが、見給へ是れ、我國製の歌牌だぜ」成程、此土地に在りとも思はれざる歌牌なるにぞ「若し寺森醫師が此邊を散歩して落したでは無いか」「サア彼より外に之を持て居る者は有るまいと思はれるけれど、彼れは巴里を出る時、十組の歌牌を用意して、既に半分ほど使破つたと云ひ、今では殘りを命より大事にして居るから、非常な間違ひでも無ければ、縱しや紙入は落しても歌牌は落さぬ、實に不思議だよ」と云ふ中、又二三間隔てゝ幾枚か落散れるを見たれば、兩人は何と無く不安心の想ひせられ、一樣に四方を見廻すに、此時密雲を破りて照輝やく月の光りに、一町足らず離れたる河磧の彼方に、四五人の人一人の虜と覺しき者を舁ぎ、淵の方を指して運び行く樣を見る、兩人は一樣に「ヤ、ヤ、若し寺森が何かの間違ひで、捕はれて居るのでは無いか」と叫びぬ。

四十七

平洲、茂林兩人は落散れる歌牌を見て、運ばれ行く彼の虜の、或は寺森醫師には有らぬかを氣遣ひ、直ちに其方を指て近づくに、定かには分らぬも衣服の有樣、益々寺森の樣なれば「コレ待て」と呼留るに、虜を運ぶ者共は、益々足を早むるのみ。

然れども此河磧の邊には、奴隷の密賣などを取締る警察官の如き者、政廳の命を受て時々巡回しつゝ有る故、茂林は若し爾官吏の居合す事も有らば、必ず來りて彼等を捕ふるならんと思ひ、直ちに短銃を取出せしが、彼れ等へ向ひて放ちては寺森と思はるゝ彼虜を害する恐れあり、殊更に横の方へ向ひ三四發續けて放つに、思ふこと圖に當り、忽ち彼等が行手なる川の水際より、パツと燈光の射るを見れば、是なん奴隷取締りの船なり。

其船より「誰だ、誰だ」と叫びつゝ五六の警吏走り出たれば、先の者どもは腹背に敵を受けたる有樣にて進みも退きも得せず、虜を其所に投捨てゝ右に左に逃げ惑ふ間に、其中の三人は吏員

の手に捕へられ、一人は平洲と茂林とに捕へられたり。

捕て其顔を見れば、先に馬兵田の大沙漠にて戰ひたる奴隷商人の一なるにぞ、平洲、茂林は忽ちに此者等が復讐の爲め寺森醫師を捕へしに相違無きを曉り、吏員に其旨を言立てゝ、投捨られたる廣の許へ到りて見るに、廣は果して寺森醫師にして、嚴く手足を縛られしが上に猿轡をまで喰まされて有るにぞ、早速解放ちて仔細を問ふに、今宵女芝居の如き見世者の小屋に入り、出去る所を此者等に捕へられ、石に縛りて淵に沈めるとの評議を聞き、最早や命は無き者と殘念ながら覺悟し居たる由を述べたり。

吏員等は是より此三人に同道を乞ひ、直ちに此者どもを引立てゝ警衙に行き取調たるに、此者共は且て法禁を犯し奴隷の捕獲に從事し、政廳より目指され居たる惡漢達と分り、其まゝ留置れて幾日の後夫々の刑罰を受たりとぞ。

此翌日は三人芽蘭夫人の許に到り、既に芽蘭男爵の猶ほ死せざる事分りしからは、之を救ふに一日も早きを勉めねば成らずと云ひ、至急に出發する評議を凝すに、彼の男爵より夫人への手紙

を賴まれ來りたる、老兵名澤と云ふ者の言葉に由れば、名澤が男爵に逢ひたらはモンバト地方のアザセリバと云ふ土地にて、男爵が其地より南へ〳〵と行きたるは確なれば、一同は先づ其のモンバト地方を指して行き、其邊にて聞き合せ、先より先へ尋ね行く可し、男爵が遙青山に向ひて進む目的なりし事は手紙の表に明らかなれば、若し途中にて男爵の踪跡全く消え、尋ぬ可からざるに至とも一同は進み〳〵て遙青山に到る可く、文明國の探險家が遙かに望み見し丈にて、曾て踏みたる事も無き其山を越えて、南の方殘日坡に出づ可とて、茂林も平洲も後々の見込み益々面白きに勇み立つに、獨り老兵名澤は容易ならぬ顏色にて、遙青山はモンバト地方の土人すらも唯青天の日に其青き色を望み、山なる可しと想像して地の盡る果ならんと言傳へ、猶も神の住む所と信ずる程なれば、死ぬる覺悟無くては近づく可からず、今まで探險家の近づき得ざるも全く慄悍なる蠻族住み、他國の人を其土地に踏込ませざるが爲なりと云ひ、其參考にとて猶名澤が知れる丈の有樣の說を聞に、第一モンバト地方の手前よりして、既に人喰人種にして「ニヤム〳〵」と稱する種族などは猿の如き尾ありと言傳へられ、今に至りては尾の有るにあらぬこと分りたるも

其の性殊に人よりは獸に近く、戰爭にて敵を虜にすれば其肉を炙りて爭ひ食ひ、人死すれば其墓を掘出して盜み食ふ事さへ多く、偶々他國の人入來ると見れば、第一に他國人の肉は如何なる味ならんなど涎を流して語り合ひ、打殺す隙をのみ附狙ふ程なれば、夫より先へ進むに連れ、人を殺すなどの風益々甚だしく、地獄に歩み入る覺悟ならずば到底行く可からずと云ふ。

去れど一行は危險の多ければ多きだけ、益々男爵を救ふ可き必要の急なるを思ひ、怯む氣色は少しも無く、猶ほ其先には如何なる國ありやなど問ふに、名澤は其先を知得ざれど、昔よりの言傳へにて、女人國など云ふ異樣なる國すらあり、其國は遙青山に近くして、黒奴中に又と無き程の美人のみ住へる故、多分は彼の遙青山に住む神々の化身なる可く、之を一般に「天女」と崇むるも果して爾る國の有るや否を知らずと云ふ。

並び聞く一同の中にて、寺森醫師のみは昨夜の危險に懲たるか、人食人種の噂を痛く怖恐るゝ樣子なりしが、天女の噂を聞て忽ちに恐しさを忘れ「黒奴の中に美しい天女が居れば、夫は黒天女とでも稱す可き者だ、僕は諸君の知通り、先頃より黒奴婦人の皮膚を大に研究して居るけれど、何分思ふ樣に材料の手に入らぬ爲め失望して居る、昨夜女芝居に這入たのも一つは其積に出た程ゆゑ、黒天女の住女人國へは是非行き度い、黒天女の皮膚を充分に試驗すれば、必ず皮膚病の上に一大發明を仕てお目に掛ける」と云ひ熱心に進む心を現はしたり。

素より進むに極たる旅なれば、別に管々しく記すほどの異存も無く、直ちに用意に取掛り其調ひ次第、一刻も遲疑せずに此所を出發すると云ふ事に一決したり。

四十八

是より蠻地へ進むには何人の供人を引連れ可きや、今までの探險家は成る可く供の人數を少くしたれど、此一行は行先を急ぐ者なれば、或時は野蠻人とも戰ひ、力盡くにて邪魔者を拂ひ退て進まねばならず、今までの探險家は途中にて路を遮る人種など有る時は、悠々其土地に踏留り其酋長の機嫌を取りつゝ、傍らにて其風俗や生植物などを研究したり、是れ其目的の全く學問研究に在りしを以て、逗留するを厭はざりしに由るなり。

斯る研究を目的とせず、唯茅蘭男爵を盤地より救出すをのみ目的とする此一行は、途中にて無益に逗留する事能はざれば、眞に行軍の覺悟にて行かねばならず、依て此土地にて罷役の兵士五十名を雇入れ、之を老兵名澤に引連しむる事とはせしが、五十名の兵士を連るに容易の事に非ず其食物其荷物だけも一通りの手段にては運ばれず、陸を行くには人夫を合せ確に二百人の一行と成る勘定なれば、先づ河にて行かるゝ丈は河に依、愈河盡きて陸に上りたる時に、其土地の蠻民を人足として雇ふ可しと云ふに決し、先づ小船四隻を借入れて之に荷物を積みたるが、幸にして埃及政廳より發したる奴隷取締の河蒸氣船が、ナイルの河を遙に上手まで視察の爲に遡るとの事なれば、其船長を勤る士官に四艘の小舟を引舟として、引連ては行き呉まじきやと乞ふに、幸ひ此士官は佛國人なるが上に、埃及を發する時、佛國の領事其他の人々より、若し途中にて芽蘭夫人等の一行に逢ふ事も有らば、成る可便利を與へて遣れと言渡されて有りとの事にて、早速一行の請を諾して小舟四艘を河蒸氣の後に結び、猶も小舟は不便なれば芽蘭夫人外數名は、蒸氣船の方に乘られよとて招待したり。

是れ何よりの幸ひなれば夫人は平洲、茂林、寺森の外に帆浦女、與助及び通辯二人、都合八人だけが船の方に乘移たるが、河蒸氣とは云へ軍艦の形を備へたる物なれば、室なども美しく、今までの旅行に比べては殆ど仙境に遊ぶ思ひあり、殊にナイル河の景色は、遡るに連益々美しければ、一同甲板に集まりて殆ど日の暮れ夜の明るをも知らず、中に與助は、先に亞拉比亞にてベドイン人に捕へられ、奴隷商人の群に入りて以來の艱難と失策とを說きつゝ、此上は最早や安心なれば、一刻も早く象牙の落散れる森林へ入込み度と、夫ばかりを樂みにし、寺森醫師は又、早く女人國に入り「黑き天女」の皮膚を研究し度しと說き、互ひに樣々の想像を逞はせしが、カ！ツウムを出發せし翌日の夜は、滿月にして天に一點の雲も無く、殆ど晝かとも疑はるゝ程なれば兩岸の景色得も云はれず、一同は恍惚として甲板に並び、既に十一時を過ぎたれど誰一人寢室に退かんとはせず、實にナイル河上の夜吹く風の涼しさは、晝の暑さに引較べて千金も猶買難き心持あり、恐らく世界に又と無き絕賞なる可しなど語り合ふ、折しも忽ち河の上より何とも譬へ樣の無き惡き臭ひの來り、一同の鼻を突許りなれば、孰れも顏に手拭を當て避けんとするに、寺

森醫師は職掌だけに直ちに船長に打向ひ「此河上に激烈なる傳染病が流行して居るだらうと思はれます、是は確に人類の皮膚より發する腐敗の臭氣です」と云ふ、此一語に一同は今までの爽かなりし心持を打忘れ、眉を顰めて船長の顏をのみ守るに、船長は千軍萬馬の間に往來せし士官だけに少しも驚かず「ナニ此臭氣は私の鼻に能く慣れて居ます、傳染病など云ふ其樣な恐ろしい者では有ません」寺森は猶熱心に「では何の臭氣ですか」船長は平氣にて打笑ひ「ハヽア私の賤務を、貴方がたへお目に掛ける時が來ました」とのみ云ひて船首の方に步み去り、月に透して行く手を遙かに打ち見遣るにぞ、一同も船長の落着きたる有樣に大いに心を强くせしも、猶ほ怪しさに堪へされば、臭氣を耐へて同じ船の首に行き、先の方を望むに上手より最と靜かに下り來る一艘の河船あり、蒸氣船には有らざれど通例此河を上下する船よりは較や大きく、高く二張の帆に風を孕ませ、流に順ひて下る樣、仲々の速力なり、見る間に間近まで押寄せたれば、船長は聲を限りに其舟に向ひ「進みを止めよ」と二度まで命令するに、舟の人は聞かぬ振にて猶下り來らんとす。

素より寂然と靜なる夜半なれば、船長の聲の聞えざる筈は無し、船長は猶ほ獨語の如く「フム聞えぬ振で通り過せば、毎もの通り此船を、彼の船の前へ横たへ遮つて遣らうかな、イヤ那れほど速力が强くては此船を傷くる恐れが有る、好し」と決然たる一語を發し、早速砲手を呼出して「アノ船を打沈めよ」と命ず、砲手は其命を畏みて、直ちに砲門を開き、船の然る可所まで來るを待つに、彼方も夫と知りて驚きしと見え、匆々に帆を疊みて此船より一町ばかり離れし横手に、靜に錨を卸したり。

四十九

異樣の臭氣を發ちたる怪しき舟の碇を卸すや、此方の船長は芽蘭夫人等に向ひ「私は役目としてアノ舟へ乘移り檢査しますが、貴方がたも同行したくば御隨意です」と云へり。

檢査とは如何なる事を爲にや、是も話の種なればと一同は共に行事を答ふるに、船長は直に二艘の艇を卸させ、一艘には戰ひの用意を爲たる水兵十人を載せ、一艘には其身と共に芽蘭夫人外

數名を載せ、直ちに怪き船に漕附け、乘移りて船の頭領を呼出すに、頭領は斯る手數を掛けられて定めし不機嫌なる可しと思ひの外、此方の軍服に恐れてか最と機嫌能く打笑み、恭々しく首を垂れて「イヤ御命令ゆゑ直ちに此通り船を止めました、御用の程はーア、分りました、カーツウムにお出の奥方にお言傳が有るのですな、夫とも手紙ですか品物ですか、私どもは明後日何地へ着く日取ですから、何なりとお届け申します」と、此方の言葉を聞かぬ先に、只管ら心を迎へんとするは、媚諛らひ檢査を免れん心なり、此方の士官は皆まで聞かず「默れ、吾々は此舟の積荷を檢査に來たのだ」頭領は驚きつゝも手を揉みて「何う致しまして、私共は檢査を煩はす樣な不正の商人では有ません、御覽の通り綿や小麥を積で居ますから」と云ふ、成るほど甲板の面は綿や小麥の俵堆く、更に怪しき廉も見えざれど、彼の異樣なる臭氣は益々〳〵募るのみなれば「綿や小麥が此樣な臭氣を發すると思ふか、確に此船は奴隷を積で居るので有る」士官は熱心に目を配れど蒸氣船こは違ひ船の底極めて淺く、別に臭氣を發する程大勢の奴隷を隱し得べしとも思はれねば、孰の所を檢めんかと殆ど途方に暮るに、水兵の中最も年長たる一人は、乘て經驗の有事

と見、忽ち甲板の一部に在る小麥の俵に目を注ぎ「此俵を取除て下の方を檢めねば」と云ひ同役と共に其俵を除初むるに、今まで揉手にて訣ひ居たる頭領は忽ち噴嘩面と爲「其俵を動かされては積直すが容易ならぬ手數です」と叫び、馳行きて水兵を妨げんとす、扨こそと水兵數名之を遮り、殘る數名にて容赦も無く俵を跳除け盡すに、俵の下なる甲板に穴を蓋せし如き厚き戸あり、怪きは此戸なりと力を込て引開るに、恐しや其中より、彼の異樣なる臭氣は男女幾人の呻唸く聲と共に立騰り、黑き手や頭なども、今まで無理に推附けられ居たる如く突出たり。

一同之はと驚く中に、氣早なる茂林は直ちに馳行て其手、其首などを捕へ甲板の上に引出すに果して是れ奴隷の女子供にして、後からも〳〵と薄出さるゝにぞ瞬く暇に十餘人を引出したり。猶ほ引續きて水兵に角燈を照させ、振照して穴の中を瞰くに、甲板と船底なる床との間、纔かに四尺許りの高さにして、人の立つには頭の閊ゆる所なるに、此中に猶も百人以上も有らんか、犇〳〵と詰込まれ、呼吸の苦さに喘ぎ合聲眞に凄じく聞るにぞ、茂林は「サア早く出て來い」と命ずれども言葉通ぜず。

後にて聞けば此奴隷等は常に甲板の上に置かるゝも、檢査の船の來ると見れば直に甲板の下へ詰込まれ、檢査の船の過去まで卅分か一時間も其中に置るゝ者にて、中には空氣の通はねば船の横手なる水際の上に、所々穴を穿ち空氣を呼ぶ道とはなして有れど、空氣の入に引違へて、大勢の呼吸の臭氣其穴より湧出て、時を經るに從ひ益々臭氣を洩すとかや。

猶ほ其穴とても多分の空氣を通はせるに足らざれば、中なる奴隷の息は次第に塞がり、一時間より後に一分間毎に二十人の割合を以て死亡し、殊に其の死亡は最も健康なる者ほど、多量に空氣の呼吸を要する譯なれば、乃ち健康なる者先に死し、二時間も生き殘るは到底物の用に堪へざる最と柔弱き奴輩なりとか。

又た頭領が一同を此のところへ入るゝには非常なる驚しを用ひ、中にて聲を發し或は外に出んとする者は、後にて直に切殺す可しと言渡して有りとの事にて、女や子供の奴隷なれば其言渡しに怖恐れ、今も茂林が外に引出さんとすれど容易には出で來らず、既に甲板の蓋開きて空氣の甚分か多量に入込む事と爲り、且は十數人拔取られては聊かながら融通の附きたれば、奴隷等は夫

に滿足し、甲板に出て殺さるゝには勝しなりと思ひてか縮み込みて動かんともせず、止を得ず水兵等は腕力を出して引出すに、同勢總て百二十八人にして其内の八人は、既に息絶え事切れこ爲りたる後なり。

此船の頭領初め其手下は、水兵等が奴隷の引出しに急しき間に、焰硝を入たる桶三箇を持出して其傍に身を集め、檢査官等の近き得ぬ樣、鐵の門木を以て道を塞ぎ、其中に閉籠りて、火を燈したる蠟燭を振照し、其頭領最と腹立げに檢査官に向ひ「其奴隷を解放されては吾々一同財産を失ひ、其上にも非常なる刑罰に服する譯ゆゑ、阿容々々と從ふよりは此火藥に火を放ち、船を碎きて奴隷一同と共に死す可し」と罵り立て、死物狂ひの有樣は眞に焰硝に火を放ち兼ざる勢ひなり。

若し焰硝に火を附けては、一刻の猶豫も無一同船と共に破裂して沈む譯なれば、其危き事一方ならず、茂林は「エヽ此人非人等を、酷ひ目に逢せて遣度なア」と齒切すれども如何とも詮方無く、頓て何事をか思ひ附きしか、船長に二言三言細語き末、其身唯一人元の小船にて本船へ歸

りたり。

平洲は又先に馬兵田の沙漠にて奴隷を解放し、其奴隷等の力に由りて商人を捕へたる經驗あれば、此度も奴隷等に號令し一齊に頭領等を襲ひて、其猶火藥に火を放ち得ざる間に取て押へしめんかと奴隷の方を見渡すに、其過半は女子供にして役に立つ見込みも無く、火藥に火を放つは隱澁より猶早く行ひ得る事柄にして、縱しや如何なる手段を以てするとも彼等に先ずる道は無し、是れも如何とも詮方無しと空しく心を碎うち、頭領等は早やブランデー酒の樽を抜き、死際の盃とも云ふ如く、片手に蠟燭を持ちたる儘、一同にて呑初め、見る間に其樣子も最と荒々しく變じ來れり。

此報實に平生より命知らずにして、人の命と我命と見界無く、常に九死の地に入て不正の業を營むが上に、酒に醉ひては如何なる事をも恐れざる無分別の質なれば、火藥に火を放つ最後の手段醉はぬ前こそ嚇したれ、醉ては最早嚇しならず、今までさても渡々其例しの有る事なれば、危險なること云ふばかり無し。

五十

頭領及び其手下は、見る間に益々醉來りて、命の貴重なるをも忘れ、手に持てる蠟燭め屬火藥の樽に近くを危しとも思はざる樣子なれば、其危險なる事云ふばかり無く、彼等が此船を破裂せしめ、一同と共に亡ぶるも最早や目前の事なる可しと思はるゝ迄に推寄せたれば、此方の船長は此上一刻も捨置かれじと見、佶と彼等に向ひて「其蠟燭を消して仕舞へ、サア五分間の猶豫を與へるから其間に蠟燭を消さねば容赦無く射殺すぞ、其代り玆で蠟燭さへ消せば汝等の命だけは助けて遣る」と最後の決心を言渡すに、頭領は最と落着きて嘲笑ひ「ナニ汝から五分間の猶豫を遣るワ、奴隷をソツくり此儘殘して汝等だけ三分間に尋常に此船を立去れば好、三分間を經て立去らねば火藥を以て汝等ぐるみ、此船を碎いて仕舞ふ、サア立去るか何うだ」と云ひつゝ蠟燭を片手に持ちたる儘、火藥の桶の蓋を悉く開き盡せり今は全くの誤ちにて火の粉一粒を落すとも船は忽ち破裂する恐れあり、彼れは猶語を繼ぎて

「汝等若し鐵砲持つ手を一寸でも動かせば夫を合圖に火を放つぞ、サア己に鐵砲を向るなら向て見ろ、鐵砲と火藥と何方が早いか比べて見やう」比べて試みる迄も無く彼等の早きこと必定なれば、此方の船長は持餘し、如何せんかと思案する間に、彼頭領は猶も一筋の繩を取出し其一端を火藥の中に埋め、又一端を桶の外に出て導火線の如くに爲して、桶の外なる其端に火を附たり。

頭領は繩の次第に火藥の桶に燃行を見「サア大抵三分間の長さを測つて有るのだから、三分經てば否應無しに破裂する、其前に尋常に歸り去とか、亦は吾々と共に此船で死るとも勝手にしろ死でも冥途まで汝等を供に連て行くなら命は少しも惜くは無い、汝等ばかりか其所に居る、百餘人の奴隷達も冥途へ己の供をするのだ、夫とも尋常に立去れば此繩の火を揉み消して奴隷の命も助けて遣る」と有らん限りに惡體を並ぶるにぞ、士官は悔しさに拳を握り殆ど飛掛らん勢ひなりしも、思ひ直して、芽蘭夫人の許に來り「私は職掌ゆゑ是非無けれど、貴女がたの身を危くしては濟みません。何う致しませう」と問ふ、芽蘭夫人は少しも騒がず「致方が有ません私共には頓着無く貴方が思ふ存分に、自分の職掌をお盡し成さい」と凛乎として答ふるは、奴隷幾百人

の命を救ふ爲には、命を危くするも厭はじとの決心なる可し。傍に立つ平洲も寺森も一齊に「爾うですとも吾れ〳〵も貴方に加勢して、彼れを射殺します」と士官に云ば、又た背後より「私も短銃を持て居ますから」と云ふは、男の傍にて露ほども弱氣を示すを敢てせさる、彼の帆浦女なり。

士官は此數々の言葉に勵まされ、小聲にて手下の水兵に一齊射撃の用意を命ずるに、是が若し佛國の兵ならば、如何なる危險をも恐れずに上官の命に從ふ可も、悲しや埃及の水兵にして、訓練に足らざる所あるが上に兼て奴隷商人の亂暴を知り、幾度も斯る場合に船を辟きて一同と共に水底の藻屑と爲し實例を聞て知れば、命の有る間に逃去らんと身を構へ、士官の命に應ぜんとも せず、士官は言甲斐無しと怒り「汝の如き者は輕みにせぬ、サア貴方がた手をお借なさい」と平洲及び寺森に向ひて云ひ、三人咄嗟の間に銃先を揃へんとするに、此時導火の繩は繩に桶の外へ三寸ほどを餘し唯だ一刻にて火藥に移る所なるも、彼頭領は之れをさへ待暇無しと見てか、更に蠟燭を振り立てゝ「エヽ、最早や仕方が無い約束通りだ」と云ひ此方の狙ひ定まらぬ間に、其蠟

燭を火藥の中に投たるが、此時遲く彼の時早し、蠟燭の猶落ちぬ間に、孰れよりか瀧の如き大水、アツと落來りて其蠟燭をも導火をも消したるが上に、火藥の桶をまで濕ほして容易には火の移らぬ事と爲したり。

一同は餘り意外なる出來事に殆ど何事なるやを知らず、既に蠟燭の消て後、漸く怪き水の落來りし爲なるに氣附きたれど、何の所より何の水の落來りしや、瀧か驟雨か、唯だ呆氣に取られしまゝ四方を見るに、此邊に瀧は無く、空は又一面に晴渡りて滿月輝やき、雨の落來る謂れも無し此時本船の甲板に當りてドツと鯨波揚るにぞ。初て其方を見れば、先に唯一人本船へ引返したる彼の茂林畵學士が、後に殘れる水兵と共に備へ附の喞水を取出し、此方の火藥を目掛て水を注ぎたるにて有りけり。

五十一

實に茂林の働きには一同肝を潰して驚き、頓智の程に感服したるが、是にて敵の命と賴みし彼

の火藥は水に濕ほひ、再び焙りて乾かせる迄は、火の移らぬ事と爲りたれば、此方の士官は平洲。寺森及び水兵一同と共に、直に敵の頭領以下を取つて押へ、犇々と縛しめたり。

是にて一方は片附たれば、更に奴隷等に向ひ其鄕里を問ふに、孰れもナイルの支流ガゼル河に沿へる村の者にて、隣村との戰爭に捕はれて、斯は奴隷に賣られたる者なりと云ふ。素より士官の乘れる汽船は唯だナイル河を取締る丈にして支流へは乘入らぬ者なれど、幸ひ芽蘭夫人等の一行はガゼル河に入り、其河上レツクと云へる所まで進む見込なれば、此奴隷船を引行きて奴隷一同を其鄕里へ送りて遣らんと云ふに決したり。

去れば奴隷船をも蒸汽船の後に結び、夫人等の船と共に之を引行く事と爲し、彼の捕縛せし奴隷商人は士官が此河の巡視を終へ、河通無に連行きて夫々罪に處す可き者なれば、虜として本船の一室へ監禁したり。

斯て船は再び進行を初たるが、乘客中獨り平洲文學士は今夜の働き、茂林に一歩を讓たるを悔ひ、彼れと我とは手柄を以て競爭する者なるに、彼れに是ほどの手柄を現されては、夫人の心直

にも彼れに傾く可き恐れ有り、我れも何とか彼れて眠りも得せず、船中一同は疲れ果てゝ室に退きたるも、景色も目に留まらず、心を傷めて佇立み居たるに、凡そ二時間をも經たる頃、後に引かゝる彼の奴隷船に異樣なる火の燃上れり、若しや奴隷等が誤りて船に火を失したるには有らぬかと、艙の方に馳行きて見るに、火の色、或は白く或は青く、而も其火の手は甚だ盛にして、焔々と燃廣る勢ひあり、火の色こそ怪しけれど何さま船火事に相違無く、其中に奴隷等の悲しげに叫び立る聲も起りたれば、平洲は直ちに水兵等を呼起し、咄嗟の間に救の小船を卸さしむるに、疲れて寢たる人々も物音に驚きて追々に起來り、中には先程の茂林の働きを想出して、早く喞水を喞水をと叫ぶも有り、平洲は大聲に「アノ火は喞水で消える火では無い、今水を掛れば益々勢ひか强くなるのだ」と叫びて制し、自ら水兵と共に小船の一に乘り、早速奴隷の船へ漕附けしが、後にて失火の原を聞けば奴隷等が自由を得たる喜びに、船の中なる食糧を取出して祝宴を張り、積たるブランデー火酒の樽を開き、飲つ騷ぎつする間に、誤ちて其樽を覆へし、床に燃移りて低くなりたる蠟燭の

欠に注ぎ、忽ち火酒に火の移たる物なりしと。去れば火の色の異樣なると共に、其勢も亦異樣にして、緩ぐが如く見えて實は鋭く、殆ど消止も手段も無し。平洲が先登第一に漕附けたる坂は早や帆に移り、檣に移り、悉く燃易き木材に移りたる所にして、百餘の奴隷は火の間を逃迷ひ、唯だ叫ぶのみなりしが、船の火は到底消す可からざるも人命を救ふが大切なれば、平洲は船に飛上り、手當り次第奴隷を捕へて己が乘來りし小船の中へ投込まんとするに、人多くして船少く、如何にしても救ひ終る可き見込は無し、本船へ向ひて「有る丈の小船を卸せ」と叫び、必死と爲て働くうち、フト目に留るは此奴隷船を他の船に繋ぎたる大綱なり。平洲は茂林にも劣らざる早速の頓智にて、其綱に手を掛け力に儘せて引かんとするに、素より一人の力にて此船を他の船の許へ引寄す可くも有らねど、奴隷等も其意を察してか、中に力ある者三四十人ほど直ちに馳來り共々に綱に縋り、曳々と引き手繰に、孰れも死力を出したる事なれば船は次第に他の船に近き、飛越えて乘移る事の出來る程とは爲りたり。奴隷等が我先にと他の船へ乘移る間に、本船の小船も悉く來り、茂林も寺森も他の水兵等と共に、危きを忘れて働き初めたれば、平洲は漸ほ

一方には、無難の船へ乗移り得ざる女小供を抱き上げて、下なる小船に投込みなどするに、凡そ八九十人をも助け得しかと思ふ頃、本船の船長より「他の船へ火の移る恐れが有る、綱を切て其船を流して仕舞へ」との命令あり。曩れど平洲は此命に隨はず「斯すれば他へ火の移る恐れは無い」と云ひ以前に手繰りたる彼の大綱を延弛むるに、船は流れの爲め忽ち幾間か他の船と遠かり、今迄で飛越ゆる事能はず、唯だ小船にて救はるゝ一方とはなりしが、火勢は益々強くして殆ど身を焼かるゝを思ひあり、去れど猶ほ救ひに洩れて泣騒ぐもの三十人ほども有れば、平洲は身の焼け爛るゝを厭はじとの決心にて馳廻るうち、船長より第二の命令は「先刻の火薬が最う乾いた、破裂せぬ間に早く逃ろ」と云ふに在り。是には平洲も驚きて、先程火薬桶の並びたる所を見るに、成るほど火は其傍に燃行きて、既に其桶を外側より焼つゝ有り。

火薬の桶は既に猛火に圍まれ、其破裂するは唯だ瞬間に在り。去れど猶廿人ほどの奴隷、逃端に迷ひて狼狽し、中には泣叫びて平洲に取縋り、振拂ふとも離れぬ者すらも有り。外の水兵は「逃よ」と云ふ船長の命令に、奴隷を抱きしまゝ下なる小船に飛込みたるも有れど、平洲一人は容易に逃去らんとせず、殘る奴隷を一々小船に投入れしが、最後の一人を抱上げたる時は、小船悉く逃去りて其身の逃るゝ所無し。去れど平洲は水泳の心得あれば其儘川に飛入るに、幸ひに船長と茂林とが、特に平洲を救はん爲に別に一艘の小船を漕ぎ、矢を射る如く來りたれば、して焼つゝ有る奴隷船より幾間か横手に游ぎ去りたる所にて、抱し儘なる奴隷と共に其小船に取上げられたり。此時船長は本船に向ひ三度目の號令を發し「綱を切れ」と叫ぶ、水兵は直に奴隷船を繋げる大綱を切り離したるが、是れ實に最も際疾き所にして、奴隷船が僅に十數間流れ去し時、轟然一聲、彼の火薬に火の移り、天地に震ふ程の響きにて、奴隷船は片々に割れ碎け、波は河底より覆へるかと疑はるゝ許りに逆巻き、平洲の取上げられし小船も纜に轉覆を免れたるのみ、既にして平洲等本船の上に歸れば、船員口々に平洲の勇を褒め、火薬の破裂する眞際までも奴隷

五十二

を救ひ一人の死者無からしめしは世に珍しき働きなりとて、中には平洲の手を握り締るも多く、」殊に船長は、芽爾夫人に對し、御身等一行の力にて此船は、今迄の巡視船に例無き程の目覺しき手柄を揚たりと云ひ、只管に謝辭を述べたり。

是にて平洲と茂林との手柄は、甲乙無き事と爲たれば、兩人とも滿足し、翌日は船長の催にして、慰勞を兼たる祝宴を開き、最と心地良く日を暮したり。此又翌朝は船益々進み、チローク種族と云ふ蠻民の住む近邊まで達したれば一同甲板に出て見るに、兩岸の森より水際に掛けて無數の水牛、水馬など、朝風の爽なるを喜ぶ如く群れ戲れ、鰐なども其所此所に游ぎ遊ぶ樣、面白きこと云ふ許り無し。頓て又一里ほど進めば、河の一方に幾十の小船浮び、船には一名又は二名の蠻人、各手に投槍を持ち、水馬を追廻しつゝ有り、亞弗利加にて水馬狩は、象獵に次で危險なる仕事にして水馬の怒り狂ふ樣、野蠻人の巧に其怒を避け虛を伺ひて攻立る樣、戰爭にも異ならず、一同は好き所へ來れりと、甲板より其樣を見て有るに、一頭の水馬既に繩に就きたる槍を打込まれ、手負と爲りて水中を逃廻れど其勢ひ甚だ強く、時々振返りて首を上げ、齒を現はし

て小船を覆へさんとする事も有るにぞ、茂林は野蠻人の勞を助け、旁々水馬の苦痛を切縮めて遣らん者と、銃を取出し、荒狂ふ水馬に向ひ、其最も急所と聞く耳の後部を狙ひて射るに、狙ひ違はず水馬は水の中にて轉輾して死したり。

此邊りの蠻民は全く銃器を知らぬに有らぬも、此手際に驚きて暫し手を引き船を留め、喝采かと思はるゝ叫び聲を發するのみなりしが、其間に本船の背後なる小船より五六の兵士、艀を卸し水馬の死骸に漕寄りて、背に打込みたる槍の繩を取り本船の方に引來らんとす。蠻民は斯と見て我が獲物を無惜々々他人に奪はるゝを恐れ更に鯨波を揚げ、兵隊の乘れる艀を目掛けて襲ひ來らん勢ひなれば、茂林は此邊りにて蠻民より憎まれては一大事と思ひ、其身も亦艀に乘りて漕寄せ直ちに小刀を出して彼等の引ける繩を切るに、蠻民等は痛く喜び獲物の周圍に集りて又も繩を取り引去らんとす。茂林は其間に本船に漕き歸り、老兵名澤に命じて、蠻民の獲物を奪はんとせし兵士を引出し、叱り付けて其脊を五棒づゝ撻たしめたるが、是よりして兵士等は茂林を恐るゝと甚だしく、規律も大に嚴重になりたりとぞ。

堤より又幾里かを進みて本船は愈ガゼル河とナイル河の合する「ノエル」と云ふ所に達したり。芽崗夫人の一行はガゼル河を溯り「レク」に上陸して夫より先は陸行する定めなれば、茲にて本船と分るゝ事に成り、今まで本船に引かれ居たる帆船へと乗移るに、本船の船長初め水兵等は、痛く分れを惜み、幾發の大砲を發して一行の無事を祈りたり。斯る異境に於て引ゝ本船に分るゝは、親を失ふよりも猶ほ悲しく、一同殆ど心細さに堪へざれど兼て期したる事なれば、勇氣を鼓して進まんとするに、抑もガゼルの河と云へるは、ナイル河より西南に分れたる枝流にして、河とは云へど水遲くして沼の如く、殆ど孰れに流るゝやを辨じ難し、或所は幾里に廣がりて淺き沼と爲り、或所は又集りて淵の形を爲せど、水の遲きに從ひて、底に雜草生茂り、船の櫂などに搦まりて進むに困難云ふ許り無し。去れど是とても覺悟の上なれば、少しも恐れず船を行るに、僅に二時間ばかりにして、水茂だ淺く、葭、葦其他の水草、水の表面に高く延び出で、見渡す限り果無きかと思はるゝ淺洲にして、船は進みも退きも成り難き所に乘り入れたり。

五十三

船は水草の生茂る淺瀬に乘入り、殆ど後へも先へも動き難し、去れどガゼルノ河がナイルと違ひ船の往來に最と難きは、兼て期したる所なれば一行は左まで驚きもせず、兵士及び人夫の中より五十人ほどを河に卸し、之等をして水草を掻き分け船を引かしむるに、此河一體に鰐、水馬などゝ云ふ恐ろしき魔物棲み、時々人夫を害せんとする事あれど、其度に此方より平滑、茂林兩人にて銃を發して追拂ひ、何の禍も無きを得たり、其うちに淺瀬の中にも所々水の稍や深き所有り、船は止まりて又行き、行きては止まり、辛くして三十町ほども進み、漸く淺瀬の一方を切抜けて淵の如き所に出で得たり。此の先とても斯る場合は有る可ければ、兵士人夫を勞はりて酒肴を與へ、淵に出たる幸ひを祝して帆を揚ぐるに、素より淵のみには有らざれど、夜に入るまで船の間ゆる所は無く、先づ無事に幾里をか進みたるが、夜の九時頃に至り再び前の如き淺瀬さは爲りたり。茲も同じく人夫を水中に卸すより外、進む可き手段なければ、夜中にては鰐の襲ひ來る

を見分くる由無く、甚だ危險の業なれば、夜の明くるまで船を止むる事とは爲したり。

船員一同は獅々其他猛獸の違音に、屢々夢を破られたれど、何事も無く夜の明けたれば老兵名澤を呼び、直ちに昨日の如く人夫兵士等を河に卸ろし、道を開かしめよと命じたるに、凡そ一時間を經て水夫等の河に卸たる樣子無し。平洲、茂林等は夫人の室に集まりて、樣々の談話を爲し居たるに、老兵名澤は常惑の樣子にて入來り「人夫も兵士も罷業を企て、今朝は寢て居て起き上りません、私が其中の重なる者を或は叱り、或は鞭ちなどしても一同一方ならず強情に構へて居ます」と云ふ。氣の早き茂林は火と怒りて立上るに、芽蘭夫人は之を止めて、名澤に向ひ兵士人足等が何の口實にて罷業を爲すや、給金の割增を望むにやと問ふに 名「イヤ何の口實も無く兵士の云ふには、吾々は敵と戰ひ一行を保護する役ゆゑ、船を動かすは職掌で無いと云ひ、人足も水夫の約束で雇れたでは無いと言張りまして」然らば別に給金を增し、以後兵士へも人足へも斯樣な場合に水草を推分け、船を引くと云ふ約束を茲にて新に結ばしむ可しと、夫人が穩かに言出るに、茂林は躍起と爲り「イヤ彼等が不平を增す度に、給金を增て遣つては一同愈增長し、遂には手

に合はぬ事になります、ドレ私が行て目に物見せ、充分彼等を懲らして遣ります、名澤の鞭の打樣が未だ手緩い」とて立上れり。

成るほど茂林は既に兵士人足等より恐れられて有る身なれば、彼等を打ち懲らして働かしむること難は有らじ、去れど平洲は餘り雇人を打懲しなどして、其の身體を傷めるを不得策とし「イヤ茂林君、僕に任せ給へ穩便の手段が有るから」と云ひ、茂林の承知を得て、老兵名澤と共に室外に立出でつゝ「名澤、彼等に朝飯を食はせるは何時頃だ」 名「七時半です、今既に用意して居ます。 平「好し、其用意を止め、賄ひ室に鍵を卸して置け」と云猶意を含めて名澤を退けたるが是れより數時間を經、既に食事の刻限を過るに彼れ等は稍や饑を感せしと見え、靜に寢居たる者が追々に起上り、頻りに何事をか呟き初めたり。

頓て其中の最も口利にや、夫とも最も腹の空きたる男にや、自ら進みて名澤に向ひ「吾々は腹が減た」と云ふ、名澤は平洲の言含めを守り「腹が減たら食事をするが好らう」と答ふるに其者「でも食物を持て來て呉れぬから」「では自分で賄船へ行き取て來るが好らう、疾くに食事の時間

は過て居るから「此返事を聞くや一同は「爾だ」と云ふ如く頷き、先づ十人ほど船と船との間に渡す板の橋を爭ひ傳ひて、賄ひの船へと乘込みしが、賄の室、戸を締めて寂然と靜まりたるに呆れ返り、互に顔を見合すのみ。平洲は此方より暫し彼等の呆るゝ樣をば心に笑ひて眺めし末、通辯を引連て、宛も偶然の如くに其の所に到り、訝かる樣を顏に示して黒奴等に向ひ「呼もせぬのに何故起來りしや」と問ふ。黒「吾々は朝飯を食ふ爲に」平洲は益々驚きし體にて「何だ、お前等は今日一日業を休んで寢て居ると云ふ事ぢや無いか、此船は二日間の兵糧しか無く、早く「ノエル」地方へ着て肉類を買入る積だから、同所へ着ぬ前に一日休んで費しては、食物が盡て仕舞ふ一日休むなら食ずに休まねばならぬ、已はお前等が食はずに仕む事を承知して居た」食はずには休まれず、去ればとて食ひて休まば、食物の有る地方へ達する前に糧食の盡くる恐れ有り、誠に退引ならぬ道理なれば、黒奴等は又も顏を見合すに平洲は語を繼ぎ「併しお前達が何うしても食はねばならぬこならば、此船を立去て外に食せて休ませて呉れる、新主人を求めるが好らうお前達が立去れば船はズット輕くなり、殘る人々を四艘の船へ配り附れば、何の樣な淺瀨でも通

から」と云ふ、此の平氣なる言葉は直ちに彼方の胃の腑へ膨へしと見え、彼等再び船に歸り、又も評議を初めしが、平洲の思ふ事圖に當り、頓て一同水中に降立て、昨日の如く船を引き初めたり。

五十四

平洲文學士の兵糧攻に黒人も閉口し、一同河に降立て水草を推分け船を引き初たれば、暫くにして又も此淺瀨を通り越たり。依て平洲は賄方に命じ、毎よりも美味の食を黒人等に與へたるが、此功能は驚く可し、是より後、幾度か淺瀨に逢しも黒人等は、途中に滯りて兵糧の盡ては大變なりと言合せ、我先にと船を引きたり。

翌日はアラブと云へる枝川の、ガゼル河に來り合する所まで達したるが、是より上は水稍や深く、沼の如く池の如きガゼル河も、幾分か流れの目に見る程と爲りたれば、從つて水草なども少く、船は帆と櫂との力にて進む事と爲り、其又翌日、纜て期したる「レク」と云へる林には着き

たり。此村より上は到底船にて上る可き見込無し、依て一同は上陸して荷物をも揚げ、更に人夫の隊を組みて陸を行く事と爲したり、去れど人夫の隊を組むは一日二日にて出來得る事に非ず、人を雇集る丈でも四五日は掛る譯なれば、玆に一週間逗留する事と爲せしが、何の見る物も無き曠地に一週間の逗留は退窟に堪へ難く、三日目の日は一同身を持餘す程と爲りたれば、茂林の言出しにて象獵を催す事としたり、象獵と聞きて第一に贊成せしは與助にして、彼れ兼てより象牙にのみ目を注ぐ者なれば、茂林が汝は銃の狙ひ方をも知ぬ故、踏留る可しと制するにも構はず、イヤ落て居る象牙を拾ふに銃の狙ひなどは要ませぬと、言張りて隨行する事と爲り、外に芽蘭夫人、帆浦女、平洲、寺森、通辯亞利・及び老兵名澤等同行と事極り、何れも馬にて出發したり。象獵は到底徒歩にては出來難き事なれば、健脚の帆浦女まで馬に乘しは巴里を出て以來の椿事なりき。

象は獸物の中にて尤も賢き者の一に數へられ、中にも亞弗利加内地の象は亞細亞の象より亦一入利發にして、曾に亞弗利加の土民等よりも、其智と其心の優れたるのみならず、或場合には殆

ど文明人ほどの思慮あるかと疑はるゝ事も有り、其の身體も、亞細亞の象よりは遙に太く、力も強く、心も亦猛きが爲め、馴して荷物を運ばせるなどの事は思ひも寄らず、之を獵るは極めて危き事にして、危き丈に又面白さも一入なりとぞ。一行の中、老兵名澤は曾て象牙商人の手代とも爲り、象獵には幾度の經驗あれば自ら案内に立ち、猶ほ獵に慣れたる土人十名ほどを雇入れ「レツク」より更に西の方五里ほどの所に當る、森林を指して行きしが、漸く進みて但ある小廣き所に出るや、事に慣れたる名澤の目は早くも此邊り、象の出で來る可き場所として一同を此方彼方に配らんとするに、手配の猶ほ終らずして陣の備へも充分には整はぬ間に、遙彼方より窄谷に響く足音して、近づき來るものこそ有れ、一同は今更の如く物凄きを覺え、身を引締めて其方を眺むるに高さ一丈に餘る牝象、三歳許と見ゆる兒象を從へ、共に戲れながら廣場の中央に出で來り、獵人の居るとも知らぬ有樣にて草を食ひ初めたり。象を射るには其耳の後部か、或は肩の下を射ねば一發にて斃し得るも、誤ちて他の所へ傷を負せば、唯だ怒らせて非常なる危險を招くのみなること、獵人の皆知る所なれば、平洲と茂林は此方の物陰にて銃を構へ、象の衆所の我方へ向ふ

折を待つに、此方より數十間離れし所に立つ、老兵名澤は宛も炙所と認めたるにや、一發ズドンと射放せり。去れど如何なる名人にも思はぬ射損は有る者にて、其彈丸炙所より五寸ほど離れし所に當りたれば、象は忽ち怒りたる樣子にて銃聲の響きし方に向ひしが、象の眼力は極めと鈍きものにして遠くを見分ること能はず、其代り嗅分る鼻の感じは他に類の無きほど強く、其鼻を揚げ來りて空氣の匂ひを嗅ぐこと見る間に、早くも方角を知りし如く、一聲高く叫びて一直線に名澤の方を指し兒象と共々馳出せり、其足音の荒くして勢ひの鋭きは、殆ど譬ふるに物も無く、樹も草も蹴倒し踏躙りて、何の障碍も無き所を行くに似たり。土人十餘名は一散に逃走り、名澤も馬の儘逃て此勢ひを避けんとするに、彼れの運の盡にや有りけん、其馬躓きて名澤と共に倒れ、名澤が纔かに起直る間に象は早や追附きて、長き鼻にて名澤を空中に捲上げたり、是れ地上に叩き附て踏碎かん爲にして、卽ち象の持前なりと知るべし。

象は鼻に輕々と老兵名澤を捲き上つ、暫く空中に弄びて之を足許に落したり、若し通常の人ならんには其捲上げられし時早くも失心し、氣絶し、其落されしと共に死し、象が足にて踏附くるまで存へざるべし。唯夫れ名澤は黒人中の最も剛勇なるヂンカ種族の血脈を引き、且つは幼き頃より危險と云ふ危險を經過して來りたる男なれば、斯る場合に臨みて落着けること殆く可き許りにして、高く空中に捲上られて失心もせず、氣絶もせず其身が地上に降るが否や、象の持上たる片足、猶ほ己れの身に落來らぬ間に、早くも轉がりて兒象の腹の下に隱れ入りたり。

此早業にて母象も呆れ返りし樣子にて靜かに兒象の周圍を廻り、篤と樣子を見するし上、徐に鼻を延して名澤を外に引出せしが、名澤は素早く前に倒れて其鼻に空を捲せ、再び兒象の腹下へ逃込たり。今度は母象も一入の腹立しさに容赦ならずと思ひし樣子にて、前よりは荒々しく名澤を引出し、咄嗟の間に縱附けて空中へ捲上げたり、此度こそは助くる可くも非ず、唯其の繼續く力のみにても既に息の根の止まりしならん、此上地上に投附けて踏躙らば、殆ど骨も留めぬ如く、揉摧けて果るならんと思はれしに、此時芽蘭夫人の隱れ居る叢の中にてドンと一發銃音あ

り、彈丸は確に兒象の炙所に中りしと見え、母が人類を弄ぶを羙ましげに眺めて「坊やにお呉れ」と强求る如く構へ居し彼の兒象は泣聲高く其の所に倒れたり。

此銃音は、老兵名澤の危急を見て平洲が發射せし者にして、若し母象を狙ひては過ちて名澤を射る恐れあれば、唯だ母象の心を他へ轉ぜしめんが爲め故と兒象を射しなりとぞ。此の考へは過たず、母象は驚き周章て名澤を投捨て、斃れし兒象の傍に馳寄りて跪づき、長き鼻にて手負の身體を檢めしが、頓て耳の後に傷所あるを見て、己が胃腑より一種の水を吐出して之を洗ひ、猶ほ其血を止めんとてか鼻の一方を傷口に當て、堅く推附くる樣は道に此土地の野蠻人より遙に智慧の優れる者と認めらる。去れど手當の甲斐無くして、手負の命次第に消行かんとするを見るや、母は人の泣くより猶ほ悲し氣なる聲にて泣き、殊に兩の目より太き淚を垂るゝ樣、他の獸物には絶えて無き所にして憐れさ云ふ許り無し。

暫くにして兒象の全く息絶しと見るや、母は起上りて又一聲悲鳴を放ち、是よりは唯復讐の一念にて當りを見廻すに、名澤は早や逃去りて姿見えず、去れど母象は名澤を當の敵とはせず、彼

の外に我兒を射たる者あるを知りし如く再び空中の匂ひを嗅ぎ、忽ちに一同の隱れ居る方を指し、地をも踏碎く程の勢ひにて走來り、早や一同より僅に三十間許りの所に至れり。平洲と茂林は象の走り初めし時より銃を構へ、象の身體の上下すると共に、其銃口を上げ下げして狙ひ居たるが、玆にて最も射頃の所と思ひしか、一齊に發射するに是は狙も過たず一發炙所を射留得て、象は其所に斃れたり。

去れど象の死際には、其繩に殘る力を震ひ、起上りて暴廻る事度々ありと聞けば、猶念の爲にとて其倒れたる姿の炙所を狙ひ、亦一發射出さんとするに、今まで生たる色も無く茂林の背後に震ひ居たる下僕與助も、此時は出で來り「私に射させて下さい」と云、共々に發ちたるが象は全く事切れたる後にして、其の肥太りし身體より夥しき鮮血流れ出で四邊に血の池を作るのみ。

既に象の倒れしと見るや、先に逃去りたる土人等は、銘々手に鎌の如き物を持ちて、逃去りし時よりも猶ほ早足に馳集り、其皮を剝ぎ、先に爭ひて其肉を切取らんとす、獨り與助は堅く象の牙に取縋り「サア肉は遣るから誰か此牙を拔取て呉れ、誰か、コレ」と叫び立つれど、誰一人言

葉に從ふ者も無し。斯る間にも最も不思議なるは、象の倒れしと共に、遙に四方の天際に、豆粒ほどの黒き點現はれ、其點次第に加はりて此方に向近づくを見れば、是れ大鷲の一種にして、天の孰れに棲めるやは知らざれど、眼力の鋭きこと五里十里の先をも見、地上に獸の倒れしと見れば、其肉を分け食はん爲め遙々と飛來るなり。見る中に豆粒は、後より後よりと太く成り、果は羽音の凄じき荒鳥と姿を現はし、象の死骸の上に群れ集まれり。

五十六

象の死肉を喰はんとて、四方の空より集りたる大鷲は、素より鳥の中の王にして、人と鬪ふ程の勇氣あり、時としては人の命を奪ふなどの場合も有り、危險ならぬには非ざれど、銃器を持てる歐羅巴人に取りては去ほど恐しき事も無し、殊には危險なる象獵に較べては、氣に留るに足らざれば一同は其近寄るを待ち、狙ひを定めて之を射るに、一發にて死するは稀にて、傷を負ひしまゝ飛去るも有り、傷に怒りて猛り狂ひ、人を摑まんと飛掛るも有れど、飛掛る者は大抵二發

目にて射留得たり。

凡そ半時間ばかりにして八羽を射殺たるに、後より來る大鷲は其有樣に恐れてか、將た銃音に驚きてか中途より逃去りたれば、殺せし八羽を土人等に與ふるに、彼等は今まで例無きほど澤山の獲物なりとて喜ぶこと限り無く、猶も此人々をば獲物多き所に案内せんと、我先に一同を導きて進みしが、此處より又た一里ほど行き青々しき廣き草原には出でたり。

此邊の草は高きこと三尺より四尺に及び、馬の腹を沈するも有り、原の中程に一條の小川も有りて、休息に最も好き所なれば馬より降り、草の低き所を擇びて、一同携へ來りし糧を出し中食に取掛りしが、其漸く終る頃、一同の乘來りし馬、急に耳を立てゝ、何やらん遠き物音を聞かんとする如く首を上げ、孰れも同じ方角を眺め初めたれば、茂林は第一に此有樣に心附き「何だか變だよ、馬などは天然の本能に由り、人より先に危險を知る者だが、何か大なる危險が推寄て來るのでは有るまいか」一同驚きて、馬と同じ方を眺むるに、向ふの方高くして、其先を見る能はず、猶ほ耳を澄して聞けば、氣の所爲にや遙か彼方より大波か地響か、異樣なる物音の來るにも

似たれど定には聞分け得ず。其中に馬は恐に堪へぬ如く身を震はせ、果は一散に逃げ出したれば愈尋常には有らじと一同立上る折しも、兼て思ひ思ひに先の方へ進み居たる案内者の土人どもも足を限りに駈來り、何事なるやを知らせもせずに、逃去らんとす。何さま氣遣しさの至りなれば老兵名澤をして其中の二三を呼留て聞しむるに、一人は「象の群が」と答へしまゝ走り去り、一人は「二十匹ほど」と云ひ、一人は「三百匹以上」と云へり。物の數を詳しくは算へ得ざる土人の言葉なれば、其の孰れなるを知り難きも、何樣象の一群、此方を指して推し寄せつゝ有るは確かにして、一同其の過る道に横はり、又は其の目に觸ゝに於ては、唯一踏に踏碎かるゝ恐れ有り孰れかに逃るより外無しとは云へ、乘る馬の既に逃去りたる後に在りて、此の草深き所を歩で逃ぐ可き、土人の如く疾走するは、婦人を連れる此隊にて到底爲し得る所に非ず、縦し逃るとも、草木を物ともせず追來る象の群より、早からん事は望み難き所なれば、追附るゝこと必定なり、土人すらも既に逃るの無益なるを知り、高き老樹に攀ぢて其梢に上るも有り。一同は途方に暮れて唯だ顔を見合す間に、浪の如く遠く聞えし足音は次第に近づき、早や纔に數丁の先に聞え來れ

り。素より一頭にして三百貫、五百貫の重さ有る巨獸、群を爲して先を爭ひ跳來る者なれば、其足音の地に響き、谷に轟きて震動するも怪むに足らず、今まで木の陰などに眠り居し水牛、野牛なごは、此響きに驚きて惶て惑ひ、呻吟の聲を發して一散に逃去れば、梢に留れる鳥までも悲鳴を揚げ散々に飛び立ちたり。平洲も茂林も絃に至りては思案も出ず、死も生も唯だ芽蘭夫人の一存に從はんとする如く、夫人の顔を見詰るに、夫人のみは最落附き「逃る所が有りません、運を天に任せ、絃に隱れて居る一方です」と聲も震はずに言切るは、既に死ろ覺悟を定めたるにも似たり、實に夫人は「可通無」にて、我所夫の猶ほ生て墟地に捕はれ居るとの心を起してより、以前の如く快活なる氣風無く、何事も沈默を守りて、陰氣に傾き、危險に臨むも、助からんよりは寧ろ死するを願へるやと疑はるゝこと多し、是れ或は所夫を氣遣ふの餘り、心の自と沈み込みたる爲にも有れど、夫よりは所夫ある身として、二人の男子と共に旅するを心苦しく思へるなり、夫も通例の道連には有らで、我が爲には死をも厭はじと決心せる人々なり、斯る道連に守護せられて、人無き國に踏入る事、女の道に叶ふや否、今は我心孰れにも傾かず、所夫に對し少しも氣

の咎むる所無しとは云へ、二人の勇氣、二人の氣象、感ずるに餘り有り、明日にも我心、知らず〳〵二人の中の一方に傾くやも知可からず、去ること有りては、縱し身體のみ淸しと雖も、心旣に女の道を踏迷ふ者なれば、生延びて爾る境涯に落入るより、運に任せて心の淸き今の間に、淸淨無垢の女として、死する方が所夫に對する貞節には非ざるか、今逃て助かるとも、斯る危險は是を終りとするには非ず、進むに從ひ更に逃れ難き危險も有らん、或は蠻地の熱病に罹り、幾日幾夜苦みて死せずとも云ひ難し、何事も運に在れば、此所にて象の足に蹂躙られ、一思に死する方、如何ほど幸ひなるやも知れずと、少しの間にも兼て胸に蟠まる分別の浮び出で、微懼ともせずに控へるに、早や象の群は、山の麓る〳〵有樣にて此廣場へ崩れ込みたり。

五十七

象の群は山の麓る〳〵勢ひにて此廣場へ崩れ込みしが、彼等は絃を遊び塲所とでも思へるにや、散り〳〵に隊を解き、或は小川の傍に行き、淸水を鼻に吸上て、ポンプの如く脊に吹掛け、身を

洗ひて快げに憩ふも有り、或は草の上に轉がりて身體を搔くも有り、或は草を食ひ、或は風を嚊などして、打解けて戲るゝ樣、見掛に寄らぬ優しき所あり。此方に一同の潛み居るには少しも小附かぬに似たり。素より彼等は此邊一體の森林に、獸の王として住ね、總て他の動物の我儘を見て逃去る有樣に慣れ、天災地變の外は世に恐しき物の有るを知らねば、今已れ等の遊戲場に、逃も去らずに隱れ居る橫着なる二足動物の有らんとは、夢にも心に浮ばざる所なるべし。

去れど此方の一同は、象の夢中に戲るゝを見て少しも安心する能はず、象の遊ぶ區域次第次第に擴がりて、今十分と經たぬ間には必ず其中の二頭三頭、此邊まで步み來らん模樣あり。來りて一同の姿を見れば、何の怨みも惡氣も無しに、唯だ何れほど力ある動物にやと怪み、試しの爲めに踏殺すは、此邊りの象の氣質として必定なり、一同は聲さへも得出さず小くなりて潛めども、最早や潛む甲斐無き場合なれば、今こそ冥途に入る時の來りしと人心も無く控へるに、茂林は象の耳に入らぬ樣、蟲の音ほどの細き聞にて平洲に向ひ「此象を追拂ふより仕方が無い」と云ふ、平洲も同じく聲を殺して「何うして追拂ふことが出來る、僕は先刻から象の數を算へて居るが、

總てゞ七十三匹居るよ、爾うして我々は土人まで合はせて十一人しか玆に居ぬ、其中二人は婦人だぜ」茂林は象の立聞を恐るゝ如く、草の合より彼等の姿を見詰し儘にて「爾さ男が九人で九挺の銃が有る、婦人二人は短銃を持て居るから都合十一挺の銃を揃へ、一時に空を狙つて發砲して見やう、幾等猛獸でも其音には驚くだらう」寺森醫師は背後にて此相談を洩聞き「夫れは猶更ら彼等の注意を呼ぶから危い」と云ひ、頻りに平洲と茂林の上着の端を引き動せど、平洲は見向きもせずに考へて「サア象を射れば、怒て此方を振向いて來ること必定だが、空を狙つて音だけ聞かせば、彼等は驚いて天變地異とでも思ふだらう、何でも驚きさへすれば第一に逃る心を起すのが、獸類一般の性質だから或は旨く行くかも知れぬ」茂「彼等が怒るか驚くか二つに一つだ、何うせ逃れぬ場合だから、彼等が怒て我々を踏殺せば元々サ、萬が一驚いて逃れば我々の幸ひさ」と相談玆に一決したれば、密々一同へ令を傳ふるに、外の何の手段も無き所なれば孰れも此言葉に從ひ、直ちに十一挺の銃口を揃へ空に向けて、茂林の合圖に應じ、一聲に打出すに、靜り返りし木魂に響きて其音實に凄まじ、群象も之には驚き、何事にやと痛く怪む樣子にて、七十三

頭悉く廣場の中央へ集りしは、逃ぐ可きや將た襲ふ可きやと、額を集めて評議する者なるべし此評議實に一同の死生岐るゝ所なれば、一同宛も死刑の宣告を待つ罪人が、裁判官の一擧一動に氣を傷むる如く、戰きて其樣子を眺むるに、其中の最も老ひたる一頭、群を離れて徐ろ〳〵と元來し路を指し立去るに、他の象等も其例に從ひて、猶ほ何事をか考ふる樣子にて頭を垂れしまゝ緩々と立去りたり。

茂林の計略先づ圖に當りたれど、猶ほ安心の出來ざるは群の中にて最も逞ましき牡象二頭、後に殘り、何うやら同類一同の立去りしを言甲斐無しと慨く如く、鼻を空中に揚げて風の匂ひを嗅ぎ初めぬ。察するに此二頭は曾て銃の音を聞きたる事の有る者なる可し、或は又傷でも負され、兼て獵人に對し怨みを蓄はへ復讐の折を待居たる物なるやも知れず、頓て二頭は人の氣あるを嗅知りしと見え、一方なる高き老樹の許に至り、其梢を見上れば、上には先ほど逃のぼりし土人一人、逃れぬ所と思ひてか聞くも憐れに泣叫ぶは、一同の救ひを乞ふ者なる可し。二頭は延上ると も梢まで其鼻の屆かねば、頓て一頭は長き牙を地に埋めて木の根を掘返し初むれば、又一頭は其

鼻を幹に巻き、根を弛めんとする如く其本を左右前後に揺し初めたり。如何ほどの力ありとも、此木を抜くこと叶ふまじと思ひしは唯一時の空頼みにして、五分十分と立つうちに樹は益々動き出し、木の根に挿したる一頭の牙は、早や根こぎにするかと疑はるゝ迄に至りぬ。

五十八

此まゝに捨置きなば樹は間も無く二頭の象に倒されて、上なる黒奴は一踏に踏殺さるゝこと必定なり、縦や救ふ可き法無しとても、人一人見殺しにせらる可きや。

然れど一同は象が熱心に樹を揺すを見て、今こそは逃げ時なりと思ひたり。驚病なる與助第一に逃出せば、名澤の連たる黒人も逃げ、寺森醫師すらも踏留る能はず。周章惑ひて走り出せば、今以て寺森を充分には思切り得ぬ彼の帆浦女も「死ば貴方と共に死ます」と叫び、一歩も後れず走り去れり。後には夫人と平洲、茂林との外に老兵名澤、都合四人だけ残りたれば平洲と茂林は夫人に向ひ、名澤を引連れ暫らく退かれよと云に、夫人は寧ろ此所に死んと思ひて、運を天に任

せたる事なれば、更に其意に従はんとはせず「イエ私が共に居れば、貴方がたも却て御自分の身を大切に防ぎます」と言切るにぞ二人は心の中に嬉しく、夫人と共にせば死も何ぞ厭はんと胸を据え、更に名澤に向ひ、早く行さて今逃げ去りし人々を保護せよと命ずるに、彼れは言爭ふ言葉も無く、早速に立ち去りて後は唯だ三人となれり。

茂林は鑛砲を取出して「アノ象を射殺すより外仕方が無い、射殺せば樹の上の黒奴も助かり我々も助かるのだ」と云ふ。平洲は腰の弾丸を數へて「夫は爾だが、我々既に先刻の大鷲を射た爲に弾が殘り少くなつた、弾が盡きては大變だから、一發で射殺す積で充分狙ひを定めねばならぬ」斯く云ひて、夫人を仲にし、叢の外に幾間か進み出で、狙ひを定めて發射するに、兩人とも日頃百發百中の熟練あれど、先刻より心の痛く騒げる爲か、弾は炎所を外れたり。

二頭とも傷を負ひ、脊より鮮血流れ出れど二頭は少しも感ぜざる様子にて、唯だ益々怒れる聲を發し一入荒く其樹を揺すのみ、二人は後に唯だ二發宛の弾を殘すのみと爲りたれど、惜む可き場合ならねば、又も銃を揃へて發つに、樹に鼻を捲ける一頭は胸を射られて忽ち倒れしも、牙を

根に挿せる一頭は、唯だ傷を增し怒りを增したる而已。

殊に此一頭は相棒の死せしを見て、一聲高く叫び、必死の力を出すと見えしが、樹は忽ち根こぎにせられ凄じき音と共に倒るれば、相に隱居し黑人は幾間の先に投出されたり。斯る場合にも猶ほ勇氣あり起上りて逃去んとするを、象は一馳に馳寄りて踏み倒し、四方の山に響く如き恨みの聲を高く揚げて、骨も分らぬまでに寸斷々々に蹂躙りたり、其樣の無慘なる言ふばかり無し。

此上は三人の方に向ひて襲ひ來ること必定なり、平洲も茂林も斯く思ひて、掛替の無き最後の一發を銃に罩るに、象は此方を詰と睨み、先づ其鼻を廻して身體中の傷を撫で、傷より出る血を受けて我目の前に持來り、赤く染みたる鼻の先を見て傷の大小を檢むる樣、實に驚く可き程の智慧と云ふ可し、頓て鼻の尖に一方ならぬ血の附きたるを見るや、彼れは全く血迷ひし如く、暴れ狂ひて此方を指し馳來れり。茲ぞと平洲、茂林は又一齊に打出すに、悲しや最後の彈も唯だ傷の數を加へしのみにて急所を外れ、全く踏殺さるゝ一方とはなれり。唯だ繩に一縷の望みを繋ぐは象が間近に推寄せ、スハ飛掛らんとする一髮の所にて、素早く身を反して遣過す一方なれど、斯

る手段の果して功あるや否やは知らず、兩人の斯く思ふ間に象は天地を踏み鳴して馳來る、其の樣の恐ろしきこと云ふ許り無く、身を反さんと期せし兩人の目には、象の身體幾丈の間に塞さがりし如く見え、身を反す可き餘地も無し、全く踏殺さるゝ一方なれば、是までと左右より夫人の手を堅く握り「去らばと互に最後の一言を交せ、目を閉ぢて死を待つに、象の鼻息は幾間の先より熱く一同の顏に掛り、傷口より迸しる血も飛散りて身體に掛るかと疑はる。是も唯だ瞬きする程の間にして、忽ち象は今一跳にて一同を跳倒す所まで來りしが、此時岩石の地に落る如き地響きの物音あり。忽ち何事も休したるに似たれば、死を待ちたる三人は殆ど早や既に冥途に入りしかと疑ひ、徐々に眼を開きて見るに、個は幷も如何に彼の象は、半間とは離れぬ程の間近まで來り橫に倒れて死して有り、何人かゞ橫合より射殺したるにやと思へど左に非ず、全くは身に六發の彈を受け、滾々と血の流れ出でし爲め、血の盡るゝ共に既に力も盡きたれど、唯だ怒りの一心にて身を支へ茲までは走り來しなり、若し彼れにして初めより靜に身を休めたらんには、猶ほ幾時間をも生延び自然に衰へて倒る可き所なれど、必死に暴れて狂ひたる爲め、茲に至りて全く

魂盡き、力盡きて轉死したるなり。三人は實に唯だ半間の違ひにて、死する命を助かりたる者と云ふべし。

五十九

血盡き、魂盡きて象の自から死せし爲め、夫人、茂林、平洲の三人は意外にも助りたれど、暫しがほどは三人さも喜びもせず、顏上げて互に見交さんともせず、全く其身の餘りに危かりし爲め魂を奪はれて、喜ぶことをすら忘れしに似たり。

逃去りたる寺森醫師や、老兵名澤等は象の倒れて三人の助りしを見て、喜ぶこと限り無く「アヽ、目出度い」と叫びて其隱れ場所より現れ、馳來りて右左より三人を祝するにぞ、三人は漸く人心地に復りたるに、フト氣附きて見れば、下僕與助だけ執れに行きしか更に姿を現さず、其他の逃去し者共は、兵士及び士人に至るまで其所の樹の蔭、彼所の草叢より追々に現はれて、悉く集りたれど唯だ與助のみ執れに行きたるや、扨は彼れ臆病の餘り遠く森林の奥までも逃入りて道

に踏み迷ひたるか、先に亞拉比の沙漠にて、彼一人は行衛を失ひ、數ケ月を經て初て一同と巡り合ひし事も有り、彼れ何彼に附けて失策のみ出來し勝の男なればと、一同は一方ならず氣遣ひて四方を見廻すに、遠くも離れぬ彼方の木蔭にて「アヽ、喰殺される助けて呉れ、助けて呉れ」と明白なる佛國語にて叫ぶ者あり。其聲與助に相違なければ、一同は喜ぶよりも又驚き、喰殺されるとは意外の猛獸にでも出逢ひしにやと、周章て其方を見れば、樹の蔭より現れ出る與助の樣、怪しとも不思議とも譬へ樣なく、彼れ踊りの稽古でも爲せるにや、兩の手を張擴げて上下に振廻し、或は伸べ或は屈むるさへ異しきに、時々水より出たる犬の如く、強く其身を震潑ぶりなどすれど別に水に濡れたる樣子も無し、張りたる手の一方を上に擧げ又一方を下に垂れ、身を左右へ傾けて又忽ちに地より三尺ほども飛上り、又強く地團太を踏む事も有り、其間も絶えず「喰殺さるゝ喰殺さるゝ」と叫び、此方へ逃來るかと思へば、逃も得來らぬ樣子にて同じ所に踊り狂ふのみなれば、一同は合點行かず、彼れ或は人の笑ひを買ん爲、故と異樣なる振舞を爲せるにやと疑ふに獨り老兵名澤は暫しがほど其樣を見て、忽ち合點の行きし如く「ヤ、ヤ、大變だ、早く助けて遣

らねばと云ひ、土人と共に一散に其傍へ馳行たり。

一同も不審の儘、其所へ馳行きて何事ぞと問ふに、與助は充分に返事さへ爲し得されど、蟻の群に襲はれたりと云ふに似たり。後にて仔細に様子を糺せば、彼れ象の倒れしを見、ヤツと安心して此方へ來らんとせしに、樹の蔭に土の小高く盛り上りたる所あるにぞ、何の氣も無く踏越んとせしに、彼の足其上を踏むが否や、土は忽ち落込て與助の身體腰の上まで其中に沒入したり。是れ卽ち此邊に多くある蟻の巢にして、盛上りたる土の中は殆ど空洞なるが爲なり、與助幸ひにして其端の方を踏みたれば、土猶淺く腰の邊まで沒せしに留まれど、若し中央に落入らば、背の立ずして容易に出得ざる事すらあり。抑も亞弗利加の蟻は其の種類様々にして、中には隊を組み幅四五尺、長さ幾町に行列して、野や山の嫌ひ無く進行し、遠きは數十里の外まで行き、生物に行き逢へば直ちに其體に這入り、幾十萬の多數にて手足、顏、身體の嫌ひ無く、隙間も無きほど取附きて瞬く暇に肉に喰入り、拂ひ落すも揉み潰すも、隨つて拂へば隨つて來り、瞬く暇に其生物を食殺し、肉と云ふ肉を悉く食取り、骨ばかりと爲して殘すも有り、昔より旅人にして此の

蟻の群に襲はれ、一時間にして白骨と化したる人少きに非ず、去れば亞弗利加の內地に旅行する者此蟻を恐れぬは無く、人のみならず、如何なる猛獸にても、亦如何なる細かき蟻にても、蟻の軍來ると見れば一散に逃去らんと勉めざるは莫し。今與助の落入りしは、斯る遠征など企つる蟻の巢には非ず、其種類稍や異れど、肉に食入る力は驚く可き程にして、取退くるとも頭だけは肉に殘るを常とし、之も生物を食殺すこと瞬く暇なれど、幸ひにして與助は蟻の多からざる端の方に落ち、而も直ちに出しが爲め、蟻の全軍には襲はれず、唯だ其一部分に取附かれしなり。

一部分とは云へ其數な數千の上なる可く、早や衣類を食破りて、肉に入りたるも有り、見る內に手や顏などは食破られて、滾々と血の流るゝ有樣なれば一同は今更の如く驚き、其身に蟻の傷來る恐れ有るも構はず、我れ先に手を伸べて蟻を揉み殺さんとするに、老兵名澤は「其樣な事をしては蟻が貴方がたへ蝟集ります」と叫び、其儘與助を捲上げて其身諸共、小川の中へ飛込みたり。

六十

身體に喰入りたる數多の蟻を取除るには、唯だ水中に入る外無しとかや。去れば彼の老兵名澤は與助を抱きたる儘小川に入り、水の中にて衣類を脱しむれに、背にも腹にも腰足の邊にも、既に衣類を喰破りて進み入りたる蟻の黒々喰入れるを見る。與助が嚙殺さるゝと叫びて、最と異樣なる身振を爲せしも怪むに足らず。

去れど幸ひにして此蟻を、水にて悉く洗ひ落しければ、先づ別條無きを得たるも、何さま嚙れたる所の痛に堪へずと云ひ、殊の外不機嫌なれば一同は詮方無く、土人をして先に殺したる彼の象の牙を取らしめ、之を與助に與へたるに奇才の効目は著しく、ホクホク笑ふ程となりぬ。

其中に日も暮掛りたれば、一同早速森林より引上げ、途中に一泊して翌日の午後、元の「レツク」まで引上げしが、留守居として殘りたる、通辯阿馬の働きにて人足なども大方雇ひ集め、愈々「絕域」と云はるゝ、亞弗利加內地に分て入る準備も略ぼ整ひて有たり。

是より三日を經て千八百七十三年五月十四日、朝未明に隊を揃へて此所を出發せしが、是れ實に生て歸るか歸ぬか、分らざる命掛の旅行なり。同勢は凡そ三百五十人にして、名澤の率る兵士の中、二十五人先導として眞先に進み、次は此行の主人たる芽蘭夫人の一同とし、其次は一行の進むを聞す爲の音樂隊とし、次に輜重部、次に人夫、最後には人夫等の逃去るを防ぐ爲め兵士の殘り數十人、是れ即ち殿にして總勢勇しく出發したり。一行の中にて茂林を兵事の長とし、寺森を輜重の長とし、平洲を記錄の長と爲し、通辯二人を人足の長として、猶夫々の下役を設け、芽蘭夫人を總大將に仰ぐなど何一つ行屆ざる所無し、指して行く路の順序を云へば、今一同の出發するは陳加地方の南端にして、猶ほ赤道よりは數度の北に在り、是より先には地圖にも記さず名も知れざる幾個の小部落あり、夫等を過ぎて盆鄕地方に入り、次は夫人の所夫芽蘭男爵の捕はれ居るならんと想はるゝ門鳩地方なり、其先は未定なれども、門鳩地方は今まで文明國人の入込みし事すら無き所にして、無事に其地へ達するさへ最難き所なれば、達せし上にて無事に生歸るは又一入の困難ぞとは、口にこそ出さねど夫人初め平洲、茂林等の心の底に覺悟する所なる可し。

盆郷地方よりモンバト地方に至る一體の人種を、昔より「ニヤム、ニヤム」と總稱し人喰人種なりと言傳ふれども、其事の實なるや否すら見極めたる人有らず、此一行が能く其樣をまで見屆け得ば、誠に千古の名譽と云ふ可し。

何しろ暑き所なれば、當分の中一行は午前五時に發し六時間旅行して、同じく十一時に行を止むる事にしたり。十一時より午後の四時頃迄暑き事一方ならず、土人すらも外に出れば焦死る恐れあり。況して氣候溫和の地に生れし、文明人の如何でか旅行する事を得んや、午後の四時より再び旅行するは出來難き事に有らねど、此邊りは日の出、日沒ともに六時頃にして夕方は旅行の時間甚だ少し、三百五十の人を動すには、其用意にも一時間は掛る譯なれば、四時に支度を初めて六時まで歩むさも何ほどの道をも進み得ず、却て銳き夕日に射られて健康を害する恐れあり、若し宵月の頃と爲らば、更に四時より夜の十時頃まで旅行するも難からねば、夫までの所ろ午後を全く休息の時間と爲せしは、今まで旅行せし人々の經驗に從ひしなり。

是より凡そ三週間ほど何事も無く進み、六月の五日には陳加地方の盡處と知るゝ「コーディ」と

云ふ部落に達し、土人に多くの贈物など與へ、其住居とせる小屋幾棟を借受けて一泊したるが、翌朝は毎の如く四時頃より支度を初め、五時に此所を出發し、次なる「オロージ」と云ふ小部落を指し、凡そ二哩ほども進みたるに、何の爲にや昨夜泊りし「コーディ」部落の蠻人數百人、後より怪げなる鳴物を打鳴し、各々投槍其他の武器を空中に振閃かし、鯨波を高く揚げて一散に追ひ來れり。昨夜一行の贈物に喜びたる蠻民等が、今朝打て變て一行を攻め來るとは何等の仔細に由る者にや、怪しさに堪へされば、通辯をして彼方の大將に其の故を問しむるに、此一行中に村の美人兩個を儚み去りし者あり、尋常に其美人を引渡さば好し、爾無くば攻亡ぼして奪ひ返さんとの主意なり。眞逆に此一行の中には、色黑く脣厚き野蠻美人を、盜み去る者の有筈無けれど若しや兵士人足等の中に、爾る不埒を働きし者あるにやと、念の爲め詮索するに、初より貰の爲め雇來りし女の外に、女は一人も有らざれば、幷は何かの間違ひなる可しと答へしむるに、蠻族は中々承知せず然らば吾等の中、十人の代理者を出すに由り、之れに隊中を檢査せしめよと云ふ、何樣其意に應ぜされば事面倒に立到る恐れ有れば、彼等の望むが儘に任せるに、代理の十人進

み來り隊中を隈無く檢め、美人の姿の見えざるに痛く怪む體なりしが、頓て其中の一人は兩個の人足にて擔げる天幕に日を留め、確に此中に包まれて蠢めき居るなりと云ふ、直ちに其天幕を取卸して披き見るに、個は幷も如何に中より年若き黑女二人、獰獰を喰まされて轉がり出たり。誠に容易ならざる不都合なれば茂林は名澤に命、醫人の目の前にて其人足兩人をば、各々三十棒づつ笞撻たしめんとするに、人足は戰きて決して吾等の仕業に非ず、白人の言附けに從ひて斯くせしなりと云ふ、一行の白人中に斯る事を命ずる者の有りしにやと、平洲も茂林も呆れて顏を見合すに、人足兩人は與助を指さし、卽ち此人に命ぜられたりと云へり。扨は與助奴、此一行の名譽をも安全をも顧みず斯る大不都合を働きしやと、茂林は烈火の如く怒り、手づから笞を取上げて「サア與助玆へ來い」と大喝一聲に呼附けたり。

六十一

女子を偸みて來りしは實に不埒の極度なり、此後若し斯る振舞ありては、到る處に蠻民の恨み

を買ひ、如何なる禍ひを招くやも圖り難ければ、玆にて充分與助を懲し、他の視せしめざるこそと何よりも必要なり、茂林が笞を取りて大聲に與助を呼び立つるの無理ならず。

去れど平洲文學士や稍や意見を異にし、與助を懲す可きが無論なれども、鞭を以て彼れを叩くは宜しからず、白人一同は兵士人足等より宛も神の如く尊はれ、笞撻など云ふ見苦しき懲罰は加ふ可からず、受く可からざる者の如く視做されて有ろに、今白人の一人たる與助を蠻民の如く扱ひ、蠻民を懲す爲の肉刑をば直ちに彼れに加へては、却て白人一般の威嚴を損じ、此後の萬事に影響する恐れあり、殊に與助は亞拉伯より馬兵田の沙漠まで、一同に離れて旅行せしこと極て大膽なるに似たれど、實は至つて心弱き男にして、彼の旅とても奴隷商人に雇人られ、止を得ず連來られし者にして、一同と巡り逢し時などもと馬の上にて假病をつかひ居し程なれば、今鞭れて若しや大聲に泣叫ぶなどの事ありては、愈々以て白人の面汚し一同の名譽に關し、從つては此先人足等を使ふ難易にも關する譯なればと、平洲は言葉忙しく茂林を諫め、與助には別に懲戒を加ふ可しと說けども、怒に眼の眩みたる茂林の事なれば勿々に聞入れず、猶ほ鞭を振廻して與助を

呼立て如何とも止むるに手段無し、平洲はフト思出る所あり、一方に立つ寺森醫師に目配せするに、寺森は夫と悟り、進み來りて茂林を抑へ「サア茂林君召喚だ、召喚だ、昨日は君が勝たから、今日は召喚の權利が僕に在る」茂林は目を圓くし「其樣な冗談を云ふ時で無い」寺森は眞面目極る顏色にて「では契約書の第八條を讀で聞そうか」此一語には抵抗の力も無く、悔しげに吱きつゝ引れ去りたれば、平洲は可笑さを耐へて其後を見送りつ、更に與助を呼寄せて詰問するに彼れ初めは種々に言拔けんと試みたるも終に包み得ず、實は此の先の種族中に、象牙と女と取り替る者ありと聞きたれば、象牙を買入る資本として、女を偸みたりと白狀したり。平洲は直に罰を按じ、然らば汝、今より向ふ五日の間、徒歩にて旅行し、今まで乘居たる馬をば謝罪の爲め、蠻族に渡す可しと言渡すに、馬無くては此先の旅行甚だ辛ければ、夫ばかりはと詫入りて只管逃れんと勉むるにぞ、然らば馬の代に汝を蠻族に引渡し、彼等の思ふ存分に處分せしむ可しと云ふに、是には與助も縮み込み、力なく〳〵馬を蠻族に與ふるに、彼等は女を取返したるが上に斯る賜物を得る嬉さに、一切の恨を忘れ、雀躍して立去りたり。

是より何事も無く進み、此夜は人家無き所に天幕を張て露宿せしが、翌日は「オロ！ジ」族の棲む所より一哩ほどの横手を通るに、照る日の暑きこと云ふばかり無く、馬も人も熱病人の如き最と熱き息を吐き、汗を拭き拭き進み行くに、馬に離れたる與助は一入の疲れにて、切りに「オロージ」の村に立寄り一泊せんと請ふ、平洲と茂林は之れを叱り附けて、又も二哩ほど進み「オロージ」村を稍や背後に見る所に至るに、但見れば路傍の立樹に、赤裸體ならぬ黑裸體の黑奴一人、身動もならぬほど堅く縛り附られ、頭に草の葉を載せ、半死半生の有樣にて立てり。芽蘭夫人は憫みの心より、通辯亞利を呼びて、此黑奴何の爲め斯く野外に縛り置き天日にて燒殺し、猶ほ雨降らずば又一人を晒し愈々雨の降るまでは、幾人でも燒殺すを常とすと答ふ、然らば彼の頭に草の葉を載せたるは何の爲ぞと問ふに、頭を眞晝の日に照されては、目暈て即死する恐れあり、斯ては毎日一人づゝ人身御供に取去るゝ譯なれば、成る可く其死の遲き樣、草を以て頭だけを蔽ひ、食事時には糧を持來りて喰はしむるなりと云ふ。

然らば卽死を防ぎ、天日にて徐々と殺り殺しにする如き者ならずやと問へば、然りと答ふ。去にても蠻民が雨を祈るは何の爲ぞと問ふに、半月も雨無ければ、暑さの堪難きが爲め蠻民等唯だ涼きを欲する爲に斯くは爲すなりと云ふ、誠に無慚極まる風俗と云ふ可く、唯だ涼しさを欲する爲に同胞を殺り殺しに殺すなどとは、捨置き難く許し難き所とし、殊には斯く殺すが爲めに雨の降る謂れも無ければ、夫人は直に「彼者の繩を斷つ可し、彼れを救ひて此一行に加へ遣らん」と言出せり。

六十二

雨を祈らん手段として、人一人を天日に焼て殺すとは、慘酷の極度なれば芽蘭夫人は縱しや土人の怒を買ふとも、是ばかりは助けずに置難しと思ひしなり。助けて一行の中に加へ、人夫として相當の給料を與ふれば、此者の爲め又と無き幸ひなる可し。

通譯亞利は夫人の命を聞き天を見廻し「イヤ此儘捨て置く方が慈悲ですよ、今助けては當人何

れほど失望するか分りません」命を助けられて失望とは何の意にや、亞利は說明して「今朝から厭に蒸暑いのは雨の降る下地で、既にアレ、西の方から雲が廣がつて參ります、一時間と經ぬ中に降て來るに極て居ます、縱に一滴でも降れば此者は土人中で天を動す力が有ると認められ、生神の如く崇められます、御覽なさい、此者も空合を見て最早や自分が生神に成る時分と思ひ、寧ろ喜ぶ顏色で待て居ます」成るほど何うやら嬉しげなる顏色も見ゆるにぞ、然らばとて捨置きて進む。折しも雨はポツ〳〵降來れり、暫くする間に「オロージ」の村より蠻民隊を爲して馳來り人身御供の前に跪坐きて、我先にと禮拜し繩を解き手を引きなどして、大勢其周圍を守護し、生神の德を讃ひつゝ連去りたれば、夫人初め一同は、誠に奇妙なる習慣も有る者かなと嘆息して玆を去れり。

是より行く先、ボンゴーに達する迄、一體の土地を「デョーア」地方と稱し小山も有り、谷川も有り、唯の平地よりは稍や趣に富みたれば、旅行も幾分かは爲し易く、所々に村落も有り、又此邊は盛に象牙商人が隊を作りて入込む所なれば、五哩ほどを隔てゝ其商隊の泊る爲に設けし

小屋掛有り、小屋とは云へど、商品を蓄藏し或は番人を置き、時さしては五百人以上を留置くことも有れば、其廣さ數百坪の上に出る者多し、此小屋掛を「ゼリバ」と稱し、旅行者は皆「ゼリバ」に宿を請ひ、又多少の品物は玆にて買調へる事も有り、夫人等の一行はカアツウムを出る時、各「ゼリバ」の持主へ宛て添書を得て來りたれば、宿泊其他の事に付大に便利を得たり、行くこと數日にして宵月夜の頃と爲りたれば、豫定の如く午後も亦四時より、夜の十時頃まで旅することゝ爲し、只管に行を急げり。此邊は恐る可き猛獸少なけれど、猿の類多きを以て有名なる土地にして、山路に差掛れば時々猿を射て、思はぬ慰みを得る事も有り、總て此土地の蠻民は猿の肉を常の食に充る由にて、寺森醫師の新說に由れば、人肉を喰ふ惡しき風俗も、元は必ず猿の肉を喰ふ所より出たる者ならんと云へり。成るほど猿は最も人に近き獸なれば、此肉を喰ふ者、自然三人の肉を喰ふ事ともなる譯にや。

夫は扨置き、或日此「デョーア」地方の中程に達し、例の如く晝の暑さを凌ぐ爲め、其所の「ゼリバ」に憩ひ、一同晝寢して四時頃に至り、再び出發せんと勢を揃へしに、不思議にも平生誰

よりも先に出る帆浦女は如何にせしか影だに見えず、「ゼリバ」の中を隈無く搜すに、手荷物は無事に有りて身體丈け紛失し、孰れを探す可き當も無きにぞ、慈悲深き夫人の心配は一方ならず、孰にしても此女の居所分るまでは出發する事も成ずと云ひ、如何にして孰れを探さんなど空く評議を初めたるが、平洲と茂林は曾て帆浦女が、寺森醫師の情無きに腹立ちて唯だ一人早朝に出發し、一同を驚せたる事有りしを思ひ出し、今日も亦爾る不平には有らぬかと、彼女の此頃の樣子を考へ見るに、多少思ひ當る事も無きに非ず、曾て平洲、茂林、寺森の三人にて、互に帆浦女の心を他に振向け、其機嫌を取る可しと約束せし當座は、三人とも約束を守り彼女の心を、平洲は寺森に、寺森は茂林に、茂林は平洲にと、各々振向け合ひし爲め、彼女は三人の間に迷ひ、甚だ機嫌好かりしも、此頃は三人とも約束を忽諸にし、大に餘所々々しく成りたれば、彼女の不平折々は擧動に現れ、又何と無く鬱ぎて思案する如き事も有りたり。去れば今日も亦前例の如く、獨り拔駈せしには有らぬかなど、評議の酣なる折のしも、遙か向ふなる小山の方より、最と悲げなる叉悔げなる叫び聲を發し、何とも譬へ樣の無き異形の樣にて「ゼリバ」を指し、頭髮も振亂

して、泣きて一散に走り來る人こそ有れ、誰かと疑ふまでも無く其背の高さ足の早さ、二人とは無き帆浦女なり。一同は何事ぞと遮りて問はんとするに、彼女は飛鳥の早さにて、最も恥しげに「ゼリバ」の隅に走行きて身を隱しぬ。一同眞に何事なるやを解し得ず、唯だ顏を見合せたり。

六十三

帆浦女は何者に如何なる目に遭ひ、斯くて異形の有樣にて、悔しげに叫び、悲げに泣て馳來りしや、何を恥しとて隅の方に馳込みて隱れたるや。頓て半時ほどをも經て、帆浦女は漸く衣類を着替へ樣子をも直して其隱れ場より極り惡げに出で來りたれば、一同其仔細を問ふに唯だ赤面するのみ、答へんとはせず。何樣不思議なる事の有りしに相違無ければ、茂林、平洲、寺森の三人は言合せて、帆浦女に向ひ、抑も此の一行は世界中の地學者に旅行記を報告す可き義務を負へり一擧一動とても曖昧に附し、人の疑ひを招く可からず、殊に御身は地學協會其他より世界有名の旅行家に數へられ、一方ならず尊敬せられる身なれば、此旅行中は御身の身體、決して御身の

體に非らず、全く世界地學者共有の身體なり、少しの事でも御身の一存にて推隱す如き道は無し達て口外すること辛しとならば、筆にて此一行の旅行記中へ記入れられよ、一行の旅行記は通辯以下の雇人達には示さず、歸國の上にても然る可き學者の外は目を通さぬ者なれば、其中に書入るゝとも秘密は秘密にて其書中に保存せらる可し、決して俗人の口端に上る如き氣遣ひ無しと、勿體らしく道理を附け、煽起る如く、威す如く言聞すに、帆浦女は漸く承知し、旅行記の中へ左の如き詳密なる一項を手づから書入たり。

　實に此旅行に上りてより私一身は私の一身に非ず、全世界の地學者に對し最と重き責任を負へる者なれば、兼てより少しの事柄も決して隱すまじとは私の決心なり。

　夫ならば何故曾て「トーレグ」種族の酋長に捕はれ居し間の事柄を世に告げざるや、との御疑ひも有るべけれど、彼の事は格別なり。一行の頭たるタイネ孃既に殺され、即ち地學上の旅行者たる資格の既に盡きたる後にて私丈け捕はれし事ゆゑ、全く私一身の秘密にして、地學者に知らしむる責任無し、此度の事は之と異り猶ほ資格の存する間ゆゑ隱さゞるなり、先づ最

初より記さんに。

私數日來、心の中に病あり、其病の何の爲に起りしやは地學に關係無ければ云はず、兎角氣分の勝れずして人知れず鬱ぎ居たるが、此の日は「ゼリバ」全體甚はだ靜にして雇人は皆な晝寢し、芽蘭夫人は閉ぢ籠りて手紙を認むるに身を委ね、平洲、茂林は樹蔭に横たはりて餘念無く煙草を燻らせ、寺森醫師は黒奴の女共に、佛國語を教ふるとて其の控所に入り行き、誰れ一人私を顧りみる者無し、全體寺森醫師などは、何も餘計な教授などせずとも外に話し相手は有る筈なるに——併かし爾る物好の氣質に生れ來しとならば是非も無し、私は唯一人、心の病に惱み鬱ぎ込みて「ゼリバ」の園ひの外を步み居たるに、向ふの方なる小山の木々、青々と涼しげに見ゆるより彼の森に入り、木蔭に憩はば幾分か心も休まらんかと思ひ、行くとも無しに進み行きしに、思ふに違はぬ好き所にして、水靜なる谷川も有り、庭に作りし如き芝草の廣場も有り、我れ知らずに奥深く進み入り、樹の老茂れる中を此方彼方と縫廻るうち、忽ち一方の木の枝に三四匹の猿あり、感心して私の姿を眺むる樣子ゆゑ、私は斯る蠻地の猿共に文

明國貴婦人の優かなる姿を見せて遣るも功德かと思ひ、全くの慈悲心にて其樹の許まで近く進みしに、猿は無禮にも拳ぼごなる木の實を取り、私の肩に投附けしが其木實、甚だ堅く、肩に痛みを覺えたれば、少しは思知せて懲しむるが後々の爲と思ひ、私は每に身に離さぬ護身の短銃を取出し、嚇かし迄に一發を打ちたるに、銃の音をさへ知らぬ此邊の猿なれば、驚く事だも解し得ぬと見え、逃去らぬのみかは、四方より同じ種類の猿忽ち群り來り、枝ごと云ふ枝に悉く取附き、木の實を取りて投附くること雨よりも繁げく、私は常に天日を防ぐ爲め青色の眼鏡を掛け居る事なるが、若し其眼鏡を碎かれては、十餘個の木實一時に私の脊へ降り來り、如何とも詮方無し。依て短銃を續け打に打たるも、悲しや猿には一も中らず猿は彈丸の盡きしと知りてか、嘲ける如き聲を發し、口を開き齒を出して私を愚弄する樣、如何にも面憎く、實に腹立しさに堪へざれば、兼て聞く兵法の奥義は、敵の彈丸を以て却て敵を攻るに在りと云ふを思出し、猿の投たる木の實を拾ひ、逆擊に投附るに猿は最と巧に身を反し之も亦一も中らず却て猿の嘲る樣益々甚だしく、殊に其同勢

さへ愈々增來るのみなれば、最早や貴夫人の身を以て斯る奴輩に辱しめらる可きに非ずと、我が身分を考へて其所を逃去りたるに、猿は枝より枝に傳ひ幾町をか追掛け來りしも、漸く樹の無き廣き草原に出でし爲め彼等初めて追來ることを止めたり、私の顏も肩も殆ど瘤だらけとは爲りたるも、別に血の出る程の傷は無ければ、是にて災難は過去りし者と思ひたるに、悲しや是れが災難の端緒にてありたり。

六十四

漸く小廣き所に出で猿も追來らぬ事と爲りたれば、ヤレ嬉しやと打寛ぎて歩むうち身は先に見し小川の際に來れり。

水澄みて水晶の如く、底なる小石苔に青みて、細き魚の一つ二つ其苔を啄む樣まで歷々と見え流れ早からず遲からず、深きも繰に肩の邊まで來るべし。アナ美しき川、美しき水よ、若し此流れに入りて泳がば如何ほどか冷かなならん、幾日幾月、赤道眞近き亞弗利加の天日に晒され

砂地の塵埃りに汚れし肌を此水に洗ひ去らん、如何ほどか身の淸くならん、實に生れ替りしほど好き心地のせらるゝならんと、思ひ初ては我慢も出來ず、思はず知らず衣類を脫んとせしも、待て暫し、餘りに端下無き振舞して若し人に見られてはと、更に四邊を見廻すに素より人の有らう筈も無し、鳥一つ鳴かぬ程靜なれば先づ安心して衣を脫げり。素より女の身として全裸體にて川に入るは穩かならず、若し佛國や英國の海又は川なれば、泳ぐにも浴るにも必ず白き單の浴衣を纏ひ人に膚を見られぬ樣に、浴衣のまゝ水に入るが女の常には有れど、今は浴衣の用意も無し、浴衣無くとも誰に見らるゝ筈も無ければ、脫ぎし衣は川の傍なる木の枝に掛け、全裸體の儘に水の中に身を入るゝに、今までの熱さは一時に消え、行く水は膚に滑かに、身は更に水よりも輕く、其の心持ち云ふ許り無し。或は泳ぎ或は潛り、口を嗽ぎ頭を洗ひ、或は手にて水を叩き、飛散る珠を雨霰の如く顏に受などして、氣樂氣儘に戲れば、身忽ち俗臭き人間を脫して、水の神の仲間に入りしかと疑はれ、上に向き下に向き、高く浮び低く沈みなどして時の過るをも思ざりき。眞に世界文明國中の女性にして、我身の外に此水に膚を晒せし者誰か

ある。女皇なりとも此奢りは出來難しと樂しさに醉ひ嬉さに心も緩け、悠々として世の中に暑さ苦しさなど云へる事の有るを忘れ、心の中なる彼の病も跡方無く癒えたれば、最早水を離れて人間に復るとも惜からじと徐ろに川を出で、身の雫を拭ん爲め手巾を取出さん者と、先に衣を掛置きたる彼の樹の下に至るに、不思議も不思議、懸け置きたる衣類影だに留めず、ハツと思ひて唯だ顏の色の靑くなるを覺えたり。

ア、衣類は如何にせし、何處に行きし、若しや餘りに身の冷せし爲め、眼の働きまで狂ひ、現在鼻先に有る物さへ見分け得ぬ事と成りしには有ぬかと、我が目をさへ疑ひて、木の枝を撫で探れど、無き物の手に接る筈も無し、若しや泳ぐ間に知らず〳〵川下へ流されて、先に入りしと別なる所に上りしかと、確に四邊を見廻せど、樹の樣、草の樣、一々に見覺あり、衣類を解きたる其場所に相違は無し、土人の來りて我が知らぬ間に窃み去りしか、風の爲め川に落ちて流れしか否、否、土人も來らず風も吹かず、唯だ天日に蒸發して消盡したりとより外は思ふ道無し。如何に不思議の事のみ多き亞弗利加の內地とは云へ、衣類の蒸發するは未だ聞ざりし

にと、四方を限無く眺め廻す、其怪しさの心よりも、猶更に辛きは差當りての當惑なり。此儘弦に居らる可くも有らねば、如何にせば好からん、何として「ゼリバ」まで歸り行かん。

林を出るにも一哩の上は有り、林を過ぎて平地に出れば、ア、平地を出れば人目を遮る樹さへも無く、却て見る人の眼は有り、夫も黑坊達なれば、膚の儘を見らるゝも猶ほ忍ぶ可し、此邊には可通無より來りたる人も有り、アラビヤの商人も有り、象牙を買集むる歐羅巴の人さへも無きには非ず。既に日も暮るに近く晝間の暑さも大方は失せたれば、夕涼を趁ひ戶外に出る人も有ん何とて裸體のまゝ歸らる可き、ア、婦人にして恥しき目に逢ひし人は多けれど、斯も恥しき場合に迫りし者何れに有るや、汚れたる衣を被るさへも恥かしく、少し流行に後れたる縞柄を着くるさへ、人前に出で得ぬが女の常なるに、何の衣も無き此樣にて如何で一步だも立去れんやと、今は衣服の消え盡せし怪きよりも、唯だ身の振方に途方に暮れ、此まゝ弦に立すくむ外無きかと思へば、全身の血、嚇と顏に込上げて循環を止め、頭の毛も逆立つかと疑はるゝのみ悲しやと我と知らず叫び立つれば、意外にも何れにか嘲り笑ふ如き聲あり、聞覺えさる

聲にあらねば、ハツ思ひて其方を見れば十間ほど離れし梢に、衣類を打振り打振りて、是れ欲しやと見せびらかす如く此方へ示すは、無禮なる最前の猿の群なり。此身が水中に戯れ居し間に、彼等音も無く川添ひの樹を傳ひ來り、枝に懸けたる衣類を偸みたる者と見ゆ。

六十五

無禮も無禮、人の衣類を盜み去り、却て此方を嘲る如く木の上より示すとは實に一刻も許し置かれず、爾は云へ追行く可き道も無ければ、此身唯だ齒切りするのみなるに、憎や猿の中の王かとも思はる一頭は、外被を寸斷々々に割きて示し、其妻かとも思はるゝ牝猿は短胴を後前に着けて誇り、靴を頭に頂きて喜ぶ小猿も有れば、短銃の筒先を口に咬へて弄そぶ者も有り、切ては一發過ちて彼れ自ら射殺されるほど思ふも全く空頼みなり、彈丸は先刻射盡して一發をも殘さねば如何に間違ふとも發射する發れ無し。或者は覆面の絹を取りて首に卷き、或者は財布の金貨を取出して川に投込みなどせり。憎きこと言はう樣も無けれど、何さま此儘に何時ま

でも居らる可きに非ず、何とか身の振方を付んとは云へ、振方の有う筈無く、詮方無ければ日の暮るゝを待ち、身を夜の暗さに包みて歸り行かんか、左すれば人に赤裸體の此樣を見られもせじ、否々夜に入れば道も無き此森林に踏迷ふは扨置きて、猛獸に襲はるゝ恐れも有り、左無くとも此猿等が此上如何なる辱しめを加へんとするも知れず、斯く思ひては今まで人の來るを恐れし身も、誰か此所へ來れよかしと人懷かしく、若し來らば再び川に入り首ばかりを水の面に出して、其人に仔細を語り、着替を取寄せて貰ふ者をと、空しく四邊を眺めて首を延せど、嘲笑ふ猿の外には目に留る生物無し。

幾度思ひ直しても好き工夫浮び來らず、兎にも角にも此姿にて人家ある所まで歩み行く一方なり、森の盡所に確か黑奴の家有りたり、彼等は年中裸體にて世を送る者なれば、衣類の用意無き事は勿論なれど衣類に代る何か有る可し、獸の皮にても好し、破莚にても苦しからず、唯だ此膚を蔽ひ隱す事だに得ば、其品を借受けて「ゼリバ」まで歸り行かん。然り其外に工夫は無しと漸く思ひ定めたれど、生れて以來三十年否々此身の年齡は地理學に關係無し、女の秘密

は年齢なりとさへ云へば玆に記し難し、兎に角三十年近き今まで裸體にては一歩だも歩みし事無き身を以て、縦し黒奴の前なりとも如何で此まゝ行かる可き。黒奴さへも腰の廻り丈は蔽へるものをと、又も途方に暮れ此方彼方を見廻すに、川の一方に葉の最と廣き水草あり、多分は蓮の類なる可し。其葉を二三枚取合さば黒奴の家へ行くまでの凌ぎには爲る可しと、再び川に泳ぎ入り廣き中にも廣き葉を數枚折取り、陸に上りて、猿等の益々嘲けるには振向もせず、鬱束無くも肩より腰の邊まで包み果せしは、我れながら愛相の盡きし姿なれど姿など顧る場合ならず、是より一散に馳去らんとするに、日頃健脚と云はれし足も靴無くては活智無く、石に傷き荊に掻かれ、痛さ苦さ言ふ許り無けれど、夫よりも氣の引けるは、身を隠せる水草の葉の物に觸るゝ度千切れ去る心細さなり。それも是れも少しの間と度胸を据ゑては勿々に膽太く、辿り〳〵て辛く黒奴の小屋には着きたり。恐々に中を除けば、獵にでも出し留守にや幸ひに人の氣無く、有難し宝の中央に、此邊には有るまじき寶やかなる金巾を擴げて有り、思へば是れ昨日吾が隙が此の邊を過ぎし時與へし品なり、斷り無しに持去るは異な物なれど、後にて送返

せば罪にも成らじ、之を身に纏へば「ゼリバ」まで歸らる可しと、其まゝ入行きて其金巾を取上るに、恐ろしや恐ろしや、下より晝寐せる黒奴二人驚きて跳起きたり、彼等は蠅を防ける爲め此の金巾を擔ぎ居たる者と見ゆ。

彼等は此身を盗坊と思ひてか、聲高く罵りたれど何の事なるや分ず、此身は唯だ餘りの意外に何と云はん言葉も出でず、唯其金巾をば兩手にて芝居の幕の如く我身の前に張り、顔だけを出して居ずくみたるに、黒奴の一人は「夫返せ」と云ふ如く金巾の端に手を掛けたり。取返されて成る者かと、此身も必死の力を出し前に後に引合ふに、元々此金巾は荷物を輕くする爲に成る可く地の薄きを選び來し物なれば、引合ふ双方の力に耐へ得ず、中ほどより二つに破れたれば、黒奴の又驚きて遠巡々間に、此身は我手に殘る半分の切を胴より下に巻き、肩の現はるゝは不都合なれど、夜會に大禮服を着ける貴婦人達の姿を思へば左まで恥しき事も無く、又恥しきと云ふ時に有らねば、後より追來る黒奴に追付かれじと、足の痛むをも打忘れ、力限りに逃に逃げて終に「ゼリバ」まで逃げ込み得たるが、嘘も僞りも無き露骨の事實なり。事恥しと

思ひし爲め、人に知さぬ心なりしも、思ひ直せば別に恥づ可き所は無し。
女の身として斯までの危險を冒し、斯まで艱難辛苦せしは大に地理學上の參考とも成るべし
と信ずれば打明て斯は記しめ。

六十六

猿の群に苦められた帆浦女の此記事には、平洲、茂林、寺森の三人とも殆んど腹を抱へて笑ひ此の日頃何事をか考へて、沈み勝なる芽蘭夫人までも殆ど可笑さを堪得ざりき。去れど帆浦女の無事に現はれ來しは何よりの幸ひなれば、此翌日より又行を急ぎて、六月の末方には「ガイヤ」「コーロンゴ」など云ふ處を過ぎて、愈盆郷地方へは入込みたり、盆郷は猶ほ象牙商人の多く入込む所なれば別に恐る所なきも、此次なる「ニヤム、ニヤム」と云ふ土地より即ち人喰人種にして、其「ニヤム、ニヤム」を過て更に其次なるモンバト地方に至るが此一行の豫定せし道筋なり。既に盆郷地方よりして風俗の異なれること、眞に人間以外の境涯に入込みたる思ひあり。土地

の人は折々象牙商人を見るに慣れて、多く白人を怪まざれど、初て此土地に入る白人は驚かざること能はず、熱帶の地方とて身に衣類を纏はざるは尋常の事なれど、此土地は男女共に眞の全裸體にして腰の邊にすら何の蔽をも施さず、殊に其食物などは鷲の類と同じく、臭氣鼻を衝く如き腐りたる獸肉を貪り喰ひて、其腐りたるを知らず、人類の肉をこそ食はざれ、凡そ生ある者は何たりとも捕へ喰ひ、毛蟲、芋蟲の如きをまで日常の食品と心得たる有樣なり。

斯る風俗にて見るに忍びぬ事柄も多ければ、成る丈け早く通り拔んなど相談を定めたるに、或日一部落の酋長、此一行へ使を送り、我は兼てより白人の文明とやら云ふ風を聞き、親はしく思ふ者なれば、是非とも我住居へ立寄られよ、左無くば無事に此土地を通し難しと言來れり。察するに今まで象牙商人等より賄賂を得、其味を占めたる者なれば、此一行よりも賄賂を貪らん心なる可し、何にせよ其意には從ねば危ければ、一行は直ちに行を止め、進物の用意などして其住居を指して至るに、文明人の目には唯だ野蠻の酋長なれど、此土地にては帝王も同樣なれば其の宮城とも云ふ可き住居は、石や泥にて作りし物ながらも甚だ廣く、門も有りや闕も有り、女闕よ

りは廊下を通じて總體幾棟に分れ、室の作りも別々に仕切りてあり。酋長は一行の差出せし進物の今まで象牙商人より得し者よりも立派なるに驚き、喜ぶこと限り無く、一行を誘ひて奥深く連行くにぞ、若しや食堂へ連て入れられ、蛆蟲などの馳走に逢ひては由々しき大事なりと、一同口には言ざれど心の中に當惑し、澁々と從ひ行くに、食堂には非ずして幾人の妻妾を蓄へたる後宮へ案内したり。

總て後宮へ案内するは非常なる馳走にして、妻妾などの顔を見せるは客を其身と同等と見做しての取扱ひにして、即ち一同をば酋長の身分ある人と崇めたる者なれば一同は稍や安心し、後宮の有樣を篤と見るに、中に蠢々と控へる女は何れも豚の如く肥太り、丸々しき其肌を露出にして誇る有樣なれば、能くも斯くは飼肥したる者なるかなと、一同は通辯の口より王の言葉を聞くに此土地は女の脊低く體丸きを美人とする者にして、斯くも肥太りたる女は國中に多くは無く、之を選集むるには年々人を各地に遣り少からぬ費用を拋つが上、既に集め得たる者を、痩せぬ樣に飼ひ置くも一通りの手數には非ず、酋長の富と勢力とに非ざれば到底斯る贅澤は盡し難しなど、

王后王妃を飼犬の如く見做して語れり。

殊に驚く可きは裸體國の習慣として、此女達、皆身體に入墨せるのみならず所嫌はず身體の肉に穴を穿ち、其穴に金の輪を入れ、或は鈴の如き物を垂れたる有樣なり耳には金輪を垂れ、鼻には鼻輪を垂れ、猶ほ唇には直徑幾寸の輪を挿入れし、本來突出たるを猶ほ一入突出だしめて喜ぶなり。實に天然の身體を害ふこと甚だしき者にして、左無きだに醜き顔は此上に醜くき樣の無き迄に醜くなれり、文明人の目より見れば此人種全く醜と美とを取違へたる者にして、萬事美しきを嫌ひて醜きを愛するやと疑はるゝ程なり。

六十七

居並ぶ王妃、孰れも醜婦中の醜婦にして、如何に國王の力とは云へ能くも斯くまで選集し者かなと、一同は言はず語らず可笑さを耐へるに、帆浦女のみは王妃の醜きに比べて我姿の美しきを誇らん心にや、突と一同の前に出で、胸を突出し手を振りて妃等の前を闊歩し初めたり、歐羅巴

人中にても女としては珍しきほど脊の高く、又珍しきほど痩せたる帆浦女をば、脊の低くして丸々と肥太りたる此の妃等に比ぶれば、孰れが醜さの度優れるにや、勿々に判じ難けれど其の判斷は暫く置き、兎に角極端と極端との比べ物にして亦一場の觀物なり。

妃等は帆浦女の此振舞を何と思ひてか互に細語き初たれば、帆浦女は通辯亞利に向ひ「醜婦は私の事を評して居る樣子だが何と云て居る」と問ふは、定めし感心して賞て居るならんと思ひての事なる可し、亞利は容易に返事し得ざりしが、再三問はれて詮方無く「實は貴女の着物を怪み、貴女一人何故、違つた身姿を仕て居るだらうと云て居ます」帆「是が文明國の貴婦人の服裝だと言聞せてお呉れ」亞「イヤ妃等は、貴女を女とは思はず全く男子と思ひ、男の癖に女の着物を被て居るなど〻評して居ます」成程斯も痩て、且脊高き女の有らんとは、彼等の思ひ寄らざる所なる可し。

帆浦女は此一語に、顔を赤くして怒り「では男では無い、貴婦人だと言聞せてお呉れ」亞利は詮方無く妃等に向て其通り言聞すに、妃等は一齊に聲を放ち、唇の輪を毫々と鳴て笑たり。問

迄も無く呆れ驚きて笑ふ者なれば、帆浦女は躍起となり「貴婦人を笑とは餘り失禮だ、自分の醜い顏を知ぬ柄で有う」と云、兼て懷中せる小き鏡を取出し、遠慮無く妃等の顏に差附くるに、妃等は鏡に映る己が顏を眺めて喜ぶこと限り無く、我身は斯くまでの美人なるにやと滿足せし如く、手より手に其鏡を取傳へて嬉しげに笑頰るゝにぞ、帆浦女は益々腹立ち「エヽ此醜婦達は、醜いと美いとを取違へて居ると見へる」と云ひ手を伸べて鏡を取返さんとするに、妃等は次より次に傳へて勿々返さんとはせず、稀代の品物手に入たりと喜びて、我物にせん心なるに似たり。帆浦女は益々怒り十數人の妃を相手にして、一場の立廻りをば初んずる勢ひなれば、一同は今更ち帆浦女を連來りしを悔るに、帆浦女に對して最も勢力ある寺森醫師は進み出で「モシ帆浦女、一旦此の醜婦等の顏を寫した汚はしく成た鏡で、貴女の美しい姿が寫されますか、汚れた鏡は彼等に遣てお仕舞ひ成さい」と云ふに、帆浦女は此醫師にさへ美しい姿と云はるれば、醜婦達に何と云はるゝも厭はじとの樣子にて、忽ち靜り「爾です彼等の顏を寫して、アノ鏡は汚れました」と云ひ、是にて漸く大事とは成らずして終るを得たれば、一同安心の息を吐くに此時通辯の一人なる

阿馬は、先ほどより宮中の樣子を巡視し居たるが、茲に來りて茂林に向ひ「王は此一行を馳走すると云ひ、食堂の掃除をさせて居ます」と傳へたり。蚓蟲や毛蟲の馳走、アヽ如何にして斯る馳走に合ふ可きやと一同は顏色變へて驚きたり。

六十八

馳走の用意整ひつゝ有りと聞きては、一同早や胸悪き氣のせらるゝに、中に帆浦女は何の會釋も無く「此樣な所の食物が喫られますものか」と呟き、後をも見ずに王宮を立去りたり、殘る人々は何とかして此饗應を斷わらねばならずと、密々協議を凝せし上、茂林の考へにて此土地の風習を利用し、王に向ひて「吾々一同は心願ありて、此國を旅行する者なれば目的の地に達する迄は一同隔日に斷食する事に定めて有り、今日は宛も斷食の日取なれば、如何なる珍味をも口に入るゝ能はず」と云ふに、王は半信半疑の體なりしも終に頷きて思ひ止れり。

一同は虎口を逃れし思ひにて、ゼリバに歸り是よりは一散に行を急ぎて、早く此の盆鄉地方を

通り拔んとするに、一日々々に困難の加はるは、人足等が此次に人喰人種ありと云を懼れて、次第々々に逃去る一事なり。茲にて逃去れば孰れのゼリバへなりと雇入れらるゝを得んとの見込あるより、一人減り二人減り、今は初の數に比ぶれば五十人ほど少くなり、殘る者とても初ほどは氣も進まぬ樣なれば、或は給金割增の約束を爲し、或は一人を劍して他を懲すなど樣々の手段を施して、漸く旅を續け行く有樣なり。

猶も氣遣はしき一條は芽蘭夫人の身の上なり、夫人は可通無を發して以來は、總ての振舞其以前ほど引立ず、何と無う陰氣に、鬱ぎ勝にて、口數なども多く利かぬ有樣と爲りしが、此數日來一種の緩慢なる熱病に罹り、馬に乘るにも堪へずとて籠の中に身を入れたり。醫師寺森は職務柄とて大に心配し、亞弗利加の熱病は一所に少しでも逗留しては益々重くなるを常とし、先へ先へと進み行けば自から轉地療養の如き理にて、日ならず直るが多しなど云ひ只管行を急ぎしが、其爲にや三日許りにして再び馬に乘り得る事とはなりたれど、夫人の樣子總體に沈み込みて、絕えず打鬱ぐ容體は少しも減ぜず、或は是れ、此の盆鄉地方は曾て芽蘭男爵が死して葬られしと報告

せられたる土地なれば、其事を思ひ出し、男爵の今の身の上を氣遣ふが爲にもやと疑はれしが、其中にサシビミツトース、ナイヨライなどゝ、土人の稱する土地を過ぎ、七月の十二日には盆鄕地方の盡んとする邊りに達したり。

一行の中にて老兵名澤はモンバト地方の入口まで行きし事の有る身なれば、此邊の地理を知れり。盆鄕より「ニヤム、ニヤム」と云ふ、人喰人種の棲む地方へ入込む境には、ムバラ、ギヤと稱し直立五百尺ばかりの山あり、一行は此山をソロリ〳〵上り初め其半腹まで至りて、天幕を張りて一泊する事とはなりしが、此時は宛も滿月の夜にして、野山一面の景色、天然の大パノラマを作りて、飽かぬ許りの眺めなれば、黑人の外は容易に退き寢んともせず、平洲と茂林は天幕の外に水牛の皮を敷き、其上に身を横たへて月を眺め、帆浦女は遙か後部なる、谷の近くに行き獨り呟きつゝ散步するは、定めし寺森醫師の不實なるを見限りて此上は意中の人を平洲に定めんかと案せる者なる可し。病氣全くは癒もせぬ芽繭夫人の天幕だけは、稍や靜なりしが、夫人も思ふ事が有りて寢得ざると見え、徐ろに出で來りて、月に描かるゝ樹の陰なぞを踏み

初めたるが、此時何思ひけん醫師寺森は、言度き事の有る如く夫人の傍に進み來れり、夫人は目の前に現はるゝ彼れの影に驚きて首を上げ、物云ひ度げなる彼れの樣子を見て「オヤ寺森さん何かお話でも有ますか」と最と優しく問掛けたり。

寺森は暫し淀みたるも頓て心を定めしと見え、日頃の最と輕き口調に、一種の親切を籠め「ハイ先日來、折が有らばと思ひましても、貴女がお一人の場合は少く、今夜初めて誰も居ぬ折と見屆けました故」と、言も猶ほ終らぬに「人の前では話されぬ何か秘密の事でゞも」「イヤ私の方には何の秘密も有りませんが、秘密は貴女のお心に有ませう、ハイ私は其秘密を伺ひに參つたのです」言ふ所は何うやら薄氣味の悪げにも聞ゆれど、其の顏附言葉附を見れば、彼れが一點の野心も無く、唯だ親切一方より斯く云へるは明かなり。夫人も更に薄氣味の惡しとは思はず、微かなる笑を浮べて「オヤ何も私に秘密などは有ませんよ」「イヽエ夫人、雇人も同樣な私が貴女の秘密を聞とは出過た樣な譯ですけれど、既に數ケ月、此通う共に絕域を旅行して見れば一行の人々互に姉妹か兄弟の樣な氣がして他人の事も我事の樣に氣遣はれます、迚も鄕里の歐羅巴では

十年一緒に住だとて是まほご親くは成りません、殊に私は先年まで、丁度れ貴女と同じ年頃の妹が一人ありました、夫が病のれ爲め死で以來私は世に親む者も無く、其悲みを忘る爲め賭事などに身を委ねました、夫てすから貴女を見ても親身の樣な心がして貴女の御心配を、知らぬ顏で見ては居られず、何うか私へ打明て下さいと申すのです」優しき心に感じてか、夫人は手を出して寺森に取らしめつ「イヤ夫は御尤もです、爾まで私の事を氣遣ふて下さるは何よりも有難いと思ひますが、別に是と云ふ心配はー」「イヤ無い事は有ません、私を友人としてお話し難ければ、醫者と見てお話し下さい、醫者には何の樣な心配を打明ても、恥しく無い者と昔から定つて居るのですから、夫に醫者と云ふ職務が有れば他人の心配を聞たからとて、夫を洩す樣な事は決して致しませんから」「でもお醫者に話す樣な病氣こても有りません」「イヤ爾で有ません、貴女は先日來緩慢な熱病でー」「夫は最う直りました、元々土地氣候の違ひから來た病ゆゑ」寺「イヱ土地氣候の違ひならば是より以前、カアツウムか、ガゼル河の濕地の邊で起らねば成ません、此邊は盤地とは云へ、土地總體に高燥で多少の熱病は直る頃です、夫だのに貴女の病氣が

直らぬのは心の中に心配が有て、其心配から出て居る爲です、此樣な病氣を直すは人に其心配を打明けて、心の重荷を弛めるより外は無く、若し誰にも打明けず、默つて一人心配して居ては心配に窘められ、身が段々に衰へる許りです」と云ひ切るに、此言葉全く夫人の胸に應へしか、顏に浮びし微な笑も忽ちに消失せたり。

六十九

芽蘭夫人は寺森醫師に心中の秘を見破れし爲にや、片頰に浮みし笑も消えて痛く驚きたる樣子なり、寺森は夫人の此樣に一入の力を得し如く「ハイ夫人、貴女は實に心配の爲め、一寸一寸、御自分の壽命を縮めて居るのです、今の內に其心配を弛めねば貴女のお身は此旅行の終るまで續きません」と最と重々しく云へど、夫人は猶も返辭せず、其樣宛も寧そ身體の續かずして、旅行中に死する事を願へるにやと疑はる。「總て其樣な心配は人に打明けて話すとか、或は聲を放て泣くとかすれば大に神經が弛みまして、幾分か耐へ易く

なる者ですが、聲にも言葉にも洩さず、又涙にも洩さずして獨り胸の中に疊んで置けば、一日々々に重くなる許りです、今貴女の場合では潜々と泣くにも泣かれず、打明る人とても有ません、始終お傍に居る帆浦女は、人の心配などには見向もせぬアノ通りの氣質です、左すれば平洲、茂林の兩人に打明けんか、貴女の心配とは違ひますゆゑ、猶ほ更ら兩人には打明る事が出來ますまい」と夫人の顔色を讀み乍ら言切りたり。平洲と云ひ、茂林と云ひ夫人と何の隔てもなき間柄なるは何人も認むる所なるに、此兩人に打明け難き心配とは、抑も如何なる心配にや。夫人は此語を聞き捨ては何所まで悟られしにやと、少し危む樣子にして「何故、アノ兩方に打明られぬとお思ひ成さる」寺森は最と眞面目に「ハイ那の兩人は尋常の道連では無く、屬魂貴女を戀ひ慕ひ夫が爲に此旅行を思ひ立た身分ですから」夫人は驚き「ヱ、其樣な事を那の兩方が云ひましたか」「イエ言は致しませんが、醫を職業とする私の目には明らかに分ります、サア斯云ふ譯で有て見れば兩人に打明る事は出來ず、此兩人に打明ねば私を置て誰に打明ます、實に昨今貴女の御樣子を見れば、誰かに早く心配を打明けて。幾分たりとも有耶無耶を洩さねば由々しき容體

に重り行く恐れが有ます、夫ゆゑ私は止むを得ず、差出がましく斯うお打明爲さいと申すのです、私の耳に入る事は誰にも洩る恐れ無しです、那の兩人にも知せは仕ません」と、唯だ夫人の身を大事に思ふ親切一念を以て云へども、猶ほ夫人は自分の口よりは打明け難ねてか「爾仰有ると、何だか私がお兩方の愛を一樣に感じ、一つの操を兩方に賣る樣な心でも有る樣に聞えますが、貴方は左樣に私をお疑ひですか」寺森は遽しく「飛でも無い、何うして其樣な事を疑ひませう、若し貴女が雙方の愛を感ずるとか、或は一方の愛にでも心が動けば、夫こそ愛に紛れて何も御心配は成れません、貴女は平洲に向つても茂林に向つても少しの愛を感ぜぬから、實は其所より種々の心配が出て來るのです」此診察の當りしにや、夫人は少し首を垂れ、何と自ら言開かん樣子も無し。「貴女が私へお打明け成さる事が出來ぬならば、私の方から見て取た丈の事を、ハイ私が貴女の心を讀だ儘に申して見ませう、貴女は平洲をも茂林をも又ミ無い立派な男、又と無い親切な友人と、サ斯は思ひますが友人とより外は少しも思はず、御自分の心が一方へ傾けば兎に角も孰れへも傾かずに、此儘兩人の間へ板挟みの有樣で旅行すれば、果は何の樣な騒儀の場

合になるであらうと、一つは先づ夫が御心配です、イヤ何に、是だけが貴女の心配と云ふでは無く、外にも數々は有りますが是れが心配の緒口です」と云ひ、再び夫人の顏を篤と見るに推察の當りし爲にや、夫人は猶も首を垂れ、言開かんとする氣色も見えず。

七十

寺森醫師の推察當りし爲か、夫人が首を垂れて何の返事をも爲さゞるを見、寺森は又語を繼ぎ「ハイ貴女は平洲をも茂林をも、唯だ友人と思ふ許りで、少しも戀人の如く愛しては居無いので す、明日でも若し彼等二人が立去れば、貴女は大事の道連を失つて淋いと、斯樣には思ひますが決して戀人に分れた樣に戀ひしいのと云ふ苦みは感じません、けれど又彼等二人の心中を察すれば、此旅行は友人の儘では終らず、或は兩人とも失望するか、一方だけ失望するか、若し一方だけ失望すれば、失望した一方は失望せぬ一方と、生涯敵同士の樣な心持になりませう幾千萬里艱難を共にした二人の友人が末には到底、斯樣な有樣を免かれぬかと思へば、貴女は今

更ら後悔に堪られず一人で氣を揉で居るのです、併し是だけならば別に病氣と爲る程の心配で無く畢竟云へば兩人が始から承知の上で、覺悟して掛つた事ゆゑ、失望に陷らうと、敵同士に成らうと、貴女の知た事では無いと、斯云ても濟ますが、貴女のお心には是より猶ほ深く氣に掛る事が有るのです」夫人は殆んど恐る〳〵「夫は何の樣な事ですか」寺森は思ひ切り「貴女の心は少しも兩人へ傾かぬ代りに、實は二人の外の一人へ傾いて居るのです」「エ、エ、二人の外とは」「ハイ二人と此旅行を共にする事が出來ず、泣く〳〵巴里へ踏留つた醫學士が有ませう、其人が踏留まつた爲め、私が其代りに連られて來たのです、イヱ貴女のお心は那の醫學士に、ハイ那の鳥尾醫學士に屬して居ます」鳥尾の名を聞き夫人は忽ち驚きて、叱り嗜める如き語調にて「寺森さん夫は—」と言ひ掛けしも、後に續いて言葉も無く、又達て寺森の言葉を遮らん樣子も無きは、此推量の滿更無根にも非ざる兆とも見る可きか、寺森は猶說明し「私は子供の頃から人の心を察するに妙を得て、父母も此分では醫者にするが宜からうと云ひ、夫が爲に、醫業を修めた程ですが先刻も申す通り、一人の妹に死分れた失望から身持をも頽ました。夫でも今以て人の心を

察する天性は妻へません、巴里を立つ前、貴女のお宅で鳥尾醫學士に逢た時、彼れも平洲、寺森と同じく、貴女に心を屬して居ると云ふ事を見拔ました、其次に彼れが停車場へ送て來て、貴女と五に告別を言代した時、貴女の心も知らず〳〵彼れに傾いて居る事を見て取ました。イヤサ、貴女は未だ其時は御自分で、我心が彼れに傾いて居るとは心附なんだのです、御自分で夫を知れば、勿論平洲と茂林とを同道して來る筈は有ません、御自分で、心が極て公平で、三人とも一樣に友人だと思たから平洲と茂林を連て來たが、愈旅路と爲て、朝な夕な心淋しい場合の多きに連れ、思ひ出すは那の醫學士の事だから、扨は一緒に來ぬアノ醫學士が、共に來た兩人よりも我心へ深く浸入て居るのかと、氣がお附き成つたのです。總て斯樣な思ひは、每日顏を逢せて居る間には分らず、逢ふ事の出來ぬ場合と爲て初めて心の切なさが分る事の有る者で、日を經るに從ひ、益々強くなり、醫學士の便りを聞けば、歡ぶまいと思つても心が獨りでに嬉しく、本日紳士の手紙を得ても、讀まぬ先から、中に若し那の人の事を書ては無いかと、此樣に思はれて、日を經れば經るに從ひ、路程が進めば進むに連れ、終には爭ふに爭はれぬほど、貴女の心は確に那の

人の物と爲たのです」と寺森醫師は宛も開きたる本でも讀むかの如く、明白に言來れり。

七十一

己が心に苦み有りて、己れ自ら其苦みの何たるを知らぬ事有り、之れを心の有耶無耶と云ふ、有耶無耶として只だ苦しければなり、芽蘭夫人が此日頃何と無う氣の勝れず、萬事衰へがちに沈み行く有樣なるも、全くは此の有耶無耶なり、夫人自ら我が心を知らずには非ず、若し明白に考へ見れば眞に寺森醫師の云ふ如く、連來りたる平洲、茂林の中を愛せずして、巴里に殘せし鳥尾醫學士を愛するより、自から物事の面白からず、見るもの聞くもの鬱ぎ込む種となりて、身の衰へ行く者にも有らん、去れど夫人は斯くまで我心を分析して考へもせず、若し分析せば、全く我心鳥尾醫學士に屬せりと分り來るぞ恐ろしければなり、大任を身に負ひて萬里遠征の途に在る身が其の任の猶ほ半にも達せずに、心を一人に寄する如き事ありて濟む可きや、我心の中を考へ、戀の惡魔に屈托して濟む可きやと、斯く思ふこと切なれば我と我心を考へもせず、其何たるやをも

知らずして、終に病ひを醸したる今に至り、不意に寺森醫師より我心を分析する如き、明白の言葉を聞きし事なれば、其の一語一句、滿更ら我胸に應へざるにも非ず、何うやら胸の中に眠りたる一物ありて、汗を呼覺さるとも云ふ如き心地するにぞ、爭ひもせず、無言の儘に聞てあるに、醫師は益々力を得て「ハイ、愛と云ふ者は、心の中で育つれば育つるほど勢が盛になります。一端兆した時に自分で是が愛だと承知し、其事ばかり思ひ詰むれば、思ひが卽ち愛の食物と爲りますから愛は益々育ちます、が、成るたけ思はぬ樣に勉めて居れば、乳に離れた小兒の樣に、段々萎凋びて絕果てます、幸ひに貴女の愛は未だ充分に育つて居ません、貴女が本來晴みの深い御氣質で、殊には外に氣の紛れる事も多い爲め、其の愛に充分の食物を與へなんだのです、夫でも物淋しい長の旅行で、愛には心の傾き易い場合ですから、愛が段々に貴女の心を蠶蝕し、貴女の肉體をまで喰滅さうと初めたのが、丁度あのカアツウムに居た頃でした」と、眞に分析表の如くに說明し、更に一大發明を紹介せんとする氣取にて、言葉へ異樣に重みを附け。

「所が其時に當り、貴女の心中に一大騷ぎを起したと云ふは、同所で所夫芽蘭男爵が蠻地の中に

猶だ生て居ると分つた一條です。扨は我身は所夫ある身を以て平洲と云ひ、茂林と云ふ尋常の女人とは少し譯の違ふ男を連れて旅行するのみか、心をば猶其外の一人へ、假初にも動したと有つては、生きて居る所夫に何うして逢う、所夫に逢た曉に平洲、茂林は何うなるか、殊に鳥居醫學士が何うなるか、此身は更に何うなるかと、樣々の難題が一時に起り、イヤサ、斯う一々貴女が精密にお考へ成つた譯でも有りますまひが、一人の心には餘る程の澤山の心配が込み合て、區別も附かず、思案も附かず、唯だ有耶無耶と身を苦むるが全く今の場合でせう。私は醫師として眞に斯云ふ有樣ならば、貴女は無言で過すだけの事を見出しました患者の容體には尤も氣を揉む可き役目ですから、先日來充分注意して是だけ益々容體が重ります、貴女の身に若しもの事が有れば、此一行は何うなります、蠻地に捕はれて苦しんで居る芽蘭男爵を誰が救ひます、貴女は實に一切の心配を捨て、身體と心との健康を計らねば成ません、能く考へれば少しも貴女の行ひに自らお氣を揉む樣な落度とては有ません、數年以前に、所夫男爵は死だ者と其筋から報告せられ世間一般其報告を信じ、貴女は全く法律上で寡婦と爲た身の上です、縱しや今時分第二の所夫を

持て居たとて誰に恥る所も無く、芽蘭男爵が生て返たとて、咎める事は出來ません、況してや貴女は男爵の死だ場所を見屆けて、其墓へ參つた上で無ければ氣が濟ずと云ひ、女は扨置き、男子にさへ出來難き此の大冒險の遠征を企てたのですもの、貞女とすれば絶世の烈女です、少しも自分で心配する所は有ません」と云ひ、猶ほ言葉の及ぶ丈け諫し慰むるに、夫人も稍や心の弛みてか「爾まで私の容體を心配して下さる、貴方の御親切は深く心に印しましたと禮を述べ、最と靜に我が天幕に退きたり。

遙か離れし木の陰にて月を愛でつゝ雜話する、平洲、茂森の兩人は、月よりも夫人に氣を取らるゝ同士なれば、此樣を洩も無く見終りたり。

「何だ寺森醫師は、夫人に何を多舌て居た」「サア何だか聲は聞ぬけれど、彼奴の熱心な樣子と云夫人の何だか恥い樣な有樣と云、何だか變だぜ」「變だ、變だ」「彼奴、吾々と夫人との間に一種の約束が有て、此旅行を初めた事を知て居るだらうか」「夫は知て居る、彼奴仲々目の利く男だから疾に見拔たに違ひ無い」「夫を知て居れば眞逆に我々へ斷り無しに、夫人へ懸想する程

の惡人でもあるまひが」「イヤ善人でも懸想はするよ」と思はず知らず言葉の端に嫉妬の氣味を現すも、止を得ぬ所ならんか。平洲は思ひ返せし風にて「イヤ彼れの日頃の振舞が、仲々懸想などして居る人の樣子で無い、黑奴の背の垢を擦取て、白人の垢よりも黑いのは何の分子だなどと、餘り女には好かれぬ樣な事を平氣で遣て居る」「夫も爾だ、爾云へば彼れよりも君の方が矢張り戀の敵だ僕も彼れより君を敵と思ふよ」「併し僕には氣ほども夫人が心を傾けた樣子は無い」「僕に對しても巴里を出た時と一樣に公平だ」「困るネヱ、本統に巴里で相談した通り、早く決闘して一人に成れば好つた」「僕も爾思ふ、併し今でも隨分決闘は出來る筈だ」「イヤ可なひ今決闘すれば、夫人の心では、殺された方を憐み、生殘た方を憎むから、勝つて決して夫人を我物にする事は出來ぬ」「爾だ、數千里一緒に旅行した其揚句に殺したかと思へば、決闘さは云へ憎む可き旅行の終るまで、夫人に隨行する外は無い、爾だ其外に仕方は無い」と云ひ、双方共殆ど運を天に任せし如き事を云替はせ、囂々として銘々の天幕に入りしが、此の翌る朝は早朝に、音樂隊を

先に推立て、乗て人喰人種と噂さるゝ「ニヤム、ニヤム」の領分に入込みたり。

七十二

文明國人の未だ十人とは入込まざる食人國「ニヤム、ニヤム」の領分に入込みたる、芽蘭夫人等一行の運命如何は好く措き。

玆に又佛國巴里にては、此一行が出發せし當座こそ人々寄ると觸るゝ此一行の噂にして、口に亞弗利加の地名を唱へざるは人にして、人に非ずと見做さるゝ程なりしも、輕快なる巴里人の常として何時の間にやら他の事に心を奪はれ、今は一行の消息を問ふ人だも無し。斯る中に唯だ二人、絶えず地圖を開て一行の所在を氣遣ひ、送り來る手紙などを引合せて萬里の遠征を羨むは彼の本目紳士と烏尾醫學士なり。兩人は一行がカアツウムの市より發したる手紙を得て、芽蘭男爵の猶ほ死せざるを聞得たる時なごは、心躍り肉動きて、斯る異樣なる事件孰れに在るやなご叫び、益々此行に加はらざりしを嘆きて夜の更るをも忘れ、果は今より追掛て行かんかとまで相談

するに至れり。素より烏尾醫學士には、手離し難き一人の母あり、本目紳士も人こそ知らね巴里を立去り得ぬ事情あり、如何に相談するとも今は一行に追掛得ざる身の上なれど、共々に地圖の表へ朱を以て想像の道筋を書入れ、何月幾日には一行が何處其處まで達する日割なれば、今より追ふには順路にて追附き得る筈はなし、船路にて一行の向ふに廻り殘日坡に上陸し、夫より北へ向ひ逆に彼等の正面を指して取て返せば、北より進む彼等とタンガコ、或はビクトリ湖の邊にて突當る可しなど云ひ、互ひに唯だ「美ましいなアー」と嘆息して止みたり。熱心斯の如くなれば他日何かの間拍子にて二人が一行の跡を追掛るに至るも知り難しとは、二人を知る人々の私に評する所なりと。

是より幾日の後、烏尾醫學士は其母病に罹りたりとの事にて、復た本目紳士の許に來らず、本目紳士も大膽なる遠征者の境遇を思ひては、詰らぬ事情の爲め碌々と巴里に引止められるゝ身の上が味氣なく、何とか此事情を打破る道は無きかなど思案しつ、纔に心を倶樂部の雜話にて紛し得るのみなりしが、一夕倶樂部に入行きて、其身に宛來りし手紙など檢むるに、幾通の中に優しき

女の手にて認めたりと見受らるゝ一通あり。紳士は別に嬉げにも見えざれど其差出人の誰なるを知れりと見え、人の見ぬ間に封の儘衣嚢に納め、外の手紙を讀終りし後にて、四方に人の無きを見屆けて又取出し封を切りたり。中は極めて短き文言なれば殆ど一呼吸に讀終り。再び衣嚢には容れたるが、是より例の如くに談話室へ入行かんともせず、其まゝ又も外に出で獨り悠々と歩み去る。其行く手を覗れかと見れば、マデレン街の最と靜なる割烹店の中に入り、二階に上りて、給仕に幾何かの金子を取せて、他人の入込む恐れ無き別室に閉籠り、獨り默然として座を占めたり。定めし手紙の差出人と密會する爲めぞとは察せらるれど、夫かと思ふ人も來らず、凡そ一時間の餘も過て殆ど待疲れし如く幾度か時計を出だし、欠伸さへ二度三度交りしが、其中に外より最前に戸を開き絹服の音爽かに輕く歩み入る一人、年は廿歳よりも幾分か卅の方に近かる可しと思はるゝ婦人なり。本目紳士さも云はるゝ人の交る可き、高貴の婦人とは素より見えねど、丸形なる顔色は最と艶々しく、目にも口にも滴るゝほどの愛嬌あり、男には多年慣れたる者と見え、少しも戸惑ふ如き樣は無く、寧ろ住慣れし己が家にでも入る程の氣易さにて、紳士の傍に在る

一脚の椅子に身を置き、挨拶より先き「大屋お待成つて」と問ひつゝ紳士の顏を見上げぬ。

七十三

此婦人、本目紳士の久しき情婦なる可しとは、唯だ是だけの有樣にて察せらる。紳士は年既に四十に近く而も猶ほ獨身なれば、斯る關係の女ある事、一般紳士の風に照して深くは怪むに足らざらんか、殊に女の顏容、年稍や更けたりとは云へ、高貴の夫人と云ふも恥しかちぬ許にして、萬事振舞の澁み無きも、交際に長けたる本目紳士の妻として云ひ分なからん。

去れど本目紳士は最早や此婦人の美に飽きたりと云ふ樣子にて、別に喜ぶ色も無く、唯だ冷淡に「爾サ隨分待遠だつた、手紙には七時と有て今は最う八時を過ぎた、雜と一時間の餘も待たのだから」と殆ど叱るが如くに云へど、女は最と氣輕く「二三の紳士が尋ねて來て容易に身が拔れませんもの、ヤツト歸して大急ぎで來たのですよ」「では先づ用事から聞うぢや無いか、此頃は大屑紳士達に大騒きをせられると見えるネ」と云ふは嫉妬の如くにも、亦厭味の如くにも聞ゆれ

と全く去る心に有らで、餘り待ちたる業腹に、意地悪く眞面目なる者と知らる。

女は何所までも氣の輕き質と見え、猶ほ平氣にて「何ですネ貴方は、私が玆へ据れば向側の椅子へ移る者ですよ、並で居ては話の度に首を横向ねば成りませんから、女に無禮だと云ふ事を知ませんか、オホ〳〵」と笑ひながらに云へば、紳士も初て顏を解き「ハイ、ハイ心得ました」と笑ひし婦人の正面に坐を直しぬ。「サア是で好らう、用事を聞う」改まつて聞れては、流石に言難く氣なりしも思ひ切て「今まで度々云た通りですよ、何時までも今の儘では居られぬから、表向婚禮して夫婦の披露を仕ませうよ」紳士は少し驚きたる色を示すに、婦人は目覺く「オヤ其樣な顏を爲るは話の先を折ると云ふ者です、お厭ならば是切で洒然りと手を切ませう、私ゞ貴方の間で、何も恨んだり悲んだりする事は有ません、何の樣な話でも水入らずに出來ますから、話を極めて奇麗に分れゝば好のです、私も今の中なら外に夫を探す事も出來ますから」と打解けて云出る。紳士の猶ほ容易には返事し得ざるを見て　婦「何より婚禮が一番世話無しですよ、私は廿四の年から十年後家で一、オヤ斯云へば自分の年が分りますけれど、貴方と御懇意に成てから

丁度滿六年です、今二度目の夫を持ても誰も咎めは仕ませんよ、唯だ本目夫人として身分が少し低いなどと評する人は有ませうが、夫でも今なら誰も私を卅歳以上とは思はず、他にも彼是れ云つて吳れる紳士が有ますから、貴方も矢張り私を見初め、夢中に成て婚禮した者と世間では身分の違ひを咎めません、今婚禮せずに私の色替が衰へてから夫婦の披露をすれば、夫こそ世間では貴方が數年間私に係合ひ、手を切るにも切れ無い場合に成たから、止を得ず婚禮したのだと此樣に笑ひます、分れるか夫婦に成るか、玆が本統の極時です、私も女の若い盛を、六年も貴方の爲に費しましたから、最う表向の妻に仕て下さいと、斯う願ふ權利が有ます」と愛らしき顏に似合はせず、最と重大なる問題を露出しに持出され、紳士は益々答へ得ず、心の底には最早や飽々して手を切度き一方なれど、斯る話は男が遙に女より活智無き者にして、爾と言切る勇氣無し。「イヤ何も今直に返事せずとも好だらう」「今直で無ければ際限が有ません、私も今なら充分身を定める道が有ますからサ、玆一月立つと又世が何う變らうも知ません」「ナニ一月立つ者か一週間で能い、今日は木曜日、好し〳〵此次の木曜日には佶と返事をする」「では大負に

負けて其日まで待ませう若し其日に返事が無ければ貴方が承知した者と見て、私から婚禮の日を極て世間へ披露して仕舞ひますよ」と退引ならぬ條件を附し、是にて相談一決したれば此あとは兄妹の如く親しく、共々に食事を命じ、雜談に打解けて分れたり。

是より七日を經、約束の日に至れば婦人は紳士より一通の手紙を得たり。文には「御身の美しさには深く心を引るれど、猶ほ獨身の自由を失ふ心無ければ止を得ず手切とし、御身の婚資として封入の公債證書呈上致し候」とあり。封じ込めたる公債は、一年五千法の利を生ずる高にして勿體無き程の手切金なり、婦人は手紙を繰返してホロリと一滴の涙を滴したるも、勿論一滴だけにて止み、後は其顏、公債證書に隱れて見えず。本日紳士は亦是しきの手切金を物の數とも思はざる身代なれば、此手紙を出せし後にて、ホツと安心の息を吐き「アヽ是でヤツと手を切た、六年間、イヤ夫も初の中は好つたが、後の一二年は暴君を頂くよりも辛かつた」と呟きしが、六年間も夫婦同樣にせし者が、全く分れて忽ちに忘れ得る筈は無し、他に心を紛す可き事とて無ければ、此日だけは氣樂なりしも翌日は唯だ懶く、翌々日は何とやら心淋しく、斯くて一週間を經

た後は其淋しさ益々募りて、世の味氣無さに堪へられず、居ても起ても身の置所無きまでに到りしかば、我知らず家を出で、歩むとも無く婦人の家の門口まで、行く事前後三回にまで及びしも道理を知ざる人ならねば三回とも門口にて我身を叱りて引返せしが、其三度目には「迚も此巴里に居ては我慢が仕切れぬ、淋しさの餘り何の樣な過ちを仕出來すかも知れぬ、過ちの無いうちに平洲、茂林の後を追ひ、爾だ亞國に旅行しやう」と云ひ、奮然として心を決したれば、直ちに暇を告げん心にて、彼の烏尾醫學士の家を訪ふに、醫學士は宛も昨日老母に死れたりとて、殆ど狂氣の有樣にて悲嘆に沈めり。本日紳士は其手を取り「君、悲しんでも返らぬ事、少し氣を取直さねば君は發狂する、サア僕と一緒に旅行しやう、旅行しやう」と促したり。

七十四

喰人國の盡る所に一泊し翌朝は殊更に早く出發して、兼て目指せるモンバト地方へは入込たるが、是れぞ曾て老兵名澤が芽圃男爵に逢たる所なれば、或は男爵今も猶ほ此地方に捕はれて居る

やも知れず、運能くば意外に早く男爵に逢ふ事も有らんかと、夫人は云ふに及ばず、他の一同も何と無く心引立ち、兎に角も名澤が男爵に逢ひしと云ふ其場所を指して進むに、國境より僅に四里程にして、弦なりと云ふ所に達したり。見れば久しく人も住はぬ爲め柱の朽ちて傾きたる一軒の「ゼリバ」あり。此「ゼリバ」即ち名澤が番人として逗留したる所にして、男爵が數日の宿を請ひし所と聞けば、何とやら懐しき想ひに堪へず、一行は暫く之にて小休せんと云ふに決し其中に入り行くに、芽蘭夫人は日頃の落着きしにも似ず、手先などの微に震ふを隠し得ざるは、心の痛く騒げるが爲なるべし。

芽蘭男爵弦を出でゝ、果して何の方角に向ひしや。雲を摑む如き推量なれど、道は唯だ二筋に出でず、一は東南に曲りて此のモンバト地方の片端を通る者、一は眞直に行きて中央を過るもの是なり。

歐羅巴人にして此の土地に入り込みたるは、芽蘭男爵の少し以前に唯だシュウエインハース氏あるのみ。此の人は象牙商人アブデス、アメートと云へる者と、老兵名澤を連て入込みたるも、

此土地の王が、堅く拒みて通行せしめざりし故、詮方無引返し、後に老兵名澤のみ、荷物其他の番人として踏留り圖らずも芽蘭男爵に逢し次第なり。斯はシュウエインハース氏が引返せし事なれば、氏の著書にて此土地の様子は少く分れり。此土地は亞弗利加中の強國にして、絶域に似ず風俗も稍進みたる所あり。王の名を魔雲坐と云ひ、配下の臣民百万人と稱す。魔雲坐の弟に鐵荊と云ふ者あり、兄王の代理として此國の東南幾方里の部分を支配せり。此ゼリバより東南に行けば弟鐵荊の支配地に行く可く、眞直に進めば兄魔雲坐の所に行く可し、芽蘭男爵は兩者の孰れに向ひしや、素より知る由無しとは云へ、兄魔雲坐は總體の王にして弟鐵荊は唯だ一地方を托せられる支配人の如き者なれば、兄魔雲坐、能く弟鐵荊の支配地内の事をも知れるに相違無し、一行は兄魔雲坐の都を指して行くこそ好けれど、相談直に決したり。

若しも芽蘭男爵が、王魔雲坐に捕はれて有らば如何にせん、王は或は此一行を男爵救助の爲に来りしと察し、敵と見做すなどの事あるやも知れず、何しろ大事に大事を取り少しも王を怒らしめぬが肝腎なれば、先づ王へ向け數多の遺ひ物を包み、之を通辯阿馬と、老兵名澤とに持たせて

先に遣り、一行は其の消息を待つ爲めに、ゼリバへ殘りて待つ事としたるが、弦より王の宮殿までは四里ほどの路とやらにて、阿馬と名澤とは夜に入りて無事に歸り來り、王が一方ならず一行の遣物を喜びて受納め、猶ほ一行に早く宮殿の近くに來り、顏を見せよとの言葉を發したる事を復命したり。

魔雲坐王斯くまで打解けたるは何よりの幸ひなれば、翌日の早朝を以て又弦を發し、數時間にしてモンバト地方の都とも稱す可き王宮の下に達し、日の暮までに小屋を組み、天幕を張るなど數日逗留の用意を調へ、猶ほ事に由りては、王と如何なる問着を起すやも測られねば、名澤が部下の兵士をして壘の如き者を小屋の四方に築かせ、廿人づゝ六時間交代にて立番せしむる用意など爲すに、王は一行の來着を聞き、此國の最敬禮なる可し、十人の女を送り之を一夜の伽にせよと云ひ來れり。老兵名澤が兼て聞知れる所に由れば、此國の王は後宮に百人以上の妻を圍ひ、珍客には侍女として之を送る事ありと云ふ、今送り來し十人の女も、此國にては定めし美人なる可きも、曾て盆鄉地方にて見し女の如く、丸々しく肥太り其上に眞の裸體にして怪物の趣あり、

一行は深く厚意を謝し、名澤を着けて此女共を送り返し、吾々一行は王の言葉に從ひ、顏を見せん爲めに來し者なれば女を欲せず、唯だ早く王に逢はん事を欲す、何時面謁を許さる可きやと問はしむるに、明日の朝涼の間にと答へ來れり、一行は事の意外に都合好く運びしを喜び、只管ら明日の朝をと待受けたり。

七十五

既にして一夜は明け、愈魔雲坐王に謁す可き朝涼とはなりぬ。此の面會は一方ならぬ大事なり、王を怒らしめては成らず、疑はしめては成らず。去ればとて侮られては猶更ら不都合なれば何でも王に好意と尊敬の念とを起さしめねばならず、主君ある如く見せ掛くるが宜しからん。芽蘭夫人こそは一行の君主にも均しけれど、女の君主と云ひては巾が利かねば、平洲か茂林の中をと云ふに決し、平洲は自ら茂林に讓りて、茂林乃ち君主の役を勤むる事とはなりぬ。

第二には野蠻人の常として、目を射る如き華美かなる色を尊ぶとの事なれば、一行成る可く異り色の衣を着するが好からんとて、孰れも荒き縞の服に金光の燦爛たる太き紐を附け、目を眩す如く打扮たる中に、下僕與助のみは、黒き給仕服の外に持合せ無ければ若し我身だけ侮られて、誰より先に貪り喰はれては成らずなど、落膽して怖恐るゝを、此土地は爾ほどの喰人人種に有らねばと說諭して安心せしめしが、唯だ獨り最と淡白なる水色の服を着け、天女の如く見えたるは芽蘭夫人なり、緋繻子の燃る如きを着けたる帆浦女と並びて實に仙凡の違ひなり。

斯て一行は假の君主、茂林を先に立て王宮に入るに、宮中の式部長官にやあらん、腰に獸皮を纏ひたる外は丸裸なる黒人數人の同僚を連れて出迎へ、先づ一行を後宮に通したり。後にて聞けば後宮に通す事最上の大禮なりこそ。絃には王の妻妾、數へ難きほど並び立ちて、口々に何やら細語き一同を眺むる樣、物凄き程なれば、如何に野蠻の王とは云へ、斯く大勢の妻妾を何にするやと聞けば、名澤の說明には、是れ現主の妻妾のみにあらず、既に死したる前王の未亡夫人達も此王の物と爲り、且は又戰爭などの後にて論功行賞の場合に、女を勇士に與ふる習慣なれば、國

中の美しき女を手當り次第集め來りて蓄へ置くなりと云へり。

王宮は總て泥を煉固めたる幾棟の小屋より成り、小屋と小屋との間は屋根を葺きたる廊下にて繋げり。一同は暫く後宮に在る內に、王より面會の用意整へりと通じ來れば、又式部長官の案內に從ひ、二三の廊下を通り奥まりたる一室に至るに、王は年四十歲ばかりにて野蠻人には珍らしきほど恰好のよき容貌を備へ、室の正面に寬かに坐を構へ、文明國の織物にて作りたる寬袖の如き服を纏へり。是れ或は芽蘭男爵が持來りて贈りしには非ずやと、夫人は第一に心を動し猶ほ能く見れば、其左右に硝子の鏡も有り、陶器の小皿も有り、夫人が益々怪むを平洲は夫と見て「イヤ那の品物は總て獨逸人シュウエインハース氏が贈たのです、氏の旅行記に出て居ます、何でも宮中の寶物を殘らず並べて、王が自分の富を誇り示すのでせう」と細語くに、夫人も初めて安心し假君主茂林を第一に、順に設けの席には着きたり。

王は容易に口を開かず、充分の威嚴を持して暫く一同を見渡せしが、芽蘭夫人の美しさは野蠻の眼にも映ぜしと見え、誰よりも長く夫人を見るに、夫人の次に坐す帆浦女は、自分の事と思し

か頻に衣紋を繕ひ初ぬ。頓て王は横手の皿に盛たる果實を取り、皮ぐるみに喰て其の口を濡せし上、席の末に恐る〳〵控へる與助に指さし何やらん言ひ出せり。與助は扨こそ我身が第一に喰る時來りト、色を變て戰くに、老兵名澤は王の言葉を譯し「白人の君主茲へ來れ」と通辯したり。茂林は威儀を糺し「彼なるは君主に非ず、君主は我なり彼は下僕なり」と云ふ。王は直ちに「否彼れは君主なり、先にシユウエインハースと云ふ白人來り、彼れと同じく白き襟、黒き服を着し居て、是が白人國にて君主の服なりと云ひたり」と推返せり。扨はシユ氏自ら黒き服を着け方便の爲め爾も云ひし者と見えたり。名澤が此語を譯し終るや、與助は忽ち安心し、勇氣打て代て「では私が君主を勤ませうか」と云ふ、茂林は目にて叱りつ、又王に向ひ「白人國にも幾多の領分あり、狹き領土にては我が如き美服を着す」と言開けり。此王は黒人中にて勇氣の最も優れしのみか腦髓も亦最も優れ、能く他の黒人の解し得ざる事柄をも解し得るを、シユ氏の紀行に記し有り。如何にも黒人中の智者と見へ、暫し考へて茂林の言開きを合點し得し如く、此度は茂林に向ひ「此一行は何の目的にて遙々我領地へ來りしや」茂林は

七十六

既に幾度も其の働きにて示せし如き、頓智敏才の人なれば少も澁まず、「吾等はシユ氏より御身の慈悲深との噂を聞き御身を見ん爲めに來れり、シユ氏は極めて御身を親切なる王なりと云ひ、人々皆な御身を慕ひて噂せり」王は喜びの色面に溢れしが又暫し考へて「然し我れ、彼人の願を拒みたり、彼人、此國を通りて猶南へ行んと云しも、我許ざりし爲め詮方無く北へ歸れり」茂林は附入て「然り、シユ氏はアブデス、サメートと云ふ象牙商人を同道し居たるが爲め御身は彼象牙商人が此國と商賣の取引を初むる事を恐れ、非ず少しも此國の不爲と爲る恐れ無ければ御身必ず我々の南行を拒まぬならん」兎に角も此王より、南行の許しを得て置く事一方ならぬ必要なれば、機會に乘じて斯は云ふなり、王は目を開き「我れに逢ふ目的にて此國に來りしと云ふ此一行が、既に我れに逢ひし上、南に行く必要なし北に歸る可き筈ならずや」と最ど鋭く問掛けたり。

北より來りし一行が南を指して歸るこは、道理に合はぬ事柄なれば、魔雲坐王が鋭く問掛る事尤もなり。爾は云へ亦以て此王が、多少道理を考ふる心力ありて、他の野蠻人の如く辻褄合ぬ話に欺かるゝ事無を知るべし。

茂林は宛も此問を待受けたる如く「我等實に北より來りしとは云へ、同じ道を通るは興薄ければ南に行きて海に出で、船に乘りて歸らんと欲するなり」王は首を傾け海、「海とな、先に來りしシユ氏も其の海と云ふ事を話たれど、我は合點行かず、左樣の物を見し事無し、南に行きて却て北へ還らるゝとは全體如何なる道筋にや、其海と云ふ物を說明されよ」陸より外に見し事なき人に向ひ、海の事を合點せしめんとは隨分難き事なれば、是には茂林も撥と困り、暫し好き比喩を考ふるに、平洲は窃に注意して「天を、天を」と云ふ、茂林は忽ち頷き王よ、先づ天を見よ、天は此の地の盡る所へ垂て、地と接する如く見ゆるに非ずや」「然り天と地は南の果も北の果も繋りし如く見ゆ」「人若し南の果に行き、天に攀る力あらば、天を傳ひて自ら北へ還らるゝに非ずや」「成るほど然り、然し人には那の滑ツこく見ゆる天を攀る力無からん」「然り天を攀る力無

けれど、海を滑り行く力は有り、王よ天の形を何と思ふや」「勿論圓しと思ふ」「圓き天に包まるゝ柄には地の形も亦圓からずや」「然り、地は圓けれども平扁し」「然り、地と天との間に水の溜りある、其の水は圓き天と圓き地に夾りて有る事ゆゑ、地のぐるりを丸く輪の如くに圍めるなり」王は暫らく默想して「成るほど」と云ひ又怪みて「天と地との間に、其の輪の如き水は孰より出るや」「川より流れ出るなり、川は東西南北樣々に向きて流るれど、皆天の際に行き天に支へて其先へ行く事叶はぬゆゑ、横に廣がり地のグルリに滿るなり」王は手を打ち「成る程成る程、我はシユ氏に問ひたれど、シユ氏は唯だ圖を書きて示したるのみ斯く合點の行く樣、說明さずりき」とて痛く喜ぶ體なりしが、又考へ直して「併し多くの川が絕間無く流れて行けば、海と云ふ水溜りは次第に廣く成り、終に四方八方より地を浸し來らずや」誠に野蠻人に似合ざる微じき問ひなり「王、試みに朽たる木の一端を水の中に浸して見よ、水は其木に浸潤みて上の方まで吸上らるゝならん」「然り、水は朽木に浸潤みて上る事あり然し是は朽木のみに非ず」「最も然り、海と云ふ水溜りの水は、宛も朽木に浸込む如く天にも浸込み、地にも浸込むなり、天に浸込

む物は終に雨と爲りて天より落ち、地に浸込む水は泉と爲りて地より出で、斯して雨も泉も亦川に流れ入て海に歸る、故に海と云水溜りは多少其水の增減あるも溢るゝ事無、溢るゝ事なし」誠に幼き說明なれど、野蠻人の幼稚の心には斯く云ひてこそ初めて合點せらるゝなれ。王は嬉しげに「余は海を知れり、海を知れり」と叫びしが、更に聲を平にして「御身等が南に出るは唯だ海に達するのみの爲にや」と問ふ。茂林は弦にて、芽蘭男爵の事を打明し、實は男爵を尋ぬる目的をも衆たりと云ひて、男爵が若し弦に捕はれ居ぬや或は弦を通らさりしや、通りしならば孰れの方角を指して行きしや等の事を、問ひ度くも思ひたれど、王、若し何かの都合にて「否」と答へなば、此答へを傳へ聞く滿廷の黑人等、王の意に負きて叱らるゝ恐ろしさに、他日一行より問はるゝとも、皆な王と同じく「否」と答ふる事と爲らん。斯ては自ら探偵の道を塞ぐに均しければ、何でも更めて王へ秘密の面會を請ひ、悉く從者なごを退けたる席にて、窃に問ふに如かじと思ひ、即ち其の下拵らへとして「然り、別に猶ほ目的も有り、去れど多勢の聞く所にては言難し更めて秘密の面會を請ひし上、打明かさん、秘密の面會は何時に許さるゝや」王は天と海との說

明を聞きてより、大に尊敬の念を生じたれば敢て拒まんともせず「明日の夕涼に」と答へたり。

斯て王は再び果實に口を濡し、其一を茂林に與へ、暫しは無言に過したるが、其間にも王の眼は、偸み視る如く芽蘭夫人に注げり。夫人の美しさに痛く心を奪はれしに似たり。去れご王と云ふ尊嚴に對し、流石に端下無うは問ふ能はず、何か話の傳手を以て、夫と無く夫人の身の上を聞かん者と空く心を惱す體に見えしが、漸く思ひ附きて「御身の次に坐す二人の男は何者にや」と問ふ是れ男より席順に、段々問ひて女の身に及ぼさん方略なり、野蠻人に稀なる程、掛引に巧なりと云ふべし。茂「我が兄弟にして、一人はシユ氏の如く能く事を知り、一人は病を醫するに妙を得たり」王は弦に於いて恍惚として芽蘭夫人を眺めしも、夫人の美しさには何所と無う神聖の所あり、殆んど拜む可く近き難き趣き有れば、王は猶ほ直接には問ふ能はず、次なる帆浦女に指し「彼の老たる女は何者ぞ」先程より夫と無く眼を以て王に媚居たる帆浦女は、通辯者たる名澤の口より「老たる」の一語出るや、嚇と怒りて顏を赤くし、聲も日頃の荒々しきに輪を掛て「何ですと、私を老た女とは、ヱ、私の年さへ知らぬ癖に老たとは餘り失禮だ」とて殆ど泣も出さ

ん許りなり。寺森醫師は氣を利かせ帆浦女を取鎖めて「ナニ此土地で「老た」と云ふは尊敬の言葉です、決して年の老たと云ふ意で無く、アノ敬ふ可き女と云ふに當るのです」帆浦女は忽ち安心し、前より一層の媚を目に浮めて謝する如くに王を見れども、王は其媚に感ぜず、徐ろに眞の目的を言出し「アノ美しい婦人は、定めて君主（茂林を指す）の妻ならん」と幾分の心配を帶びて問へり。

七十七

茅繭夫人を指して先づ茂林の妻なりやと問ふ、魔雲坐王の心中には何か一物有るにあらぬ乎。茂林は爾と迄も疑はず「否、我れは未だ妻を持たず」と答ふ、此返事は實に並居る蠻人等を驚かしめたり。此國の如く男子廿歳以前に妻を持ち、而も妻帶を人間第一の目的と心得て、百人二百人の妻を一人に携ふる王さへ有る土地の者共、卅歳を過し男子が猶ほ無妻なりと聞きては、殆んど合點する事能はず、全くに開きし口の塞がらぬ有樣なるに、先程君主と見違へられて辛と安心

せし彼の輿助は、一同の開けたる口に輝ける白き齒を見て、若しも此齒に噛れては卜又も顏色を失ひたり。

王は推返して「然らば此美しき女、誰の妻にや」茂「誰の妻にも非ず、吾々の妹なり」此返辭も、亦た痛く王に不審の念を起させたり、此國にては妻が夫に從ひて旅行する事ありとも、妹が兄と共に旅するなどは絕て無き事柄なり、兄弟は他人の初と云ふ諺あれど、此國にては兄弟姉妹全くの他人なり、共間に何の愛みも存することこそ無し。「妹ならば遙々御身等と旅する事不思議に非ずや、其譯を聞されよ」茂林は四邊を見廻し「サア其譯とは、斯る多勢の人の前にては言難し、去ればこそ唯今も王に秘密の面會を求めたるなれ、明日の夕凉に來り、廷人を退けられたる後にて弛々とお話し致さん」「好し、其時に聞かん」是にて初の面會は終りたり。

王は自ら身を起し、廷人達に送られて數百の妻を待せある後宮の方に去り、一同は彼の式部長官に送られ、猶ほ王の厚意にて命ぜしと思しき、五十人ほどの黑兵に護られて小屋に歸れり。

夕刻に及びて王より、幾斤の獸肉を贈り來たりしかば、幾月以來、旨き鮮肉を口にせぬ一行は

何よりの馳走と喜び、直ちに其料理を命じ、王には更に返禮として小形の樂器を送りつ、頓て打寛ぎて夕飯の卓を圍むに、獨り與助のみは顔の色最と悪く、毎に無き鬱ぎ様なれば、人々左右より其仔細を問ふに「ハイ私は先ほど見た廷人等の白い大きな歯が、未だ目に附て消ません、此の様な肉を贈り我々を肥して置て、其上で捕へて食ふ積では無からうかと氣掛りです」と益々打萎れて答ふるにぞ、一同は其の臆病なるに驚きてドット笑ひ、中にも茂林は「貴様の様な臆病者が何うして先ア亞拉比亞から、此國のバヒヤウダの沙漠まで獨りで旅行したのだらう」と叱り懲せば「ナニ那の時は獨りで旅行したのでは無く、奴隷商人に捕つて無理に連て來られたのです」と眞面目に實を吐くもおかし。

斯る中にも一同の氣に掛るは、果して芽蘭男爵が此邊を通りしや否の疑ひなり。王は獨逸人シュ氏の事をば幾度も話したれど、男爵の事は絶て口に出さず、男爵はシュ氏より後に來し事なれば、王、若し男爵を見しとならばシュ氏の事より男爵の事を更に詳しく記憶して、餘計に言出る可き筈なり、夫れが一言をも云はざるは何の爲めにや、男爵或は此所を通らざりしか。夫とも

王が男爵に何か秘密の處分を施せし爲め、殊更に包めるにや、夫も是も明日夕涼の面會には分るならんと、只管其時を待つに、既にして翌日と爲り、約束の時刻も來りたれば、又も昨日と同じ同勢にて茂林を先に立て王宮に到るに、今日はヒツソリと靜にして、一同を迎ふ可き用意の整ひて有りとも見えず、扨は初對面と違ふ故、一切の式を略せしにや抔と思ひつ、先づ例の式部長に意を通ずるに、長は退き、數刻の後に出來り、王の言葉を傳て「昨日白人の伴ひ居し、彼美しき女一人に面會せん、彼女のみを奥へ通すべし」と云ふ、是意外なる言條なり、何の爲め王は斯の如き心を起し、又何の爲めに一同を芽蘭夫人より分たんとするか、禮儀を知らぬ蠻王とは云へ餘り無禮の言條なれば、氣早き茂林は第一に赫と怒り「失敬な奴だ、踏込んで舌の根を停めて呉やうか」と云ひ、腰に着けたる短銃を探り試むる、平洲も同じく立腹し「此様な言葉に應じられる者か」と云ひ、由々しき事にも立到らん劍幕なり、芽蘭夫人は二人を制し「ナニ王の言葉に應じさへせねば何も爾うお腹立には及びません、縦しや私が唯獨りで王の前へ行つた所で、別に危い事などは有うとも思はれませんが、唯だ纔人と云ふ者は少し此方が甘く出れ

ば園に乗て何所までも無理を言募りますから、弦で王の我儘な言條に従へば、此次は又更に何の様な事を言出すかも知れません、白人は其様な我儘には従はぬぞとの意を示す爲め此儘弦を退きませう、ハイ退いて王が其非を悟るまで小屋へ歸て居るとしませう」此穩かなる言分には寺森醫師第一に贊成し、續て平洲も茂林も實に尤もと悟りたれば、威儀を正して退かんとするに、何と思ひてか獨り彼の帆浦女は周章て、兩の手に平洲と茂林との手を捕へ、一生懸命に引留めつゝ「お待なさい、お待なさい、貴方がたのお考へは大に誤解の恐れが有ります」何事にやと兩人帆浦女の顏を見詰むるに、女は躍起の有樣にて「王が白人の女、唯一人寄越せと云ふは、芽爾夫人を指したのでは有ますまい」ア、夫人を指さずして誰をか指さんや、誠に異樣な事を言ふ者かなト兩人が猶ほ合點し得ざるに白人の女とは夫人一人で有ません、私も確かに白人の女です、殊に王は昨日私へ老たる女と云ひ敬稱をまで加へた事は、寺森さんが能く御存じです、ネヘ寺森さん、王が逢はうと云ふ白人の女とは、多分私の事だらうと思ひます」平洲と茂林は呆れ返り暫しが稗は返辭も出です。

七十八

平洲も茂林も呆れ返りて返す言葉さへ出ざるに、帆浦女は猶も主張し「イヱ、皆さん、魔雲坐王が白人の女一人だけ寄越せと云ふは、隨分意外な言分ですが、去ればとて之に從はねば何の様な事に成うも知れず、實に一同の爲めに危急存亡とやら云ふ時です、斯様な場合に詰らぬ事を羞かんで、氣の附た事まで言はずに控へるのは却て一同の不爲です、私は少しも自惚るでは有ませんが昨日の對面中、王は始終私の顏を偸む様に見て居ました。（寺森は口の中にて王が芽爾夫人を眺めたるを自分の事かと思て居る、自惚も是ほど強ければ世話は無いと呟けり）イヱ勿論私の自惚では有りません、第一私の様な、亞弗利加を二度までも旅行した女に自惚などの有う筈も有ませずサ、夫に又女と云ふ者は、神經の働きで男の心が分ます、彼の男が此方の顏を眺めるのは唯だ何の氣も無く眺めるのか夫とも深く感じて眺めるのか、ハイ夫れは最う微妙な所で發揮と分りますが、昨日王が私を眺めたのは決して何心無くでは有りません、確に私の神經へ手答へが

有ました」と猶も熱心に述べ來るを、漸くにして呆れし顏を取直し得し茂林、今は腹立しき程に思ひ「馬鹿な事を仰有るな」と大喝一聲に叱り附くれば、穩かなる寺森は言繕ひ「イヤ帆浦女王の逢たいと云ふのが、貴方でも、將た芽蘭夫人でも、其道理は一つです、貴女だからとて吾々が何うして王の言葉に從はれませう、若も、貴女の身に間違が有れば實に一行の不幸です」帆浦女は斷乎として「イエ夫は爾でせうが私は其危い所を犯します、ハイ犯して王の前へ出ます、今王を怒らせては一行何の樣な目に遭も知ず、夫を私一人が危きを犯す爲に王の心を宥め得るなら、私は本望です、一行の爲と爲らば命を捨つるも厭はぬと初から覺悟して此旅へ上たのです」今度は平洲が引留めて「イヤ何と仰有つても貴女一人を王の前へ出す事は出來ません、吾々が一人の貴婦人を保護し得ず、蟹王の前へ單身で出したと云ては歸國の後、社會へ言開きが立ません、サア一同と共に絃を立去りませう」と云ふに、貴婦人ミ云はるゝ嬉しさに漸く思ひ返し、一同の後に從ひ王宮を退き乍らも、何やら王に心を引るゝ如く幾度と無く振返るは、唯だ猥絕と云ふ外無し。寺森は帆浦女が日頃意外の事を仕出來すの多きを知れば、若し又此度も何かの間違ひを起し

てはならずと、殆ご護衞する如く其手を取れりを王の許へ遣れば、王は除り人を馬鹿にすると立腹するは必定だ、夫こそ斯して王の命を拒み、引退くより險呑だ」と云へば平洲も「實に其通りさ、併し煽動さへすれば何方へでも動かされる女だから、猶だ夫れだけは始末が好い」と評し合ひつゝ退きたるが、斯く王命を拒みしが爲に、是より如何なる事の有らんこやする。

七十九

鷲雲坐王が芽蘭夫人唯一人に面會せんと云ふを、帆浦女が自分の事と思込みしは、日頃の氣質に照しては怪むに足らされど、若し帆浦女を王の前に出しては忽ち王の怒を招くこご必定なれば一同は旨く帆浦女を說諭し「御身を王の前に出すとも芽蘭夫人を出すとも、一同の心配は同樣なり」などご云ひ、帆浦女が最と本意無げに、王宮を振返るを引立てゝ歸り來りしは、前回既に記せし如くなるが、歸着きて後一同は、或は王の立腹して襲ひ來らんも知れずと思ひ、金々番兵

を嚴重にし、此後の事共を評議し居たるに、間も無く王の使として、彼の式部長官の來りしかば茂林一人、通譯を連れて出迎へ其來意を問ふに「王は先日我が妻十人をして白人の許へ見舞としして差遣はし、夜の伽に供よとまで言送りたるに、白人が妹一人を王の許へ來らしめぬとは其意を解し難し、明かに說明せられよ」と云ふに在り。成ほど道理ある質問なり、王より十人の妻を贈る程の好意を示すに、此方にて一人の妹を送る位の返禮をさへ拒むとは、野蠻王の心には到底合點の行かぬ所なる可し。茂林は之に答へ「否、各國各々習慣あり、女たる者、夫或は兄弟と同道ならずば、他人の前に到らざるが我が白人國の習しなり、此國に來るとも自國の習慣を破り難し」と云ふに式部長官は心得て退きしが、良ありて又王命を傳へに來り「然らば詮方なし、魔雲坐王は一同に面會す可し、白人數名にて其妹を連れ來る可し、昨日既に秘密の面會を請ひ度しと白人より願ひしに非ずや」茂林は王が斯まで折て出しからには、此機に乘じ充分に權式を張り以て白人の最と嚴重なるを示し置かんと思ひ「然り、秘密の面會は望む所なれど、今日其れが爲に王宮へ行き、王に面會を得ずして歸りしからは、數日の後ならでは王宮へ到り難し、一日拒まれ

し所へ、日を經ずして再び入込むは白人の習慣に非ず、夫とも魔雲坐王に於て親しく白人の天幕へ尋ね來らるゝならば白人喜びて面會せん」と今度は此方が面會を許す如き地步を占て答ふるに、式部長官は又心得て立去りたるが、後にて平洲も芽蘭夫人も、茂林の此返事を聞き斯く權式を示したるは後々の爲に極めて良しと稱したり。

又少時を經て式部長官は「然らば王が親しく行きて面會せん」との意を傳來りたれば、扨は傲慢なる魔雲坐王が遂に此小屋へ來臨するかと、茂林も平洲も外交談判の强硬に貫き得しを喜びたれど、又思へば王が斯く我を折るも全く芽蘭夫人の顏見たしとの一念に出ること明かなれば、此後或は事益々切拔け難き場合にまで到りはせぬかと、口にこそ出さね心私に危みしも、其時は又其時の事にせんと、王を迎ふる準備を急がせ、有る丈の兵士に武器を擔がせ、之を小屋の面前に整列させ、或は佛國の國旗を取出して入口に飾り附などするに、帆浦女は斯と知りて、飾り得る丈け其身を飾りて出で來り「平洲さん、茂林さん貴方がたは何故王が此小屋へ尋ねて來ると思ひます」と問ふ、其意は此身に逢んが爲めに來るを知らずやと、毎もの通り自ら合點して暗に誇示

すに在ること問はずして明かなれど、二人は故と何故なるや知らずと答ふるに、帆浦女は二人の愚さに呆れし如く「貴方がたの目は節穴も同然です、今に王が玆へ來た時、其樣子を見れば自然と合點が行きますよ」と云ひて退きしが、間も無く王は大勢の護衞を引連れ、此方を指して威儀正しく練來れり。

此のとき日は既に暮れ果たれど、隈無く晴れし赤道の天に、月出で晝の如く明るければ王を庭の中央に通し、此方の一同其正面に腰を卸して待遇すに、王の眼は間がな隙がな芽爾夫人の顏に注ぎ、果は恍然として見惚る程と爲りたれば、平洲も茂林も成る可く其心を他に引きて紛らはせん者と思ひ、馳走と稱して或は音樂を奏せしめ。或は野蠻人を驚かしむる爲め兼て用意せる線光花火を揚げなどするに、王の心其の方に引るゝは、縱の暇にて直ちに又夫人の顏に返ること、宛も磁石の北へのみ引るゝに同じ。夫人と並び坐せる帆浦女は、王の眼常に我顏に在りと思ひしかゑ〳〵樣子を繕ひて、眼に有丈の媚を浮ぶるも可笑し。最後に茂林は短銃を取出し、是ならばと思ひて、門口の樹に留れる雉鳥を狙ひて擊つに、爆然として耳を劈く其音には、流石の王も膽を消

し「ヤ、ヤ、落雷なるか」と叫びたり。

茂林は落來る鳥を拾ひ來り「落雷に非ず、是なり」とて鳥と短銃とを示すに、王は痛く不審の體なれど仲々剛情なる質にして、餘り驚きては王の威嚴を損ずると思ひてか深くは問はず、王に從ふ蠻人等は口々に叫び立て「白人は手の中に雷を込めたり、彼等は雷使ひなり」と評せしこと老兵名澤の說明にて分りたり。王は其身の驚きを他の事に紛らせん爲め、門口なる國旗を指さし「那の旗は我れ曾てシュ氏より聞きたる事有り、白人の國にて國旗と稱する物なるや」「然り」「シュ氏の携へし國旗と模樣の同じからざるは如何」「既に申せし如く同じ白人中にても、シュ氏と吾等とは領地の違ふが爲なり」と說明すを、傍らなる平洲は受次ぎ「イヤ王は此國旗の模樣をも確に見て知れる筈なり」と云ふ、何の意にて平洲は突然斯る事を云ふにや、茂林は怪む間に王ば答へて「否、此模樣は今見るが初てなり、シュ氏の國旗とは全く變れり」平「シュ氏の國旗とは異れど、同氏の次に此地へ來りたる一人の白人は、是と同樣の國旗を王に示したる筈なり」扨は讀めたり、王の不意を襲ひて芽蘭男爵が此土地へ來りしや否を探らん計略なり。王は合點の行

かぬ面持にて「シュ氏の一次に來りしは御身等なり、其外に此土地へは一人も白人來らず」と云ふ、其言葉に僞りの無き事は明白なれば、扨は芽蘭男爵、此土地へは來らずして東方の道を取り、此王の弟たる鐵荊王の支配地に入込みし者と知らる、爾と分りしは嬉しけれど、行先の猶甚だ遠きには又嬉しからぬ想ひもあり。

八十

夫人の所夫、芽蘭男爵が此土地へは來らざりしこと、魔雲坐王の言葉にて分りたり、爾すれば男爵は道を東の方に取り、王の弟鐵荊の支配地に入込みたる者なり。

事に由りては此地にて、芽蘭男爵に逢ひ得んも測られずと、幾分の樂みを心の中に蓄へ居し一同は、斯と知りて稍や失望の想無き能はず、殊に此のち如何ほど行きて男爵の現在の居所を突留め得べきや、殆ど果の分らぬ旅行とは爲りたれば、何と無う心細くも思はるれど、爾ればとて一日後れては、一日だけ男爵に逢ふ可き期を遲くする者なれば、此上此地に留る可くも非ず、直ちに東南の方に向ひ鐵荊の支配地を差して出發せんと、心は旣に定まりたるも、玆に一つの困難は魔雲坐王が一同の是より先に進むことを許さゞる一事なり。

王の領地を旅行するに王の許しを得ずに立たば、直に追掛られて捕へられ。王の怒に如何なる處分を受けんやも測られず、僅なる同勢を以て亞弗利加國中の最も恐る可き、魔雲坐王に抵抗することゝ思ひも寄らねば、夫人を初め平洲、茂林は幾度と無く王の許しを得んとすれど、王は深く夫人を見染たる爲なる可く更に其許しを與へず、此後は一日置に必ず此方の小屋へ寄ね來り、二時間三時間ほど、夫人の顏に見惚れては歸り行くのみ、之を何よりの樂みとするに似たり。

一同は佛國を出發する初めに於て、途中樣々の困難に逢ふ可きは豫期せし所にして、毒蛇猛獸に苦しめらるゝは勿論、或は恐る可き熱病に罹り、或は食物飮料の缺乏する爲め命を捨る場合も有る可きは、充分覺悟の上なれど、野蠻國王が芽蘭夫人を見染たる爲め、一行を引留る事ある可しとは實に思ひも寄らざりし、此旅は素より途中に日を費す可き旅に非ず、芽蘭男爵猶ほ活て旅行しつゝ有らば、此行の一日後るゝは一日男爵に遠ざかるなり、或は男爵孰れかに捕はれて有ら

ば、一日の相違にて救ふ可からざるに至らんも知れず、夫とも病に罹り一日の介抱如何にて、生死の分るゝ有樣なるやも亦未だ計られず、實に途中の一日は後に至りては百日にも百年にも當るほど大切なれば、一同心落着く能はず、何とか此の難所を切抜けずばと頭をのみ惱すに、斯る中にも兵士人夫等が王宮の樣子を窺き來り、聞來りて注進する所に由れば、王は何故か頻りに武器を修しなどして、戰爭の準備を爲しつゝ有りと云ひ、又今までとは樣子代り後宮に在る數百の妻を愛する樣子なく、少しの事にも腹立てゝ女共にまで荒々しく當ること、餘ほど氣に染まぬ事あるに似たりなど云ふ、是れ多分は戀に心の燥立ちて何事も氣に障るが爲なる可く、事に由りては軍を起し、此一同を攻亡し暴力を以て芽蘭夫人を我物にせん心なるやも知れず、斯る事は此の亞國內地には有がちの事なればと、一同は益々途方に暮れ、唯だ評議をのみ費し居たるに、禍は常に思はざる邊より出るとかや、實に一同の爲め取返し難き程の禍ひ、彼の王より起らずして却て一行の中に在る、帆浦女より起り來れり。茲に先づ帆浦女が自ら手帳に書附けたる、秘密の一節より記し行ん、其文左の如し。

「我が心を誰に語らん、誰にも語り難き秘密なれば手帳に寫して幾度も讀返し、考へ直すに如くは無し、手帳は實に斯く記す此の身の相談相手なり、他日人に偸み讀るゝ憂ひは有れど、生涯肌身を離さねば安心なり、不幸にして身死する場合には人知れず燒き捨てん、爾なり、誰れに恥ぢ誰に憚る事や有る、思ふ儘を存分に書附けて見ん、他日若し此事思ふ通りに行き、彼人を夫とし、寡物語にも此手帳を讀みて聞かさば、彼人に我心の底も分り如何ほどい睦じう成り行かん、手帳ほど嬉しく頼もしき物は莫し。

魔雲坐王は今日も一同の許へ尋ね來しが、是れ此身の顏を餘所ながらに眺めんとの心なる事明かなり、平洲も茂林も寺森も、王は芽蘭夫人の顏をのみ眺むるとて心配すれど、誠に目の見えぬ人達なり、王は野蠻國の王なれど心の優しさは文明國の紳士にも優る所あり、打附けに思ふ女の顏を眺むる無作法はせで、心に在らぬ夫人の顏を眺むると見せ掛け、實は此身の顏をのみ偸み視んと爲せる事は確に此身の胸に應あり、王の目は夫人に注ぎ、王の心は此身に注げり、斯く有の儘の秘密を記して芽蘭夫人と戀の敵となるは心に濟まねど、王と此身の間には早や以

心傳心の警へにて心と心を讀み合ひたり、斯る事は愛の無き他人の目には見えず。

斯くも分りし者を何時まで此まゝに捨置かる可き、王は此身を愛する爲め一行を引留めて出發せしめず、是れ此身が一行に難儀を掛る如き者なれば、此身自ら身を王に捧げ、一行を出發せしむるが女の道なり、斯くすれば王も喜び、一行も無事に茅蘭男爵の行衞を探り得ん。然り明日とも云はず此身を王に捧ぐ可し、身を捧げて人の爲を計るは仁者の所爲と聞けば、後々まで此身の獻身的勇氣とやらを褒立る人も有らん、ナニ爾まで褒られては却て痛み入る譯なり、今此身を王に捧ぐるは爾ほど獻身の勇氣には非ず、玆に記すも辛けれど、實は一、王が此の身を愛するほど此身も王を、イヤ〳〵此あとは記すまじ、幾等他人の見ぬ手帳とは云へ餘り打明け過るは端下無し。去ればとて獻身的勇氣などゝ、身に餘る名譽を得るも心苦し、爾なり止を得ず記し置かん、全く此身も王を愛し染めたるなり、王に身を捧ぐるは唯だ我が愛する紳士を良人に定むる迄の事なり、文明の國人が此身を褒め過ぎぬ事こそ願はしけれ。

八十一

「此身が王を愛するが無理か、百万の黒人に戴かれ容易には顔さへ見せぬ彼の王が、此身の爲めに毎日の如く王宮を出で、根好く通ひ來る親切を察すれば、此身女として如何で其愛に感ぜさる可き。

好し、明日とも云はず王宮に到り我心を說明して王に安心せしむる事とせん、此後三年なり五年なり王宮に留まる中には斯る土地へも必ず宣教師の來る事と成る可ければ、其時宣教師の目前にて正式に婚禮する事を得ん、此婚禮は唯だ愛の爲のみに非ず女の天職を盡すなり、幾月を經ぬうちに王の愛は此身一人に集り、後宮數百の女どもを解放する事ともならん、王若し解放せずとも此身必ず王を說き解放せしめん、亞國の絕域に一夫一婦の制を定め、先づ最も有力なる魔雲坐王を其制に從はしめなば此身の手柄、昔よりの女丈夫に劣る可しと思はれず、其時こそは如何ほど人に賞らるゝも辭するに及ばず、斯も明白なる女の道を踏むに、此身何の躊躇

ふ事やは有る、イザ行かん。

此身今までは平洲、茂林、寺森、三人より一様に愛せられ、殊に三人の容貌と云ひ、人柄と云ひ別に際立たる優劣無き爲め、孰れの愛に酬いんかと判斷に迷ひたれど、王は飛放れて三人に異れる故、最早や迷ふ所なしア、可愛の王や、王を愛する今の心に比べ見れば、此身が三人の間に迷ひしは愛と云ふ心には非ず、王と後々を共に暮す事を思へば今より既に解せざりき、王に逢ひて初めて知れり、愛は一種の惑ひなりしのみ、此身は實に愛の何たるを者に非ず、愛は一人に集中まる者なり、彼れ是れの間に迷ふ如き心嬉しき者なり迷ひて苦む者に非ず、王と後々を共に暮す事を思へば今より既に後悔などする事の有ふ筈なし、此上の思案に及ばじ。

唯だ困るは言語なり、王直接に此身の言葉を解し得べきや、ア、是れには工風あり此身は亞拉比亞語を知れり、王も曾て象牙商アブデス、サメートより習ひしとて多少の亞拉比亞語を知る、殊に此身は旅慣れて言語の才に優れし丈けに、此地方の言葉さへ幾分か使ひ得ぬには非ず

夫れ是れを取交へなば王と話の出來ぬ事も有るまじ、殊に口よりは以心傳心にて互ひに心を讀み得る程深き愛を起したれば、言語の充分に通ぜぬも左までの心配は無し、別に通辯人有りとは云へ今は通辯が却て邪魔となる場合あり、誰をも連れず誰にも知らさず、唯だ一人にて王宮へ忍び行かん、然り幾度讀直し考へ直すも、以上記せし此の身の分別には少しも過ち無きを認む。」

帆浦女は斯る事を書記し全く分別を定めしと見え、其夜の八時過ぎ、一同が銘々の室に退きしを見すまし、最と美々しく着飾りて化粧せし顏を濃き覆面に包み隱し、小屋より出て王宮に忍び行きしは、愚なる心の過ち、嘆かはしき限りなれど、又如何ともせん方なし。頓て王宮の女關さも云ふ可き所に至り、白人の女が秘密に目通りを願ひ度き旨傳ひ呉れよと言込むに、王は白人の女と聞き定めし芽蘭夫人の來りしと思ひしなる可し、暫しがほご接見の用意に、宮中忙しき樣子なりしが、良ありて王の從者、恭々しく案內したり。帆浦女は充分思案を定めての上なれば今更ら惑ふ所も無く、鐵火箸の如き手足を折曲げ、折曲げ歩を運び、從者が弦なりと指す室に到り、

先づ従者を退けて中に入り、戸を閉ぢて又一歩進めば王は戀人を待つ如き有樣に幾分の威儀を存し、斜に異樣なる臺に身を投掛け、其上には白人の女を座せしむ可き腰掛臺を置き、目を細くして待ち居たるが、六尺に近き帆浦女の姿を見て是はと打驚き、身を引起さんとする間も有らせず帆浦女は、この美しき顔見られよと云ふ樣にて覆面を排除け、其まゝ骨々しき身をへし折つて王の前なる臺に倚りたり。此土地の習ひとして肥たる女を美人とし、後宮數百の女をば唯だ肥太らしめんとのみ苦心せる王が事なれば、帆浦女の姿は怪物よりも猶ほ恐ろしく見えしなる可し、驚きて見開く眼、瞬間の力をさへ失ひしかと思はるゝ許りなるに、女は爾る事に頓着なく、最と不束なる亞拉比亞語に此土地の片言を取交へ一心不亂に何事をか述初めしは、定めし手帳に記したる心の中を其まゝ繰返す者なるべし。

八十二

是より魔雲坐王と帆浦女との間に在りし事、一々は知り難ければ唯だ後にて老兵名澤、其他の

通辯が聞探りたる所と、帆浦女自らの白狀せし所を參酌して記すのみ。

帆浦女にして、若し王の且驚き且怒る顏色に心附かば、直に言葉を改め詫でも言ひて立歸る可きに、王が我振舞に立腹す可しなどさは思ひも寄らず、只全く我身に心醉せりとのみ思込みての事なれば、帆浦女は喃々と說き、喋々と語るに、其一語其一句に王は益々呆れ、制し止むる事をも爲さず、制せず止めざるは是れ我言葉に感ずるなりと、帆浦女は愈取進んで愈々深入し果は釘抜の如き手を延べ王の身に纏らんとまでするに、王は堪忍の緒も切れしと見え、立上り樣帆浦女を推退けつゝ、兩手を拍鳴らして從者を呼べり。帆浦女は流石野蠻の國だけに、王が女を愛するにも推退け置きて手を拍つなど異樣な儀式も有るもの哉、扨は魯人が取引の約定極りしとき、手を拍つにも均しからんかと眞逆に斯までには思はねど、何の意なるを解しかね、王の顏をのみ眺め居るに、王は拍手に應じて入來る從者に向ひ、後宮の女どもを悉く弦へ呼出せと命じたり。帆浦女は「女」と云へる言葉丈を聞取り得、或は「是なる白き女を宮中に留むる用意せよ」と命ぜしにやなど考へ、早や吾事の成就せし如く思ふ間も無く、王の妻、凡そ二百人ほどゾロ〳〵と入

来り、王と帆浦女とを圍て立ち、一同最と不興氣に帆浦女の顔を眺め初めぬ。

此女等の樣子には何と無く不穩の所見ゆるにぞ、弦に到りては帆浦女も幾分の恐れを催し、如何に成行にやと心私に危むうち、王は聲高く一同に向ひ、帆浦女を指示して「妻等よ、此猾せた る竿の如き女、我に向ひ妻に成り度しと言込み、後宮に居る汝等を悉く追拂ひて獨り我が寵を專らにせんと言出せり、我れ斯る狂女に返事する心なし、此女を弦にて汝等に引渡さん、汝等存分に處分せよ」と言放てり。左無きだに帆浦女が王と差向ひに此室に居たるを見て、既に嫉妬の念を催したる一同なれば、此言渡しを聞くよりも口々に帆浦女を罵り初め、四方一面より徐々と近き來れり、王は此樣に見向もせず、我が用事は之にて濟みたりと云ふ如く此室より退けば、跡は唯だ二百人近き黑女が、帆浦女一人を目當に嫉妬の怨を返さんとする復讐の戰場なり「何とや、此怪物の如き女が我々一同を追拂はんとな」と一同問ひ傳へ、言傳ふると見る間に、其中の尤も勇氣ある者達、衆を推分けて前面に進み出で、拳を振上げ齒を剝きて、怨めしげに迫り來れば、後より〳〵其例に見習ひて推寄せ來り、頓ては衆口一聲に、帆浦女の身に唾する事雨より繁し。

聞きし事だに無き斯かる侮辱に遭ふ帆浦女は、我が過ちより招く禍いなるを忘れて、烈火の如く怒り、叱り立て罵り立つれど其詮無ければ、兩手を振りて片端より近寄る者を撥り倒さんとするに、鬼神の力ありとも一人の身を以て如何で二百人に敵せんや、撥るに從ひ黑女の怒りは益々募り、或は帆浦女の足を取り、或は手を取り「床の上に轉ばして踏殺せ」との恐ろしき言葉さへ口より出で初めたり。帆浦女は此言葉を解し得ず、縱し解するとも衆口囂々として聞きも分ねど何樣逃るより外無き場合と爲りたれば、長き足にて蝗の跳る如く跳廻り、捕まる者は振拂ひ、前に塞がる低きは飛越え、高きは蹴倒すなど、獅子奮迅に駈廻るに、唯幸ひにして敵は黑女中の背低く、肥太りしを選集めたる者にして、一進一退思ふ程敏快ならず、帆浦女は歐羅巴の女にも珍しきほど頑丈の質にして、全身皆筋と云ふ有樣なれば、右に跳ね左に飛び、容易には手込にならず、其中に帆浦女の服は所々裂き取れて彼等の手に殘り、果は肌も過半は現こと爲り、其現はなる部分には彼等の抓る痕、引掻く痕、隙間も無く血の流れ出る所も多し、去れど帆浦女は心の激動に其痛きをも覺ゑず、一歩たりとも戸口の方を指し悶掻きて寄らんとするに、何時かは衣服全く

千切り取られ赤條々たる丸裸とは爲り、汗に塗れて逃惑ふ樣、氣の毒なる事言ふばかり無し。

八十三

悉く衣類を裂かれて赤裸體と爲りし帆浦女の身は、汗と脂と流るゝ血にて殆ど鰻の如くに辷り群り掛る黒女等の手にも押へ得難きに至りたれば、右に抜け左に滑り漸く戸外に轉び出でたり。弦まで來ては最早や彼女が大得意の戰場にして、唯其の世界第一の健脚を以て逃さへすれば好き譯なれは、帆浦女は一散に走り出せり、後より二百人ほど囂々と追來るとは云へ、背低く丸く〻と肥太りし黒女の足にて、爭でか帆浦女に及ぶ可き。

身は疲れ果たれど必死の場合には疲れをも覺えず、曾て猿軍に襲はれし砌は、身を金巾に卷隱して逃たれど今は彌る仕度さへする暇無く、殊には夜目にて見る人の無きを幸ひ、傍目も振らず一行の小屋の外まで逃着きたり。

弦は過日來、魔雲坐王の樣子異樣なるを探り知り、益々夜を警しめて戸締りなど嚴重にし、帆

浦女の忍び出しとも氣附かず、外より入得ざる樣に爲して有れば、彼女は背後より猶ほガヤ〳〵と追來る黒女等の聲を聞き、前は入口の戸に塞がれ板挟と爲りて悶掻くに、中には騒々しき聲を聞附け、老兵名澤が番兵と共に戸を開き、鰻の如き有樣なる帆浦女を中に入れたり。彼の女は恐ろしさにや面目無さにや、名澤に一言の譯も云はず、轉がる如く我室に入り、其儘夜の明るまで出も來らざりしは無理も無き事と云ふ可し。

去れど名澤は暫くにして此所へ追來りし、數多の黒女より事の次第を聞き何も彼も知得たれば痛く打驚きて先づ黒女等を宥め歸しつ、後にて次第を茂林と平洲とに具申するに、平洲が膓を抱へて笑ふに引返へ、茂林は拳を握りて立腹し「平洲君、我々一行の婦人が斯までの侮辱に逢ふこは實に情無いでは無いか」「仕方が無い當人の自業自得だから」「イヤサ、其當人の愚かさが情無いと云ふのだ、帆浦女は仲々判斷も能い女で、婦人には珍しい程の氣質だのに、情無い事には自分の身に關する事柄と云へば直に判斷を濁ちて、氣違ひ染た事ばかり仕出來すよ、僕は最う我慢が出來ぬ」「出來ぬとて、王宮へ怒つて行くのか」「何で王宮へ怒つて行れる者か、王の方に少し

も悪い所は無い、全く帆浦女の不心得だから充分に帆浦女を處分するのサ」「イヤ今更處分した所が取返しは附かぬ、慾いに騒ぎ立てゝは故々恥を晒す様な者だから、仕方が無い此の儘秘密に伏せて仕舞ふサ」と云ひ、平洲は直に老兵名澤に向ひ「此事を成る可く他言せぬ様にせよ」と云ひて退くるに、茂林の心は猶治まらず「勿論僕とても強て帆浦女の恥を吹聴する心は無いが、君先づ此失策の爲に我々一行に蒙る可き損害を考へ給へ」「別に損害と云ふ程の者は有るまい」「ナニサ、今まで魔雲坐王が芽蘭夫人に見惚れて居るのは爭はれぬ所だが、唯だ幸ひに王は白人を尊ひ、殆ど天女を拝む様に芽蘭夫人を拝んで居たのだ、之は王ばかりで無い、本來芽蘭夫人の容貌は猛獣をも懐けるほど氣高く生れ附て居るから、到る處の黒人に慕はれ尊はれる、けれども其の氣高い丈に、誰とて芽蘭夫人を妻にしやうなどゝ云ふ了見は起さず、流石に魔雲坐王すら唯だ無言で夫人を見る許りでは無いか、到底人間の及び得ぬ天女の様に思て居るのだ、所を帆浦女がアノ様な事を仕た爲に、王の眼中に我々白人一般の威光が何れほど減たかも知れぬ、扨は白人の女でも、女に異りは無く隨分黒人の妻と爲るのを望む者と見える、シテ見れば那の天女の様な夫人

とても己の妻に成るだらうと斯う思ふは必然だ、今ですら吾々は魔雲坐王に引留められ、前進する事が出來無くて困て居るのに、此上に吾々の威光が落ち、其上に芽蘭夫人を王の妻に所望せられる様な事にでも成れば如何とも仕方が有るまい、是でも損害で無いと云ふのか、僕は今まで白人の威光を頼み、王が幾等夫人を愛したとて恐れる所は無いと心の底に幾分の安心を蓄へて居たが、今は其安心も消えて仕舞た、見給へ遠からず王は芽蘭夫人に向ひて必ず難題を言込む事に成るからよ、ヱ君、夫は全く帆浦女の過ちから出る結果だよ」と最と悔しげに說立るに、平洲も大に感心し「成るほど爾だ、爾う云ふ所まで僕は氣が附なんだ、併し今更ら取返しは附かぬから唯だ明朝帆浦女に向ひ、是より以後、一應吾々へ相談して、許しを得た上で無ければ決して自分の意を行はぬと云ふ約束を結ばせやう」と云ひ是にて相談決したれば、扨て翌朝と爲り、彼女を呼出し右の旨を言渡すに帆浦女とても我が肌の、爪の痕だらけと爲りしを見ては聊か後悔せざる能はず、猶ほ「イヤ此間違ひは全く私が此土地の言葉を充分に使ひ得なんだ爲め、王に意が通じ無つたから起たのです、言葉が能く通じさへすれば何の間違ひも無く、王は私の掌の中で丸め

られる様に成る所でした」と、罪を全く言葉の不充分に歸したれども、何さま面目無き次第なれば、毎もの如く強情を張る能はず「爾後は日々の常務の外、決して相談なしには我意を通さず」と確なる約束を結び是にて一段の治りは附きたるも、扨治まらぬは、茂林の氣遣ひたる夫人の身の上にて、此又翌日の朝に及び、果して王より堂々たる使ひを以て、芽蘭夫人へ向け「婚して我が妻に成れ」との儀を言込み來れり。

八十四

全く茂林の恐れたる通りなり、帆浦女の過ちにて王の心に白人を尊敬する念慮を薄くせしめたるが爲に、王は大膽にも芽蘭夫人を妻にせんと婚姻の意を言込むに至りしなり。王が夫人を天女の如くに思ひ唯だ見惚るゝに止まりし間は、猶ほ逃る可き道も有りしなれ、妻にせんと明さまに言出でし今と爲りては全く其道絶え果たり。

魔雲坐王の領内にて魔雲坐王の望みに負くは到底出來得る所に非ず、強て負かんとせば唯だ殺

さるゝ迄の事なり。去れば一同は此申込に口さへも聞き得ぬほど驚きしが、醫師寺森は漸くに思案を定め「何うも仕方が無い、能く相談して後から返事を仕ますと云つて使を返す一方だ」平洲は猶ほ考へつゝ「イヤ其樣な一寸逃れを言たさて駄目だ、相談の上返事すると云へば、王は此後毎日の如く返事を催促に來る、爾なれば事益々困難だ」「でも故なく斷われば忽ち王の怒りに觸れる、其時には王に殺される一方だが、夫とも彼れの怒らぬ樣旨く斷る工風が有るのか」此間には平洲も答ふる事能はず「サア其工風が無いから心配するのだ」と云ひ空く嘆息の聲を洩すに、今まで無言の儘考へ居し茂林は、何か思案の浮びしにや突と身を起して「弦が我々の生死の場合だ、到底無事には逃れ得ぬ者と覺悟し、王に殺れる積で斷らねばならぬ、唯だ王は野蠻人に似合ず多少の道理は分るから、成る可く道理らしく言廻して斷はれば、萬に一つ助かるかも知れぬ、夫とも君等に萬全の策が有れば兎も角だが」平洲、寺森口を揃へて「素より僕等に其樣な策は無い」「無いならば、弦で王に殺されると云ふ最後の決心を定め、爾して僕に任せ給へ、萬に一つ助かるも知れぬから」と云ふ實に斯く最後の決心を定めねば成らぬ場合なり。平洲は直ちに同意し

「無論此の言込に應ずる事は出來ぬから、殺される者と覺悟する一方サ、爾して萬に一つも助かる見込の附策が有れば最上だ、其通り遣り給へ、全く君に任せる」と云ふ、言葉と云ひ樣子と云ひ眞に最後の決心を定めたる如くなれば、平洲程には猛からざる寺森醫師は一方ならず打驚き「先ア待ち給へ、死ぬる決心は何時でも出來る、僕が夫人に相談して來るから」と云ひ、顏色變へて夫人の許に行き仔細を語るに、夫人は少しも惑ふ所なく「私は最う何も彼も平洲、茂林及び貴方とお三人の相談に任せます、自分では何の思案も出ませんから、お三人の評議の爲め何の樣になり行かうと少しも恨む所は有りません」是れ明かに、場合に寄りては死するも厭はずとの意を含める者なれば、寺森は其の意を察し、夫人さへ斯の如きに何ぞ我れ獨り卑怯の心を起す可けんと、痛く自ら勵まして、見違へるほどに落着き、平洲、茂林の許に歸りて「遣り給へ、夫人は君方の爲すが儘に任せるとよ、僕とても同樣だ、何も彼も兩君のするに任せる」是に於て茂林は外務當局の大臣と爲り、非常なる外交談判の任に當らんとする人の如く、威儀を正して使者の前に出るは、如何なる返事をせん意にやと、平洲も寺森も息を凝すに、茂林は顏に幾分の怒を示し

「王が此申込みは吾々を友と見做しての事か、或は敵と見做しての事か、其意を聞かされば返事する能はず、歸りて此の旨を王に傳へよ」と言ひ放てり。

使者は意を領して退りしが、暫くにして又來り「王は無論白人を友と見做してなり、王より婚禮を言込まるゝは白人の名譽に非ずや、友と思へばこそ此名譽を與ふるなれ」と答へたり。ア、王、此言込を以て白人の名譽と爲る如くに思ひ、恩に被せる事の如く心得るにや、斯ては之を斷るに於て王の怒りは益々甚だしかる可しと、平洲も寺森も危むに茂林は又使者に向ひ「怪しからぬ王の言葉かな、王には數百人の妻あるに非らずや、數百人の妻の中へ吾等の妹をも加へんと云ふは、吾等の妹を辱しむる者なり、既に數百人の所夫たる王が更に吾等の妹にまで所夫たり得る筈は無し」と言返しぬ。

使ひは再び退きしが又も何事をか言來るならんと、凡そ一時間ほど待つも又來る樣子無く、却て王宮の方に當り頻に囂々たる人聲の聞ゆるにぞ、或は彼王、氣早くも早や此方を攻亡さん積りにはあらざるかと、直ちに老兵名澤をして探らしむるに、名澤は頓て復命し「王は臣下の無妻の

男達を呼集め、後宮の女を悉く臣下の妻として分ち與へると云ふ事で、アノ囂々聞えるのは、寄り集つた臣下等が喜んで叫ぶ聲です」此復命には驚かぬ事能はず。扨は彼の王、後宮に在る「が妻を悉く臣下に與へ、其身全く無妻と爲れり、是れならば白人の妹を妻とするに故障なからん」と言來たり退引させぬ心と見ゆ、王が數百人の妻に代へてまでも、一人の芽蘭夫人を得んとする其の熱心は今までの擧動に照らし怪しむに足らざれど、一同が爲には困難に困難を重ぬる者なれば、三人顏と顏見合せて一語も無きに、此所へ又走せ來る名澤の手下は更に驚きたる樣子にて「イヤ王が臣下へ吳れるのは先代の王から受嗣だ妻だけです、自分の代に集めた妻は、自分の存命中に他人の妻としては王の威光に障るとの事で、悉く打首にすると云ひ既に首打役が、大勢其用意を初めて居ます、首を打たれる妻の數が百二十餘人だ相です」と云ふ、アヽ是ほどの慘酷が又と有る可き、自分の妻を他人の妻にす可からずとは、無理も無けれど百廿餘人を一度に殺すとは、是れ見許して置く可きか、畢竟是等も茂林の掛引より起りし事なれば實に捨て置かれぬ次第なり、アヽ困難は果して益々困難とは成り來れり。

八十五

百二十名の妻を殺し、殘るを臣下に與へんとす、世に是ほどの無慘や有る、是も畢竟魔雲坐王が、芽蘭夫人の望みと信じ、夫人を我妻に迎へんとの心より出る者なれば、其所爲實は此方の一行より出るに同じ、殺す者は王なれど、王をして其の殺す意を發せしめたるは此一行なり。斯る事若し芽蘭夫人の耳に入らば、夫人は事の餘り慘酷にして餘り罪深きに驚き、牛涯忘れ得ぬほどの悲みに沈む可し、何事ありとも一行は此死刑を止めねばならぬ、之を止むる唯だ魔雲坐王に逢ひ死刑を止めよと云ふ外なし、去ればとて魔雲坐王に斯る事を言込まば彼れ將た何とか云はん、必ずや其の一酷なる心を以て「然らば後宮の女を殺し盡さずとも、白人の妹は我が妻と成り得るか」と問返す事必定なり、斯く問はれては返す可き言葉無し、百二十名の命を救はんとせば、芽蘭夫人を王の妻とする外は無きなり、爾は云へ王をして愈々後宮の女共を殺さしむれば、芽蘭夫人の身は最早や助る可き道有らず、王必ず「斯く白女の望み通り後宮を悉く亡せしからには、

最早や白女が我妻と爲り得さる故障無からん」と云出でん、其時に一行は何の辭を以て答ふるを得んや。

元を糺せば茂林が、後宮あるが爲に妹を妻に呈する能はずと言拔けしより起りし者なれど、實に其時は王が數百の妻を失ひてまで、一人の白女を得ん心を起す可しとは思ひも寄らざりしなり孰れも茂林の返答を妙と思ひ、是にて全く王は斷念し得せしむる者とのみ見込みたるに、王の熱心一同の思ひしより強かりしが運の盡なり。今と爲りて何と悔むも詮方なし、是ほど迄の熱心ならば此後如何なる難題を持掛るとも遂に王をして芽蘭夫人を思ひ諦らめしむる事能はじ、ア、何うありても夫人を王に奪はる、外無きか。

斯く思ひては平洲も茂林も、最早や全く一行の絕滅る時來たりしかと絕望する事限り無く、唯だ當惑に顏見合すのみなりしが、頓て二人は言合せし如く一齊に跳起きつ「ヱヱ、何時まで考へて居ても仕方が無い」と同音に叫びしが二人の所存全く一致せしにや、共々に短銃を取出し急は しく其彈丸を檢むるにぞ、寺森醫師は驚きて「君方は、自、自、自殺の氣か、夫なれば僕も一緒

だ」と顏を土より青くして立ち上れり、茂林は叱咤して「ナニ勇士は自殺など云ふ、卑怯な手段は取らぬ」と云ひ、更らに老兵名澤を呼び、至急に兵士中より、二十名だけ最屈強の者を選び來たれと命じたり。名澤の退ぞきたる後にて平洲は嘆息し「斯う云ふ中にも王が女どもの死刑に着手しては仕方が無い、ヱ、氣の迫れる事だワイ」と身を掻むしる如くに云へば、漸やく二人の意を斯く有んと推量し得し如く思ふ、寺森醫師は益々恐ろしげに「君方、王を殺す積だな、其樣な短氣は暫く待ち給へ、此土地で王を殺せば我々一同、土人の復讐事に、嬲殺しに遭て仕舞ふ、君君、短氣な事をする前に暫く待ち、猶ほ篤と考へ給へ」と只管に氣を揉むも理わりなり。斯る所へ老兵名澤は已の外に二十名の最も強き者を選び之に銃を持たせ、スワと云へば直ちに戰ひ得る用意を揃へて出で來れり。彼れも寺森と同じく二人が王を殺す場合に成たりと思へりと見ゆ、茂林は寺森を顧み「何にも云はずに僕等に隨て來給へ、最う今と爲ては運を天に任せる一方だ」と云ひ共儘平洲と共に王宮の方を指て走り出れば、寺森も詮方なく共に走り、名澤の選びし廿の兵を從へて進たり。

忽ち王宮に達すれば魔雲坐王は百廿の妻を殺して、心に何の悲しみも無か笑顔にて出で來り「ア、御身達は終に我王宮へ入來る事と爲れり、今まで我より訪ふのみにて御身等の絶て來らぬには我卿か心苦しく思ひたり、今日は我言葉を疑ひ後宮の處分を見屆けに來られしな」と云ひ滿足の色を示せり。茂林は遽だしく「我等は妹より御身への言傳を受け來れり、御身後宮の女を臣下に贈り、其中自個の集めたる百廿名を死刑に處すと聞きたるが事實にや」王「勿論なり、斯までの我が心は定めし白女にも通じ、白女も喜べるならん、我は今まで一時に女百廿人を死刑に處した經驗無し、隣國の王達も之を聞かば益々此國を恐るゝならん」と王は非常なる手柄の如くに誇らんとす。茂「其死刑は既に行ひしや」王「否今より着手する筈にて、死刑執行人其用意を急きつゝ有り」左すれば未だ一人も殺されはせぬと見ゆ、茂林も平洲も斯と聞き、少し落着きし樣子なるは何の意にや、王は更に一同を次の間に作ひ入りしが、弦には食事の用意かとも疑はるゝ許りに、臺の上へ木を以て造りたる皿の如き者を幾十と無く並べて有り、王は此皿を指し「此數を算へられよ、確に百廿二個あり、此皿へ一々我が妻の首を盛り今夜引出物として御身の妹に贈り、我に最早や一人の妻だも無き事を承知せしむる積なり」と云ふ、斯も恐しき言葉を誰とて虛心平意に聞く事を得んや。

八十六

百餘の皿に女の生首一個づゝを盛り、之を引出物に贈らんとは言はう樣なき慘酷なれど、我が妻百數十人を殺してまで一人の芽蘭夫人を迎へんとする魔雲坐王の熱心は驚く可し。苟くも夫人の爲と爲らば此王、如何なる難題をも辭せざるならん。

王は猶ほも皿を指し其數を檢めしめんとするにぞ、三人殆ど身震を催せしが、茂林は自ら外交の離局に當らんと期したる丈に、先づ口を開き「イヤ吾等の妹は、王が百餘の妻を殺すを好まず共命を助ける樣、王に賴み哭れこ云ひたり」王は其身の親切を美人が有難くは感じぬにやと、痛く失望の樣子にて「では我に百餘の妻ありとも差支へ無しと云ふか、汗は前言に負くに非ずや、或は我妻たるを斷らん心にや」と血相替て言出るは益々以て其情の切なるを知る可く、然りこ云

はば彼れが怒は殆ど留度も無き程なる可し。「否、吾等の妹は王が後宮をだに廢すれば、可なりミ云へり、百餘の女生て存ふとも、最早や王の妻に非ずと云ふ事分らば滿足す可し」王は漸く心解けて喜びの色溢るゝ許りと爲り「何とや、妹御が眞に爾う云はれしか、吾に妻さへ無くならばと」「然り爾云ひたり、故に百餘の女共の命は助け遣られよ」「助けんにも助くる道無し、一たび王の妻たりし者は、其王の生存中決して臣下の手に觸れしめざるが此國の習ひなり、活して置きては是非とも臣下の手に觸れん、今殺す一方なり」「臣下の手には渡されずとも、吾等は御身の臣下に非ず吾等に渡すは不可無からん」王は忽ち合點の行し如く「ア、御身等が妻にするや、然り然り、命を助けて御身等の妻とし贈らん、百餘人の黑き妻を送り我は一人の白き妻を貰ふ、誠に双方滿足なる交易なり」と云ふ、其考への淺果なるは殆ど笑ふに堪へたれど、野蠻人の智は是位の者なれば、其淺果なる丈け却て相手には爲し易しと、茂林は寧ろ安心し「否、吾等の妻こそは非ず、吾等の妹が請受くるなり、妹の物とするなり」王は少しく怪みて「何の爲めにー」「妹が奴隷として侍婢に使役せんが爲なり」王は手を拍ち「ア、合點行けり吾が手にて一思ひに殺し

ては興無き故、御身の妹が奴隷として日々苦痛を與へ、一人二人づゝ嬲殺しにする積なる可し、我れは喜びて承知せん、今よりして我妻百餘人は御身の妹たる彼の白女の奴隷なり。命を助けて引渡す事にせん」と云ひ王は直に從者を呼び、死刑の執行を見合よと命じたり。

是にて先づ憐む可き百餘人の命だけは救ひ得たるも、是れが爲に芽蘭夫人を王の妻とする事は到底逃るゝ道無きが如くなるに到れり。寺森醫師は獨り氣を揉み或は平洲の脊を突き、或は茂林の手を引きて「君方は芽蘭夫人を犧牲にする積か」など小聲に言ひしが、王も最早や全く白女を妻とする約束の爲りし如く思ひ」斬う極れば成る丈け早く婚禮の日を取極ん、白女は幾日より我許に來らんとするや」茂林は心に默算の有る事と見え、全くの平氣にて「吾等の一存にて決し難し吾等には父あるなり、吾等の父は白女の父なり、婚禮の日は父の許を得て取極むる外あらず」父とは何者を指せるにや、實に是れ意外千萬の言葉なれば、魔雲坐王は驚くと共に又怒れる顏色を現はし「父とな、父ごな、父は御身等と共に此地へは來りて在ざるに非ずや、父は全く余を知らぬ人なり、又余も知らぬ人なり、知らぬ余に向ひ何とて一女を與れる事を承諾せん」茂林は猶

ほ平氣にて「或は然らん、然る時に此婚禮は破談と爲る迄なり、此國にも娘の婚禮には父の承諾を要する習慣の土地あらん、吾等の國にては女たる者、父の承諾を經ざれば決して婚禮するを得ず、吾等は深く自國の習慣を重ずる者なれば、何の事情ありとも父の許を得ずして妹に婚禮せしむる能ず」と興の醒むる如き言分に、魔雲坐は黑き顏の紫色と爲る迄に怒りしも、心中には夫人に對する戀々の情滿ちてあれば漸くに自ら制し、叱り附る如き口調にて「吾れ、如何にして御身の父に承諾を乞得んや、御身等の父は幾千里隔たりたる、御身等の鄕國に居るに非ずや」「否、否、幾千里隔たりて有らば吾等決して御身に父の許しを得よなどとは云はず、吾等の父は吾等より先に鄕國を出で、弦より程遠からぬ所に在り、吾等實は父の許を尋ね行く者なり、多分は是より南方の土地に、捕虜と爲りて居る事と思はる」と云ふ、寺森は漸く合點行けり。扨は茂林禍ひを利用して幸ひと爲し、夫人の所夫、芽崗男爵を夫人の父と言做して此王に尋しめん積にや、王は半信半疑の有樣にて、茂林の心中を讀破らんとする如く、鋭く顏を眺むれど、茂林は顏は飽まで誠しやかに、飽迄も眞面目にて筋一本すらも動かず、一行の運命殆ど唯だ茂林の顏の

動き方一つに繋がれる場合と云ふべし。

八十七

夫人の所夫芽崗男爵をば夫人の父なりと言做して、魔雲坐王に其行衛を探さしめんとする事、實に禍ひを轉じて幸ひと爲す策なれど、果して魔雲坐が之を信ずるや如何に。

王は暫しがほど茂林の顏を見詰めたれど、嘘なるか誠なるかを讀難ねし如く、更に言葉を鋭く「眞に白女の父が此國に在らば、御身等は何故早く其事を吾に告げざりしや、先に御身等は唯だ吾に逢ん爲に來りしと云ひ、今初めて父を尋ぬる爲なりと云ふは怪からずや」と窮所を狙ひて詰る樣、誠に侮どり難き敵なり、茂林は猶ほ平氣に「去ればこそ吾等は最初の日、直に御身へ秘密の面會を請ひしなれ、御身秘密の面會を許しながら、愈々吾等が打連れて來りし時、唯だ白女一人を通せと云ひ吾等一同を拒みしに非ずや、彼の秘密の面會は吾等此の父の事を語らんが爲なりき、吾等が隱せしに非ず御身自ら聞く道を塞ぎたるなり」尤もなる言開きに、王は又考へて「并

し其後吾れ幾度も御身等の許を訪ひしに、其席にて御身等が一言も父の事を言はざりしは合點行かず」「然り、吾等は一旦秘密の面會を斷られたる爲め、再び御身には父の事を話さじと決たるなり、今は話さざるを得ぬ場合と成し爲め詮方なく話すのみ。」

之にて一應の言開きは附きたり。魔雲坐王は更に考へ「夫にしても其父は如何にして此國より も南方へ行きたるや、孰れの道を通りたるや」「吾等と同じ道を通りたるなり、我等は鄉國より父の行衞を探りつゝ來りしに、此土地に來るまで孰れの所にても父の通りし事を突留め得たり、去れば吾等の來りし道は總べて父の來たりし路なり」「然らば父は余の國にも入込みたるや」「勿論なり」「左樣な筈無し、吾れは異國の人を見、其の人の談話を聞く事を好む、異國の人にして此の領地に入込む者、此朝廷へ來らぬは莫し」「吾等の父は御身がシュ氏を食留め、是より南へ行かしめざりし事を聞及びし爲め、其身も御身に遮らるゝを恐れ、此朝廷へは立寄らずして直に王弟鐵荊の支配地に入行きたるなり、鐵荊の支配地は玆より東南方に當らずや」「然らば吾が弟鐵荊が、御身等の父を見たる筈なり」「然り御身若し疑はゞ人を遣はして鐵荊に聞け、彼れ必ず白

人を見たりと答へん、其白人が吾等の父なるは無論なり」と云ひ、王が猶ほ呑込み難ぬるを見て「吾等の妹は父の寫眞を持てり、寫眞とは父の姿を其儘に寫したる繪なり、御身若し其繪を鐵荊に示し、此人が來りし事ありやと問はゞ、鐵荊必ず然りと答へん、夫も猶迂遠ゝ爲らば玆にて老兵名澤に問へ、彼れは御身の知るシュ氏と共に此地に來り、象牙商人サメートに雇はれ、象牙小屋の番を爲して居しに吾等の父の來るを見、一夜を其小屋にて明さしめたり、此緣故あるが爲め、吾等は名澤を案內者に雇ひしなり」王は直ちに名澤に向ひ、樣々に問試るに、固より眞正の事實なれば名澤の返事は少しも澁まず、王は之にて漸く誠なりと認め得し如く「然らば御身等は、南の方鐵荊の支配地までも入込む積なるか」「勿論、父は鐵荊の支配地を過ぎ、猶ほ南方へ行きし者と思はるゝ故、其場合には吾等も更に遠く南方まで行かねばならず」「白女も共に行かんとするか」「然り、未だ夫の無き女を一人、他人の中へ殘し置く事は吾等の國の習慣之を許さず」王は少く怒を帶び「御身等は去る氣儘勝手の旅行を、吾等が許す可しと思へるや、妹だけ此土地へ殘し置ならば兎に角なれど」と云ふ、茂林の折角巧なる計略も殆ど是にて破んとす。「敢て氣

儘勝手に非ず、最初より定たる通なり、何故に御身は此旅行を許さざるや」「白女一たび南に去れば決して此地へ歸り來らざればなり、御身等は南方より海を傳ひて歸り去ると云ひたるに非らずや」茂林は故と輕侮の調子を示して打笑ひ「御身は強大國の君主にも似合はぬ、意氣地無き事を言ふもの哉、多寡の知れたる一人の白女、孰れに逃行くとも引返さしめ得ざる理あらんや、若し引返さしめ得ずとならば、御身の權力は吾等の想ひしより弱き者なり」王は奮然として「余、及び鐵荊の支配地ならば、蟻一匹たりとも逃得ざらしむる事容易なれど、國境の外に越えては如何にして引返さしむるを得んや」是れ茂林が待設けたる所なり。「御身の如き強大なる王ならば眞逆の時に吾等の一行を鏖殺しに仕得る程の大兵を引連れて、吾等と共に來らば好きに非ずや、吾等が逃去らんとする場合には直ちに吾等を殺し、白女一人を連歸るも容易ならん」ア、茂林は斯る口實を以て、是より先の旅行をば王に護送せしめんと思へるなり。王に數多の兵を引連れしめ、實は一行を護衞する役目を勤めしめん計略なり。王は大に驚き「御身等は吾に國境の外までも同行せよと望むにや」「否、必ずしも望むに非らず、唯だ斯くせば白女を取逃がす恐れ無しと、

其手段を說き示す迄の事なり、採用するとせざるとは御身の隨意のみ、唯だ採用して吾等の父の許まで來らば、父も親しく御身の强きと兵の多きとに感心し、喜びて娘を御身の妻とせん、但し御身若し、吾等と共に南向する勇氣無く力無くば、强て南行するに及ばず、吾等は吾等の一行だけにて南行せん、吾等自ら世に恐る可き者有るを知らねば、御身も定めし旅行を恐れじと思ひし迄なり、同行する共せざるとも、後刻までに篤と思案して返事せられよ、吾等は吾小屋に歸りて其の返事を待ち、返事の有無に拘らず數日の內に出發せん」と云ひ早や暇乞の意を示すに、王は容易に決する能はず空しく思案の體なれば、茂林は猶ほ念を推し「去れど御身の妻百廿餘名は既に白女の奴隷に貰ひ受けたれば、御身再び隨意に之を處分する能はず。若し言を食まば白女は必ず御身を不實の人と恨むなる可し、兎に角今云ひし事の返事は今日中に聞かされよ」と云ひ、至難の外交談判を無事に纏め得し使臣の如く、威儀を正して王宮より退き出たり。魔霊坐王の返答は如何なる形にて來る可きにや。

八十八

一同は小屋に歸り暫く待つに、王より返辭を送り來れり。其言葉は「魔雲坐王全く白人の言葉を信ずるに付き、兵を率て彼の白女の父の居る所まで白人と同行す可し」と云ふに在り。有難や今までは此地に骨を埋めねば成らぬかと覺悟し居たる者が、茂林の掛引宜しきを得し爲に直ちに此地を出發し得るのみか、護衛として魔雲坐王、及び其兵士をまで引連れて行くを得る事とはなれり。爾は云へ是れよりして指行く先は如何の地にや、地圖も無く地名も無し、唯だ大地の盡果に黒き女人國ありなど云へる妄説を聞くのみなり。

是より日の暮に及び、魔雲坐王より數多の人夫を送り越したれば、何の意たるやと問ふに、王が百餘の妻を奴隷として白女に贈るに付きては、汙を住はせる小屋を作りて與る爲なりと云ふ、王の注意は至れりと云ふ可し。勿論百名以上の女を得て、之を留置く處無くば如何とも詮方無き譯なれば、平洲も茂林も別に王の許へ人を派し、其厚意を謝せしめたるが、人夫は其中に所々の

立樹を其まゝ柱に充て、之に葛を結び木の葉を葺ひ、或は石を疊ね土を積などして、幾時間も經ぬ中に極めて粗末なる假小屋を作りたり。

小屋の出來上ると共に、百餘の黒女を二人づゝ繩に繋ぎて長き列と爲し、王の兵之を守りて送り來れり、王が斯まで果斷に富み、斯までに約束を守る事殆ど氣味悪き程なれど、亦以て王が芽蘭夫人を思ふ心の一方ならぬを知る可し。頓て百餘の黒女を悉く假小屋には入れしが、繩に繋ぎし儘に置くは痛はしければと、悉く解て得させたれど、或は手足の自由に任せ逃去るも計れず又或は蠻民の忍び入りて盜み去る恐れも有り、確なる番人を設けずばと評議するに、寺森醫師は熱心に進み出で「兼て研究せる黒人の皮膚を試驗するには、是ほどの好機會無ければ是非とも此番人は吾に命ぜられよ、吾れ五人の兵士を以て充分に取締らん」と云ふ。是れ双方の幸ひなれば直ちに其請を許すに、寺森は雀躍して假小屋の方に至れり。

後に平洲と茂林は言合さねど共に最と心配なる事の出來し如く、默然として考へ初めしが漸くにして平洲先づ口を開き「君の外交政略で、一時此の難場を逃れ得たのは好いが、魔雲坐王が斯

くまで熱心を示すを見ては、實に此次の難場が思ひ遣られる」「僕も夫が心配で考へて居るのだ、王が吾々に從て來るのは好いが、孰れ吾々は此の王と分れる時が無くては成らぬ、其時には唯で分れる事は出來ず、何と有つても王は茅蘭夫人を連れ去らうと掛るには違ひ無い」「無論の事サ、其時に王を追拂ふのは、寧ろ今日茲で追拂ふより猶ほ六かしからうと思ふ」「今日茲で追拂ふのは到底出來ぬから、此後とても追拂ふ事は決して出來まい、若し王一人なら途中で何うともする事は出來るが、數千の兵を連て來ては吾々宛も王の捕虜と爲つた樣な者で、容易に逃げ去事さへ出來ぬ、何か好い工夫は有るまいか」「サア其工夫が無いから心配して居るのサ」とて二人は思案に沈み込み、空しく一行の遠からずして盡んとする事を嘆息するに、此の時王宮の方に當り、パツと火の手起り、炎焔天を焦す許りに燃上り、猶黑人等が鯨波の如く叫び立る聲物凄き迄に聞ゆるにぞ、二人は何事にやと直ちに老兵名澤に命じ其次第を探らしむるに、王は先王、先々王の妻、合せて二百人ほどを臣下に與へ、己れの妻百餘人を此方へ送りたれば、其身の何所までも潔白なるを白女に示す爲め、後宮を燒拂ひ猶附屬の器具品物等を、一切灰と爲す者なりと復命せ

り。二人が心は益々穩かならず、王をして妻を捨しめ後宮を燒盡さしめ、猶ほ數千の兵を連れ、旅せしむる事總て茅蘭夫人を彼れが妻に與ふるとの約束より出る者なるに、彼れ悉く其約束を充分、十二分に守りたる後に及び、此方に於て何とて茅蘭夫人を與ずと云はる可き、困難は益々困難と成り來たれりと、二人は先に外交の旨く運びしを喜びたるに引き替へ、今は却て其の運び過ぎたるを悔ゆる程なるに、斯る所へ最と氣輕の樣子にて出で來たる寺森醫師は、二人の心配をも知らで」サア茂林君、ヤツと一日の仕事も濟で是から僕の召喚に應じ給へ」茂林は殆ど何の意たるやを解し兼ね「何だと」「假忘け給ふな、忘れたと有らば巴里を出る時の約束を讀で聞さうか、何時でも如何なる場所でも、前回の失敗者が相手を召喚する本文は、此樣な時の爲に設けたのだ、本文を逐條朗讀して聞さう」茂林は腹も立たれず、眉を顰めて苦く笑ひ「最う澤山だ澤山だ、管々しい本文を聞くに及ばぬ、仕方無く召喚に應じやう」「では來たまへ」「茲で好らう」「イヤ了けぬ、折角賭場を設けて來から」「では何所だ」「百餘の黑女が蠢々して居る、假小屋の眞中だ」茂林は只呆れて目を剝きたり。

八十九

茂林は目を剝きたれど如何とも詮方なく、寺森の命の儘に從ひ行くに、百餘の女を豚の如く押込めたる小屋の眞中に一坪ほど莚を敷き、勝負の場所を設て有り。寺森先づ蠟燭を點し、何事かと怪む黒女どもを推分けて進み入るにぞ、茂林も共に行きて座に付くに、黒女の身體より發する汗や息の氣にて、咽ぶ程暑けれど、暑さより猶ほ甚だしきは、黒女の身に特有なる一種の臭氣なり。彼等晝間よりの暑さに、且は死刑に處せられんとする恐しき場合に臨み、身を悶掻き氣を勞して汗水に濡れたる上、沐浴さへせず一團と爲りて弦に閉入られたる者なれば、汗か脂か、粉々鼻を衝く樣は、曾てナイルの河にて恐ろしき奴隷舟を檢めし時に異らず、茂林は顏を蹙めて寺森を叱し「君は健康の害になる事を知らぬか」と云へど、寺森は平氣にて「健康の害になるのは君も僕も同じ事だから五分々々よ」と答ふ。斯る中にも惡臭は目と鼻に浸透る程なるにぞ「僕は何うしても弦には居られぬ、君は實に無神經だよ此惡臭が分らぬか」「分るけれど耐へて居るのサ」

「僕には一刻も耐へられぬ、此勝負は僕の負だ」「負けたとて醜はぬうちに分る者か、サア勝負を仕やう」「イヤ闘かつたも同樣だ僕は負た者と自認するから、何うか外へ出して呉れ給へ」と云ひ逃出さんと立上るに、寺森は確と捕へて動かしめず「夫では君、愈今日の勝負は正當に負た者と閉口するか」「勿論」「後で僕を指し、不正の手段で人を苦めて勝たなどゝ評するを許さぬよ」「決して其樣な事は云はぬ、全く負けたから許して呉れ給へ」と云ひ振放ちて逃出せば、寺森は最と滿足げに、笑を浮めて出で來り。「ア、好い氣持だ、到頭計略を以て負して呉た」「君は實に臭氣を感ずる神經が無いと見える、本統に呆れ返るよ」寺森は益々笑ひ「ナニ神經が無い譯では無い、僕は鼻の穴へ乳酪を詰て置た」と云ひ鼻を清めて白狀したれば、茂林も用意周到なる此謀事には感心し是れは實に謀られた」と大笑して止みたり。

翌日に及べば魔雲坐王より、一同の出發を新月より五日目の日に定めては如何にと問ひ來れり、新月より五日目は日の半弦に達する頃なれば、涼しき夜の旅行にも都合好く、王の意も其邊に在る事なる可ければ承知の旨を言送るに、是より王は日々行軍の用意を運ぶ如くなりしが、頓て約

束の日も近きたる或日の事、用意既に整ひたれば見物旁々來られよと言越したり。平洲、茂林、寺森の三人は、老兵名澤、迦辯亞利の兩人を引連て王宮に到るに、先に幾棟か並びたる後宮は燒盡して野原と爲り、茲に幾多の輜重を積み王親ら點檢しつゝ有り。依て其の大體を檢め見るに、數千の兵を引連るには兵糧甚だ少過るに似たれば、王に其事を注意するに王は「否、此先には所々の少部族あり、道々其等を攻亡ぼし兵糧を取乍らに進むなり」と事も無げに答ふるにぞ。扨は我一行の計略より幾多の罪も無き部族を、此王に攻亡さしむる事と爲るかと、茂林は穩かならず思ひ「否、此行は平和の旅行なれば、先方より此方を襲はざる限は決して戰はぬ事に定め、豫め充分の兵糧を調へて進れよ」「兵糧を調へるは易けれど戰はざれば卑怯として白女に賤まれん、我は戰ひて白女に我勇を示し度し」「戰はずとも白女は御身の勇を知り、此上に御身が蕊悲の心に富む事を示しなば、白女は益々感服す可し」王は稍深く考へし後「然ば其言葉に從ふ可し」と答へしが、是よりして明日出發こ云ふ前日の朝に及び、再び王より招かれしかば又行きて檢めるに、今度は兵糧を山の如くに積み、之を運搬する人足までも定めて有り。平洲も茂林も滿足の旨

を答ふるに、王は更に一方なる野原へ案內し、茲にて兵士三千人ほどの練兵を行ひ一同に見せしむるは、即ち觀兵式とも名附く可き者ならん。此土地は亞弗利加內地の中にて割合に物事の進歩せし所にして、鐵を以て造たる槍、其他の武器多し。曾て此地に來りたる彼のシュ氏が、茲より先に必ず一種の文明國ある可しなど想像したるも無理ならず。眞に幾分かは人智の開けたる者にして、殊に兵の式などは一號令にて全軍を左右し、軍律少しも紊れざる樣驚賞するに餘あり。此精兵を引連れるに於ては、如何なる旅行も安全なりと思はれしが、扨翌日は愈名も知れず、地理も知れず、曾て文明國人の足跡を印せし事なき、最暗黑の地に出發する事とは爲れり。

九十

一行が靡雲坐王、及び其數千の兵に擁護せられて、モンバト地方より更に南行の途に上りしは、千八百七十三年十月三日の事なりき。

指して行く先は孰れぞ、差當り王弟鐵荊の支配地なり。其先は名さへも知らず、鐵荊の支配地

にて果して芽蘭男爵に逢得べきか、逢ずとも其蹤跡だけは突留め得べき乎。幸ひにして突き留得るとするも、一同の運其にて開く可しとも思はれず、却て益々困難を加ふる恐れ有れば、孰れにしても死地に入る如き旅ぞと、平洲も茂林も内心に安き事能はず、去れど爾の色を見せずして一同を励ましつゝ、一日十五哩づゝを歩みて東南の方を指して只管進むに、一週間を經て其月の十日に漸く鐵荊の領分に達したり。其間の道筋には山も有り、川も有り、平地には人の脊より高き程の草茂り、旅行の困難一方ならねど其等の様は到る處として無きは莫ければ、管々しく記す迄も無し。唯だ時に沿道に部落あり、其住民等、魔雲坐王の來るを聞き、或は若き女を後宮へ獵集むる爲め召捕に來りしかなぞ思ひ違へ、又は定めし至大の兵糧を奪ひ取るゝ事なる可しなど、恐れ戰く事一方ならぬ様子なるも、平洲と茂林は文明國の法を以て王に說き、此旅行は全く王が慈悲の意より出し事を告知らしめ、兵糧を徵發するにも總て相當の代價を拂ふなど、全く平和なる行軍演習の如く爲さしむるに、孰れの住民も果は一方ならぬ喜びと爲り、進んで王に様々の物を献ずるもの多く、殊に兵士を勞ふ事一方ならねば、王も大に感ずる所あり。「物を奪ひて進より與へて

進む事遙に德用なる事を初めて知れり」などと云ひ、追々平洲と茂林との智慧に敬服する意を表するまでに至りぬ。

素より王は、出發の前に一使を鐵荊に送り置きし事なれば、鐵荊は從者數名を引連れて境界の所まで進み、恭しく王及び、白人一同を迎へたるが王は白女の父、果して此地に立寄しや否やを のみ氣遣ふ者なれば、直ちに鐵荊をして從者を退けしめ其尋問を初めたり。從者を退けたるは文明諸國にて證人と被告とを別々に審問する如き者にて、若し從者に鐵荊の言葉を聞かせては、後にて從者を調ぶるとき、皆鐵荊の意を受けて同樣に答ふる恐れ有ればなる可し。

未だ鐵荊の住居にも到らず、斯る野原にて直ちに尋問するとは無雜法の限りなれども、野蠻人の習慣なれば怪むに足らず。平洲、茂林兩人は、名澤を連れて王の傍に立ち、一々兄弟の問答を飜譯せしむるに、王は先づ言葉を和げ「見らるる通り我は白人と同盟したり、聞けば汝は曾て甚だ白人の旅行者に邪慳なりしと云ふが事實にや」と問ふ。斯る言葉を以て旨く返事を釣出さんとする其老巧驚く可し。鐵荊は考へつゝ「否、我れ多く白人を見ず曾て一人に逢たるのみ、然れど

も少しも邪慳にはせず却て厚く待遇したり、現に吾腰に纏へる帯は其白人が吾が親切に感じ私と して贈りたる、絹とやら云る物なり」とて、腰に巻きて武器を結べる絹の切を指示せり。

勿論此邊に有り得ざる切地なれば、平洲も茂林も其人こそ芽蘭男爵なりしなれと、顔色の變る迄に心を動かせり。「其人の來りしは、今よりどれ程前なりしや」是れ暦も無く年月を數ふ可き法も無き蠻人に取りては、最も答へ難き所なる可し。此邊一體は總て三日月を以て時を數ふる日安とする者なれば、鐵荊は稍々久しく默爾として指折數へし末「爾ればなり、其時より最早や新月の數を十八九も數へたらんか」と云ふ、左すれば昨年の初め頃に相當し、老兵名澤が芽蘭男爵を見たりと云ふ、其月日にも略ぼ合へり。王「其人の容貌を語れ」鐵荊が徐々と語り出る所は、全く芽蘭男爵の人相にして、兼て茂林等が王に話置きたる所と一致するにぞ、王も大いに滿足する樣子なり、王は更に「其人の年は何歳程に見えたるや」是れ大事の所なり、昨年男爵は四十歳なりしかば、若し鐵荊が其通り答へなば王は必ず四十歳位の人、眞に白女の父なる可き乎と怪む可く、縦しや白女の夫と迄は疑はぬにしても、平洲、茂林の實意を疑ふに至るは必定なり「年齢

は分り難し、去れど髭髯も延び、容貌も痛く痩衰へて居たれば、吾れは可なりの老人と見て取たり」平洲と茂林はホツと息せり。「汝、何に故に其時白人の來りし旨を、吾へ知せては越ざりしや、今まで例の無き事件あらば總て吾に差圖を請ふ可き筈ならずや」是には鐵荊、稍や窮したる樣子なりしが、再び王より詰責せられ、思ひ切りたる樣子にて「實は其白人が兄上に知せ異れるなと請ひたり」「請ひしには有らじ、請ひて且充分の賄賂を贈りしならん」鐵荊は無言なり。「何故白人は、我れに知しめぬ樣に請たりや」「御身が其前に或白人を遮り、旅行を許さざりしとの事にて、御身に知しむれば同じく遮らるゝ事を恐るゝが爲と聞たり」是れ益々以て芽蘭男爵たるを證する者なり、男爵は名澤にも話せし如く獨逸人シユ氏が、魔雲坐王に遮られしを知り同じく遮らる可しと恐れて、故々王を避けたる者なれば、爾か云ひたるに相違無し。「シテ其白人は今は如何にせしや、孰れに在るや」

九十一

芽蘭男は此國より孰れの方へ立去たるや、是れ何よりも大切の筒條なり。鐵荊は此問に逢ひ、暫く天の一方を見廻したる末、己れの持てる長槍を草原の上に横に置き、此方彼方と其方角を正したる末、遂に鐵荊此槍の穗先の向へる方へ立去りたり」と答へたり。元來此邊の習慣として、人に名の知れざる土地を教るには、棒を地上に横へて棒の先をば其の方に向け、方位を指して答ふるが最も丁寧なる教方にして、斯く指示したる方角は殆ど磁石にて測りし如く確なりとぞ。是も野蠻人が必要の上より得し習慣の力なる可し、一同は其槍の向方を見るに東南の間にして正しく遙青山を指せり、遙青山とは、遙か南の天の端に烟の如く青く見ゆる山にして、唯だ天氣快晴の時に之を望むのみ、其如何なる山にして其近邊に如何なる人種の住めるにや素より知れる人は無く、ポンゴー、門鳩地方にては此山を大地の盡る果なりと言傳へり。近年に至り地理學者の推察する所によれば、彼の李敏敦翁の發見せし丹鷲湖などに並る、アルバート湖の北岸に聳る物なるべく、即ち此一行の如く北より進みて此山を南に越ゆれば、アルバート湖に出づ可しとの說なり。察するに芽蘭男爵は此山を越えてアルバート湖より丹鷲湖の邊に出で、彼の李敏敦翁が南方

より分入たる殘日坡の路に出る目的なりしならん、前人未だ蹈ざる絶域を蹈みて、無事に遙青山まで到り得し事覺束なければ、兎に角此一行も遙青山を目當として進まねばならず。

王は猶ほ鐵荊に樣々の事を聞きたる末、更に鐵荊の臣下の者を集めて問糺すに、鐵荊の白狀せざりし事一二を聞き出せり、其一は件の白人が最面白き聲を發する箱を携へ居たりとの事なり、是れ益々以て芽蘭男爵たる證據なり、聲を發する箱と云へるは音樂の器なる可く、男爵は兼て音樂の德を頌し、音樂には猛獸も聞惚れる程なれば、如何なる野蠻人にても此聲に耳を傾けざるは無く、亞弗利加內地の旅行に最も流調なる音樂を携ふれば、必ず餘程の便利を得べしなど共著書にも論じて有り、殊に平生より音樂の達人なりしかば、必ず自ら音樂器を携へ來りし者なる可し。猶ほ此者等の言葉に由れば、鐵荊を初め後宮に在る彼れの妻等、皆な其の「箱の聲」を聞くを樂み、白人を大事の客として待遇したりと云ふ、其二は、男爵が鐵荊より如何にして此土地を出發する許しを得しやの一條なり、是れは男爵が鐵荊の情慾に乘じて計略を設けし事と察せらる、此土地一般の人が先祖よりの言傳へとして信ずるは、遙青山の麓に美人の國ありと云へる說なり。

此說は寺森醫師の信ずる黒天女の國と云へること同一なる可く、鐵弗は棄てより其美人國の尤物を捕へ來りて、已れの後宮に入れんとの心あり、是までとても臣下の勇士に其美人國に出張し、首尾能く美人を捕へ來らば至大の恩賞を與ふ可しと言聞けたる事數度なれど、何さま路さへも分らぬ所と云ひ、且又昔よりの言傳に美人國は神の作りたる國にして、女を以て兵と爲すも、其女の強き事は、其美しさにも優り、到底他國の男子が捕へ得べきに非ず、數十人にて女一人に向ふとも忽ち皆殺にせらる可しなど〳〵云ひ、美人國を恐れ憚ぶ事一方ならず、唯一人我れ行かんと云ふ者無かりしが、件の白人は鐵弗に向ひ、吾は數千里の北方より危險を悉く冒し、命掛にて來りし者なれば此上に如何なる危險ありとも何か恐れん、兒事御身の爲に美人國に進み入り、其の最尤物を捕へ來りて恩賞に與らんと言出しより、王は喜ぶ事一方ならず、早速臣下より屈強の男子廿人を選出し之を從者として白人に同行せしめたるに、其廿人は土門陀と云へる地方まで行き、其所の土人に襲撃せられ白人を捨て〳〵命空々逃げ歸りしが、夫限りにて白人の消息は絶て聞く由無しとの事なり。

是にて見れば芽蘭男爵は此土地に抑留せらるゝの辛さに、巧に王を欺きて南方に向ひたる者なり、土門陀の土人に襲はれ從者廿人悉く逃還りしとせば、男爵唯一人殘り闘ひ、其土人に捕れたるか、殺されたるか、夫とも智謀に富みたる人なれば、又何か計略を以て其先に進み得たるか、孰れにしても心配の限なれば、一行は此土地に長居はせず直ちに其の土門陀と云へる所を指して進むに決し、猶ほも男爵が當時の樣子を聞糺すに、男爵は此土地に來る前も、來りて後も、幾度か熱病に罹り、或時は死ぬ許りの危篤とも爲り、自ら携へる不思議の藥にて僅に一命を取留めたるも、猶ほ充分には回復せず痩衰へて半死半生の如くに見へしも、心の勇氣は驚く可き程なりしかば王も男爵の言葉を信じ、此人ならでは又も美人國へ入込み得る人無からんと思ひたりとの事なり、斯る病餘の身を以て最暗黒の境に入りしとは益々以て心細し。

九十二

眞に遙青山の麓に美人の國あるや否、眞に芽蘭男爵は其國に入込みたるや、眞逆に蹶る黒き天

女の住ふ國有りぞとも思はれざれど、盆郷地方より此邊まで、數百里の間に昔より其噂の傳れるを見れば全くの無根には有らぬならん、女を以て兵と爲し其國を護ると云へば、是れ即ち女護の國なり、其の有無は孰れとしても男爵既に遂青山を指して進みしとせば、一同の行く可き所も遂に青山に在り、行きさへすれば女護の國（一名、黒天女國、又の名、美人國）の有る無しも自ら分明せんのみ。

去れば一同、此の鐵荊の支配地には逗留せず、唯一夜留りたる丈にて直ちに出發するに決し、行方の事を聞合すに、此支配地の次には小人の國あり、其國の次が彼の男爵に隨行せし、勇士廿人の逃返りし土門陀の地方なりと云ふ、抑も亞弗利加に小人の國ありとは、昔し歴史家ヘロドトスの記してより文明國にまで鳴響ける事柄にして、一般の學者は誰だヘロドトスの想像に過ぎずとして嘲れども、此土地に來りて親しく爾る國ありと聞きては無下に打消す事も難ければ、何樣女護洲と云ひ、小人洲と云へ、昔々譚の外には無き異樣なる國々に出逢物かなと、一同の心は却つて勇み、男爵に從ひ行きしと云ふ勇者の中、數名を案内者に雇ひ入れて出發せしが、鐵荊の都

より先は何の路も無く人跡も無し、唯だ廣き野原の所々に大小の河幾筋と無く流るゝ有るのみ、是等は孰れも廻り〳〵て、末にはナイルの河に合せる物なる可し、野原とは云へ雜木雜草、人の脊より高く茂りたる所多く、馬上より望むとも此先如何なる所に行く可きやを望み見る事能はず。

一行中の茂林が從者與助は、斯くも行先の見えざる地は、向ふに何者の潜めるやも知難く毒蛇などの出で來る恐れも有れば、是より引返す事にせんなど、下僕の分際を忘れて言出し、曩に象獵の折、蟻の塔を蹈み無數の蟻に攻られたる苦き經驗などを語り出で、一歩も前に進まんとせず。茂林は憤ほりて此儘捨て行かんと云ふに、寺森醫師之を諫め、次に與助に向ひ「汝は亞弗利加にて象牙を拾ひ返り、大に金儲をせんとの目的にて來りしに、象牙より猶ほ莫大なる金目の者が此先に落散れるに、夫を進みて拾ひ取る心無きや、聞かずや此先に住む小人の話を、小人は即ち一寸法師なれば、其の數十人を捕へ衣嚢の中へ詰込て歸國せば、此上無き見世物にして金儲は意の如くなる可し」と說くに、漸く此言葉に勵されて「本統に其樣な國が有ませうか」と念を推して又進み初めたれど、是より僅か數哩を行きては與助のみかは、他の一同も、最早や全く進み得ず

と絶望する程とはなれり。

弦までとても深かりし雑草は急に一入深くなり、且つ草と草との間に少しの隙間も無きほど繁く茂りて蹈分るにも由無く、猶も草の間には此邊に特有なる弓弦の如き葛生へ、草と共に成長して右に左に搦まりたる様、人を通せじと故々縫ひ作りたるにも似たり。茂林は「仕方が無い、火を以て此草を燒拂ひ其跡を行く一方だ」とて既に燐寸を取出すに、平洲は暫しと推留めて、深く考へ廻せし末「了んよ、風が向から吹て居るから弦で火を放てば後の方へ燃えて行き、鐵弗の都へまで延燒する丈の事だ、兎に角我々が路で無い所へ蹈迷ひ入たから、後へ引返す一方だ」「併し今は確な案内者が無い事ゆえ、此後とても遙青山下へ行く迄には、斯様な所は度々有ると覺悟せねばならぬ」「御だけれど共に多少の工風が有る、今まで通た所に河の幾筋も流れて居る所が有た、彼所まで引返し、其中の一番大な河に沿ひ、其傍を溯ぼるより外は無い、河は大抵山から流出て居る者だから、必ず遙青山まで達するに違ひ無い」「併しアノ河を寧ろ東から西へ流れて居た夫だから吾々は河を横に渡つたのだ、南から流れて來るのは無つたよ」「イヤ東から來て居

ても、夫は地の高低に隨つて一時の曲屈だ、本統の源は南に在らう」と云ひ、猶ほ様々に爭ふるにぞ、茂林も其意に從ひ一行を後に返し、漸く河の有る所に出しが、案内者の名義に隨行せる勇士の一人、頓黒と云へる者、汀の水を倩々見て「是れ鐵弗の領地に入る最も大なる河にして、名を牙洗と呼ぶ」と云ふ、魔雲坐王も舊知の友にでも逢ひし如く喜びて、其の水を掬ひて呑み「全く牙洗川に相違無し、此川の遙上には我が國と先祖の時代に同盟したる國も有りと聞傳ふ」と云ふ、平洲は猶ほ彼の頓黒に向ひ「小人國も多分は此河の上に在る可し、如何」と問ふに、頓黒は暫し考へて「此河は多分小人國の東の端を通れるならん」と云ふ、何様此河を溯る外無ければ、常に水音の聞ゆる所を道に取り、月の明かなるに乘じて進むに、翌日の朝は早くも弦が小人國の東の境なりと云ふ所まで到りぬ。

九十三

昔より言傳へられたる亞弗利加の小人は、總稱して「ピグミイ」と云ふ「ピグミイ」の名は聞けど

其實を見し人無ければ、果して一寸法師なるや否、果して寺森醫師の言ふ如く衣嚢の中に數十人を詰込みて歸らる程、小形なるや否、兎に角其の小人洲の境まで來たれば、切ては一人なりとも其雛形を見て行かんと云ふに決し、之を頓黒に圖るに彼れは心得、然らば最も近き小人村を尋ねて其酋長を連來らんと云ひ、自ら一方の山を指して馳去りたり。

數時間を經たる後、頓黒は歸り來り、其後より二十人ほど隊を爲して進み來る者を見るに、是れ亞弗利加の小人なる可し、小人には相違無きも噂ほどには小ならず、先づ其形を記せば、背は三尺より四尺の間にして頭は甚だ大なれど顯に至りて著しく痩せ、首は更に又細し、言傳には羊の如き白き髯膝まで垂るゝなど云へど爾る事無く、身體に毛多けれど其割合には鬚髯少し、手は文明國の貴夫人にも羨まるゝほど細く優かにして、而も其長き事、立ちて膝より猶ほ下に達し地に落たる物を拾ふにも俯向くに及ばぬ程なり、中に最も目に立つは、其腹部にして袋の滿ちし如くに膨れ、前の方へ突出たれば、身體の重サ、之が爲に總體の釣合を失ふて見え歩む樣優かならず、去れど山の穴木の蔭などに住み、獸と共に奔走する人種なれば、其短き足に非常の彈力を

備へりこ見え、頓黒と並び歩みて頓黒より早し、是れ全く太古原人の人種が、少しも進化せずに後裔を殘したる者にして、殆ど人と獸との間とも云ふ可く、必ずしも此土地に限りたる人種にも非ず、亞弗利加の西岸にも南岸にも、斯る種族の有る事は佛人シヤルー其他の旅行記にも見え、又マダガスカル島に遺れる「キモス」人種も、ロートルと云ふ人の報ぜし「マチンバ」人種も、總て同じ種族と知らる、彼の「ビグミイ」と云へる稱は、是等の人種ある事を聞及ぼして附したる者なる可く、今玆に來りたる小人は「アッカ」山脈の一部に住む者なれば「アッカ」人種と稱するが適當なる可し、此人種の住む所卽ち「アッカ」地方と名を附す可し。

是等の小人は誠に用心深き質と見え、數十間離れし所まで來り容易には近づかず、去れど白人を見て、白人が是等の小人を見るよりも猶更ら不思議の思ひを爲せし如く、互に指して何事をか語り合ふ體なれば、一同は之を懷けんとて、頓黒に持たせ樣々の品物を與ふるに、漸く白人の恐しからぬを知りてか、一同の前まで進み出でたり。平洲と寺森は頓黒と名澤とに通辯せしめ、其酋長に向ひ樣々の事を問ふに、通辯とても充分には其言葉を解し得ず、不束ながら譯し得し所に

由れば、此人種は獵を以て生活を繋ぐ者なり、斯る小柄の身にて能く獸物を捕へ得るやと問へば象獵を爲す事すら有りと云ふ、其の仕方は象が間近くまで追掛け來るを待ち、アハヤ蹈躙らんとする間際に、小槍を其眼に突込み、身は象の頭に上りて散々に惱し殺すなりと云ふ、身體は小き丈に大人も及ぬほど敏捷さ働きを爲すと見たり。

此等の話終ると共に平洲、茂林は樣々の品物を與ふるに、酋長は其禮として勝軍の後にて踊る踊りを見せんと云ひ、一同の小人と共に異樣なる歌を謠ひ、踊を初めたるが、踊りの手は、歌の拍子に從ひて、高く飛上るに在りと見え、四尺に足らぬ身を以て凡そ五六尺も輕く空中に跳上り、地に落ちては又跳る樣、宛も蚤の飛にも似たり、腹は脹れたる身にて如何で斯く飛得るにや、殆ど疑はしき程なれど、成るほど象獵の話しも滿更の僞りには非じと思はれしが、頓て踊りの終ると齊しく、彼等は何の挨拶もせず又も蚤の如くに跳ね、山手を指して飛歸るにぞ、平洲は遽だしく殘る二三人を堰き留めて「何故に急ぎ歸るや」と問ふに、踊りの爲め空腹になりし故、食事に歸るなりと云ふ、空腹にて幾里の遠き彼方の山まで飛歸るは一方ならぬ大儀の次第なる可ければ

當方にて馳走せんと云ひ達て此三人を引留め、之を賄ひの方へ送るに。賄方の大將たる彼與助は喜ぶ事一方ならず、小人の姿、衣裳の中へ入れるほど少からぬには稍や失望したれど、其飛跳る樣を見、且は象獵の話など聞き、充分連歸りて見世物を爲すに足ると思ひたれば、獨り頻笑み「好し〳〵、旨い喰物で飼慣し、巴里の眞中で象と角力を取る見世物を興行して遣るなど」と云ひ、或は小人の手を捕へ或は其首を撫るなど、犬の子を弄ぶ如くに爲し、且は我身の背高く肉肥えたるを誇り示す體なりしが、如何に小人とて食を得ずして斯く弄ばれては有難く思はぬと見え漸く不機嫌の色を示すに、與助は益々面白き事に思ひ「オヤお小人樣がお怒り遊ばしたぞ」など云ひて打笑ひ、猶も「ア、此樣な者へ藝を仕込むには、何でも腹の空た時に限ると云ふ事だ、好し〳〵充分仕込で遣う」と云ひ、肉片を持來りて小人の鼻に突附け、小人が口を開きて食はんとするや、忽ち高く取上て己が頭の上にて見せびらかせ「サア玆まで飛上れ、飛上れ」と云ひ、小人が益々腹立つと見ては「イヤ飛上る藝などは別に仕込まずとも、天性に備はつて居るから、何か文明風の藝を教へねば了けぬ、爾だ勘旋門を潛らせて遣う」と云ひ、自ら小人の前に蹲はだか

りて跨を開き、腰の後に手を廻して跨の間より肉片を見せ「サアサ、凱旋門を潜た、潜た」など節面白く囃し立つるに、小人は此の嘲弄を解してか將た空腹に堪へざる爲めか、忽ち身を躍すよと見る間も無く、早や與助の脊に飛附き首筋まで這上り、肉袴の上より痛く與助の肩に嚙み附きたり、是れ正しく彼等が象を捕ふる早業なる可し。

九十四

小人が與助の肩に上り肉袴の上より嚙附きたる其早業は、實に咄嗟の間なり、與助は殆ど何事なるやを知ず、肩先の痛みに驚き「痛い、痛い」と高く叫び、肩を振立てゝ背後に向んとするに小人の細き手は早や與助の首に廻り、其の咽喉を縊附けんとするに似たり。與助は玆に至り初て小人が犇と吾肩に嚙附て有るを知れり、兼てより人並外れて人喰人種を恐れ、野蠻人が白き齒を現はすを見てさへも震ひ上る程の與助なれば、今己が面たり嚙附かれしと知りては、何ぞ驚き恐れざるを得んや、嚙れし所の痛よりも、其恐しさに大聲を發し「アレ人喰人種が、人喰人種が、

早や肩の所から己の身を喰ひ初めた、誰か助けて呉れ、助けて呉れ」と力限りに叫び立つるは、彼れ全く其身が一片一片に喰盡さるゝ者と思へるに似たり。

去れど外に助くる人も無き、賄所の邊なれば救ひに來る人も無し、與助は耐へ兼て走り出し小人を振落さんと跳廻るに、小人は宛も荒馬を慣す如き身振にて、與助の背に緊と握り勿々に落ん氣色無し、殘る二人の小人は手を打ちて笑ふ事一方ならず、身體にも似ぬ白人の弱さよと嘲けるに似たり、與助若し初の如く小人に文明風の藝を仕込まんと思へるならば、充分此樣に滿足す可き筈なり、小人は文明國人が馬に乘ると均く、馬乘の藝を實地に行ひつゝ有る者にて、與助自らは馬にも均しく、其咽喉を縊めつ、弛つして巧に調子を取る小人の技は、文明國の乘馬教師にも出來ぬ程なり、此樣を觀せ物とせば、象と角力を取しむるより猶一入の慰みなる可く、小人が白人を駕御する藝とは、實に世界無類なる可し。與助は百計之れ盡きて、吾背を以て小人を推碎かんとする如く仰向樣に撞と仆るゝに、小人は身輕く前に廻り、今度は與助が胸の邊りに飛掛らん劍幕なり、與助は太き身體を引き、必死と爲りて叫びつゝ逃出すに、此時漸く名澤が手下の黑兵

數名、聲を聞附け走來り、小人を制し止めたるが、痛はしや與助は是より數日の間一種の熱病と爲り、囈言にまで「小人の齒を放して吳れ」など叫ぶに至り、寺森醫師の丁寧なる治療にて、土門陀地方に入込む頃漸く回復したり。

何さま小人は此一行に取り時ならぬ氣晴しとは爲りたり、寺森醫師は小人の體格に依り、生理學上に一大發明の端緒を得たりと云ひて喜び、茂林は藷の材料を得しと云ひ、平洲は此紀行に一條の花を添へ得たりなど語り、小人へは猶も充分の贈物して、愈々此所を出發する事と爲りしが茲に又一つ起りたる新問題は、彼の魔雲坐王なり、王は芽蘭夫人を早く我妻に仕度しとの一心にて、茲までは部下の兵を引き從へて穩かに隨行したれど、聊か此後を氣遣ふに至りしと見え、嚴重に茂林に向ひ「今以て白女の父の踪跡だも得ざるは何故にや」と問出せり。茂林は寧ろ怒れる色を示し「白女の父は御身の弟鐵弗王の許に逗留し、其後東北へ向け發せし事分りしに非ずや、是に增す踪跡は有らじ」「否、鐵弗の許を發して後の踪跡なり、白女の父果して此の邊を通りたる印あるや、吾は限無く御身に從ひて、便々と此大兵を引連れて進む能はず、兵士の中には既に

苦情を唱ふる者も多ければ、今明二日の中に、確に白女の父が何所其所を通たりと云ふ證據を得ずば、白女は父既に死したる者と見做し、吾は門鳩地方へ歸る事とせん」茂「歸るは御身の勝手なり」「勿論白女を請受て歸るなり、是れ最初の約束なり、生死も知れざる父を尋ね何所までも行くは愚かなり、必ず今明兩日を期限とせん」ア、今明の兩日中に白女の父の足跡を突留めずば白女を連れて歸るとは是れ一方ならぬ難題なり、茂林は必死の思にて「御身は大國の王にも似合はず、詰らぬ事を云ふ者かな、白女の父が土門陀地方へ入込みし事は、同人に隨行して逃歸りたる頓黑、外數名が親しく知る所ならずや、吾等は其の土門陀を指して行きつゝ有る故、卽ち男爵の足跡を踏みて進むも同樣なり、未だ土門陀へ達せざる中、男爵の足跡無しとは餘り無理なる言條に非ずや」此言葉には詮方無く服從し「然らば土門陀までは同行せん、土門陀にて白女が父の消息分らずば、吾等ば必ず白女を請受けて歸國する故、左樣承知せられよ、其時に御身等も吾が妻、白女の兄として吾等と共に門鳩へ引歸すは隨意なり」茂林は詮方無く「併し土門陀まで行けば父の消息分るに相違無し、其時は如何にするや」「父、眞に活て有らば其許まで行き、婚禮の承

諸を請ふ事約束の如くせんのみ」と云ふ、芽蘭男爵眞に生存ふとも、生存らへずとも、孰れにしても困難は一つなり、土門陀地方にて男爵の消息絶え、王乃ち白女を連て歸らんと云はゞ何とせん、夫とも男爵何の所にか生存して、王男爵に迫り芽蘭夫人を請受んとする塲合と爲らば何とせん、右も左も死地なれど、逃る可き思案無ければ、其最後に至りし末は天に任せる外は無しと、度胸を定めて彼れの言葉に從ひ、是より又二日を進み、愈今二日にて土門陀に入込むと云ふ所に到るに、魔雲坐王は又も茂林の前に出で「吾等は約束通り土門陀までは何うしても行く心なれど、部下の兵士が從はざるを如何せん、兵士は何の分捕も無き斯る馬鹿々々しき行軍をする能はずと云ひ、達てと云へば吾れを殺さん勢ひなり、扨げて此所にて白女を吾れに與へられよ、然らば吾れ部下を宥めて白女と共に歸國せん、左も無くして此上部下を怒らせては、我のみか御身等の命も危し」と云ふ、其顏色にて察すれば、彼れ充分決心せし者にして、若し此方にて否を云へば腕力に訴へ、一同を殺してなりとも白女を奪ひ歸らん心と知らる。

三千の猛兵を引連るゝ彼れ魔王が、斯る決心を起せしこせば、實に負く可き道も無きなり。

九十五

若し逆らひて魔雲坐王が暴力にでも訴ふる事と爲らば、夫こそ由々しき大事なれ、一同は殺されて、芽蘭夫人は彼が爲に妻として攫へ行かれん。想ひ見るさへ心安からぬ程なれば、何とか言宥めねば成らずと、茂林は滿身の智慧を絞りて「御身は牙洗川の上に同盟國有りと言しに非ずや茲まで來りし序を以て、其同盟國を尋ね、交りを温むる事一擧兩得の事ならん」

王「否、吾れ爾る事を云はず、唯だ吾が先祖の王が、昔遠征を好み遠く牙洗川の上まで攻上り、或一ケ國と久しく戰ひたるも勝負の遂に決せぬ爲め、双方和睦し、友國たる約を結びたりとの言傳へを聞けるのみ、唯だ昔よりの言傳へなれば、吾親しく其國を問ふに及ばず」「其國の名は何と云ふや」「麻列峨國とか聞けり、今でも吾が領地に流れ入る牙洪川は、異樣なる木葉の流れ來る事あり、扨は麻列峨國の木葉なりと、是も昔より言傳ふれど、麻列峨の今の王何者なるや、又其國今も昔の如く盛なるや、夫すら絶て知る者無し、吾れ何ぞ其國を尋ぬる必要あらん、兎に角吾

は白女を請受て歸國する迄なり、然せざれば部下の兵士を宥むる道無し、御身等も安全を欲すれば吾言葉に從ふ外無けん」是れ全く、吾言葉に從はずば部下の暴行に任せる故、御身等の命も危しと云ふ、嚇迫の意を含みたる者なれば、頓智に長けたる茂林も、如何ともする事能はず、牙洗川上の同盟國を言立に、王の心を動さんとする計略も破れたる者なれば、途方に暮れて暫く絃を退きつ、平洲に事の次第を相談するに、平洲は深く嘆息し「ア、吾々が餘り文明の道徳を以て野蠻の兵士に強たるが過ちで有た、分捕もするな、亂暴な擧動もするなト云ひ、規律を正して進んだから王も兵士も最初の中は目先が變つて喜だが、今は數日を經たから飽て來たのだ、胥に腹は代られぬ場合だから、兵士に氣晴しをさせる爲め一切の規律を解き、戰爭でも略奪でも勝手氣儘にさせ給へ、數日の中に戰爭が出來ると云ひ、澤山分捕が有ると云へば、無憮を喜ぶ蠻兵の事だから、必ず勇立ち二日四日は苦情は云はずに前進する」成るほど是も一理なり、當るや否は知り難きも、外に工夫の無き場合なれば、茂林は此意を以て再び王の前に出、此先に横はれる土門陀の地方は、最も富有の所にして羊を初め、美味の獸類も多く、戰へば必ず非常の分捕物ある可

しとの意を說き「絃まで來りて、土門陀へ入込まぬは實の山に入ながら、手を空しくして歸るに均しからずや、御身が絃より歸ると聞かば、白女は嘸かし御身を臆病者と思ひ憂想を盡さん、ア、今までは我々一同、御身を勇氣限り無き王さのみ思ひ居たるに」と冷かに言放つた、王は眼を光らせて「何とや、我を臆病者とや我れ臆病に非ず、御身等が我に戰爭を許さぬに非らずや」「然り、今まで戰爭を許さぬは、此先に戰ふ所多きを思へばなり、途中にて力を用ひ兵を疲せては、肝腎の戰ふ可き時に戰ふ力を損するなり、御身等は戰ひの必要ならぬ間だけ同行し來り、愈戰ひの有らんとする地方に來りて歸らんとす、卑怯に非らずして何ぞや」王は茂林の舌三寸に翻弄せられ、其の黑き顏を紫色にして怒り、「然らば我等に戰ふ事を許さるゝ乎、此先に在りと聞く富有なる土門陀と戰ふ事を」茂「勿論なり」王は奮て立ち「好し」と一言云捨て退きしが、暫くにして其の部下の中に凄ましき鯨波起りたり、是れ王より土門陀の富有を聞き、近々戰爭の愉快得らる可しと思ひて、口々に喜びの聲を發する者なる可し、茂林は此聲を聞きて、平洲の許に來り「僕は何の樣な難場でも、頓智を以て切抜られぬ事は無いと自ら堅く信じて居たが、君が智慧に

は迚も及ばぬ、アノ勇しい聲を聞き給へ、君の智慧がアノ通り適中したのだ」　平「ナニ僕の智慧と云ふ譯では無い、矢張り君の說方が好い爲めだよ」とて互ひに手柄を讓り合ふ樣、戀の敵と思はれぬ程なるは、全く幾月艱難を共にして兄弟の如き情を發したる爲なる可し。

斯て有る所へ王は又來り「愈戰ひを許されしに付いては、眞に土門陀と云へる地方が、御身等の云へる如く富有の國なるや否、又た戰ひて我勇氣を示すに足る相手なるや否、先づ間牒を出して是等の邊を探らしめ度し」と云ふ、尤もなる望みなれば之れを聞入れ、勇士と稱さるゝ頓黑を頭とし、之に王の兵の中にて屈強の者三名を引連させ、急ぎて出發せしむるに、此間牒の一行は、騎馬にて土門陀の入口まで只管行を急ぎ、其所より馬を降り、敵の目に着かぬ樣にして入込みしとの事にて、意外に早く翌日の宵の間に歸り來り、注進せし所に由れば土門陀には牧場あり平野あり、用と爲る獸類を多く養ひ、近傍に稀れなる富有の國なり、富有に連れて戰爭にも強きのみかは、近々此の一行の來る可きを知りて、今や盛んに戰爭の用意を爲しつゝ有りとの事なり王及び部下の兵は之を聞きて益々勇み、一同齒を戛々と鳴し其音殆ど凄ましき程に聞ゆるにぞ

牛洲も茂林も怪しみて、軍の門出に齒を鳴すとは異樣なる習慣かなと、其仔細を老兵名澤に就いて聞くに、個は亞弗利加中に多く有る習慣にして、兵たる者戰ひて敵を屠り一たび其臟腑を取て喰ひ、其生血を啜らずば眞の勇士とは爲り難く、人を喰へば喰ふ丈け益々力强くなるとの事を信ずるより、斯は齒を鳴して人肉を喰ふ時の近きしを祝するなり、斯も丈夫なる我が齒の音を聞かずや、骨も頭も嚙み碎いて吳れんとの心を示すなりと說明せり。扨は眞の人喰人種の國は旣に過しと思ひしに、下僕與助の恐れし如く此邊も猶ほ人喰人種なるか、夫のみかは彼れ等の戰爭とは互ひに肉を喰ひ合ふ、最と恐ろしき意味をまで含めるかと、戰爭を許したる平洲、茂林も玆に至りて餘り好き心地はせず、彼等と一樣に齒の根のガツガツ鳴らんとするを覺えたり。

九十六

亞弗利加の內地に人を食ふ人種の有る事は昔より言傳ふる所なれど、詳しく其の恐ろしき習慣を取調べたる人は無し、唯だ近時に至り、盆鄉地方の近傍に、特に人を喰ふ習慣の有る事を見屆

けたる旅人あり。卽ち其所を別に人喰の國と綽名し、既に芽蘭夫人の此一行の如きも、爾る危險なる土地には成る可く近かぬが好しと云ひ、中央を避けて其東端を通り來り、唯だ敵村の小兒を盜來りて、喰はんとする如き二三の實例を見しのみなるが、今や數千の兵士が、敵の肉を食ふ可き則の近づきしを喜び、前祝に齒を一齊に嚙鳴す樣を見ては、人肉を喰ふ習慣は必ずしも喰人國のみには非ず、廣く亞弗利加の諸方に廣がれるを知るに足る、唯だ喰人國と綽名さるゝ彼の地方は、何でも彼でも人を喰ひ得る場合さへ有れば、逃さずに取喰ふと云ふ程盛なるも、其他の地方は戰爭の場合のみに限り、又敵の肉のみに限りて喰ふと云ふ違ひ有るのみ。

一行は今更の如く驚き、魔雲坐王に「戰爭は可なれども、人肉を喰ふ丈は廢せざるや」と云ふに「王「夫のみは廢する能はず、昔より兵糧は敵の肉を取れと云ふ諺さへ有る程にて、敵を殺し其肉を食ひて進むが軍の法なり、殊に我れ勇士として敵の肉を食ひ得されば、手下の者直ちに我を侮るに至らん、手下も亦人肉を食ふ事を禁ずれば一方ならず失望して、軍氣全く阻喪せん」と云ふ、實に聞さへ恐しき事柄なれば、平洲も茂林も何とか之を制止する工風は無やと空しく首を惱

すに、魔雲坐は猶ほ寧ろ誇る如き口調にて「吾れは何の料理をもせざる死骸に直ちに嚙附き、血の溫さの少しも冷ざる中に喰ふが自慢なり、吾が臣下に吾ほど良き齒を持ち、早く多量に喰ふ者は纔に二三人あるのみ、吾れは是非とも其手際を、親く白女に見せんと欲す、其時こそは白女必ず吾を眞に勇士なりと感服するならん」ア、其の慘酷なる有樣を芽蘭夫人に見せしむれば、夫人恐らくは氣絕する迄に驚く可し、平洲、茂林が人喰ふ事を制止せんとするも、一つは夫人の感觸を氣遣ひての次第なり。茂「否、白人の國には爾る無慘なる習慣なし、白女は決して爾る事を喜ばず必ず恐懼れて身震をするなる可し」魔雲坐王は之を信ぜず「御身は歲れを云ふなる可し、敵の肉を喰はずして如何で手下の勵む事あらんや」と云ふ、斯まで深き習慣を破り改る事手底望み難きなり、強て芽蘭夫人の命令なりと云へば、王丈けは之に從ふ可きも無數の部下を如何ともする能はず、既に野蠻の兵に文明の風を守らせんとして失敗したる經驗あれば、之も軍氣を振せる爲に許し置く外は有らず、若し固く禁ぜんとするが爲に兵を弱くし、土門陀人に破らるる事と爲りては一同の生命まで危く、此遠征の大目的を達し得ずして滅るにも至る譯なれば、今は正當

防禦の爲に、此習慣を見て見ぬ振に任せ置く一方なりと。茂林が朕々ながら思案を定るに、王は猶自說を張り「我方にて敵の肉を喰はねば、徒に味方の肉を敵に喰はるゝ一方なり、敵は我肉を喰ひて益々強くなるに、我敵の肉を喰はずして身體の力愈弱くなりては、到底戰ふ道は無し、初より敗るゝ者と見て逃去るに如ざる事とも成らん」實に野蠻人の言葉としては此上なき道理に叶り。茅蘭夫人の命を以て縱や此方だけは制止するとも、敵が此方の肉を喰ふ事迄は、到底制止得ぬ譯なれば、强て此方を止るは無慘々々敵に喰はれよと命ずるに同じければ、野蠻人には野蠻人らしく戰はしめよと、茂林は遂に一切干涉せぬ事に決しぬ。

頓て戰備を整へて此所を發するに土門陀地方へ近くに從ひ、野原の草益々深し、敵若し此邊まで進み出で兵を草の中に伏て、不意に横手より此方を襲ふに於ては、此方の一軍唯だ河に推落さるゝ一方なれば、充分に用心して進むに、爾る伏兵更に無し。平洲も茂林も普佛の軍に一方の指揮官として戰ひし經驗あり、軍人的の眼を以て地形を相する事を知り、是等の樣子にて敵の手際を考へ見るに、伏を以て敵を待つなど云へる兵法は猶ほ解し得ざる者と見ゆ、更に進みて其國境

に至れば、左まで高からざるも一種の山脈にして、牙洗川は其間の谿を潛りて出で來れり、谷の兩側には來生へ岩起ち、弦に若し一夫出て守らば萬兵も進むに由無く、木を投げ石を下しても此方を全滅せしめ得る程なるに、爾る用意の少しも無きは極めて戰爭に幼稚なる人種か、左なくば當方を境內に引入れて一擊に打殺す充分なる用意の整へるか、必ずや二者の一なる可く、餘りに敵の落ち附きたる有樣には、却つて氣味惡き思ひ有り。

九十七

守る可き要害を守らざる敵の兵法、殆ど測り難けれど、何樣進むより外なければ、猶も谿間を潛り〳〵て漸く土門陀の境內なる、平原の最端には出でたり。成る程頓黑の引連たる間牒の報せし如く、弦は一體の牧場なる事草の色、垣の樣、灌漑の仕方などにて察せられど、一頭の畜類だに見えざるは戰ひの用意として野を淸めたる者と知らる。猶ほ能く見れば遙か彼方に雲霞の如く陣を取り、規律を正して此方を待つ一團の兵隊あり。

平洲は小高き所に登り、望遠鏡を取出して敵の有樣を見定めし上、茂林に向ひ「見屆けた所武器こそ云ひ隊伍こそ云ひ、野蠻國相當の最も幼稚なる軍隊だ、要害を守らぬのも深い計略有てゞは無く、全く守る必要さへ解せぬのだ」「僕も勿論爾う思ふ、此の樣な蠻國に兵法など知る軍隊の有る筈が無い、武器とても弓と投槍の類で、魔雲坐の兵より寧ろ劣りこそすれ勝りはせぬ」「全く爾だ、夫に就き僕の考へは、我々の率ゆる名澤の兵を、此戰爭に加へぬ事に仕たいと思ふ」「無論の事サ、名澤の兵は兎に角も、文明流の訓練を經て野蠻人の知らぬ銃器を持て居るのだから、之を加へては唯一擊に土門陀人を打殺すよ、戰爭には成らず虐殺に成て仕舞ふ、夫では餘り邪慳だから野蠻軍と野蠻軍とを戰はせ、名澤の兵には高見で見物をさせて置う」と云ひ、名澤を呼び て其旨を命ずるに、名澤は稍や當惑の樣子には「イヤ私から命ずれば何の樣な言附けにも從ひますが私の率ゆる兵は、亞弗利加中の最も勇猛なるチンカ人種です、初めは命令を守つて居ても目の前に雙方の戰ふを見ては、我を忘れて其中へ飛込む事に成るかも知れません」茂「夫なら鐵砲を取り上げて置け、鐵砲さへ無くば五分々々の戰ひだから許して遣る」誠に無理な言附なり、

鐵砲を以て訓練せられし兵に、鐵砲を取上るとは殆ど命を取上るにも均しきなり。去れど名澤は出發以來、絶て此方の言葉に負むかぬ忠實の老兵なれば、唯々として引退き、暫く有りて又來たり「色々と說諭したが、鐵砲無しには兵士の一分が立ぬと云ひます、依て實丸だけ取上げて鐵砲と火藥ぜけを十發分、渡して置て吳れとの事です、ハイ空砲を發する事さへ出來れば如何なる場合でも決して敗は取らず、又無暗に敵を虐殺する事は出來ぬからと申します」成るほど尤もなる言分なれば其言葉を容れ、悉く實彈を取上げて火藥をも十發分に限りて渡し、猶ほ當方より命令なくば空砲だも放つ可からずと言渡せしが名澤の退くと入違へて、魔雲坐王自ら來り「此邊の敵こは曾て戰ひし事無ければ其强弱も計り難し、御身等の率ゆる彼の雷を使う兵士(銃を發つを ば、雷を使ふと云ふと前に出づ)をも貸與へられよ」と云ふ、茂林は之に答へ「御身の軍が愈敗れんとする場合には援兵せしむ可し、夫までは御身の軍の近傍にて嚴格に見張らしむるに止めん」と答ふ、魔雲坐王は「然り、雷を使ふ兵、我が傍にさへ有らば我軍氣大に振はん」と云ひ喜びて引取りたり。

是に於て、此方は名澤の兵を三に分ち其一を王の軍の右に附け、其二を其左に置き、殘るを芽蘭夫人の護衛に當て、戰線より遙かに横手の道を取りて進むに、魔雲坐の兵はスハ是よりこそ云ふ如く一齊に鯨波を擧ぐれば、遙か向ふに控たる土門陀兵も同じく鯨波を以て之に應ぜり、雙方武器を振閃かして原の中央へ隊伍正しく進み出んとす。

其間に平洲、茂林は、芽蘭夫人を護し、戰爭を眞横より見る所に進み、芭蕉樹の最も茂りたる蔭に陣を取るに、彼方なる敵味方は弓の達する距離にまで進みて、互ひに又鯨波を擧げ、愈戰爭を初めたり。其有樣を篤と見るに、雙方猶ほ敵の强弱を計り兼ね、大事を取れる爲にもや、少しも其隊を頽さず整々として攻つ、守つする樣は殆ど文明の兵に異ならず、彼等の持てる投槍は距離の大に近くを待ちて用ふるものか、今は唯だ弓一方にして、隊を前後の二列に分ち、前列は唯だ楯のみを持ちて、敵より飛來る矢を塞ぐを務めとし、後列は前列の楯の陰にて弓を射るのみに急し、射手も楯手も甚だ巧にして、楯手は頭上四五尺の所に來る矢にまで高く飛附きて楯に受け、前後左右に其楯を使ふて殆ど電光石火の如し、射手は高く空中に向けて矢を放つに、矢は

敵陣の邊に行くに從ひ漸く下り、斜に敵の頭上へ降下る狙ひ方なり。魔雲坐王は大將として、前列後列の間を馳廻り、楯手の配り方こと、射手の狙ひ方に注意し或は「矢が高過る」とか「低過る」とか叫びて差圖する樣、思ひしよりも行屆けり、斯て此方の一人、敵の矢に當らるれば、全軍弓を止めて一種の悲鳴を發し、之を弔して且闘し、其間は敵も手を止め一々に勝鬨を擧ぐるなど一種の嚴重なる軍法あり、土門陀人の悲鳴は「オーアイ、オーアイ」と繰返し、魔雲坐王が兵の悲鳴は「ナネグー、ナネグー」と叫ぶ、雙方ともに「痛はしや」との意味なりと通辯亞利は說明せり。戰ひの進むに從ひ、此聲の幾分か繁くなるは狙ひの追々定まるに由る者なる可し。茂林は斯くと見て、醫師寺森に向ひ「今に負傷者が追々に殖れば、君は軍醫として治療せねば成るまい」と云ふに「勿論サ、併し今に見給へ、雙方入亂れて犬の喧嘩の樣な嚙合に成て來るから」「其忙しい嚙合になる前に僕は君を召喚する、サア弦で歌牌を出し給へ」歌牌と聞きて、寺森は嬉しげに「實は最う召喚して呉れ相な者と心待に待て居た、昨夜は僕が勝たのだから」と早や其道具を取出さんとす「併し斯う殺伐な場合と爲つては、我々の命も或は明日無いかも知れぬ、弦で一思ひに

負債の總額を賭け、一時に力を附けて仕舞はう、僕が勝てば君の負債が倍になるサ、君が勝てば其負債が全く消て仕舞ふのサ」寺森は贊成せんとして、考へ直し「イヤイヤ、夫は少々恐ろしい」茂「何が恐ろしい、今日限り命が無いかも知れぬのに」「イヤ僕は勝のが恐しいよ、勝て一度に負債が無くなれば、明日から君と勝負をする口實が無くなるもの、僕は一日も歌牌を遣ねば病氣に成る、何うか負債を何時までも殘して置き、冥途の旅でも毎日君と勝負し度い」茂林も之には呆れ「では定額通りに仕やうが、場所は僕が選定權利者だ、サア此方へ來たまへ」と手を取り兩軍合戰の方へ進むに、醫師は怪み「何所へ賭場を設ける積りか」茂「兩軍の眞中さ、見給へ、眞中の邊は雙方の矢が總て頭の上を超すから、彼所へ据つて勝負すれば極安全だ」寺森は目を剝きて「君は實に命知らずだ」「爾で無い、君は先達て鼻の中へバタを詰め、臭氣紛々たる黒女の小屋の中で、僕に勝負を挑だのを忘れたか、僕は何時か復讐の時が來るだらうと、今が今まで恨を呑で待て居た、サア來たまへ、サア……。」

九十八

兩軍の矢、雨霰の如く飛違ふ下に坐し歌牌の勝負を爭はんとは、全く命を的の慰なれば、寺森醫師は泣出さん許りの聲にて「慰みを以て命に代るとは餘まり馬鹿げた考へだ、如何に復讐とは云へ君は氣でも狂つたでは無いか」茂林は斷乎として「餘計な言葉は聞くに及ばぬ、僕は我が權利を主張するのだ、サア默ツて隨て來たまへ、夫とも契約の第四條以下を詳細に讀で聞かさうか僕は幾度か君に讀聞され、今では暗誦して居るが」己れが常に武器とする、彼の默約を以て却て攻道具に使はれては最早や返さん言葉も無し、去れど猶ほ應じ兼て、苦しくも傍に立つ平洲に向ひ「平洲君、君の親友兩人が今慰さみの爲に命を捨ると云ふ馬鹿げた事を企てて居るのに、君は早く引留めて呉れぬのか、知らぬ顔で見て居るのは餘り友達甲斐が無いと云ふ者だ」平洲は最も眞面目に「サア其兩人が日頃から餘り馬鹿げた契約を神聖視して居るのには、僕既に呆れ果て居るのだから今更ら口は出さぬ」「では君は僕達二人に、野蠻人の矢に射られて死ねと云ふのか」「爾

は云はぬが、君の其樣に矢を恐れる樣が、魔雲坐王に知れたならば白人總體の名譽に係る、白人は矢の爲に神聖な契約を破るほど臆病な者かと、斯う思はれては何うして此の後我々の威信が維持せられるか、サア命を的にして、アベコベに遣込むるにぞ、寺森は全く絶望し「では詮方無い、先達て茂林君が自ら負けたと泣を入れて、黒女の小屋から逃げ出した例に做ひ、僕も遺憾ながら茲で泣を入れる、茂林君、此勝負は僕が負けたから許して呉れ給へ」「愈負けたか」「ア、負けた、歌牌を手にも觸れずに負けるのは遺恨骨髄に徹するけれど是も君の復讐だから詮方無い、尋常に其復讐に服するのだ」茂林は「是で先づ氣が晴れた」と云ひ最と樂しげに打笑ふに、此時魔雲坐の軍中に一際悲しげなる「ナネグー、ナネグー」の聲起り、引續きて敵軍に天地も顚る程の勝鬨揚りたれば、唯事ならじと驚きて打見遣るに、敵軍は弓を止めて雀躍し、容易に其の歡びの止らぬ有樣なるに引替へ、味方の軍は狼狽せる事一方ならず、茂林は第一に其の原因を知り「ア、魔雲坐王が射られた、射られた、サア寺森君、愈君が軍醫の役を勤む可き時が來た」今若し魔雲坐が是切りにて死し果つれば、却

て一同の幸ひなるやも知れず、一旦芽蘭夫人を見込みたる彼れの情火は　此後消ゆ可き時は無く益々一同に附纏ひて難題をのみ産出す事必然なれば、天一同を憐みて、彼れ魔王を挫きたるかと疑はるゝ許なれど、此場合に爾る心は少しも起らず「ドレ、〳〵」と云ひて、寺森も平洲も茂林の指す力を見るに、成るほど魔雲坐王は幾人の手下に擔がれ、隊の背後へ運び去らるゝ所なり。三人は少しも猶豫せず、寺森が外科の道具を取來るを待かねて、共々に王の方へ走り行くに、王の傷は手首に敵の矢を受けたる者にして、左まで患ふる程に非ず、去れど矢の根と矢竹との間を弛くし、一たび人の身に立てば、拔くとも根だけは肉中に留る樣に爲し、是は其の根に毒草汁を塗たる物なれば、傷大ならずとも捨置けば遂に重り來りて一命を奪ふにも至るべし。寺森は直に刀を取出して、王の手首より其の根を掘取り、傷を洗ひて繃帶を施すなど、充分に文明流の手當を爲すに、王は痛とも云はず「斯る巧なる魔治の法は、吾地方には無き所なり」と云ひ「今より一時間と經ぬ中に、吾元の如く手下の號令するを得ん」など喜べども、軍機は一時間の後を待たず、早や勝敗の決せんとする有樣なれば、彼れ更に氣遣はしく敵軍を望み見て「土門陀の兵は

弓に巧なり、若し接戰と爲れば我兵の勝利疑ひなけれど、矢の飛來る事斯の如くば到底彼れに接近する便り無し、彼れ遠く離れて我兵を仆し、吾が兵の力衰ふるに乘じて一齊に推寄せ來らば、接戰に巧なる我兵も既に力を失ひての後とて如何ともする能はず」と云ふ、實に此言葉の如く敗兆茫々と目に見えたる如き有樣なり、愈敵が勝に乘じて寄せ來らば、唯だ魔雲坐の兵破るゝのみか白人一同も蠻人の牙に喰はるゝ一方なれば、茂林は早くも決心し「王、憂ふる勿れ、余に御身の精兵五十を借さば、余は我が雷を使ふ兵と合せて一擊に敵を挫ん、敵の挫けんとするに乘じて御身は部下を突進せしめ得意の接戰を爲しめよ」王は喜び「斯云中も氣遣はし、吾充分に步行し得る故、サア速に其言葉を實行せられよ」と云、茂林は直に名澤の兵卅名を集め、之を王の兵より選拔せし五十名に合し、横合より進て、弓と銃を一齊に射擊せしむるに、銃は實彈を取上て空砲なれど其音は曾て此邊の蠻人が聞きし事なき所なれば、野に山に響き渡る凄じさに敵は全く色を失ひ、銃聲と共に矢に仆るゝ者を迄も、響に打殺されしと思ひし如く、早や狼狽の色見るに乘じ更に第二回の射擊を行はしむるに、全く敵の膽を奪ひ得て早や其陣立の備を紊したり、此時日は

既に暮れたれど斯と見て魔雲坐の兵は弦なりと、突進して敵に迫り、今までの弓と弓との戰ひは直ちに變じて、槍と槍、手と手、齒と齒との戰ひと爲りたり、其樣の激しきは譬ふるに物も無く叫ぶ聲、罵る聲、泣く聲、先の銃聲よりも凄じく、組附き、捻伏せ、喰ひ附き、双方人喰人種の本性を彌が上にも現して戰ふ樣、黃昏の薄明りにも著るし、纔に二十分程にして全く魔王方の勝とは爲り、敵は幾十百人を喰殺され、總額と爲りて背後の村に逃げて入るに、此方は猶も逃るを追ひ其村の所々に火を放てり。

四方より炎々と燃上る火の手に、今まで黃昏に包れし無慘の景は、燭を乘て照す如く明かに現はれ來れり。死骸の腹を噛破りて臟腑を引出すも有れば、緊と組合ひて顏とも云はず首とも云はず、互ひに喰ひ附き離れぬも有り、斯る無慘の、今世紀に有り得んとは、今が今まで思ひも寄られざる所なりき。平洲は斯る有樣を芽蘭夫人に見せまじとて、殘る兵士と通譯等に夫人を守らせ一方に退かせしが、其間にも敵村の火の手は、吹來る風に煽られて唯だ益々燃擴がる一方なれば斯くては兵に非ざる女や兒供まで、其の罪も無き身を以て燒殺さるのみなる可しと思ひ、魔雲坐

に此上の暴行を止らせる由も哉と、自ら馳せて火の村に入らんとするに、其の盡處の矮せき小屋正に火の中に在り、中に何とも譬へ様無き悲慘の聲の聞ゆるにぞ、定めし逃得さる人の生ながら燒れんとする者ならんと、直ちに其中に飛で入るに、火は既に一方の小窓より紅の舌を吐きて入來らんとす。

其下に足も腰も立得ざる一老夫、轉りて悶掻けるにぞ、扨こそと抱上るに、此時窓より入る火の光りパツと照すを見れば、右手の壁に何やらん、細かき文字を認めたる一枚の紙を貼附けて有り、是れ此邊に有り得べき品ならねば、斯る危急の機にも怪しさの先に立ち、何人が何を書きて何の爲に貼りたるにやと、日早く見るに紙の終りに、ア、尋ねに尋ねたる「芽蘭男爵」の名を記して有り。

九十九

ア、芽蘭男爵、芽蘭男爵、男爵は曾て此の矮せき小屋に宿りたるか、宿りて自ら斯る書を認め

此壁に貼附たるか、何事を認めて何が爲に貼附けたる、今は何所其後は如何にせし、唯だ一枚の紙面なれど、之を見て平洲の胸には千万無量の疑惑起れり。去れど弦は考へ惑ふ可き時に非ず、猶豫せば窓に燃移れる猛火に、此の足腰立たぬ老人と共に燒殺されん。

爾れば遽しく老人を小脇に抱き、壁の紙を剝ぎ取りて衣嚢に突込み、其小屋を飛出るに、一面に廣がりし火は右に左に行手を塞ぎ、最早や老人を投捨ずば逃れ去るに由無きかと思はれしに、此時一方より「平洲君」と聲掛けて此所へ飛込み來るは茂林なり。「此様な所にマゴ〳〵しては燒死ぬが」と云ひつゝ彼れは平洲と老人とを引擦りて、辛く火の氣の稍や遠き所に救ひ出し「僕は鷹雲坐王の兵が餘り甚だしい暴行するから、王に諫じて夫を制止する爲め名澤に兵を引連れて此村を馳廻り、ヤツとの事で大方は取鎭め、王及び其兵にも引揚げさせたから弦まで歸つた所ろ、火の中に君の姿が見えたから飛込だのサ」平「爾うか、夫は有難いが、名澤は何所へ行た、此老人を暫く彼に保管させて置き度いが」「名澤は今僕が芽蘭夫人の許へ退かせた、全體此の老黒奴は何だ、此様な者を擒にしたとて仕方が有るまい」平「イヤサ、芽蘭男爵の身の上を尋ねるに付

き、此老人が多少の手掛りと爲るに相違無い、僕は躊らずも男爵の手掛りを得たよ」と云ひ、衣嚢の中より彼の紙を取出し、之を見出せし次第を、言葉忙しく語り聞すに、茂林も驚き喜ぶ事一方ならず「何事を認ためて有るか早やく夫人に讀ませやう、夫人より先きに我々が讀むは宜ろしく無い」と云ひ、二人は元の原に出で、芽蘭夫人が通辯亞利其の他と共に控へ居る所に馳せて行くに、名津が部下と共に其四方を護れるにぞ、彼れに件の老黒奴を任せ、二人は夫人の前に出て事の次第を語りつゝ、彼の紙面を出して渡すに、夫人は嬉しきか悲しきか殆ど言語を發する能は ず無言の儘に受取りて一日見しが、情に堪へずや「エ、是は全く所夫の筆蹟です」と云ひて顏に當て、又瞥くにして「私は胸が迫つて讀む事も出來ません、何うかお二人で讀聞せて下さい」と云ひて差出せり。千里万里艱難を掌盡して尋ね來りし果にて關らずも、所夫の斯る書に逢ひては腕も寒るも道理なり。夫れも尋常の場合と違ひ世に恐ろしき無慙の樣を見、深く心を傷め神經の最と昂れる際にして、殘には人間以外の怪物かと思はるゝ蠻人の中より、此書を得來りしかと思ひては、所夫の千辛萬苦せし有樣も思ひ遣られ、自から淚の先だつなる可し。平洲は讀まんとして彼

方に猶ほ燃殘る火事の遠明りに翳すに、文字細かにして讀難き所も多し、更に夫人の傍に立つ帆浦女より、蠟燭を請受けて左の如く照し讀たり。

此書果して文字を解し得る文明國人の手に落るや否を知らず、去れど亞弗利加探險の業は地學と共に益々進む事なれば、早晩に此の人外の境へも余と同樣に分入りて來る人ある可し、余は切に此書が其時まで存して爾る人の目に觸れん事を願ふ、縱しや爾る人の目に觸るゝ事無しとても今の余の身の上として、猶ほ命の有る中に斯く書記して遺す外はあらず。

余が此土地に入得てより幾週幾月を經、余は如何ほど年老いしにや、今は是れ、余は此土地に入込みたる千八百七十二年の中には相違無きも、其の中頃にや末つ方にや、病牀けし身の夫すらも覺え無し、年中夏の如く熱き土地にて、四季の別さへ無ければ寒暖に考へるとも能はず縱に枕より頭を擡げ外の樣子を眺むるに、空の色、樹の色、地より立登る霧の樣、何うやら雨季を過ぎたる後に似たり、此邊には一年に雨季と晴季の別あり、晴季は天氣のみ續き、雨季は通例七月頃より向ふ四ケ月ほど續くなり、ア、余は記憶せり、雨季の初まる前に余の身體、猶

病に伏せざりし事を、左すれば余は百二十日の上も病に臥し、昏々として人事をも辨へずに寢居たるが、介抱する人も無く此蠻地に能くも壽命の續きたる事よ、余は四ケ月以上を經て漸く蘇生せしなるにや。

百

芽蘭男爵が斯く誓したる紙は、地圖調製の爲め用意し居たる帳面中の一枚を裂取りし物と見え、通例手帳の紙よりは二倍も廣き大版紙なり、其表に細く認めたる筆の蹟、初は字畫も明なれど次第に手先の疲れし如く震ひ曲りなどせし所多きは、如何にも病餘の身を以て辛くも書續けし樣まで、目の前に浮ぶ心地ぞせらる。平洲は猶讀續くる樣、

余は通辯者、從者、人夫、護衞兵をも連居たれど此土地に入り大抵は殺されたり、實に土門陀は野蠻中の最野蠻、恐らくは亞弗利加全土を尋ねても、斯まで邪慳殘忍なる人種は又と有らじ、去れば殺されずして生殘りし者までも余を捨て逃去りたり、余は眞に唯の一人なり、千里

萬里の外なる絕域に、眞の一人ぼつちなる其辛さ、悲しさ心細さは鄕國の人々が想像だも及ばぬ所なり、爾れど是れ天罰なり、妻を捨て家を捨て旅行の快樂を貪らんとせし余の振舞は、今更ら思へば義理人情に缺けし者なり、假令ひ目的は學術上の發明に在りとても、己の心を慈にせしは一なり、今と云ふ今は思當れり、斯る憂目は總て自ら招きたる者なり、余自身は斯く思ひて斷念め得れど、余に捨られし妻は今如何にせし。

余をば定めし蠻地にて死せしものと思ひ、恨みもし泣きもせるならん、道理なり道理なり、余は猶ほ活けりとは云へ死したるも同樣なり、勿論、鄕國へ歸り得る見込は無く、今は幸ひに病癒たれど、食物を得る便さへ無き身の、何時まで健康を維持せらる可き、再び烈しき病に罹るか左なくば恐ろしき人喰人種の牙に掛り、此世を去るは眼前に在り、余は眞實に吾妻が、若やとの仇し賴みに引されて長く心配せし末に、絕望せんよりも今既に余を死せし者として一思に悲みつくし、何事も斷念めて餘命を幸福に送らん事を祈るなり。

爾れば余は纔に殘る命を幸ひに、妻及び鄕國の人々一般へ暇乞の書を認めて遺し置かん、玆

にて認めたりとも、妻及び郷人の目に觸るゝ見込無ければ認めざるが勝かは知らねど、否、否、幸ひに此小屋を守る老黒奴、野蠻人丈け迷ひ深き質なる故、此書を壁に貼附置かば他日幸ひの來る可き禁厭と爲る可しと言聞けん、彼れ深く禁厭を信ずれば、斯く言聞けるに於ては必らず大切に此紙を貼附けて保存するに相違は無く其中に、五年十年、將た廿年の後なりとも地理學の進に從ひ、茲に入込む文明人の無からずやは、此書若し爾る人の目に觸なば鄕國へ持歸られ妻や鄕人に余の暇乞を傳ふる便と爲らん、縱し爾る人の目に觸れずとも元々なり。

爾ればとて何を記さん余は病の爲め何事も忘れ盡せり、待て、待て、何事か微かに記憶に存せり、然り余は鐵荊の支配地より、頓黒と云へる者初め廿名の勇士を引連れ此の土門陀に入込みたり、是れ第一の過ちなりき、勇士の嚴しき姿さへ無りせば、余は此の土人に斯までも憎み窘められざりしならん、戟を持ち槍を持てる彼等の武裝は、直ちに此土地の者より敵と視らる元と爲り、到る處に攻られ苦められ、從者或は死し、或は逃げて余は唯だ一人捕へられ、捕虜より更に下りて奴隷とはせられたり、難難は覺悟の上なれば捕虜たるも奴隷たるも今更ら驚

かずとは云へ、毒獸よりも猶ほ殘忍なる此の人種の奴隷とは到底耐ふべき道あらず、而も奴隷を使はんが爲に奴隷とせしに有らで、窘めて苦めて嬲殺しにせんが爲め奴隷とせしなり、去れば余は朝晩夜晝の分ち無く赤道直下の大地に投出され、食を得ざる事幾日ぞ、寄て蝟集て余を叩くも有り蹴るも有り、一歩たりとも余を無事には歩行せしめぬ有樣なりしも、余は猶ほ耐忍ぶ心ありたり、禽獸に均しき蠻族、人を遇する道をも知らぬ奴輩と思へば、腹も立たず、妻を捨て義理人情に負きて來りし罰と思へば人をも恨みず、唯命だに無事ならば其中に此土を逃て去る機會も有らん、最初より此旅は、北の方シュ氏の探險せし果と、南方李翁其他の探りし土地との其間に在る暗黒未知の地を探り、南北兩方の探險を繋ぎ合さんと云ふに在るを以て、縱し死する迄も、一歩たりとも南方に深入して死せん、茲にては猶ほ死難しと、常に斯る決心を心の底に置きたれば、余は一切の攻苦をば目を閉ぢて受け居たるに、悲しや余の心は猶ほ堪得るに、余の身體、余の健康之に堪へ得ざる事と爲り、余は卒絕せり、余は死せり、然し全く死人同樣、何の感じも無き身と爲り、蠻族より死人と認められて道端に擲棄られしと云ふ事なり

それより今まで凡そ四ケ月餘りかと思はるゝ日を、全く人事不省の間に過したりと見ゆ、ア、余は眞に如何にして助かりたるや。

百一

眞に余は如何にして助り得しにや、殊に余が四ケ月も人事不省に過したる其病は何なりしにや、思ふに「タイホイド」に類似せる一種の熱病にして、亞弗利加内地を旅行する他の旅客が折々罹りたると同一の病にして、唯だ其經過の長き者なりしならん、病氣中、折々此小屋の住人たる廢疾の老黒奴が余の頭邊に來り、酒の如き飲料を以て、熱き余の唇を濕し呉れたるやに記憶せり、察するに老黒奴は、余が死人として路端に捨られたるを拾ひ上げ長の病中介抱して呉れたる者ならん。

殘忍刻薄なる土門陀人の中に、如何にして斯く慈悲を知る一人の存せしにや、多分は彼れ自ら廢疾にして、身體の働き充分ならざるより、己が身に比べて人の不幸を憐むの氣を起せし者か、孰れにしても余の爲には命の親なり、余は到底老黒奴に此恩を返し得さらん、唯だ心に彼れが此後の幸福ならん事を祈るのみ。

何時の間にやら病の根も自から盡きしと見え、余は微かに人事に復り、我身の猶ほ死せざるを感ずるに到れり、然り唯だ死せざるを感ずるのみの事なり、動きも物言も、考へも得せず、其うちに日一日縱に身邊の事だけを見知り得るに到りしが、依然として老黒奴の時々余が枕邊に來るあり、彼は折々に芭蕉の實を持來りて余の口に入れたり、之にて余が稍や力を得るや、彼れ又水にて柔げたる小麥の如きものを余に食はしめたり、有難し余の病は全く癒えたりと見ゆ食するに從ひて身體も心も漸々に力附き、過にし事をも思ひ出せば、躬づから身を起す事をも得、此の兩三日以前より、立ちて家の中を歩み得るに至れり。

去れど老黒奴は猶深く余の身を氣遣ひ、一切外出する事勿れと制せり、其故を問へば、土門陀人一般に既に余を死したる事と思へるに、今姿を示しては再ひ捕へて窘めに掛る事必定なりと誠に親切なる忠言なり。

余は堅く其言葉を守れど去ればとて漸く病の恢復せし身を、何の運動もせずして捨置きては充分の健康を得る事愈遅く、或ひは再び病に襲はれんも知れず、去れば余は一昨日も昨夜も世間皆寝静りしと思はるゝ眞夜半に、窃に出でゝ散歩せしに其爲めか大に氣も輕きを覺ゆ。

此上何時までか此小屋に潜まん、余は一寸たりとも南方に深入せねばならず、何うせ斃れて後止むの身なれば、一歩たりとも南方に仆るゝを計ねばならず、此意を以て老黒奴に細語くに彼れも夜中に逃れ出るならば、出られぬ事も無からんと云へり、爾ればとて孰に逃れん、此先は地圖も無し、道も無し、幾里行きて如何なる村、如何なる人種あるや夫も分らず、唯だ彼方に見ゆる遙青山を目當とする一方なり、此事も亦老黒奴に圖るに、彼れは是より南へは到底行く道無し、唯だ牙洗川に沿ひて東に行く一方なりと云ひ、牙洗川を東に行けば孰れかに村落人種有りしと問へば、麻列峨國と云へる有り、とぞ答ふ。

麻列峨國、麻列峨國、是れ數日前、魔雲坐王が先祖よりの言傳へとして、昔し魔雲坐の國と同盟せしと語りたる國なり、然り確に其國と同じ名なり、今も折々に異樣なる木の葉の牙洗川

に流れ來るは麻列峨國より來るなりと、王の言ひたる其言葉、必ずしも據所の無きには非りしよなと、平洲も茂林も一樣に斯く思ひ、更に平洲は又下文を讀下せり。

果して麻列峨と云ふ國の有るや否、老黒奴如何にして之を知れるにや、余は疑ひて問返すに彼れは異樣なる其身の履歷を語れり、其語に由れば、彼れ自ら麻列峨國の民にして若き頃兵と爲り、此の土門陀を攻來り不幸にして捕虜と爲り、余が此度受けたると同樣の虐待を受け街頭に打かれ投られ、夫が爲め足も腰も折れ、今以て癈疾同樣の身と爲り、唯だ死をだけ免かれて此地に老ひたりとなりゝア、彼れが余に親切なりし次第も讀めたり、全く余の想像せし如く其身の境遇に引比べて憐れを感じたる者なりき、余は更に其麻列峨まで行く可き道を問ふに、彼れの答へ充分とは云ひ難きも、兎に角牙洗川を溯ぼるに在る事は確なり。

余は其麻列峨に行かん、老黒奴が深く余に親切なりしを見るも麻列峨の人、多分は此の土門陀より慈悲深からんと推料らる、縦しや慈悲深からざる迄も、土門陀より慘酷なる事は有らじ是より上の慘酷は到底も世に有り得ざればなり、余が今の身としては孰が多少の慈悲心ある人

種に頼り、切ては身の健康を今少し丈夫にする丈の道なりと計らねばならず、縱し頼るに足らずとも余は失望せず、今までの苦み隨分甚しかりしも、余の命の猶ほ存するを見れば余が身は再び同樣の窘みには堪へ得べし、何の躊躇する所か有らん、死にもせざる途中に滯こふるとは、斃れて後已んと期せる我が心にも耻かしゝ、往かん、往かん、今夜必らず發足して未知暗黑の國を指して往かん、歐羅巴の人、他年若し余が何の地に死したるやを知らんと欲することも有らば、必ず此地より一歩たりとも南を探れ、余は遙青山をも越えぬ前に、北に向きて存へんと欲するより、南に向きて死せん事を願ふ者なればなり。

千八百七十二年の末と思はるゝ頃

佛國の人、　男爵芽蘭記

斯の如くにして男爵の手紙は凛然として終れり。

百二

是にて見れば芽蘭男爵は、病餘の身にも拘らず、更に麻列峨國を指して分入りたる者と見ゆ、果して無事に入込み得たるや否は知る可からざれど、此上の消息を探らんには唯だ南進する外は無かる可し、男爵が「北に向ひて生んより、南に向きて死せん」と云ふ、其凛乎たる決心は驚くの外無けれど、斯る決心の人なればこそ、人間無外とも稱す可き此境へ單身にて入込し上、猶此先まで進み行きしなれ、男爵の如きは確に古來の探險家中第一流に位する者と云ふ可し。

平洲は讀終りて斯く思ひ一方ならず感奮せしも、多言を費す時ならねば、直に其書を芽蘭夫人に差出すに、夫人は涙に咽びて殆ど顏を擧ぐる能はず、平洲、茂林ともに其心中を察し遣り、無言にて靜に夫人の前より退かんとするに、夫人は漸く涙を納て「お待成さい」と云ひ、更に暫しがほど氣を落着けし末「此の書面に在る老黑奴と云ふは今何所に居ます、探出す事が出來ませうか」と問ふ　茂「ハイ夫は平洲が火の中から救ひ出して、老兵名澤へ預けて有ります」夫人は又深く感ぜし如く「夫では此書面が、果して老黑奴へ幸ひを與へる禁厭ひと爲りました、此書面の爲に彼れは救はれる事に成たのでせう」平「ハイ男爵が書て有る事が當ました」夫人は佶と身を起し

「夫では私が直々老黒奴に逢ひ、所夫の事を聞て見ませう、彼れは所夫が何時出發したか、其邊の事も覺えて居り猶ほ事に依りてはー」と言掛けて忽ち語を停むるは、若しや所夫が麻列峨國へ達せぬうち再び慘酷なる土門陀人に捕へられ、今は早や亡人の數に入りしやも圖られずと、思ひ出しての事なる可し、平洲は其意を察して「イヤ貴女がお問成さるよりも吾々が代りて問糺しませう、彼れが答へる丈の言葉は一々貴女へ傳へますが、唯だ萬一男爵の身に不幸など有たとする場合に、吾々ならば彼れよりも幾分か柔かに申上ますから」と云ふ、夫人も尤もとして「では爾願ひませう、茲に斯して待つて居ますから早く何うか」と迫き立るは、今まで雲を摑むが如くなりし所夫の手掛り、目の前に現はれ來り、唯だ其後の安否如何が、何よりも氣遣はしき爲なる可し。

斯て平洲、茂林は名澤の許に行くに、彼れは彼方の村に焚殘る遠明りに立ち、手下の兵と共に老黒奴を守りて有り、黒奴は其身が敵國の擒にされしと思ひてか痛く怖怯るゝ如く、頭を大地に擦り附けて泣きつゝ有るにぞ、平洲は之れを引き起し、先づ名澤を通辯として「吾等は決して汝

を苦しむるものに非らず、汝を救ふ爲め茲へ連れ來りし者なれば、少しも恐るゝ所無く吾等の問に答へよ」と云ひ尙ほ樣々慰めて、漸く彼れが安心せしを見屆け、更に「汝は手づから介抱せし白人の事を覺居るや」と問ひ、其「然り」と答ふるを待ちて其上の事を聞くに、白人が病氣中の事柄は、男爵自ら先の紙面に認めたる所と異ならず、終りに男爵が麻列峨へ出發せしより後の事を問ふに、其出發は今より新月を十回以上も經し、前の下弦の夜半なりしが、麻列峨國を指し牙洗川を溯りし事は確なれど、果して無事に其國へ入込み得しや否は知るに由無し、夫れど途中にて再び土門陀人に捕はれし如き事あらば、夙に其の噂を聞く筈なるに、今以て汗を聞かざるは無事に進みし證なるべし、猶ほ老黒奴は其後も氣に掛るまゝ、麻列峨國の近傍まで獵に行く者などに逢ひ聞合せたるも、唯一人り死骸など見し如き話する者無ければ益々以て白人は、無事に麻列峨の國へ入込み得たる者と見る外なしと云ふ。

彼れの返事は是だけなり、成る程此上を知筈無く、若し此上知れりと云はゞ僞るなり、爾云はざるこそ彼が正直なる證據なれば、平洲、茂林は滿足して又も夫人の許へ引返す路々にて 平「今

の返事で見ると男爵は、今以て生存へて居るかも知れぬぜ」茂「僕も何うやら其様な氣がするよ、此上吾々が愈奥深く進み入れば、男爵と顔合せる場合が來るだらう」平「爾サ夫は何よりも結構だと云ひ度いが、吾々の身の上は益々心細く成る譯だ、男爵が生て居れば我々の目的は根本的に消滅するのサ、夫人は男爵の妻で有て、吾々と夫人との約束は、男爵が前年既に死だと云ふ公報に基いて出來たのだから」と兩人齊しく絶望を訴ふれど、恨める色とては更に無く、平洲は寧ろ嬉しげに「併し夫人は此世に又と無い良い氣質で、天女とも善人とも或は女丈夫とも、評する言葉が無い、長く斯して一緒に旅をするに連れ、僕は益々夫人に心服した、今では自分の身は何うでも好い、夫人が目出度く所夫を尋ね出し、夫で夫人の身が幸福に成れば僕は自分の幸福より嬉しい」茂「僕とても其通りだ、併し何方かと云へば夫人を我妻にして、男爵が與へるよりも猶ほ一層の幸福を、僕の手から與へる樣になれば僕は更に嬉しいよ」と云ひつゝ、將に夫人の許に逢せんとするに、夫人は氣遣はしげに自ら出でゝ來り「私は貴方がたの御返事を待兼て、直々老黒奴の元まで行かうと思ひ、此通り出掛けて來ました」と云

ふ。」

百三

平洲、茂林は夫人に向ひ、老黒奴より聞きし通り男爵が確に麻列峨國へ向け下弦の月の夜に出發せし事、再び土門陀人に捕はる抔の不幸無かりし事、又死骸などの見出されし樣子無ければ、無事に麻列峨へ入込みし者と見認むる外無き事等を語るに、夫人は全く夫だけですか」と、念を推し、平洲が「ハイ全く是だけです」と言切るを聞き「では早速麻列峨國とやらを指し、進む事に致しませう」と云ひて退きたり。

夫人が心の中嬉しきか悲しきか、唯だ打沈みて引立たざるは、氣遣はしさの身に餘るが爲なるべし。

後に平洲は、茂林に向ひ「夫見給へ、男爵が生て居るらしい樣子を夫人に告るには我々の言葉も極めて出易いが、若し男爵が死だとか捕はれたとか云ふ事柄ならば何だらう、僕は到底も夫人

に向ひ有體に告知らせる勇氣は無いよ」「夫は僕とても同じ事だ、男爵が更に此上の不幸に陷入たと云ふ事柄なら自分の口から能う得云はぬ、必ず寺森醫師か帆浦女かへ頼んで云つて貰ふ「シテ見れば全く君も僕も深く夫人の氣質に感じ、自分の身は何う成ても夫人さへ幸福で有れば好いと云ふ心に知らず識らず成て居るのだ、茅蘭男爵が活て居れば好いと心の底で祈て居るのだ」「如何にも爾だ、男爵が生て居れば君僕ともに絶望する譯だけれど、夫でも夫人の悲みを察し、何うか生て居れば好いと、此旅行の最初の目的に違反する樣な事を思ふのは不思議だよ」と互に心を語り合ふ所へ「ア、今日は實に疲れたと云ひ、來り加はるは寺森醫師なり。

茂「オ、寺森君か、君は今まで何所に居た我々は自分の身が急しいに付き君の事を殆んど忘れて居た」と云ふに、寺森は心地悪げに「ア、幾等外科醫者でも今夜の樣に澤山怪我人を見てはホト〳〵厭になる、魔雲坐の軍へ捕虜と爲た敵兵が、五百人から有る、其中二百人が怪我人だが、槍の創よりも齒に噛れた傷が多い位だ、魔雲坐王の兵の中にも敵に噛れた怪我人が澤山ある、實に食人々種の恐しき習慣には驚いた、此外に喰殺されて臟腑など引出され、又は骨際まで肉を喰

はれた死骸が、戰場に四五十は有だらう」平洲も茂林も此報告には氣分を損し「君は今まで其樣に無慘の景を見て居たか」「見度くは無いが治療して居れば自然と目に留るよ、お負に魔雲坐の部下が無傷の捕虜を片端から齒を附けて早く傷物に仕て置ねば、何の樣な謀反を企てるかも知れぬと云ふから、僕は漸う夫を制止し、捕虜が謀反など企て得ぬ樣に嚴しく繩を掛けさせ、一々番人を附けて來た、醫者の役目の外に此樣な事までせねばならぬとは實に厭々して仕舞ふ」と愚痴を溢したるも早や夜は十二時を過たれば、萬事は明朝の相談に讓り、間も無く一同、國營の中に退きたり。

翌朝三人は夜來の疲れにも似ず日の出ぬうちに起出しが、第一の勤は負傷者の手當なり、去れば寺森醫師を先に立て魔雲坐王の許に至らんとするに寺森は威儀を正して「醫者の目から見れば王の命も兵卒の命も大切に差りは無い、先づ兵卒の手當を先に仕やう」茂「成る程、王も兵卒も怪我人と云ふ點は、一樣だらうが、少しは貴賤の別を立て、王から先に診て遣るが順當だらう」「イヤ貴賤の別を立れば猶更兵卒を先にする、巴里の醫者は誰でも貧い患者を先に診察するよ、

貧い者は數が多いから其氣受が能なれば直に評判が廣つて、上等の患者からも迎へに來る事と爲る、假令ひ砂漠の中迄も巴里の風を吹せて通ると云ふが、此旅行の最初からの約束だから、僕は巴里風を捨る事は出來ぬ、矢張り貴人を後へ廻す」と詰らぬ巴里風を吹せて動かざれば、平洲も茂林も苦笑ひしつゝ其意に從ひ、第一に最も下級とす可き捕虜より檢むるに、成程、怪我人の多くは齒の創にして、一應の手當は濟みたれど、猶ほ血の流るゝ者、肉の膨れ揚れる者、皮膚を噛破られたる者「オーアイ」の聲を發し、泣きて苦痛を訴へつゝ有り、醫師一人にて數十百人を一々診察し得る筈無ければ、其中の危い者を選んで手當を施こし他は老兵名澤に其創所を一々洗ひ遣す可しと言附けたり、野蠻人の體格は文明人よりも遙に能く、怪我に堪る性ありて唯だ水にて洗ふ位にしても、可なりに治療の功を奏すとなり。捕虜の中には敵の村に進み入りて捕へ來る女も子供も有り、是等は魔雲坐王に付き早速放ち還へさしめんと三人にて相談を極め、次に兵卒の怪我を檢ため、最後に王の許に到るに、王は昨日受けたる矢創の痛みも早や大方は忘れ盡せしと見え、平氣にて立來り「白人の療治は神の如し、毒矢に射られたるもの、到底其の矢を拔く能はず

して一日々々に其毒の痛みを受け、遂に苦み死する事即ち毒矢の持前なるに、我は其毒にも感ぜず今朝は日頃の通りなり、全く白人が巧みに矢を拔き毒を消し呉れたる恩なり」と云ふ、平洲は透さず「王其恩に感ずれば、恩返として吾等の言葉に從ひ、差當り擒中の女と子供を放ち還す可し」王は迷惑氣に考へし末「虜は吾れ自ら捕へしに非ず各々我部下の中に捕へ主あり、其者が已れの食料に充つる爲め、捕へ來れる者なれば殆ど吾が一存にも計り難し、吾れ自ら捕へたる分だけは御身等の言葉に對し放ち遣る可しし」と云ひ自ら背後の物影を差示せり、茲には男女取雜ぜ十餘人の虜あり、察するに是れ悉く王自ら捕へしには有らで、捕虜の中より最も肉肥えて旨味の有り相なる者を選抜きたる者ならん、寺森醫師は其者共の體格を熟々見て、平洲と茂林とに向ひ「見給へ彼等の體格の立派な事を、殆ど白人に似て居るぢや無いか、今までの研究に由ると、亞弗利加は東西南北ともに海の際には極めて體格の劣等な人類が棲で居て、夫より內地へ入る丈け體格が立派に成る、北より進んでも南より進んでも其事實が明かだ、是で推して見ると、麻列峨國は此土門陀よりも更に體の能い人種に逢ひ無い、眞に亞弗利加の眞中と云ふ遖青山の麓まで行

けば何れほど立派な體格の人が有るかも知れぬ、僕は此理に由て、黒天女の國の有事を確信する、黒天女は即ち女の體格の最も完全に發達した者で、夫が爲め美人國などゝ云ふ綽名を得た者で有ふ、僕が黒天女の國の事を云ふと君方は、ソレ又女護洲の妄想を持ち出したなどゝ、何か僕に野心でも有るかの如く笑ふけれど、決して僕は妄想でも野心でも無い、今までの實驗から推理して亞弗利加の中央には、色こそ黒けれ完全なる體の人種、從つて完全に發達を遂げた美人が住で居るに違ひ無い」とて頻に捕虜の體格に感じて、例の黒天女説を最と眞面目に言張るは、成程全くの妄想にも有らずと見えたり。

百四

寺森が黒犬女國の講釋は多少の道理ある如くにも思はるれど、去る閑話に時を移す可き際ならねば平洲は好い加減に聞流して、先づ麾雲坐王自身の捕へしと云ふ其虜の數を檢むるに、女四人男八人、合せて十有二人なり。平「王よ此四人の女を放ちたりとて、別に御身の慈悲を示すに足らず、女や子供の戰爭に關係せねば何の罪も無し、何故に捕虜總體の中より悉く女子供を放ち還しては遣はさゞるや、彼れ等を放ち還さば御身の恩に感じこそすれ、再び御身に抵抗する如き氣遣ひは少しも無きに」王「如何に云はるゝとも吾は手下の捕へたる者を放たしむるに忍びず」「然らば是等の女子供を如何にするや」「兵士の勇氣を養ふ爲め、多少は彼等の嬲殺して喰ふに任すも、其の大部分は一纏めにして鐵荊の支配地に送り置き、歸路に又引連れて國に歸り、奴隷として使用するなり、使用して猶餘らば他の種族に賣渡し、牛羊などゝ取替るなり」成るほど彼等が身に取りては捕虜は大切の寶なり、戰爭の目的も半は捕虜を得るに在る程なる可し。

餘りに文明流の道德を以て、斯る蠻族に强附るは却て害多き事幾度の經驗にて明白なれば、是も詮方なく成る可くは彼の意に任す事とし、更に大切の川談を持出し「王よ、實は今朝、御身に告ぐ可き一大事件あり、幷は外ならず、白女の父の手掛を得し事なり」とて昨夜町盡れの小屋にて男爵の書遺せし書面を得たる事より、老黒奴の直話にて男爵が更に麻列峨國へ出發したる次第を語り聞しむるに、王は驚き「爾うまで分りしならば、是より直ちに麻列峨國へ向け出發せん」と

云ふ元より平洲も茂林も王が若し此上進む能はずとて、白女を連て歸らんなど云出るに於ては、由々しき大事なる可しと、窃に氣遣ひ居る事なれば、今此の一語を聞きて心中に痛く喜び、茂「然り直ちに麻列峨へ向け出發す可きは無論の事なり、殊に同國は御身が國と先祖の時に同盟せし國と聞けば」「然り、旁々以て吾も出發に勇むなり」と云ひ更に何事をか思出せし如く、勢込めて「然らば出發を祝する爲め、捕虜中の幾人を殺して血祭とせん、白女にも活潑なる血祭を見せしめ度し」又しても斯る事を言出すは、誠に持餘す次第なれど、不幸中の幸ひには王が白女の事と聞けば、何事をも信ずる有樣なるより「否白女は血祭を見るよりも、其殺す丈の捕虜を貰ひ受る事を好むならん、爾すれば白女は御身の親切をも認むるならん」「眞に然るか、血祭と云へば兵士一人も異存なけれど、白女に贈ると云はゞ兵士定めし苦情を云ふならん、併し吾れ精々說伏せて白女へ贈る事とせん、白女は、捕虜何人ほどを欲しゝと云ふにや」茂「女子供を悉く曳れさへすれば、男は少くとも可なり、然り御身の見込に從ふ可し」女子供を殘らずとは既に一旦指みたる所なれば、魔王も從ひ兼ぬる如く、深く考へ込みたるが頓て「然らば初めに御身等が女子供を

放てと云ひしも白女よりの言傳なりしか」「然り」「女子供と男十人ごを與ふれば、白女は眞に歡ぶ可きか」「勿論なり」王は思ひ切りたる樣子にて「然らば其事を計はん、暫く吾よりの返事を待れよ」と云ふ、是にて三人は引取りしが、間も無く王より兵士を說伏せ得たる旨を通じ、猶ほ男の捕虜十人をば衆の中より選び取られ度し、との意を言越したれば、平洲、茂林は、芽蘭夫人にも事の次第を告げ、再び王の許に出で行かんとするに、芽蘭夫人は暫しと聲掛け「シテ男の捕虜十人は何の樣なのを選びて放つお積ですか」「無論事情の最も憫む可き者を放ちます」「夫は好いお心掛ですが、其十人を選ぶ事は私に任せて頂きませう」二人は夫人が何の意なるを察し得ざるも、何さま夫人を大將と推し何事も其意に從ふ初よりの仕來りなれば、一も二も無く命に服し「夫は貴女の御隨意ですが、捕虜の傍へ行ば實に無慘な有樣ばかりで却て貴女の神經を痛めます」「イヽエ自分で其所へ行のでは有ません、昨夜の老黑奴に選せます」老黑奴ごは益々出て益々異樣なり 茂「エ、那の樣な者に」「ハイ彼は芽蘭男爵が命の親ごまで書て有る程ですから、私は其恩の幾分なりとも彼へ返し度と思ひます、何か彼を連て行き選ばせて下さい」と繰返せり、二人

は之を充分なる恩返の道ぞとも思ひ得されど、其言葉に從ひて、足も腰も確には立得ざる老黒奴に杖を與へ、捕虜の繋るゝ所に連行き、譯を聞かせて十人を選ましむるに、彼れは事情の憐む可きや否には頓着せず、此所彼所より抜集めて十人の數に達せしめしが、後にて聞けば、彼れは自分の最も懇意なる者と、土地にて最も尊敬せらるゝ者とを選びたりとの事なり。

斯て魔王と再度の交渉を遂げ、此十人に女子供殘らずを加へ、放たんとするに、其一同は嬉しげに何事をか語り合し末、忽ち異樣なる叫び聲と共に老黒奴の前に伏し、神を拜む如くに彼れを拜み、遂に手取り足取り彼れを高く舁ぎ上げ、御輿の如くに運び去れり。

事餘りに異樣なれば、平洲も茂林も名澤に向ひ、其次第を聞くに、老黒奴に選び出されし十人が老黒奴の恩なる事を女子供にまで告げしより、一同は老黒奴を「生神なり、豫言者なり、幸ひを與ふる福神なり」と云ひ只管ら敬ひて運び去りし者なれば、是より直ちに老黒奴は此種族中第一の尊敬を得、限り無き勢力を得て暮す可しとの事なり、如何にも亞弗利加の內地に於ては、少したりとも不思議の功ある者を、總て神の代理者、又は豫言者と云ひ、生神として王よりも尊ひ、

王自らも其前に平伏して福を請ふ習ひ有り、芽蘭夫人は斯る習慣を見抜き、特に彼れへ捕虜選取の事を任せし者と見ゆ、左すれば彼が芽蘭男爵に施せし恩は、十倍百倍にして返されたる者なり平洲、茂林は今に始めぬ夫人の注意に感心し、更に麻列峨國へ出發する手筈の相談には取掛りぬ。

百五

麻列峨國に入込むは勿々容易の事に非ず、芽蘭男爵が單身にて入行きしと違ひ、魔雲坐王の外に其手下たる數千の蠻兵をも引連て行く事なれば、或は戰爭の意を以て來りし者と誤認せられ、先方より襲はるゝ事無しとも限らず、若し襲はるゝ事無しとも、得たり賢しと應戰するが蠻兵の本性なれば、又も此所にて演ぜし如き無慘の活劇を演じ、夫が爲に一行の進路に如何ほど困難ならしむるやも知れず、成る可くは爾る事無からしめ、平和安穩なる旅に仕たしと、平洲、茂林等は樣々に評議を凝し、遂に兎も角も其國の入口まで到り、魔雲坐王より麻列峨の王へ特使を馳せ、先祖の

時代に結びたる舊交を温むる爲め、平和の目的を以て來れり、との旨を通ぜしむる事にせんと云ふに決したり。

斯くすれば多分は戰ひ、其他の困難を避け得べきも、果して特使の任に當り得る人物あるか、無事に使命を終るを得可きや、其邊も氣遣はしく、夫や是やの評議に又一日を費したるに、玆に圖らぬ便宜を得たるは、前日放ちたる彼の老黑奴が、自ら麻列峨國への案內者たらんと云込み來りし一事なり、彼れは旣に芽蘭男爵の書中に記せし如く、麻列峨の生れなれば鄕國を思ふ心、日として絕るは有らされど、捕虜となりて此土地に留置れたる身分なれば、今までは歸鄕の望を人に告る事すら得ず、殊に足の立たざる身を以て歸鄕の企てなどは、到底思ひも寄らぬ所なりしに今は芽蘭夫人の計ひにて、土門陀の捕虜を連返りし爲め、土人一般より生神と崇められ、牛馬其他の供物をも多く得て、纔か廿四時間の間に、酋長をも脚下に平伏せしめ、思ふ事意の如く成らぬは無きに至りたれば、錦を着て鄕に歸る望は一時に現れ來り、直に此一行の許に來り、案內者として我身を馬に載せ、召連られよと言込みたるなり。

誠に勿怪の幸なれば、其請を許可するに、老黑奴は昨日放ちし捕虜の中、深く己れに歸依する俄信者五名を引連れ、其身を馬の脊に、確と結び附けて來りしかば、直ちに全隊を率出發したるが、道は絕えずキバラヒ川に沿ひ溯る事二日にして山路に達せり、山と山との間、川の流れ來る所ろ、卽ち此行の道なれば、蹈迷ふ恐れは無きも、今までに見ぬ程の山脈にして、或時は落んとする如き絕壁の間を通り、或時は老樹天を遮りて、晝も日光を洩さゞる密林の中を潛り、一方ならぬ艱難を嘗めたれど、夫等は管々しく記すに及ばず、唯氣遣はしきは、病餘の身なりしと云ふ芽蘭男爵が果して無事に斯る所を通り得て、別條も無く目指す地に入込み得しやとの一條なり今までは、男爵の死骸と認む可き者に見當りたる者無しと云ふ報告を頼りとせしも、斯る深山にて、縱し死すとても死骸の見當らぬは當然なり、平洲も茂林も心の中に斯くは思へご、口に出して、夫人に餘計の心配を掛るに忍びず、唯だ無言を守りしが、夫人も同じ疑ひは有るさ見え、山路に差掛りてよりは何と無く欝ぎ勝なりしも、四日ほどにて山路は盡き、漸く麻列峨國の平地に出たり。

見れば一體の平野、所ろ〴〵に耕地とも稱す可き部分あり、扨は麻列峨國の民は地を耕して物を植ゑ、收穫する事を知れるにや、可通無府を出で〻此所に至るまで幾千里、其里には樣々の民ありしも、眞に地を耕す者とては有る事無く、其尤も進みたる種族にても唯だ地味の天然に豐饒なる所へ種を投じて、自然の生長に任すを知り、其上を知らぬ有樣なるに、此種族に至り不充分ながら、耕作の跡あるは、曾て寺森醫師の言ひし如く、亞弗利加は最暗黑の中央に、最も進化せし人種あるを證する者か、一同は幽谷より喬木に遷りたる心地にて、遠く耕地を望みつゝ、又思へば芽蘭男爵若し無事に、今來し深林を潛り得て、此土地に入り得しとなば、多分は身體の健康をも回復せしならん、今までの蠻地に死せざる者が此の稍や進化せし所に入りて死する苦無ければ、一同は斯く思ひ、殆ど蘇生の心地にて先づ此所に小憩したり。

百六

既に耕地の有る柄には此邊に必ず人家も有らん、人家あらば芽蘭男爵が果して此國内へ無事に

入込み、此の邊りを通りしや否を確むるも難からず、黑人のみの住へる土地を白人の通るあらば黑人一同非常に珍しき者と思ひ、寄集いて之を虐ぐるか、將た之を敬まふか、孰れにしても長く一同の記憶に存するは今までの經驗にて明かなれば、兎に角人家有る所まで行きて尋ぬる事にせんと、平洲は先づ望遠鏡を出して望み見るに、所々に樹木の林を爲せるを見れば、人家らしきものは見えず、密するに蠻人の住居とて最と低く作りある爲め、樹蔭に隱れて見得ざる者なる可し耕地の間には人の踏開きたる徑の如き所も有るにぞ、狂ひ惑ふに及ばず、と又も幾里をか進みたるに、果せる哉、林の蔭に低き人家ありて、住へる者ども一行の有樣を見、何事にやと怪みて出で來り、見る中に數十人群れ集りて、口々に何事をか語り初めたれば、平洲は行を留めて、老兵名澤に、彼等が何事を云つゝ有やを聞しむるに、名澤は暫く聞たる上、此邊の言葉は門鳩地方や土門陀地方と凡ての語源は同一なる可しと思はるれど、調子の全く違へる爲、聞慣るゝ迄は解し得ずと云、是何よりの困難なり、如何にせんかと思案する中、土門陀にて救ひたる、彼の老黑奴が、鄕國の人の顏を見て懷しさに堪ざる如く、背後の方より馬を躍らせて進み出たれば、平洲は

是幸ひと、更に老黒奴をば通辯の又通辯と爲し、彼をして土人の言葉を名澤まで取次がしめ、更に名澤をして老黒奴の言葉を飜譯せしむるに、土人は此一行が戰爭の目的なるか平和の目的なるかを疑ひ、逃げか襲はんかと評議しつゝ有りとの事にて、尚其中の一人は「見ずや先に來りし如き白人の又來れる事を、先の白人は甚だ穩かにて爭ひなどは爲し得ざる者なりき、此白人等も同樣なる可し、戰爭の爲めには非ざるならん」と衆を制しつゝ有りとの事なり、扨は芽蘭男爵が無事に此所を通しと見ゆ、先の白人とは男爵なる事明なり、男爵は病後の身なるが爲に最穩かに此土人等の憐みを受て通りし者と見ゆ。去れば平洲は更に、此の一行が少しも戰爭の意なきことより、單に麻列峨の國王と、昔の交はりを温めん爲に來りし旨を說明さしむるに、土人は大に安心せし如く鎭りたれば、更に先の白人とは如何なる人にして、何時頃、如何にして通りしやを問はしむるに、彼等の記憶は最と明なり、其言に由れば、先の白人は宛も天より降りし如く、或朝耕地の芋畑に倒れ居たるを、田作る人に見出され、此村へ連來られしが、痛く餓疲れたる樣なりしかば食を與へて介抱し、其力附くを待ち、樣々に問糺したるに、遠き國より土門陀まで來

り、土門陀にて捕虜と爲り病に罹り、千辛萬苦の末、深林を潛りて此國まで來り、餓を醫せんとして芋畑に倒れし旨を手眞似や片語にて話したれば、十五日ほど此地にて介抱せし末、當人の望に由り、村より村に送りて、此國の都へ向け出發させたり。

白人の此土地に入込みしは後にも先にも是れのみなりと云ふ、其の芽蘭男爵なる事益々以て明かなり、アヽ何ぞ其樣の憐む可くして、其の志の堅固なるや、一步たりとも南に行きて斃れんと記したる男爵の言葉は、空言に非ざりき、眞に男爵の如きは、古今の遠征家中にて第一の人なりと、平洲も、茂林も、深く感激の餘り、暫しは淚の催すを制し得ず、唯だ幸ひに芽蘭夫人は、帆浦女と共に、寺森醫師を初め、下僕與助や、其他の通辯等に護られて、此問答の聞えぬほど背後の方に離て在るにぞ、平洲も茂林も夫人の心を傷めまじと、漸くに淚を隱して、更に芽蘭男爵が絃を過しは何時頃なりしやを尋ぬるに、新月の數にて十回以前なりしと云ふ、左すれば今より十月以前なりしなり、十月の月日は世界を一週するにも足る程なれど、道も無き亞弗利加の內地にて、而かも武器も無く、案內者も無き單身孤獨なる男爵の身として、能く何程をか跋涉し得べ

き、男爵今猶ほ生て有れば、今の居所と此一行との間は、多分今まで思ひしよりも近きならん、急ぎて進み行くに於ては、追附きて對面するも難からざる可き歟と、平洲も、茂林も、忽ち胸に浪打つを覺えたり。

百七

芽蘭男爵が此邊を通りしは、僅に十箇月以前に在りとせば、實に遠からずして追附く可き見込無きに非ず、一同は斯く思ひて勇み立ち、更に是より後の方法を相談するに、既に定めたる如く先づ老黒奴を使者として此國の王の許まで遣はし、王に面會して問試むる一方なり、男爵が王宮を指して進みし事は明白の事實なれば、縦しや今まで王宮に逗留せずとするも、王自ら男爵の身に付き樣々の事を知れるに相違無し、今までは唯だ雲を捉む如き尋ね物なりしも、今や一歩一歩に其足跡を突留め行く場合とは成りたれば、用心も自から綿密なり。

相談決したれば、直に老黒奴を呼出して、彼れが親しく此國の王を知れるやを問ふに、彼れが

敵國に捕はれざる以前は、巖如郎と云へる老王、位に在り、彼れは其の近衛の一兵にして深く信任せられたるも、王の年より案ずれば最早や死去して、其子が位に付きたる頃なり、子は其頃猶ほ七八歳の童子なりしかば今まで老黒奴の事を覺えて居る可しとは思はれぬも、代々巖如郎の家筋は名君をのみ出すと言傳らるゝ程なれば、今王も定めし巖如郎の如き賢き人にして、斯る特使に接すれば、喜びて迎ふるに相違無しと云ふ、然らば早速に出發せよとて、彼れに通辯阿馬、及び魔雲坐王の腹臣數名を附添はせ、樣々の土産物を持たしめて先發せしめ、一同は其後を追ひて進みしが、進むに從ひ此國の人種が、野蠻人に珍しきほど體格の優れたる樣分り、又產業牧業などの大に進みたる樣子も察せらるゝにぞ、平洲、茂林等は亞弗利加內地の益々不可思議なるに驚き「此樣子では眞に完全な美人の住む國が有るかも知れぬ」と云へば、寺森は己が先見を誇りなどして五に道の遠きをも忘れたり。

翌日の早朝には王宮に間近まで進むに、先發せし老黒奴の一隊は早や途中まで引返し來り、首尾能く使命を果したる旨を傳へり、其言葉に由れば、今の王は豫想に違はず、巖如郎の第二世に

して、昔老黒奴が敵國に捕はれし事を前王より聞知れるのみならず、猶ほ従者の中には老黒奴を知れる者も多く、自然ら老黒奴は非常に待遇されたりと云ひ、又今の王巖如郎第二世は、昔此國が門鳩地方と、同盟せし事をも先祖より、傳聞けりとの事にて、深く魔雲坐王が、舊交を温むる爲め來りしを喜ぶとの意をも示したり、ニ云ふにぞ、一同は大に安心し、之よりは魔雲坐王を先に立て進むに、暫くにして第二世巖如郎は多勢の従者を連れ、王宮の外なる廣場まで出迎へたり魔雲坐王は斯と見て馬を下り、巖如郎の許に至り、彼の老黒奴を介して對面の挨拶を爲し、宛も多年相識れる友人の如く親しげに問答を初めたるが、時々此方の白人を指すは、平洲、寺森等の事を語る者と察せらる、巖如郎は魔雲坐が指す度に、首を回らせて此方を見る其顔付と云ひ、樣子と云ひ、野蠻人とは思はれず、若し色をだに白くせば、歐羅巴の人と並ぶるとも恥しからぬ程なれば、平洲は茂林に向ひ、「何だ意外に立派な男ぢや無いか」と云へば背後に立てる帆浦女は「本統に立派です亞弗利加へ這入てから此樣な王を初て見ました」と口を出せり。

平洲も茂林も、先に此女が魔雲坐王を見初め、一方ならぬ失態を仕出來せし事を知れば、亦も

此の巖如郎第二世に對し同じ失態をせねば好いがニ一樣に氣遣ふ樣を、寺森は早くも見て取り挨拶は濟み、魔雲坐自ら一同を招きたれば、一同其處に進み出しが、斯る外交の事は今まで通り茂林が擔任者なれば、彼は老黒奴と亞利とを二重に通辯人と爲し「王よ我々は凡そ十ケ月ほど以前に、同じ白人の此國へ來りしならんと思ひ、其人を尋ねて來し者なり、王定めし其者を客とせられしならん」王は最と靜に「然り、余は初て其時に白き人を見たり」と云ふ、扨は愈男爵が此王に逢たる事確なりと、一同宛も暗夜に一點の星光を認め得し如き想にて、顏と顏見合せしが中にも、芽蘭夫人は波立つ胸を鎭めんとする如く、兩手を心窩の所に當てたり、茂林は問を重ね「シテ御身は其白人を如何にせしぞ」「余は先例の無き事とて如何にす可きやを知らず、遠ざくる外無しと思ひたるに、其白人は余の眼前にて驚く可き魔法を使ひ、余を感服せしめたれば、余は敬ひて客分としたり」魔法とは何の謂にや、男爵は如何なる事を示して此王の尊敬を買ひたるにや、智慧に富たる人なりしと聞けば、唯だ一擧にて王を驚かしたる事と想はる、王は猶ほ語を繼

ぎ「而も其魔法の種を余に贈りたり」「其魔法とは如何なる者なりしや」王「墨汁を用ひずして黒く文字を書く伎なり、然り魔法の筆なり、是を見られよ」と云ひ、腰に下げたる皮袋の中より、何やら取出して示すを見れば、削り盡して二寸ばかりなる鉛筆なり、一同は可笑き中にも、深く男爵の頓智に感服したり。

百八

如何にも斯る野蠻人に取りては、墨を用ひずに字を書く事魔法の如くに思はるゝならん、芽蘭男爵が鉛筆を以て、忽ち此王を服したる頓智は驚くの外なしと雖も、是を以て考ふるに、男爵が如何に困窮の有樣なりしやを察するに足るなり、多分男爵は使ひ古せし鉛筆の外、一物をも有せざりしならん、鉛筆は旅行家に取り、一刻も手離し難き品なれば、是より外に贈る可き品無かりし爲め止むを得ず贈りたる者ならん、平洲も茂林も斯思ひては當時男爵の憐む可き狀、歷々と目に見る如き心地せられ、暫くは無言なるに、王は語を繼ぎ「彼の白人は御身等の何なるや」と問

ふ、傍には魔雲坐王が耳立て聞澄しつゝ有れば、父と答ふる一方なり 茂「彼れは我等の父なり」巖如郎は驚きたる樣子にて「ナニ父となり、一同の父には非ずと疑ひ斯くは驚きて問ふ者にや、若し此怪みを魔雲坐王に悟られては、今まで彼れを誘ひ來し、一同の僞り暴露する譯なれば、茂林は必死の思ひにて「勿論父なり、我等豈に父ならぬ者を父なりと僞る如き者ならんや」と念を推せり、巖如郎は「左樣なるか」と含首くに、心敏き魔雲坐は勿々に聞流さず、直接に巖如郎に向ひ「何か其白人を、此人達の父に非ずと思ふ廉あるや」と問ふ、ア、巖如郎は如何に答へんとはする、其返事一つにて一同は、魔雲坐の部下の兵に、活ながら喰はるゝ事ともならん、巖如郎は徐ろに「イヤ父に非ずと思ふ廉とては無し」と云ふ、一同はホツと安心するに、魔雲坐は猶ほ深く「併し年齡は何程なりし、果して此人の父たる可き年頃なるや」何ぞ其問ふ事の鋭き 巖「左ればなり、鬚蓬々と生茂り、顏にも多少の皺あり、肉も痩せて有りたり、定かには知り難きも此の艶々して若き人達の父には充分なる年頃と見たり」巖如郎が斯く答ふるは誠に天の助けと云ふ可し、左れど鬚の蓬々と茂れりと云ひ、

痩せて皺ありなど云へるを見れば男爵が長の旅に疲れ、且は病後の窶れ方甚だしかりしと知る可し兼て寫眞に見、又夫人より聞きし所に由れば男爵は、平洲、茂林等より僅か三四歳の年嵩なるに過ぎず、殊に髪黒く顔色艶々しき質なりこの事なるに、白髪こ爲りて顔も老人と見紛ふ許に老けたるは、云ふ迄も無く艱難を冒し侵せしが爲なり、實に男爵が亞弗利加に入りてより數年の境涯は、艱難の數、常人の五十年よりも多かりしなる可し、平洲、茂林よりも夫人自らは斯る事を思ひ廻して、殆ど情に堪へざる有樣なり。獨り此中にて下僕興助のみは何やらん嬉しげに、郷笑みて止まざるにぞ、寺森醫師は小聲にて之を咎め、何だお前は何を其樣に喜ぶのだ」と云ふに「是で私の手柄が皆樣に分りました、皆樣が男爵の子の樣に若く見られるは私が一所に居て鬚を剃り髪を刈りなど仕て上げる爲ですよ、私を間抜なぞこ時々お叱り成さるけれど、私が居無らう者ならお三人とも鬚蓬々と生茂り、男爵よりも一層年倍に見られるかも知れません、此旅行の手柄は恐く私が第一等でせう」と云ふ、成る程一應の道理は有れど斯る事を言立つ可き場合ならねば、茂林は此方より目を以て叱り止めぬ。

魔雲坐は猶も巖如郎に向ひ「併し顔形は果して親子の如く相似たるや」巖如郎は熟々と平洲茂林の顔を見し末「然り余は彼の白人をば痛く鼻の高き人と思ひたるが此人々も亦鼻高し、其外にも似たる所甚だ多し、此人々が若し先の白人ほど年取れば、必ず同じ容貌こ爲る可し」こ答ふ、是も亦天幸なれど、初めて白人を見る人は、何の顔も此顔も死ど同じ樣に思ふ事、他人種の國に旅行せし人が、皆實驗して知たる所なれば、巖如郎も猶ほ白人に慣れぬだけ非常に相似たる者と思へるならん、魔雲坐は又「然らば御身は初め此人々が其白人を父なりこ云ひし時、何故に驚き怪む樣子を爲せしや、御身は二度までも繰返して「父こな」ト問しに非ずや」ア、愛情は極めて疑ひ深き者なり、魔雲坐王鋭敏の君とは云へ、本來心の粗雜なる野蠻人として、尋常の場合ならば斯まで精密なる問を發し得る筈無けれど、唯だ彼れ芽蘭夫人に滿腹の愛を注ぎ、日々に其情の募り來りて、今は少の事にも心配する程こ爲りたれば、知らず〳〵其心に疑ひ危む力へのみ延び來りたる者なる可し、巖如郎は之に答へ「二年も經ぬうらに白人が二回まで此國に來るのみかは、前の白人の子なりと聞きし故、余は唯だ驚きたるなり、子が尋ね來る可しこは少しも思ひ寄らざ

りし故なり」洵に巖如郎の言葉は一々、一同の望む通りに出たれば魔雲坐も全く疑ひを解き、痛く安心して身を引きたり。今まで情に堪得ずして一言だも發せざりし芽蘭夫人は、何よりも所夫の身の上氣遣はしければ今は忍びかねたる如く自ら巖如郎の前に出で「シテ其白人は今も御身の許に逗留せるや」と問掛けたり。

百九

芽蘭男爵、今も猶ほ此國に在りや否、是れ一同が第一に知り度しとする所なれば、夫人が先づ之より問ふも其情の自然なる可し、巖如郎は「否、長き以前に、既に此國を出發したり、今は余の領地内に居らず」と答へぬ、夫人は痛く失望せし樣子にて、其身を支ふる事だも得ず、倒るゝ許りに蹌踉きて、縱に老兵名澤に抱止められしが、是よりして夫人は、日頃の落着きたるにも似ず、最と忙しげに下の條々を問掛けたり、其樣宛かも胸に溜りたる心配をば、我れ知らず一時に吐出すに似たり「シテ其白人は無事に此國を立去りしや、今以て生て居るにや」「左ればなり、此國を立去る時は無事なりしも、其後は如何にせしか更に便りを聞かざるなり」と答ふ、是等の問答は一々通辯の口を經る者にして、初の程は名澤と老黑奴と兩名の重譯なりしに、漸く名澤が此國の言葉を聞慣れ、一人にて通じ得る事ゝはなりしも、夫人は猶ほ通譯を待遠く思ふ程なり「シタが其人の出發は今より何れほど以前なりしや」巖如郎は良久しく瞑目して考へし末、其人の立去りてより、六回の新月を閱したり」左すれば男爵は今より六ケ月以前まで、此國に居たる者なり、男爵と一同との距離は凡そ一年ほど成る可しと思ひしも、今は其の半と爲れり「其人は孰れの方に向け出發せしや」「南方に向ひたり、彼の靑き山の方へ」とて遙靑山を指すにぞ一同は振向きて其方を見るに、茲に來りては最早や遙靑山も、左ほどには遠からず、數日の旅にて達し得らるゝ許りに見ゆ　夫「此の國の南に在る國は何と云ふや」巖「遊林臺と云ふ」「其の國の王は何と云ふ名なるや」「其國には王無きなり、輪陀と稱する女王之を支配せり、依て一名輪陀國とも云ふなり」此絕域に女王の支配する國ありとは、是れ或は噂に聞く女護の洲、一名黑天女の國には有らぬかと、寺森醫師は思ふなり「其國は大國なるや」「然り余の國よりも大なり、其區域は南の方

遙青山の麓まで達せり」此時まで無言にて聞居たる平洲は、夫人の疲れたる樣子を察し、自ら問答の役を引受け「シテ其の女王は果して我等の父を國境に入れ、御身の如く客分として迎へしと思はるゝや」余は其邊まで知る能はざれど、遊林臺の國は甚だ嚴重なり、其の女王輪陀と云ふ者實に綿密に國を治む、故に余が國の如きは隣國と云ひ、且は同盟國なれども、余の國人容易には其の國に入込む事を許されざるなり」「夫れでも吾等の父は其國に入込み得たるや、御身は其白人が既に南方へ行けりと云ひ、又此國には居らずと云ひしに非ずや、此國を去て南方へ行くには、其の輪陀の國へ入込むの外無きに非ずや」「然り其國へ入込む外無し、故に余は切に白人を留めたり、去れど白人は聽かずして進みたり、余の考へにては、白人其國に入込むや直ちに捕へられて虜とせられたるならん」「何故に、爾う思ふや」「其後絶えて音沙汰無ければなり、白人は若し進み得ざる所あらば、余の國に歸り來らんと約束したり、然るに歸り來らざるは捕はれたる證據なり或は殺されしやも知れず」「夫とも遙青山を越えて猶先まで進みしやも圖られまじ」「否、遙青山は地の果なり、彼の山の先には決して行く可き所なし」扨は此土地の人迄も彼の山を地の盡る

所と思へりと見ゆ、彼山の先に湖水あり、湖水の先には殘日坡より來る道ある事は、南方より此方へ向ひて進たる探險家の、皆說く所なるにと、平洲は心に思へども、斯る事を言爭ふとも詮無ければ、平洲は更に「若吾等の父猶活て有らば、吾等は輪陀の國まで入込み、父に逢ふ一方なり」王は此言葉の大膽なるに驚きし樣子にて「何と云はるゝ御身等も亦輪陀の國へ、ア、白人は命知らずなり、輪陀國へ入込めば捕はるか殺されるか其一を免れず」「併し吾々は賄賂を以て安全に進み得るなり」賄賂と云へる語は此國の言葉に無しとの事にて名澤は暫く老黑奴に相談したるも終に適當の譯語を得ず、止を得ず「物を贈りて輪陀女王を歡ばせ、其禮として通して貰ふなり」と最と迂遠く解明すに「物を贈りたりとて嚴重なる女王が應ずる筈無し」と答ふ「然らば吾等兵力を以て進まんのみ」王は又々驚きて「ア、御身等は輪陀國を知らぬ者よな、輪陀の國に向て兵力は何の功無し、見らるゝ如く余の國は大國にて、兵も甚だ强けれ輪陀の國に向ひては如何ともする能はず、止む無く年々貢を贈りて女王を宥め、纔に其の逆鱗に觸るゝを避るのみ、余が國の强兵も輪陀國の名を聞きては戰慄せり、若し逆鱗に觸るゝ有らば、余が國は直ちに粉碎せられん」

扨は此の南隣は亞弗利加第一等の強國と見えたり、遙青山下に爾る强大の國あらんとは、實に今までの探險家が思ひも寄らざる所なり、或は芽蘭男爵も其の强國たるを聞き、殊更ら探らん爲め進み入りしや知る可からず「眞に輪陀國の兵は夫ほど强きか」巖「否、余等が恐るゝは其の兵に非ず美人を以て組織したる、其の娘子軍なり」と云ふ、實に意外の事も有る者かな、輪陀の國は女を以て王と爲し更に娘子軍を編みて國を護らするにや、左すれば眞成に女護の國なり。

百十

美人を以て兵と爲し其國を護れりとは初て聞く所なれば、一同痛く怪むに、巖如郎は其色を見て「御身等疑ふ樣子なれど、是れ少しも僞りに非ず」とて是より說明す所を聞けば、此國の先王たる第一世巖如郎死し、今の第二世巖如郎が位に付きたる時、宛も遊林臺國にても先王死し、今の女王輪陀が祚を踐みたるが、輪陀は女に似氣無き武勇の君にて、直ちに此國を亡さん心を起し大兵を率て攻來れり、巖如郎も之を機として遊林臺を我が屬國にせん者と思ひ起ち、直に大兵を

起して應じ戰かひ、此方の勢ひ彼れに勝り、敵兵を國境より追斥けしのみならず、猶ほ敵の國に進み入りしに、輪陀女王は最早や男子の兵にのみ任せては置き難しと爲し、衆て組織し訓練して有る其の美人軍をして助けしめたり、美人軍の强き事は非常にして男子軍の敗餘を受け、縱橫に軀馳して、瞬く暇に巖如郎の兵を瞰散したり、勝ち誇りたる巖如郎の兵も、到底美人軍に敵する能はず、幾度び戰かひても直ちに敗らるゝ有樣なれば、巖如郎自ら到底遊林臺の國と戰ひ得ざるを知り、終に和を講じ、夫より後は年々輪陀女王に貢物を贈る事に約し、今以て其約束を守れりと云ふ。夫にしても美人軍は何が爲に斯くは强きや、縱し野蠻の種類には女子の膂力男子に劣らざる如き人種、往々無きに非ずとは云へ、斯くまで慓悍なる女子軍は例あるを聞かず、是れも巖如郎の說明を聞くに、美人軍は男子軍の如き弓矢投槍の如き飛道具を有せず、右手に長さ二尺ほどの銳き刀を持、左手には同じ長さの劍を携へ、兩方を使ふ事、殆ご目に見ぬ程巧なり、斯る武器なれば、敵と距離を隔てゝ戰ふ事を爲ず、吶喊して肉薄し來るを常とす、其來を見て此方より矢を注ぎ槍を投などして近かしめじとすれば、身の輕しして進退の速かなる事、飛燕の密林を穿つ

が如し、右に在かと見れば忽焉として左に在り、飜々と矢を返して疾風の勢ひを以て推寄せ來る、既に來れば、其刀と劍とに倒れざる敵は有らず、殊に彼等は既に接戰の目的なるを以て、顏の外は寸膚も現はさぬほど、嚴重に鐵製の鎧を以て固め、矢當るとも內に達せず、槍に突るゝも傷かず、而も其鎧には長き幾寸の針を隙間も無く植附け、宛も釘蝟虫の如き打立なれば、組伏んとするも組むに由なし、組む者は先づ其針に刺され、自ら傷きて倒るゝを常とす、斯る有樣なれば、到底人間業を以て敵するの道なく、殊に國中の女、十七八歲より廿四五歲までは全く美人軍に編入せらるゝ制なれば、其數も幾万と云ふを知らず、之に敵して無事を得るの道は唯だ戰はずして逃るに在り、左れば嚴如郎も止を得ずして和睦したりとの事なり。

此設明を聞終りて茂林は平洲に向ひ「實に意外な話だけれど、吾々が之に恐れたと見られては仕方が無い」と云ひ平洲は又「我々よりも魔雲坐の心に恐れを抱せては猶更ら困難だ、彼が此より先へ進む氣が無く成つて又候、玆から芽蘭夫人を請受て歸るなど云出しては大變だから」茂林は「實に爾だ、ナニ僕の辯舌を以て、魔雲坐王に其樣な恐を起さしめぬ丈の豫防をするよ」と云ひ、更に嚴如郎に打向ひ、嘲笑ふ調子にて「ハヽア御身の兵は武器が充分ならざる故、其美人軍に敵し得ざるなり、吾等の兵は火藥と云へる者を持ち、此國に入てより雷を使ふまで評せらるゝ程なれば、美人軍とて恐るゝに足らんや、必要の場合には皆殺にしてお目に掛くるも難からず」嚴如郎は信ぜぬ樣子にて「ナニ火藥とな、火藥の恐る可き事は、先頃御身の父の白人より詳く聞きて吾れ能く知れり、去れど火藥は一發毎に夫だけ減る者にて、終に盡る時有りと聞く、盡て後には如何とも無し難ければ、吾等の武器槍長刀が幾等使ふとも盡ざるに如かんや」茂林は玆ぞと思ひ「然り盡る時は有れど盡る迄に美人軍を全滅するなり、況んや吾等には亞弗利加第一の精兵たる魔雲坐王が味方せるをや」と云ひて夫と無く王の力を顧み「門鳩兵の强き事は美人軍の比に非ず、吾等は其兵が過日土門陀の兵と戰ひたる實驗にて能く知れり」と云ふ、是れ暗に魔雲坐王を煽起して美人軍を恐れざらしめん計略なり「イヤ御身等と魔雲坐王と聯合し縱しや美人軍の半分をまで殺し得るとも、殘る半分の爲め御身等も魔雲坐の兵も殺し盡さる可し」「でも吾等の父は一人にて其國に進み入りしに非ずや」「一人なるが故に進み入り得しなれ、大勢にて行かば必

ず敵と見られて辛き目に逢はん」「否々、吾等は父が入込み得たる所へ、入込み得ざる筈は無し、敵と見るゝも恐るゝ所に非ず、必ず進み入りてお目に掛く可し」と云ひ更に魔雲坐と共部下とに向ひ矢張り名澤に通譯せしめて如何に人々、是なる巖如郎は亞弗利加第一の強兵たる御身等を指し、女の兵よりも弱しと爲し、女の兵に恐れて其國へ入込み得じと云へり、御身等は果して其言葉の如く其國に入込み得ず、弦より逃返りて物笑ひと爲る事を甘せらるゝ乎、夫とも吾等と共に遊林臺に進み入り、勇氣を此國王に示さるゝ乎」と問ふに部下の兵士は一同に大聲を發し、何やらん叫び初めぬ、其の心は問ふまでも無し、進まん〳〵と勇む者なり、中にも魔雲坐王は裂火の如く「アヽ天の蓋へる下何の地にか能く我が門鳩兵に勝つ強兵有らんや、吾れ美人兵の國に入込むまでは一歩も北に向ふまじ」と、敦圍たり。

百十一

茂林の唯一言の煽動にて魔雲坐王が遊林臺に入込んと決したるは、先づ一廉の幸ひなり、彼れ

王が芽蘭夫人を請受けて歸國せんと云ふ毎もの請求だけは豫防し得たり。

去れど又惟ひみれば遊林臺の國に在りと聞く美人軍の猖獗なるは恐れて懼れざる可からず、巖如郎の云ふ如くば、啻に野蠻國中の最強兵たるのみならず、文明國中にも之に匹ぶ者有る可しとは思はれず、針を植ゑたる鐵の鎧に身を堅め、左右の手に刀と劍とを提げ、電火の如く之を使ふ早業有りと云ふが如きは、聞きし丈には其容易ならざる對手たる事は知らる、殊に野蠻國の中には走る事馬より早く、跳廻る事鳥より輕き人種も有り、遊林臺の兵、恐らくは其の類なる可し、其うちにも未婚の女子には往々にして男子より手足の輕快に動く者多し、之を集めて軍と爲し、天下無比の精兵を作り得るは、深く怪むに足らず、斯る慓悍なる敵の、眼前に在るを知り、其國に入込む事、或は無謀の擧には非ざる乎、魔雲坐王の兵を合せて一行悉く殺さるゝ事と爲らば如何、我れに文明國の兵器ありと雖も巖如郎の云ふ如く火藥は必らず盡る時あり、況して我が兵、數多しと雖も、魔雲坐の率ゆる者、三千に過ぎず、銃器を用ふる名澤の兵は、既に百人に滿たざるなり、此の人數を賴みとして慓悍無比の敵地に入る、而も敵兵の數は我れに幾倍するを知らず

縦しや銃器火薬の力にて、首尾能く其國に入込み得るとも、若し肝腎の芽蘭男爵が其國に在らざれば如何にせん、其時こそは一切の辛苦總て徒勞に屬せん。

平洲は素より茂林自身すら斯る掛念の無き能はず、一方には氣に掛る節の多ければ、茂林は更に魔雲坐王に向ひ「御身の勇氣實に感ずるに餘り有り芽蘭夫人も定し滿足に思さる可し、去れど美人軍を敵とするには深く計略を要する所あれば、明日まで吾等をして其の計畫を盡さしめよ」と云ふに、王も之を無理とはせず「然り充分の謀事を定めし後に進まん」と答へたれば、此日は是にて休息する事と爲り、一同は此國王の巖如郎の客分として夫々天幕を張る土地等を割與へられ、引續ける旅の疲れを聊かは安め得たるが、唯だ平洲と茂林とは行手の事のみ氣に掛り、眠らんとして眠り得ず、平洲先づ天幕の外に出で、空に輝く星を眺め、故郷の空と赤道近邊の空とは星の樣まで多く違ひ、見慣れざる星宮の甚だ少きを見ては、故郷の事など思ひ出られ樣々の感慨に殆ど我を忘るゝ折しも、茂林も亦出で來り「オヽ君も寐られぬと見えるな「オ、君もか」とて、是より相携へて漫歩するうち、茂林は考へ〳〵口を開

き「吾々遊林臺の國へ入込は、眞に命掛の場所だから、一應前以て間者を入込せ、果して芽蘭男爵が其國に捕はれて居るや否を探らせ、其上の事にするが好らうと思ふ、何だらう」「僕とても其心だ、若男爵が此國に危險を悟り、道を東か西かへ曲たと云ふ見込が附けば、吾々は弦から直に西なり東なり、其男爵の行たと思はれる方へ曲るが好い、何も無益に危險の地を踏むには及ばぬ、寺森醫師だけは、美人國へ入込まずに、道を曲るは殘念だと云ふだらうがー」「爾サ、東へ曲れば殘日坡の方へ出られるに違ひ無い、西へ曲れば遙青山の裾を廻つて、何でも遠く丹鷲湖の方へ行かれるだらう、若し男爵が輪陀女王の虜と爲て居無いと爲らば、必ず西へ曲つた者と僕は認める」「無論爾だ、成る可く廣く未知の地を探險するが男爵の目的だから、人の知た殘日坡へは向はず廣さ限りの無い西南へ向たゞらう、間者を先發せしめて探らせるは孰れにしても必要だ、併し何の樣にして間者を發する」「サア其事だ、僕は樣々に考へたが、此國の王が年々遊林臺へ貢物を送ると云ふ事だのか、其使の中へ間者を入れゝば好らうぢや無いか」「けれども其使は何時發するか知れぬ、若し數ケ月の後で無ければ發せぬと云へば、何うする」「イヤ其心配は無い、君は弦へ

來る道々牧場の樣な草原が有て、其草原は存外牛羊の少いと云ふ事に氣が附たゞらう」平洲は異樣な問を聞く者かと思ひつゝ「爾だ牧場は澤山有たが、牧らせれて居る牛羊の割合に少かつた」「夫だからサ、僕は草などが多く蹂躙られて居る樣を見て、初から牛羊が少いのでは無く、澤山居た牛羊を餓に外へ取去つたのだらうと思つた」「夫が何うしたのだ」「イヤ君は毎に無く悟りが悪いよ、此國の王巖如郎が貢として牛羊を輪陀女王に贈る爲め、此頃牧場から取り集めたに違ひ無い夫れだから草は蹂躙られた儘で、未だ能くは延ずに、爾して其の割合に牛羊が少いのサ、總て此邊の貢物は、牛や羊だと云ふことだから」平洲は漸く合點し「フム其の觀察には感心した、併し最う既に貢として送出した後では無いのか」「イヤ爾で無い、僕は夕刻に、遙に王宮の背後邊で群牛の鳴く聲を聞た、何でも方々の牧場から取集めた牛を、王宮の近くへ揃へて飼て有るに違ひ無い、近々貢物の使ひを發しやうと思つて居る爲だよ」「成る程」「猶ほ念の爲に明朝王に聞けば分る果して僕の推量通りとすれば、其使の中へ間者を入れて遣るは譯も無い事」「シタが間者には誰をする」「サア其の人選が甚だ困難だ、君と大に相談せねばならね」平洲は眉を顰め「フム間者

とは云ふ者の此上も無い大任だから容易の者には任されぬとて深く考へ込む樣子なり。

百十二

實に間者は此上も無き大任なり、女謨の淵たる黒天女の國に入込み、途々にて果して芽蘭男爵が其國に入込みしや否やを探る可きは勿論、其の女王輪陀の朝廷に達しては廷内の樣子を伺ひ、愈々男爵が捕虜と爲りて有りと分らば、人に悟られぬ樣、極めて秘密に男爵と語を交へ、大凡此の一行の事を告げ、男爵を救ひ出す手筈の打合せなどをも爲さねばならず、聞く所にては、美人國は總體嚴重に境内を取締り、少しの事をも疑ひて嚴しき詮議を施し、容易に他國の人を入込ましめぬ樣子なれば、其朝廷は殊更ら取締りの行届けるに相違なく、女を以て固むる丈に、猜疑深く邪推深く、其捕虜を守る如きは、一寸の隙間も無き事なる可し、隙間無き隙を潜りて間者の使命を達せしめんには、抑々誰をか選ぶ可きや、茂林は深く考へ「第一に此間者は物に動ぜぬ勇氣が有て、最も頓智が利き、且は吾々の心を能く呑込で居ねば成らぬ、其樣な者が此一行中に在る

だらうか」「無きにしも非ずサ、君か僕か寺森醫師か此三人の内なら誰でも適任だ」茂「夫は爾サ」吾々歐羅巴人ならば申分無いけれど、誰だ顔色が違つて居る爲め迚も間者は勤まらぬ、黒人の中へ入込ませる間者は何うしても同じ黒人で無ければ、直に怪まれて勘附れる」「顔の色は繪の具を以て何うでも染めるのサ、君は此土地へ入込で以來、澤山に土人の姿を寫し、終に土人の肉色を其儘寫す繪具の調合を發明したと云か先日話した樣だ」茂「左樣、繪の具の調合は充分に發明した、夫は最う白人の顔を黒奴の色と見分けの附かぬ樣に染めるには十分間も掛らぬが、夫かとて眞逆に寺森醫師に此樣な辛い使ひを頼む譯には行かず、然らば僕が自分で勤めては何うかと云ふに、僕は否やだ、飛に自分で厭なものを君に頼むと云ふ譯にも行かぬ、君は戀の敵だから殆んど憎さに堪へぬけれど、戀を離れて友人として考へて見れば、最愛の友人だ、人の物笑ひと爲る樣な役目には君を立たせ度いと思はぬ」平洲は心の中に、若し此役を首尾能く勤め得ば、今までに無き程の手柄なれば必ず大に夫人の心を動し得て、茂林に勝つ見込みも無きに非ずと、斯る念慮の朧ながら起れるにぞ「物笑ひとは何故だ、何が物笑ひだ」「イヤサ僕は廣く女の氣質を研究した

が、夫人ほどの聰明な心でも女は矢張り女で、少しの事から生涯其人を賤む樣に成る事が有る、今若し僕が夫人に向ひ、此危險な間者には私が成ませうと云て見給へ、夫人は其時こそ非常に感心しア、此人は爾まで我が爲に盡して臭れるかと、忽ち心を僕の方へ屬するには違ひ無い、夫は目に見えて居るが、扨て僕が退いて身體を土人の樣に油墨を以て塗黒め、此の八字の髯を落し、丸裸體で腰の邊に獸物の毛を卷き頭に鳥の毛などを挿して、全くの土人と爲り澄し、目ばかり光らせて再び夫人の前へ出で、夫では行て參りますと云つて見給へ、夫人は斯も姿の變る者かと呆れて仕舞ひ、腹を抱へて笑ふに違ひ無い、夫限りで最う僕に愛想を盡し、心が君一方へ傾いて仕舞ふ後に及んで僕が如何樣に粧飾さうが、一と度び盡かした愛想は容易に再たび元に戻ると云ふ事無く、僕の粧飾した姿を見る度に前の事を思ひ出し、少しも尊敬の念は出ずに唯だ可笑しくなる許りだ、此の樣な役には僕は死でも立つが厭だ、君勤めるなら勤めたまへ、僕は君の戀の敵と云ふ點からは手を拍て喜ぶけれど、友人と云ふ情からは涙を流して氣の毒に思ふ」斯く云はれて見れば、成るほど此の使ひには立つ可からず、平洲は平に我が思ひ違ひを悟り「眞に爾だ、僕も

戀の敵に失望せしめて友人に滿足を與やう、短く云へば間者の役には當らぬ事にしやう、ア、君が爾う注意して呉れねば既での事に夫人の物笑ひの種と爲る所で有た、浮雲い所ろサ」茂「イヤサ夫とも君が猶ほ其役を勤めると云へば、僕は夫人が再び眞面目には君の顏を能く見ぬ樣に、此上も無く醜く獰猛に君を塗立てゝ遣らうと思つて居た」平「イヤ既に君も僕も勤めぬとすれば笑談は扨置て、誰にしやう」誰と云ふ思案無ければ茂林も困じ果て「爾サ眞に誰に仕やう」と考ふる體なりしが、頓て思ひ附きたる如くに手を拍ち「有るよ、有るよ」平「夫れは誰だ」茂「アノ帆浦女さ。」

百十三

若し帆浦女の身體に油墨を塗り、黑奴の女に打扮しめなば、如何なる有樣とはなる可きか、眞に一場の見物なる可し。

去れば、平洲は茂林が帆浦女を選ばんと云ふを聞くや、可笑さに噴出し暫しは返事も爲し得さ

りしが、漸くにして眞面目と爲り「夫れは實に面白い、フム面白い考へだよ、併し眞逆に其の樣な事は出來まいぢや無いか」茂林は少しも不思議は無しと云ふ如き面持にて「エ、何で其の樣な事は出來ぬと云ふか、少しも實行せられぬ事は無いよ」「何でさて、吾々男子で有てすら顏を油墨に染め、人の物笑ひに成るのは厭だと決議したぢや無いか、況てや少しの事をも羞しがるは女の常だもの、幾等帆浦女が男の樣な氣質だとて、此の相談には應じ無いよ」「イヤ君は帆浦女の心を知らぬ、彼の女は兼て黑奴の王に愛せられ度いと云ふ心願で、既に魔雲坐王に對し一方ならぬ失策を仕出來した程ぢや無いか、若し顏に油墨を塗り、黑奴の女に打扮てば黑奴王に愛せられる事が出來やうかと此樣に思て居るに違ひ無い、吾々は白人に愛せられやうと思ふから黑く塗るが厭だけれど、帆浦女は黑人に愛せられる積だから、吾々とは境遇が反對だ、君が同意さへすれば僕は一言で以て帆浦女に承知させる、彼女に向ひ巖如郎王が、若し貴女の色が黑ければ何れほどの美人だらうと貴女の色の白いのを痛く殘念がツて居ました、と斯う云へば、彼女は吾々が勸める迄も無く、自分で顏へ墨を塗るよ、爾して又王宮へ推掛けて行く位の者だ平洲は猶も考へて

「成る程帆浦女の心は爾かも知れぬ、併し吾々が一行中の婦人に其様な事をさせたと有ては、歸國の後に世間の非難を免かれぬ、君が冗談に、其様な事を目論むなら好いけれど、眞面目の評議なら、僕は決して贊成せぬ、僕よりも芽蘭夫人が許さぬだらう」成るほど芽蘭夫人が斯る事を許す可くも非ず、茂林は痛く失望せし樣子にて「アヽ僕は何うか帆浦女を黑奴の女の樣に塗黑め、此邊の女は總て裸體同樣で、唯だ腰の邊は獸皮なぞを纏ふて居る許りだから、彼女をも裸體にし爾して女護の國へ旅させて見度いと熱心に望んで居た、此樣な殘念な事は無い」と云ひ其身も可笑しくや有りけん聲を放ちて笑ひ出せり。

「其樣な笑ひ事では無い、誰か然る可き人を選ばねば「では」誰に仕やう老兵名澤は何うだ」「イヤ彼れは兵士の取締りだから使として出す譯には行かぬ、殊に吾々は何時、黑天女國の美人軍と戰はねばならぬかも知れぬから、間者が歸て來る迄の間、此七地に逗留して大に兵を練るには、最も彼れが必要だ」「では誰にしやう、下僕與助では役に立たず、其外には通辯阿馬か亞利の兩人だが」「爾だ亞利に仕やう、彼れなら充分膽力が有て」「爾々彼れの膽力は骨て僕がペトイン人に捕

はれた時、君と共々僕を救ひに來た其時の有樣でも分つて居る、其後とても種々の働きを現はして充分機轉の利く事も知れて居るから」「夫のみならずサ、彼れは門鳩地方より此方への言語には深く通ぜず、六かしい通辯は總て名澤が當り、其身は川事が少いから、何か玆等で一廉の手柄を立てやうと、油斷無く目を附けて居る樣子だから、此間者には喜で當るだらう」「唯併し充分言葉が通ぜぬのが不自由では有るまいか」「ナニ通ぜぬと云た所が我々の比では無い、自分で言葉を使ふ事こそ不充分でも先の言ふ事を聞取て合點する位の事は出來るから、大丈夫だよ、夫に間者は成る可く無口な方が好い、多舌り過ぎて疑はれては事を破るよ、愈黑天女國の都へ行き、輪陀女王の朝廷で若し芽蘭男爵に逢たなら、自由に佛蘭語を使て、男爵と問答する事も出來るから、寧ろ名澤よりも適任だらう」「では亞利と極て仕舞はう」。

斯く相談も一決したれば、翌朝二人は芽蘭夫人に逢ひ其旨を打明るに、夫人は之に異存無ければ、唯だ標悍無比と聞く美人軍と無理に闘を求るが如きを不得策とし、其使に魔雲坐の部下をも數名加へ、之をして輪陀女王へ魔雲坐が永久の同盟を結び度しとの意を言込ましむるが好からん

と言出せり。成程徒に魔雲坐を美人軍と懸はせるは得策ならず、若し輪陀の國と魔雲坐の國と仲能く同盟し得る者ならば、同盟せしむるに如くは無きなり、去れば直ちに魔雲坐を夫人の前に呼び出し、第一に彼の國と同盟を計り、彼れに於て若し同盟を拒む事あらば、其の時こそは斷然兵力を以て入り込む事にす可し、と說くに、夫人の言葉添も有る事なれば、彼れ一言を返し得ず、然らば先づ同盟申し込みの使ひとして、部下幾名を送り出さんと承諾したり、平洲、茂林は是れにも夫人の智に感じ、更らに巖如郎の朝廷に出で、黒天女の住む遊林臺の國へ貢物を送るは何時なりや、と問ふに、昨夜茂林の推量せしに違はず、既に貢物とする牛羊を取集めて有れば、數日の中に特使を出さんと云ふ、實に此上無き好都合なり、其の特使の一行に魔雲坐王の部下と此方の間者たる通辯亞利を加ふれば、萬事或は安全に運び得べしと、至急其の支度には取掛りぬ。

百十四

是より數日を經て愈女護の國へ使を出す事と爲れり。正使は巖如郎王の部下三十名にして、

輪陀女王に獻ず可き貢物とし牛七百頭、羊三百頭を引連れ、之に從ひ行くは門鳩國王魔雲坐の使ひ十名と芽蘭夫人の一行より送る間者亞利なり、魔雲坐王の使は、輪陀女王へ門鳩國と黒天女國との同盟を言込むに在り、間者亞利の使命は第一に芽蘭男爵の消息を探り、第二に黒天女國の風俗兵制等を視察するに在る事、既に記したる通なり、出發の間際に茂林は、繪具を以て亞利の膚を塗黒め、且つ之に鳥獸などを繡身の如く畫き、全く彼れを巖如郎が部下の土人と見分難き迄に打扮しめたるが、猶ほ茂林は帆浦女を斯く打扮しめ度しと云ふ初一念の失せざるにや、平洲に向ひて幾回が嘆息し「アヽ僕は今まで繪を畫くのに、其用紙は毎も自分の氣に入る物を選んだが、今度ばかりは自分で選ぶ事が出來ぬ、若し亞利の身體を用紙にする代りに帆浦女の肌を用紙としたなら、僕の手際は幾倍か引立つたのに」と云ひ、自ら帆浦女の姿繪を畫き、之を土人の如く塗黒めて縄に心を慰めたり。

此使ひ果して如何なる復命を持ち歸る可きや、輪陀女王果して魔雲坐王よりの申込に應じ、其支配する女護の國と門鳩國と同盟を結ぶに至らば、芽蘭夫人の一行は門鳩國の客分とし、平和に

黒天女國に入込むを得べし、若し然らずして此同盟成らざる時は、戰ひを以て其國に入込まざるを得ず、世界に比類少き强兵とも稱す可き美人軍と鬪ふ事、固より避く可らざるなり。

去れば此使の結果は何よりも案じらるゝに、巖如郎の云ふ所に依れば、往復に一ケ月は費す可しとなり、使を發したるは、實に千八百七十四年の第一月十日なれば、其歸り來るは二月の凡そ十日頃なるべし。

平洲、茂林の兩人は亞利の出發に臨み、若し輪陀女王の朝廷に、芽蘭男爵の捕虜と爲りて捕はれ居るを見れば、窃に男爵へ此書面を渡す可し、とて簡單なる密書を作りたり、其文には「君を救はん爲め佛國より發したる遠征隊あり、今は麻列峨國まで來着し、君の定めし輪陀女王の朝廷に捕虜と爲れるを思ふが爲め、先づ其實否を探り、而る後救ひ出すの手段に着手せんとす、此遠征隊は如何樣とも君の命に從ふ可し、如何にして君を救ひ出すべきや、君若し意見あれば此書持參の者に告げよ、此者は死生を冒して君の命を吾々まで持歸る可し、吾等は君を救ひ出し得るまで水火をも避けざる者なり」と記したり、初め此文中に「君の妻芽蘭夫人が實に此遠征隊の頭領

なり」との一句をも加へたれど、此語ありては男爵切に朝廷より脫出て來らんとの心を起し、深く前後を顧みる遑無くして、却て輪陀女王に疑はれ、或は其身を危くする如き擧動を爲さんも知れず、と夫人自ら言出だし平洲、茂林兩人とも其道理なるを察したれば、成る可く男爵の心を動かさぬ樣、故と其句だけを削りたり、其句だけを削りたりとも、男爵異域に在りて此書を得ば、果して如何の想をば爲す可き。

亞利既に出發してより、其歸り來るまで凡そ三十日、其間を如何にして過す可きや、平洲、茂林は追々巖如郎の意見を聞くに、輪陀女王の氣質として容易に他國と同盟する者に非ず、若し魔雲坐が其臣下たらん、其屬國たらん、と云ひ込まば兎に角も、一片の貢物をも贈らず、唯だ十人の使者をして、素手の儘にて同盟を言込ましむる丈にては、怫然として之を遮絶するならんと云ふ、左すれば此一行は平和を以て其國に入込む可からず、到底美人軍と戰ひて、其國を破りて入る一方なり、是れ最も恐る可き難題なれども、今は避け難き場合まで推寄せし事なれば、三十日の間に專ら兵を練り、其用意の萬一を爲すに如かずと、平洲、茂林共々に、先づ一行の携ふる武

器を檢むるに、名澤の兵五十名の持てる銃の外に、佛國を出る時用意し來りし銃、猶ほ百挺ほどを餘せり、第一には魔雲坐王の兵の中より屈強の者百名を選び、平洲自ら之を佛國流の陸兵に組做して、訓練し、茂林は魔雲坐に計り、自ら王の兵總體の指揮者と爲り、之にも文明兵の進退を敎ふる事に着手したり。

百十五

亞利が間者として黑天女の國へ入込みてより、其歸り來るまで、凡そ卅日の間、平洲と茂林は唯だ兵を練る一事にのみ身を委ねたり、其甲斐ありて、彼の魔雲坐の部下より選拔て銃器を授けたる一隊は、直に老兵名澤の兵と優劣の分ち難きまでに進み、殘る魔雲坐王の兵とても一號令の下に進退し、司令者の意の如く行動するに至りたれば、如何に女護國の兵強しとするも最早や恐るゝに足らざらん、野蠻の兵法を以て思ひ〳〵に進退する者、一卒としては勇猛なるも一軍隊としては破り易きのみと、平洲、茂林は或日巖如郎王に向ひ、其意を語るに、彼れは容易に然りと

云はず、暫し彼れ是と考へ比べたる末「イヤ力のみを以て比ぶれば或は門鳩の兵、美人軍に優る事も有らん、去れど御身等は未だ美人軍の勢を知らざるなり、其軍の進み來る時は、美くしき幾百の眼、星の如く光り、火の如く燃え、唯だ物凄き許りにして、而も彼等の口は最と鋭き叱咤の聲を發し、宛も天兵の下降する如き趣きあり、大抵の者は此樣を見、此聲を聞きしのみにて怖氣を生じ戰ふに至らずして潰るなり、美人軍の力は其針ある鎧、兩手の刀、雷光の如き進退あるに在れど、又其の火の如き眼と、耳を劈く如き聲と、氣を以て敵を呑む勢ひとに在るなり、斯る所は御身等の軍に一も有ること無し、余は訓練の行屆くだけにては到底美人軍に勝得ざるを恐る」と云ふ、成る程美人軍には爾る意外の長所も有る事にや、文明國の兵ならば敵の眼や叫び聲を恐れされど、腦髓の幼稚なる野蠻の兵なれば、戰はずして先づ潰るゝ如き失體も無きには限らず、之を防ぐは如何にして好からんか是れ甚だ六かしき問題なり。

平洲、茂林は是に就きても亦評議を凝したるも、何しろ味方の心を强からしめ、敵の勢ひを怖さらしめんには、成る可く兵の數を增すに如かず、兵の數を增すは巖如郎をして此軍に加はらし

むる外無ければ、茂林自ら様々の利害を說くに、彼れは何と云はるゝも同じ返事にて「否とよ、魔雲坐王は縱し戰ひ破るゝとも、逃て其國に歸れば、距離甚だ遠き爲め、輪陀女王に復讐さるゝ恐れ無けれど、我が國は女護の國と、御覽の如く隣れる故、後にて女王の屬國にせらるゝは必定なり、余の部下の一兵をも御身の兵に加へて女王の國に入込しむる事能はずと云ふのみ、復た如何とも詮方なし。」

此上の賴みは、唯だ聞者亞利が歸り來りての返事に在り、若し輪陀女王が門鳩の魔雲坐と同盟する事を諾すとならば、戰ふ必要の有らざれば、美人軍の勢ひを恐るゝに及ばず、何さぞ同盟承諾の返事を持返れかし、若し拒まるれば、勵し得るだけ我兵を勵し、運を天に任せて戰はんのみと心細くも決心するに、斯る間に又一つ氣遣はしきは、肝腎魔雲坐の心なり、彼れは美人國に武勇を現はし、芽蘭夫人を感服せしめんとの一心にて、只管らに兵を練れども、亞利の歸りの遲きより、動もすれば其心の弛まんとする樣子あり、其方に心の弛むと共に、夫人を思ふ念は愈々強くなり、彼れが又もや夫人を請受て歸國せんと言出さん擧動、幾度か現はるゝ事と爲りしより、

平洲、茂林は之にも亦心を痛め初めたるに、幸か不幸か此頃より夫人は一種の緩慢なる熱病と爲り、多く天幕より出で來らぬ事と爲れり、寺森醫師の說にては、夫人が所夫の生死や、其身の行末などを氣遣ひ、心配の身に餘るに加へ、一つの土地に暫く滯留するが爲め、風土の變を感じたるなりと云ふ、總て亞弗利加旅行者の病氣は日々進む間に起らず、一箇所に長く留まる折に起るを多しとす、此病を療するには、成る可く土地を轉ずるに如かずとの事なるにぞ、左すれば兎も角も、黑天女國の國境までも進み行く事とせん、斯くすれば、魔雲坐の心も自ら紛るゝならん、殊に亞利の復命に接するも、幾分か早くなる譯なればと、早速弦を立つ事としたるに、巖如郎も國境までは送り行かんと云ひ、部下を引連れ隨ひ來れり、此時は既に亞利が出發してより三十餘日を經二月十四日なりしが、進みて國境までは猶ほ二日の程を餘す所にて、亞利を初め一同の使者が隊を爲して輪陀の國より歸り來るに會り、ア、彼等の復命は如何なる可きや。

女護の國に入込みたる使者、無事に歸り來しと見ては、平洲、茂林、寺森等、殆ど飛立つ想ひあり、此使者果して如何なる返事を持返りしにや。

三人は使者一行の歸り來る姿を見るより靜に待ちて在る事能はず、一刻も早く其復命を聞かんと、足を揃へて其の方へ走り出すに、使者の中にても間者亞利は、同じ思ひにて一刻も早く復命を傳へんとてか、一行より走り出でゝ、此方に來れり。平洲、茂林の兩人は、果して輪陀女王が魔雲坐王よりの同盟の申込に應ぜしや否を氣遣ふよりも、今は只管ら亞利が芽蘭男爵を認め得たるや否を聞き度ければ、茂林先づ亞利の手を取り「何うだ亞利、芽蘭男爵は果して輪陀女王の朝廷に捕虜と爲り、無事に猶ほ生存へて居られたか」亞利は息も忙しく「ハイ居ましたよ、生て捕はれて居ましたよ」「シテ貴樣が親しく其れを見たのか」「ハイ見ました逢ました、爾して私は男爵へ物をまで言ひました」。

斯くまでに言切るからは、最早や間違ひの有る事能はず、芽蘭男爵は生て全く黑天女の朝廷に居る者なり、男爵を死せしとのみ思ひしが爲め、遙々茲まで其大人に從ひ來りし、平洲と茂林と

の身の上は、誠に異樣なる地位とは爲る者にして、二人は此報の喜ぶ可きや否を知らず、忙しき間にも樣々の想ひ浮み出れど、猶ほ男爵の有樣が知り度きにぞ、平洲其の後を承けて「シテ男爵は貴樣に何と云た」「何とも言ふ事が出來ぬのです」「何だ貴樣から物を言たのに、向ふから何とも云ふ事が出來ぬとは」「ハイ男爵は自由に口を開く事さへ出來ぬ程の、嚴密な捕虜です、番人が嚴重な爲め、仲々他人に言葉を交ふる事は出來ません」。

左ほどまで嚴重に捕はれて在りこせば、實に由々しき大事なり、一日も早く之を救はねば成らぬ譯なるに、救ふ事愈よ難し「夫では亞利、男爵は貴樣に何の返事をもする事が出來なんだか」「ハイ口で返事は出來ませんが、窃かに私の手へ、此樣な紙切を握らせました」と云ひ腰に着けたる革袋の中を探り、卷て疊みたる手紙樣の物を出せり、茂林は傍らより待兼し如く、手を延べて其れを受取り、開きもせずに一目見て「ア、表に芽蘭男爵と記して有る、筆蹟も先に可通無府で、名澤から受取た、男爵の手紙及び、土門陀の老黑奴の住居で火に燃る壁から、平洲君が剝取た男爵の自筆と同じ事だ、最早や寸分も疑ふ所は無い、此書附を亞利に握らせたと云ふ其人が

全たく夫人の所夫芽蘭男爵だ」と云ひ早や封を開かんとす、平洲遽しく之を制し「待給へ茂林君其手紙は我々が開く可き者では無い、兎に角芽蘭夫人に先づ讀ましめ、夫人の許しを得た上で我々は讀む事にせねば」茂林も成る程と感心し」では僕が持て行て夫人に渡さう」と云ひしが又暫し考へて「イヤ左なきだに先日來辭ぎ勝の夫人だから、此の書を得ては定めし痛く心を動すだらう、僕は夫人の心が落着た頃に行かう、平洲君、君が此書を夫人に持て渡し給へ」平洲とても、夫人が此程以來唯だ心配のみに打沈み、夫が爲め低き熱病の姿と爲り、斯く土地を轉じても猶ほ何とやら優れざる容體を思ひては、斯る容易ならぬ書類を手づから渡し、夫人の此上に心を騷せる樣を見るに忍びず「僕とても夫人の此書を讀み、泣く丈は泣き盡し、充分心を落着けて、後の思案まで略ぼ定めた所で、夫人の許へ行う、此書は寧ろ寺森君に持て行て貰はうでは無いか」寺森は「如何にも病人の心を動かす樣な事は醫師たる僕の役目だ、僕が持て行て、成る可く夫人の心を痛めぬ樣に渡さう」と云ひ其書を受取り最と靜に退きたり、後に兩人は亞利に向ひ茂「亞利貴樣等一行の歸りは豫定より餘ほど後れた、夫だから我々は巖如郎の王宮の所から玆まで出迎ひ

に進だが、何で此樣に手間を取た、輪陀女王が若し貴樣等をも捕虜にせんと企たのでは無いか」「イヤ爾では有ませんが何しろ遊林臺國は巖如郎王の話た通り、恐ろしい疑ひ深い國で、到る處の酋長が、我々を通して好いか惡いかと、其上の酋長に聞合せ、返事を得た後に初めて出發さする爲め、此通り手間を取たのです、是等の酋長は悉く輪陀女王に仕へる地方官で、女王が、嚴重に國內を守らせて有る樣は、實に驚く可き程です、夫に國中に幾筋も小川が有り、牛や羊を引連れて、夫を渡るのですから豫想外に時日が費ました」とて是より猶ほ樣々の事を語り出んとす。

百十七

爾し國中に幾筋の小川有りとせば、定めし其源たる可き湖水の類も多からんと、平洲は心中に地理を描きて「何しろ我々が是より進入る土地だから、地理を知るのが何よりも大切だ、小川が有れば沼や湖水も有るだらうな」「イヤ沼には一つも出會ません、小い湖水は二ケ所ほど有まし

た」茂林は傍より「是より先は芽蘭男爵の外・歐羅巴人の一人も入之まぬ所だから、何でも湖水でも、素より一定の名が無いのだ、一々吾々の名を附けて平洲沼とか、茂林湖などゝ呼ぶ事に仕やうでは無いか」「其様な相談は後廻しとせねばならぬ、亞利よ、輪陀女王の支配地は餘ほど廣い様子か」「ハイ、詳しくは分りませんが、國境から王宮へ達するまで二百哩以上は有ませう、東西は何れほど長いか分りませんが、門鳩國や此の麻列峨國に劣らぬ大國とは思はれます」平「王宮から先は何の様な所だ」「王宮より先は右ません、王宮は山を切立てた様な絶壁の下に有ります」「ア、其山が多分は遙青山だな、王宮は遙青山の北麓に在るのだ」「イヤ私は小い磁石を以て居ますから方角を計りましたが、其山は王宮の東南に當ります、王宮は山の西北麓に在るのです」「フム遙青山の山脈が其所で、少し筋違に成て居るのだらう、シタが王宮より其山へ登て行く事が出來るか」。

是れ眞逆の時の用意にと問置くなり、若し輪陀女王と兵を交へ、不幸にして敗るゝ時は、北に引返して逃んより、南に其山を越して進まんとの意なる可し「何うして登られませう、今申す通

りの絶壁ですもの、實に此邊の人が遙青山を地の果だと云ふも無理は有りません、南も東も山の絶壁で、屏風を立てた様に圍み、夫より南へは一歩も進む事が出來ません」扨は愈々以て難儀の場所なり、平洲は最と當惑氣に「茂林君、其様な行詰りの所とすれば、事に由ると吾々は進みも退きも出來ぬ場合に陷いるかも知れないぜ」「爾うさ鳥の翅を借て其絶壁を飛び上る事が出來ぬ以上は」「併し亞利、絶壁の何所かに、細道でも有りはせぬか」「私も爾う思つて方々を見廻はしましたが何うも攀登る場所が有りません、絶壁の上には今まで見た事も無い様な大な岩石が笠の様に突出で、夫が若も砕けて落たなら一部落、皆壓潰されるだらうと思はれる様に成て居ます私は隨分廣く旅行しましたが、遙青山ほど大石の有る所は見たことが有りません」平「ハヽア、シテ見ると、其邊が丁度アルバート湖へ落て居るマルンチソンと云ふ大瀧の背後に當るのだらう、ネエ茂林君、吾々と反對に亞弗利加を南から北に向て探險した人が、アルバート湖の西北岸に世界第一の高い大瀧が有る即ち遙青山からアルバート湖へ落て居るこゝ云ひ其瀧をマルンチソンと名けたと、我々が巴里を出る少し前に出版した地學協會の報告書に記して有たぢや無いか」茂「爾々

マルンチソン大瀧の近邊は世界無類の大石が累々として有ると書て有た、成ほど輪陀女王の都はマルンチソンの大瀧と背合せだ」亞利も思ひ當りし如く「爾仰有れば分りました、輪陀の王宮に泊つて居るうち夜になり、人が寢鎭まると山に何だか遠雷の樣な響が聞えます、私も山の孰れかに大な瀧でも有る爲だらうと思ひました」。

最早や疑ふ迄も無し輪陀の國は、遙青の山一つを隔て、アルバート湖と隣れるなり、北よりせし探險と、南よりせし探險との間を結び附けんとせし芽蘭男爵の大目的は、今一步にて達する所まで推寄せて有るなり、否遙青山の麓、今云ふ如く絕壁にして到底人間の越得る所ならずとせば芽蘭男爵は既に此上一步も進み難き所まで進みたる者なれば既に南北兩方の探險を結び附け得たりと云ふも可なり、此後何人の來るとも男爵よりも南へは進み得る筈なければなり。

茂林は暫し考へ「何しろ芽蘭男爵は、大した者だ、單身で斯まで探險し得たとすれば、身は塵地に死するとも遺憾有るまい、イヤ寧ろ男爵の心では吾々に救はれて歸るより其の所で死するのを一身の名譽として甘じて居るのでは有るまいか、其の甘じて居る人を無理に救ひ出し、芽蘭夫

人に渡すのは吾々の爲めに云ても得策で無いかも知れん」平洲は眞面目に「馬鹿なことを言ひ給へ、男爵は既に、口さえ自由に開かれぬほどの嚴重な捕虜と爲つて居るぢや無いか、吾々同國人既に玆まで來し柄には、縱し名も聞かぬ人ごしても、救ひ出さずには置かれぬ、況んや英の李敏敦か佛の芽蘭かと云はれる程の大探險家だものの、男爵自身が救はれて喜ぶか迷惑するか夫は吾々の知た事で無い、何が何でも救はずには見捨れぬ」茂林は情無き語調にて「夫は爾だが、男爵を救ふのは芽蘭夫人を失ふのだぜ、男爵が無事に返れば、芽蘭夫人は極り切た其妻で、君の物とも僕の物とも成る望は絕果るのだ、男爵を救はねばならぬ同胞の義務は、云はずとも分ツて居るが寐ても覺ても忘れる暇の無い芽蘭夫人をば、斯して手の裡より失ふ爲に、幾千里の辛い旅行を企てたかと思へば、僕は餘り我身が恨めしい、吾々は運命と云ふ者に馬鹿にされて居るのだ」「イヤ僕とても其恨は君に劣らぬ、今が今まで、若しや男爵が既に黃泉の人と爲たでは有るまいか、間者亞利が、或は男爵の訃音を齎せて歸るかも知れぬと、此樣な想を繫で居た、併し其的が外れて見れば、吾々の務めは明白だ、人の妻に懸想するなどゝ云ふ罪深きー」「イヤ人の妻に懸想するの

では無い、懸想した女が人の妻と分つたのだ」「孰れにしても同じ事、唯だ運命と断念めて、男爵を救ふ一方だ」

茂林は日頃一點の未練も無き、男の中の男にして、又男爵を救ふ可き同胞の義務は充分に心得居れど、今までの千辛萬苦を想ひては、平氣に斷念め難しと見え「併し君、輪陀女王は非常な美人だと云ふ事だぜ、未だ年も若いと云ふぜ、若し輪陀女王が男爵を我夫とする積で殊更ら宮中へ圍て置くのでは有るまいか、男爵として女王の美しさに感じ、我々の救ふのを餘計な世話だと思ひは仕まいか、今は未だ爾思はずとも、追々爾う思ふ樣に成りは仕まいか、我々の救ふのは結句男爵に邪魔かも知れぬぜ」と最と異樣なる故障をまで持出すも、其心の切なるが爲めならんか。

百十八

輪陀女王如何ほごに美くしくとも、芽蘭男爵が其美に感じ、其傍に留る事を喜びて、此一行に救ひ出さるゝを迷惑とする如き事有らんや、平洲は茂林の言葉を打消し「若し男爵が救はるゝを

迷惑と思ふ樣なら、僕とても強て救ひ度くは思はぬ、救はずに芽蘭夫人を連れ、本國へ歸り度いけれども男爵ほどの人が、何で黑天女の姿に迷ふ者か、何とかして此國を脫出度い、無事に歸國して、妻や朋友の顏を見度いと、明暮れ思て居るは必定だ、吾々同胞の義務として、之を救はずに置れやうか、凡そ世に男爵ほどの不愍な境涯は有るまいゾ僕は思ふ」茂林は瀾然と語を更めて「夫は爾サ、縱し男爵が、輪陀女王の捕虜たるを喜んで居るとしても、吾々之を救はずには歸られぬ、僕は唯だ萬一に想像を逞たまでサ、殊に今と爲り、吾々が芽蘭夫人を引連て歸らうとしても、第一魔雲坐王が承知せぬ、結局は何うなるとも、吾々は進まれる丈け進む一方さ、最と詳しく亞利に話を聞き、早速男爵救出しの手筈を定める事に仕やうでは無いか」

相談一決したれば、再び亞利に向ひ「全體輪陀女王は何の樣な女だ」「ハイ黑人では有るが非常な美人です、野蠻國の美人では無く殆ど文明國の美人かと思はれる程ですけれど、眞逆に芽蘭男爵が其美に感ずるなど云ふ樣な事は有ません、男爵の樣子を見れば分ります」「男爵の樣子さは」「ハイ顏色も蒼白く瘦衰へ、殆ど幽靈かと思はれる有樣です、私は一目見て鄕思病と云ふ

物だと思ひました、故郷の空が懐しくて、那の様な病氣に成る例は幾等も有り、旅慣た私、など
は今まで何人も同じ病人に接しました」男爵の憐む可き境遇は是だけの言葉にて察するに餘有り
「シテ男爵は牢へでも入られて居るのか「イヤ牢へは入られぬが、夫か何ぞの様に鎖に繋がれ、
絶えず女王が引連て居るのです」何ぞ其有様の慘たらしきや「何だ鎖に繋がれて」「ハイ私が初て
女王の朝廷へ行たとき、女王の腰掛臺の脚に鎖を以て繋れて居る人が有るのです、其鎖は其人の
腰を縛り、手足だけは自由に任せて有ますが、夫でも長が五尺にも足ぬほど故、其人は女王の傍
より一間と離れる事は出來ません、初て私の見た時は、兩の手を顔に當て眠て居るのか泣て居る
のか、唯だ俯向込で居ますから、蒼白く痩た手先で歐羅巴人と云ふ事は明白
ですから、私は是が噂に聞く芽蘭男爵か、慈悲深い芽蘭夫人の所夫かと、知らず〳〵涙を垂れま
した、何とか言葉を掛け、早く遠征隊が玆迄來て居る事を知せ、少でも喜ばせて上げ度いと思ひ
ましたが、迂濶に言葉を發し、女王に疑はれては、斯う大事に繋で有る捕虜の事ゆゑ、更に何の
様な事に成るも分らぬと、知らぬ顔で控て居ました、其中の女王が巖如郎王から贈た貢物の牛羊

を檢める爲め座を立ちました、立つと直樣傍に居る美人軍が一」茂「何だ美人軍が女王の傍に居
るのか」「ハイ輪陀女王の朝廷には一人も男の役人は無く、皆女です、貴方がたの云ふ美人軍が、
即ち近衞兵で、王の左右を警護して居るのですが、孰れも非常の美人です」「其樣な話は後にして
夫から何うした」「ハイ女王が立つと、美人軍の一人が直に男爵の鎖を手に取り、臺の脚へ繋で有
る其結びを解き、宛も吾々が犬を引連れる如く男爵を引連れて女王の後に從ひ、同じく庭へ出た
のです、是で見ると、芽蘭男爵は少しも女王の傍より離される事は無いと見えます、私の考へで
は、男爵が是まで幾度か逃去らうと仕た爲に、斯う嚴重に王の傍から離れる事の出來ぬ樣にせら
れたのでせう」平「貴樣の考へなぞは聞き度く無い、夫から何うした」「ハイ私は何うかして男
爵に聲を掛け、貴方がたの手紙を人知れず渡し度いと思ひましたから、直に男爵の後に付き、隙
間さへ有れば直ぐに話を仕樣と思ひ同じく庭へ出ましたが、貢物の牛と羊は痛く女王を喜ばせ、
男爵の鎖を持て居る近衞の美人まで夢中になり、其方へ見惚て居ますから、玆だと思ひ私は小聲
で佛蘭西語を以て「驚いては可ません芽蘭男爵」と其背後で細語ました、驚いては可ぬと注意を

與へたにも拘らず、男爵はビクリとして振向きましたが、少しの事にも注意する捕虜の身だけに直樣私の目配せを察し、平氣の顏を粧ひ、何事も知らぬ振で前に向きました、私は更に「男爵よ、貴方を救ふ爲め歐羅巴から遠征隊が來て、私は其間者として貴方を尋ねに、此國へ入込んだのです、密と手を背へお出し成さい、其の遠征隊から貴方へ宛てた手紙を握らせて上ますから」と斯云ひますと、男爵は猶更ら驚ろき、後に撞と倒れるかと思はれましたが漸く足を踏〆め、氣を取直した樣子で、片手を背後へ廻しました」。

百十九

亞利の言葉にて初て知れり、芽蘭男爵の境遇何ぞ夫れ傷はしきや、茂林は我を忘れて言葉世話しく「オ、男爵が手を背ろへ廻したか、夫から何うした、亞利」亞利も說きて玆に至りては殆ど情に堪へざる如く、聲を震はせ「ハイ實に男爵が四邊を氣遣ふ樣子を見ては、私もお氣の毒に思ひましたが、一刻を急ぐ折ゆゑ直に貴方がたの手紙を男爵の手へ握らせました、本統に危い所

でした、男爵が其手紙を受取るが否や輪陀女王は、貢物を檢ため終り、男爵の傍へ來ました、私は若しも樣子を悟られたかと、女王の顏を偸視て居ましたが、其の樣な樣子も無く、女王は近衛の美人に、又も男爵を引立させ、王宮へ入ました」「夫から男爵は何うして貴樣へ返事の手紙を渡した」「ハイ私は、何でも男爵が返事を吳れるに違い無いと、其後は每日の樣に用事を托附けては王宮へ入込み其庭などを見物して居ましたが、時々遠に男爵が鎭の儘近衛兵に引かれ散步する姿を見ましたけれど、傍へ寄る事が出來ません、男爵とても、番兵に疑はれるを恐れてか、私の傍へ來ず、私の顏さへも振向いて見ぬ程です、其中に愈々歸る日となりました、是では到底男爵の返事を得ずに歸らねば成らぬかと私は失望して居ましたが、女王へ暇乞の爲め一同ご共に參內した時に男爵は鎖の儘、夫ご無く私の傍へ寄來たり、一寸と目配せして私の手へ何やら ん握らせて退きました、愈是れが返事だらうと引下つて見ると、果して手帳の紙かと思はるゝ物を幾枚か重ねて細かに疊み、表面に名前だけ記した手紙でした」茂「其中には何を認めて有た」「中は私の見る可き者で無いご、大事にして皮袋へ入れ持歸りました、今し方、寺森醫師が芽蘭

夫人の許へ持て行たのが其手紙です」聞終りて平洲と茂林は顔見合せたり　平「夫れ見給へ男爵は自由に口さへ聞かれぬ程の、嚴重な捕虜と爲つて居る、輪陀女王の美に感じ、喜んで逗留して居るだらう抔と云ふ君の想像は全く無根だ」「アノ僕も爾は云た者の、眞實に男爵が不愍に成て來た、如何なる危險を冒しても、早速黑天女の國へ入込み男爵を救ふて遣う、ト云て眞に救ひ得るや否は分らず、吾々自ら其美人軍に殺されて仕舞ふかも知れぬけれど」「爾さ殺されるか又捕虜と爲るか、其の樣な事を恐れては居られぬ、サア、是から直に夫人の許へ往き、男爵の手紙に何と書て有るか、夫を一讀させて貰ひ、其上で直に出發の用意を仕やう」。

斯く云ひて三人とも夫人の憩ふ方を指し引返し來るに、此時魔雲坐王は名澤を連れ、何やらん最と立腹の體にて出で來り、平洲、茂林の前に立つにぞ、平洲は毎もの如く名澤を通辯とし「何事なるや」と問掛るに、魔雲坐は口より火焰を吐く程の有樣にて、最と悔しげに「聞き給へ女護國の女王は痛く余を辱しめたり、余は直に其國へ暴れ入り、女王の肉を喰はずんば腹癒えず」と云ふ、扨て魔雲坐より同盟を言ひ込みし旨に對し、女王が何か無禮なる返事を與へしと見へたり

平「如何にして彼れ女王が御身を辱しめたるや」「左ればなり、彼れ女王は余の使者に向ひ、我が遊林臺の國は、第一の强國なれば他國が降參し來るを許せども、他國と同盟する必要無し、魔雲坐王若し我國を敬ふならば、降伏の使者を送る可し、同盟などは、無禮なり、此度は此旨を知らせる爲め無事に使者を送り返せど、此後若し門鳩國の人、一人たりとも我國に入來らば、容赦なく打殺して其無禮を懲す可しと、斯くも橫道なる返事を送り來れり、第一の强國とは余が國をこそ云ふなれ、余より外に第一の强國と云ふ者あらば、余は一刻も許し置く能はず、況んや余に降參せよこそ云ふをや、アヽ余は是ほどの恥辱を受けし事なし、併も女の王に」さて殆ど悔涙の漏るかと思はるゝ有樣なり、茂林は此怒を幸ひに、輪陀女王の國へ攻て入る心なれば「然り、御身が恥めらるゝは御身の許婚なる吾等の妹、彼の白女も恥しめらるゝなり」と深く後々をも考へず燃る火に油を注ぐ如き語を加るに、魔雲坐は唯一語、大聲に「然り」と答へ地を踏破る程の勢にて、己が部下の方を指し馳去り。

何しろ事情益々容易ならぬ所まで推寄せたれば、平洲も、茂林も無言にて深く思案しつゝ、又

も芽蘭夫人の力を指して進むに、先刻の寺森醫師來り迎へ「君方、今夫人の許へ行くのは廢め給へ、芽蘭男爵の手紙は、夫人が玆まで來て居るのを知らず君方へ讀せる積て寄越たのだから、僕が夫人から受取て來た」と云ひ出せり、平洲は受取りつゝ「でも何でも夫人の許へ行くのを廢せと云ふのか」「夫人は此手紙を讀み、潛々と泣て居るから、其の心の鎖るまで待給へと云ふのサ、何しろ夫人は先日來、痛く心が激動して居るから、充分に泣せて置が好い、泣盡したなら幾分か神經が鎭るよ、玆で神經を鎭めねば追々命にも拘る程の病氣になる」夫人の身の上、亦實に男爵と同じく憐む可きも、平洲と茂林は、男爵の消息と共に、其身等の此旅行を企だてし望み全く絕果てしを知り、日頃の銳敏なる判斷を失ひたる際なれば、深くは夫人の心を斟取り得ず 平「夫人は何を泣くのだ、嬉しくて泣くのか」茂「夫とも失望して泣くのか」寺森は每に無く佶と眞面目に「馬鹿な事を云ひ給ふな死だと思た我所夫が生て居ると分つたのに、夫を失望する奴が有るか、未其所夫を救ひ得るか得ぬかも分らず、所夫の現在の境涯を察すれば實に不憫の極で有るから、萬感胸に迫つて泣ずには居られぬのサ、夫を嬉しくて泣くかなど、餘計な分析だ

てをする、全體君等の了見が間違て居る、夫人は可通無に於て、君等に何と云た、巴里を出る時は所夫を死だ者と思ひ、其墓參の意で有たけれど、玆へ來て老兵名澤の言ふ所を聞けば、死だと報告せられた場所で死では居ず、其土地を遠く通り過した後までも生て居た事確だから、玆で墓參の目的は一變し、所夫の生死を探究める目的に成た、夫に付ては今までの通り君方を同行する譯に行かぬと、何も彼も打明けて謝絕たでは無いか、其時に君方は何と答へた、夫では最初の約束は玆で消た者と見做し、蠻地に苦んで居る同胞の一人を救ふと云ふ目的で同行すると斯答へた 然るに今と爲り愈男爵が活て居ると分れば異樣に未練の心を起し、夫人の心情を分析するなど餘り罪深い事では無いか」と容赦無く叱責するに、今以て戀に心の眩みたる兩人なれど、殆ど夢醒めて、其夢中に語りたる己が寐言を恥る如き趣きあり、思はず讖らず首を垂れたり。

百二十

如何にも寺森醫師の言ふ如く、平洲、茂林の兩人は可通無を出るとき芽蘭夫人より此上の同行

を斷わられ、然らば最早や巴里を出る時の心を捨て、戀など云へる念を斷ちて、唯だ芽蘭男爵を救ひ出しの爲に同行せんと、更めて夫人に約束せし者なれば、今更ら夫人の心中を右や左と推量す可き筈に非ず、唯だ同胞相救ふ義俠一片の心を以て進まねばならずと、却て益々奮發したれば平「イヤ寺森君、能く云て呉れた、今日以後芽蘭夫人は僕等の目に女とは見ぬ、女で無い男だ、吾々は一切の未練を捨て、夫人を兄弟の樣に思ふて、男爵の救出しに盡力しやう」と悔て飜然改むるは兩人が佛蘭西人種の氣質中にて、其の最も純粹なる部分を受けて生れしを見る可し、寺森も深く滿足し「君方が快く爾う云て呉れゝば、僕とても言甲斐が有たと云ふ者、では一刻も早く男爵救出しの川意及び相談に着手せねばならぬ、先づ男爵の手紙を讀で見たまへ」と、意見する身が意見せられて、扨て男爵の手紙を開きたり、其文は先に男爵が土門陀の領地にて老黑奴の小屋の壁に貼附けたると同じく、最こ細かに書きたる者にして紙は手帖を裂きて幾枚も重ねたる物こし、墨は即ち鉛筆なれば、茂林は斯こ見て「アヽ男爵は猶ほ魔法の筆を一本蓄へて居ると見えるな」「爾サ使古しを巖如郎に與へ大に彼を驚かしたけれど、

猶ほ此先でも同じ魔法を使はねばならぬと見て、保存して居ると見える」と云ひ、愈讀下す文に曰く。

ア、余を救ふが爲めに遙々歐羅巴よりの遠征隊となり、本國に縱や一人たりとも余がことを斯くまで心を掛け呉れる人ありとせば、余は最早や死すとも遺憾なし、余は何とかして其遠征隊に返事を送り、一片の謝意を表せねばならず、遠征諸君よ余は實に謝する言葉を知らず、今より余が終身の心は唯だ諸君に恩義を感ずるにのみ委ぬべし、去ればとて嚴重なる捕虜と爲り際間も無く見張るゝ今の身にて如何にして返書を作らん、番人に賄賂せんにも、身に在るは使滅せし一本の鉛筆と手帖のみ、手帖の紙とても、殘り少し、此返事を認める爲に破り盡すなり、番人の眠れる間を偸み、三夜五夜掛らうとも返事だけ書列ねん、遠征の人々よ余の亂筆を咎むる勿れ。

余は何こかして此土地を拔出で諸君の留まれる麻列峨の國まで引返したし、去れど引返す道は絶えたり、爾ればとて、諸君に、此國に踏込みて余を救ひ呉れと請ふ事能はず、余は既に死

したる者、最早や救ふに道なき者と斷念して、余を捨置きて本國へ歸る事を請はざるを得ず、諸君が此國に入込ば、其日の中に鏖殺にせらるゝ事火を見るよりも明かなればなり。

余は今より三ケ月前、捕虜の境涯を脱して猶ほ南進せん者と、幾多の工風を經たる上、一夕番人の眠れるに乘じ、首尾能く王宮を脱出得たり、脱出て孰れに行かん南に進むは遙青山の戀崖、高く千仞の上より遮れるなり、攀んにも攀づ可からず、西に廻れば必ず孰れかに低き谷間ある可く、谷間を通り抜けなば、多分はアルバート湖若はビクトリ湖の沿岸に出るを得んかと只管に西を指し走りたり、悲しや翌朝、王宮にて余の脱し去りしと氣付くや直に近衛の兵を八方に分ちて探らせしその事にてや、余は翌日の晝前に、王宮を離るゝ事十哩の地にて捕へられ王宮に連歸られたり。

此時まで余は捕虜とは云へ容分同樣にて、痛く廷中に擁はれ、直接身體に何の拘束をも受ざりしに、是よりして腰に鐵鎖を附けられ犬の如く女王の腰掛に繫がるゝ事と爲れり、唯だ女王を初め國人一同、余を物知りの人と稱して敬ひて依然たれば、余は別に慘刻なる苦痛を受る事

は無くて余は到底又と逃出す事能はざるを知れり、此國の慘酷なる習俗は到底諸君の信じ得ざる所なる可し、余が逃出して通りたる村々の者は、余を遮り留むる事を爲さざりしとの罪に問はれ、朝廷より其村々に火を放ち、一家も殘さず燒盡したる上、其住民三百名を死刑に處したりア、余は夜中人の寐鎭まりし頃に走りたれば、何人とても余の逃去るを見し事無く、勿論余を遮り得る筈なきに、而も之を罰する事斯の如し、爾來此の國中の人、余に對しては皆警官の如し、余は一人にて王宮の閾をすら外に出る事能はず出れば忽ち捕へらる、實に余に對する此國の警戒は、蟻の出づ可き隙も無きほど嚴重なり、嚴重なるは可なりとしても、余が僅に十哩ばかり逃出せし爲に百軒ほどの家は燒かれ、三百人は、命を失ひしとすれば、余如何ぞ無辜の民三百人の命を奪ひて余の一身を助くるに忍びんや、余は全く逃去らん心を斷ち、此盤地に於いて、此國の土と爲るに決心したり、斯く決心する外無ければなり、今とても此決心變ぜざるなり、今日以後とても到底變ずる事能はざる可し。

事情斯の如しとせば、男爵が再び逃出す事叶はじと、全く斷念して、其地の土となる決心を起せしも道理なり、平洲は讀掛けて「ア、實に氣の毒だ」茂林も「爾う決心する外は無いから成るほど決心は仕たで有らうが、何れ程か心細い事であらう」寺森は「併し爾決心したのは、外から助けて呉れる人が無いからの事　吾々が愈救ひ出すとすれば、不幸の境涯も夫れ切りで終るのサ平洲は更に下文を讀むに。

逃出す望み全く絶え、斯る絶域の土と爲るに決したるも是れ余が家を捨て妻を捨て、義理人情に外れたる行ひをせし罰なれば、自ら招きし禍ひなり、今更誰をか恨まんや。

心細くも斯は決心せし余をば、故々救ひ出さん爲め、萬里の遠征を企てられしとは、余に取りて、身に餘る大幸なり、余は諸君の厚意を想ひ、有難さに手の舞ひ足の踏むを知らず、又謝する言葉をも知ざるなり、ア、、余最早や死するとも遺憾なし。

余は滿腔の誠意を以て諸君に謝し、且つ切に諸君が余の救出しを思止る事を請はざるを得ず余を救ひ出すとは、到底人間の力にて出來ざる事なればなり。

遠征隊には定めし、兵も有らん、武器も有らん、去れど兵も武器も此殘刻なる國に向ひては何の功無し、余を救はんとして此國に入込まば、啻だ余を救ひ得ぬのみならず、諸君も共に鏖殺にせらる可し、若し萬に一つも助る可き見込あらば、余は懇願しても諸君の助けを請ふべきなれど、悲しや其見込み絶て無し、助かる見込みの絶無なるに、余何ぞ諸君の如き愚人に犬死せしむる事を得ん、諸君此國に入込むは犬死の地に入込むなり、而して余も同じく殺さるゝなり、諸君は自らも死し、余をも殺さんより、余自ら斷念めし如く「芽蘭男爵は到底救くる道無き者」と斷念め、此國へは入込まずして歸國せられよ、歸國して諸君も助かり余をも此國にて運命に從ひて、天然に死せしむるに如かんや。

芽蘭夫人が此書を讀みて泣崩れたるも多分は是等の文句にて、所夫の境涯を思遣り其敢果さを察しての事なる可し。

余は猶ほ諸君を斷念せしむる爲に此國の有樣一般を記さんに、此國は全亞弗利加洲中にて他に類の無きほど殘刻無慚なる習慣にして、又其の殘刻無慚を充分に行ひ得るほど強猛なる國なり、國人唯だ人を殺す事を喜びて、日々の務め殺人の手段を講ずるに在り、殊に最も恐しきは女子を以て組織したる美人軍なり、何の時より初りし習ひなるかは知されど、女子十二歳に達すれば兵に徴せられ、最も嚴重なる操練を受けて其の身體と筋力とに非常の發達を現はし、十七八歳に及びては、身を勞して疲るゝを知らず、危きに臨みて怯むを知らず、傷を受けて痛みを訴へず、鐵石の如き身體と爲り、而も其の擧動の敏捷にして自在なるは譬ふるに物も無く、足は鳥の飛ぶ如く輕く動き、手は左右とも劍を振りて電に似たり、斯の如くして美人軍に組入れられし者今は八千人あり、其武器は孰れも毒汁に浸したる物にして、之に觸るゝ者死せざるは無く、鎧には鋭き針あり、如何なる敵も近くを得ず、近づけば必ず殺さる、而も其の訓練と規律との正しき事驚く可く、少し怠惰の色ある者は、容赦も無く死刑に處せらる、而して又一方には賞を以て奬勵する道あり、賞とは婚禮を許すなり、是等の女子戰ひに臨み敵幾人を屠れ

ば、初て所夫を授けらるゝ者にして、所夫は即ち女子の勳章なり、美人軍は皆此勳章を熱望して現役の苦しきを知らず、不幸にして戰ひに臨むは美人軍の何よりも望む所とし、一旦許を得て所夫を持たば、現役を免ぜられて敵を殺す事無き者は何時までも獨身として老る事なれば宛も平和を取締れる行政警察官の如く、國内の諸地方へ配付せらる、此許を得ざる者は嚴重に監督せられ、殆ど男子と言葉をも交る能はず。

此美人軍は今より數代以前に組織せられ、今の女王の代に至り最も完成したる者なりと云ふ此國は古より強國なれど、美人軍の現はれてより、一入其の強きを增し、殆ど無敵の有樣なれば、自然に女の威も振ひ、終に男子を凌駕して女子を國王と爲に至りし物なり、今の國王輪陀と云ふも、美人軍の現役を最も美事に勤果せたる者の由にて、國中の尊敬最と深し、男子は唯だ朝廷の下役と、地方一部の長官に用ひらるゝに過ぎず。

斯の如くにして美人軍の勢は年々に進む者なれば、縱しや歐羅巴の精兵を以てするとも、之を破る事能はず、之に敵するは死神に敵するなり。

百二十二

斯る兇暴なる美人軍の有る事は今までの旅行者、一も探りたる無し、諸君も之を知ざる爲め余を救ふ事の出來得る如く思ひしなる可し。

諸君、願くは歸國して此事を地學協會に告げよ、斯る兇暴の軍ありと知らば、確かに諸君が此國に入らずして引返したるを無理なりとせんや、此國に入るは死地に入るなり、無謀なり、一點事理を解せざる人なり、余は誠心誠意、切に諸君が余を捨て去らん事を祈る。

余を見捨つるは諸君或は情に於て忍びざらんか、否々忍びざる所なし、余は今や幾分か捕虜の境涯に慣れ、左までの苦痛をも感ぜぬのみか、實は此地にて一種の目的あり、他なし生命の續く間は、屈せず撓まず人たる者の道を說きて、野蠻人の心を啓き、幾分なりとも此地の惡風を改め、其殘刻なる所行を捨てしめ、以て年々虐殺せらるゝ無辜の徒を助けんとするなり、四海兄弟一視同仁の心を以てせば、斯る絶域の民とても憫む可きは同一なり、此憫む可きを憫み

て幾分なりとも之に文明道德の緒口を知らしめ、善惡の差別を解せしむるは誰の任ぞ、正しく文明國人の任なり、去れど文明の國人到底入込む事能はず、唯だ偶然に入込み得し余の如き者、自ら其任に當らずば、入込むに道も無き他の人が如何で此任に當るを得ん、諸君よ、願くは余をして此任に當らしめよ、余は斯る善事に身を委ぬると思へば此地に入込みたるを悔ひず、此地に捕虜として拘留せらるゝを厭はず。人多くして事足れる本國に歸るよりも、此地にて人を益し道を行ふの功をば多く遂げ得るを知るなり、道無き國に道を說き、生涯を此憐む可き同胞の爲に捨れば、余は國を捨て、家を捨て、妻を捨て此地に入込みたる一身の罪をも、幾分か償ひ得可しと信ず、諸君歸國の上は余が妻をも尋ねて、此書を示せ、妻は必ず余が諸君に救はるゝよりも道の爲に此地に死するを喜ばん、余の友にも地學協會にも之を示せ、皆必ず余が歸國するよりも此蠻民に道德を敎へて、朽果る事を余の本分なりと贊成せん。

余は少くとも此土地の人民に他國人の憎む可きに非ざる事を敎へ、追ては文明國の人も自由に入込み得る迄に道を開かん、其時には本國より余に優る眞の傳道師も入込み得べし、又余を

救はんとする諸君とても再び來りて安全に余を救ひ得可し、其時にこそ余は救はれん、否救はれずとも其時には輪陀女王の許を得て、無事に此國を去る事をも得、又南進して未知の地に入り、此國の如き憐む可き國を求めて、再び道徳の光を廣むるに身を委ぬる事を得ん、一旦世路を蹈誤まりて斯る境涯に立至りし余に取りては、此外に我が道とす可き道は無し。

余は此小にて當地の言葉をも學び、今は大力の事を自由に言得る事と爲り、既に女王の傍に集へる朝廷の人々に對し、一兩度道徳を說き說教を試ねたるに、彼等は連關せる思想の順々と言葉に現ろゝを聞きし事無ければ、殆ど解し得ざる樣なるも猶ほ珍しき事に思ひて大に聞く事を喜べり、今は珍しとして聞けども、遠からず意を味はひて聞くに至らん、既に其中の稍や心力の進みし者は、余が意の所々を解して後には質問を試むるも有り、女王までも余が心に動かされ、徐々國政を改むるに至る事必ずしも見込無きに非ず。

諸君若し余が知れる丈け此國の惡き習慣を知らば、必ず余が斯く決心するの已むを得ざる事を悟らん、試みに其一を云へば、此國に一種の禁厭師と稱す可き者あり、人之を神の如く

思ひ、吉凶之に問ふを常とせり、問ふには必ず供物として美女を捧ぐ、事の大小に應じ一人を供ふるあり、或は數人を捧ぐるあり　唯だ禁厭師の命の儘なり、是等の美女は一夜若くは二夜を經て忽ち禁厭師に殺され、肉は食料として其徒弟に切分たる、アア斯る惡習をも許し置かる可きか、國中の女、强壯なるは悉く美人軍に狩入れられ、軍に堪へぬ虛弱の者は多く禁厭師の玩弄と爲り、餌食と爲る、而も國政は之を以て美人軍を盛にする手段と認めり、餌食と爲るの恐しきを避けんには殆ど美人軍に加はる外無ければなり、而も猶ほ之より甚だしきあり、余は記すだも毛髮の立つを覺ゆ。

百二十三

毛髮の逆立つとは他に非ず、余が當地に來りてより一月ほどを經て、蛇祭とも稱す可き一種の祭典を、王宮にて行ひたり、彼の禁厭師等は蛇を以て一種の神體なりと爲し、常に綿の中に蛇を蟠らせ、之を禮拜する習慣にして、一年に一度は蛇神の怒を宥むると稱し、無慘なる活劇

を演ずとの訳なり、余は詳しく記す事能はされど、之が爲に人命を損する事幾百なるを知らず、先づ各地方にて籤を引きて血祭に供せらるゝ人を定め、夫を捕縛して王宮へ引來る者にして、余が見し時は斯く引來らるゝ者、三百人の上に出たり、祭典の場は王宮より三里ほど離れたる野原に設け、禁厭師之を司どり、一方に壇を設けて壇の上に蛇體を安置し、其の前にて國中の人をして彼の憐む可き常籤人を一人づゝ殺さしむるなり、殺すには武器を用ふるを許さず、唯だ素手の儘にて或は爪或は齒、或は拳を以てする定めなれば、想像も及ばざる撕殺しなり、無數の力を以て一人に加ふとは云へ、武器無きが爲め其の進み甚だ遲く、大抵は其身體の肉を抓き剝き、嚙取り、完膚無き迄に傷けてのち、猶ほ追廻し、最後に地上に蹂躙り、壓潰して終る者なれば、三百餘人を殺すに一週間を費したり、一人を殺す毎に歡呼の聲は滿場に沸起り、其の恐しきこと云ふばかり無く、祭典の終りし跡は全く血の池と爲りたり。

斯る有樣なれば其他の慘刻なる習慣は記す迄も無し、余は切て是等の最も著るしき習慣だけも廢せしめずば、此地に入込みたる甲斐なしと、其後は幾度も說敎して其非を諭すに、女王も

纔に仁心の一端を解し得し如く來年よりは蛇祭だけは廢せんと言居れり、余は此後益々我が德望を高くし、一言一行蠻人等の尊敬を受るに至らば、仍ほ善を以て樣々の惡習を改めしめ得べしと信ず、余は之を以て我が天職なりと思へり、他日此國をして歐羅巴人の無事に入來り得るまでに進ましめば、余が本望は終るなり、余が今日の境涯、悲む可しとは雖も、余は之を以て我が天職とし、職に斃るゝ外なきなり。

斯る次第なれば余は到底助かる可き道無し、諸君、又到底此國へ入込む能はず、入込むは死するなり、諸君は唯だ余を他界の人なりと思ひ、最早や救ふに道無しと斷念せられよ、余の言ふ所に一點の僞はり無し。

男爵の手紙は之にて終れり、平洲も茂林も讀み終りて默然とし、暫しは何の言葉をも發する能はず、寺森醫師は催促の語調にて「サア君方は何うする分別だ」茂林漸やく顏を擧げ「何うも今更ら致方が無い、何れ程の危險でも進んで其國に入込む丈サ」寺森は靑き顏にて「入込めば鏖殺と爲る一方だぜ、君は芽蘭男爵の手紙に僞りが有ると思ふか」平洲も初めて思案を決し得し如く

首を上げ「イヤ男爵の手紙に一句たりとも僞りが有るとも思はぬ、黒天女の國は世界に類の無い兇暴の國に違ひ無い、併し男爵は未だ吾々の力を知らぬのだ、吾々は普通の遠征隊とは違ひ、此土地より以北で第一等の强兵と云はれる、魔雲坐王を引連て居るのだよ」茂林も贊成の樣子にて「爾だ、今までは何うかして魔雲坐を追返し度いと思つたが、斯なつて見れば彼れの一緒に來たのが吾々の仕合せだ、彼れを引連れ、遊林臺へ侵入して、其結果が何うなるか、縱しや打勝て男爵を救ひ得た所で、吾々と魔雲坐との間は何うなるか、夫も心配に堪へぬけれど、兎に角彼れが有るから、吾々は男爵の想像するより强いのだ」「爾サ、殊に彼の兵は過日來、文明流の訓練を經一號令の下に進退する有樣と爲たから、初め國を出る頃に比べれば更に三倍も强く成て居る、其上吾々は名澤の兵と此度び門鳩兵中より選拔た兵を合せ、百五十名だけは文明の銃器を持た兵を引連れて居る、美人軍が如何ほど强くても無惜々々と負けは仕まい、何でも運を天に任せ進む所まで進まれば」と、死を決せし如き言葉を吐くは全く芽蘭男爵の現はれし爲め、兩人とも此世の望み絶果たる如く感じ、命を何とも思はざるに至りし者と知らる。實に二人の身は、無事に男爵

を得て本國へ歸るとも面白からず、美人軍の强きを恐れ其の境にも入らずして歸り行かば、猶更ら世界の物笑ひなれば、死地を目掛けて猛進する外、選ぶ可き道だも無きなり。

百二十四

死す可き時に死せざれば、死にまさる恥ありとは實に平洲と茂林と兩人が今の身なり、進みて女護の國に入れば、美人軍に殺さるゝ事十中八九迄は確なれど、退きて歸國せば世界の物笑ひと爲り、知己朋友に見ゆに顏無し、此旅行を企てたる大目的も芽蘭男爵の一通の手紙にて搔消れたると同樣なれば、兩人は進みて死する外無しと、早くも心の中に決し、口には唯だ男爵を救はんとのみ言へど、實は我身を捨るに在る事言はず語らず察し合ふのみ、幸にして男爵を救ひ得ば、最初の目的は消ゆるとも、猶ほ男子の面目は繋がる可し、若し救ひ得ざれば死する外に何の道かあらんやと、胸に其決心を疊みて兩人是より芽蘭夫人の許に至るに、夫人は最早や泣く丈け泣きて、淚も盡きたると見え、默然と唯だ考ふるのみなりしが、兩人の姿を見て忽ちに容を正し「貴

方がたは男爵の手紙をお讀成つたか」と最と落着きて問へり、何うやら夫人は死す可き時の來りしを知り、覺悟を定めて全く此世の望みを絶ちたるに似たり、二人は此樣に何とやら胸迫りて「ハイ」と答ふる外、一語をも發する能はず、夫人は却て勿々に雄々しき所あり、騷ぎもせず、復泣んともせず、相も變らぬ落着きし調子にて「愈貴方がたとお分れの時が來ました」と云ふ兩人は此一語に愕然とし「エ、何と仰有る」と左右より齊しく問ふに、夫人は驚かず、何の不思議も無き極て自然の事柄を說明す如き語調にて「アノ手紙をお讀成れば芽蘭男爵の妻として私の務は明白です、茲で貴方がたと分れねば成ません、ハイ今まで數知れぬ艱難と危險を掛け、長の道中を守護して下さつた御兩所の厚意を謝し、茲でお分れ申一方です、謝すといつたとて言葉では謝し盡せませんが、無事に巴里に歸着く時が有たら、其時に更めてお禮を申ます」平洲は「エ貴女は私共を茲に捨單身で男爵の居る國へ進入らうと云ふのですか」と問ひ、茂林は「エ、エ、我々に茲から巴里へ歸れと仰有るのですか」ミ一時に問へり、夫人は無言の中に「然り」この意を示せるにぞ、茂林は躍起と爲り「成る程貴女が芽蘭男爵の妻たる務から云へば、此上私共と

一緒に旅行するは、穩で無いかも知れません、去ればとて、茲で吾々が何うして貴女を捨られませう、別に危險と云ふ程の危險も無い、今までを一緒に來て、愈守護の役目が必要だと云ふ是から先を守護せぬとは、茲まで來主意が分りません」「イヤ所夫男爵の手紙に據り考へますのに如何なる守護を引連て進んだ所が到底敵の刀に勝つ事が出來ず、人數の多い丈け却て危險を增す樣な譯ですから、私唯だ一人ならば、男爵が單身に入込だと同じく、敵も私を恐る可き者と思はぬから、左まで氣をも留めず、唯だ怪まれる位で、別に危い事も有ますまい、若し危い場合には木の陰に身を隱しても濟むと云ふものです」平「では全くの單身で」「イヤ單身ミは云ふ者の帆浦女の外に案內兼從者として通辯亞利老兵名澤、此三人を連れ都合四人で參ります、唯だ四人なれば、縱しや囚はれた所で、其場で殺される事は無く、必ず捕虜として輪陀女王とやらの王宮へ送られませう、私の思案は此の通り定まつて最う動きません」眞に動かぬ決心の如く、力を込めて云ひ切りたれば二人は今更の如く夫人の凜然たる氣質に感じ、暫しは返す語も無かりしが頓て茂「何故、亞利と名澤の代に私と平洲とをお連れ成されません」「ハイ一日は爾うも考へまし

たが、亞利と名澤は一時の雇人ですから、若し黑天女の國とやらへ入り込んで愈危ふいと見れば深入せぬ中に私を捨て逃歸りませう、是だけ私は氣易いと思ひます、貴方がたは殺される時に成ても逃去ず猶私を守護し、却て命を損する迄も抵抗なさるは必定ですから、誠に私の責が重くなります、親身も及ばぬ程親切にして下さツた貴方がたを私の爲に死せては縱し私だけ無事に生殘ツても、何時までも氣が濟ません」斯く云ふ折しも、彼方なる魔雲坐が營地の方に當り、四方に響く凄じき鬨の聲起りたれば、平洲は暫し耳を澄せし後「お聞なさい、夫人、那の聲は魔雲坐王が黑天女の國へ攻て入る事を部下に傳へた爲、部下の兵等が喜で鯨波を揚るのです、貴女も始て聞く聲では有ますまい、吾々は貴女の仰に從ひ、お分れ申すとしても魔雲坐王は勿々此處でお別れには致しません、貴方と共に敵國まで入り込みます、さうすれば貴女が折角敵の怒に觸ぬ樣、單身で入込でも無益です、敵は貴女方に怒らずとも魔雲坐王に怒ります夫のみか魔雲坐王の今までの振舞も分て居ませう、彼れが貴女に暴行を加へぬのは、吾々の在る爲です、我々去て唯だ貴女のみと爲れば、魔雲坐は第一に貴女を捕へます、貴女の身には敵よりも魔雲坐

王が恐る可しです、是れほど明白な危險が有るのに、吾々何うして貴女の守護を止められませう」此故障には夫人始て驚きたり、如何にも玆にて平洲、茂林等に分れなば敵國へ入らぬ中にも魔雲坐王の手込に遭はん、夫人は落着たる身の何とやら不安心氣に戰き初めしが、暫し考へて又鎭り、「夫では魔雲坐よりも先に、ハイ今夜の中に私は玆を脫出し敵國へ入り込みます、明朝になり魔雲坐が追ひ掛けても捕はれません、私は成る可く間道を選びますから、ハイ唯だ此上のお情には明朝魔雲坐が氣の附て怒た時、成る可く御兩人で宥めて頂きませう、玆で魔雲坐に斯して分れねば此後決して彼れに分るゝ時は有ません、縱しや彼れの兵力を借り敵國を攻亡ぼす迄の手柄を現すとも、私の身は遂に彼れの手の中より逃られる事が出來ません、ハイ私の心は固く斯う決しました、此後何の樣な故障が有うとも此決心は變ませんから、何うぞ此場限りお別れとして頂きませう」斯までに云ふ者を、此上何と說きたりとて、從はしむ見込は無し、平洲も漸く決したる樣子にて「では致方が有ません、茂林君は何う致しますか、私だけはお言葉に從ひ玆でお別れとして直に本國へ歸りませう」と云ひ出せり。

百二十五

「私だけはお言葉に從ひ、茲でお別れとして本國へ歸りませう」と潔く承知せし平洲の言葉何うやら樣子の有り相なれば、夫人は尙も危む如く、平洲の顏を見詰るに、平洲は旁ど其眺に敵する能はず、顏を傍向けて茂林に向ひ「君は何うする」と短く問ふに、茂林は忽ち平洲の眞意を察し「僕も仕方が無い、夫人のお言葉に從ツて茲から本國へ歸るとしやう」夫人は容易に我が言葉の聽れしを喜び、初て安心の色を現し「爾仰有つて下さるこそ本統の親切です、是れで私も身輕と爲り無事に遊林臺へ入込む見込も附ました、今までの御恩は何と謝しませうか、イヤ命を捨ても謝し盡す事は出來ませんが」と言來る中にも、平洲と茂林は目と目にて心を通はせ、何やらん打合せつゝ有るにぞ、夫人は忽ち夫と氣附き「イヤ貴方がたは、本國へ歸ると云ひ、私を安心させて置き、爾して私より先忍んで敵國へ入込むお積りでは有りませんか」と流石機敏の質だけに、星を指す如くに問ふに、平洲は最と眞面目に「イヽエ、全く歸國するのです、但し歸國

の道筋だけは吾々の自由に任せて戴かねば成りません、吾々は成る丈け近く成る丈け面白い道を選ぶ積りですから」是れ丈け聞て夫人は何も彼も悟り盡せり「イヤ、之が歸國する近道だと云ひ、矢張り遊林臺へ入込むお積でせう」平洲は斷乎として「ハイ、吾々は遊林臺を南方へ通り拔れば必ず殘日坡の港へ出られるゝ確信して居ます、殘日坡迄行き其所から船で歸國するのが、何よりの近道に相違有ません」茂林も此語を補ひ「ハイ殘日坡から船で歸る近道が有のに夫を捨て元來た道へ引返す抔と、其樣な迂遠な事は到底出來ません」と斷言せり。

夫人は茲に至り到底二人を追返す路無きを知り、双眼に熱き涙を浮めて「イヱ、お二方が遊林臺の危險を知り乍でも尙ほ入込と仰有るのは、日頃の御氣質として無理は無く、全く私の爲め命をお捨成さる覺悟です、私も何うかお二人に命までも捨させ度くは無いと思ひ、アノ樣に申しましたが、爾まで思つて下さる者を夫でもとは申されません、ハイ死ぬ時には三人で手を取合せて死ませう」と云ひ兩の手を差延すは、眞實兩人の親切に感じ、分れて死する心無しとの意を明す者なるべし、兩人は胸迫りて復た一語をも發する能はず、双方より其手の上に伏俯向き熱き涙

をハラ〳〵と其甲に注ぐは心と心の融解し、感極つて悲しさの催ほせしものなるべし。

眞に此瞬間こそ二人が爲には國を出て以來曾て無き所なり、此後とても再び夫人の手を斯く握り得る時の有りや無しや、其時すら定め難ければ二人は暫しが間、自他の差をも生死の別をも忘れ、最早や夫人の爲に死する外、世に目的は無しさまでに思ぬ。頓て二人は我に歸り、靜に夫人の手を放ちたるも、却て面はゆき想あり、殆ど夫人の顏を見る能はず　眼を垂れしまゝ双方より「最う夫人、何の御心配も有ません、若し人間業で芽蘭男爵が救はれる者なら、必ず我々が救ひます」と聲を合せて誓ひ、背進せぬ許に畏みて退出したるが、是よりは唯だ「死地」と云ふ黒天女の國に進み入る用意のみなり、用意とても外には有らず、進軍の部署を定め、又玆まで送り來る巖如郎王に別れを告ぐるのみの事なり。

斯る折しも再び魔雲坐の陣中にて鯨波起りたれば、平洲と茂林は其方を指して行かんとするに先刻分れし寺森醫師横合より出で來り「君方と夫人との評議は何う極た」と問へり　茂「勿論遊林臺へ攻て行く事に極た、君は兼てより、黒天女を拜み度いと熱心に唱て居たから、定めし斯聞いて本望だらう」「イヤ命に替て迄も黒天女を見度いとは思はぬが、今更ら獨り逃歸る譯にも行かず、詮方なく同流するのサ」茂林は快濶に「死際には花々しく歌牌の勝負でも遣うよ」と云ひて笑ながら慰むるに、歌牌と聞て聊か引立ち「敵の首は切らずとも、歌牌を切て打死しやう」と云ひ更に又「オ、君方に相談する事が有る、帆浦女が巖如郎王に分れるが辛いと云ひ獨り泣て居るが此儘置けば先に魔雲坐の朝廷へ押掛けた樣に、又巖如郎王に對し何の樣な失態を釀すかも知れぬ」平洲は苦々しく笑ひて「本統に始末が悪い、何うか寺森君、君が引受け、帆浦女を煽てるなり宥るなりして、確と監督して呉れ給へ」と最う六かしき役目を言附け、更に進みて魔雲坐王の營に到るに、彼れは頻に部下に向ひ遊林臺に美人の多き事を說き「汝等妻帶を欲せば美人軍と戰ひて生捕り返れ」など勵しつゝ有り、進軍の用意既に落無く整ひたる樣子なれば、愈明朝を以て總隊出發する事に定めたり。

百二十六

初めより命掛の旅にはあれど、眞に命の盡る所は、黒天女の國なる可しと、一同心の中に死を決し、出發の用意を爲すに、三日目に及び事落も無く整ひたり。

愈出發に臨み、平洲は此所まで送り來りし彼の麻列峨國王巖如郎に向ひ、先に此一行が案内者として土門陀國より伴ひ來りし老黒奴を手厚く待遇せん事を請ふに、巖如郎は勿論の事なりと心好く承諾し、且言ふ樣「彼の老黒奴は元と我が先王の近衛兵にして敵國に捕はれし者なれば彼が敵國に居る間は余が國の恥辱なり、彼御身等の爲に救はれて歸りしは國辱を雪ぎたるにも同じければ、是だけに然る可く賞する事當然なるに、殊に彼れは敵國にて窘められ身體に容易ならぬ傷を受けて、今日まで生存へし事勇士の本分とも云ふ可く、其上白人を救ひ、看病して敵國に於て活神とまで崇めらるゝに至りし事、古來例の無き所なれば、余も永く彼れを豫言者と崇めて余の宮中に上席を與ふ可し」と誠實の心、其の面に現はれたれば、平洲、茂林も安心し、愈弦を立たるは巴里を出たる翌々年の二月の末方なり。

一行の中、最ら分れを巖如郎王に惜みたるは帆浦女なり、帆浦女は王の姿の見えずなるまで、

振向ては我手の甲に接吻して、幾度と無く名殘の意を示し、時には步み乘る程の事ありしも、其度に寺森醫師が引立て。漸く一行に後れざらしむるを得たり、一行は魔雲坐王の兵を先に立て、次に銃器を賦與したる彼れの精兵を置き、其次に芽蘭夫人及び平洲、茂林等の一同續き、後より人足及び輜重を從はしめ、名澤の兵を以て最後の警衛とは爲したり、進む事數里にして、其日の中に黒天女國の領内に入込みたれば何時敵より襲はるゝも計られずと、スハと云はゞ直に戰ふ用意を爲し、怠らず偵察して進に、未だ此行が領内に入込みたる事輪陀女王に知れざる爲か、敵らしき者も無し、沿道の村々の民、出來りて一行を觀るさは雖も、今まで經たる他の蠻民の如く騷がしからず、口々に怪み咳く等の事無くして無言の儘同道するは、物に動ぜぬ大國民の風ありとも云ふ可く、今の此一行を粉碎して一人も生ては還らしめずとの決心を胸の底に蓄へるにも似て何とやら薄氣味悪き心地せらる、是等の中には芽蘭男爵の手紙に在りし如く、美人兵のうち戰場に功を立てゝ良人を持つ許を得、地方に還りて警察官に成れる者かとも思はるゝ美人も有り、寺森醫師は其者共の體格を見て感心する事一方ならず、實に此國の人種は身體の發育非常にして、

歐洲文明の人種にも劣らず、定めし膂力も優れ、戰ひも強かる可しと、一種の恐れを帶びて褒立るも無理ならず、如何にも此人種は何よりも己れの身體を大切にすると見え、少しも他の野蠻人の如く身を傷くる飾物を施さず、針にて突きたる文身も無ければ、有害なる繪の具を以て顏を粧ふなどの事も無し、色こそ黑けれ一點の傷も無き天然の美玉にも比す可き者なれば、寺森は進むに從ひ「何うして、此人種は天神の子孫だ」「此國の女は天女が生落したに相違無い、本統の黑天女だ」など口續けに言ひたるが、頓て二日路を進みし頃より、意外なる強敵こそは現れた。

其は兼て期したる美人軍には有られで土語に「ツヱツヱー」と稱する一種の毒蠅なり、此蠅の特質は人體に害を爲さねど、馬には非常の毒を與へ、之に刺さるゝ馬は直ちに病を發し斃るゝを常とす、爾れば一同一方ならず心配して、及ぶだけ豫防を施したれど、何しろ小き蠅にして、木の幹、草の葉に隱れ、馬の臭氣を嚊知ては飛來る物なれば、殆ど防ぎ盡す能はず、乘馬は大體倒されて、唯だ巖如郎より贈られたる荷牛のみと爲りたれば、果は一同徒歩と爲りしが、今の中に歩行に疲れては肝腎戰爭の時、用に堪へざる恐れ有り、止むを得ず日々の行程を減じ、大事を取り

て徐々に進む事とは爲したり。

地形山勢とても今までに見し所と異なれる節多かれど、一々は記し難し、進み〳〵て、三月の八日には、既に此境へ入込みてより十二日目なれば、餘りの無事に一行の心も稍や弛み、戰ひを期して來りしに何の戰ひにも出會ざるは、却て氣拔せらるゝ者なりなど呟くも有れど、平洲と茂林とは軍人の眼を以て何か益々氣遣はしき樣子でも感知せし如く、次第に無口と爲り、唯だ考へ込むのみなりしが、頓ては堪兼し如く、彼の魔雲坐の許に至り、密に「御身は敵が一方ならぬ用意を爲しつゝ有る事に心附かざるや」と問へり、魔雲坐も實戰に慣れたる身なれば同じ所に氣の附きしと見え、容易ならぬ面持にて「アヽ此國の人は戰爭の法を知れり、余は過日より御身等の制止に負き、出來る丈は敵國の食物を奪ひて、我が兵糧の盡きざるを計らんと、夜々密に手下を派し分捕せしむるに、隨分の大村にすら食物の少き事驚く可し、是れ必ず輪陀女王とやらが吾等の來るを知り、兵糧を乏しからしめん爲め、總て都へ召集めたる者と知らる、余自らも斯る手段にて功を奏したる實驗あり」と云ふ、平洲は聞終りて「扨は食物までも爾る手廻しの屆けるに

や、余は食物の多少は知ねど、此数日前より、過る所の村々に老者幼者を遺せるのみにて、男女とも壯年の者更に無きに心付たり、此の邊に至りて壯年の者益々少し、何さま戰爭に堪ふる丈の男女は、一人殘らず都へ召集められしと見ゆ、食物も、夫等の壯者が都へ運び行きたる者なる可し」可く云ひて念の爲め此三人にて近村に入込み、檢め見るに壯年血氣の者は雙影をも留めず殘る老少とても敵に殺さるゝを甘んぜる者の如く、人を見て驚かず、敵の用意は益々以て行届けり、彼等が大擧して、唯だ一戰に此方を鏖殺せん計略なるは明かなり、芽園男爵が手紙の誡めも茲に至りて思ひ當らる。

百二十七

敵が大軍を集めて、一行を待てる事は、最早や疑ふ可くも非ず、此上進むは全く死地に歩み入る者なり、去ればとて、引返す事の成るに非ず、唯其死地に進み入る一方なれば、平洲、茂林、及び魔雲坐は、斯る事を部下に知せて、徒に軍氣を阻喪せしめんより、秘密にするに如かずと

爲し默然として分れたるが、是より後は、何時、何の所に、敵軍の現はるゝも知れねばと、最も偵察を嚴重に、充分地理を見定めし上、進む事としたしが、此翌々日の夕方には既に最後の險阻を越え、向ふの方遙青山を眼前に仰ぎ見る所に達せり、遙青山の直下に輪陀女王の都有りと聞けば平洲は望遠鏡を取て見るに、猶ほ廿哩以上の距離は有る可く、全く平地の樣には有れど、小山又は、森林など幾重にも斷隔てゝ、望み見る事能はず、何でも明日の夕か、明後日の朝と爲らば、必ず敵と衝突するならん、其時には如何にす可きやなど、心を惱しつゝ露營せしが、過し事、後の事、などを思ひて、轉た感激の胸に迫り、夢屢々驚かさるゝにぞ、東の纖に白む頃、誰より先に獨り起出で、背後の小高き坂に上り、又望遠鏡を取りて望み見るに、個は抑も如何に右も左も見渡す限りの山の峰に敵の兵あり、蟻の行列にも似たり、何さま敵が、此方の豫算より早く、昨夜の中に、遠卷に卷たる事確なれば、平洲は急ぎて、茂林を呼起し猶ほ魔雲坐にも知しめて、直に部下一同へ警を傳へ、更に軍略を評議するに、背後は既に昨夜越したる山にして天然の圍とは成れるが上に、總體の地勢を見るに敵が此方の背後に出ん事は到底

出來難かる可く、唯左右の山より勢を示して此方の主力を分割せしめ、實は正面より攻來る事明なり、此方の備は前面に濠を掘り其土を手前に積上げ、壘と爲して敵の越え得ぬ川意に供へ、敵寄すれば濠を隔てゝ壘の上より射る事とし、成可き丈は攻るより防ぐを主と爲し唯だ敵に弛みの有るを待ち、弛み有る度に奇を出して之を挫ぎ、充分敵の力を見定めたる上に、猛然として突出で、彼れを驚かしむる工夫も有る可し、兎にも角にも多く味方を損ぜずして、長きに堪ふる計を爲すが肝腎なりこて、早速兵士人足總掛にて濠と壘とを作らしむるに、別に工兵の技は備へざれど何しろ必死の場合なれば、仲々に能く運べり、其間に、平洲と、茂林とは、又も望遠鏡を持ちて高きに上り、敵の狀を見るに、先刻よりは夜も明放れ、更に明白に見て取り得る廉多し、遠く左右の山に在るは、音に聞く美人軍には非ず、弓矢を以て武器と爲す、通常男子軍なり、此國の精兵は美人軍なること兼て聞く所なれば、美人軍の在る所卽ち主力の在る所にして、女王輪陀も必ず其所に出陣するなる可し、玆か彼所と見る中に、此方の陣より纔に五百碼ばかりなる東北の山蔭に、蟠まれる一隊あり、確に是れ美人軍なり。殊に其備へを見るに、何うやら女王も其の

背後に在り、遠き左右の山に在る兵をば、合圖に依りて意の如く使ひつゝ有りと覺しく、左右の山より此方へ來る者も有り、此方より左右の山へ行く者も有るに似たり、美人軍は仲々の大勢なりと聞きつるに、今見る所にては五百人の上には出でじ、意外に少き事哉、と怪みて猶能く見れば、都の方より山麓に傳ひ、從列と爲りてゾロ〳〵と此軍に加はる者あり、見る中に、八百人千人と增し行く樣なり、扨は猶ほ都より繰出して玆に充分なる本陣を形作りつゝ有る者と知らる、今より一時間をも經ば、美人軍は悉く玆に集る者なる可し、戰ひは先づ地形を知るに在れば、平洲と茂林とは、次に總體の地形を察するに、曾て、亞利より聞きたる如く、都より今しも美人軍の集まれる背後までの所は、眞に神劍鬼斧を以て削り做したる如き絶壁にして、巖々たる石を疊み、攀登る可き所も無く、又山越に來り襲ふ敵ある能はじ、全く壁を背後にして敵に向へる如き者なり、成るほど此の斷崖絶壁が遙青山の此方の麓なる可く、人も獸も之を攀登る事到底思ひも寄らぬ程なれば亞弗利加人は總體が之を以て地の盡る端なりと思へるも、無理ならず。

斯く觀測する所へ、通譯亞利は醫師寺森と共に登り來り、今迄に集ひつゝ在る美人軍の背後に

屏だつ絶壁を指し「アノ崖に人の立姿の樣な大石が有ませう」と云ふ、成るほど巨人の立つに似たる絶大の巖石あり、雙方より山の少しく垂來る低き所を戸の如くに塞ぎて屹立せるにぞ　茂「成るほど人の姿に似た石だ、山の形を見るに、若しアノ石を、何うかして取退ければ、背後は谷間と爲り、アルバート湖まで越られるに違ひ無い、本統に邪魔な石だ、アレが無ければ吾々芽蘭男爵を奪ひ、彼所から攀上て、南方へ逃去る見込も附くけれど」と愚痴を翻すに、平洲傍より「爾サ、那の石の高さは數十丈あり幅は外の石と重つて幾等有るとも測られぬが、縱し其背後に谷間の道が有ても到底アノ石を取除る見込は無い」亞利は語を添へ「此國ではアノ石を軍の神の化身と稱し、非常に尊敬し、アノ石へ願を掛ければ決して軍に負る事は無いと云ふ相です、夫だから美人軍が彼所へ集ふのでせう」茂林は嘲笑ひ「幾等巨人の形に似たればとて、石などを神と崇める樣では充分の戰ひは出來ぬ、夫こそ我々の筒音を聞き、雷神を使ふと妄信するより猶愚かだ」と蹶做すのみにて此の巨人石に如何ほど怪異を現し來るやを知り得ざりしは無理も無き所ならんか。

百二十八

巨人の形を爲せる彼の軍神石の下に集ふ、敵の軍は益々增加する一方なり、多分は輪陀女王も此中に籠れるならん、又芽蘭男爵も鎖の儘犬の如くに引き連られ、片時女王の傍を離されずとの事なれば、同じく軍神石の下に來りて在るやも知れず。

見る中に輪陀女王の號令に因る事と見え、美人軍の前に、男子の兵卒立列び、美人軍は其の背後に隱るゝ如き地位と爲りたり、扨は兼て聞く如く美人軍は最後に至りて出戰ふとの事なれば、先づ男子軍に戰はせて、背後より其の手並を見物せんとする心ならん、夫にしても此方に取りては啻美人軍の恐ろしきのみに非ず男子軍も又恐る可し、彼等の身體は確に歐羅巴の人に同じく、魔雲坐の兵に優れる事數等なり、軍をのみ事とする此國の男子なれば、縱し美人軍ほど猛からずとも、軍の掛引、決して魔雲坐が兵より劣る筈なし、此方の軍は、或は美人軍の手を勞せずして鏖殺と爲る如き悲運には落ちざる乎。

敵の勢益々增加するを見ては、弦を死す可き場所なりと決したる、平洲と茂林も、餘り好き心地は無し、無言の儘に望遠鏡を遣取するのみなるに、斯る所へ寺森醫師は、白き布へ何やらん文字を記せし旗の如き者をば、旗竿にも着けずして提げ來り、平洲、茂林、兩人に向ひて「愈吾々一同鏖殺にせられる時が來た、敵軍の樣子を見れば到底吾々の勝と爲る見込は無い、併し結句此方が有難いよ、何うなる事かと日々不安心の中に迷て居た今までよりも、愈々殺されると定つた今日の方が安心だ、心配の厭が少しも無いから」と眞に死を決して安心せし如くに述べ、二人が何とも返事せぬを見て、更に又「けれど君方兩人は僕と違ひ殺されては成らぬ身だ、芽蘭夫人が生て居る間は、何うしても守護せねばならぬから」と云ふ、二人は之を聞きて面持の異樣に變ずるを禁じ得ず、二人の思ふ所又實に玆に在りて、寺森の言葉其の星を指したればなり。今に至りて身を捨るは固より覺悟の所なれど、唯だ芽蘭夫人を如何す可きや、一里とも隔てざる眼前に多年分れし其所夫の繋がれ居るは確なるを、之にも逢さず夫人を殺さる可きや、去ればとて助く可き見込も附かず、夫人と一時に死する事兩人の本望には有れど、我身は輕く夫人の身は重し

と、兩人とも心中に同じ思ひを蓄へて、思案の未だ決せざる所なれば、仍も默然として立つに「玆に至つて外に工夫は無い、屆くか屆かぬか知らぬけれど僕は君方の爲め輪陀女王へ休戰を言込む積だ」休戰とは意外の言葉なれば、茂林は怪みて「何だ休戰」「爾サ、吾々は少しも黑天女を殺す必要は無い、唯だ芽蘭男爵を救ふと云ふ極めて平和な目的だから、其意を明に言込みて女王に悟らしむれば、或は女王も平和の談判を承知するかも知れぬ、平和の談判ならば君方二人が得意だから 茂「今更ら女王が其樣な申込みを聽く者か」「聽かねば元々と云ふ者だ、申込みもせずに聽ぬだらうなど此方から遠慮する事は無い」平洲は初めて口を開き「爾した所で、何うして休戰を申込む」寺森は我が言葉の用ひられんとする色あるを喜ぶ如く、一際勇みて「其使ひには僕が當る」「便ひとて敵の陣へ達せぬ中に射殺されるよ、見給へ美人軍の前に立つ男子軍等が弓に矢を當て居るでは無いか、最う野蠻流に鯨波を揚げて、直に開戰する許だ」「イヤ僕は休戰の旗を樹てゝ行くから、敵も決して僕を射ぬだらう、射られた所で今も云ふ元々サ」「休戰の旗とて其樣な者は吾々持合せぬ」「イヤ僕は今朝敵の大軍を見るが否や、直ちに休戰の案を立て、帆

浦女に旗を縫はせ、自分で休戰と字を書て、ヤツと今焙ツて乾かせたから持て來たのだ、コレ見給へ」と云ひて持てる白旗を舒べて示せり、成るほど白き金巾を縫合せ、之に佛語を以て「休戰」と記したる者なり茂林は「休戰の何者たるも知らず、戰鬪條規なども解せぬ野蠻人が、此旗に遠慮して射る手を停めるなど云ふ事が有らうか」と嘲笑ふに「ナニ野蠻人は此旗の文字さへ解し得無いが、僕は女王の傍に、女王の傍に、芽蘭男爵が繋がれて居ると思ふ、男爵が此文字を見れば、必死に成て女王に解き、暫く射る手を停めさせるに違ひ無い、男爵が辯說にて大に女王の心を動す事が有るとは男爵の手紙にも書て有たぢや無いか」と何から何まで考へ盡したる返事なれば、茂林も復た嘲けらず、平洲は却て「フム君の勇氣には感心した、成るほど目的を達せぬ所が元々だから其旗を建て使者と成て行て見給へ」と贊成するに「ナニ決して僕は勇氣が有て此使者に成るのでは無い、輪陀女王の美しい顏を無傷の中に見て置き度いのだ、僕の兼て研究して居るのは皮膚病の大眞理が今は唯だ一個の疑問を殘す丈だから、黑天女の皮膚を能く見れば、必ず其の疑問が解け大發明が完成するを何うか歸國して其の發明を歐羅巴の醫學社會へ披露する事は出來ぬが、

死ぬる前に自分の心だけにも疑問を解て置き度い、夫に此國の美人へ黑天女と云ふ名を附けたのは僕だから、僕は彼等の名附親だ、親さして死際に名附娘の顏を一目見度いと云ふは人情では無いか」と斯る際に猶ほ笑談を斷ざるは日頃に似合はぬ勇氣なれば、是ほど落着て有らば萬に一つも此使命を果すも知れずと今は茂林までも贊成するに、寺森は發明の爲に身を犧牲にするは學者の本分を失はず、旗推立てゝ敵陣の方を指し悠々と歩み出せり。

百二十九

斯る間に、先程より兵卒人夫等が掘り居たる防備の濠は、不充分ながらも大方は出來上り、掘出したる土塊は濠の此方に高く壘を築きたり、敵なる輪陀女王の兵も此時まで勢揃に忙しき者の如く唯だ右往左往に鎭らぬ體なりしが、此方の壘より寺森醫士が白き休戰の旗を推立てゝ歩み出ると見るや、餘り今まで例の無き事なるが爲めに、何事かと怪みて、暫し如何にして對す可きやを決し得ぬ如く、動搖めきたる末、漸く足並を揃へたり、寺森が僅に十間ばかり進みたる頃、異

様なる叱咤の聲敵の陣中に起り、引續きて最と疎らに矢を射初めたり、一人の敵に向ふて大勢の矢を費すに及ばずと爲し、唯だ此方の擧動を試す丈の目的なる可し、去れど距離猶ほ遠きが爲に矢は一筋も寺森の許に達せず、寺森は靜に敵の陣總體を眺め廻し、先づ輪陀女王の居る所を認得たるにや、是より只眼を陣の一箇所にのみ注ぎ、傍目をも振らずして又悠々と歩み初めぬ、斯て寺森の近づくに連れ敵の矢は漸く密に成行けども寺森の身には一の短銃を腰に着るのみ、矢を防ぐ可き楯だも無し、去れど彼れ矢の來るを知らざる振にて同く一方を見詰めたる儘進むに、敵も寺森の寸鐵をだに帶びざるを見て攻立るに及ばずと爲したるか、寺森が漸く矢の屆く邊まで進みたる頃陣の一部再び動搖きて一同忽ち矢を射る事を止たり。

寺森は矢の來ると來らざるとに頓着せず猶も同じ足取にて泰然と廿間ほど進み行くに、此時、寺森が最初より眼を注ぎたる邊より、兵卒を推分て單身進み出る一人あり、黑き野蠻人の間に靑白き其顏目立ちて見え、髯茫々として赤く延びたるは、病上りの人かと見ゆれども、疑ひも無き歐羅巴人なり、敵の中に歐羅巴の人ありとは芽蘭男爵に非ずして夫れ誰ぞや。

着物は幾年か着の儘なる可く、破れて襤褸に同じけれど、歐羅巴の仕立なり、頭に戴く略帽子は之も幾年を經たるや知れず、色さへ見分け難けれど、旅行家の帽子なり、此人其の汚れたる帽子を取りて、寺森に向ひ何やらん制止の如く打振るは多分其所より近くへは進む勿れとの合圖なる可し、寺森は斯く解して歩を駐むるに、其人は寺森の方を指し一直線に歩み來れり、近くに從ひて歐羅巴人たる事は愈々以て疑ふ可からず、頓て彼れ全く寺森の前に立ち、再び帽子を取りて敬禮せし末、情に堪へざる語調にて「貴方は、貴方は！」と言掛くる其言葉全く佛蘭西語なり、何より先に言ひて好きにやと暫し戸惑ふ體なりしが頓て「イヤ貴方の旗に佛蘭西語で黑く休戰の一語が見えましたから、私はヤツトの事で女王に說き、兵卒の矢を止めさせて、無理に許を得て出て來ました」と、言ひつゝも熱心に寺森の顏を見詰めて「貴方は多分、私を探す爲に千辛萬苦して此國へ入込だ佛國の遠征隊員で有りませう」寺森も尋ね〳〵し辛苦の末、斯る境涯にて漸く芽蘭男爵に逢ひしかと思ひ、又男爵の憐む可き姿を見ては聲の振はざらんと欲するも得ず「ハイ貴方こそ必定吾々の尋ねて居る芽蘭男爵でせう」「ハイ」と云ひつゝ男爵は手を延べて我知らず寺

森の手を握り緊め「私が其の芽蘭男爵です、今では佛國に居た時の影も有ませんけれどハイ全く芽蘭です、シタが貴方は、貴方のお名前はー、生涯忘られぬ大恩人の名を茲で伺つて置きませう」「ナニ私は遠征の發起者で無いのですから貴方の恩人では有ません、唯だ遠征隊に雇はれて隨行する醫師です」「寺森と云ふ者ですシテ貴方を雇ふて來た其遠征隊の重なる人々は」と是より男爵の言葉は殆ど口を衝く如く湧て出たり。

百三十

徒らに問答して時を過す可き場合ならず、實に是れ必死の折、戰ふか戰はざるか、男爵敵陣より此まゝ逃れ得るか逃れ得ざるかを速かに決す可き時なりと雖も、再び生て歐羅巴人に逢ふ事能はじと、先の手紙にも記せし如く決心せし身が、圖らず歐羅巴の遠征隊に我身を救はん爲に來りしと聞き、又親しく其一員と顏を合せては聞はざるを得ず、此方も亦死せしと思ひし人に逢ひては語ざるを得ず、寺森醫師は、遠征の重なる人は誰ぞやとの男爵の問に對し「ハイ書學士茂林、

文學士平洲の兩人です」「ア、貴方を合せて三人の苗字だけは巴里を出る以前にも聞た事が有ります、三君の名は膽に銘じて今後片時も忘れません」「併しー」「ハイ併し今は夫より大切の要談が有ます、私は貴方の旅の文字を見るや、到底許されぬ許しを得、不斷は鑛に繫がれて居ますけれど、鑛を離れて出て來ましたが、貴方がたは先日私が手紙を以て、決して私を救ふ事は出來ぬから此國へはお入なさるなと堅くお止申したのに、此通りお出に成つた、イヤ是は私が貴方にしても遙々麻列峨國まで來て後へ引返す事は出來ませんが、併し私を救ふ事は全く見込が無いのです、貴方が唯だ一人り矢面を冒し、休戰の旗を建て斯く歩出て來たのは何の目的です」「私は輪陀とやら云ふ此國の女王に逢ひ度いのです、言葉は通じませぬけれど逢へば定めし貴方が通辯して下さる事と思ひました、逢て我々の目的の平和に在る事を告げ、成る可く慘酷な戰爭などせずに濟さうと思ひました」男爵は一言に「夫れは無益です」「何故に」「何と說ても決して輪陀女王は承知しません、其樣な氣質では無いのです、既に女王は門鳩の王魔雲坐さやらが兵を率ゐて此國へ入込んだ事を十五日以前に聞きました、其中には數人の白人も居ると聞きましたが、

怒りに白人と門鳩人との區別をも一方ならず憫んで居ます、私は其白人とは必ず貴方がただと思ひ、毎日女王に暴力を用ひぬ樣に說きましたけれど、女王の信ずる占者も、亦國民の多數も、戰爭を主張して今日に至りました、戰へば貴方がたが敗るに極つて居ますけれど、悲い哉斯く申す私さへ貴方がたを助ける工風が有りません」「でも必ず我々が負ると限つた事は有りますまい」男「何うして此國は全國皆兵と云ふ有樣ですもの、遠國から攻て來た門鳩の兵が萬に一も勝つ事は出來ません、軍神石と云ふアノ高い大石の下に居る兵士の體格を見ても分りませう、私が貴方がたへ、決して此國へ入込むなと堅く制して上たのも、全く此國を攻亡ぼす見込が無い爲です、何事も軍隊組織で嚴重に嚴重を加へますから、私さへ貴方がたの陣へ逃て行く事が出來ません」寺森は此一語には稍や驚き「エ、エ、貴方は弦まで出て來たのに、私と一緒に吾々の陣へ逃て行く事さへ出來ませんか」「夫が出來れば貴方と弦で話しはせず疾に貴方の陣へ逃込むのです、先づ軍神石の傍らに居る美人軍を御覽なさい、彼等は悉く近衞の精兵で私を逃さぬ任務を以て居ます、私は此の方角に向き足數まで制限せられヤツと弦まで來たのですから

弦より一歩でも貴方の陣の方へ進めば美人軍が飛烏の如く飛來り貴方を殺して私を連歸ります今は尙だ幸ひに少しの猶豫が有ますから貴方がたの遠征隊は弦から直に元來た道へ引返し本國へお歸りなさい、ハイ私だけを此國へ殘して歸るのは遠征隊の本意では有ますまいが、今は爾うする一方です、其代り私は必死に成つて女王を說き、白人には何の害をも加へずに立去らせよと沿道へ觸させる樣に計らひます」「イヤ今と爲ては吾々引返す事は出來ません、魔雲坐王は此國の兵と力を比べ度いと云ひ、其の目的ばかりの爲に來たのですから、若し女王が彼れに平和の面會を許し、同盟國の約を結べば兎に角も、左無くば魔雲坐王の方から戰ひを挑みます「イヤ女王が今更ら魔雲坐王と平和の面會をする抔とは決して出來ぬ所です」「では雙方の戰爭は最早や避る事が出來ません」芽蘭男爵は愕然として「成るほど避る事が出來ません戰爭の一方です」「戰爭せば吾々が敗て殺されるに極ツて居ると云のですネ」芽蘭男爵は默然として答ふる能はず、寺森は一際其聲を切にして「貴方は私と一緒に遠征隊の陣へ逃込む事が出來ぬと仰有るけれど遠征隊には佛國から吾々と同行した婦人の有事を御存知有ませんか」「知て居ます、沿道の民から女王への

報告に白い婦人が二人同行して居ると有ましたが無論唯今聞いた文學士平洲君と畵學士茂林君の令室でせう、御兩君は曾て李敏敦翁や米可將軍の様に、令室同道で遠征を試みたでせう」寺森は熱心に「イヤ其夫人は巴里へ殘された貴方の妻です、ハイ芽蘭男爵夫人です」と力を込めて言切るに、大勇と聞えたる男爵も之には立つ足の蹌踉くほど驚きて「エ私の妻が、私の妻が貴方がたと供に遠征隊に加つて、此地まで來て居るのですか」と叫び更に思ひ直して、自ら其身の熱心を恥る如く「其様な事は有ますまい」と言葉丈は靜なれど眼の異様に輝くは、胸に無限の感慨湧起りし爲なるべし。

百三十一

寺森醫師と芽蘭男爵と斯く急しく問答する暇にも、彼方なる軍神石の下に控へる美人軍は、全く男爵の言ふ通り、男爵を逃さじとの任務を帶べると見へ、前面なる男子軍の列を排して外に立現れ、息を凝して男爵の一擧一動を眺めつゝ有り、男爵若し一足だも制限の外に蹈出さば、直に

飛來りて捕へんと瞬瀑もせず張開きたる彼等の眼は、輝きて天に列なる星にも似たり、美しくして又物凄し、曾て廊列峨國巖如郎王の話に美人軍の眼には恐ろしき力あり、其の怒りて敵を追來るや燃るが如き光を放ち、凄まじき事云ふ許無しと云ひたるも僞りには非ざりき、而も彼等が男爵を狙ひて一號令の許に飛び掛らんと控へたる身構へは、將に獲物を搏たんとして身を潛むる猛虎の様かとも疑はる。

寺森醫師は斜に斯る様を見遣りて、男爵を救ひ出す道全く絕たるを知り、又男爵自から逃れ去る見込みは猶更ら無き事を知りたるも、靜に前後を考へ得る場合ならねば、男爵が其妻芽蘭夫人の眞に來りて彼方に在るを猶ほ信じ得ぬ様なりと見、更らに言葉を急にして「男爵、私の言ふ事は一句一句皆事實です、事實ならぬ事など云ふ暇は無い場合です」「エ皆事實、全く私の妻が向ふのアノ陣中に」と男爵は我を忘れて念を推し、餘りの驚きに殆ど震上りて見えたり「ハイ芽蘭夫人の今居る所は茲から三百ヤードとは離れません、夫人も茲で貴方が私と問答などして居る事は知りませんが」男爵は熱心の爲め夢中に爲り、其身が何事を云ひつゝ有るやをも判じ得ぬ程

の早口にて疊み掛け「何うして妻が玆へ來ましたか、何して旅行しましたか、何して巴里を立ましたか、何して、何して」と言來り後は情に迫りて聲だも出 です「何うしてゞて我々の遠征隊は芽蘭夫人が自ら發起して一行の頭と爲て居るのです「ヱ、ヱ、私の妻が、自分で發起し」「ハイ先年可通無府に居る佛國の領事から、貴方が盆鄉地方で死去したと云ふ間違つた報告が佛國へ達し、政府は間違ひと知る筈なく、直ちに夫々公報しました、地學協會は申すに及ばず國人一同悲んで遙に貴方を吊ひましたが、芽蘭夫人は貴方が何處で死だかを見屆け、親しく葬參せねば妻たる者の務めが濟まぬと云ひ、縱しや蠻人に殺されるも構はぬと云ふ決心で、遠征隊を作たので す、爾して深く亞弗利加に入れば入るだけ貴方の死だ場所が無く、却つて活て居る事まで分つた爲め、葬參の目的は貴方を救ひ出す目的と變じ、遂に此國まで入込みました」と要を摘みて說明すに、男爵は聞くに從ひ、驚きは悲みと爲り「妻に爾までの苦勞を掛けたとは知りませず」と言掛けて兩の手に顏を當て、後は一語をも發し得ざれど、身を悶へて男泣に泣きつゝ有るは時々共肩をまで震はす樣にて察せらる、泣く可き場合に非ずとは云へ、眞に泣かずには居られぬ程の事

柄なれば、寺森は何と慰めん言葉も知れず、唯だ兩の手を握り締むるのみなるに、頓て男爵は、決然たる分別の起りし如く、身を引延して寺森の手を握り「最う殺されるも致し方が有ません、妻は何所に、妻は何處に、私を妻の傍へお連下さい、何うして玆に居られませう」と云ひつゝ强く寺森の手を引きつ、彼れを引擦る勢ひにて此方の陣を指し走り來らんとす、寺森は既に美人軍の嚴重に見張れる樣を見、到底男爵が逃れ得ぬ事を知れば、今度は却て彼れ自ら男爵を引留め「イヤ男爵、爾う性急に仰有つても到底玆は無事に逃れ去る事は出來ません、靜かに考へ、計略を以て脫れ出ねば」と足踏しめて動かじとする、男爵は場合の危きをも忘れ、前後の思慮も定まらず「サア、サア」と促がし叫けびつゝ寺森を引立るに、病臺けたる其身にも必死の時には、必死の力ある者と見え、寺森も殆ど抵抗する事能はず、二足三足引立らるゝに、眞に飛鳥の勢ひにて彼の美人軍、百人ほど飛來り、寺森との周圍を輪の如くに取圍み、前にも後にも行く事能はざらしめたり、其の早業、唯だ驚くの外はあらず。

二人の周圍を輪の如く取巻きたる美人軍は二重三重に立並べり、芽蘭男爵と寺森醫師とは其中に在りて進みも退きも爲す能はず、寺森は聞しに優る美人軍の早技に驚きて、徒らに彼等の顏を見廻すのみ、夢中に寺森を引擦つゝ有りし男爵とても如何ともする能はず、立すくみて唯だ美人軍に殺さるゝを待つのみの有樣なるに、美人軍は此二人を殺せとの命令は未だ受けずして單に二人を逃すべからずとの任務に止ると見え、圍みて逃道を塞ぎたるのみ、敢て迫り來りて捕へんともせず。

此間に寺森は美人軍の有樣を見るに彼等は孰れも廿歲位と見る女にして、其年齡と體格の能く揃ひしは嚴重の檢査を以て近衞の兵に選拔たる者と知らる、彼等唯だ身體の最と壯健にして强氣に見るのみには非ず、手足其他の關節毎に鋭き針の有る武具を着け以て敵を刺殺す用に供ふると貸て聞きしに異らず、彼等若し二人を殺す心あらば唯だ其の圍を狹め來りて二人に密接すれば足

れり、二人は彼等の武具に在る針に刺されて自から死せん、何の手をも下すに及ばず。

斯る有樣なれば、熱心に妻の許に走行かんと悶掻き居たる芽蘭男爵は、唯だ悔しげに扼腕して美人軍の顏を睨むのみ、復た如何ともする能はず、去れご睨む事少時にして、又思ひ直せし如く苦々しく嘆息して、寺森に向ひ「御覽なさい此通りです、私は最も嚴重なる囚はれ人で、此女等が番人ですから到底逃る事は出來ません」と云ふ、此語の中には遙々尋ね來りたる妻の許へだに行く能はざる無量の恨を含むなる可し、寺森は察し遣りて「實にお氣の毒には存じますが「イヤ其樣な事を云て居る場合では有ません、今に玆へ女王が來て、必らず私ミ貴方へ處分を施します、其前に一應打合せて置きませう、私は女王に向ひ、決して此國を逃去る心は無いと、固く誓ひて其怒りを宥める一方です、爾して貴方の命乞を致しませう、總て黑人は一般に何とやら白人を尊び恐れる心が有て、容易には殺しません、他分女王も私の請を聞き、貴方を向ふの陣へ放ち返す氣に成りませう、此場合に私の爲し得る所は唯だ是だけです、此上の事は到底私の力に及びません、其代り女王から貴方の命だけ宥すと云ふ命が出れば、貴方は無言の儘謹みてお歸

り成さい、女王に平和休戰の事を一言でも云込では成りません女王は魔雲坐王から同盟の言込を、此上も無き無禮として怒つて居ますから、若し貴方が平和等の語を發せば女王は全く貴方をも魔雲坐王と同樣に見做し、此場で殺すかも知ません、何でも譯慮の色を見せ逃返る一法です」寺森は一々に此差圖を呑込み「心得ました、けれども私が立去れば直に戰爭が始まりませう、私は休戰の旗を樹てゝ來て開戰の端緒を作つて還る樣な者です」「ハイ止むを得ません、併し開戰と爲れば女王も兵士も眞に關ひに夢中と爲るのは此國人の氣質ですから、軍の進むに從つて大に私を見張る事が忽諸に成るだらうと思ひます、其時には私は暇を見て貴方の陣へ逃て行きます、成る丈け何うぞ長く防ぎ戰ふ計略を取て下さい、長い間には必定其の隙が出來るでせう、何事が有ても此の美人軍と接戰しては無益です、接戰は美人軍の大得意ですから、萬に一つも之に勝つ事は出來ません、私は暇を見て逃出す所を、縱しや日附つて殺されても厭ひません一歩たりとも貴方がたや妻の居る所へ近寄て死ぬるのが私の願ひです」と云ふ何ぞ其覺悟の悲きや「分りました、貴方の御所存を詳しく平洲、茂林の兩人にも傳へ、成る可く戰ひを長くして貴方に逃

出しの機會を與へる樣に計ります」と返事の繩に終る折しも壁の如くに取圍み居し美人軍の輪は、颯と其一方を開くと見えしが、開きし所より輪陀女王は別に數百人の美人兵を供に引連れ、悠然として入來れり、ア、是れが寺森の黑天女と名を附けて、見ぬ戀にあこがれたる女護洲の女王なり、此女王の心一つに在る二人の運命は如何樣に決せんとするや。

百三十三

壁の如くに、寺森と芽蘭男爵とを圍みたる美人軍の一方を開かせて、其の所より歩み來りし輪陀女王は、部下を愛撫はる大將の有樣にて、輕く一同に會釋したり、寺森は我が運も男爵の命も全く此女王の手の中に在るを知れば、此世を辭する最後の一刻は來れりと思へども、今更ら驚きも恐れもせず、寧ろ幾月か心の裏に描きたる黑天女の眞體の面あたりに見る時の來りしを喜ぶのみ、此さへ見れば、死も何ぞ厭ふに足らんと心を固めて落着るは、亦一種の勇氣と云ふ可きか。

輪陀女王は寺森には氣も留めず、一意に芽蘭男爵の許を指し歩み來れり、其樣宛も我が王宮の

虜をば女王自ら處分するに何の怪む所や有るこ云ふが如く、極めて平淡にして又極めて自然たれども、其の自然なる間に何と無く優美にして氣高き所あり、天女の空を歩むも斯る姿にやと疑はる、寺森が斯く見る間に女王は無言のまゝ芽離男爵の手を取りしが、男爵は玆ぞ今し方寺森に約束したる命請の時なると思ひし如く、悲々しく拜禮して最と熱心に女王に向ひて說き初めぬ、寺森は其言葉の半句をも解する能はず、又解し度しとも思はず。唯だ女王の顏の一筋をも見落さじと、眼を凝して見詰るのみ、此後に及び或人寺森の手帳を得て披き見たるに此時の己が感じを左の如く記し有りたり。

天女こは唯だ繪に見るのみなれど、繪は吾々と同じく地に立ち土を踏む俗人の心より出る者なれば、如何に優美なるも俗を離れず、通例の美人を少し異樣に寫したるに止まる、眞の天女とは輪陀女王なる可し、輪陀の輪陀たる所は土を踏む俗人の筆にて、字にも繪にも盡し得る如きに非ず、先づ目を閉ぢて「天女」こ云へる語を取りて冥想せよ、冥想久しければ、天女とは斯る姿にもやと思はるゝ、凡その想像は茫乎として目の先に浮ぶ可し、其の浮ぶ所は人に由り

て同じからざるも、各々の浮べ得たる所より、最も俗に遠き部分をのみ取集て、實の形と爲さば、或は輪陀に近き者を得べきか、余は斯く云ふより外に人をして黑天女の姿を想像せしむ可き語あるを知らず。

身の長は五尺三四寸、手足の釣合は——否否、斯く云へば是れ俗人の體格を檢査する語にて既に輪陀女王を俗了するに非ずや、輪陀の身には數字なし釣合なし、長は高しと見れば高く低しと見れば低く、何人も之を高過るとも云ふ能はず、最も品格ある背丈にして、此上に伸るをも縮むるをも得べからず、眞に圓滿の美を備へたるもの、否備へたるに非ず、昔し哲學者プラトの云ひし如く若し天上の圓滿の美てふ者ありとせば其美が即ち其處に生れ出たるなり、而も美の中に威をも兼ねたり。

色は手入れたる古銅に似たり、斯る顏色は美を損すると云ふ勿れ、美の俗なる者は色の爲に損せらるれ、圓滿の美は色の爲に動かされざるこ、化粧せし醜婦よりも、素顏の美人美しきを見ても知れ、輪陀は造化の刻みたる銅像なり、銅像にして靈あり能く活動する者なり、其の

美と云ふは形に在るよりも、變化に在り、發顯に在り、手を動す美なり、足を擧ぐる美なり、姿勢の變ずる所に美自から溢るゝなり、物を云へば人直ちに、顏に發顯し、眼に活動して人の肺腑に入るかと疑る、發顯總べて溫和なり愛らしきなり、時に怒の色を含めば鋭きなり、暗の天を破る電光の凄ましきに似たる所もあり、人を惱殺しつゝ又人を畏縮せしむ。

余は生涯黑天女輪陀女王の半分さも人を動かす力ある者を見ず、只管らに嘆服して、余は暫し我が位置の危急なるをも忘れ居たり。

斯も記す程なれば、寺森は全く我を忘れて感服せしなり、女王の眼は、男爵との話しの間に二回ほど寺森の方に向きしが、其度に寺森の茫然自失せる樣子を見て取りたり、女の身として男子より斯くまでに嘆服せらる女王尊しと雖も心に幾分の歡びを催さざらん、況してや寺森より天女と見做さるれど畢竟は淺果なる蠻國の婦人なり、怒るも易く解くるも亦易きこと文明國人の思ひ及ばざる所あり、男爵との話は次第に柔ぎ來り、終には其命乞の意を聞届くるに至りしと見ゆ、女王自ら此方に振向き、手を以て、何やらん部下に差圖するに、取圍める美人軍の一方は出口の

如くに寺森の爲めに開きたり、女王が最と靜に其の所を指すは、寺森に玆より立去れとの意なる可し、斯る間にも部下に對し、一語をも發せざるは最と鷹揚なる振舞にして、女王の威嚴も此邊に在りと云ふ可きか、寺森は猶も女王の顏を見て其心を察するに、敵の使者一人を返すとも軍の上に何か有らん、今返すは後に戰ひて殺すか、方なくば捕虜とせんが爲なり、暫時の間、汝に汝の命を貸與へ置くと云ふに在る可し、此推量の果して當るや否、寺森は一語をも發する能はず、唯だ女王の姿を更に深く我が記憶に印せしめんと、又も其の顏を眺め、更に四方に並ぶ美人軍の姿を見つゝ靜に退きて、其の出口の如く開きたる所を立出で去りたり。

百三十四

輪陀女王の差圖にて、左右に開く美人軍の圍みの中より、寺森醫師は靜に步み出るを得たれど思へば我が此使ひの目的、一も達したる所無し、親しく芽蘭男爵に逢ひたると、面あたり黑天女の美しき姿及び美人軍の有樣を見たるとは、聊か平生の望みを滿せし者なりとは云へ、大事の目

的は休戦に在り、又芽蘭男爵を救ひ出すに在り、休戦の言込届かずして、兩軍の戦ひは最早や眼前の事と爲りたるのみかは、芽蘭男爵の事とても却て輪陀女王をして、益々嚴重に男爵を取扱はしむる元をこそ開きたれ、少しも男爵救ひ出しの道を作り得ず、縦に男爵が「美人軍等の戦爭に夢中と爲りたる暇を見て、妻の傍に逃行かん」と云ひたる言葉を頼と爲し、男爵の自ら逃來る時を待つ一方とは爲れり、殊に此戦、到底勝つ見込みあらざれば、男爵縦しや逃來るとも、唯だ一同と共に殺さるゝか、或は再び捕虜と爲るのみの運命なれば、夫や是やを思ひ合せ、寺森は我れより進みて引受たる、我働きの功無きを恥ぢ、又一同の身の成行を氣遣ひて、殆ど引返す力も無し、最初に勇しく打振りて進みたる休戦の旗をば、今は捲收て杖の如くに突き、力無く〳〵、此方の陣へは歸り着きたり。

弦には、平洲と茂林と、既に休戦の談判届かざるを知りて、充分に戦ひの用意を整へて有り、其の大體の備へを記せば、魔雲坐王の兵を中軍と爲し、名澤の兵を右翼と爲し、別に魔雲坐の兵の中より精を抜きて歐羅巴の兵法にて訓練したる新隊を左翼と爲して、平洲自ら之を率ゐ、茂林

は中軍の號令役として魔雲坐と並進む事ゝは爲せり、又芽蘭夫人は帆浦女と共に、左翼なる新隊の後に、少しばかりの林あるを居所と爲し、林の陰に通譯亞利、及び阿馬の二人に守護せられ、各々六連發の短銃を手にし、最後の時には敵を射るよりも自ら我身を射て、敵の辱しめを受ずして死する用意を爲せり、此中にて帆浦女は、敵に美人軍あるからは、我身も女の兵と爲り、共々に戦はんと云ひ、甲斐々々しく出立たるは、定めし美人軍の姿美しきを聞き、我姿實に野蠻の女に劣んやとの心にて、彼れと姿を競ふ積なる可きも、芽蘭夫人之を許さず、寧ろ此所に在りて手負の介抱を爲すに如かずと、云ひて制したれば、徒らに其鐵火箸の如き姿を、右左に折曲げて殘念がるのみ、此一群にも加はらず、又戦線にも出ざるは、唯だ寺森醫師と下僕與助なり、寺森は軍醫長として陣の最後部に場所を構へ、十餘の人足を引連て職を守り、與助は何せ數限り無き敵兵に勝つ見込み無ければ、戦ふて死するは戦はずして死するに如かず、ゝ獨り悟りを開きたる如き事を言へごも、實は戦はずして生殘る工風を案じ、陣の後なる山の洞穴に一匹の牛を連れて隱れ入り、逃る時の乘物とも爲し、食盡る時の兵糧とも爲す考へは、彼に取りて最上の智慧なる可

し。

百般の備へ斯く整ひたれば、平洲、茂林は、魔雲坐王と共に暫しの間軍議を凝し、今朝より、濠を掘りて、其手前に築きたる壁に據りて、敵を防ぐ可きか、將た其の外に進み出でゝ攻勢を取る可きやを、相談するに、早や敵軍は關の聲を揚げて進み來る有樣なれば、之を防ぐは之を攻むるに在りとなし、唯だ打負けて如何とも致し難き場合に、弦に退きて敵を遮ぎる事にせんと、三人意見を同くしたれば、先づ中軍なる魔雲坐の兵、敵と同じく関を擧げて前に出で、右軍左軍は遠く其の後に出で、中軍の危き場合を見て應援する事にしたり、勿論左右の軍は此國の者等が夢にだも見し事無き佛國製の銃器を携へ一人能く敵の數十人に當る程の精兵なれば、漫に火藥を費し、或は力を疲すなどの事を爲す可らず、敵の兵數より其力の强弱まで篤と見定めたる上にて初て動く打合せなり。

既にして中軍が原の中ほどまで達せし頃、彼方の中軍も進み來り、雙方射頃の場所とは爲れり彼等は美人軍には非ず、通例の男子軍なり、美人軍は依然として軍神石の下に在り、察するに男

子軍が、美人軍の眼前にて、働き振を試驗せらるゝ者なる可く、試驗の結果、到底勝利の見込無きに到りて、初て美人軍の出で來る者なる可し、即ち彼方の美人軍は此方の左右翼と同樣にして最後の勝利を制する爲め、靜に控へて見物せるなり。

野蠻人の戰ひは極めて亂雜なる者なるに、雙方ともに野蠻中の最精兵なれば、一種の規律を備へ、侵し難き所あり、頓て彼れ先づ聲を放ち、聲と共に弓を引て射出すに、其早き事連發の銃を發するにも等しく、矢は密集して雨の如くに注ぎ來る、察するに彼れ唯だ一擊にて勝を得ん心なる可し、此方も之に應ずれど茂林の注意にて、初は漫に射せしめず、唯だ疎に發射して其の距離を測らしめ、漸く確なる狙ひの定まるを見計らひ、更に急射の令を下すに、彼方の矢の多く此方の頭上を飛越去るに引替へ、此方は殆ど仇矢無く、一矢に必ず一人を斃す程の有樣なれば、敵の前軍は少しの間に潰れたり、去れど其背後に猶ほ幾隊の備へあり、一隊斃るれば、其死骸を踏越えて、又一隊現はれ來り、其の入代りの巧なる事驚く可き許なり、凡そ四十分程にして、敵は隊を入代る事五回に及び、猶ほ盡る所を知らず、此方とても未だ疲れたる色は無けれど、敵の隊數

此上猶ほ幾回の入代りに堪ふ可きやと、茂林は凡その數を算するに、今朝三方の山の峰に蟻の集ふ如く見えたる彼等の兵は、山の上より次第々々々に降り來りて、其の中軍の背後へ背後へと集りつゝ有り、此上十回や廿回、入代るとも、到底盡く可しとは思はれず。

百三十五

三方の山より降來る敵の兵、續々として何時果つ可しとも思はれず、而も其規律の正しき事殆ど文明流の精兵とも云ふ可く、一軍、矢盡れば退きて背後の兵と代り、背後の兵前に出て前線に立ち、戰鬪力減ずれば又背後なる新兵と入代る、其交代の樣、迫かず、騷がず、寃も悠々と機械でも轉ずる如くなり、流石に大國の兵と云ふ可く、斯る兵は到底勝たざれば止まざる者なり。

此方の兵も尚ほ少しも疲れたる容子無く、勇氣益々振ふ有樣なり、去れど、茂林は大將の眼を以て、到底敗北に終る可きを見て取りたり、到底は敗北にもせよ、如何樣に敗北す可きや、先づ白人の甚だ侮り難きを示し、後々まで恐れしむる如くに敗北せねばならず、或は潰れて列を紊し

或は逃げて後を見せ、眞に敗軍の敗軍たる醜き樣を現す樣の事ありては、敗北の上にも後々まで長く笑はれ侮らるゝなり、個は我が望む敗北に非ず、我が望みは勇しく花々しき敗北に在り、花々しき敗北は愈々力の續かぬ時、咄嗟に起りて突貫し、敵の足下にて死するに在り、幾千と數知れずして而も彼れが如く落着きたる敵の中へ、突進めば鏖殺にせらるゝ事必定なれば、逃るとも助からぬ場合なれば、此外に勇士の死樣は無し、幸ひに突貫の方などは、其外の掛引と共に、魔雲坐の兵に授け、充分訓練し置きたれば、敵を破る爲に教へし事が、自ら討死する爲に用ゐらるゝ事遺憾なれど、運命玆に至りては詮方なしと、全く心を決し、最後の塲合を待つ中にも、又思ふに我より突貫せざる中に、敵より却て突貫し來らば如何、衆を以て寡に向ふ唯だ一潰しに我軍を壓潰す事と爲らん、今こそ我軍の足並一絲も紊れず力の底測り難き有樣なれば、敵も輕擊を誡めて敢て進み來らざるなれ、我軍の戰鬪力に聊か缺くる所あるに至らば、敵必ず雪崩れの如く我軍を壓し來らん、斯く爲りては我が思ふ所も畫餅なり、敵の掛引文明兵の如く巧なるを見れば、此方の力を測り、接戰を以て壓せんとする位の事は必ず知らん、大切なるは敵に先を越されずし

て、我より先を制するに在り。

斯く心は定めたれど、今日初めての戰ひに一日をも支へずして、總軍討死して盡る事、餘りと云へば殘念なり、到底の運命は敗北に在りとするも、切て一度は勝利を得、敵を追散す位の手柄は現はし度し、斯かる手柄如何にして現はす可きか、何しろ數限り無き敵なれば、之を亂すには何とかして敵の中に恐慌を起さしめ、其の整へる號令を妨げて、足並を攪擾し、留度も無く動搖せしむる外は無し、之を爲す如何にす可き、如何にせば敵に爾る恐れを起さしむ可きやと、空しく心を絞りつゝ、若し魔雲坐王に問はば、彼れは又實戰に慣れたる丈け意外の思想有るや知れず、ト茂林は少しづゝ彼れの傍に身を寄せ、終に彼れに接したれば、低き聲にて「御身の勝つ見込は如何に」と問ふに、魔雲坐は急しく弓を放ちつゝも「見よ我兵の死する者未だ三十を越えざるに、我兵の矢も仇矢少く敵は既に我が十倍も死したり」と云ふ、成る程死人の數は敵我れに十倍せり魔雲坐は又一矢を射終りて「大抵の敵ならば最早や逃る時分なるに、數多きだけ未だ逃ず、而し汆は遂に勝つ積りなり、今少しの間を見よ」と云ふ、其勇氣は天晴なるも、彼れは野蠻人だけに

大勢を見て取る能はず、ニ茂林は心中にて評するに、彼れ又茂林の樣子を察し「掛念無し、掛念無し、我軍は背後に敵の矢を拾ふ役目あり、拾ひて又用ふる故、矢の盡る恐れ無し、矢若し盡くれば敵中に飛入りて、劍の鬪ひより引續き齒の戰ひと爲るなり、齒の戰ひと爲らば、我が部下の兵に如く者無き事御身既に土門陀の戰爭にて知れるに非ずや」と云ふ、扨は彼れ、人食人種の本性を現し、終に齒と齒を以て嚙合ふ迄に戰はん所存と見ゆ、離れたる弓矢の戰に緩くに接したる劍の軍を以てし、又之に次ぐに入亂れたる齒の鬪ひを以てす、魔雲坐の部下が强兵として門鳩地方の附近に恐れられしも、之に在る可しと、茂林は聊か感心せざる能はず、感心はすれ共大勢の敗北に在る事は到底疑ひも無き所なれば、猶ほ一語魔雲坐に語らんとするに、此時魔雲坐は叫と一聲、苦痛の聲を發し、茂林の足許に仆れたり、見れば彼れの股に敵の最と太やかなる矢、肉を貫くほど深く立てり、齒を以てまで鬪はんニ云ふ魔雲坐が、未だ劍の戰ひにも至らずして弦に仆るゝとは、何等の不幸ぞ今までならば一人の傷く毎に「オー、アイ」の悲鳴を發して吊ふ事門鳩軍の仕來りなれど、斯る馬鹿々々しき事は兼て茂林が禁じたる所なれば、誰一人り悲鳴を發せ

ず、魔雲坐自身も深手なれども炎所に有らぬ爲め、心猶ほ確にして、起上らんと悶掻くにぞ、茂林手早く引起し、之を一卒の肩に掛けさせ、直ちに彼の黒の背後なる寺森醫師の許へ送らせたり是等の事、實に咄嗟の間に運び、味方の中にすら知らざる者ある程なれど、王の負傷は部下の爲に恐る可き大打撃なり、今まで整ひ居たる足並も、忽ち頽れ、留める手段も無く背後へ〳〵と不規則に退くのみにて、悲しや茂林が最後にはと心に期したる突貫も行ふ由なし、敵は早くも此樣を見、輪陀女王より何やらん號令の聲掛ると齊しく、一同鯨波の聲を擧け、忽ち其の密集せし軍を展き、三方より此方を取圍まん如く、翌を張りて、前より、右より、左より、驀然に此方の軍を壓して進み來れり、其樣只だ海嘯の倒れ掛るかと疑はるゝ許りなり。

百三十六

敵は海嘯の倒れ來る如き勢ひを以て、三方より此方を取圍まんとす、此方は退き、敵は追ふ、アハヤ此方の運命は此所に盡るならんと思はれしが、今まで名澤と平洲との嚴重なる號令の下に

鑓り返つて戰ひの樣を注視し居たる此方の左右翼の精兵は、今ぞ得意の雷神を使ふ可き時と見て逃足立たる味方の近くにまで進み出で、左右より一齊に、敵を狙ひて射撃するに、今まで銃聲を聞きし事無き敵軍の耳へは、殆ど百雷の一時に轟きし如く聞えしなる可し、全軍忽ち氣を失ひ、其何事なるやを解し得ざる如く進みを駐めて四邊を見廻し初めたるが、見廻す目先に算を亂して仆るゝは今まで共に進みたる者共の死骸なり、數へざれども凡そ百以上は有る可し、二百人ばかりの一齊射撃にて百以上の敵を仆せる事此方に取りても思ふに勝る出來榮なれば、敵は猶更ら驚きしなる可く、何の聲か、斯る凄しき響きを發し、何の力か、斯は一時に多人數を倒せしにやと暫し呆氣に取られたる有樣を見て取りて、此方は更に彈丸籠め直し、再び一號令の元に射撃するに、今度も敵を仆す事初に增しこそすれ減じはせず。

敵は百や二百の死骸を見て、日頃ならば物の數とも思はぬのみか、却つて益々心勇み、危きも苦しきも全く打忘れて戰ふに至る殘忍の兵なること、曾て巖如郎王よりも聞きし所なるに、今は彼等、死傷を恐るゝよりも、凄しき響を恐れ、最早や踏

留る事能はず、又退く海嘯の如く逃初めたり、聞く所に由れば、彼等は敵を前に控へて逃出した る例し無く、唯自ら神の怒に觸れたりと思ふ時のみ逃去るとかや、爾すれば彼等は銃聲をば人間 業とは思はず、全く神の怒りて叱る聲ならんと思ひしならん、彼方が斯く逃足の立つと見るや、 勝敗の勢ひは全く轉じ、今し方大將魔雲坐の創の爲め運び去らるゝを見て、氣の挫けたる門鳩兵 の全く勇氣を回復し、大將の見えさるには氣も留めず、喚喉も破るゝかと思はるゝ程の鬨を擧げ、 一散に敵を追行かんとす、追行きて彼の數限り無き群の中に落れば一揉に揉潰さるゝ事必定なれ ば、茂林は漸くに之を制し、敵が再び盛返し來る可きを思ひて、此方の陣形を正くし、更に左右 翼の精兵をば行動に最も都合よき地位に立しめ、敵の樣子を見るに、今逃行きし者共の腑甲斐無 きを怒り、之を堰留んとする如く一隊の美人軍進み出て之を遮りたり、遮らるゝも彼等は神の怒 に觸れたりと思ふ怖氣に、踏留まる事能はず、其儘美人軍の中へ逃込むに、針の如き剌を備ふる 美人軍の腕は一人々々に彼等を抱き、只一メに彼等を剌殺し、一人の生殘る者無きに至らしめた り。

是にて見れば此國の軍律は戰ひて逃返る者を容赦無く剌殺すと見えたり、此國の兵の強きも偶 然ならず、進みて勝算無き場合たりとも、退けば味方の者に剌殺さるゝ故、死ぬまで戰ふ一方な り、夫に付けても又美人軍の恐る可きは充分に明かなり、彼等が腕の剌々は唯だ人に組附く丈に て、直に其人を剌殺すに足る、縱しや我に如何程の武器ありとも接戰しては到底勝可き見込み無 し。

逃げたる兵悉く剌殺さるゝや、咄嗟の間に美人軍は山より降れる男子軍に號令を發するに、 先きの一隊の敗北を面前り見しにも懲りず、新手は新手丈けの勇を以て猛り猛りて又大浪の如く 突貫し來れり、我兵は之れをも射擊を以て迎ふるに其の結果は前の如く兩三回にして殆ど敵の隊 の七八部を射仆すに殘る二三部の者は又逃去りて美人軍に剌殺さる、剌殺しては新手を向け、新 手敗れて逃去れば、又剌殺して新手を向くる、其の號令と掛引の早き事譬ふるに物も無く、僅か 一時間にも足らぬ間に六七回に及びしかば、益々出て益々敗るゝのみなれば、同一の手段を幾度 繰返すも同じ目に遭ふのみと見て、茲を男子軍の最後と爲し、今までの一隊に十倍する程の數を

集め、最と廣く長蛇の横はるが如くに開き展べ、到底一時には射盡されぬ形を以て進み來れり。此方も玆に至りては復た同一の手段を以て應ずる能はず、右を射れば左が進み、中を射れば左右が進み、遂には如何とも爲し難きに至る事必定なれば、左右翼を一線と無し、亂射して之を防ぎ猶ほ中軍の弓持つ兵をも矢の續く丈け出さしむるに、誓しが程は孰れに決す可しとも計り難く、此方の精兵も痛く疲勞し殆ど矢も彈も殘り少きに至りたれば、先に戰死の餘りに早過るを惜みたる茂林も、最早や之を最後と爲し打死して惜からぬ時と思しか、聲を限りに突貫の號令を發し三隊齊しく叫びて猛進するに、敵も堪へ〳〵て戰ひたる果なれば此勢ひを見て支ふる事能はず、又も總潰と爲り、踏重りて逃出せり、死を決して進みたる此方に取りては是れ意外の幸ひなれば、猶ほ一度び戰ひて後に死せんと茂林は止る可き號令を發するに、左右の精兵は駐りたるも、門鳩兵の一部は、勝利と心得て號令に從はず、殊に腦足早き彼等が事なれば直ちに敵の一部に追附き入亂れたる混戰と爲り、先に魔雲坐の云ひたる、眞に齒と齒の戰ひを開き、或は打ち或は叫び双方ともに血に塗れて組合ふ樣、目も當られぬほど無慘なり、去れど敵の大半は逃果せて美人軍に

刺殺さるゝも有り人數の多き爲め美人軍の手に餘りて無事に彼方なる軍神石の許まで逃附きたるも少からず、斯く爲りても輪陀女王と其部下なる美人軍とは少しも怯む氣色無し、最早や男子軍の賴むに足らぬを見屆けたれば、愈々美人軍が飛鳥の如き早技を現はして、其勇を揮にす可き時なりと思ひし如く、五千の美人軍は輪陀女王の指顧の下に、直に陣の形を整へたり、今は愈々茂林初め此方の軍の打死す可き時とはなれり、例も聞かぬ美人の針に刺されて死するは後まで話の種にも殘らんと、茂林も平洲も言はず語らず心の底にて最と異樣に滿足し、落着きて最後の時を待つに、不思議や愈々進み出でんとする美人軍の一方俄かに動搖し、內破の生ぜしかと疑はる程なりしが、頓て其所を推分て、色青白き芽蘭男爵現はれ出たり。

百三十七

平洲も、茂林も、未だ芽蘭男爵の顏を知らずとは云へ、今しも美人軍の中より現はれ出たる顏色青白き人の、芽蘭男爵たるは疑ふ迄も無し、男爵ならずば彼等の陣中に歐羅巴人の在る筈は無

く、又其の病毫けたる容貌と破れたる服裝と、先刻寺森に聞きたる所と少しも異らねばなり。男爵は何の爲に現はれ出たるや、美人軍が戰ひに醉ひ、夢中と爲る可き機を伺ひて妻の許に迷行かんと、先刻寺森醫師と審ひたる其約束を實行せんとする者なり、未だ必ずしも美人軍が戰ひに醉ひたりと云ふ迄には至らざるも、今逃げ來らずば殆ど逃來る時は無けん、實に美人軍は男子軍が到底此方に打勝得ざるを見て、大擧して唯だ一呼吸に此方を鏖殺にせんと、其足並を揃へ、輪陀女王よりの唯だ一言の號令を待ちつゝ有る者なればなり、男爵必ず此機を察し玆を最後として出で來りし者ならん。

此方に在りても實に最後の場合なり、命と賴む左右翼の精兵も先程よりの激戰に力全く盡き彈藥とても多くは殘らず、男子軍をこそ打退け得たれ、美人軍と接戰しては唯だ一潰しに潰さるべきこと、鏡に掛けて見るよりも明かなり、去れば一同、心の中に玆を死す可き所と見、五千の美人軍か一號令の元に動かんとする樣をば此世の見納めとして眺め居たり、男爵の現はれ出で、美人軍の一部を騷せたるは此方に取りて纔かに一分か二分の間、此の世の暇乞を延したる如き者な

り。

男爵の妻芽蘭夫人にても、先程より左翼隊の後方なる樹蔭に避、二人の通辯及び帆浦女と共に戰ひの樣を眺め居たるも、全軍鏖殺せらるゝ時の最早や遠くも有らぬを知り、死を決して寧ろ益々落着きたる樣子にて、平洲の傍に出で來り「皆樣に後れぬ爲め私も玆へ參りました」と最と賴少なく言へり、此時は茂林も已が號令し居たる門鳩兵の、戰ひに醉ひて號令をも守らず、敵の一部を追ひて齒と齒との接戰を爲しつゝ有るを制し兼ね、獨り來りて此所に在り、右翼の司令者老兵名澤も、分れ〳〵に後れ先立ち死するを恐れ、前も後も無く一團に死せんと期し、部下共々に知らず〳〵此所に寄り來れり、去れば玆に至りて中軍も無く、左右翼の別も無く、宛も寒さに堪へぬ人達が、自づと一と處に纏るが如く、首を突合せて集りしは、共々に死せんと云ふ、同じ思ひに引寄せられたるなり、先ほどより自ら軍醫と爲り負傷兵の手當を引受け居たる寺森醫師も亦玆に來り「ア、魔雲坐王の療治をして漸く彼の命だけ取留めたが、斯う一同死ぬる時と爲れば療治した丈け餘計で有た、醫者の手に生返つて更に敵の手に殺されるのだ、僕も彼所に居て、一分

間でも諸君より生殘り爾して捕虜などにせられるは厭だから玆へ來た、最う負傷兵を治療する必要も無く成つた」と云ふ、何ぞ其言の憐れなるや。

斯て有る間に、現はれ出たる芽蘭男爵は、片手に斧の如き物を持ち、群れ掛りて引留めんとする美人軍を追拂ひ、追拂ひつゝ背後向きにて此方へ近寄り來らんとす、美人軍の爲に取りては是れぞ女王陛下の大事の捕虜なれば傷けては成らずとの心より、腫物に接る如き用心にて、無傷の儘に捕へんと勉むるにぞ、殆ど男爵を如何ともする能はず、男爵は二十間ほど來りて初めて此方へ向きたるが、向くと齊しく此方なる芽蘭夫人と、期せずして顏を見合したり。幾年前に死せしと思ひし夫と妻、斯る異樣なる場合にて異樣なる對面を遂ぐ、双方如何なる想ひやすらん、夫人も男爵も、分れ〳〵に共に蹌踉く許りなりしが、頓て男爵は聲を勵して一同に向ひ「射擊なさい射擊、射擊」と叫べり、其心は今射擊せざれば、一たび女王の口より「進め」の號令發するに逢ひては、飛鳥の如く敏捷なる美人軍に向ひ、到底射擊の功無からんと謂ふに在る可し、茂林斯とは知れど「イヤ今射擊しては貴方をまで射擊します」と答ふるに「ナニ私を、エ、私を厭ふて

は居られません、何うか妻だけもお助けを」と云ふ、一語眞に是れ夫婦の至情を盡す者と云ふ可し、茂林は其言葉に從ひ、殆ど淚に潤む聲にて「男爵、更らば」と一聲高く暇を告げ、直ちに左右翼を顧みて「打て」と發する號令の下に、部下は一齊に射擊したり。

頓て火藥の煙散ずるを待ち、男爵の立居たる所を見るに男爵の姿は無し、扨は彈に當りて死したるか、否、輪陀女王自ら進み來り、飛掛りて男爵を組伏たるなり女王が鎧の刺々に突刺されて男爵の身體は血に塗れしまゝ女王の手の下に仆れ、猶ほ逃れんと瀟掻きつゝ有り、老兵名澤通辯亞利等は幾人の兵士と共に、男爵を女王の手より奪ひ取らんと號令をも待たずして馳寄るに、此時女王は後なる五千の美人軍に向ひ、初めて「進め」の號令を發したり、號令と齊しく美人軍は凄まじき叫びを發し此方に向ひて一齊に躍り掛らんとするに、不思議も不思議、何の力か、何者の爲す業か、背後に高く聳ゆたる彼の山の如く巨大なる軍神石は、轟然一聲天地に震ふ響きを發し、忽ち碎け散りて、細きは霰の如く空に飛び、太やかなるは其下に集ひ居たる男子軍と美人軍の頭上へ、天の落る如く落來り、彼等を、形も殘らぬまでに壓潰したり、今の世に靈怪と稱す可

き者あらば、是れ確に靈怪なる、造化自ら手を下して此の兇猛なる美人軍を壓潰したるなり、美人軍の八分通りは、唯だ大石の下より流れ出る血潮にて慘死の消息を洩すのみなり、此方の一同も、實に何の爲に斯る事とは爲りしを知らず、唯だ呆氣に取らるゝのみ。

百三十八

軍神石の破裂して、男子軍と美人軍との頭上に落ち被等を微塵に壓潰したる此不思議なる騷ぎの中に、其の不思議の何事なるやを怪み問ふ暇さへ無きは、老兵名澤と通辯亞利と芽蘭夫人との三人なり、三人は眼前に芽蘭男爵が輪陀女王の刺ある鎧に刺れたるを見、血に塗れて女王の足下に仆れたるを見、猶も女王が男爵の縄に殘れる息の根を止めんと再び男爵を組伏せて鎧の刺を振立るを見、唯だ男爵を助けんとの一心にて、其外の事は意に移らず、軍神石の破裂する音をも聞き、天地に轟く凄まじき響をも聞き、石に打れし美人軍の叫びと、打殘されて逃惑ふ彼等の騷ぎとをも聞きたれど、單に是等を軍の騷ぎと聞流して男爵の傍に馳附たり、馳附けたれど女王の

鎧は宛も栗の毬の如く針を以て固めたれば如何ともする由無し。唯だ無惜々々女王が男爵を刺殺す樣を傍觀するのみなりしが、男爵は之が最後の叫びにや女王の鎧の下よりして「助けて吳れ」との一言を發したり、此聲に驅されて名澤は左右の思案にも及ばず、持てる銃を振上て女王の頭を横鬢より擲り叩くに、頭を固めたる鉢卷の如き者、推けて飛散り、之と共に女王も男爵の身を離て背後へ仰向に仆れたるが、流石に多年美人軍の役に服して鍛へ上げたる身體だけに痛くは傷きもせず、直に起上らんとするを名澤が銃にて抑へ附くれば亞利も直樣其銃の一端に手を掛け、左右より重く押附けて起さしめず、亞利に從ひ得たる通辯阿馬は氣を利かせ早速に荷物を縛る繩を持ち來りたれば、之にて三人力を合せ、手とも云はず足とも云はず女王の身體を犇々と縛り、少し離れし所に在る立木の根に結び附けたり。

芽蘭夫人は輪陀女王の離れしと見るや直ちに夫男爵を抱起すに、男爵は猶ほ虫の息ほど微なる呼吸あり、夫人が涙ながらの辭にて「貴方、妻です、妻が介抱致します、お氣を確に持て下さい」と勵ます言葉の通じてか縄に眼を開きたれど、一語をも發する能はず、夫人は抱上しまゝ其顏を

倩々と脉むるに、數年前別れし時の面影とは變り果て、痛々しきほど窶れたり、其頃は年三十を越えしとは云へ、猶ほ美少年とも云ふ可き程にて、薄紅の頰艶々しく、世界に二と無き人とまで思はれしに、今は病耄けたる顔に生氣も無く、蠻烟瘴霧と戰ひたる幾年月の艱難辛苦は顔の筋々に刻まれて深し、學術の爲に身を犧牲とし、他人の企て得ざる詮索を爲遂んとは兼て折に觸れ、時に觸れて、言出せし心なりしとは云へ、數年にして老人と見ゆるに至るまで、青春を擲ちて斯くも學術には盡さねばならぬにやと、夫人は殆ど偉丈夫を夫とせし身の果報が恨めしく、涙自づから迫き來りてヨヽと夫の身に泣伏せしが、留むる人も慰め呉るゝ人も無ければ、烈女と云はれし雄々しき身も果は愚に返り、又たも其首を上げて、夫の顔を見ては泣き、泣きては又其顔を見るに、病耄けたる顔の孰れにか、何時とも無く昔しの懷かしき面影現れ來り、見張る力だに無き其眼も昔し愛を湛へて我顔を眺めたる眼の如くに見え、色褪めたる唇も昔し妻よと我身を呼び、優しき聲を發したる其同じ唇なり、思へば思ふに從ひて夫人は外面の事を次第に打忘れ、其身が累々たる敵味方の死骸の散布ける間に在る事も、恐しき軍の事も、心より遠かりて、我身と

所夫の外には人も無く物も無く夢幻の境に辿り入り、我身自ら我身を知らず、憂も危きも總て消え、只殘るは愛の心のみ、宛も眠りし人が夢中に語る如く又餘念も無き聲にて、夫の顔に口を寄せ「最う私と共に歸りませう、何で貴方は私を後に殘して國を出ました、何故今まで歸りません、國へ歸れば昔の通り若く成ます、病氣も私が直して上げます、學問など云ふ事は捨て仕舞ひ、二人で何時までも世の中が樂しい樣に私が敎へて上げます」など一世界浮世を離れて細語くは、其身自ら何を細語きつゝ有るやも知らぬなる可し、斯る有樣なれば、猶更ら其身は今方に如何なる危險の近きつゝ有るを知る筈無し、夫人の背後數間を離れたる草の中には少し以前に捕はれたる輪陀女王、人々が騷ぎに夢中と爲れる暇を伺ひ、其繩の一端を切解き得て、夫人と男爵との睦じき樣を脉め見、復讐の時來れりと思へる如く、嫉さ・や、悔しさにや、其眼を光せて左右の草に音もせぬほど徐々と夫人の背の方に躄り寄りつゝ有り、纔に繩の一端を解きたる丈にて、未だ其身の自由を得ざれど、男爵を刺したる鎧の刺の、夫人の身に屆くまで進み寄るは今少しの間なるべし。

百三十九

敵も我も唯だ騒ぎに紛れたる際なれば、芽蘭夫人が身の如何ほどに危きやは何人も心附かず、平洲、茂林等も、唯だ夫人をば、餘念も無く男爵を介抱せる者と思ひ、其の背後に輪陀女王が何事を爲せるやなどは目を留めて見んとだもせず。

何さま軍神石の破裂して、敵幾萬を壓殺されし事驚く可き限なれば、平洲も茂林も、其他の部下一同と同じく其方にのみ眼を注ぎ、知らず〳〵訝かしさに驅られて馳せ近づくのみ、近づく中にも戰爭の餘波は如何にと見れば、今まで魔雲坐王の部下と入亂れて最も慘刻なる齒と齒の戰ひに、肉切られ骨裂かるゝをも厭はざりし男子軍の一部は、軍神石の下より幾十間か離れたる爲め、其祟りには遭ざれど空前絶後の大事件に、力と賴む美人軍を初め味方の大勢一轉瞬の間に絶滅したるを見、何とて戰ひを續くる勇氣めらん、最と悲しげに最と恐しげに叫喚し、轉げ〳〵て逃散れば此方の兵とても餘り意外なる出來事に氣を奪はれ、已れ等の勝たるや負たるやをも知らず、

逃る敵を追はんともせず、四方をキヨロ〳〵と見廻るのみ、石に打たれて死したる者、傷きたる者、幾百人なるを知らねど、敵は全國を蹶集めての大軍なれば、悉く死せしには非ず、山を降りて未だ軍神石の許まで來らざりし者、猶ほ山を降らざる者等は多く無事なるを得、又軍神石の眞下に在りたる美人軍の中にも石に餘りて助かりたる者少きには非ず、去れど彼等は唯だ身體の助かりしと云ふのみにて、心は恐れに騷亂れ、手にて歩む可や、足にて歩む可きやをすら忘れたる如く、大地に平伏するも有れば、平伏するを踏越て逃げんとし、其身又後より推倒されて踏越えらるゝ有り、恐怖の念は風の如く全軍を吹捲くり、全軍宛ながら波の如くに亂れ、揉まれ揉まれて逃散りたり、彼等は日頃軍神石をば、軍の生命の如くに思ひ、此石の保護だに得ば、戰ふて勝ざる事無しとまで尊崇せるに、其石何の故も無く碎けしのみか、數多の兵を打潰したれば、全く軍神石の怒れる爲こなし、此國の終滅する時來れりと思ふなる可し。彼等が弓をも捨て矢をも捨て唯だ身を輕くして逃るの一步も早からんを欲する樣は、彼等の全く絶望して、此國今日あるも明日無しとまで思へるを察するに足る。

彼等の逃る姿は、谷に隠れ峰に明はれ、何時盡く可しとも計られざる程なれば、此様を見るに就ても、平洲、茂林等は只管らに軍神石の有難きを思ひ、「何だ平洲君、軍神石が破裂せねば何うして是ほどの大敵を斥くる事が出來た者か」「勿論我々は勝つ積は無く、玆が命の捨所と、全く死を決して居たのサ、夫が此様な事に成たは眞の天祐と云ふ者だ」「天祐だ、全く天祐だ、併し何して軍神石が破裂したゝらう」平洲は別に怪みもせず、「誰か背後からアノ石を破裂させたに違ひ無いのサ、幾等軍神石でも原因無しに自らアノ様に破裂するとは到底想像し難い所だ」「夫は爾だが丁度好い時に」「爾サ、實に好い時だ、夫だから天祐と云ふのだ」「併し誰が破裂させたのだらう」「僕も夫を怪むが、今朝吾々は遙に此の山勢を眺めた時に、何でも此大石の背後は谷の様に成て居て、此大石をさへ取除れば此山を向に越し、アルバート湖へ出られるに違ひ無いと云たぢや無いか」「成る程爾う云ふた」「僕の考へでは、何所かの探險家がアルバート湖より山の向側へ上陸し谷を傳ふて玆まで來たけれど、大石に遮られて進む事が出來ぬから、火藥を以て石を碎いたに違ひ無い」「成るほど爾云へば石の破裂した時に黒い煙が立上つたよ」「夫のみか今で

も多少は火藥の匂ひが有るでは無いか、四邊が血腥さく成て居る爲め充分には分らぬけれど、能く氣を注けて空氣を嗅で見給へ」「成るほど爾だよ、シテ見れば全く南から來る探險隊が我々を助ける心無しに、偶然我々を助けたのだ、夫にしても我々は其探險隊を命の親として深く謝せねばならぬ」「實に爾だ、全く我々の救命主だ」と有る無しさへ猶ほ定まらぬ架空の恩人の德を頌する折しも、軍神石の割落たる崖の上に現はれ出たる兩個の人あり、全く歐羅巴の服裝なるは、今しも推量せし如き一種の探險隊なるは明かなり、萬里の絕域にて、而も斯る非常の場合に斯る人に廻り逢ふとは嬉しさの限りなれば、平洲と、茂林とは殆ど、慈母に馳寄る赤子の如く、崖の下を指し走り行きたり。

百四十

軍神石の割落たる其崖の上に、現はれし二人の旅人は、曾に芽蘭夫人の一行に對する其働きの救生主に似たるのみならず、其姿も眞の神かと疑はる、雲の上より天降りし神ならずば、彼等如

何にして彼の崖の上に在らん、古往今來恐らくは彼の崖に立ちし者唯だ彼等兩人ならん。

時は今春にして、歐羅巴ならば猶ほ寒かる頃なるも、熱帶の國とて、年中寒き事を知されば、彼等二人も白き夏服に身を堅めり、汚れたる平洲、茂林等の服裝に比ぶれば雪と墨ほどの相違にして、其淸げに見ゆる所ろ亦愈彼等を神かと疑はれしむ。

此旅人の恩に浴せし平洲等の目に、斯く見ゆるのみには有らで、此旅人の祟を受けし此國の土人にも斯く見ゆること見え、重傷の爲めに身を動かし得ずして、所々に仆れ散れる怪我人等も俄に蠢々こと動き初め、恐れて異樣の聲を發するも有り、敬ひて禮拜せんこと掻くも有り、彼等の心は全く之を以て軍神石よりも猶ほ豪き神體と爲し、此神即ち白人の守護神にして、白人が此國の兵に打勝ち、其石を破壞して此國の兵を壓殺したりと思へる事明かなり、彼等斯く思はば此後縱しや彼等の軍の再び編制せらるること有りとも到底白人に刃向ふこと能はじ、長く白人を神として其前に鰭伏すならん、既に怪我人の中には、平洲、茂林等を崖の上の人と見較べ、同く神體なりと思ふ如くに起きて拜む者すら有り」爾るにても斯までの靈驗を現せ

し此活神は何者にや、平洲の推量せし如く、南の方殘日坡より北に向ひて、亞弗利加の內地を探險しつゝ進み來れる、遠征隊の一なるは爭ふ可からず、此頃は北より南より亞弗利加內地を探檢する者最も多かりし時代なれば、斯る遠征隊の偶然に此所に現はれ出しも必ず偶然とのみは言難からんか、地學協會の報告に據りて取調ぶるに、芽蘭夫人の一行が北より遙青山に向ひて近づきしと略ぼ同じ頃に南より同じ遙青山に向ひ、女王湖の岸を跋涉し、次でアルバート湖を渡らんとの目的にて殘日坡を發せし者無きに非ず、其中にて最も日附の能く合へるは、李敏敦翁の探り殘せし所を探らんとの目的を兼て出發したる、英國陸軍大尉カメロン氏の一行なり、此の行には博士ヂロン氏モルヒー氏及び李敏敦翁の甥モツヘー氏等の從ひ行しぞ、當時世界各國の新聞紙にも記されたる所にして、其の一部は途中より翁の死骸と共に引返したるも、カメロン大尉は非常の熱心を以て進み、宛も芽蘭夫人の一行が麻列峨國より此の遊林臺に入込まんとせし頃、太子湖を距ること遠からぬ地に在りたり、双方の日取を算へ合せば此日此所に落合ふことても不思議は無し、偖ては軍神石を破壞したる者、此のカメロン大尉なるか。

此の間に答ふる前に、先づ芽蘭夫人の一行に洩れたる鳥尾醫學士の事を說きて置かん、讀む人は猶ほ記憶せん、芽蘭夫人が巴里を起つ前に、鳥尾醫學士と云へる者あり、此一行に加はる可き筈なりしも、老先短かき一人の老母あるが爲め、巴里を立去ること能はず、夫が爲め此人の代りとして、今の寺森醫師が隨ひ來るに至りし者なる事を、其後ち最初より此一行の爲に淺からぬ同情を表したる、本目紳士と云へる人が、巴里の無事なる住居に飽き、閑居して不善を爲すに至らんを恐れ、痛く一行の冒險を羨みて、身に貧はる一種の繫累切れたるを幸ひに、斷然此一行を追來る心を起し、暇乞の意を以て鳥尾醫學士を訪ひたるに、醫學士も恰も其老母を失ひ憂に沈むる際なりしかば、我れに從ひ旅行せずやと誘ひたる事も、讀む人の猶ほ忘さざる所ならん。

鳥尾醫學士何とて否を唱ふ可き、芽蘭夫人に從ひ得ざりしこと、此上無き遺憾として、夫人の後を追はんとする心は、本目紳士よりも切なる身なれば、早速に話調ひ、萬端の用意を運て、幾日をも經ぬうちに巴里を出發したるが、芽蘭夫人等の行し通道を取ては到底追附く可き見込無ければ、船にて上陸し、南の方殘日坡に直航し、其所より上陸し、北に指て探行かば孰の所にてか

出逢ふ時あるべしと相談し、馬耳塞より紅海に入りアデンにて更に印度洋に出る汽船に乘替へ無事に殘日坡に着きたるは千八百七十三年四月の末なりき（芽蘭夫人の一行が門鳩國に入り、魔雲坐王に引留められたる頃に當る、）殘日坡は多く探險家の往來共に立寄る所にして、北より來る人の消息とても北に聞ゆるよりも此處へ聞ゆるぞ早き例し多ければ、兩人先づ佛國領事館に行き芽蘭夫人一行の便りは無きやと問合すに、此頃は恰も佛國の芽蘭夫人に、英國の李敏敦翁と、米國の士丹靈氏と三人鼎立して三大冒險と稱せられ、三ケ國の人氣を集めて世界一般より氣遣はるゝ最中なりしかば、領事自らも最早や何人か芽蘭夫人の消息を傳へ來る可き筈と思ひ、日夜心に掛けて待てりと云ひ、既に此一月前（千八百七十三年一月）カメロン大尉が北に向ひて出發せし時も吳々芽蘭夫人の事を賴み、申す迄も無く途中にて相逢はば共に助け合ふ樣にせられ度しと請ひたる程なり、など云ふにぞ、兩人は芽蘭夫人が猶ほ遙青山の麓へまでも來り得ぬを想ひ、又一方には若しや夫人が遙青山以北にて、病氣或は慘忍なる土人の爲に命を損ねしには有らぬやなど氣遣ひ、猶ほ又領事に向ひてカメロン大尉が芽蘭夫人の事を如何に云ひしやなどと問ふに、大尉は

既に死したる人（李敏敦）翁に盡すよりも未だ死せざる人を救ふが大事なれば、芽蘭夫人の消息を充分力を盡して探らん、と誓ひて立ちたる旨を答へぬ、斯くと聞きて鳥尾と本目は其身等が若し一月早く此所に來りしならば、爾る親切なる人の一行に加はり得し者をと、時の聊か遲かりしを悔ひたれど、勿論斯る事に力を落さず、猶ほ領事より內地旅行に就て樣々の心得を聞取り、必要の品物をも買入れ、又人足などをも雇込みて早速內地を指し、カメロン大尉の後を追ひて出立したり。

百四十一

鳥尾醫學士と本目紳士は、カメロン大尉の行きしと云ふ太子湖の方を指し、殘日坡より北を向きて出發せしが、此邊の地理は既に幾多の探險家が世に報告したる所にして、鳥尾醫學士も本國に在るとき每日の如く地圖などを調べたれば、殆ど專門家ほど能く知れり。茲に先づ其地理の大略を記さば、太子湖の北端なる遙靑山の南麓まで直徑に積りて凡そ七百哩程なる可し、此の七百

哩程の間に四箇の大なる地方あり、第一は東の海岸より「ウサガラ」と云ふ山に達する迄にして一百哩許りの區域なり、此地方は亞弗利加全洲の中にて最も草木の繁茂成長したる所とし、草にして一丈以上の長に達するも多し、次なる地方は「ウサガラ」山より「ウゴゴ」と云ふ所までの間にして、之を「ウサガラ」地方と稱し、又次は「ウゴゴ」地方にして「カゼー」と云へる部落まで二百哩ほどの間なり、最後を「月の國」と云ひ卽ち女王湖の沿岸より遙靑山の南麓迄を總稱す、之を通りて遙靑山を越れば、芽蘭夫人の一行が戰ひつゝ有る女護の國に達する譯なれど、未だ誰一人遙靑山を越えたる者無く、鳥尾と本目は卽ち之を越んとする者なり。

扨も兩人は五月十五日を以て殘日坡を發し、急ぎ得る丈け行を急ぎて「ウサガラ」山をも無事に越へ「ウゴゴ」地方の將に盡んとする所に至り弦にて辛くカメロン大尉の一行に追附くを得、之より共々に「月の國」まで入込みしは九月の中旬なれば、卽ち三ケ月間に六百哩を步み得たり、困難多き亞弗利加內地の旅こしては驚く可き程の早さなり。

「月の國」の首府は右に記せる「カゼー」にして、暴虐を以て名の高き無鐵左と云へる王の住ま

へる所なり、此國に入込みたる探險家は皆な無鐵王の事を記せり、中にも士悉克、伯耳奔、沙倫士丹靈などは最と詳しく記したれば茲に重ねて說く要無からん。

一行は此王に引留めらるゝ事三ケ月の長きに及びて、十二月の初めに辛く出發の許しを得たるが、カメロン大尉は烏尾本目の兩人に向ひ「余は殘日坡を立つ時、殊更ら佛國の領事より芽蘭夫人の事を託せられしも、君等兩人特に芽蘭夫人の爲めに旅行すと有らば最早や余の行く必要は無し、余の旅行の目的は、三年の月日を以て此亞弗利加を西の方大西洋の沿岸まで橫斷するに在る事なれば、余は是より君等に分れ西に向ひて出發せん」と云ふ、素より否を唱ふ可き事に有らねば、二人は唯だ此大陸を東岸より西岸まで、三年の辛苦を以て橫斷せんとする其目論の大にして其心の勇しきに感じ、然らばとて分れを告げたり（此後此の大尉が亞弗利加の中心にて熱病の爲め死したるは全世界に報告せられたる事實なり、大尉の如き大膽なる道連に分れしは片腕を失ひし心地すれど、最初より大尉を當てしての旅に有らねば、二人は怯まずして北進し、十五日にして初めて太子湖の岸に出で、之より又進みて翌千八百七十四年二月の初に太子湖の一隅なるマダ

ンゴと云ふ所に達せり。

此所までは曾てベーカー將軍（前に出づ）來りたるも、茲より先へは入込みたる歐羅巴人なし烏尾醫學士と本目紳士は、愈文明國人の曾て踏まざる地を踏むかと思へば何とも無く物凄き中にも心勇み、暑さの中にて身の震ふを覺えたるが、是より遙靑山へ攀登らは船にて太子湖を渡らねばならず、東へ迂回する道は有る可しと思はるれど、東の麓は見渡す限り絕壁にして攀ぢ得べしとも思はれず、引連れたる案內者も東には道無しと云ふにぞ、詮方無く沿岸を探り探りて土人より五艘の粗末なる漁船を借り、荷物人足をも積入れて、湖上に浮ぶ事一日にして辛くも向岸には達し得たり、岸に上りて一夜を明し、先づ山勢を眺るに、東の方なる絕壁には幾筋の瀧ありて其音答々と谷に響けり、ベーカー將軍がマアチソンの瀧（前に出）と名けたるは是なる可し、西の方は麓益す斜にして巨巖怪石とても無く、險き所も繩梯子さへ有らば木の根、岩の角に掛けて攀ぢ得べしと思はるゝにぞ、兼て用意する繩を結び、梯子の如き者を造り、外の荷物と共に人足に持たしめて進み行くに、何さま亞弗利加にて一二と云はるる高山なれば、所々に困難の場所も無

きに非ず、三日目には湖面を抜くこと二千米突の高きに達し、初めて一段の平地に出でたれば、是にて嶮岨は終りたりと限り無く喜び、此後は宛も航海者の如く磁針を案じて進み行きしが、幸ひにして山の最も低き部分を越え來りしと見え、平地の盡ると共に降り坂と爲り、復び登る可き峰も無し、坂の頭に立て前面を望み見れば、何の邦かは知ざれど殆ど眼下に横はりて海の如くに廣がれり、所々に小山の有は海中の島にも似たり、兩人は各々望遠鏡を取出して望むに、小山の中の一箇所に黒き者の蟻の如く集る有り、鳥尾は怪みて「本目君、アノ蟻の行列の様に見えるは人だらうか」と問ば「サア僕も怪んで見て居るが、若し野蠻人等が戰爭でもするので、蟻の様なのは兵では有まいか」と答ふ「扨は野蠻國王が隣國へでも向て兵を繰出して居るか知ん」「事に由ると我々はアノ軍中に落ち捕はれるか知れ無いぜ」「捕はれても仕方が無い、外に進む道は無く、去りとて引返す事も出來ぬから」と、互に他を威す如くに云へど自ら恐れを抱けるには非ず、野蠻の戰爭を見物するも亦一興と思ひたるが、此蟻の如く見ゆる者こそ、輪陀女王が魔雲坐及び平洲茂林等の一行に對し、全國より呼集めたる大兵なりとは、後に至りて知られたり。

百四十二

是より坂を降れば卽ち遙青山を越盡すなり、鳥尾醫學士と、本目紳士とは、思ひし程の難儀を經ずして玆まで來り得しを喜びたれど、此時は既に日の暮にして、夜に入りての降り坂は却て危險の恐れ有ればと案內者の注意するに應じ、坂の頭に露宿して一夜を明す事と爲したり。

翌日は早朝に起き、坂の樣子を見定むるに今まで登り來し道の、左まで急ならざりしに引換へ是より降る道は最と險しく、殆ど辷り落つ可きかと思はるゝ所が有り、去れど降坂の急なるは登り坂の急なるよりも幾分か進み易かる可しと、勇を鼓して降り掛るに、登る時に用ふる必要に逢はざりし繩梯子の大に用を爲す場合度々あり、或時は木に掛け、或時は石に掛け、之を手繰りて降行くに、凡そ二里ほど降りしかと思ふ頃、岩と岩とを以て作れる如き谷合の入口に出たり、此谷間は昔し川でも流れ居しかと思はるゝ形にて自然に凹み、其地盤は川床ほどに平なり、石山には往々例ある天然の峽道なる可し、此峽道にさへ從ひ行けば、山盡きて平地に出る事必然なれ

ば、一同は少しも疑はず殊に是より行く先は坂に非ずして極緩かなる雪崩なれば、其中に入り又一時間の餘を進むに、個は如何に峽道は忽ち一個の大巖石に塞がれて、宛も岩戸を閉ぢしに似たり、之を開かずば一歩も進み難し、左ればとて左右ともに石を疊みて壁とせし如き峽道の事なれば迂回する事も叶はず、繩梯子を投掛けんには石の高さ驚く可き許りにして、屈かん様無し、鳥尾醫學士は唇を噛みて「ヱヽ此の川床の様な所へ這入らずば此様な岩戸に〆出しを喰ふまいに」と悔しがれば本目紳士も同じ想ひにて「ツイ天然の道の様に出來て居る者だから釣込まれた、之は實に造化が我々を迷はせて馬鹿にする積で作つて置たのだらう、忌々しいけれども仕方が無い、後へ引返して矢張り道の無い所を辿る一方だ」「今から後へ引返せば詰り一日以上の損になる、僕は山勢を考へるに此石をさへ通り抜ければ直に平地へ出られるよ、山は此石限りで盡て居るに違ひ無い」「僕も全く爾う思ふ、山の盡る所まで來て又引返すとは如何にも殘念だ、何とかして通る工風は有るまいか」と兩人は此上なく悔しがり、猶も石に取附きて其表を檢め見るに、石の形は宛も巨人の姿に似、背筋と云ふ可き所に繼目の如き筋あり、或は二個の石天然に薄合ひ

て、斯は一個と爲りしにや、二纏目は密着して縫合せたる如くなるも、下の方には縫目の綻びとも云ふ可く、深く穴の形を爲す所も有り鳥尾は「此の穴へ、棹でも差入れ之を跳返す力が有れば」と恨しげに呟くも何の甲斐無し「之を跳返すには少くも五千人も力を集ねば可けぬ」「ヱヽ仕方が爲い一日の損をして背後へ引返し早やく外の道を尋ねやう」と云ひ兩人痛く落膽して元と來し道に引返せり此石即ち是れ遊林臺國民が軍神と崇むる巨石にして、此石の下には數多の美人軍あり、二人が尋ぬる芽蘭夫人の一行が今正に其の美人軍に苦められつゝ有りぞとは、神ならぬ兩人の知る由無きこそ是非無けれ。

兩人は引返して悄々と纔に五六間歩みしが、此時本目紳士は何思ひけん忽ち踏留りて大地に身を横へ、地盤に耳を當てゝ地下の物音を聞んとする樣子なるにぞ、鳥尾は怪み「君は何をする、氣でも違つたのか」本目は猶ほ耳を澄しつ「イヤ待給へ、何だか異樣な物音が聞えた樣だから、斯して聞て見るに果せる哉だ、君、君、此石の先は戰爭の最中だよ、確に戰爭の物音だ」鳥尾は信ぜず「ナニ爾して聞けば吾々の見たマーチソンの瀧の音が遙かに聞えるのだ、昨夜露宿した時

も聞えたぢや無いか「イヤ〳〵瀧の音では無い確に戦争だ」鳥尾は猶ほ聞流し「夫では昨日の日の暮に小山の上へ蟻の如く集ふて居たのは吾々の想像通り野蠻兵で、酋長と酋長とが戦端を開いたのだらう、其音を聞たとて何になる」「イヤ君、野蠻人同士の戦争は弓や投槍の戦争だから此様な大屁風の背後まで聞える程の音はせぬ、先づ聞き給へ鐵砲の音だから、よし確に歐羅巴人が加て居る、ハテな事に寄ると」と云ひ掛けて眉を顰むるは、若しや芽蘭夫人の一行ならぬかとの心配なる可し、歐羅巴人加れりと聞きては鳥尾も最早や聞流す能はず、同じく大地に耳を附け少しの間聞きたるが、忽ち狂氣の如く跳起きて「ヤ大變だ、大變だ、全く芽蘭夫人の一行が戦て居る此蠻地へ入込で幾等銃器が有たとて昨日見た程の多勢の蠻兵に勝てる事は無い」とて地團太踏むにぞ「爾う騒ぎ給ふな、鐵砲の音で歐羅巴人の加つて居る事は確でも、其歐羅巴人が必ず芽蘭夫人の一行とは限らぬ」鳥尾は全く血眼にて「イヤ芽蘭夫人の一行だ、一行だ、アノ一行の外に玆まで深入した遠征隊は無い、吾々が佛國を立つ時まで少しも外の遠征隊が出た事を聞なんだ、早く彼の岩を飛越て救はねば芽蘭夫人が殺される、廻道など仕ては居られぬ」と云ひ、宛も大石を

飛越得るかの如く、又た一人や二人の力にて大戦争の勝敗を轉ぜしめ得るかの如くに云ひ、本目の身體を飛び越て巨石の許に駈けて行き巨石を前に推し倒さん姿勢にて押し踏張れり、此儘に捨置なば頭を巨石に打附て死す可しとまで思はるゝにぞ、本目は追行て其肩を捕へて「コレ鳥尾君幾等芽蘭夫人の身が氣遣はしいとて幾千万貫も重サの知れぬ此大石が動く物か、氣違ひじみた事を仕給ふな」「だつて」「イヤ僕に少く工風が有る」「ヱ工風が、早く其工風を施して此岩を取退けて呉れ給へ」「先アサ、吾々の人足に持たせて有る火藥が確に二百斗度は手附かずに有る筈だ、アノ火藥を持て此石を破裂させやう」「火藥でも其力は大して爆裂藥に劣りはせぬ、唯だ爆裂藥は火藥の樣な小粒で無く、窄氣の爲に變化を受る事が少い丈だ、僕は先刻も此石を爆裂させると云ふ氣が附たけれど、後に豫備の無い大事の火藥を石の爲に使盡すは惜いと思ひ、廻り道する氣に成たのだが、歐羅巴人が戦ふて居るとすれば猶豫は出來ぬ、殊に其歐羅巴人が芽蘭夫人の一行と云ふ恐れが有ては猶更だ」と云ひ、早速人足を呼びて荷物の中より火藥を取出さしめ、彼の石の縫目に在る穴の中、最とも深さうに思はるゝ者を選び、之に火藥

を注ぎ入れに凡そ百八十封度ほどにして初めて穴に満ちたれば長さ一尺ばかりの縄を火薬の面に植込み、其一端へ燐枝を以て火を燈し、縄の燃盡すと共に火薬へ火の移る様に爲し置き、一同足に任せて峡道を背後の方へ逃去りつ、大丈夫と思ふ邊まで到りて留まり、消息を待つ間も無く、天地を震撼する如き響きと共に巨石は見事に碎け落ちたり。

百四十三

大石の破裂して其響の漸く鎭まるを待ち鳥尾醫學士と本目紳士は其の所に進み行き、破裂の跡を檢むるに、岩は全く何千年の昔し高き所より落來りて峡道に介まり、其出口を塞ぎたる者にして、岩の飛たる後に何の障碍も無く、峡道は直線に開けたり、思ひしに違はず此所は山の盡にして峡道も玆に盡き、兩個は絶壁の上に出たれば、先づ下の樣子を見るに廣き野原は亂軍の跡を留め、死者傷者算をみだして横はれるが上に、一軍大石の破裂に驚き總崩れと爲りて逃散れる樣まで明白なり、本目紳士は智惠逞しく心落着きたる人なれば此樣に驚きもせず、早くも委細を見て

取りて「アヽ吾々は歐羅巴人の軍を助けたのだ、見給へ銃器を持た一隊が向ふの方に無事で居る」鳥尾醫學士は猶ほ夢中の有樣にて「芽蘭夫人も無事だらうか」「何を云ふのだ、果して夫人の一行か否やすら未分らぬのに其樣な事が分る者か、併しナニ今に分るよ、縄梯子を掛ければ此崖を降られる、崖の下には今落た大石が我々の踏段の樣に成て居るから纔に二丈ほどブラ下れば後は石を踏で降る事が出來るだらう」と云ひ早や人足を呼びて縄梯子の用意を命じぬ。

下には平洲、茂林が此二人を剥の如くに思ひ進み來りて迎ふれども眞逆に此二人を本目鳥尾の兩人なりとは思はず、兩人も亦多勢群がれる中に平洲等の姿を見分得ず、唯だ何者とも知れぬ一團と思ふのみ、其うちに幾條の縄梯子は崖の下まで屆きたれば、本目は戰場の有樣唯だ騒しきのみにして最早や何の危險も無きを知り、鳥尾と並びて猶ほ人夫の中の幾人をも引連れ、共々に崖を降り初めしが、降りて今落たる大石の上まで來りて初めて此石の下に幾百と數知れぬ生靈の壓潰されしを知れり、石の周圍の低き所へは鮮血滴々と流れ出で、手足胴首などの千切れて石の外に喰出でたる者も少からず、流石の本目紳士も是には慄こ身の寒きを覺ゆれば、本目紳士よりも

神經の鋭敏なる鳥尾醫學士は、殆んど此樣を見るに得堪へざる如く「之は恐しい有樣だ」と叫び て石の上に腰を落し、復た立上る事能はず、本目紳士は之を勵まし「君は醫者の癖に死骸に驚い て何うするか」「イヤ死骸には驚かぬが斯まで多數を死さうとは思はなんだ。石の眞下に是ほど の人が居ると知れば！」「イヤ石を落したのは僕だから其罪は僕に在るが、ナニ併し此多數を殺 して同國人を助けるから僕は罪とも何とも思はぬ、サア立給へ」と言聞せど鳥尾は人を助く可き 醫師の身として却つて斯る無慚を仕出來せしを思ひては心の安き事能はざるにや、目を閉ぢて石 の下を眺めじと勉むるのみ「其樣に氣が弱くては芽蘭夫人に逢ふ事も出來まいぜ」此一言には驚 く可き力あり、鳥尾は繩を引きて我破と立ちしが此時石の前の方より忽ち「鳥尾君萬歲、本目君 萬歲」と呼ぶ聲聞え、從つて幾十幾百人の歡喜する聲も聞ゆ、本目も鳥尾も一樣に目を張りて、 初めて平洲、茂林等が石の前遠からぬ所に立ち、兩手を開きて迎へつゝ有るを認め「オ、君方か」 と一聲に叫び、轉がる如くに石より辷り降るに、弦は幸ひ地盤の稍や高くして血も無く死骸も無 き所なりしかば、二人は身を投ぐるが如くに平洲、茂林等の開きたる手に飛入り、暫は互に抱合

ひ身を搖合ひて喜べり、歡天喜地とは眞に斯の如き事をや云ふならん。

頓て平洲は手を解きて、呆るゝ如くに二人の顏を見「先ア君方は何うして來た、石の碎けた間から君方が現れやうとは思はなんだ」「イヤ君方の一行に逢ふ積で殘日坡の方から來たのさ、僕等も君方の冒險の手紙を讀む度に何の波瀾も無い巴里の暮が飽々した、夫に鳥尾君も母御が歿して其身の自由を得たのだから」茂林は斯る間にも巴里を出る時、手柄を以て競爭せんと云ひたる其約束を忘ず「其は重々結構だが何しろ吾々の手柄は全く鳥尾君に奪はれて仕舞ひ、我々が可通無以來の千辛萬苦も、軍神石を打毀した鳥尾君の手柄に比べれば物の數にも足らぬ」平洲も之れに和し「眞に鳥尾君は我々の命の親だ、若し軍神石が破裂せねば吾々今頃は何の樣な死樣を仕て居るかも知れぬ」本目は笑ひながら「イヤ君方心配し給ふな、石を破裂したを若し手柄とすれば、鳥尾君は其の手柄を辭し、僕に讓ると云ふ事だ、僕などは君方三人の約束外だから、縱し手柄の競爭に勝たとしても君方の褒美を橫取しやうとは云はぬ、ネヱ寺森君」とて其身と同じく約束外なる寺森醫師に向ひて念を推せり、斯る間にも鳥尾醫學士は唯だ其所彼所と目を配りて何者をか

探す如くなりしが、今は堪兼しか、シタガ芽蘭夫人は、何所に居らるゝか」「心配し給ふな、夫人はアノ樹の下に」茂林も語を添へて「而も夫芽蘭男爵の介抱をして居るのだ」芽蘭男爵が猶ほ活て有りとは鳥尾醫學士の夢にも知らぬ所なれば「ヱ、芽蘭男爵が」と打驚くに、寺森は職務だけに「オヽ斯云ふ中も男爵の容體が氣遣はしい、僕一人で實に責任の重過るのを恐れて居た、同業たる君の來たのは何より嬉い、兎に角僕と共に男爵の傍へ行かう」と手を取れば鳥尾は唯だ久し振にて芽蘭夫人の前に出るを本望と思へる如く、男爵の事は問返しもせず「何れ何所に」ミて熱心に進み行きたり。

百四十四

鳥尾醫學士が芽蘭夫人の傍を指して進み行く其時までも、芽蘭夫人は所夫の介抱に餘念無く、殆ど我が身邊に何事の起りつゝ有るやを知らず、素より軍神石の破裂して其所より歐羅巴人の現はれて降り來り、此方の一同に歡迎せられたる樣などは全く心に移らざるには非ず、移りても心

玆に在らされば其現はれし人の誰なるや何が爲めに歡迎せられたるやなどは自ら見極めんとだも爲さゞるなり　斯る有樣なれば其身の背後なる草の中より、輪陀女王が恨めしき眼を光らせ、息を凝して忍び寄りつゝ有る事などは固より思ひ寄る筈も無く、猶ほ夫の傷所を結び其血を拭ひなどして、呼吸の一高一低を最と氣遣はしげに目守り居るに、女王は得たりと思ひてか、繩に縛られし身を引きて少しづゝ忍び寄れり、繩の全く解けしには有らで唯だ一部を切得たる丈なれば未だ充分には其身の自由を得ざれど愈恰好の所まで近づかば、足を跳て躍り掛り、其の鎧の刺を以て夫人を男爵と同樣に傷つくるは難くも有らじ、左右する間に女王は夫人の背後只だ一間を餘す程の所に到り、最早や躍り掛りても屆き得んかと目を以て距離を測り初めたるが、此時夫人は前面に人の來る樣子あるを知り、初めて顏を上げ眺むるに、寺森醫師と手を引合ひて進み來る一人あり、定めし軍神石の背後に現れし珍容なる可しミ、更に其顏を見直せば彼方も夫人の顏を見て、初て目ミ目を合せたり、夫人は日頃の物靜なるにも似ず痛く驚き殆ど我を忘れたる樣にて立上りしが、今立上りしは天の助けなり、將に飛掛らんとして、後に身構へつゝ有りし輪陀女王も

此の異様なる振舞に相手の心を測り兼て直に草の中に隠れ伏したり、夫人は立ちて最と懇しげに鳥尾醫學士の方に三歩ほど走り出るは、心の迷ひに引されし者なる可し、醫學士も寺森の手を悶かしげに振拂ひ此方を指して突々と進み出しが此時夫人は忽ち我が迷ひに心附き、鋭き悔悟の念に責られ、又所夫の許に馳返りて跪坐き、死せるか活るか定め難き其所夫の顔に口を寄せ、泣てその前額の邊や接吻する如く見えたるは、縦し一時たりとも我心の迷ひたるを詫び、再び變らぬ清き心底を誓ふ者なる可し。

背後なる輪陀女王は今思ひを果さずば果す時無しと見し如く、又も其首を草の上に現はせしが此時は既に遅し、寺森醫師之を見認め、馳來りて其繩を取り引退け「名澤、名澤」と呼立てゝ應じ來る老兵に引渡しぬ、其暇に鳥尾醫學士は夫人の傍まで進み來しが夫人は身を起して迎ふれども顔にも形にも復た迷はんとする色無し、日頃の如く優しく落着きたる態度にて「實に貴方が御出でとは意外でした」と云ふ、鳥尾は猶ほ心を鎮め得ず、夫人の差出す手先を震へる手にて握り締め震へる聲にて「老母に死分れましたから、貴女の後を追ふ外に私の勤は無くなりました」と

云ふ其口調、分れし時の熱心の、增こそすれ少しも衰へざるを知るに足る可し、夫人は淡しく「オヤ御老母が一夫はお悼はしい次第です」と受流し、更に「私が可通無から差上た手紙を貴方は御覽に成りましたか」と問ふ「イエ、可通無からは何のお手紙も着かぬ中に巴里を立て來たのです、其お手紙には何事を」「ハイ所夫芽蘭の死だと云ふ報告が間違と分たゆえ、墓參の目的は變り是より所夫の居所を尋ねる事に成たと斯申して上ました」と何より先に此一事を言出すは、最早や主ある一身なれば昔日の如く人と親しく交り得ぬ旨を含め、心の在る所を示す者なる可し、鳥尾は今初めて聞くには有らぬも、顔の色を青くして「シテ其の芽蘭男爵の居所を探し當てましたか」「ハイ此通りの有樣です、」茲に倒れて居るのが所夫です、貴方の術を以て助けて下さらずば廻り逢ふたまゝ又分れるかも知れません」と云ふ、眼の中には涙の溢れんとする樣なり、鳥尾も初めて醫師と云ふ我が本分に立返り「ハイ人間業で助かる者なら佶と私が助けます」と云ひ、呼吸の猶ほ有りや無しや定ならぬ男爵の傍に座し、其傷を檢め初るに、斯る所へ寺森醫師も歸り來り、共々に診斷せし末、鳥尾は幾分か安心の色を浮べ「ハイ傷は輕くも有ませんが命に掛る程

でも有ません」夫人は眞實嬉さに堪得ぬ如く「では助りませうか」「私こ寺森君とで技術の有る丈は盡します、併し只今の急務は涼風の流通する木蔭へでも運び行くに在ますから、平洲君、茂林君等を呼び共相談を致しませう」と云ふは確かに助かる見込の附きたる者なる可し、寺森も同意にて「ハイ私の考へでは貴方がたの來たアノ軍神石の背後の山へ運び行き、土地を轉ずるが第一です、此樣な所に長居の必要は有ませんから、敵に再擊の恐れの無いうち一同茲を立つ事にし、兎に角も勢揃を致して見ませう」と云ひ自ら立ちて一同を呼集めしに、殘らず揃ひたる中に唯だ下僕與助のみ行衞は知れず。

百四十五

下僕與助のみ行衞知れねど、彼れは飄輕なる男なれば其中に孰れよりか現はるゝならんと、深くは氣にも留めず、捨置きて此後の進退を評議するに、元々芽蘭男爵の爲に起りたる旅にして、既に男爵を尋ね出したれば乃ち目出度く旅行の大目的を達したる者にして、此上には何の目的無

し、唯だ本國へ引返す一方なり、引返すには何の道を取る可きや、向ふの山路に入るが男爵の身の爲なりと鳥尾、寺森兩醫士の說一致せし柄には、山路を以て道とせん、去れど山路より孰れに出ん、平洲、茂林兩人は無論本目紳士と鳥尾醫學士との來りし道を取り、太子湖を南に渡りて殘日坡に出でんと云へど本目紳士は之を非とし、之より殘日坡に到るには少なくも半年の間野蠻の地を跋涉せねばならず、殊に太子湖は向ふの岸には漁民も有り、船も有り、其船を借りて此方へ渡る事を得たるも此方の岸には住民無ければ渡る可き船を得るの由無しと云ひ、猶ほ自ら巴里に在る時樣々の地圖にて調得たる地理上の智識を並べ、此邊は總體に河の流れ最と多き所なれば、山に入りて西に行くも東に行くも必ず幾筋の谷川あらん、其谷川の中にて北へ向ひて流るゝ者は必らず晩かれ早かれナイルの河に注ぐ者にて、ナイルの河より外の河に流れ入る所無きは孰れの地學者も異口同音に唱ふる所なれば河こそ天より我々に與へたる案內者なり、河に沿ひて北に下れば一月を經ずしてナイルに達し、ナイルに達せば船にて可通無までも埃及までも下り行く事故だ容易なれば、病人の爲を云ふも之に上過す道は無しと云ふ、成るほど此言葉に相違無ければ、

忽ち之に決したるが、玆に猶ほ一つの難儀と云ふは彼の魔雲坐王の始末なり。

彼れは唯だ芽蘭夫人を我妻に貰ひ受けんと云ふ其約束のみの爲に此地まで來りし者なれば、玆にて捨んとするも勿々肯んず可くも非ず、彼れ若し戰爭に死したらんには何の面倒も無くして濟む可きに、寺森醫師が彼れを治療して其命を繋ぎ留めたるが爲に、今は如何とも詮方無し、と平洲も、茂林も、却て寺森の妙術を恨むこそ可笑けれ、兎にも角にも今一度彼れを說伏せ、共々に此所を立ちて後、更に工風する外無ければ、茂林自ら交涉委員と爲り、通辯名澤を引連れて彼れの許に至るに、彼れは傷の痛み稍や薄らぎたりとて自ら病床に起直り「何より先に、御身等は白女の父を見出せしこの事に非ずや、余は部下の注進にて何も彼も能く知れり、白女の父は白女を余が妻に吳るゝ事を承知せしや、若し承知せずば余自ら部下に手を引かれ其父の前に行きて請はん、余は其積にて斯は起直れり」と云ふ、實に彼れ此一事より外に何の目的も無き者なれば、其身が負傷せしに付けても益々此事を急ぐこと無理ならず、茂林は仲々此の交涉の容易ならぬを知りつゝ「イヤ、白女の父は生死の程も覺束無し、何事を云ふとも今は通ぜず」「若し其の父死す

れば御身は白女の兄なりと云へば必らず御身の一存にて隨意に計ひ得るならん」道理ある一言に茂林は抵抗する口實無し「然り父死すれば、後は余と平洲の隨意なれど、余も平洲も切に父の命を取留めんと願へり、父若し死すれば白女も悲みて病と爲る恐れ有り」魔雲坐は愕然とし「白女の病となな、病となな」病と言葉を重ねて問返すにぞ「然り、父死すれば病とも爲らん」「父死せざれば白女病とは成らざるや」と最と子供らしく問來るも野蠻人の眞情なる可し「然り父さへ助かれば白女は大に喜ぶ故、先づ病と成る恐れ無し」「然らば如何にしても其父を助けねば成らず、御身等の兄弟なる寺森とやら云へる醫師は其の父を助け得ざるや、彼の醫師は余の矢を抜き余の傷を治療したり、眞に神の如きカあり」茂林は玆ぞ乘ず可き所なりと思ひ「サア其の神の如き寺森の言葉を御身に知らせに來りしなり」「彼れは何と云ひたるぞ」「父を向ふの山の涼しき樹の陰に連て行き、手を盡さねばならずと云へり、依て余等一同父と共に山に入り谷川に沿ひて又北の方へ引返す積りなり」「谷川に沿ひて行かば終に牙洗川へ出らるゝや」茂林は思ひ切りて「然り」と答ふるに魔雲坐は全く白女を再び己が國へ連歸る時來りしと思ひ、猶又婚禮の時近づきしと思

ひし如く勇み立ちて「然らば其通りに計らはれよ、余も共に行かん」と云ひて寝臺の上に立たんとせしが傷の痛みに又仆れ「イヤ〳〵余は未だ起居の自由を得ず、白女の父と同じく余も病人なり御身は白女をして途々余の看病を爲しめよ、然らずば余は御身等の言葉に從ふ能はず、此所にて白女と婚姻せん」是れ又一の難題なり「白女は父を看病せねば成ず、御身の看病人たる能はず」「否、白女の父こ余とを同じ所に置けば一人にて雙方を看病し得ん、余は白女に看病されずば此所を立去らず、又白女をも立去らしめず」と斷乎たる決心を以て言切る樣、到底動す可しとも思はれず、

百四十六

「途々芽蘭夫人に我を介抱せしめよ」こ云ふ魔雲坐王の言葉は到底拒むに由無く、之を拒みては彼れも此方の言葉に從はしむる由無ければ、茂林は早くも思ひ定め「好し、白女をして其父を看病すると共に御身をも看病せしめん、御身能く道理ある吾々の言葉をだに聞分なば、白女も吾

々も御身を父の如くに遇す可し」と云ふに魔雲坐は滿面に喜びの色を浮べ「ア、今より白女は余の看病人なり、余は御身等の如何なる言葉にも從はん」とて殆ど笑顏るゝ許りなるにぞ、茂林は此圖を外さず「然らば是より山に入り更に北へ向ひて引返す旅に就ては、道筋の選り定めを總て余に一任せられよ」魔雲坐は嬉しさに左右の思案もせず「勿論なり」と答へ掛けしが忽ち又其心深き本來の性質に立返り、若し道筋の選定を一任しては如何なる所へ連去らるゝも計り難しと心附し如く「但し如何なる道を取るとも、御身が只今云ひし如くキバライ川へ出る事ならん」と念を推せり、茂林は詮方無く「然り」と答へ、猶ほ後刻更に委細の相談に及ぶ可き旨を告げ、分れて平洲外一同の許に來り、魔雲坐の要求の次第を語るに、平洲も之に從ふ外無きを見、又芽蘭夫人も慈悲深き心にて、魔雲坐の負傷を氣の毒に思ふ折柄なれば所夫芽蘭男爵を看病する傍ら彼れをも介抱して得させんと最こ容易に引受けたり、斯く何事も決定したれば直にも此所を引上げんとし、部下の人足などを呼集むるに、矢に當りて死したる者も傷きたる者も有り、去ど本目綱士と烏尾醫師との連來りし人足を合すれば其缺員を補ふて餘り有るにぞ、次に名澤の率ゆる兵を

左翼として、平洲の指揮したる兵士は軍規紊れざれば散亂もせず一號令の中に集り來りしが、唯廿人程不足なり、是だけは討死せし者なれば又次には魔雲坐の本隊を呼集るに、個は總數の五分の一を餘すのみ、五分の四は行衛も知ぬ有樣なれば、是も討死せし者かと云ふに爾に非ず彼等は軍神石の破裂にて敵の忽ち逃散るを見、一時は驚きたるも、忽ち勝に乘じて逃るを追ひ、輪陀女王の王宮の在る所迄攻行たる者にして、今も猶王宮の方に當り凄まじき叫び聲の聞ゆるは、彼等が手當次第に人を殺し物を奪ひ、人肉を喰などして亂暴を極めつゝ有が爲なる可し、之を呼返す事は容易ならぬ業と云ひ、且は魔雲坐の部下の兵減ずるは彼の力を殺ぐに好都合なれば、其儘に打捨置くに、其中に彼等は奪ふ丈の物を奪ひ盡して、王宮を初め近傍幾多の村落へ火を放ちしを見え、所々に火の燃上り、炎々として廣るを見る、平洲は斯と知りて彼等が暴行の限り無きを想ひ、眉を顰めて茂林に打向ひ「斯な慘酷な事をする野蠻兵だから、吾々が憐れみを掛る値打は無い吾々は彼等を捨置て此所を立ても好いが、併し何とかして彼等の暴行を止めねば此國の土人が憐む可しだ」と云ふに茂林は「ナニ勝に乘じて私民を殺し私財を奪ふなどは野蠻の風だから別に今

更ら憐む事は無い、勿論吾々が魔雲坐王の部下までも引纏める事は出來ぬ、部下を捨やうと連て歸らうと夫は彼等の勝手に任せやう」と云ひ猶念の爲なれば名澤をして魔雲坐王に其意を問はしむるに、彼れの答へは「此儘に捨置かば余が部下の勇士中に、或は此國を亡して自ら王と爲る者有らんも知れず、其時には此國自から余が屬國に歸する者なれば余は彼等を捨置きて立去らん、捨置くとも余が立去るを知りて歸り來る者も必ず多かる可し、少しも心配するに及ばず」と云ふに在り、平洲、茂林も其の無雜なるに驚きたり。

斯る事の間に早や日も暮れたれば、最早や一夜を茲に明し明朝を以て出發する外無しと決したるが、唯だ愈々怪しきは下僕與助の行衛なり、今までは其の中に現はれ來る可しと輕く見て捨置きしも日の暮掛りて猶ほ現はれぬは唯事とも思はれず、去ればとて戰場に立出でゝ討死すたと云ふ如き氣質にも有らず、又屍骸とても見當らねば、茂林自ら聲を限りに「與助、與助」と呼びて尋ぬれど現はれ來らず、人夫の一人は戰爭の初まる時、與助が一頭の牛を引連れ、饑たる時は之を食料にするも可なりなど云ひ、己が智惠に誇りつゝ其牛と共に曇の背後に隱るゝを見たりと

云ふにぞ、扨は彼れ猶ほ戰爭の終らぬと思ひ潛みて有るにやと其者をして其所を檢めしむるに、牛は無事なれど與助は見えず。この復命なり、彼れ眞に戰ひの恐ろしさに孰にか隱れたる者ならば茲にて勝利休戰の喇叭を吹き、戰ひの止みたるを知しむるも一策なる可し、彼れ或は安心して現れ來らんかと、茂林自ら喇叭を取りて良久しく吹鳴すに、怪しや茂林の背後僅に十間ほど離れたる崖の邊より、直徑八寸も有る可しと思はるゝ大蛇幾匹、グル〳〵と蟠局を卷きし形の儘、聳くり出でたり、見れば蟠局の中に與助の卷込まれたる者と見え、彼れの頭だけ渦卷の如き外に出で蛇の進むに從ひて、蟠局と共にグル〳〵と廻りつゝ有り、ア、彼れ戰ひを恐れるが爲めに、戰ひよりも猶恐る可き毒蛇の窟に隱れ斯る目に逢ひしなるか。

百四十七

此邊の如き熱帶の地に毒蛇の多き事は今初めて知る事には非ず、去れど現在一行中の一人たる與助が毒蛇の蟠局に卷込まれしと有りては驚かざる事能はず、彼れ生て在るか、死して在るか、唯

一ケ所蟠局の外に出たる其顏は更に人間の色も無く、眼も其球の飛出るかと思はるゝ程に開きて有り、誰こて此樣に驚かさらんや、老兵名澤の如き勇士さへも「大變だ」と云ふのみにて爲す所を知らず、獨り茂林だけは猶ほ此樣を知らず、蛇の方に背を向けしまゝ其の喇叭を吹續くるに、通辯亞利は遽しく茂林の手を捕へ「可ません吹喇を吹いては可ません、毒蛇が喇叭の聲を聞く度に段々此方へ寄て來ます」と云ふ、毒蛇と聞きて茂林は初めて吹休め、振向て背後を見しが、彼れは與助を巴里に居る頃より我雇人とし長く召使ひたる丈に、其身の危き事をも打忘れ蟠局の方を指し馳せて行くに、怪や蟠局は喇叭の音を止むと共にソロ〳〵と解け初め、茂林が近づきし頃は、數多の大蛇、與助の身體を捨て、靜に崖の方を指して蹤くり去らんとす、扨は毒蛇までも茂林の勇氣に恐れしにや、夫とも何か仔細あるにや、斯る仔細を尋るより、與助の介抱が肝腎なれば孰も彼れの傍に集るに彼れ全く死骸の如く倒れたる儘なるも、猶ほ命の存する事は、恐しさに張開きたる其眼の、人を見て動くにて察せらる、茂林は狂人の如く與助を抱起て「オ、猶だ命だけは有樣だが、氣絕でもして居るのか、誰か早く水をソレ早く、早く」と悶しがるに、通辯亞

利は水を持て何故か笑ながら近き來り「ア、此樣な可笑い事は無い」と云つゝ差出せり、茂林は受取ながら聞咎て「人が生死の境迄推寄せて居るのに何が可笑い」と叱るに亞利は殆ど腹を抱へ「イヱ大丈夫、與助さんが自分の心で恐死さへせねば、決して死る程の害は受て居無いのです、私は先達て此國へ使に來たから知て居ますが、此國は蛇を神の樣に崇めて祭り、蛇を使ふ人間を活神と立てゝ有るのです」成るほど先に芽蘭男爵の手紙にも此國に蛇使の人有る旨、及び蛇祭なぞの事をも記して有りたり、去れど茂林は男爵の手紙なぞ思ひ出す暇無く、猶も怒りて「夫が何で可笑いのだ、一行中の者が斯な危急に落入たのを笑ひなどすると此後は承知しないぞ」と云ふ、亞利は此兒脈に恐れ、其まゝ後を云はずして笑を停め口をも噤みたるが、頓て茂林も與助の身體に何の異狀も無く、唯だ當人が恐しさの爲め動き得ぬに止るを見て、稍疑ふ所あり、再び亞利に向ひ「何だ其後を話せ」と云ふに亞利は靜かに「ナアニ今の蛇は向ふの崖へ蛇使が穴倉の樣な所を作り其中に飼て有るのです、毒蛇ですけれど其牙を拔て有るから何にも毒は無く、爾して日頃蟠局を卷く樣に藝を使込で有るのです、夫だから蛇等は與助さんの這入て來たのを見、蟠局

さへ卷けば何か餌食を與へられる事と思ひ、與助さんを圍で卷たのです、蛇使が毎も其身親ら蟠局の中へ卷込まれて、其身が蟠局の動くこと共にグル〳〵廻るのを輪陀女王などに見せて、愈此人は活神樣に違ひ無いと思はせるのです、今の蛇は蟠局を卷き之で食物に有附くのだと喜で居る所へ、貴方の喇叭が聞えたから愈蛇祭りが初つた事と思ひ、與助さんをグル〳〵廻して得意の藝を遣かし乍ら出て來たのです、蛇は餘ほど褒美や御供物に有附く積りで有たのでせう」と云ふ、此說明しを聞きては流石の茂林も笑はざる事を得ず、宛も氣拔のせし如くに與助の身體を投出し「何だ、此臆病者め畫の背後に隱れて居たけれど猶ほ戰爭の恐しさに、崖に深い穴の有るを見、弦ならばと更に蛇飼の穴へ隱れたのか、本統に一同を驚かした」と呟けば、是等の言葉一々に與助の耳に入り、其の恐しさを搔消したりと見え、彼れ初めて口を開き道理で蟠局が少し弛かつた、私も其樣な事では無いかと思ふから、怖氣を見せて蛇に輕侮されては成らぬと一生懸命に睨め詰めて居ました」と云ふ、茂林は「馬鹿々々しい」の一語を殘し扉打拂ひつ、芽蘭男爵及夫人等の幕營の方に立去れば、亞利は與助を扶け起しつ與助さんお前は殘念な事をしたよ、ア

ノ蛇が蛇使の飼物でさへ無くばお前は天下第一の大冒險として全世界へ名を揚る所だのに」ト譏弄へば與助は眞面目にて「だがネ亞利さん、蛇使の飼馴した蛇だつたなどゝ、餘り言觸らして下さるな」と口留するも可笑し。

斯る間に日も既に暮盡せば亂暴なる門鳩兵が、勝に乘じて近村に放ちし火は、天の隈を包みて赤し。

百四十八

斯くて此一夜の中に平洲、茂林は本目紳士の助力をも得て一行に差圖し、悉く好土地引上の用意をぞ運びける、芽蘭男爵及び魔雲坐王の如き負傷者は昇運び輿の如き者を作りて之れに載せ、看病人としては芽蘭夫人附切りて帆浦女之を助け、醫員としては鳥尾醫學士附切りて寺森醫師之を助くるなど、夫々の受持まで最と都合好く定まりたり。

怎る間にも深く憐む可きは此遊林臺の國なり、國中の精兵は多く殺され生殘る者も軍神石の破

裂に怖恐れ逃散りて復纏まる可くも非らず、女王は捕はれ王宮は燒かれ、附近の村々も門鳩兵の亂暴を受け、曉天に至るまで殆んど叫喚の聲を絶たず、幾百年來、亞弗利加第一等の強國たりし女護の洲も今ぞ亡國の時來りし者と知らる、去れど是よりも猶憐む可きは女王輪陀なり、昨日まで此大國に君臨し、思ふ事意の如くならぬは莫かりしに、今は家毀れた都燒かれ、其身は敵の捕囚と爲りて、正かの時に身を護る可き刺の鎧もので剝取らる、此悲き有樣に、心も千々に碎けし如く夜一夜を眠りもせず、遠く此方の村彼方の家の燒き盡さるゝ火炎を睨み、又或る時は最と恨めしげに芽蘭男爵及び夫人の幕營を眺めなどし、思に吳れし有樣にて明したるが、翌朝は平洲、茂林等が此女王を如何に處分す可きやとの評議こは爲れり。

茂林は此女王を放ちては生殘れる美人軍を召集し、復讐の意を以て一行を追掛て攻來る恐れ有れば、一思ひに銃殺す可しと唱へ、平洲は否とよ最早や美人軍も其他の軍も昨日見し通りの有樣なれば、容易に再び召集せらるゝ恐れは無し、兎に角一國の女王とも云ふ可き身なれば銃殺などゝ云へる慘刑に所す可からず、最早や何の害をも發し得ざる憐む可き一婦人なれば、此まゝ放ち遣

るべしと云ひしが、初より此黒天女に淺からぬ同情を表せる寺森醫師は之を人足に守らしめて巴里へまでも連歸らんと云ふ、議論容易に決せざれば、更に本目紳士の意見を聞くに、此人は何事をも輕く見て、交際の上より判斷する質なれば寺森に贊成し、此婦人を連歸らば巴里の交際社會に又と無き話の種を與ふべしと云へり、平洲とても、茂林の說の如く無慙に銃殺するよりも猶ほ此方が慈悲の道に叶へりと思ふにぞ、寧ろ是に贊成せんかと心の稍や傾く折しも、寺森は最後の理由を提出し「僕が此女王を連歸らうと云ふは決して戀みなどの爲では無い、僕は數ケ月以前から云ふ通り、此國の女を以て皮膚研究の最大發明を完成する積りだから、君等は何うか僕に研究の材料を與へるこ思つて僕の意に贊成して呉れ給へ、僕の大發明は今一步で成就するこ云ふ所まで進んで居るから」こ切に請ふて止まざるにぞ、發明と云ふ一語に對し平洲も、茂林も「然らば君の意に任せん、唯だ君自から此女王の爲に生ずる一切の責任を引受け、他へ迷惑を掛けぬ樣に監督し給へ」と云ひ、遂に輪陀女王を虜のまゝ連歸る事とはなれり。

是にて愈出發こ事定り、一行の人員を點檢するに人足にも多少の不足は有れど差支ふる事は

無し、又魔雲坐の部下兵も昨夜敵の村々に進入せし者までも多くは歸り來り千五百人ほどこ爲れり、國を出る時には三千人の上に出しも、昨日の戰にて半數ほどを失ひたる者こ見ゆ、去れど此一行中にては此兵最も強き者にして、是だけの部下さへ有れば猶ほ魔雲坐の手中に一行の生命を握る如き者なれば、魔雲坐も滿足せし者か、數の減じたるを惜む樣子も無し、魔雲坐が滿足する丈け一行に取りては氣味惡き次第にして、他日魔雲坐こ分るゝ時、何か困難の無くては止まじこ平洲、茂林こも聊か氣遣ふ所あれど、其氣遣ひを人には知さず唯だ心の中にて之に應ずべき工夫を探るのみ。

引上の第一步は昨日鳥尾こ本目この降來りし彼の崖に上るに在り、繩には猶ほ幾筋の繩梯子を垂れたる儘なれば、先づ人足を上らせて更に幾十筋の繩梯子を掛け足さしめ、負傷者の乘れる輿なども繩にて上へ引揚げしめしが、一千數百の人數なれば殆ど半日を費して漸く上り盡したり、唯だ輪陀女王だけは容易に此崖へ上るまいこ思はれしに、爾は無くて負傷者の輿の引揚られしと見るや宛も此輿に離れじと決心せる如く自ら繩を手繰りて上れり、多年美人軍の大將として身を鍛

へたる者なれば斯る事には最巧みにして、誰よりも容易なるにぞ、茂林は此樣を見「若し美人軍が再擧して吾々を追ふ氣に成れば一時間を經ずして數千人此崖を上り盡すだらう」と云へば寺森は失念らず「所が崖の上から繩梯子を取上げて置けば、到底下から繩梯子を投掛る事は出來ぬ、縱し美人軍に再擧の力が有ると假定しても是だけは安心な者サ」と云へり、眞に此言葉の通りなれば、繩梯子は悉く取上げ、再び下より攀登る事の全く出來さるを見屆けし上、同勢彼の鳥尾本目等が初ぬて遊林臺國の山の上に蟻の如く兵の集ふを望み見進みて日沒に近き頃、漸く鳥尾本目等も輪陀女王は、少しも貧償者の輿より目を離さず、亡國に瀕し彼の坂の上には出しが、此時までも輪陀女王は、少しも貧償者の輿より目を離さず、亡國に瀕したる己が故鄕の方は見向もせず、唯だ輿を見失はじとのみ勉むる樣子なれば、平洲も、茂林も穩かならぬ事に思ひ、寺森に向ひて、輪陀女王は心に復讐の意を藏し、芽蘭男爵を狙へる事明かなれば、此上に連れ行くを得ず、玆にて幾日分の兵糧を首に掛けて追返す可し、左すれば何とかして自分の王國へ歸り行くならん、と說くに寺森は承知せず「イヤ女王が男爵の輿を狙ふは決し

て復讐など云ふ有害な目的では無い、僕は昨日初めて男爵と此女王とに逢た時から窃に樣子を考へるに、女王は深く男爵を思ひ初め、早く男爵の病氣を直して、自分の夫に仕やうと云ふ一心で今まで男爵を捕虜に仕て置たのだ、今とても男爵の輿を狙ふは全く愛の一念で、自ら輿より目を離し得ぬので有る」と云爭へり、平洲は益々驚きて「女王が其樣な心なら猶更ら連て行く事は出來ぬ、斷然此で放ち給へ」「夫は又何う云ふ譯で」「ヱ、君にも似合ぬ事を問ふ、其樣な心を以て此女王が男爵の輿を見ると云ふ事が若し芽蘭夫人に分つたなら何とする、久々で廻り逢た夫婦の心情に若し夫が爲に一點隔意の端でも開かせる樣になれば、君は一同の尊敬する芽蘭夫人に對し言譯の言葉が有るまい」此一語には寺森も抵抗すること能はず、直ちに乾肉其他數日の糧に充つ可き物を袋に入れて女王の首に掛け、通辯の力をも借り、猶ほ手眞似をも雜へて、是より立去れとの意を、及ぶだけ親切に合點せしめ、此に女王を捨置きて進み去りしが、女王は其後に、故鄕の方へは歸らんともせず、木の根に腰掛け、山に入る日の我顏を照すにも構はず、只茫然として輿の行方をのみ見送りたる、心の中には何事を思へるならん。

百四十九

黒天女輪陀女王をば斯く憐む可き有樣に殘し置きて、一行は此所より更に數哩を進み、夕日の光り漸く道を照さゞるに到るころ行を進めしが、一同露宿の用意に忙はしき間に、獨り寺森醫師は女王が先刻の所より立去りしや否と聊か氣遣はしき想ひのするにぞ、故々小高き所に登り、望遠鏡を以て先刻女王を殘したる坂の上の邊を眺むるに、傷はしや女王は猶も岩の高き所に坐し、茫然と此方を眺めつゝ有り、果して是れ復讐の心なるや、否々芽蘭男爵を思ひ初めたる愛の一念なること殆ど疑ふ可くも有らず、何時まで彼の所に佇ずむにや、今夜を如何にして明さん心にや、など寺森は怪みて亦能く見るに、先ほど首に掛けて遣りたる食糧の袋さへ今は見えず多分は國既に亡されし上、國にも代難しとまで慕ひたる戀し男を奪去られ、全く絶望し果てゝ食糧などは孰れへか投捨たる者なるべし、扨は其身も生存ふ甲斐無きを思ひ、谷底へでも身を投げて死する氣にや、然り死する氣に非されば何ぞ食糧を投捨る事あらんや、など樣々に思ひ遣りて轉ど惘れ

さに堪へされば、寺森自身も日の全く暮れ果て、女王が姿の暗に包まれて見えざる頃まで眺め盡しぬ。

翌朝起き出でゝも寺森は第一に彼の所を眺むるに、女王は愈々身でも投げしか、夫とも斷念めて立ち去りしものか岩の上に其の姿見えず、頓て一同出發の時と爲りても寺森一人何こやら氣掛りなる儘少し後まで立ち殘りて、一行の殿りたる老兵名澤にも、若し昨夜の女王の此邊まで迷ひ來るを見ざりしや、或ひは其の叫び聲でも聞かざりしやなど尋ぬるに、見も聞もせずと答ふ、最早や是だけの手掛りなれば哀れむこも詮無しと思ひ直し、是れより何の變りしこと無く日々の旅を續けしが、其うちに芽蘭男爵も魔雲坐王も、山の空氣の良き爲か追々に痛み輕く、猶釣臺に昇がれし儘なりとは云へ首を擧げて景色なご眺むる迄に至り、一同最早や其容體を氣遣はぬ程ごゝ爲りしも、唯一つ困難なるは、道なき山の旅に有れば何時しか全く反對の方角に向ふに至れり初めは遙青山の谷を西へ取る積なりしも、谷自ら轉じて東の方へ向ひ、西へごては行き難ければ斯ては成らじと、少しの攀づ可き所ある毎に峰の方へ攀上れど、幾度上るも同じ事にて、西の方

険く、東へ東へと向くのみなり、去れど東にも必ず末遂にナイルの河へ流れ込む谷川の有る筈なれば、爾る谷川を見留め次第、其れに添ひて北に下らん、窺すれば或はゴンドコロの邊にも出でらる可きか、ゴンドコロはナイル川の東に向ひたる支流に添へる所にして、歐羅巴人の入込める事可通無府に次ぐ程なれば、玆に出るも結句幸ひならんかと、果は道筋變更の相談をまで定めたり。

斯くて山に入りてより既に八日目の朝さはなりしが、例の如く出發する頃に及び老兵名澤は態々寺森醫師の許に來り、容易ならぬ面持にて「實は意外な事が有ますよ」と云ふ、「意外な事とは」と怪み問れて「先達てから夜の曉方になると折々何所からか異樣な叫び聲が聞えるのです、山の中ゆゑ初めは獸の聲かとも思ひましたが、毎も此一行の背後の方から聞え、殊に其聲が何だか細く長く引き、或時は風に搖れて悲げに、又或時は木などに響て凄く聞えますから、若や誰か〻此一行の後を慕ひ、晝は寢て夜に入れば泣つ叫びつして追て來るのでは有るまいかと、何だか私も氣味悪くなりましたから、今朝の四時頃には殊に其聲が近寄て聞えました」如何にも氣味悪き

話なれば、寺森も殆ど身を震はせ「夫から其聲も原因を窮めたとでも云ふのか」「ハイ今朝に成てヤツト分りました」寺森は息をも繼がず「何だ、何だ、其の聲は、何の聲だ」「可哀相な、輪陀女王です」「エ、エ、、女王が、猶だ吾々の後を追ふて來るのか」「ハイ、何でも鎧は奪はれ、着る物は無く、夜に入ると山の氣で寒さに堪へぬから、晝間の熱い中に寢て、夜は走つて來るのと見えます」「其樣な事が何うして分つた私が見屆けたのです、ハイ先刻其姿を見たのです、可哀相に喰ふ物も碌には無く、纔に木の實ぐらいで饑を醫して居ると見え、十日に足らぬ間ですが何だか痩せて、疲れ果て居る樣です」寺森は益々心を動かして「何所で見た、今も何所かに居るのか、」「ハイ彼所に見ゆる岩の背後に潜んで居ます」と云ひ幾町か背後なる茂りの傍らに見ゆる大なる巖石を指さしたり。

百五十

黒天女の國を出て既に十日に近き旅を重ねしに、玆迄も　女王が一同の後を追掛け來るとは、

心の中の哀れさも察せらる、況して衣も無く、食も無き有樣にて、晝は寢ね夜だけ寒さを凌ぐ爲め走り〳〵て、道も無き山又山を辿り來しとは、抑も何等の因果ぞや。

寺森醫師は一方ならず憐みの念に動され、是と云ふも畢竟は其身が彼の女王を遊林臺の國より連出たる柄の事なれば、成る可くは今一應說諭し糧食を與へて其國へ歸らしめん者と思ひ、自ら一行の立ちたる後に蹈止まり、老兵名澤を案內として、女王が潛めりと云ふ巖の後まで到り見るに、全く名澤の言ひし通りなり女王濳みて茲に在り、去れど如何の有樣ぞ腰の邊りに少し許り物纏へるのみにして、其外は裸體も同樣の姿とし、如何に熱帶の地とは云へ夜に入れば寒きこと冬の如き山の中なれば、成る程只走りでもせずば殆ど凌ぎ難かる可し、況して數日來暗夜と云ひ、晝さへ道の無き所なれば、蹼きもし轉びもせしならん、背とも云はず肩とも云はず、所々に打傷突傷など有り、血の浸む儘に任せたる樣傷々しきこと限り無し。

此時までも寺森の來るを知らざりしが、或は宵よりの疲れに居眠でも爲し居たるか、女王は蹲みたる儘にて、旭日の照す可き方に背を向け、寒む相に身震ひし居たるが、足音に驚きて其の美

しき顏を擧げたり、如何にも名澤の言ひし如く幾日の餓に形骸か衰へたりとは云へ、年猶ほ若き女盛りの事なれば、少しも容貌に損する所は無く、眞に天女の名に負かず、先に五千の美人軍を率ゐ陣頭に現はれて寺森醫師を許し返したる時の如き凛々くの威風は爲きも、威風無き所に却つて幾許の趣きを加へ、殊に其寒さに惱み、饑に疲れて何と無う稍や悲しげなる面持の見ゆる樣、壯嚴なる四邊の光景に對映して一入に哀れを增さる、寺森は暫しがほど言葉を發せず眺め居しに、女王は流石一大國に君臨せし身の、斯る淺間しき有樣を異國の人に見らるゝのみか、又其の憐みをさへ受けんとするを厭ふ如く突と立上り、何か身構へすると見る間に、飛燕の如く身を躍らせて橫手なる茂りの中に飛入りて、早くも其姿を隱したり。

女王が他の美人軍一般の者と同じく、身の輕くして進退の捷き事は兼て聞きしも、斯迄とは思はざりしに、今親しく見るに及びて寺森は殆んど夢の如き心地し、空しく茂りの中を差窺くのみ去れど女王の姿は再び認む可くも非ず、尙ほ名澤と手を分ち、茂りの中にまで分入りて及ぶだけ尋ねし末終に絕望して此所を引上げたるが、斯くて一同に追附きて後も尙ほ女王が身の氣遣はし

くて、幾度こ無く空しく背後を振返りたり。

是より二夜、寺森は曉方に及ぶ毎に、風の持て來る女王の叫び聲を聞きたり、最と遠くして且微かなれば、紹々に聞ゆるのみなれど或時は峰に出で、或時は谷に沈み、其悲しげなる事云ふ許り無し、最早や其故郷へ追返す見込も絶たれば、何さかして取押へ、兎に角一行の虜として餓死だけも凌ぐ樣、食物を與ふる事にせんと、種々思案の末、夜の明ると共に心を決して男爵及び魔雲坐等が看病せられつゝ有る天幕に至り、夫人に逢ひて、初め彼の女王を連出し事より途中に於て夫人の心を憚り解放せし事、其後尙ほ女王が追掛け來りて、夜々悲しき聲の聞ゆる事まで漏無く語るに、夫人も昨夜看病に更けて其聲を聞きたりと云ひ、一方ならず憐みの心を起し、我身に對して少しも氣兼する所無ければ、人夫總出を命じて迄も女王を探し出す可しと云へり。

去れど夫ほどまで大掛りに手を盡すにも及ばねば、寺森は唯夫人の許しを得しを喜び、其中は再び女王を認め得る時ある可しと思ひしが、果せる哉、此日も暮れ一同再び露宿して夜更け人寢靜りたる時に及び、女王は孰れよりか立現はれ、誰にも見咎められまじと忍び〳〵て露宿の近く

まで窺ひ寄りたり、寺森は若し斯る事もやと、老兵名澤に打合せ、部下幾人と共に、窃に寢ずの番を張り居たれば、焚殘したる篝の火影に薄暗く女王の姿見ゆると共に、之を捕ふる手配りを爲し油斷無く透し眺むるに女王は容易に近き來らず、身を屈めて遙かに幾個の天幕を伺ふは、戀しき人の孰れに在るやと探れるにや、夫とも猶ほ眠らさる人あらんを氣遣ひ、大事を取りて伺へる乎寺森は斯く思ふうち又一種の疑ひを起し、若しや芽蘭夫人を戀の敵の如く思ひ、刺殺さん心にて忍び寄りし者ならば如何にせん、爾る事も有らば夫人に女王の憐む可きを訴へたる我が責任こそ重ければ、兎に角女王の心體を見定めたる上の事にせんと、其意を名澤に細語くに、名澤は打消し「ナニ其樣な深い了見が何で女王に有ます者か、唯だ喰殘りの食物でも探しに來たのです、腹が空いては女王でも貴夫人でも、泥坊猫と少しも異りは有りません」と云ふ「夫だけの目的なら此方は大に安心だけれど」と語る間も無く女王は、人悉く眠りしと見てか、又拔足に篝の傍まで來りしが、未だ名澤の推量せし如く泥坊猫の了見とは成らずして全くは夜の寒さに堪得ず温まりに來し者と見え、燃殘る篝の火に落散る木の葉など集め掛け、最と快げに其身を焙り初めたり。

百五十一

輪陀女王の顔は燃る篝火に照されて美くしき事限り無く、美くしき中に又自から悲き所の見ゆるは、食も無く家も無き今の身の上を果敢なみてにや、將は屆かぬ戀の恨みにや、平洲は其戰れなるを知る能はず、唯だ女王が其身を温め終りて後に何事を爲さんとするやを見ば、自から察するを得んと、瞬瞬もせず眺むるに、頃て女王は寒さをも忘れしと見え、二度三度手の掌を撫で腕を擦りなどせし末、やをら身を起して又も物思はしげに此方の天幕を彼是と見廻したるが、大小の差こそ有れ何れも同じ形なれば何の見分も附かざるにや、間も無く山の方を振向き徐ろ〳〵と歩み初めたり、扨は全く其身を温むる外に、餘所ながら戀しき人の天幕を見て行かんとの心にて來りし者と知らる。最早や此うへ猶豫す可きに有ねば寺森は名澤其他に合圖するに一同スハと奔り寄り最と容易に捕へ得たり、女王は何の武器をも携へねば抵抗するも無益と知りしか或は今までの艱苦に慾り寧ろ捕はれて養はるゝが安樂なりと思ひしか、少も身を掙かんとせず、寺森より

縄を掛られんとするに逢ても尋常に手を差延しぬ。

是より女王の身は寺森自ら番人と爲り、通例の捕虜の如く扱ひ、又三日程を進みしに漸く山の中斷する所に出で、一條の水緩かなる河、北に向ひて流るゝを見出したり、「河は」「河は」と唯だ夫のみを見當にして進み來れる一同なれば眞に暗夜に燈を得し想ひを爲し、最早や道に迷ふ恐れも無しなど祝し逢ふに、傷猶ほ癒えぬ魔雲坐も杖に憑りて出で來り「是が御身等の余に約束せし牙洗川なるや」と問ふ、茂林猶豫もせず「勿論なり」と答へ、猶ほ魔雲坐が「牙洗川より水多く水嵩も多き樣なり」と眉を顰めて怪むを「幷は下に至り小分れして他の幾條の川に流れ込むが爲なり」と事も無く言消したるが、此言葉或は事實にして此川全く牙洗川の上流なるやも知れず、左すれば一同河に沿ひ、再び恐ろしき魔雲坐の國に捕虜と爲りては今度こそは逃れ出る道無しとて、猶も地理を按ずるに多く亞弗利加最新の地理報告などを讀みたる本目紳士は、是れ太子湖の東岸より流れ出るとスピークの發見報告したる者にして、乃流の東方の枝なるに相違無し、之に添ひて下らば牙洗川に

ば出ずして必らず乃流に出でゴンドロコに達せんと云ふ、素より想像に過されど、幾分か氣を安くすれば芽蘭夫人も喜びて、寺森醫師に向ひ「ゴンドロコに達すれば厚く那の女王に手當して、護衞を付け本國へ送り還して遣りませう」と云ふ、寺森も實は彼の女王を捕虜として引連れる事如何にも責任の重き事を思ひ、且は茂林等の云ひし如く芽蘭夫人も女の敏き神經として、此女王が我所夫を戀慕ふが爲め斯は遙々一行を追來りしを知り、幾分か氣に掛る所あればこそ斯くは女王を送り返す手續をも言出るなれと、夫人の心をまで察して益々穩かならず思ひ「ハイ私の大發明も最早や黑天女を製せぬ所まで進みましたから、旁々以てゴンドロコへ着き次第に送り返しませう」と答へしが、ゴンドロコへ着くまでの中に、如何なる珍事の起るやを知らざりしは是非も無し。

河を沿ひて下ると又數日にして此河更に他の幅廣き一大河に流注ぐ所に達したり、一大河は乃ち乃流の枝にして、青乃流に對し白乃流と稱する物なるは河の樣及び岸に茂れる草樹の種類にて明かなれば、一同は殆ど鄕國にも歸り附きし如く喜びしが、是れに附けても又氣遣はしきは魔

雲坐なり、彼れ愈々此河の「牙洗川」に有らぬを知らば如何なる事を言出でんも知る可からず、成可くは河の見えずして、唯だ水音のみ聞ゆる邊を通る事にせんなど、姑息の策を考ふるも有しが、幸ひにして道は自然と河より離れ、深き林の間に入りたれば、急には魔雲坐の疑ひをも起さゞるを得たり、林の所々には蠻民の部落も有り、糧食を繼ぐ便利等をも得、又進みて漸くゴンドロコを去る一日程の所に達したるが、此夜一同の寢鎭る頃に及び、輪陀女王は如何にしてか繩より脫し、獨り窃かに賄方の人夫等が眠れる所に行き、荒肉などを切る長き庖丁を探し出し之を携へて又た外面に忍び出たり、アヽ女王は何をせん心にや、國亡び身捕はれ、思ふ事總て違ふ今日今頃の淺ましき樣を悔ゐ、自殺せん意にても有るにや、久しく火の消えし如く光を放たざりし其眼も、恰かも戰場に臨みし時の如く俄き初め、顏一面に一種の活氣を添へ「アヽ是れで漸く我望みも達せられる」と云ふ如く、暗に双を透しては滿足氣に打眺めし末更に又此所彼所、幾張の天幕を見廻りて終に芽蘭男爵及び夫人等の眠れる、病室とも云ふ可き天幕に忍び入り、眠れる姿に探り當て、唯だ一突に其咽喉の邊を突刺したり。

百五十二

寢たる姿を突通せし血刀を、輪陀女王は拔取りもせず、其儘にして彼の天幕より出で來れり、是にて女王は大願の一つを成就し得たりと云ふ如く、今までの悲しげなる顏色、幾分か晴渡りて見えたり。

翌朝は一行の人々、今日こそゴンドコロに安着し、久し振にて屋根ある家の中に休まると思へば氣も自ら引立ちて、毎もより早く起揃ひ、思ひ思ひに出立の用意を初めたるが、輪陀女王は昨夜爲せし我が仕業の後の始末を見屆けんとの心にて、彼の負傷者の天幕より纔ばかり離れたる所に立ち、殆んど瞬瞼もせぬ程に眺めつゝ有り、眺むる中にも心地好げなる色は見ゆ。

斯る折りしも天幕の中より、色靑ざめし芽蘭夫人の顏現はれ出たり、色こそ靑ざめたれ其身には何の傷も無し、扨は輪陀の刺したる寢姿は夫人には非ざりしと見ゆ、夫人は唯だ其の無慘なる死樣を見て、驚きて顏色を替へ人を呼ばんとて出で來りとし見ゆ、待設けたる輪陀女王は夫人の

の無事なる顏を見るより、殺し得たりと思ひたる我が見込の全く外れしを知り、驚きて絶望に自ら支へ得ざる如く、人の耳を劈く程の銳き叫び聲を發して狂ひ走れり。

人々此聲に何事ぞと集ひ來るに、此時又も天幕の中にて魂消る如く叫び立るは看病の補助者、帆浦女なり、帆浦女は「アレ殺されて居ます、殺されました、殺されました」と口綴けに、宛も其身が殺されしかの如く叫びつゝ芽蘭夫人の立る所へ轉び來れり。

殺されしとは何人にや、若しや芽蘭男爵には有らぬかと、平洲も、茂林も、天幕の中に馳せ入るに、傷ましや數日來、杖に寄りて散步し得るまでに回復せし魔雲坐王が、料理庖丁に咽喉を刺され、苦と叫ぶ暇も無く、顏を顰むる暇も無く、眠りし儘の姿にて死して有り、輪陀女王が芽蘭夫人を刺さんと過ちて、魔雲坐を刺したる事は問はずして明かなり、

魔雲坐の死悶可しとは雖も、又思へば結句一同に取り幸陀なり、彼れも如何にして分れんかとは一行が空く頭を惱して好き思案を得ぬ問題なれば、輪陀女王の手を以て此厄を拂ひ得しとは宛ど天の配劑とも云ふ可きに似たり、去れど芽蘭夫人は我身の爲に魔雲坐が一國の王たる身を以て

其國を迷ひ出で、千辛萬苦を重ねたる末、斯る異鄉の鬼と爲しを思ひては憐みの念に堪へず、行を止めて厚く其遺骸を葬らしめ、乃流河より程遠からぬ樹青く風凉しき所に、石碑の如き石を建て猶其遺髮を切て彼が部下の兵士に與へ、本國へ護送して歸らしむる事としたり、部下の兵士も力と頼む國王を失ひたる爲め、野蠻人に似氣も無く打萎れ、復た抵抗する氣力も無く、唯だ一行の命の儘に從ふは、一つは斯る旅行にて一行に反きては後にも先にも、行く可き道をだに知り得ぬが爲めにも有らん。

魔雲坐を葬りたる翌日、ゴンドコロに着きたれば、玆にて魔雲坐の部下へは充分の食糧を與へ別に案内者をまで雇ひて附し、其本國へ歸らしめたり、獨り輪陀女王は、夫人を殺し得ざりし失望に其場限り孰れにか逃去りて其後は姿も見えず、河の岸か森中にて餓死にでもせし者ならんと平洲、茂林は評し合ひたり。

ゴンドコロにて船を雇ひ、是より乃流の河に浮びて歸るに、流れ穩かにして河風も凉しければ今までの辛苦に比べて、物見遊山にも優さる心地あり、斯て早や三日を過したる頃、船の後より

浮つ沈みつ流れ來る一物あり、能く見れば輪陀女王の死骸なるにぞ、扨は絶望の餘り乃流の河に身を投げて死せし者とは分りたるが、死骸と爲りてまで戀しき男爵の後を追來るかと思へば一同坐に憐れを催ほしたるが、中にも芽蘭夫人は之を此まゝ流に任せ置く可からずと云ひ、水夫をして拾ひ上げしめ之をも岸の上に葬りたり、此後は何の事も無く、河の水穩かに船を送り、沿岸の景又景を眺めて下れば、芽蘭男爵も全く健康の人に復し、一同無事に埃及に着き、埃及より又船にて無事に本國に歸り得たり、本國にて之を聞く人々の驚きと、歡迎の盛なりし事は管々しく記す迄も無し。

此一行に從ひ行きし與助も、帆浦女も、身に餘るほどの賃銀を得て各々再び人に雇るゝ必要も無き身と爲り、帆浦女は英國に歸り、與助は巴里にて永住の家を求めて何不足なき小商の主人さは爲れり。

寺森醫師とても茂林に對する勝負の負債全く消へ、外に芽蘭夫人より數多の報酬を得、殊に亞弗利加を旅し來りし外科醫者として、鳥尾醫學士と同じく名を擧げたれば、昔日の惰怠醫者も

一方ならぬ流行醫者と爲り、職業の急しきに連れて勝負事の持病癒へ、到る處に尊敬せらるゝ幸福の身とは成れり。

平洲、茂林、烏尾の三學士は幾年の辛苦全く水の泡と爲りしも、永の旅にて三人殆ど兄弟より親しみを加へたれば、三人とも縱し芽蘭夫人が元の通り自由の身なればとて、他の二人を推退けて己れ一人勝利に誇らんなど云へる心全く消えたり。

殊に芽蘭夫人に對しても兄妹の如き間と爲り、唯だ夫人が所夫男爵と新婚の人の如く親しきを見て滿足するのみ、若しも夫人が三人中の一人に落たりせば、他の二人は發狂するほどにも絶望す可きなれど、本來の所夫に歸し、三人ともに慕ふ可からざる者を慕ひたりと分りては却て其身の勝得ざりしを恨むより、負けざりし幸福を喜び、片落なく落着せしを喜び合ふのみ。

況して三人が之が爲に得し名譽は其の勞を償ひて餘り有り、三人ともに芽蘭男爵と共に地學協會の最も名譽ある會員と爲り、今まで「未詳の地」として名さへ記されざる亞弗利加の內地一部分が土門陀、麻列峨、遊林臺などの、此時より地圖の表に書入れて世界に配布せられ、又太子湖

と遊林臺の間たる遙青山の有樣、及び乃流の水源は太子湖の東部に出る事なども三人及び本目紳士の爲めに分りたれば、地圖の盡きざる間は此人々の名は消へまじ、是れ實に又と得べからざる男子の大名譽に非ずや。

芽蘭夫人は曾て所夫男爵に逢ふ時までは其心の、三人中の烏尾醫學士に傾かんとするを制し得さらんともせしなれ、所夫の憐れなる樣を見、且は黑女にもせよ一國の女王たる輪陀が、白人よりも猶ほ美しき姿を以て、其身と芽蘭男爵の愛を競爭せんとする地位に立てるを見てよりは、專心唯だ昔の愛に立返り、又男爵が九死を胃して輪陀を捨て、我身の方に脫し來りし樣などを思ひては、最愛しの情益々募り來るのみ、烏尾にも其他にも心の動く可き餘地あらず。

此後一同落合ひし席にて、寺森醫師より亞弗利加遠征の功は何人を第一とするやと尋ねしに夫人は軍神石を破壞して、一同を助けたる本目紳士の手柄第一等、平洲茂林優劣無く第二等、烏尾醫學士は功稍々劣りたれど、醫師の職業を以て寺森醫師と共に我が此身の所夫を助けられしは同じく第二等の中に入る可しと答へたりとぞ。

人外境 終

又以て夫人の心の少しも偏頗らざるを知るべし。

夫人の心、斯も公明なれば夫婦の間は勿論、何人との間にも更に苦情などの起る事無く、程經て平洲も、茂林も鳥尾、寺森も、夫々良緣を得て最と目出度く世を送しとなり。

昭和十六年四月十五日印刷
昭和十六年四月二十日發行

不許複製

人外境

著作者　黒岩涙香　東京市日本橋區通三丁目五番地
發行者　飯島竹次郎　東京市神田區神保町三ノ廿三
印刷者　佐藤三次

定價金壹圓五拾錢

發兌元　明文館書店　東京市日本橋區通三丁目五番地　電話日本橋六八四・振替東京四五五四番

三美堂印刷所印行

最新刊・大好評

黒岩涙香先生譯

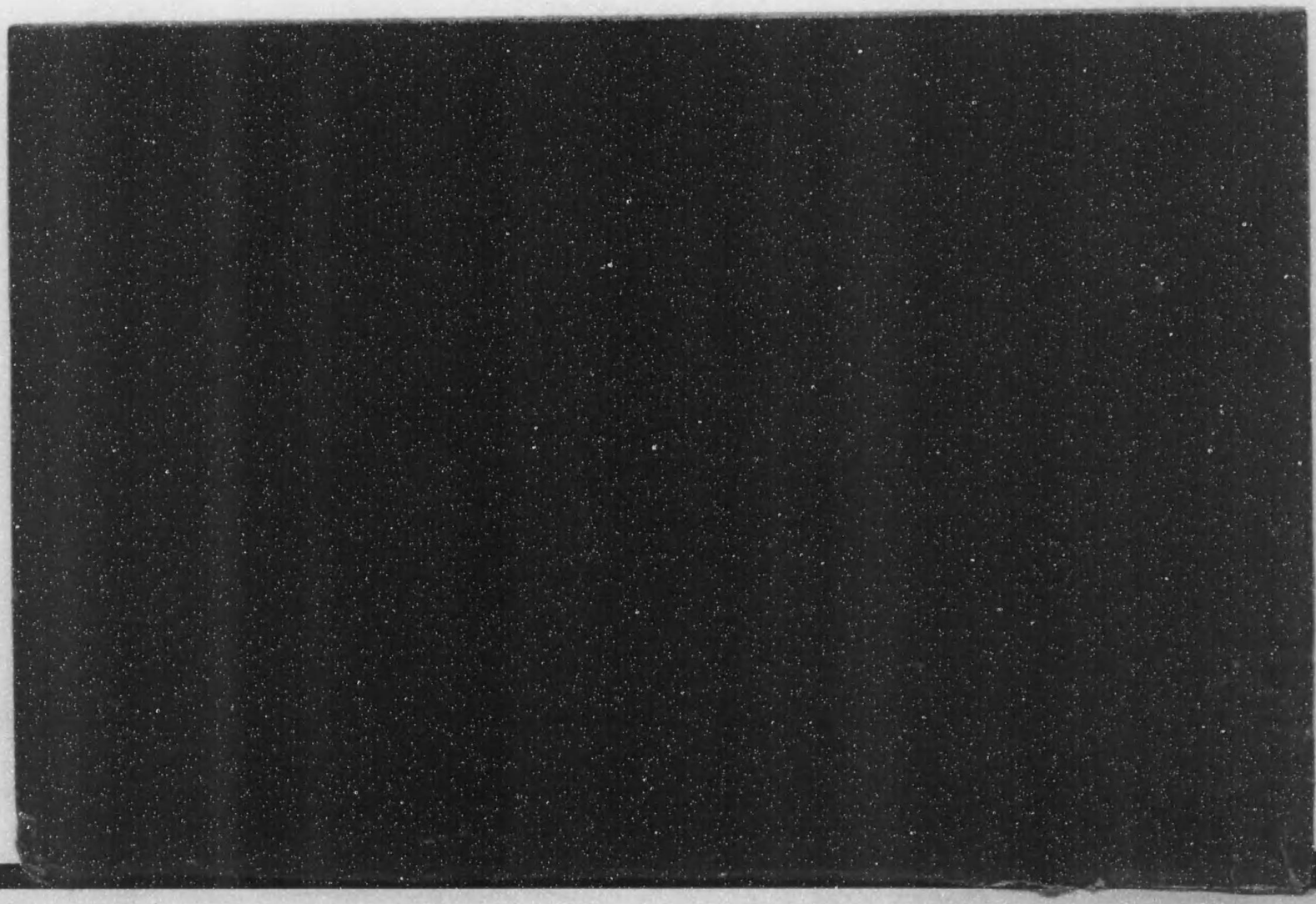
巖窟王	上卷	定價金壹圓卅錢　送料金十錢
同	下卷	定價金壹圓卅錢　送料金十錢
噫無情		定價金壹圓卅錢　送料金十錢
鐵假面		定價金壹圓參錢　送料金十錢
幽靈塔		定價金壹圓卅錢　送料金十錢

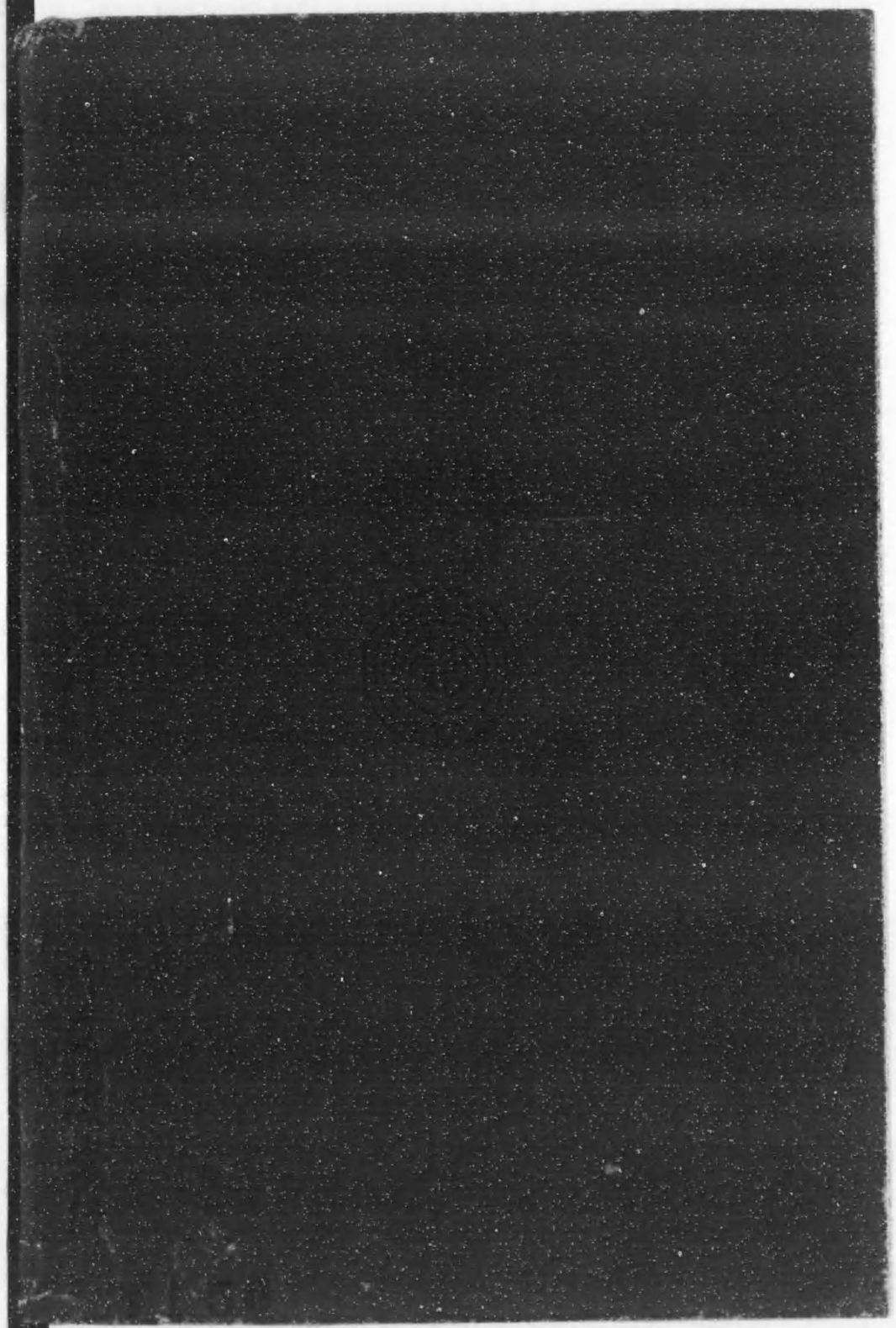
村上浪六先生著

八軒長屋	前篇	定價壹圓卅錢　送料金十錢
八軒長屋	後篇	定價壹圓卅錢　送料金十錢
馬鹿野郎と稻田一作		定價壹圓卅錢　送料金十錢
人間味		定價壹圓卅錢　送料金十錢
當世五人男		定價壹圓五拾錢　送料金十錢

發行元　東京市日本橋區通三ノ五
電話(24)〇・六八四番　明文館書店

415
78





終